
ただいま暴走中！

呪理阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま暴走中！

【Nコード】

N5939Q

【作者名】

呪理阿

【あらすじ】

長男純「ん、めんどくせえ」と長女忍「すももって美味しいよね」次男岳「トマトうめーじゃん」に次女光「お菓子食べる？」の高山四兄妹と周りの人の、ほのぼののような騒がしいような普通なような日常です。作者の周りで起こったことと思いつきで成り立っています。がちよつと覗いてみてください！ 幽霊やら死神やらその他諸々、思いつくままに無駄にファンタジー入ってます。だって思いつくんだもん。やりたかったんだもん。好き勝手な作者の割に毎日更新中です。

1 スーパーにて

「……ひかり光、どっちにする？」

「こつち〜」

「あたしはこつちがいい」

こつなっ たら……あ、いきなりすみません。

たかやましのぶ
高山忍つてゆー者です。

今のこの状況を説明すると、あたしと妹の光で買物（ラーメン）に来た。

で、目の前にはしょうゆ、みそ、とんこつの三種類のラーメンがあるわけ。

で、光はみそがよくてあたしはしょうゆがいい。

まああたしはどつちでもいいんだけどね。

なんとなく張り合ってみよーと。

てな訳で、こつなっ たら……。

『ッ！』

二人でうなずき合うと無言のまま手を出す。

つまりジャンケン。

どこがどつつまりなのかという質問は受け付けないよ？

結果は、二人ともグーであいこ。

『ッ！ッ！ッ！』

なっかなか決着がつかない。

みすてりー！

「あ〜」

五回目。あたしの勝ち。

今日の昼ご飯はしょうゆラーメンに決定！

「お姉ちゃん〜、お菓子コーナー寄ろ〜」

「大賛せー！」

何を隠そう隠さないけど、あたしはお菓子好きなのだ！

大好き、じゃない。好き、なんだよ。分かるね違い。
てな訳でお菓子コーナーへ移動。

「あ、チョコが安くなってる」

「もうすぐバレンタインだもん〜。買い時」

バレンタイン終わった直後の方が安いんじゃないかなかったっけ。
まあいいや。

「光は何買うの？」

「ん〜、なんにしよっかな〜」

あたし買うやつは既に決定済み。

ビタチヨココニ枚。

ミルクチヨコは前に買ったやつがまだ残ってるんだよね。

……そろそろ食べないと賞味期限がヤヴァイかな？

今日のおやつ、それに決定。

「私これにしよっ〜」

「……それ？」

光が持ってたの、何だと思う？

《限定30袋！焦げためざし！！57円》

絶対失敗したヤツだよな！？

「だって、限定30袋しかないんだよ〜？ しかも57円だよ〜！」

……し〜らないっつと。

苦くて食べられなかったとしてもあたしには回ってこないでしょ。

……多分。

「買うものはこれで全部だね〜」

「うん。じゃ〜、お待ちかねの試食探しといきますか」

「お〜！」

お店に来たらこれはやらないとね！

たまにステーキとか出てたりするし。(食べ損ねたけど)
前にコンビニで試食やった時はびっくりしたけど。

パートワン・野菜、果物コーナー

「あ、あつたよ〜！ぽんかんだ〜」

試食する時は一つだけ。これはマナー。
いただきます。

ご馳走様でした。

甘かったよ。種噛んじやったけど。

「…………お姉ちゃん〜」

「ん？」

何か「うえ」って顔してるね？

「種噛んじやった〜！」

あんたもかい。

「一緒に舌も噛んじやった〜！」

痛いよね。

「つまようじも噛んじやった〜！」

噛みすぎだろ！

「ってぽんかんはつまようじ使わないでしょ！」

「しまった〜」

何が!?

パートツー・肉コーナー

の、近くで乳酸菌飲料を二種類もらった。

「甘い〜」

「甘い」

「お姉ちゃん、そっち飲まして〜」

「ほい」

パック交換。

「あれ〜？さっきより甘くない〜」
「てことは、」

「あまつ〜!？」

「……………こつなるよね。」

パートスリー・パン
なかった。

たま〜に試食あるけどすぐなくなっちゃっただよね。

帰宅後。

「につつつつがいく〜!!!!」

あ、やっぱりあの真っ黒めざし苦かったのね。

「……………お姉ちゃ〜ん、食べて〜？」

「ヤダ」

「そんなこと言わないで〜。おいしいよ〜？」

さっき苦い言ってたろーが!

「ほらほら〜、遠慮しないで〜。ね〜？」

げ、口に押し込むな……………。

……………。

「につつつつがああああ!!!!!」

あたしは、決意した。

これからは光が変なもの買おうとしたとき全力で阻止しよう、と。

1 スーパーにて（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

2 真つ黒めざしの恐怖

「純兄じゅん〜！」

ぱしっ

忍でーす。

暇だったのでなんとなく兄の純に横蹴りをしてみた。

結果、見事に受止められた。

「なんだよ、いきなり」

若干言葉遣いは悪いけど決して不良ではないのであしからず。

「いや、なんとなく」

「テメエなんとなくて人蹴んのかよ」

「だいじょーぶ、純兄じゅんだけだから」

「ったく……。岳たけにすりゃいいじゃねーか」

岳たけっていうのはみつつ下の弟ね。

「岳たけならいいんだ？」

「俺に被害が及ばなければよし」

なんて酷い兄だろう。

「ねーちゃん！ またはにーちゃん、へるぶみー！ー！」

今、階段から落っこち……。もとい下りてきたのが岳たけね。

「どつたの？」

「光がああ真つ黒めざしオレに食べさせようとしてんだよ！ー！」

ああ、昨日買ってきたためちゃくちゃ苦いヤツね。

……。うん、

『まあガンバレ』

「んなトコでハモるなああ！ー！ー！」

「岳お兄ちゃん、どこ〜？」

あ、光も下りてきたね。

「うげ。へーるぶみー？」

なぜに疑問形？

「あれ〜？ 岳お兄ちゃんは〜？」

「あれ？ 今までここにいたのに……」
消えてるし。

逃げ足は速いからな〜。

「何で〜!？」

その手に持った真つ黒めざしが原因だと思っよ？

昨日より量が増えてるような気がするのはあたしの気のせいだよね。

……気のせいだよな!？」

「ん〜。ま、いいや〜」

いいんだ。

「純お兄ちゃん、食べて〜」

「え〜」

ありや、純兄、ご愁傷様。

つて、このままあたしもここにいたら巻き込まれそうだね。

逃げよう。それが一番良いに決まっている。

純兄を助けようという気は皆無。

だって、純兄とあたしの立場が逆だとするでしょ？

純兄はあたしを助けようとするわけがない！

カチヤ

「あ、ねーちゃん!」

「あ、純兄を見捨てた兄不幸者」

「それはねーちゃんだろ!」

うん。それが何か？

あたしに被害が及ばなければよし!

「で、岳は何でここに居んの」

ここ、あたしと光の部屋なんだけど。

「いや、階段から一番近かったからつい」

なんて理由だ。

「あれ、岳までここに居んのか？」

「あ、純兄。どうだったお味は」

「いや俺は食ってねえよ」

『ええええええ!!』

ズルイよ！ 純兄は食べないなんて！

「オレなんか3匹も食わされたのに!!」

それは酷い。

「何でだ!? どうやって逃げたんだ!？」

「親父がお袋に食わせた方が面白い反応をするんじゃないか、って

言ったらあっさり」

「その手があったかああああ!!」

……いや、岳は無理じゃないかな。

だって、

『岳の反応の方が面白い』

「だからんなトコでハモるなああ!!」

事実だし。

とはいえ、やっぱりあたし達もおとーさんやおかーさんの反応も
気になるのでこっそり陰から見てみることにした。

おかーさんの場合。

二階で洗濯物をたたんでいる所に光がやってまいりました。

あ、ちなみにおかーさんは主婦。

週に二回仕事行って、月に一回ボランティアしてるけど。

「お母さ〜ん、これ食べて〜」

「ん〜?.....」

おかーさん、一瞬フリーズ。

かと思いきや、ニコツと笑って、

「お父さんであげておいで〜」。

きつと面白いリアクションしてくれるよ」

純兄と同じ追い払い方を見せて。

うん、流石親子。

あ、気付いたかもしれないけど光の口調はおかーさんに似たんだよ。

ついでに顔もそっくりなんだ。

おとーさんの場合。

おとーさんはパソコンの前で……仕事かな、アレは。

ちなみにおとーさんの仕事は銀行員ね。

「お父さ〜ん」

「ん？」

「お父さんつて〜、めざし好き〜？」

あ、手段変えたね。

「ん、まあ好きかな」

「じゃ〜、目瞑つて〜、口開けて〜」

「お？何々？」

「えへへ〜、お楽しみ〜」

……おとーさん、この後どんな悲劇が待ち受けてるかも知らず、目を瞑つて口を開けます。

えと、なんていうか……ガンバレ？ドンマイ？

「はい〜、プレゼント〜」

「# % \$ @ ○ ! ?」

……光よ、それはあんまりだ。

おとーさんの今の状態。

口から真つ黒めざしの尻尾を大量に生やし、声にならない悲鳴を上げている。

終いには何故か踊りだした。

……変な食べ物つて、怖いね。

2 真っ黒めざしの恐怖（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

3 アレに似てる

「なー、にーちゃん。」

この目玉焼き人みてーな形してるぜっ！」

「とつとと食べ。」

別にお前が遅刻しても俺は困らねえけど」

「えー、じゃあねーちゃんっ！ホラッ」

「パク」

「あゝあゝあゝあゝっ！！」

オレの目玉焼きiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」

俺の弟妹達は朝飯さえ静かに食べさせてくれない、のはいつもの事だ。慣れる。

……出来れば慣れたかねえけどな。

純だ。

会話を聞けば、いや読めば分かるかも知れないけど一応説明しておく、岳が目玉焼きを見せびらかしていたらそれを忍にパクられた、という普通の朝食風景だ。

……普通じゃない？

うちではこれが普通なんだよ。悲しいことに。

ちなみに光はそれをニコニコして見学している。

何かを振られてもニコニコしながらスルー。

一番楽な位置だな。

「あ、光、純兄。」

このスルメ靴そっくりな形してる」

「朝飯ん時に何食ってたんだお前は」

「パンに目玉焼き、後キャベツの千切りとスルメ」

「そーゆーことを聞いてんじゃねえよ」

そこまで細かく言うとは思わなかったけど。

「おとーさんの椅子においてあった」

親父の奴、また食べてそのままほったらかしてたな。

「帰ってきたときに『減ってる!?』って嘆くかもしれないけど自業自得だよね。はもはも」

何気に光も食ってるし。

「あつ、光！今度は米粒が『の』の形してるぜ！」

「えい」

「崩されたあつ！」

また箸を使って作り直す。

食えよ。

あ、忍がパンだったのに岳が米だったのは、うちでは朝飯がパンか米かだけは自分で勝手に決めるようになってるから。

たまにパン切らして全員ご飯になったり、逆に米炊くの忘れて全員パンになったりするけど。

「純、ほらほら、たこ」

「お袋まで何やってんだよ」

「え、みかん食べてるんだよ」

「オレはもつとすげーぜ、蛇だ!!」

へへーん！ そんな声が聞こえたような気がする。

「じゃあ私は、鮫！」

『参りました(〜)』

ペコリ

……みかんの皮でたことか蛇とか鮫だとか作ってるけど、

「実の安全も考えた方がいいぞ」

「まぐまぐまぐまぐ」

『盗られた(〜)っ!?!』

……結構甘いな、これ。

「ねーちゃんはともかく、にーちゃんにまで盗られるとは思わなかったあ!!」

みかんかこの中にはもう入ってなかったんだよ。悪いか。

「お姉ちゃんはいつものことだけど〜！」

「流石、一つも離れてないだけあるね〜」

ちなみに俺は4月、忍は3月生まれ。

学年は同じ。

「……あ、このみかん親子だ」

小っこいのと大きいのがくっ付いてるヤツな。

「コアラに似てるよね〜」

『どこが?』

「だってコアラって親子くっ付いてるじゃん〜」

「共通点それだけ!？」

「え〜? サルの方がいい〜?」

そういう意味じゃねえだろ。

「……あ」

「どうした?」

「いや、あそこの車の上で寝てる猫さ」

よく見えたな、窓越しで。

「それが?」

「ハムに似てるな〜って思ってた。」

ほら、絵とかによくある切る前の」

……食つなよ?」

3 アレに似てる(後書き)

よく見たら何かに似てるって事、ありますよね。

……ありますよね？

ご意見、ご感想等お待ちしております！

4 今日の夕飯は？

「ただいまッ！……って、鍵しまってる!？」

「あー、そーいや今朝母さんが『今日は友達の家に行ってきたね』とか言ってたっけ。」

岳でーい。

「えーと、鍵鍵……」

……………あ。

鍵、オレの机の上だ。

「しまったあああああああ!！」

ガチャカチャ

あれ、開いた？

「五月蠅いよ、岳お兄ちゃん」

「あれ、光？」

あ、そうか。

光はオレより2つ年下の小3。

とーぜん、オレより先に帰っている訳だ。

「何で鍵閉めてた訳!？」

「お母さん、純お兄ちゃんかお姉ちゃんが居ない時は鍵閉めなさいって言ってたもん」

「あ、そっか」

「おい、早く入れよ」

ぬ、後ろから聞こえるこの声は……。

「あ、お帰り、純お兄ちゃん。早いね」

「ん」

ただいま位言ったらどうだろう。

「あれ、ねーちゃんは？」

「二者懇で少し遅くなる……らしい」

「らしいって」

にしゃこん？

に階で

しゃ会の

こんぎつねをやりましょう

……絶対違うな。

大体社会のこんぎつねって何だ。国語の教科書に出てきたこんぎつねなら知ってるけど。

あれ、テーブルの上に紙を発見。

『純忍岳光へ

今日はお母さん友達の家で晩ご飯食べるから晩ご飯は何か適当に自分で作ってね（ハート）

お母さんより』

ナンデスト？

「にーちゃん！」

「あ？」

「にーちゃんって料理出来んのかっ!？」

「……簡単なものなら？」

怪しい!

光は論外として……あつ!

「ねーちゃんは!？」

一応ねーちゃんは女だ!

たまに、ほんつとたま〜にお菓子作ってるし!

「……レシピがあれば大体作れっけど……それがどうした？」

「これっ」

にーちゃんに紙を渡す。

「……うげ」

……今小さく『うげ』って言わなかったか!?

不安だ……どうしようもなく不安だああああ!!

「どうしたの〜？」

「あ、光!これ見るよ!」

「あつ、馬鹿ヤロ・・・」

『ふむふむ』とかうなずきながらメモを読む光。

「大丈夫だよ。私を作るから」

……………し、

しまったああああああああ！！！！

光はちゃんと料理をしても、途中で明らかに、

あ、き、ら、か、に、変な物を入れるんだ！！

小一の時なんかねーちゃんの作ってたクッキーに、わさび、からし、しょうが、こしょう、その他調味料類諸々を大量に入れて史上最悪のクッキーを食わされる羽目になったんだ！！

あれはもー、最悪だった。

焼けたのも奇跡的な感じだったしなあ…………。

「さて、何作ろうかな」

「まずい…………光は本気だツ！！」

「まずは冷蔵庫から調べよっつと」

てとてとてと

「どーしよ、にーちゃん」

「…………とりあえず、変なもの入れそうになったら止めりゃいいだろ。変なものさえ入れなかつたら普通なもの…………」

「作るかなあ…………」

変なもの入れたやつしか見たことねーし。

「…………とりあえず、忍が帰ってくるまでは見張っとけ」

「アイアイサーー！！」

今日の夕飯、絶対に危ういものにはさせないッ！！

4 今日の夕飯は？（後書き）

ご意見、感想等お待ちしております！

5 まず材料探し

「あゝ、カレールーとじゃがいもゝ、にんじんに玉ねぎ発見ゝ！今日の晩ご飯はカレーだねゝ」

「マテマテマテマテマテマテマテマテマテエー！！」

その玉ねぎ芽が生えてるぞ！？

ねぎともいう。

引続き岳だつ！

「光、玉ねぎ使うならこつち使え」

「んゝ、分かったよゝ」

ナイスにーちゃん！

えーと、ちよつと解説しておくど、母さんが今日友達の家に行つてんだな。

で、晩飯は自分達で作れ、となつたんだ。

それを聞いた光が自分があると言い出したんだ！

解説終わり！

「に、しても何で玉ねぎがこんなになるまでほつといたんだ……？お袋の奴……」

だよなあ。

玉ねぎの上からは短いねぎが5本くらい生えてるし、玉ねぎそのものなんか紫色に変色してるぞ？

「……庭に植えとくか」

上手くいけばねぎ代が浮くな！

そのままほつたらかして忘れ去られる可能性も高いけど！
つてかさつちの方が高すぎるけど……。

「えゝとゝ。あとカレーに必要なのはゝ……。お肉だゝ！」

光は冷蔵庫に突進した！

べちつ！

「い、痛いゝ」

アホだ……。そのまま冷蔵庫にぶつかってやんの。

「えつと〜、お肉〜、お肉〜」

おでこをさすりながら開けたのは……。野菜室!?

「あ〜、あつた〜!」

そしてまさかの豚肉発見!?

母さん……。アンタは何をを考えて野菜室に肉を入れたんだ!?

「これは冷凍庫に戻しておこう」

戻すのかよ!

冷凍庫、オープン。

『うわ〜』

中には冷凍食品やら肉やらがギッチリ。すげー。

「古いものから使わないといけないよね〜」

というわけで、オレも手伝って冷凍庫の中身を全部出すことになった。

中身が半分くらいに減った頃……。

オレは、トンデモないモノを見つけてしまった。

それは……。

賞味期限：10・6・13

と表記された鶏肉ツ!!

古すぎだろオイ!!

もちろんそれはソツコーでゴミ箱行き。

もったいねーけどオレ等の腹のためだ!

よかった、オレが見つけたいて。

光が見つけたらこれもカレーに入れられていたに違いない。

「これで全部だね〜」

「うあ、何だコレ」

あ、にーちゃん。

「冷凍庫の中身全部出した!」

「……パンドラの箱を開けたようなもんだぜ、それ」

「へっ?」

に「ちゃんが指差す方を見ると……。

「これと〜、これと〜……あ〜、これもいいな〜」
しまったああ……!

光の手には賞味期限を過ぎた食品が大量に……。

ああああ災いがふりそそぐう!!

「よし、こんなもんかな〜。片付けよ〜!」

とりあえず、片付けるだけ片付けた。

もちろん、古いものが上に来るようにしてな!

「後は〜……今はこれだけでいいか〜」

良かった。光の目を盗んでに「ちゃんが明らかに入れたらまずい
ものを取り除いておいたんだ。

これで今の所は大丈夫なはずだ!

……でも、今はってなんだ。

「さ〜、作る〜!!」

……よくよく考えたらオレカレー作る時の手順とか知らね〜……。
つまりどこがおかしいとかわからね〜よっ!!

神様仏様マリアさま、どうかね「ちゃんが早く帰ってきますように
にいっ!!」

5 まず材料探し（後書き）

冷蔵庫とか冷凍庫に以上に古いものが入っていた……！
ってこと、ありませんか？

私はつい最近ありました（汗）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

6 調理開始！ 切りましょう

「たーいまー」

「お帰りいっ！ー！ 待ってたぜねーちゃんっ！ー！」

「のわっ！？」

忍です！

あゝ、びっくりした。

いっつも出迎えてこない岳がロケット並みのスピードで走ってきたんだもん。

「どったの？」

「ひ……光が……光がカレーを作ろうとしてるんだッ！ー！」

……………。

「ウソッ！？」

「嘘ついてどーすんだホントだよッ！ー！」

まずい……早く止めないと今日の夕飯が悲惨なことに！ー！

「光！」

「あゝ、お帰りゝ、お姉ちゃんゝ」

良かった……まだじゃがいもの皮剥いてるだけだった。

「帰ったか……」

純兄もちよつと安心したって顔してるね。

えーっと、確かカレーを作るうとしてるって言ってたっけ？

カレーくらいならレシピなくても多分大丈夫！

……………多分！

で、どんな変な材料を用意してんのかな、光は……………。

にんじん、玉ねぎ、じゃがいも、カレールー、離乳食……………。

「離乳食！？」

「ほらゝ、疾風^{はやて}くんの忘れ物だよゝ」

疾風っていうのはあたし達の従弟ね。

去年の5月に生まれたからまだ0歳。

正月の時に来てたからその時のかな、この離乳食は。

「にーちゃん……変なものは取り除いたんじゃない……？」

「大丈夫だろ、離乳食くらい」

「はいはい、役に立たない男子共は行った行った」

とりあえず台所から追い出す。

狭かったんだもん。

「ちよっ！ 光は含まれねーの！？ 何で!？」

「光は包丁使ったりは上手いもん」

「なるほど」

納得するんだ？

「ちゃんと光見張つとけよ……」

「まかすとけー」

「あゝ！」

「どつたの光」

「お米とぐの忘れてた〜！」

なんだ。何かあったのかと思ってびっくりしちゃったじゃんか。

何かあるっちゃあるけど。

「はいはい、あたしとぐよ。」

光はそっちやつてて「

「……にーちゃん」

「あ？」

「ねーちゃんに光の見張り頼んで大丈夫なのかつ!？」

「………多分」

「………。」

オレたちも見張つとこーぜ？」

「そっちな……」

とんとんとんとんとん……

「光、おじゃが切れた?」

「切れたよ」

「ん、じゃあ水にさらしといて」

「は〜い」

うん、今の所大丈夫。

「え〜と〜……お姉ちゃん」

「何?」

「玉ねぎやって〜」

絶対ヤダ。

というわけにもいかないんで、渡された玉ねぎを黙って冷蔵庫にしまつとく。

「ほら、にんじん先やる」

「うん〜」

そんなこんなしている内に米とげた。

えーと次は……あ、肉切つとかないと。

……つて。

「なぜにミンチ!?!」

「だってこれなら切る必要ないでしょ〜」

……確かに?じゃ、これでいいか。

「……にーちゃん?」

「悪い、全部は調べられなかった」

「……さて、玉ねぎ(敵)のとーじょーだ」

「わ〜い!〜!〜!」

「え、喜ぶ？」

「うええ〜ん〜」

泣けと言ってる訳じゃないんだけど。

まあとりあえず、一旦冷蔵庫に入れたから大丈夫でしょ、という
思考で行こう。

とん、とん、とん、

……やっぱしみるう〜。

「お姉ちゃん〜、貸して〜」

「え？」

後ろにはゴーグルをつけた光。

「んなもんあるなら最初っから出せよ!？」

「あはは〜、忘れてた〜」

酷い。

「というわけで〜、私やるね〜」

「はいよ」

ざくざくざくざくざくざく〜!

おお、なかなかのスピード〜。

の前に、

「何そんなに細かくしてんの!？」

みじん切りどころじゃないし!

と、というか家では(他のトコは知らない)玉ねぎはくし切りなん
だけど?

光……玉ねぎに何の恨みが!?

「だっていつつもはカレーの中の玉ねぎとけてるもん〜。

だから出来るだけ細かくしてるのかな〜って思ったんだけど〜」

……ま、いいや。やっちゃったもんはしょーがない。

まだまだ先は長い、ね。

6 調理開始！ 切りましょう（後書き）

カレーの作りかたはうち流でやっております。

ご意見、ご感想等、お待ちしております！

7 調理中…… 煮込みます

ジューツジューツ

「いい匂い」

光ですう。

今、私とお姉ちゃんでお肉で作ってて、お姉ちゃんがお肉
いためてるの。

私は今のうちに調味料とか探してようかな。

「お塩と、お砂糖と、薄力粉と……」

あれ？ 薄力粉って調味料だったっけ？

まあいいか。

お父さんが前にカレーにとろみつけるときは薄力粉を入れるって
言ってたし。

「お兄ちゃん二人とお父さんは辛い方が好きなんだっただけ」

わさびと、しょうがと、からしと。

あ、焼肉のタレ発見。

これも使おうと。

「光？ あと煮るだけだよ！」

「はい！」

こんなもんでいいか。

お鍋の中には、お肉、にんじん、じゃがいも、玉ねぎ

(切りすぎた為ドロドロ)、お水。

+入れたてのカレー。

それが石油ストーブの上に乗っています。

……え？ なんでストーブの上か？

だってどうせストーブは点けるもん〜。

こつしたら一石二鳥でエコでしょ〜？

地球にやさしく、だよ〜。

……あれ〜？

「お姉ちゃん〜、何で離乳食入ってないの〜？」

「うえ？ほんとに入れんの？」

当たり前じゃん〜。

ほつといたらゴミになっちゃうもん〜。

という訳で〜。

「ぼとぼとぼとぼとぼと〜」

「なにも口で効果音言わなくても……つてあぁっ！！ 入れちゃっ

たぁ……」

「大丈夫だよ〜。冷凍してあったし、まだ一ヶ月くらいしか置いてないし〜」

「気にするな自分気にしたら負けだ気にするな赤ちゃんがちゃんと食べれるものを入れたんだからあたし等が食べても大丈夫そうだしつと大丈夫大丈夫大丈夫……気にするな気にするな気にするな……」

うわお〜。

お姉ちゃんが壊れた〜。

……ちゃんす。

「今のうちに取ってきた奴入れよ〜つと〜」

え〜つと〜、

「お塩〜」

どさつ

「お砂糖〜」

ぼろぼろつ

「薄力粉〜」

ばぶつ

「わさび〜」

……私は辛いのにそんなに好きじゃないからちよつとだけ〜。

ぼとん

「しょうが〜」

これも同じく〜。

ぺちやっ

「からし〜」

またもや同じく〜。

ねりっ

「そして中辛焼肉のタレ〜」

どぼっ

……入れすぎちゃったかな〜。

まあ、大丈夫でしょ〜。

えっと、後は混ぜて出来上がり〜と〜。

鍋の中は〜、なんか白い雪山のようなものの上に〜、わさびとしょうがとからしがのっけて〜、とどめをさすかのように茶色の液体がかかっている〜、って感じ〜。

……やりすぎたかな〜？

混ぜれば大丈夫かな〜。

「んしょ、んしょ」

……なんかかたいよ〜。

薄力粉を入れすぎたのかな〜？

お水を足せば大丈夫かな〜。

ばしやっ

「にーちゃん、もうオレ、見たくない」

「全く、誰だよ、まかせとけー、なんて言ったのはあ

『お前だ！』

「あはは〜……。おとーさん今日は早く帰ってきてくるらしいから人体実験してから食べよーね」

「当たり前だ」

「当たり前なんだ……」

「よっっしもうすぐ完成っ！」

なんだか恐怖に満ちた視線を感じるけど、気のせいだよっ！

7 調理中…… 煮込みます（後書き）

決して真似しないようお願いいたします。
責任は取れませんので。

ご意見、ご感想等お待ちしております！

8 調理終了！ そのお味は？

「よし、かんせー！」

その満面の笑みが悪魔の笑みのように見えるのは俺だけか？
純だ。

今、カレーの入った鍋を光がコンロに置きに行っただけ……。
そのカレーはとてつもなく不味そうに思えてならねえ。

何しろ最後の最後に冷蔵庫から発掘した、いつ開けられたかの分
からない『開封後は10日以内にお食べ下さい』とか書いてあるピ
ザソースも入れてたからな……。

さつき岳にそれを舐めさせてみたら「めちゃくちゃ不味い」って
言っただし……。

あれを最初に親父に食べさせて大丈夫なモノか確かめようと考え
たまでは良いけどその親父もなかなか帰ってこねえし……。

「……ねー、カレー、出来ちゃった。」

誰で人体実験しよーか」

「オレはやだぜ！ さつきの激マズピザソースで充分だッ！」

「アレは岳がジャンケンに負けたからいけないの。」

さつき、おとーさんはいつ帰って来るのかな？」

「あ~~~~~！！！」

『えっ！？』

「ご飯炊いてないよ〜」

何だ。一瞬カレーを落としてこぼした、ということ期待したの
に。

忍と岳も同じみてえだな。

大げさすぎるほど肩落としてやがる。

いや、シヨックで倒れた、って言った方が正しいか。

肩を落とした、のつもりかも知れねえけど何も前のめりに倒れな

くても。

「ただいま」

『お帰りッ！！』

「うおっ！？ びつくりした。」

「……お、今夜はカレーか？」

ちなみに出迎えたのは俺以外だからな。

米は忍が炊いた。

「ん。あたし達で作った」

「……………」

忍……親父で人体実験をするんじゃないのか？

「だいじょーぶ！ 光は抜きだから！」

「え、私も……むぐぐ！」

「父さん、早くっ」

「わ、わ、わ、引っ張らないで」

がちや

「お、純。ただいま」

「ハイハイ、おかーり」

「……純がひど「そんなことより、あれだよ！」これ？ ちよつと食

べても『いーよ！！』いただきまーす」

せめてスーツ脱げよ。

『ゴクリ…………』

「あ、旨い！」

『うそおっ！！？』

「でしょ？ 私も作ったんだよ」

「え、本当に？ 普通に旨いよ。光も進歩したんだな」

どういう意味の進歩だ？

まあ、とりあえず、このカレーは大丈夫らしいと言っことが分かった。

「うつつつつわ!! 何これ!？」

ただし、途中で入れた異物が完全に溶け切っていたというわけではないらしく、色々と変なものが出てきた。

「え、これ山葵じゃねーの!? 何で摩り下ろされてねーの!？」

「……なんかあたしのからは摩り下ろされてないどころか切られてさえいないしよが出て忌たんだけど」

「え〜!？ それって摩り下ろすものだったの〜!？」

『はっ!？』

つてな感じで。

まあ、俺のところには入ってなかったからよしとしよう。

8 調理終了！ そのお味は？（後書き）

本当に美味しいかどうかは分かりません。

試してみて不味くても責任は取りませんのでご了承ください。

本当にやったら結果教えてくださいませいね

ご意見、ご感想等お待ちしております！

9 冷蔵庫の恐怖

「とゆー訳で〜！我々はこれから冷蔵庫の掃除を始め〜！！」

「おー」

何であたしが手伝わされてんだろーか。

忍ですー！。

カレーを作る時の話を聞いたおかーさんが突然「冷蔵庫の掃除を
しよ〜」って言い出したんだよ。

確かに冷蔵庫の中には危険物としか思えないようなものが沢山入
ってたけどさ。

何であたしまで手伝わされなきゃいけないんだろ。

理由は分かってるよ。逃げ遅れたから。

純兄はどっか行っちゃったし、岳はわざわざ友達と約束作って逃
げたし。

光はよりによって今日習い事だし。

「よ〜し、まずはドアポケットからね〜」

とんかつソース、山葵、からし、しょうが、お茶、水、焼肉のタ

レ×5……焼肉のタレ多っ！！

柚ごしょう、出汁、お好み焼きのソース、カレーの時の激マズピ

ザソース……って

「捨ててなかったのコレ！？」

「何言ってるの〜、賞味期限は……」

「過ぎてるからっ！！」

ゴミ箱へ直行。

他には特に危ないものは無し。

「次はチルドルーム」

ここはチーズとか入ってるからなあ。
危ないものありそう。

……発見。

「おかーさん、このスライスチーズいつの」

「え、チーズっていつぱいあるんだけど……」

賞味期限いつ？」

「一昨年の8月」

「あ、それならまだ……」

「大丈夫なわけあるかっ!!」

「まったく、いままでおかーさんの料理食べてよくお腹壊さなかった
なああたし達。」

ある意味凄いかも。嬉しくないけど。

で、他にも危なさそーなクリームチーズとかを処分。

いや。冷蔵庫によくカビ生えてなかったなあ。

って、まだ始めたばかりなのに。

それからをだーつと言って行くと、

冷蔵庫、一番下の段。

賞味期限が昨日のヨーグルトを発見。

おいしく処分させてもらった。

腐った牛乳を発見。

光速でゴミ箱へ。

冷蔵庫、真ん中の段。

カビの生えたべったら漬けを発見。

庭に肥料となる、かどろかには知らないけどとりあえず埋めといた。

冷蔵庫、一番上の段。

腐敗した卵を発見。

ヒヨコにもなれなかったのに食べることさえ出来なくなってしま

った、のはあまりにも可哀想過ぎたからせめてお墓を建ててあげた。

良い肥料になってください。

「あ、忍ぐ。見てみて、こんなのがあった」

「うえ。捨てるっ！今すぐ光よりも早く捨てるっ！！」

「あはは、だよな」

カビで真っ白なバター。

よく気づかなかったなあ……。

不思議や不思議。

9 冷蔵庫の恐怖（後書き）

冷蔵庫の中って何入ってるか分からないですよね。

……ですよね？

ご意見、ご感想等お待ちしております！

10 チョコって美味しいよね

今日って何かあったっけ？

忍でございませう。

なんかね、女子の殆どがそわそわしてるように見えるんだよ。

もう一度聞きます。

今日って何の日？

「忍、はい」

「ん？」

チョコケーキ？

あ、この子はあたしのクラスメートの山内桜。

中一ん時からの友達で、結構仲良いよ。

あ、そうだ、言っただけだった。

あたしと純兄は中学二年。

ちなみに、あたしも純兄も三組ね。

「ね、今日って何かあったっけ」

「え？」

そんなに目真ん丸くして驚かなくても。

「え、え、本気で言ってる？」

「うん」

「今日、バレンタインだよ？」

「……………ああー!!」

「忘れてたの!？」

だって、ろくに参加したこと無かったもん。

「とりあえず、はい」

「ありがと！ホワイトデーにでも返すよ」

覚えてたら。

「うん。……………あ、もうSHR始まる〜」

「ん、じゃね〜」

うん、しつかしバレンタインか。
……国語の時間が楽しくなりそうだ。

六時間目、国語。

途中はあんまり面白くなかったからはしよるね。

「ほーい、授業始」

「ぶーちゃん！ 彼女にチョコもらった!？」

「いきなり!？」

うん、こうなると思ったよ。

国語の担当、ひがしたたがよし東田孝義先生。

太っていて顔が赤いということのでつけられたあだ名が『ぶーちゃ
ん』

これを許してるんだから心が広いんだかダメな教師なんだかわか
んないんだよね

顔が赤いは関係ないんじゃないか？

豚ってピンク色のイメージあるもん。

ほんものは見たこと無いからよく知らないんだけど。

で、東田せんせには彼女が居るらしい。

……あ、あたしはぶーちゃんって呼ばないよ。

だって他の教師に怒られるのイヤだし。

「で、で、で？ もらったの？」

「えー、えー」

「なに？ もらったのもらってないの？」

あ、もらってないんだったら自分のあげよっか」

「いや、もらった、もらった」

『どんなの!？』

「そこに食いつく!？」

そりゃー気になるでしょ。

「普通に、ちよっと苦いやつ」

『手作り!?!』

しっかし見事なハモリだ。

一部だけど。

「いや、市販の高いやつだけど?」

「ああ、愛が無いんだ」

「まあ、捨てたんだしね」

ドンマイだあ。

「待て待て待て待てえい!! いつ捨てた!?!」

『え、違っの?』

「違っから!!」

『だって噂では』

「いい加減ハモるのやめい!!」

ここまで来ると打ち合わせたみたいになってくるね。

「ほらほら、授業始めるぞ!」

もうやけくそだね。

「はい、四段ら」

「ぶーちゃん、オレ読む!」

この光景見るとなんとなく小学生かって言いたくなるんだけど。

「分かった分かった、読んで」

「カルは腕に唸りを上げてツカサのチヨコを殴っ」

「カルはそのチヨコにどんな恨みが!?!」

「怒ったツカサもカルのチヨコを砕く」

あれえ、この話って何かいわゆる『美しい話』ってイメージがあ

ったんだけどなあ。

どろっどろだね。ちゃんと読んだらいい話なのに

チヨコ、恐るべし?」

10 チョコって美味しいよね (後書き)

サブタイは思いつきり本文とは関係ありません。
私の意見です。

ご意見、ご感想等お待ちしております！

11 バレンタイン恐怖症

さあて、どーするか……。

岳だっ！

さて、いきなりだけどオレは今も〜れつに悩んでいる。

理由は……

昨日光にもらったチョコ！

もう見た目的に完全危険物なんだよな。

だって、だってな？

どっからどう見ても魚の形してるんだぜ？

しかも丸々一匹分。

オマケにチョコの所々に変な凹凸が……。

捨てたりなんかしたら絶対に光に泣かれるしなあ……。

ねーちゃんのと一緒に食べたらまだましかと思ったら、ねーちゃんバレンタインのこと完全に忘れてたとか言うし。

……ここは一つ、勇気を出して……！！

「にーちゃん」

「あ？」

にーちゃんに食ってもらおう。

ん？ 自分で食うとでも思った？

馬鹿！ そんなのは自殺行為というものだああ……！！

「目、閉じて口開けて」

「ヤだ」

「そんなこと言わずに……！！」

とか言っても効果が無いのは分かりきっている！

ってな訳でオレはにーちゃんに飛び掛くる……！！

どかつ

「イツテエ!!」

殴られた。

家庭内暴力だっ!!

「訴えてやるう」

「ったく……わーったわーった。貸してみ」

「やたっ!!」

にーちゃんって泣いたら動いてくれるんだ。

初めて知った。

……と、感動したオレは馬鹿だった。

ずぼっ

「ああああんぎやああああああああ!!!!」

ま、不味い! 前に食わされた真っ黒めざしと同じくらい不味い

!!

ちくしょく、忘れてた。相手はあのにーちゃんだ。

自分に被害が行くようなことをしないで決まっている!!

でもオレの口の中に突っ込むのはどーよ?

こうなったら……次の手!!

「ねーちゃん」

「ヤだ」

「まだオレ何も言っただねーよ!」

「さっきの叫び声と純兄の部屋の会話とその手に持った無残にも頭が食いちぎられたいわしチヨ」

む。聞かれていたのか。

流石地獄耳ねーちゃん。

ってゆーか、この魚っただいわしだったんだ。

「それからしてどー考えてもそれをあたしに食べさせるつもりでし

「よ

「Yes!!」

「グッバイ」

「しつれーしましたー」

「と見せかけて!!」

「食らえー!!」

「猛スピードでねーちゃんの方へダツシュ!

「もちろん突き出した手にはいわしチョコ!!」

「とっ」

「んぎゃあっ!!」

「は、入った。」

「鳩尾にねーちゃんの蹴りが入ったあ……!!」

「食らったこと無いやつは分かんねーだろーけど、マジでこれ痛いんだぜ?」

「ぐおおおお……」

「とどめっ」

「んにゃあああああああ!!!!」

「……あれ? 岳お兄ちゃんどうして気絶してるの?」

「ん? 光がくれたチョコがあまりにもおいしかったからだって」

「えへへ、やっぱり生のいわしが良かったのかな?」

「あ、それとも色々混ぜたチョコレートの方がな?」

「来年もそれあげよっ」

「……バレンタインなんて、二度と来るな!!」

12 サンゴもらった

「純兄、行こーよ」

「ヤだ。行きたかったら一人で行け」

「ヤだ。一人で帰るの退屈だもん」

そんな理由かよ。

純だ。

簡単に状況を説明すると、学校からの帰り道にリサイクルショップなんてのがあったんだ。

道の一部にブルーシートしてその上に色々置いてあるよつなやつ。

で、忍はそこに行きたいんだとか。

俺は面倒だから行きたくねえんだよ。

「行こ、行こ、行こ、ねー」

「いつ駄々こねるようになった」

「今」

なんて簡単な答えだ。

「お、お二人さんカップ……ぐぼあー!!」

「誰がカップルだ?」

「つたく、いつしよに帰るとしよつちゅう勘違いされるからめんどくせえ。」

下校中会つたりなんかしなければ……つと、その前に。

「生きてるか」

「仏説摩訶依般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄……」

「んな長い經読まなくても」

「殺すなコラ!!」

ああ、生きてた。

俺と忍の蹴りを同時に食らったのにこんなに早く復活するとは。

「あーいててて、何でいきなり攻撃されたのおれ」

「あたし等は断じてカップルなんぞではないっ！ という反論の意味で」

「へ、違うんだ？」

「兄妹だ馬鹿野郎」

「つつか、コイツ誰だ。」

「ふーん、つまんね。まっ、見てけよ。見るだけならただだし」

「あ、リサイクルショップの人か。」

「んじゃー遠慮なく」

「お前の遠慮なんて見たことねえけど」

「もらえるものはもらっとく。それがあたし」

「そんなことはとっくに知ってる。」

「忍は橋の方から流すようにザーッと見てる。」

「俺？興味の欠片もねえよ。」

「……何コレ？」

「白い石みたいなものから細い変なものが生えている。」

「……サンゴっぽいけど。」

「ん？それサンゴ。ホンモノだぜ。ちなみに値段は十円な」

「ホントにサンゴかよ。」

「へー、コレがサンゴの死骸」

「わざわざ死骸をつけなくてもいいだろーに。」

「へー……」

三分経過。

「いつまで見てんだよ」

「だって見るだけならただだし。」

「次はいつ見れるか分からないし」

いい加減帰らせて欲しい。

「そんなに気に入ったんだったもってけよ。ただで」

「おおー！兄さんデブ！」

「ナニイ！？」

太ってないし。むしろやせてる方だろ。

「違った、太っ腹！！」

大分違うだろそれ。

「よしよし、もってけドロボー！」

「泥棒は犯罪だ！」

「そうでなくて！」

「泥棒は犯罪ではないと！？」

「それでもなくて！」

……帰っていいか？

「そいじゃさよーなら。サンゴありがと！」

「どういたしまして！って突然だな！？」

「じゃーねー」

「スルーかよ！？」

「ただいまー」

「お帰り〜。あれ〜？何それ〜」

「サンゴ。もらった」

ぽかん。

光、フリーズ。

「サンゴの死骸〜！？お払いしなきゃ〜！
なんでそうなる！？」

13 掃除用具入れ遊び

キーンコーンカーンコーン
光です。

四時間目と休み時間が終わり、今から掃除。

私の班の担当は廊下だったね。

箒取ってこなきゃ。

がたつがたつがたつ

あれ？ 誰だか分からないけど隣のクラスの人が掃除用具入れから箒出しててる。

一本拝借。

ぱたん

あゝ、隣のクラスの誰かさんが掃除用具入れに入っちゃった。

掃除さつさと終わらしてまた見てみよう。

……うん……。

さつさと終わらしたいのにな。

廊下で何か取っ組み合いして遊んでる男子が邪魔で掃けないよ。

……よし。

さつさつさつさつさ

「うわっ！ 掃くな！ きたねえだろ！！」

「……………」

面倒くさいからスル。

そこにいるのが悪いんだもんね。

あゝ、塵取りとってこなきゃ。

そついえばあの誰かさんは塵取り出してなかったな。

パカッ

「……ぷっ」

変なの〜!

だってね〜、頭が掃除用具入れにつっかかって傾いてるんだよ〜。
え〜つと〜、塵取り〜、塵取り〜。

廊下に戻ったらゴミを集めた上で取っ組み合いしてる奴がいます
〜。

すぐムカついたので箒で突いて叩いて掃いてやりました〜。

こんなことする方が悪いんだもんね〜。

パカッ

パタン

なんか開けたら閉められた〜。

パカッ

パタン

むう〜。

パカッ

パタン

パカッ

パタン

パカッ

えい〜。

パタン

塵取り入れることには成功〜。

「……あれ、なんでこんなに箒出てんの。閉まっどけよ〜」

先生。そこは用具入れ見て確かめようよ。
大体なんで私が片付けなくちゃいけないの。

パカッ

パタン

ほらあ、閉められちゃった。

パカッ

それ。

「うあっ!?!」

パタン

今度は閉めたの私だよ。

箒を三本くらい突っ込んだ後でね。

がたがたがたがた

これ、何も知らない人が見たらポルターガイスト現象だね。

……あ、収まった。

パカッ

「……ぷっ」

パタン

今度はさっきの頭突っかった状態で箒抱きかかえてたよ。

あ、箒持った子が来た。

箒を戻そうとしてるんだね。

パカッ

「きやああああ!」

ずさっ

おお。漫画みたいな後ずさり。

教室の端まで後ずさったよ。

「び、びっくりした……」

あのリアクションにはこっちもびっくりしたけどね。

「こら、掃除用具入れに入ってる奴。

お前は箒か? なんなら今すぐ使ってやってもいいぞ

「出ます出ます出ます!」

うちのクラスの担任の先生はまさに有言実行な人だからね。

言った事は本当にやるんだよ。

前にさっきと同じ事言われてそれでもずっと入ってたらさかさまにされて簿みたいにつかわれちゃった子がいるんだよ。

「さっさと自分のクラス戻れ」

「はあ〜い」

せっかく面白かったのにな。

あ〜、また簿持った子が来た。

パカッ

ガラガラッ

あ〜、たまにあるよね。

掃除用具入れ開けたら簿がガラガラッて出てくるの。

パシッ

「ナイスキャッチ」

……う〜ん、確かにナイスキャッチではあったけど。

それを小声で〜、オマケに自分で言ったらちよっと悲しい人に見えるよ〜？

14 もし〇〇が降ってきたら

「桜」

「は？い？」

忍です。

暇だったのでなんとなく桜に話しかけてみた。

「何か面白いこと無い？」

「無いよ」

なんてキツパリと言っただろう。

「よ」

「あ、しーちゃん」

今来た、挨拶を一文で終わらせてしまっただけの子は、
中谷篠なかつたにしの。
通称しーちゃん。

って言ってもそう読んでるのあたしだけだね。

「しーちゃん、何か面白いこと無い？」

「無い。何か面白いこと無い？」

今あたしが言ったことと同じこと返したな。

「第一回、もし〇〇が降ってきたら〜！！」

桜が手をパーツと広げて高らかに宣言。

『突然だな！？』

「え〜？ だって面白いこと探してたんでしょ？」

うん、それは確かに。

「何？ 何かやんのかおめーら」

桜の斜め前の席で振り返るは高崎清たかさきしん

なんだかんだでよく話したりはする男子。

「じゃ、始めよっか」

「オレは無視か！？」

『うんそう』

あ、しまった。返事したら無視じゃないじゃん。

「まずは篠からね。」
何か降ってきたら面白そうだな〜って感じのを〇〇の中に入れて
「あたしから？ ……ん〜…あ」
何か思いついたみたいだね。
「もし一万円札が降ってきたら」
なんてピンポイントな
さー、皆で想像しよう。

ある日、突然一万円札が大量に降ってきた。
どさーっ

「ママーこの紙お絵かき出来ないよう」
「ママのお財布に詰めておきなさい！」
「ああ！！ これで借金全額返済出来る！！」
「夢のマイホーム！！」
「よかった。お小遣いなくなりそうだったんだ。へへ」
「この金はオレのだ！！」
「馬鹿野郎！ オレのに決まってる！！」
「あなたのお金は私のもの。私のお金は私のものよお！！ おーほ
ほほほほ！！！！」

……戦争になりそうだ。

「って言うか最後の、何？」
「ウザかったね〜」

「なるほど、そんな風にすればいいのか。
おーい、純！ なんか面白そーだけー！！」
なんでそこで純兄を呼ぶかな。

まあ、しーちゃん、桜、清、純兄、あたしがいつものメンバーっ
て感じではあるんだけど。

「あんだよ」

「じゃ〜次は〜……純君で！」

「……もし木刀が降ってきたら」
話聞いてたんだ。

想像……するまでも無い。

『怖いよー!!』

「あそ」

大体なんで木刀が出てきたのさ!

「次〜、忍行こ〜」

「あたし？」

ん〜、そうだなあ……。

「もしケーキが降ってきたら」
想像してみよー。

空からいろんな種類のケーキが降ってくる。

ひゅるるるるう……

べちや。

それを拾い食いする犬や猫。

おなかを壊す犬猫。

悲劇だ。

「後が大変そう」

「だめになる服が大量に〜」

「クリーニング店は悲鳴を上げて喜ぶだろうけどな」

「よし決めた!!!」

お?

「オレはケーキが降ってきたらクリーニング店を開くっ!!!」
馬鹿だ。

「いや、本当に降ってくる訳じゃないから」

「ならオレが降らす!!」

ドカッ

「純君のパンチ！見事に鳩尾へ決まりました！」

何も中継しなくても。

「うぐぐ……」

「南無阿弥陀仏」

「殺すな!!」

……ん？

「なあに？般若心経の方が良かった？ あれ長いからやだ」

「ちがうつつーに!!」

え？ 違うの？

「はい次行こ〜！ ……清君」

「何でオレの時はテンション低いんだ!？」

「あはは〜なんとなく」

「ったくう……んーと、もし数学のテスト問題が降ってきたら」

なんてピンポイント過ぎる。

想像しよーう。

空からハラハラと降る数字のテスト問題。

地面はどんどん白い紙と黒い文字で埋め尽くされてゆく。

だから何。

「うわあああああああ!! 怖いっ!!」

ドカッ

「今度は忍のパンチが眉間に〜、入りましたあ!!」

だから実況せんでいいと言うのに。

「何でアレが怖いの」

「どこも怖いトコねえだろ」

「だって、だって！！ 数学のテスト問題だぜ！？」

……あ。

清って数学が異常なほど苦手なんだっけ。

「清、 $1 + 1$ は」

「2。ってそれは算数だろ！！ 馬鹿にしてんのか！」

Yes!

その日の夜。

お札と数学のテストがケーキをサンドして、さらにそれに木刀が刺さったものが学校に降ってくる夢を見た。

と、言う話を皆に話す夢を見た。

何故？

15 志望校は

「純兄」

「……あ？」

「暇」

「……りんご食ってんじゃないか」

それでも暇なもんは暇なんだもん。

だって、食べてはいるけどそれ以外してないんだもん。

「暇ー暇ー暇ー」

「俺にどうしろってんだ」

「さあ。」

「純兄は何してんの」

「暇つぶし」

結局純兄も暇なんじゃないか。

何か雑誌みたいなの読んでもるけど。

「それ何？」

「学校で貰ったろ。府内の私立校ガイド」

「ふーん。純兄そん中に行きたい高校でもある」「無い」「……」

即答かい。

「でも忍に合いそうな学校な」「どれ？」「……これ」

純兄の背中から覗き込んでみると……。

「……おい。」

「コレ男子校」

「あ？ お前男じゃなかったか？」

「妹という事まで忘れたのかオイ！ー！」

兄としてどーよ。

「『まで』って、俺が何か他に忘れたことあったか」

無いよ。多分、きつと、恐らく。

「ま、冗談だけだな」

おい。
がちゃ

「あれ、ねーちゃん何してんの？」

「りんご食べてんだよ。見て分かんない？」

あ、そうだ。言い忘れてたけどここ、純兄達の部屋ね。

「見て分かるけど何でオレ等の部屋で食ってんの」

「暇つぶし」

「納得」

納得早いねー。

で、

「岳は何しに来たのさ」

「ここオレの部屋！」

「オレの部屋に何しに？」

「えっ！？ えーっと……暇つぶし？」

「何でその二人そろって暇つぶしがここなんだよ」

「なんとなく」

「……………」

なんとなくに勝るものなし！

「そーいやさ、純兄って志望校決まってるの？」

「……………ある意味」

と言うと？

「歩きまたは自転車で通える公立校」

「へえ……………って、二校しかないし」

水ヶ丘高校か第二水ヶ丘高校。

「……………に、行けて親父が言った」

「それあたしまである意味決まったようなもんじゃん！？」

あ、そー言えばあたしもおとーさんにそんな事言われたような気が……………。

が……………。

「ま、言われなくてもそうするつもりだったけどな」

「へえ？なんで」

「遠い学校とか行くのめんどくせえ」

「大いに納得」

「って言うかあたしもその部類だし。」

「んじゃ純兄が行きたいのは第二水高」

「そうなるな」

「の？」

「第二水高は普通科の？類と？類文理系があるんだけど。」

「……ま、？類受けるつもりでやってたらどっちでも大丈夫だろ」

「……考えてないんだね。」

「あ、なっちゃんが言ってたんだけどね」

「なっちゃんって言うのはおとーさんの妹ね。」

「つまり叔母さん。」

「？類はクラス替え無いんだって」

「……だから？」

「あー、はいはい。気にしないね、そう言うのは。」

「ん〜、でもどうするかな、あたしも。」

「こないだ進○ゼミの模試出したけど、第二水高？類は55%で努

力圏だったんだよね。」

「？類は90%で安全圏だったけど。」

「英語が100点中35点という……。」

「その他の教科もそこそこやばかったんだけどね。」

「流石に英語ほどじゃ無いけど。」

「……まあ、何とかなるさー!!」

「という事にしておこう、うん。」

「……期末の勉強はちゃんとやるかな。たまには。」

オマケ

「オレの登場は何だったんだ！！？」

「岳お兄ちゃんはお出られただけ良いじゃない。」

お兄ちゃん達出てるのに私出てないんだよ？」

うん、放置しておこう。

オマケ 2

りんごは綺麗にあたしに食べられましたとさ。
めでたしめでたし。

何がどうめでたしなのか。
そんな質問は受け付けない！

16 第一回？何と読むでしょー

「第一回、何と読むでしょー!!」

さー、やってまいりました、何と読むでしょーの時間です!!

あ、違った。何『と』読むでしょー!!

ちなみに、第二回、第三回があるのかと言う質問は受け付けねぞー!!

岳だーっ!

「……で、何」

約一名このテンションについてこれて居ない奴が居るが

「ね〜、何するの〜?」

「俺に聞くな。一人で盛り上がってる奴バカに聞け」

……違った。オレ以外全員だった。

「んで？結局何がしたいの岳は」

「暇つぶし!!」

「なるほど」

家じゃこう言えば基本的に納得してもらえるとこの不思議。

「何でデメエの暇つぶしに俺等が付きあわせれなきゃなんねえんだ

よ」

はい、約一名納得してない奴が居ましたー。

しかしそれは一切無視させていただきまして!!

「無視すんなよそこ」

なぜ心の声に突っ込まれたのか不思議ですが『声に出てる（よ〜）

』……あーもう!話進まねー!!

「当て字で色んな言葉を作ってそれを何と読むかというゲームだ!」

「やっと説明した」

「長かったね〜」

色々突っ込まなきゃすぐ説明したからな!

「今日のお題は……魚の漢字（を一文字は入れること）！」

「今日以外にやる予定もあんの？」

「無い！！」

「なら『今日の』とか言うなよ」

んな事言われてもなあ。

「まあとにかく！ 第一問！！」

「クイズなの？」

「例題だ！」

「なら第一問とか言うな。例題って言え」

今言った！

「さあ、何と読むでしょう！！」

『駄菓子菓子』

「例題なのにお題から外れてる！？」

あ、間違えた。

ちなみに正解は「だがしかし」な

「えーと、気を取り直して、何と読むでしょう！！」

『駒津蛸人』

「んー……あ、分かった！」

え、ウソツ！？

「『駒津蛸人』 『こまつたこと』 『こまつたこと』で、困った

事！」

う……悔しいが……。

「正解！」

「わーい。んじゃ次あたし出すね」

全然喜んでるように見えねー。

でもなんだかんだでのってるし。

「はい、何と読む？」

『北鯊鯛寒い』

「分かった」

にーちゃん早えよ！！

「『北鯊鯛寒い』 『きたはぜたいさむい』 『きたはぜったいさむい』で北は絶対寒い」

ちよつと無理があるんじゃない……

「ぴーんぽーん。はい、純兄」

何かねーちゃんが仕切ってるような気が!?

「……………ん」

『重?』

……………?

まず魚がワカリマセーン。

「え〜と〜」

「あれ?いつの間に持ってきたのそれ」

ほら、すし屋でよくある魚の名前が漢字でギッチリ書かれた湯のみ。

何故かそれが家にあるんだなあ。

「あ〜、分かったよ〜!

『重?』 『おもうつぼ』で思うつぼだ〜!」

「そう」

へーあれウツボって読むの。

「はい、次光ねー」

……………何かオレ、半空気化してね?

「ん〜と〜、はい〜」

『?巢』

湯飲みで確認!分かった!

『?巢』 『うぐいす』 『うぐいす』(でしょ) 『

先に言われた!?

「せ〜いか〜い〜!」

「岳一問も答えられなかったねー」

「るっせ!最後のは分かってたからな!〜!」

本当だからな!〜!

16 第一回？何と読むでしょー（後書き）

近くに当て字で書いた色々があったので書きました。
さて問題です。何と読むでしょー！

『絶対？烏賊？』

答えは明日載せますね！（覚えてたら）

17 まだ寒いのに

「純兄ー行くよー」

なぜ俺が待たせてたみたいない方をする。

「待たされたのはこつちだ」

「知ったことか！」

それで済ますな。

純だ。

今、学校に行くため、外に出たところ。

大分温かくなってきたとはいえ、まだ寒い。

「寒い寒い寒い寒い！」

「大声で叫ぶな、五月蠅い」

「暑い暑い暑い暑い暑い！」

「叫ぶなと言ったのが聞こえなかったかコラ」

「あ、余計寒くなるから止めろって意味じゃないのか」

いつ誰がそんなことを言った。

「にゃ」

「にゃ」

……毎朝の恒例行事。忍が猫を呼び出す。

寒い中待たされるこつちの身にもなつて欲しい。

「ナくん」

「ナくん」

……お？

「珍しく短かったな」

「皆忙しいそうな」

猫って飯食って寝てるだけじゃねえのか？ 昼間は。

あ、ちなみに忍は猫語が分かるらしい。

小つこい時から猫に話しかけてたからか？

「……ひーまだー」

「歩いてるだろ」

「足以外が暇」

「寝てる」

「ぐう」

ホントに寝るなよ。

目は半開きだから意識が半分ぶっ飛んでる程度だろうが。

「半寝」

「……それ言ってる時点で寝てねえだろ」

「ん〜……ま、それもそっか。……んむ？」

伸びをしたと思ったら、空中を見て固まる。

「純兄ー、あっこ何か居る？ 何かちとぼやけてんだけど」

……あっこ、を見てみたら……居た。

面倒そーなのが居た。

面倒そーなの〃幽霊という式。

どー言っわけか俺は物心ついたときからこういった類のものが見える。

忍や岳はぼやけたものが見える程度。

光は気配を感じるだけなのに俺にははっきり見えるんだなこれが……。

そいつ等に会っていい思いをしたことは一度もねえ。

「居るんだ、やっぱり」

「居るけど……ほっといいていいか？」

「どんな奴？」

「落ち武者」

「よしほつとこっつ」

『ちよっ！？ 待て待て待て待て待てえい！！ 何故わしをスル』

面倒だから「酷い……」

面倒なものはほって置くのが一番だ。

前、下手に関わった自殺した爺さんの霊に延々四時間、人生論とやらを語られたからな……。

あれは地獄だった。

「純兄、ごろごろ聞こえるけど何言ってるの？ 落ち武者」

「何故スルーするかと」

「可愛くない。めんどくさい。可哀想に思えない」

あ、石化した。

「後遅刻するのはごめんだしね。……あ、後」

一息すって……。

「オバケの匂はまだまだ先だしね」

がらがらから。

崩れた。

にしても匂って。おい。

食う気か？

『わ、わしは旨くないぞ！！』

「るっせえ。とつとと成仏しやがれ」

つてか復活早えな。

『一人では寂しいではないか！』

気色悪い。

「そこらに漂ってる霊でもいっしょに連れてけ。じゃな」

『わしをほっとく気か！？』

「最初にそう言ったる」

『おお、そういえば』

つたく。結局関わっちまったな。

早めに出てて良かった。

『……言っておったか？』

……キレていいか？

とりあえず、周りに忍以外誰も居ないことを確認してとび蹴りをしておいた。

後日、落ち武者はそこら辺のすずめの霊と成仏したようだった。

……結局一人で行かなかったのかよ。

17 まだ寒いのに(後書き)

昨日の答え。

『絶対？鳥賊？』 『絶対いわないか？』 で、絶対言わないか？
でした！

18 歩く(?) 文房具箱

「光ちゃん、ねー、光ちゃん!」

んむ。あんみんぼうがいだだよ。

光です。

「んみゆ?」

「セロテープ持ってない?」

それだけ?

まあいいか。

え。つとセロテープセロテープ……。。

「はい」

「ありがとう」

さて、お昼寝再開。

あ、今は給食が終わった後のお昼休みね。

「ひーちゃん、糊貸して!」

酷いよ、いま寝ようとしたばっかりなのに。

「糊ね」

「……あ、やっぱりボンドない?」

……今出そうとしたところなのになあ。

また探さないといけないじゃない。

「はい、ボンド」

「ありがとう」

あ、あのね、私は学校でちよっぴり有名な歩く(?) 文房具箱なんだよ。

はさみに糊、セロハンテープから色鉛筆まで、いつも持っているポーチから文房具なら何でも出て来るんだよ。

どこぞの青い狸猫のポケットとは違うからね?

文房具限定だもん。

それでは、私はまたおねむの世界へ帰ります。

「高山ー、おい、高山ー!!」

……酷いよ。今寝ようとしたばかりなのに。

「カッター持ってるねーか!？」

また借り物？

ん〜と〜……カッターは〜……と〜。

「はい〜」

何に使うんだろ。

今度こそお休みなさい。

「お、おいっ!! カッターとか持ってくるな! あぶねえよ!!」

ドタバタドタバタ

……んみゆう。

あんみんぼうがいい。

カッター持ってくるなって言ってたね。私のかな？

安眠の為。見てこよう。

「……………」

これは、危険だね。

だってね、私が貸したカッターを喧嘩相手に向けてるんだよ。

危ないよ。

「返して〜」

「はっ? なんでだよ」

なんでもへったくれも無いよ。

「危ないからだよ〜」

「だーいじょうぶだって。俺様なめんな!」

俺様って……。

それよりも、

「なめないよ、こんな不味そうなもの〜」

「ま、不味そう? 俺様って不味そうなのか!? くそーっ!」

え〜? なんで怒ったのこの人〜?

しかも何か相手に突っ込みそうになってるし。

……っつて！ カッター持ったまんまじゃない！
しょうがないな。

「えい」

どかつ

「高山光の膝蹴り！！ 見事に決まりましたアツ！！」

誰かさん実況ありがとう。

え〜っつと〜、カッターカッターっつと〜……あれ〜？

「どこ行っちゃったの〜？」

「電気の上だ！ 何か落ちそう……っつて」

落ちてきた〜！

しかも刃が出たまんま〜！

「みゆ〜！」

パシッ

「お見事っ！ 怪我一つ無くカッターを掴みました高山光、意外と
反射神経はいいようです！」

再び実況ありがとう。

でも意外とっつてどつという意味〜？

さて〜、お昼寝お昼寝〜

がらっ

「光！ 果物ナイフ持ってるか!？」

岳お兄ちゃん〜……。

何に使うの〜!？

18 歩く(?) 文房具箱(後書き)

もちろん光は果物ナイフなんて持っていません。あしからず。

19 絵しりとりしよじよ

「絵しりとりしよじよ〜！」

『突然だな！？』

何故か忍、篠、清君に綺麗に八モって突っ込まれたあ。
桜です。

「だってどうせ皆暇でしょ？」

『それもそうだ』

何で毎日毎日暇してるのかな〜、この人たち。

わたしも人の事いえないけどね。

「純君もやる〜」

「んあ？」

聞いてなかったのかな？

「絵しりとり」

「何でまた「純兄早く〜」……分った分った」

よーし、皆揃ったから〜……あ、何に絵描こ……ノートでいいや。

『みんぎりま〜わーりっ』

たまにみんぎりを知らない人がいますので説明しまーす。

みんぎり回り。つまり右回りは、ジャンケンと同じようにグーチ
ヨキパーのどれかを出して、一人だけ違うものを出したらその人か
ら右回りに回っていくの。

例えば、わたし達の場合は忍と純君がチヨキ、篠と清君がグー、
わたしがパー。

この時はわたしから右回りなの。分かったかな〜。

「ん〜……何にしよーっかな？」

さらさらさら……

よしっ！

「はい、次忍〜」

「ほーい。あ、分かった」

わたしが描いたりす、分かってくれたみたいだね、良かった！
さらさらさら……

「はい。清」

「あいよっ！……あ、分かった！」

さつきチラツと見たけど多分スイカだね。

さらさらさら……

「ほいつ、次純か」

「ん。……？ 何だコレ」

んむ？

……ううん……なんだろ、これ。分つかん無いな。

楕円形のメロンパンみたいなものに棒が四本生えてるんだけど……

…。

「何言ってるんだ！ カメに決まってるだろ！」

『頭と尻尾は』

「引っ込んでるんだ！」

分かりにくいよ！

「あだっ」

「忍と純君のダブルチョップ！ 吸い付くかのように清君の脳天

へ！」

「実況せんでいいつてのに」

だ〜って実況したくなるんだも〜ん。

「つつか吸い付きたくねえよ。こんな奴の頭に」

「ひどっ！」

「あーはいはい、純早く描いて」

「ん」

さらさらさら……

次は篠〜！

「……忍と純の絵ってそっくりだな」

「あ、本とだ。程々に雑つつーかなんつつーか」

『あなた（テメエ）のよりマシだ』

激しく同意。

「というか清のは程々に、じゃないし」

さらに激しく同意〜！

「最初メロンパンかと」

「え？ あたしは宇宙船に見えたけど」

「あたしは昆虫の足が二本足りないバージョンに見えた」

わたしは箸をさしたメロンパンかと思ったんだけどな〜。

「篠〜、描いた？」

「ああ、うん」

……うーんと、えーっと……。

リス、スイカ、カメ……。純君のは〜……。メス？で篠は……。なん
だろ〜。

あ、メスって手術とかで使うようなメスね。

で、篠は何か太い棒に線がいつぱい入ってるんだけど〜……。

「う〜ん……。あ、分かった！ 酢昆布？」

「スルメ」

あう……。そう来たかあ。

さらさらさらさら……

「はい！」

「……………??？」

んー……。？分からなかったかな〜。

「あ、アレか！」

よかった、分かってくれたみたい

次に回ってきた時は、こんな感じだったよ。

スルメ（篠） 目 ^{わたし}マント（忍） 登場！（清君） ウナギ（純

君） ギリシャ文字（篠）

何か途中におかしなものが挟まってるよ？

……て、あれっ!？

わたしは「目」を描いたのに、何で次が「マント」「で」「ま」にな
ってるの？

……目を真ん丸く書いたのが「目玉」と勘違いされちゃったのか
なあ。

19 絵しりとりしよじよ (後書き)

絵しりとりした時、意味が分からない絵を描く人って必ず一人は居ますよね？

20 ホントに居たのかこんな奴

「おい、たけ「誰が竹だ！」誰も竹とは言ってねーよ！」
そりゃそうだ。

オレがわざわざ途中で切ったんだからな！

岳だ！。

ちなみに話してる相手はクラスメートで友達の中谷翔なかにしろうな。

「で、何か用か九日投下？」

「投下じゃない、十日」

「それはさて置き。何か用？」

「用が無きゃ来ちゃダメなのか!？」

「うんそう」

とは言わないけど。

あ、言ったか。

「ふーん。じゃ、面白いことあるけど言ってやんね」

「なにッ!？ 何だ!？ 面白いことって!」

「ひっひーん」

「馬？」

「違あう!」

全く、話が進まないじゃないか。

オレのせい？ まさか。

「で、面しれー事って？」

「これこれ」

む？ 手紙？ ピンク色の女子が使うような感じだな……。……。

……まさか。

「お前そー言う趣味だったのか!？」

「んな訳ねーだろ!」

「じゃーそれは何だ!」

「シーツ！ 実はな……修也の靴箱の中に入ってたんだ」

全部平仮名で書いてあるから読みにくいっいたらありやしねー」

「話し言葉でラブレター書くかね、普通」

「まー、とにかく見に行くのは確実って事で！」

「おう！」

「……って、あれ？」

「それ修也は読んだのか？」

「……あ」

おい。

「ガツコ来たのは修也より先だったから……」

おいおいおいおいおいおい！

「放課後って事は今戻しに行っても大丈夫だよな！ 戻しに行こう」

「！」

「あ、ちょっと待て。修也にラブレターなんて出した度胸のある奴、

誰

だって、修也はラブレターなんてもらった途端やぶって捨てるよ
うな奴だぜ？

そんな奴にラブレター出すなんてほぼ自滅同然じゃねーか。

「んーとな……。5 - 2 古閑奈那子こがひななこって書いてあるな」

「古閑あ！？」

古閑っていやー、隣のクラスの普通の顔立ち、ちょっとテンシヨ

ン高め、成績普通な女子……。

つりあうかねえ。

「よし、翔！ 賭けしよーぜ！ お菓子一つ賭けて！」

「じゃ、おれは「オレは実らないに賭ける！」………実るに賭けると」

「そーゆーこと」

「ま、いいや」

よしっ！ 勝った！

さーって、何のお菓子もらうかなー

20 ホントに居たのかこんな奴（後書き）

ラブレタードッキリ、引つかかったことある人！。
または引っ掛けたことある人！。

私は誰かが引っ掛けようとするのを黙って見る人です（笑）

21 実ったの实ってないの

放課後……。

「お、来たぜ……修也だ」

「言わなくても分かるっての」

「岳だ」。

前回のあらすじ。

朝、翔が修也の靴箱に入っている所謂ラブレターを発見。

で、オレと翔は修也がどんな反応をするか楽しみに靴箱の陰から見守って（？）いるのだ。

「あ、あ、修也が手紙に気付いた」

「気付かないほうがおかしいから」

「何しる靴の上に置いてあったんだからな！」

「……………」

「周囲を確認。いたずらだと思っっているらしい。
ってか普通そう思うわな。」

「封筒の裏……名前を確認、ここで修也にある異変が起こった！」

「お？ お？ お？ 修也のやつ顔が赤いぞ？」

「どうやら熱があるらしい。」

「行かずに家帰って寝るかもしれない…………。」

「賭けはどーなるんだあ！」

「これは……まさか……………」

「なんだ、翔も同じこと考えてたか」

「ああ、おまえでも気付くよな、うん」

「家に帰って寝るのだけは勘弁してくれよ…………。」

「あ、修也が移動を開始した！」

「尾行するぞ！」

「言われなくとも！」

体育館裏……。

「お、やっぱりあのラブレターは本物だったんだな。ちゃんと古閑いる」

「いやーよかった。帰って寝るなんてことにならなくて。」

「古閑も顔赤いな、熱か？」

「おい、これから告るからに決まってるんだろ」

「あ、そーゆー理由。」

「しっかしまー、二人とも赤いこと赤いこと。」

「どーかしたらリング頭が二人いるようにも見えるぜ？」

「え、えとっ、修也君！」

「勇気を振り絞って声をかける古閑。もちろん顔は赤いまま。」

「……ッ？」

「上目づかいで（睨んでる？）古閑を見る修也。こちらも顔は赤い。」

「あ、……あ、あつ、あ、あたしとっ……」

「おっかしいな、古閑ってこんなしどろもどろだったっけ？」

「あーもう！ さっさと見えよお！」

「そーだそーだ！」

「ちなみに小声で話しているので聞こえません。多分！！」

「あたしとッ……とっ、と、と……」

「壊れたCD聞いている気分になってきたぞオレは。」

「あたし、と……決闘して下さいっ！！」

『はあ！？』

「ああっ！ 間違えた！」

「いったい何と。」

「チッ……はつきりしねえ奴だな……」

「おや、修也くうん？」

「貴男はオンナノコ泣かせるきですかあ？」

「おいそこっ！ いるのは分かってんだ。出てきやがれ」

『バレてた！？』

まさかのまさかり！ こっちに来ますか！？

「バレバレだ。とつとどつか行きやがれ馬鹿野郎」

「そう！ 修也君の言うとおりだよ！」

『あーははーい。ゴーマンナサーイ』

すたこらさつさのさ。

と見せかけて実は録音機を仕掛けてあったり。

ふははははー！

『つたく……てめえもだよ。言いたいことがあんならさつさと言え。なんなら俺が言うつか？』

『えっ……っ？』

『……………』

『あ、あた、っしも……だよ……』

『……………ふん』

後で録音機を回収してみたらどうだろう。

一番大事なところが小さすぎて聞こえないではないか。

賭け、どーするべ。

ちなみに修也に聞くというのは無理。

一回聞いてみたらな、顔赤くして突然殴ってきたんだよ。

オレはまあ、余裕で避けれるんだけど（にーちゃんねーちゃんのは速くて避けれない。いつか避けられるようにとスピードの訓練を……）うわ言って悲しくなってきた（翔はしっかり当たってたからな。

意外と痛そうだった。

22 突然出たあ

「のわあっ!!!」
「がたん、どてん！」

忍でえす。

何か知らんが隣の部屋から岳の叫び声と何かが倒れる音が聞こえてきた。

行ってみよー。

「おーい、どーちまちたか岳君？」

「何故に赤ちゃん言葉!？」

なんとなく以外にどんな理由があると言っつのだ。

「岳お兄ちゃ〜ん、どうしたの〜」

「あ、いや」

答えになっつてないよ。

「突然蜘蛛が出てきて驚いたんだと」

「何だ蜘蛛か。……っつて、」

「純兄居たの!？」

「気付いてなかったのか？」

「うんにゃ」

気付いてたからこそ言っつた訳で。

「気づいてなくても言っつけど。」

「うふふ〜、か〜わい〜」

光は何か蜘蛛『で』遊んでるし。

「あ〜！」

「どした」

「カーテンの裏に入っっちゃった〜！」

『それだけか!?!』

「え〜？そ〜だよ〜？」

それだけで大声出さないで欲しい。

カーテンを捲ってみよー。

ぴら、ぽと

『うわ（〜）っ！』

ビックリした、めくった所ドンピシャでいたんだもん。

ついでに落ちてきたんだもん。

「ったく、いちいちうるせえよ」

『何でビックリしてないの（〜）！？』

「霊が出るときは普通突然だから」

あー……そーゆー理由？

「わ〜！！」

……今度は一階した？

「どーしたの」

「ゴキさんが出たんのよ〜、突然」

何でゴキブリの事をゴキさんって言うんだろっ。

も〜、小さい時から不思議で不思議でたまらないんだよね。

「なーんだゴキか」

岳、なーんだとか言ってる割にしっかり殺虫剤持ってる理由を聞

きたいよあたしは。

「え〜、ゴキさん〜？ どこどこ〜」

光、何でゴキブリと聞いてそんなに顔を輝かすの。

『さ〜探そ〜！』

ねえ純兄、あたしじゃこの人等止められそうに無いよー？

「光！居たか！？」

「いない〜」

「わ〜！！」

『居たの！？』

「あそこ〜！」

かさかさかさかさ

ゴキブリも逃げる、逃げる。

台所からリビングへ……。

「いくぞ光！」

「了解だ〜！」

岳はゴキブリを潰すため、光はゴキブリで遊ぶ為、追いかける、追いかける。

岳の手には殺虫剤、光の手には猫じゃらしがしっかりと握られている。

「光！ 挟み撃ちだ！」

「了解した〜！」

……なんだろう。

モーレッツにゴキブリにガンバレと言いたい。

「ん？ どーした、岳に光」

「おとーさん逃げろー」

巻き添え食うから。

「いくぞー！」

「お〜！」

シューッ！ ぴこぴこぱたぱた

殺虫剤と猫じゃらしはしっかりと命中した！

おとーさんに〜！！

「うぎゃあああああ〜！」

あーあ、だから逃げろって言ったのに。

「ちい、逃がしたか〜！」

「そりゃそりゃそりゃ〜！」

「ぎゃはははは〜！」

頑張れおとーさん。

かさかさかさかさ

「居た！」

シューッ

ゴキブリ退治は成功した！

『ばんざーい、ばんざーい(〜)!!』

多数の(一人だけ)犠牲者を出したがゴキブリは墓石の下へ眠った。

「……………うるせえ……………」

しかし、犠牲になったのはもう一人居た。

二階で来週あるテスト勉強をしていた純兄は五月蠅くて五月蠅くて全く進まなかったらしい。

ごしゅーしょー様。

22 突然出たあ（後書き）

……あれ？ 突然出たものを書こうとしたのにいつの間にかゴキ
ブリ退治に……。

不思議ですねえ！

23 ト라우マの歌

「くわっ、くわっ、くわっ、くわっ」
純だ。

今日は近所(?)に住んでる従弟妹が遊びに来ている。
で、さっきから兄妹4人+ 従妹の歌を聞かされているという
状態だ。

「けるけるけるけるくわっくわっくわっ ありやとでちた〜!」
ぱちぱちぱちぱち。

礼をしたら拍手してやら無いとすつごく不機嫌になるからやっ
ておく。

あ、ちなみにこいつ等はなっちゃんこと仙波奈津叔母さんの子ど
も。

兄の神谷(5歳)と妹の菜美(3歳)。

「つぢゆきまちて〜、どんぐい(どんぐり)の歌〜!」
……まだ続くのか?

「まだやんの……? 八曲目だよ」

「ねーちゃん、あきらめる。小さい子には勝てないものなんだっ!

「いいぞ〜菜美ちゃん〜。もっとお兄ちゃんやお姉ちゃんを困らせ
ちゃえ〜」

待て光。煽るな。神谷は既にぐてつとしてんだから。

「じゅ、じゅんにいちゃん……もうだめば……」

それは大げさだ、神谷。

「どんぶりこよこよどんぶり〜」

なんで『どんぐり』は『どんぐい』になるのに『どんぶり』はち
ゃんと言えるんだ?

「どんぶりって同じところぐるぐる回るだけじゃ……」

岳、突っ込んだら負けだ。

「おいけにはまってさ〜だいべん」

「大便違つから！ 大変だから！」
忍も突つ込むな。効かないから。

「ごじょうがでてきえこんいちわ〜」
悟浄が出て消えコン一羽？
違つか。

「おっちゃんといつちよにあそびまちよ〜」
『誘拐か！？』
だから突つ込むなつて。

「どんぶりこよこよよこんれ〜」
「どんぐり結婚したの〜？」

血痕？もとい結婚？

……ああ、最後の『こんれ〜』が『婚礼』か。
「ちばやくいつちよにあちよんらが〜」

……おお、久し振りに突つ込みが無かった。

「やっぱいこやまがこいちいと〜」
『小山つて誰！？』

「こーくんのともだち」
『いるの！？』

「ないれはごじょうをこまらちた〜」
頑張れ悟浄。

「ありやとれちた〜！」ばちばちばち
「三番は！？ どんぐり帰したげて！？」

「悟浄も大変だね〜」

悟浄と俺等を重ねてねえか、光。

「それれはつぢゆきまちて〜ぶんぶんぶん〜！」
「なわとびの歌？」

「お姉ちゃん違つよ〜。はちのやつだよ〜」
「うげっ」

……あれか……？

「ぶんぶんぶん〜はちがとびゅ〜」

……これが……。

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよ」

「トイレの間や胃に野原が咲いた!？」

「すげー」

「野原って咲くって言うのかな？」

「ぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

一息すって……？

「ぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

……二番に入った。よかった、小っこい頃の光とは違ってみてえだ。

「あさちゅゆぎやぎや」

「朝露がキラキラってどーなってんの!？」

「水銀の朝露とか？」

いやそれかなり危ねえから。

「のはやがゆえゆよぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

『地震!??』

野原だけがピンポイントで揺れる地震でどんなだよ。

「ぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

……ん？ 三番なんてあったか？

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

ゆ〜

一番と同じじゃねえか。

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよぶんぶんぶん〜はちがとびゅ」

ゆ〜

……何か同じ所をぐるぐる回ってる？

これじゃまるで……

「小さい時の私みたいでしょ！ お母さんに聞いたの」

「……ねえ光？ まさかとは思っけど……」

「菜美ちゃんに三番って言って教えたよ」

『マジか……』

「ん？ どういうこと？」

ああ、神谷は知らなくて当たり前だ。

光が菜美くらの頃、一日中歌を歌つてた事があって……。

それが『ぶんぶんぶん』だったんだな。

同じ歌の一番ばかり何回も何回も続けて歌うんだ。あんな風に。

『ぶんぶんぶん〜はちがとびゆ〜 といれのまやいにはやがしや
いたよ ぶんぶんぶん〜はちがとびゆ〜 といれのまやいにはやがしや
びゆ〜 といれのまやいにはやがしやいたよ ぶんぶんぶん〜はちがと
ちがとびゆ〜 ぶんぶんぶん〜はちがとびゆ〜 といれのまやいに
のはやがしやいたよ ぶんぶんぶん〜はちがとびゆ〜 ぶんぶんぶ
ん〜はちがとびゆ〜 といれのまやいにはやがしやいたよ ぶん
ぶんぶ……』

誰か、止めやがれッ!!

23 トラウマの歌（後書き）

『どんぐりころころ』は私の、『ぶんぶんぶん』は妹の小さい頃に歌ったものを参考にしています。

『ぶんぶんぶん』のループは最初大丈夫でも後々ぐってなってきましたよ、ホントに。

24 勉強してただけなのに

がらがらっ

「……ねー純兄、何でこの教室だけ誰もいないんだろ」

「俺に聞くな」

「じゃあ誰に聞けというんだ。」

「忍でーす。」

「ただいま学校の自分の教室に着きましたー。」

「現在8時ジャスト。」

「いつもなら殆ど誰もいない時間なんだけど、テスト前だから勉強しに来てる人がそこそこいるんだよ。」

「えらいえらい。」

「あたしはやんないのに。」

「でもよくよく聞き耳立ててみるとゲームの話とか漫画の話しか聞こえないんだよね。」

「……勉強してる人いるのかなあ？」

「ひーまだー」

「いきなりか」

「毎朝言って毎朝突っ込まれてるからもう日課的なものになってきてるんだよね、コレ。」

「んーっと、筆箱出ーして、本出ーして……あれ？」

「……本忘れたっ！」

「あそ」

「酷いよ純兄。」

「本無しで朝過ごすなんて出来ないよ。暇すぎて。」

「……今、あたしが本読むことを不審に思った人？」

「あたしも本くらい読むからね？」

「今日持ってこようとしたのはムダ知識の本だけだ。」

「純兄、暇だ」

……え？

「後ろ」

くるん。

……何か、いるねえ。

もやもやしててわかんないけどさ。

どかつ

「殴り飛ばしたからもう何も憑いてないでしょ」

「……憑かれてたせいじゃねえのか……。病院行くか？　せめて保

健室」

「ちよつと！？　何でそーなんの！？」

「だって……なあ？」

なあつて。

「よつす」

「おは、しーちゃん」

「何してた？」

「何つて……テスト勉強？」

ぴたっ

見事にフリーズ。

「何か憑いてる？　それは無いが、忍だし。頭大丈夫か？」

……何でそーなるかなあ！？

「おっは！　ししじ！」

『ししじて』

「『し』のぶ『し』の『じ』ゆん」

何でそう略すかな。

「んで？　純と篠は何そんな深刻そーな顔してんだ？」

『忍が勉強してるから』

「なにいつ！？　忍はオレと同類（つまりノー勉強）だと思ってたの

に！　裏切り行為だ！」

おーげさな。

って言うか何で勉強しただけで裏切り行為になるの。

「忍、毒キノコでも食ったか？」ぼん
どかつ

肩に手を置こうと近寄ったのが運のつき、
「忍の前蹴り、大事なトコへ入りました〜！」
丁度いい位置にあったからね。

あたし座ってたから。

「おはよ〜！ で、何で清君前蹴り食らってたの？」

『忍が勉強してることに下手に突っ込んだから』

「ええ〜っ！？ 忍が！？

純君！ 昨日の晩ご飯or今日の朝ご飯に変なモノ入ってなかった
！？」

……皆さあ、

どーしてそんな反応しかしてくれないの！？

24 勉強してただけなのに（後書き）

勉強してたら驚かれる……。
そんな人って意外とレアじゃないですか？

25 ざ 追いかけて

わ〜。

あ〜、光です〜。

今ね〜、岳お兄ちゃんにリコーダーを貸してもらおうと思っ
て岳お兄ちゃんの教室に来ただけどね〜？

なんだかそーだい（？）な追いかけてこが行われてるんだよ〜。

箒片手に岳お兄ちゃんを追い掛け回す誰かさん〜、若干顔赤い〜。

VS

教室中をまさにひらりひらりと跳び回る岳お兄ちゃん〜。

そして巻き込まれないように教室の隅によって見学と言つか観戦
〜？をしているクラスの人たち〜。

+机に向かって宿題か何かの丸付けをする担任の教師さん〜。

なんか凄いな〜。

「ん？ あれ、高山の妹ちゃん？ なんでココに？」

あ〜、危ない危ない〜、用事忘れる所だったよ〜。

「岳お兄ちゃん〜！」

「へっ？ 光？」

良かった〜、すぐ気付いてくれた〜。

「リコーダー貸して〜」

「オメーのは？ うおっと」

危ないな〜、話す時くらい中断すればいいのに〜。

「家に忘れてきちゃったの〜」

「あ〜、醤油ーこと」

それ面白くないよ〜？

「いっと、おっと、ほいっと。そらよっ！」

くるくるくるくるくる……ほいっ

「ナイスキャッチー！」

えへへ〜、声をそろえて言われると照れるな〜。

「はあっ、はあっ、おい、それ俺のдарうが……!!」

あゝ、本当だゝ。

かさかみ
風上修也って書いてあるゝ。

それより修也って人ゝ、息上がってるねゝ。

「ちよつと、返してっ!!」

いやゝ、これは貴女のは無いですよゝ。

「修也と間接キスとか絶対許さないから!」

いやいやゝ、そんな事する気さらさら無いですからゝ。

「奈那子、こっちよこせ!」

「おお? 古閑の修也に対する呼び方アーンド修也の古閑の呼び方が変わってる?」

『ぎくっ』

なんて分かりやす過ぎる人たちだろっ。

「とつとととりあえずっ! はいっ!」

くるくるくるくるくる……ぱしっ

ナイスキャッチゝ、岳お兄ちゃんゝ。

「おい、返せ」

「オレらが居なくなつた後何て言ったか教えてくれたらな!」

「ちよつ……先生! なんで止めないの!?!」

あゝ、それは確かにそうだよねゝ。

普通の教師だったら留めに入るものゝ。

「仲良きことは美しきかな」

『何か違あう!?!』

見事な八毛りゝ。

「チツ……これなら?」

あゝ、修也(って人)が岳お兄ちゃんの筆箱取つたゝ。

「あうち、とーられちつた」しゅばっ

「なっ!?!」

「とーられちつた、から取り返した!」

おおゝ、見事なスピードゝ。

そっか〜、岳お兄ちゃんたま〜……にお姉ちゃんの暇つぶし道具として追いかけてられるもんね〜。

「チッ」

修也(っ)って言う人(、) 箒を突き出します〜！

岳お兄ちゃんはその手を片手で掴んで〜……

「うわっ」

『あっ！！』『ダンッ』

乗ってた机から落っこちちゃった〜！！

「あ〜、良かった、受身習っとして。にーちゃんに感謝だわ」

そういえば一年くらい前に習ってたね〜。

……よく覚えてるな〜。

「驚かせやがって……」

「およ？ 心配してくれてたのか〜、修也君よ」

「つんな訳あるかつ」

「あーりがとよん」

思う存分いじってるね〜。

……ところで〜、

リコーダーは〜？

26 今日はテストなのです

「しーん、しーん？ しーん！」

「んぎゃあああああああ！」

「見事な跳躍力！ 天井に頭が届きそうです！」

いや、それ大げさでしょ。

結構な高さまで飛び上がったのは事実だけど。

「耳いてーだろ！ 耳元で叫ぶな！！」

「テメエが返事しねえからだ」

純兄口調で返してみました。

「つくそ、兄弟なだけあつてそつくりだ……」

「まで、あたし等は兄妹。あたしは弟じゃないの」

「よく分かったな！？ 字しか違わないのに！？」

「よく言われるもんだから。」

で、なーんであたしが呼んでるのに気がつかなかったの？

気付いてたら耳元で叫ばなかったのに。

「ふふふ……それはな……「やっぱいいや」聞けよ！」

何だ、聞いて欲しいのか。

「勉強してたか「桜、今日のテスト何だっけ？」……ううっ」

男子が泣いても可愛くない。

「ん〜とね〜……理科と技術家庭と数学だよ」

ふむ、

「清、ご愁傷様」

「まだテスト始まってもねーよ！？」

だってえ。

清 数学が異常なほど苦手

今回の理科テスト 湿度を計算で求める問題がでる。

+ 清はマトモにテスト勉強をしない（あたしもだけど）

結果 今回は何時もよりも悲惨になる可能性は高い。

「まだやつても無いテストの結果を予言されたくなんかねーよっ！」

「はい、清くーん？ 樹形図は書けますかあ〜？」

「書けるからっ！ それ位！」

「この問題解けますか〜？」

「無理！」

「せめて問題読んでから言っよ。」

「次、湿度をもとめる公式は」

「しーちゃん、突然後ろから出てこないで。」

「しつど？何それ」

「……………」

「啞然。」

「と言っのは冗談で」

「本当？」

「ひでえっ！」

「だったらその頭を何とかしろ」

「ねえ純兄、何で君は教科書読みながら話聴いてるの。」

「どーせなら混ざってよ。」

「とか言っあたしの手にも教科書は乗ってるけど。」

「はい、座りなさい。テスト配りますよ」

「一時間目、理科終了。」

「どーだった〜？」

「取敢えずは全部埋めた」

「しーちゃん理科得意だしね」

「うむ、理科『だけ』は得意だ。忍はどうだった」

「何も自分で『だけ』を強調しなくてもいいと思うんだ。」

「あたしも一応全部埋めたよ」

「問題は……………」

「……………」「ずっ〜ん」

「清君？ どうしたの。……あ、テストどうだった〜！」
そんな元気に聞かないであげようよ。

きつと最後の方の計算問題の公式、その他諸々が分からなかったんだよ。

「聞くな、聞かないでくれ、頼むから、本とに」

「あはは〜、純君は……聞くまでも無いね〜」

だって純兄頭いいもん。勉強はしてるから。

テスト前二週間だけ。

「席に着きなさい」

二時間目、技術家庭終了。

「家庭科ムズイ」

「そのぶん技術は簡単だったかな〜」

「……あれ、清が復活してる……あ、そっか」

清は実技そこそこ出来るからね〜。

丸暗記で。

「清〜」

「テストどーだった〜？」

「全部埋めた！」

理科のときとは凄い違いだ。

「……ただ」

ん？

「名前を書いたかどうかが怪しい」

これで書いてなかったら最悪だな。

「理科のほうか」

そっちか！

「清、次は数学だけど」

「それを言うなあ〜！！ 純！ 頼むから言わないでくれっ！〜！！」

「言った後に言われても」

「そーだそーだー。」

「次は数学次は数学次は数学数学数学数学……」
桜、あんたは鬼か。

「んみやあああああー!!」

「あはは、面白い」

「……確かに？」

『次は数学数学数学数学数学数学数学数学数学数学……』

「にゃあああああああああー!!」

猫語で悲劇的展開だー!! だね。

「……ピッタリはまってるような。」

「席着きなさーい」

三時間目、数学終了。

教室に一つの死骸が転がっていた。

「……うん。」

「仏説摩訶依般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄

舍利子色不異空空不異色色即是空……」

「出た、忍の『問答無用、逝きなさい』だー!!」

いつの間にそんな名がついてたの？

「……って! 殺すなコラ!!」

「問答無用!!」

「おいっ!?!」

逝かしました

蹴り飛ばしたただけだけだね。

27 寝言

「あーうー、さぶい」
忍でしゅ。

「なーんで楽しいことしてる時は時間が早く立つのかねー？」
さつきまで漫画読んでて気がついたら12時に。

いや、不思議不思議。

明日もテストあるのになー、寝不足の可能性は限りなく高い。

うん、さつさと寝て明日は寝坊しよう。いつもが早すぎるんだから。

と、思っただけ登ってたら……。

「わー、たーべーらーれーるーう」

何か岳達の部屋から変な声が聞こえてくるんだよね。

まあ寝言だろーけど。

どんな夢見てるんだか。

「あゝ！ 食うな食うな食うな食うな食うな！！」

寝言だとゆーのにえらい早口だな！？

……テープに取っというてやろう。

確か岳は録音機持ってたはず。

かちやっ

「……うーわー」

いつ見ても思っただけ岳の机、よく雪崩起きないなー。

元の高さの倍くらいになってるんだけど。

しかもよーく見たらゆれてるし……。

「おねーちゃんも来たの？」

「光！？」

「しーっ」

あれ、純兄起きてたんだ。

「二人とも何してんの」

「岳お兄ちゃんの寝言で目が覚めちゃって」

「右に同じく」

そんなに五月蠅いいのね、岳の寝言。

『だから寝言をテープに取っていつか脅しに使おうと（思ってた）（黒い。』

「うう〜、殺されりゆう〜」

そこまですらないと思うよ、岳。

「馬鹿、アレは寝言だ」

「明かりをつけましょローソクに〜。お花をあげましょ菊の花〜。五〜人ばやしも死んでいた〜。

きよ〜おは悲しいお葬式〜」

「光は何歌ってんの」

突然すぎるにも程があるでしょ。

「今日はひな祭りだったの忘れてて〜」

「え？ 今日？」

「そっだよ〜」

かんっぺきに忘れてた！

雛あられも菱餅も食べてなかったんだもん。

「うつめえ〜！」

「黙れ！」

あ、あんまり美味しそうに寝言言うからつい。

「おっ！ やった！！」

『？』

宝くじにでも当たったか？

「肉まんのおんに最初の一口で……！！」

『それだけか！？』

「でも確かに嬉しいよね〜。絶対に一口でたどり着けないもん〜」
確かに、それは確かに。

「あ〜っ！ 光！ 取るなア……………」

「何で私取るの〜？」

「普通に考えれば忍だろ……」

純兄、酷い。

「なあっ！ ねーちゃん取るな！」

「結局あたし取るの!？」

「あああ……オレ一口しか食ってねーよう」

失礼な、あたしは全部取ったりなんかしないよ！

「にーちゃん、宿題やって」

「断固拒否」

純兄、あれは寝言だって。

岳、純兄がやってくれる訳ないでしょ。

「おおっ!？ 本とか!？ やった！」

『嘘(〜)(〜)』

岳の夢の中の純兄甘ッ！

「ねーちゃん、にーちゃんにべったりすんの止めなって」

「誰がしとるか!？」

「忍、抑える。殴ったら起きる」

うぬう……起きたらなぐるっ！

「ねーちゃんマジで猫みてーだ」

『それは確かに(〜)(〜)』

……悔しいが否定はしないよ。

「ところでー」

ん？

「三人揃って何やってんだ、あん？」

『ばれてた(〜)(〜)!？』

「バレバレだっ！ 大声でツッコミその他するな！」

……一つ言わせてもらってもいいーだろーか。

『寝言が五月蠅いお前が悪い(〜)(〜)』

ちなみに、最初の方は普通の寝言だったから純兄と光、あたしの
岳脅し道具となりました

28 いーんですか？

「……あれ〜？」

「どつたの？」

「あそこに何かいる〜」

あそこ、と指されたベランダを見ると……

あ〜、何か居るねえ。

忍でーす。

「何かもやもやしてる〜。いつもと違うよ〜」

「う〜ん、あたしも何か色がついて見える」

今まで景色がもやんってしてただけなのに。

「純兄ー！」

「耳元で叫ぶな馬鹿野郎」

あたしは野郎じゃない！

「あれ何〜？」

「……表現しづらい物体」

分からないよ。

「もーちよつと性格に」

「……ホラー映画が何かに出てくる雑魚みたいな物体」

あたしホラー映画見たこと無いんだけど。

『妖精』パイーツ・オオ・カリオン』位だよ。

あれってホラーに入るの？

「もつと性格に〜」

「……あ、斬られた」

あ、本とだ、何かきれーに真っ二つになってる。

『何に（〜）？』

「……黒い和服のちびっ子？」

何それ。

「ね〜、声かけてみて〜」

「断固拒否」

……だろーね。

「おーい、誰だお前」

岳……あんた声ちゃんと聞こえないでしょ。

「……うん、分からん！にーちゃん後は頼んだ！」

……なるほど、それが狙いか……。

ナイス岳！

「チッ」

『……話、したくない……なら、しなくていい』

……、何か聞こえた？

「……ねーちゃん、何かオレ、聞こえたんだけど」

「私も」

どーやらあたし達も霊的なものと会話ができるようになったみたいです。

どんどんパフパフー。

「……ところで、どちら様ですか」

『……』

何か黙っちゃった。

いきなり過ぎたのかなー？

突然はダメだよ、光。

『ざーん、どした？』

何か新たに誰か来たようです。

そっちに聞いてみよう。

「どちら様で？」

『え？ 見えてんの！？ まーいや。死神様だ！！』

……。

パードウン？

「死神って実在したんだ」

いや何納得してんの。

「なーな、名前なんてーの？」

いや何話題変えてんの。

「純兄ー？ 知ってた？」

「知ってた」

「何で教えてくれなかったの！」

「聞かれなかったから」

なるほど。

ところで、

「さっきベランダにいたホラー映画の雑魚はどーだったの」

「どっか行った」

どっかてどこさ。

「よし！ 斬、剣、天だな！ おぼえたっ！」

しかも何か増えてない！？

「……斬、剣、どーゆー事が説明あるな？」

「無い！」がんっ

……うわあ、いったぞ。

よくは見えないけど、でっかい鎌みたいなもので殴られてたよ。

「……天、落着け」

「……斬に落着けといわれる日が来るとは……」

「……どういう意味だ」

「いや、なんでもない。なんでもないからその鎖しまっしてくれ」

ちよっと解説。

天……声からして女の子かな？ が頭を抱えた直後、何か氷で出

来てるっぽい鎖が出てきた。

解説終わり。

「つーるーぎー、だいじょーぶか？」

「ダイ……ジヨウ……ブ」

全然大丈夫そうに聞こえないんだけど。

「あ、ところで、あんた等の家、居候OK？」

……天さんは突然ナニを言っというらっしやるので？

突然すぎてサッパリ訳わかんないよ。

「OKだよ」

「いつからそこに!?!」

おかーさん、心臓に悪いよ。

「おい、親父の了解取らなくていいのか」

「あはは、大丈夫。あの見える人じゃないから」

いやいや、そー言う問題か?

それ以前におかーさんて見える人だったんだ……。

「やたつ! オレはこの世界の食い物全部制覇してや……うぐつ!

」?

「あはは、じゃあ私が作ってあげるね」

……光、手加減してあげてね。

天、斬、殺さないであげてね。

剣の状態。

氷の鎖で雁字搦めに縛り上げられ、鎌の先端部分が若干頭に食い

込んでいる。

そんな状態。

まー、そんなこんなで家に家族が増えました。

………いいのか!? これで!?

28 いーんですか？（後書き）

なんとなく思いついたので書きました。死神トリオ。
思いついたら即行動。その後のことは考えない。
どーなるのか私も分かりません（汗）

29 毒つてごあい

「はい、剣くん」

「……………ども」

「いやあ、見事なまでに怪しすぎる物体だねえ。

とても食えるとは思えねーよ。

岳だ！

ちびつ子死神トリオが来た次の日、光がトンデモナイモノを剣に食わせようとしてんだ。

……………たしか材料にかたつむりが居たような気がする。

あと、何か霊力？ ってやつをトリオが分けてくれたからオレもねーちゃんも光もはつきり見えるようになった。

「……………光、これ生きてるのか？」

「だって新鮮な方が好きなんじゃないかな〜っと思って〜」
「まっさかー！」

「焼いてください、煮てください、何でもいいからマズ生きたものは勘弁してください本気でお願いますから！」

「大体なんでこんなことになったの!？」

「あ〜、お姉ちゃんおはよ〜」

光、ねーちゃんはさっきから起きてたぞ。

「ホラ、剣が『この世界の食い物全部制覇してやる』とか言ってた
ろ」

「だからまずはエスカルゴ作ってみた〜」

「何でもまずエスカルゴなの!？」

「ごもつとも。」

「植木鉢の下でかたつむり見つけたの〜」

「なんて理由だ……………」

「だから〜、どうぞ〜」

「カンベンシテクダサイ」

真っ青だ。

「斬、居候させてもらってるんだ。文句つけるものじゃないぞ？」

「天酷むぐー!?」

おお、口の中に問答無用で突っ込みやがった。

天、結構ひつでー奴だな。

「……おばさん、手伝う」

「あら、ありがと」

斬は責任放棄してるし。

「あ、斬、くれぐれも周りのもの凍らせないように……」

「……分かっている」

天、天、凍るとか何とか言っていないでさ。

斬もちよつとむすつてしてないでさ。

まず剣の心配をやってくれ。

マジで冗談抜きで死に掛けるから。

「わ、死にそうになるほど美味しかったんだね！」

「光、それ絶対違うから。これ以上毒を与えないであげて？」

調理器具とかも毒付きそうだしな。

「う……う……」

「……クスリ、いる？」

「カンベンしてくれッ！」

すげー、斬の一言で復活した。

「うっ……」「斬、あげるか。クスリ」やめるやめるやめる！ 大丈

夫だから！

すげー。

斬のクスリとやらもそんなに危険なのか。

光の料理とどっちが危険かなー？

「……はい」

……絶対クスリの方が危険だ！ 間違いない！

だってな？

明らかに毒な色をした液体が入った小瓶で、気体が泡となって発

生してるんだぞ!?

「ちなみに解毒剤は」

「……ない」

危なさ過ぎるだろ!!

「……オレは逃げる!」

しゅぱっ!

おお、窓から飛んでった。

「逃がすか!」

天もその跡を追って……。

「うぎゃああああ!」

しばらくしないうちに剣の悲鳴が。

よく見たらふつつーに食器を片付けてる斬から氷の鎖が出てるし。

「子どもは元気が一番だよね、斬くんも行っておいで」
で、母さんは何か煽るようなこと言ってるし。

『いつてらっしやーい(〜)』

ねーちゃんと光は完全にギャラリと化してるし。

にーちゃんは……何か天にエスカルゴもどき渡してるし。

多分あれを処分してもらわないとこっちに回って来るからだろう。

「剣! 覚悟!」

「無理! 水護盾!」

エスカルゴもどき片手に突っ込む天、手を前に突き出して水の盾を作る剣。

……これって何のまんがでしょーか?

「甘い!」

「ぐぬっ!」ずぼ

あ、突っ込まれた。

南無阿弥陀仏。

にしてもコレって何も知らない人に見えたらすっげー怖いよな。

水を操るのとどっから見ても怪しいブツを持った4、5歳児が向

かい合ってたんだから。

向かい合ってるだけならまだしも戦ってるんだから。
オマケに浮いてるし。

……あれ、斬は何処行つた。

「きゃああー！ お皿が浮いて……あう」

あ……通りすがりの主婦Aが斬の手刀で気絶させられた。
なるほど、お皿&エスカルゴもどきは一般人も見えるのか。

「わっ！」
どさっ

……剣が降ってきた。

あー……白目むいてる。そんなにキョーレツなのかあれ。

あ、そっちじゃなくて全身強く打ったからか？
て、

「大丈夫か！？」

「大丈夫。3分もすれば元通り」

「お湯かける？」

いやいや、カップラーメンじゃねーから。

にしても、まー。

死神って丈夫なんだなあ。

29 毒つてこあい（後書き）

天が全然女の子してくれない……。

それよりこの三人全然子どもやっつけてくれない……。

ちなみに斬は3歳、天は5歳、剣は4歳のはずです。

……答です。

30 梅干攻撃！

「……赤い」

斬の感想。

「ふやふやだ」

天の感想。

「すつつつつつぱあああ！？」

剣の感想。

純だ。

こいつ等が観察してるものは梅干な。

棚の中に入ってるのを見つけて急に観察しだしたからそのままほおって置いた。

ちなみに俺と忍、死神トリオ以外は子ども会の何とかでボーリング行ってる。

「斬と天も食べてみる？」

忍が梅干をもう一個出して言ってみたら、

「……………」
「剣に目を移して……………」

「いい」

しっかり断った。

「あそ？ ふくん…………ま、ちょっと食べてみって」

で、小さくちぎった梅干を口に突っ込まれた。

「すっぱい」

斬の感想。

「しよっぱい」

天の感想。

リアクション薄いな、こいつ等。

「忍ねえっ、純にいつ、何か甘いのないっ！？」

「砂糖、飴、蜂蜜、どれがいい？」

「何でもいーよう!」

「じゃあ砂糖で」

どさーっ

「○\$%# * & # \$! ? ! ? ! ? ! ?」

……………。

「忍、やりすぎだ」

「……………やっぱり?」

『剣だから大丈夫だ』

声をそろえて酷いな、こいつ等。

「何で皆オレにはこう冷たいの!? じどろぎゃくたい反たーい!

!」

『あの一』

……………着物に長い黒髪の幽霊って……………。

『すみません』

「どちらさまでしょー? ところで何か謝られるようなことした?

あたし等」

『いえ、そういう意味ではなく……………てっ!?!?』ぶんっ

天、危ないから鎌を振り回すのは外でやってくれ。

『きゃーっ! 怖いよおう!』

チビを怖がる幽霊……………コレはめったにお目にかかれないだろうな。

「覚悟ーっ! 水攻だ」まてまてまて! 外でやって!」はーい」

ナイスだ、忍。

『ちよっ、助けて下さいよッ!』

「え、そんなこと言われても……………なんであんた襲われてんの」

『知りませんよッ!』

「……………成仏、しろ。そうしたら襲わない」

襲いようがないしな。

『え、じゃあ成仏したらいいんですね。それでは』

あ、消えた。

……………なんだっただ。

「……天、剣、他の奴が居る。外」
「あーいよつと！」
「分かった」
「純兄、カメラ何処だっけ？」
「何に使うんだ」
何処にも使う要素ないだろ。
「世界初の死神写真とる」
「普通写真に写らないのが霊とか死神とかだろっが」
「……あ、そっか」
そんな残念そうにしないで。
「居たッ！」
「わーっ！ 何々!?!」
「くらえーっ！ 梅干こーげき！」
「わあっ！」すかつ
……いつ梅干を。
しかもすり抜けてるし。
「馬鹿！ 霊がんなモン食べられるわけないだろっ！」
「しまったあっ!?! ……と見せかけて！」
見せかけて？
「水攻撃！」
「何なんだよーっ!?!」
消えた……けど。
見せかけても何もねえじゃんか。
「結局あんたは何がしたかったの」
「え……梅干攻撃？」
それだけか!?!

31 テスト返った

「忍……」

「お前、勉強してねーつつつたよな……」

「うん、英語の教科書チラツと読んだくらい」

「なのに……」

さて、どーしてあたしはこんなこと言われてるのでしょーか？
忍でーす。

今日五教科と体育のテストが返ってきた。

「もーいつかい言つて。何点？」

何で二回も言わすかなあ？

「国語86点、数学90点、理科77点、英語85点、体育86点
だよ」

「この裏切り者……」

「わう」

清一、オンナノコに暴力振るっちゃいけないんだよー？
よけたけど。

「ねー、社会は？」
ぎく。

「キカナイデクダサイ。

しーちゃんと桜と清はどーだったの？」

「あはは、忍？ 聞いていい事と悪いことがあるんだよ」

社会は79点これ以外はノーコメントで」

「あたしは……理科が86点、国語69点、社会76点。あとはま
あ、うん」

なんでさー、皆社会そんなにいいの？

「清君は？」

「体育が84！ これ以外は聞くな……」

「数学。コレだけ教えて？」

数分後……。

「はあっはあっはあっはあっ……一発もあたらなとはどーゆーことだ!？」

「トロイ、同じ所しかこない」

「ちなみに、桜、何発目？」

「見た感じだーいぶやってるけど。」

「ん〜とね、534発目だよ。清君、あと486発ガンバレ」

……半分やったんだ……。

スタミナと言っかなんと言っか凄いな。

「待て、486じゃねえよ。後466発だ」

「あはは〜、ばれちゃった」

「20発も付け加えるとか……鬼か!？」

「疲れたんなら単に清がやめりゃいいだけだと思ったのはあたしだけは無い筈だ。」

「はーい、後半、スタート!」

「てあ　　っ!！」

だだだだだだだだだだ……

さらに数分後。

「はあっはあっはあっはあっ!！」

「苦しそーだね」

そりゃそーでしょーよ。

桜によると1023発打ってるんだから。

「コレだけうって当らないとはこれいかに!？」

「下手な鉄砲(拳)も数撃ちや当るとでも言いたいんだろっが、下手すぎる鉄砲(拳)は何発撃ってもあたんねえんだよ」

……この場合、的の守りが硬すぎるんだと思う。

32 わつつでいーす

「これ、何？」

「サンゴだよ。お姉ちゃんがもらって来たの。光です。」

今日はお姉ちゃんもお兄ちゃんたちも遅いから死神トリオとお留守番なの。

「なっなっ、光ねえ、コレは？」

「小さい時に岳お兄ちゃんが作った何かじゃないかな。」

いろおんな色がグチャグチャに混ぜた紙粘土の塊なんだけど。誰が作ったのかな？」

え？ 私？ まさか。」

「ひーねえ、コレは？」

斬くん、こっちに向けないで！」

「カッターだよ。」

刃が出てるよ！」

「ふーん……」

カチカチ、カチカチ、カチカチカチカチカチ

……気に入ったのかな？」

カッターカチカチするのってちょっと楽しいし。」

「ひいねえ、これは何？」

「……殺虫剤用意！」

「さっちゆうざい？」

えっつと、確かここにあつたはず！」

あつた！」

「天ちゃん、それ離して！」

「分かった」

発射！」

シュッ

よし、ゴキブリさんご臨終。

お姉ちゃんが居たらお経唱えてもらえるのにね。

「光ねえっ！ 庭の隅っこにこんなの生えてた！」

おお！ ホトケノザお花つき！

「でかした〜！」

「え？ 何なのこれ？」

「この紫の花をね〜」

ピツと抜いて〜、出てきた白い所を前の歯で噛んだら〜

「……あつ、甘い！」

「でしょ〜！」

ホトケノザの蜜だよ〜。

「……味、しない」

「ん〜、じゃあそれは何かに先を越されちゃったのかな〜？」

まだ蜂なんて見ないんだけどな〜。

「あ、後こんなのも生えてた！」

「捨てて〜！」

どくだみなんていらないよ〜！

臭いもん〜。

「捨てるの？ これは何？」

天ちゃん〜。

鼻つまんでるなら捨てる理由は分かってるよね〜。

「どくだみだよ〜。薬とかに使われたりするらし〜」分かった！ 捨

てる！」「

早いね〜。

薬って出てきた途端走ってっちゃったよ〜。

斬くんが微妙に口の端をあげてたような気がするからそのせい

かな〜？

「ひいねえ、この重いやつ、なーに？」

「辞書だよ〜」

「えっ！ 大っきい……」

そりゃ〜、だつて〜、それは広辞苑だもん〜。
普通のやつより大きくて重いもん〜。

……お姉ちゃんがたま〜にぱらぱらめくる以外誰も使っていないだよね〜。

これぞ宝の持ち腐れ〜？

「光ねえ！　こんなのも見つけた！」

「よもぎ〜？　お父さんが何か体にいいとか言ってお茶にしていたよ
うな気がするな〜」

「これが体にいいの？」もぐもぐ

あ〜！　そのまま食べちゃダメ〜！

「うえ、不味い」

「ウサギじゃないんだから、そのまま食べるなよ」

「ひーねえ、これは？」

○Sだね〜。

「ここにスイッチがあるから〜、ここを押して〜」

「わあっ！　光った！」

あれ〜、そつち〜？

「すっごい！　何か赤い帽子のおっさんが中で走って跳んでる！」

このおっさん身体能力すっごい！

そつちな〜！？

「何が入ってるの？」

「コードとかかな〜？」

見たことないからよく分からないけど〜。

斬くん〜、裏側覗いても何も無いよ〜。

この反応はかわいい〜

「修也、食う？」

「ッ……いらねえよ」

そんなこと言って、本とは欲しいくせに。

「ほら、やるよ。先生のだけど」

「は？」

とりあえず一個あげた。

オレやつさしー。

「……………ゴミじゃねえかッ！」

「や、ちよつと期待したでしょ？ はいホンモノ」

うん、今度のはホンモノだぜ。

先生のもってきたミニクッキー。

ねーちゃんのお菓子並に旨い。

あー、最近食ってねーなー、ねーちゃんのお菓子。

「岳！」

ん？

「のわッ!？」

あーぶね、マジでこけそうになった。

さんきゅー翔。

「修也、クッキーあげたのにいきなり攻撃してくるとは何事だ！」

「え？ あ、悪い」

え？ 素直……。

「じゃ、さいか〜い！」

「ハアッ!？」

お〜にさ〜んこつちら、手〜の鳴〜るほ〜うへッ。

パチパチ手を鳴らしてやると箒片手に突っ込んできた。

やっぱ挑発にはこれが一番だ。

さて、修也の息も切れてきたし、

「翔！」

「ん？」

「はい、バトンタッチ！」

「……………は!？」

それゆけー!

どんっ

がらがらがら

あ。

思いつきり突き飛ばしたら机巻き込んでこけちまった。

「おい!? 大丈夫か!？」

「へーきへーき……、おれは石頭な方だから」

「テストはいつもオレより点数低いしな!」

「そーゆー意味じゃねーっ!！」

あ、違っの。

「だいたいお前に勝てるわけ……そうだ、勝てるわけ……うっっ

おーい?

突然泣き出してどーしたの。

どーみてもウソ泣きだけど。

「オール100点なんてそう居るもんじゃねえし」

『お前が言うか!？』

うーわ、修也が突っ込まれてる。

めーずらし。

大分溶け込んできたねえ。

ちよつと前はー匹狼的な感じだったんだけど。

え? んな描写なかったっ?

……気にするな、きつと後付けじゃない。

と、オレは信じといてあげよう。

「翔ー、修也ー」

「あ?」「ん?」

「よーい……スタートッ!」

机の上まで逃げ回る翔にそれを追いかける修也。

いやあ、よく分かったなあ。

「うあっ!?!」

「……遅っ」

修也、小声でも聞こえてるぞー。

ちなみに翔は足速いほうだぞ。

お前が足速すぎるんだ。

「はい、じゃー岳！ 後はよろしく！」

「テメエわざと？ まったな！？」

「あっははー」

笑ってごまかすなよ！

「いや、岳と修也の方が面白いから。見てて」

……喜べばいいのか怒ればいいのか。

まあとりあえず逃げ回るとしよう！

「行くぜー、よーい……ドンー！」

再び！ 先生のお菓子をつまみながら逃げるオレに追いかける修也！

あー、たーのしつ。

33 今日も今日とて（後書き）

こんな先生が欲しい。

という願いから生まれたのが岳たちの担任です。

あー、お菓子くれる先生いないかなあ……。

34 つまみ食いをしよう

「……あつ」

「いーものめつけた

忍でいす。

冷蔵庫開けたら昨日は無かったチョコレートを発見。

しかも！ 封は開いている！

これをつまみ食いしない手は無いよ。

いただきます。

……の、前に。

念のため賞味期限確認しておこう。

去年のだったりしたら大変だし。

《2011, 02》

……ま、大丈夫だ！

いただきます。

「あつ！ ねーちゃんずっこい！ オレにもちよーだい！」

「え、賞味期限過ぎてるんだよ。あたしは処分してるだけだもん」

ザ・言い訳。

「消費期限は過ぎたら食っちゃいけねーけど賞味期限は大丈夫って

習ったぜ？」

………なんだろう。

あたしが前にやったのと同じ言い訳をする。こいつ。

「ねーちゃんに」

「いつ!?!」

あたしは教えた覚え欠片もないんだけど。

「あ、正しくはにーちゃんに。ねーちゃんの言い訳ノートの的なモノ

を見せてもらったんだ」

何だ、そのあたしの言い訳ノートって。

兄貴、あんたはストーカーか？

「あ、ちなみに勝手に聞こえてきたものを書いただけだからストーリーじゃねーってよ」

純兄の地獄耳イ!

「はい、つてな訳でちよーだい」

「分ーった分ーった」

残り少なかつたのになあ。

「お姉ちゃん〜、雛あられ見つけたよ〜!」

……あ〜っ!

あたし、今年雛あられ食べてない!!

「よし食べよう」

「ちなみに賞味期限は昨日だよ〜」

うん、今食べてたチョコレートよりずっと安全だ。

「チョコあられプリーズ」

「岳お兄ちゃん〜、自分で探してよそれ位〜」

そーだそーだ。

「えー」

「レモンあられ口いっぱい突っ込んでんじゃうよ〜?」

「ヤメテ」

よし、食べよう。

ちよつと残つたら部屋に溜め込もう、うん。

ハムスターを見習って!

「忍、テメエ部屋に菓子持ち込むの止める。絶対忘れるんだから」

「純兄も食べる?」

「……テメエ人の話聞いてんのか?」

うんにゃ。

「にーちゃん、食うの食わねーの」

「食う」

食べるんだ。

「あ〜!」

『?』

「クッキー発見〜！」

『でかした！』

何で純兄は『でかした』言ってくれないんだろう。
ノリが悪いなあ。

「からし味って書いてあるよ〜」

そんなのあるんだ。

んじゃ、まあ試しに……

『頼んだ、岳（お兄ちゃん〜）』

「何でオレなんだよ!？」

だって純兄は実験台になってくれる訳ないし。

あたしは絶対ヤダ。

「光は」

「え〜、可愛い妹を実験台にするの〜？」

「……………分〜ったよお」

いや〜、損な位置にいるよね、岳。

ポリッ

「……………辛ッ!」

まあそりゃそうだよね。

「ありゃ？ 何か中に入ってる」

「何かあって〜？」

「……………紙？」

紙!?

クッキーに!?

不良品!?

「え〜っと……………ハズレ……………って何だよこれ!!」

「あ〜、これ、おみくじクッキーって端っこに書いてある〜」

おみくじって。

「つまり、おみくじクッキーからし味ってことか!」

「でも不思議なのが〜、これ、手書きなんだよね〜」

……………手書き?

「光、まさかこれお前が作ったのか？」

「あは、ばれちゃった！」

……何のために作ったのがサッパリ分からん。

とりあえず一言。

知らぬが仏って正しいね。

じゃ無きゃ岳は絶対に食べなかったからさ。

34 つまみ食いをしよう(後書き)

おみくじクッキー。

ちよっと作って見たかったりします(笑)

ころろくん、ころろくん。

あつ、目が回って気持ち悪い。

ひかりりです。

学校から帰ってきて宿題してやることが無くなったからころろんしてるのです。

死神トリオ今日帰って来るはずなんだけどな。

ころろくん、ころろくん。

はうう、目が回ったよ。

「ひいねえっ！」

「わっ！」

ころころころころころ。

「天ちゃん。お帰り。」

いきなり体当たりなんてしてくるから部屋の隅っこまで転がっちゃったよ。

「光ねえっ！ ただいまだぜー！」

「……ただいま」

「剣くんも斬くんもお帰り。」

何で窓から入ってくるのか教えてくれたら嬉しいな。

「そういえば、用事ってなんだったの？」

聞いてないんだよね。

一方的に言っつて一方的に話きられちゃったから。

「え？ 入学試験」

「……はい？」

空耳かな？

入学試験って聞こえたような。

「だから、入学試験だつて！」

「天ちゃんなら分かるけど、剣くんと斬くんも？」

「うん」

あれ〜？

私の記憶が正しかったら皆一つずつ年が違ったような気がするんだけど〜……。

「教師をちよつと　　して俺等も受けられるようにしたんだ！」

……教師をどうしたって言ったの〜？

なんだかいや〜な予感しかないんだけど〜……。

「いや、だから教師をちよ〜つと脅して……」

「脅すつて〜！　何したの〜!？」

「え〜つと……斬のクスリを目の前で動物実験させて次はお前にかけるぞつて言ったり、校長の浮気現場を撮つて奥さんに見せるぞつて言ったり、裏で金受取つて色々やつてる奴の証拠テープを作つてばらすぞつて言ったり、剣が水を頭にすっぽりかぶせて首を縦に振るまで放置したり、私の鎌で脅したり……」

……聞かなきゃ良かった〜！

この子達本とに子ども〜!？

「ちなみにそれでも受けちゃダメ言う人にはしっかりと言つたとおりの事をやつた」

うわ〜……教師さん〜、がんばれ〜……。

「有言実行!」

う〜ん……この子達受かつたら最凶の生徒になることは間違いないね〜。

「光ねえ、さつきまで何してた？」

さら〜つと話題変えたね〜、この子〜。

「ころろんしてたよ〜」

「何だ？　それ」

「床の上をころころするだけ〜」

この部屋畳だから気持ちいいんだよね〜。

目が回ることを除けば〜。

「ころろん」

剣くんさつそくやつてる〜。

やったこと無かったからかな〜？

ころろん〜、ころろん〜。

「……目、回る」

「天井が回ってる〜」

天ちゃん〜、それは目が回ってるんだよ〜。

ころろん〜、ころろん〜。

「ただいまッ！」

あ〜、岳お兄ちゃん帰って来た〜。

「お帰りッ！ ただいまッ！ 岳にい！」

「わぁっ!?!」

剣くん速いな〜。

あつという間に岳お兄ちゃんの所行っちゃった〜。

「岳お兄ちゃんお帰り〜」

「お帰り、ただいま、たけにい」

「……お帰り、ただいま」

「た、だ、い……ま」

岳お兄ちゃん……。

剣くんの頭突きもろに受けちゃったんだね〜。

36 たつまきー

「……しーねえ、これで何するの」

斬が指すのは500mlペットボトルとビニールテープ。

「暇つぶし！」

もう暇で暇でしょうがなくて、何かそこら辺にあったこれで工作でもしようかと。

……ガキとか言っな。

ふつつーの中二は休みの日部活以外に何をするのか教えて欲しいよ。

皆家で暇するに決まってる！

と、あたしは勝手に思っている。

「……はさみ、いる？」

「あゝ……、うん、いる。ありがとう」

はさみの刃を開いてこっちに向けてないで欲しいんだけど。

さて、始めますか。

「……何作る」

考えていると思っていたそのアナタ！

あたしがそんなこと考えてから行動するわけが無いでしょ。

「んゝ……、とりあえず水入れて……」

雨水タンクから。

どうせ後々捨てちゃうんだから新しい水入れるなんて勿体ないし。

ジャーツ 水を入れる音

ごぼごぼごぼ ペットボトルを逆さにして水を出してる音

ピキーン 出た水が凍った音

「なんで凍ったの!？」

「……凍らした」

あなたの仕業かい。

この水を凍らしたり氷を操ったりの斬の能力、ちょっと羨ましか

ったり。

「うーん……何作ろ……あ」
思いついた！

ペットボトルに水を半分より多めに入れて、
空のペットボトルをさかさまにして水を入れたほうの口と空の方
の口をくっつけて、
つなぎ目のところをビニールテープでぐるぐるぐるぐる巻いて
っど。

出来上がりー。

「……それ、どうするの」

「逆さまにして、何かかき混ぜるみたいにくるぐる回すと……」
プチ竜巻！

何か見てて楽しいんだよね、竜巻って。
ホンモノは怖すぎるけど。

ピキッ

「あ、凍った」

凍ったやつも綺麗だなー。

「貸して？」

「ん、ほいな」

何すんのかな。

「ごぼごぼごぼ……」

溶かして、下に集めて……。
くるっ

ひっくり返して？

ごぼごぼピキッ

おー、泡入り氷の完成。

「斬、しいねえ、何やってるんだ？」

「……あ、天」

氷溶かして、渡してみる。

「何だ？ これ」

ばしゃばしゃばしゃばしゃ

振る。泡が沢山出来た。

ぺいつ ひゅるる……ばしゃっ

投げて、キャッチ。

あー、何個か作ったらジャグリング出来るかな。

……ちよつと難しいかな。

「……？」

結局分からなかったようです。

「こーやるんだよ」

くるくる「ぼ」ぼ「ぼ」ぼ……

「竜巻！」

うわう。突然大声なんか出すからびっくりした。

竜巻好きなのかな？

「あーッ！ 見つけたぜ！ 天、斬！」

ぎゅっ

剣は斬に抱きついた！

「離れる、凍らす」

「それはご勘弁を！」

あ、離れた。

「はい、剣」

「……ん？ 何だこりゃ」

頭に乗せてみる。

あつという間にバランスゲームに。

「あつあつあつ」

ポトツ

落ちた。

バランスとるの下手だねー。

「剣、そうじゃないって」

「え？ 違うのか？」

マジボケ！？」

「えー……と、じゃあ」

片手に持って、腕を曲げたり伸ばしたり。

「ダンベル違うから」

「あ、やつぱり？ 軽すぎるよな」

これも本気だったらどうしようかと思った。

「こうするんだって」

竜巻！。

……何か天上手い。

「むっ！ 水流渦！」

剣の手の上に水の竜巻が。

いや、張り合わなくていいから！

37 かつぷけーきっ

「忍、桜に明日何かお返しするとか言っただけだったか？」

「……………？ ……………？ …………… あっ！ 明日って14日！？」

「忘れてたのかよ……………」

わーッ！ 完全に忘れてたよ！

それこそ欠片も覚えてなかった！！

危なく、バレンタインも忘れてたのにまた忘れる所だった。

よかった、思い出せて。

「純兄、感謝」

「ん」

さて、何作るかな。

ゼリーは絶対持つていく途中で崩れる。

つてかジュース無いし。

ケーキ……………食べたい。けど面倒。

チョコは……………湯せんとか面倒。

まず買いに行かないと無いし。

おかーさんのつまみ食い用ならあるけど。

クッキー。絶対粉まみれになる。

後寝かす時間もいるから結構時間かかる。

ん、どーっすかな。

「あれ〜？ お姉ちゃん何か作るの〜？」

「うん。カップケーキ」

カップ無いけど紙コップでいいし。

後は簡単だし。

「じゃ〜、私紙コップ切つといてあげるね〜」

「ん？ いいの？ ありがとう。一個あげるね（きつと）」
「うん〜」

……あ、光の奴、これが狙いだっただな？

ま、いや。手間が省けるわけだし。

えーっと、卵（一個）を割って崩して混ぜて、

砂糖（大さじ二）を入れて、混ぜて。

牛乳（50？）を入れて、あわ立てるように混ぜる。

ベーキングパウダー（小さじ二）……あれ、何処にあったっけ。

引き出しその一。

麵棒、菜ばし、その他諸々が整理されてんだかされてないんだかよく分からん状態が入っていた。

うん、無いね。

引き出しその二。

ラップ×2とオーブンペーパーとアルミホイルは整理されて、後ビニール袋が適当に入ってた。

うん、無さそうだ。

引き出しその三。

鰹出汁やら炭酸（粉）やらドライイーストやらが……って、

「ドライイースト！？ 冷蔵庫入れるよおかーさん！」

しっかり《冷蔵庫で保管してください》って書いてあるよ!？

とりあえず冷蔵庫のドアポケットに突っ込んでいた。

今晚、おかーさんがドライイーストを探して引き出しを何度もあけたり閉めたりすることをあたしは知らない。知る気も無い。

あ、あったあった。ベーキングパウダー。

で、小麦粉（100g）とベーキングパウダー一緒にふるいにかけて混ぜて……。

はい、生地かんせー。どどんぱふぱふ。

「はい〜、お姉ちゃん〜」

「ありがとう……って、三つでいいんだけど」

六つもいららないから。

三個分しか作ってないし。

「え〜」

「え〜じゃなくて」

「お姉ちゃんと桜ちゃんと私と死神トリオのぶんだよ〜？ ピツタリでしょ〜？」

……死神トリオの事とか頭の片隅にも置いてなかったんだけど。

「死神トリオの分はひか……あ、いや、なんでもない」

危ない。光にトリオの分任せる所だった。

「分かった〜、斬くんと作るからレシピ貸して〜」

「アンタはレシピどおりに作らんだろ！」

って言うか何で斬となの!?

キングゴブラも真つ青な毒を作る気か!?

……流石に無いかな、そこまでは。

「ぎ〜んく〜ん〜」

……本気でやる気だ。

「天ー！ ……ついでに剣！」

「……何」

「何だ？」

「オレはついでなのか!？」

……できれば扉から入ってきて欲しい。

何で窓からなの。

「斬くん〜、カップケーキ作る〜」

「……かっぷけーき？ クスリ？」

違う違う違う。

「天と剣はあの二人がこれ以外のものを入れそうになったら全力で阻止してね」

「……分かった」「……りよーかい」

おお、何か暗くなった。

「アンタ等が食べるやつだから」

『分かった!!』

わう、すつごいやる気になってくれたよ。

やる気、というか必死？

二人と光にレシピを渡して、よし、あたしは再開。

紙コップの半分から上を切り取ったもの（以下カップ）の内側に
サラダ油塗って、

カップの半分より少し多めに生地入れて、

大き目のラップをふわんってかけてレンジに入れる。

一分位で取り出してくし刺して余計なもの（どろっとした生地）
がついてこなければそれでよし。

「あ、チヨコいれりゃよかったな……おかーさんの」

ラップかける前にチヨコ入れるとチヨコケーキになるし。

「待て待て待て待て！ お前等何を作る気だ!？」

……聞こえないよー。

天の叫びなんてあたしには聞こえないよー。

斬の手の上に乗った赤紫色（気泡あり）の小瓶も光の手に乗って
る痛んだぼんかんも見えないよー。

剣の足元凍ってるのも見えないよー。

さーて、後二つもちやつちやと作るつと。

数分後出来た光たちのカップケーキは天と剣の頑張りにより普通
な出来だった。

天と剣は……うん、もんの凄く疲れた顔してた、とだけ言ってお
こう。

38 頭痛い

「じゅーんにー」

「あ？」

「おはよ」

それだけかよ。

「っはよ」

取敢えずは返しておく。

返さないと返すまで言い続けるから。

純だ。

「ねー純兄、頭痛いー」

……俺に言っただうすんだ。

「風邪か？」

「さー？」

熱……は、無い。

と思う。

「純兄、手、つべたいよ」

「ほっとけ」

「いたーい。ねー、どーやったら治る？」

「知るかよ……」

原因も分からないのに。

「だいたい何で頭痛くなっただんだよ？」

「それが分かっただら苦労しないよー」

それもそうだ。

「多分昨日ゲームしまくったからだと思っただけど」

「分かってんじゃねえか。原因それだろ」

「たまにゲームとかパソコンとかしすぎたら痛くなるんだよな。」

「ねー、どーやったら治る？」

「……寝とけ。起きたら治ってる、かも」

「今日学校なんだけどー」

「授業中にも寝とけ」

一部どころか二部三部くらいは聞き流してんだから同じだろ。

「今日三時間目からは卒業式練習だよ？」

「半分意識飛ばしとけ」

歩きながら出来んだからわけねえだろ。

「下向いてたりしてたら学年主任のあの教師に怒られる」

……あいつな。

教師をあいつとか言ったらいけねえんだろうけど。

学年主任、英語担当の池中……何つつたかな。いけなか

説教が長い、ほかの奴も巻き込まれるで何か嫌われてる教師。

……一部アレはツンデレで恥ずかしがってるだけだとかいう奴もいるけど。

いい年したおっさんなんだからそうでないことを願いたい。

「ねー、どーしたらいい？」

「まず着替える」

パジャマから。

「何に？」

「はぁ？ 馬鹿か、制服に」

「……ふわーい」

裾を引きずりながら部屋に戻る忍。

……いつも思うけど、ぶかぶかだな。

ごん

「いたッ!？」

「プッ」

「純兄、笑わないでよー!」

「ああ、悪イ」

扉開けようとしてその扉にぶつかる奴なんか居るんだなと思って。

いや、何度か見たことはあるんだけど。桜のを。

忍がやると……何かな。違和感があるような無いような。

「純兄ー、まだ痛い」

着替え早……。

「とりあえずいつもどおりしてたら忘れるだろ」

まあ無いと思うけど。

「んー、分かったよ……」

ごん

「いた……」

数分後、洗面所の方でそんなのが聞こえた。

「忍ねえ？ どーしたんだろ」

「……下に落としたピン拾おうとして洗面台に頭ぶつけた」

……またか。

ごん

「いった！」

今度は何だ。

「立ち上がるうとしてまた洗面台に頭ぶつけたみてーだ。ねーちゃ

んらしくねーな」

「可愛かったけどねー、ねー、天ちゃん」

「うん。しいねえが頭ぶつけるなんて始めて見た」

ごん

「いた！」

「今度は何だろー」

……忍、まさか頭痛は頭をぶつけたことが原因じゃ……。

38 頭痛い(後書き)

忍は具合が悪いと稀にドジっこになったりします。
あまりに稀過ぎて皆忘れていきます。

39 ちょっとおせーて？

「純兄ー」

「あ？」

「英語教えて」

「……………は!？」

間違いない、明日は雪だ。

いや、まさかの巨大台風かもしんねーな。非常食あつたっけか？

岳だ！

今さつきねーちゃんがオレ等の部屋に入ってきて、最初に戻る。

「ちよつと忍。もうちよつとこっち来い」

「えー？ なんで？」

「いいから来い」

「んー。分かった」

……………大分前に見ただけだ。

こーゆー時相手がにーちゃん以外の男だったら『なんで』を連発するんだよな、ねーちゃん。

女でも全く知らねー奴だったらそうすんだけど。

オレが言っても『なんで』連発するのはちよつと悲しいな……………。

これを見るとさ。

「……………熱……………ねえな……………昨日の頭痛まだ続いてんのか？」

「続いてたら勉強しようなんてしないから」

確かに。

「……………という事は精神科か？」

「酷いな！ 何でそうなるの!？」

だってねーちゃんが勉強しようとしてるから。

余にも珍しすぎて。

「何でつて……………勉強マトモにやるつとしないデメエがやるつとしてんだ。驚かずに居られるか」

「酷い」

「で、何でまた……」

「え、何となく」

「いっつもねーちゃんが何かする時は何となくだよな……」

「……………病院行って精密検「いないから！」んで？何で英語なんだ」

確かに。算数……………じゃなくて数学って難しいんだよな？

小学の先生曰く。

「ふう、やっと病院から離れてくれた……………。何で英語？何となく」

また何となくかよ……………。

「では無く。珍しく」

自分で珍しくって言うてるし。

「英語は学校では欠片もやる気無いから」

え、そんな理由かよ！

「分かった。それは分かる。だから英語はテメエ9割9分9厘ほど聞き流してんだろ？」

にーちゃんそれで納得するのか!?

しかも9割9分9厘って殆ど全部じゃねーの。

「純兄惜しい。10割」

全部かよ！んな訂正いらねー！

「あ、そ。まあ、アレじゃな」

「うん。アレだから」

「アレって何だよ！」

あ、声に出てた。

『英語担当の教師』

そんなに綺麗にハモらなくても。

ってか先生アレ呼ばわりか……………ドンマイ知らない先生。

「アレが担当じゃな……………俺も7割がた聞いてねえ。家で出来るし」
進○ゼミなー。

ねーちゃんもオレも溜めちまつてるけど。

「……あれ？」

「家じゃ発音とかは分かんねーんじゃねーの？ にーちゃんパソコン使うのは調べ物くれーだし」

「発音？ 親父。あの教師は発音悪いから。……たまに来る外国人教師のなら聞くけど」

「あー、マリア先生か。」

「父さんは……あ、そうか、昔アメリカ行って勉強したとかでぺらぺらだったな。」

「っつーか英語の教師って発音悪くてもなれるんだな……。」

「はい、とゆー訳でおせーて？」

「別に教えるのはいいけど……何処を」

「こないだねーちゃんのテスト見してもらったけど間違いの殆どがスペル間違いとかaが抜けたりとかだったな……。それで10点も落としてた。もったいねー。」

「……発音？」

「何で疑問形なんだ」

「何でもよかったとか？」

「これ、ちよつとわかんなくてさ。勘で書く時発音って大切なんだよー」

「勘で書くなよ……単語くらい覚える」

「どちらにしても発音は大切でしょ」

「親父は？」

「まだ帰って来てない」

「……にーちゃん、父さんにやらせようとしたよな、今。」

「分かったよ……」

「とゆー訳で、ここ、よろしく」

「ここって……agreedか？」

「……あぐりーど？はい、わからん。」

「あ、それで良かったんだ。こっちは？」

「advertiser」

うん、さっつっつぱり分からん。

「advertisise……advertisise……advertisi

se……よし、覚えた！ 多分」

多分って付けるなよそこに。

それにしても……、

英語ってややつこしそうだなあ。

40 雪、そして本とに居たのかこんな奴2

ひゅおおおおおおお……

わゝ、寒そゝ。

光ですゝ。

今ねゝ、久し振りに雪が降ってるんだよゝ。

梅の花は大分咲いてるしゝ、昨日も温かったのになゝ。

「おゝ、さぶ。つべてー」

「お帰りっ岳にい！」

「岳お兄ちゃんお帰りゝ」

剣くんって岳お兄ちゃんに懐いてるよねゝ。

いつつも真っ先に飛んでいくんだもんゝ。

「……わあゝ！ 真っ白オバケゝ！」

「オバケ違う！」

だつてゝ。

頭もランドセルも服も雪がいっぱい積もってるんだもんゝ。

あゝ、解けちゃったゝ。

暖房入ってるからねゝ。

「あれ？ 斬は？」

「あそこ」

天ちゃんが指すは家の天井ゝ。

の少し右らへんゝ。

ここで言う右は南ねゝ。

「……？ あ、外か！ ……すげー。よく出られるな」

岳お兄ちゃん指された所（外）を見ていますゝ。

確かによく外出られるよねゝ。

雪の竜巻が出来ちゃいそうなほど風強いんだよゝ。

風邪引かないかなゝ？

「斬は雪男同然だから」

天ちゃん、雪男って毛むくじやらないイメージが強いんだけど。どっちかって言うと雪女男の子バージョンって感じだね。

和服だし。……黒いけど。

「寒いーついでに痛い。純兄何とかして」

「無理に決まってるだろうが」

「あ、お姉ちゃんと純お兄ちゃんも帰ってきた」

わ、岳お兄ちゃん並かそれ以上に真っ白だ。

ハンカチではたいてるみたいだけ。

「……お帰り」

「あ、斬ただーいまっ」

斬くんはお姉ちゃん達に懐いてるよね。

あれ？ お姉ちゃんが斬くんを懐いてるのかな。

お姉ちゃん、いちいち斬くんを高い高いする必要は皆無に等しいと思うんだけど。

無表情崩れてないし。

神谷さんと菜美ちゃんは凄く喜ぶけどね。

……菜美ちゃんと斬くんって同い年だったような気がするけど。

……。

全然違うよね。不思議。

「斬、外で何してたの？」

「……雪、見てた」

「へっつ、顔に当たったりしたら痛くない？ あたしすっごく痛かったから後ろ向きで歩いたんだよ。途中」

……お姉ちゃんって人目あんまり気にしないんだね。

「もちろん人通りの少ない所でだけ」

あ……、気にしてたんだ。

「人通りの多いところでは俺を盾にしゃがんだからな」

それで純お兄ちゃん少し不機嫌そうなんだね。

……なるほど、今度岳お兄ちゃんを盾にしてみようかな。

何のためには不明。

「……………あ！　そういえば何か不審者出たんだって。気をつけてね、特に光」

「何で私なの〜!?!?」

「一番逃げ足遅いだろうからさ。刃物もって追い掛け回す若い男だつて」

……………否定できない〜。

お姉ちゃんは本気出したら速いし〜……………短距離は〜、だけど〜……………

純お兄ちゃんは走るの速いし何故か隠れるの上手いし〜。

岳お兄ちゃんは逃げる時は異常に速くなっちゃうし〜。

う〜ん確かに一番危ないのかな〜。

「あ、ちなみにそいつは身長143cm、……………うあ小っちゃ。体重92キロ、血液型は海老……………じゃなくてAB型で星座はうお座。趣味は本とか漫才とか落語とかその他諸々。黒ぶち眼鏡かけてて黒いリュック背負ってる。息遣い荒くて汗だらだらの要はずんぐりむっくりの……………本とに居るのかこんな奴って野郎だ。分かった?」

「分かった〜」

本とに居るんだね〜、そんな人〜。

「ちよつと待て。テメエなんでそんなに詳しいんだよ」

「あたし目撃者」

「は!?!? ……………だからってそんなに細かく……………」

「ちよつと盗聴器を仕掛けて」

「盗聴器もつてねえだろ」

「ばれましたか」

「ちなみに目撃者って所は」

「あー、それも違う」

何だ〜、ウソか〜。

本当にそんな人がいるなら見てみたかったのに〜。

「本当は短ランボントンに「見てねえんじゃ無かったのか」これは昨日見かけたんだよ」

……短ランにボンタン〜？

アレかな〜？ 昔々の不良さんが着てたっていうやつ〜？
どれ位前なのかは知らないけど〜。

「そんなのが居たのか？」

「うん、これは本と。昨日卒業式だったでしょ？ 校門の前に立
かけてある《第四十回卒業証書授与式》って言うのあるじゃん。あ
そこで写真撮ってたんだよ」

不良さんが〜？

「……本とに居るんだな……そんな奴」

「でもま、本とに居るのかって行ったら死神トリオもそうでしょ。」
『？』

トリオさん〜、そんなそろって首傾げなくても〜。

死神って殆ど信じられてないんだから〜。

「雪好きで実験……危険物の調合が好きな死神はもつと珍しいか
もな……」

激しく同意します〜。

斬くん〜？ 首傾げてるけど〜、

君のことだからね〜？

41 いじめというのがあったらしい

「おい、死ねよお前え」

その瞬間、まさに空気が凍りついた。

……あたし達五人の周りだけだけど。

忍です。

今日も今日とて休み時間、あたし、桜、篠、純兄、清は集まって話したりなんたりしてました。

そこに……えーつと……みずたにとおるクラスメートAがやって参りまして、純兄の席の後ろ、……確か水谷亮みずたにとおるとか言ったつけ。

に、最初の台詞を言ったわけ。

水谷は異常なまでに大人しい……と言うか無口な人なんだよ。

ちよつと質問、これっていじめに入りますか？

あたしは入ると思います。

「おい、コイツがテメー等になんかしたのかよ？ なんでいきなり死ねなんだよ」

お、清が反論。珍すぎるほど男前だぞー。

「あん？ ひゃっははは！ おい、コイツこんなことにマジギレしてるぜ！」

「馬鹿だろ。こんなのいちいちキレんのか？」

あゝ、殴りてえ。

殴っちゃっていいよね？

うん、良いということにしよう。

どかつ

「くっつ！ あんだよつ、死ねよ！？」

「死ねと言われて死ぬ奴なんていないよ」

「ほんとく、そんなの居たら会ってみたいよお」

桜が参戦！

「どーだかな！ いじめで自殺する奴とか居るらしいし。それって死ねって言われたっつー事だよな!？」

「忍が言ってるのは『死ね』と言われた時点で死ぬ奴だと思っけど」
ぴーんぽーん。さすがしーちゃん。分かってるう〜。

言葉は凶器、確かにそれで心が傷つくことあるだろうけど言われてその瞬間シヨクク死する人なんて居ないんじゃない？

「……ちっ、屁理屈こねやがって……」

おお〜、引き上げてく。

ふふん、屁理屈は強し！

「おぼえてるよ？」

「いいえ、忘れます。誰かさん？」

クラスメートの名前さえマトモに覚えぬ奴がそんなこと覚えるわけが無いでしょ？

それにしても……『おぼえてるよ』って雑魚の捨て台詞多い順に並べてベスト3に入るくらいベタな捨て台詞だよ〜。

初めて本とに言う人見たよ。

「……………どうも」

……………あ、水谷のこと綺麗サツパリ忘れてた。

「どーいたしました!」

「清、アンタ最初しか参戦してなかったでしょ」

「ばれたか」

「ばれるも何も。」

「……………ほっとしてくれた方が良かったのに……………」

「聞こえてるよ？」

「おい、テメエどういう意味だよ？」

「あ、純兄参加。」

「……………! ……だって、巻き込まれるだろ……………」

ねー水谷、今びっくりしたけど普通に聞き取れる範囲内の独り言だったからね？

「巻き込まれる〜？ 何に、何で、どういう理由で？」

「桜、何でとどういう理由では同じ」

「あ……このほうが、テンポいいでしょ！」

最初の『あ』って聞こえてたって。

「……いじめ。反論なんかして……おれの見方なんかするから」

「やだな、あたしは見方するつもりでやったんじゃないんだけど。

何かあいつ等ムカついたんだもん」

「……………変な奴」

変な奴ってどーゆー意味だ。

いや、あたしが変な奴ってのは知ってるよ（開き直り？）

ここで言う変な奴ってどーゆー意味なんだって思ってる。

「水谷、これは元が何か歪んでるからそれでいいんだ。逆にマトモになったら怖え」

「やーい、歪んだ奴の兄貴ー」

「……ほらな」

「……………分かつ……た？」

これでいいのかって顔してるんだけど、純兄？

「あっ！」

「五月蠅い」

「ちょー！？ 篠それはねーだろ！」

しーちゃんナイス。

「で、どうしたのお〜？」

「ああ、桜は優しい……癒し「聞かなきゃ良かった」ちょっ！？」
ばっつ

「さっさと話せ」

「純くんの子ヨップ、見事に脳天に決まりました！」

桜の実況は癖なの？

「あー、実はな、修学旅行の民泊グループあるじゃん？ 4 / 5人のグループのやつ」

「もう提出の締め切り過ぎてるけど。三日くらい前に」

あたしはもちろんしーちゃんと桜……後もう一人は現在進行形で

不登校の人とだよ。

『で？』

「オレ等まだ三人しか決まってねー訳よ、水谷入らねー？ 決まっ
てなかったらだけど」

あー……そーゆー事ね。

……清と純兄とも一人誰？

ま、そのうち分かるか。

「どーする？」

「……それでいいよ……（先生に頼まれたかしたのかも知れないけ
ど……）」

何か今何か言いたそうな顔してたけど？

ま、いっか。

42 ガキな忍

「……あれ」

「どうした？」

「上靴そーしつ。宝探しゲームかな」

「……いや、絶対違う。」

いじめの定番中の定番、靴隠しだろ。

純だ。

今は大体8時。

朝練の無い部活、または帰宅部にとっては来るには早い時間だと思っ。

「……俺等は帰宅部だけど、いつもこの時間に来ている。」

「純兄、探さないでね？ あたし一人で見つけてやるんだから……
つて、あつた!？」

見つかるの早いな。

靴箱の、普段使われていない一番下の段。

「もーちよつと手ごたえあつてもいいのに……ねえ？ 純兄」

「……やせ我慢なんだかポジティブ過ぎるんだか」

「何でやせ我慢が出てくるの？」

「……はあ」

「……地味に、傷ついでる？」

演技は上手いけど……分かりやすい。

こてん、と首をかしげるのは一瞬だけ。

すぐに階段へ向かった。

「じゅーんにー、早くしないとのかかるよ？」

「やめる。別に重くねえけど。チビだから」

「酷いな、あたしは大体真ん中らへんだよ。多分」

確か150ちよつとだった。

「おはよ〜」

「あ、おっはよー、さーちゃん」
ぎゅむ

「……純？ 忍どうしたんだ!？」

「清、どーゆー意味？」

清を睨みつける忍。

地獄耳だな……人のこと言えねえけど。

「でもどうしたの〜？ 急に抱きついてきたりして……」

「だって寒かったんだもん。昨日も雪降ったしさ」

「大丈夫、今日は昨日よりは暖かくなるって天気予報で言ってたから」

「あ、そうなの？」

天気予報くらい見ろよ……。

朝ちゃんとテレビついてたろ。

いつもの事だけど。忍がテレビ見ないのとか、テレビがついてるのとか。

「昼はね」

「えー、午前中は寒いのか？ じゃあ体育（三時間目）ん時もくっつくよ、さーちゃん」

お前はいつから抱きつき魔になった

あと何故桜の呼び方が変わったる？

「あはは〜、今日はわたしがくつついちゃおうかな？」

「やだな、くつつきに入ってたほうか暖かいんだよ、あたしが」
自己中……。

「なー純、やっぱり忍がガキっぽくなってる」

「あ？ いつもだろ」

「いや……いつもにも増してと言うか」

「そういう気分なんだろ、あいつの性格なんて相手と気分で変わるから」

これが普通だと思うけど。

「へえ？ ふーん、ま、いつか」

忍が気がつかせないようにしてるんだから、適当にはぐらかしておく。

下手に忍の内面に手をつ突っ込んでみる。

忍のスルースキル（？）が上手く作動しなくなる。

ほおっておくのが一番いい。

勝手に元に戻るから。

……つまり、忘れる

普通こんなのを簡単に忘れる奴なんて居ないんだろっけどな……。

「忍、何でわたしばかりなの？ 篠居るじゃない」

「さーちゃんに嫌われたあ」

「そういう意味じゃなくて！」

内面を出さない代わりか、いつもより絡む。

桜と篠は、それを分かっているみたいだった。

「しーちゃんはねー、さーちゃんより筋肉あるんだよ。さーちゃんは柔らかいんだもん」

「悪かったな」

「やだな、誰も悪いなんて言ってる無いのに。怒らないで？」

「はいはい」

「適当に流さないでよ！ しーちゃん冷たい」

「ほっとけ」

「はい」

訂正。ガキになる。

まあ、長くて半日くれえだけだな。

それまでは、二人に頑張ってもらおうか。

43 送辞！？

……およ？

なんだろ、このプリント。

今朝無かったのにな。

忍でーす。

ブツ〇オフ行って帰って来たら岳達の部屋の前にプリントが落ちてたんだ。

……誰か拾えよ。

《卒業式 送辞》

あゝ、昨日は小学校卒業式だったっけ。

ちよっと読んでみよ。

《1春 2（全）夏》

……うん？

（全）って全員って意味だろうけど何故に夏？

《3秋 4（全）冬》

何故四季を全て言う！？

本とに送辞かこれ！？ いきなりだけど。

《5色んな日差しがあります》

……最初の五行これで潰すか。

《6春の日差しは温かいです》

そう繋がるんだ。

で？ とか聞きたくなるけど。

《7卒業生の皆さん 8ご卒業 9（全）出来ますか？》

おい！？

挑発か！？ それを全員で言うか！？

それとも涙を流しながら言うって行くなアピール？

それは無いか。

《10するのなら 11止めはしません》

……止めないのね。いや、止められても困るだろうけど。

《12(全)覚悟しといて下さいね》

怖いよ!? しかも って何!?

《13それでは 14少しだけ 15一年を振り替えさせていただき 16ます》

何これ!? 16番悲し!?

《17裏山オリエンテーションでは 18一年生と手をつなぎ 19振り回されていましたね》

……ドンマイ、今年の卒業生。

小さな子とはそんなもんだ……。

《20体育祭で 21一番盛り上がった》

確かソーラン節だったかな、今年は。

《22(全)玉入れ!》

ええええええええ!?

児童会競技!?

《23体中に玉を受けながらも 24カゴを支え続ける姿に 25感動しました》

いや、カゴ放されたら困るから。

……どんどん卒業生が可哀想になつてくるな、これ。

別の意味で泣いた人は何人いるだろう。

《26水小祭りで 27一番の人気を誇った》

水小つて水ヶ丘小学校の略ね。

水小祭りは4〜6年生がコーナーを作つて1〜3年と4〜6年の前、または後半の人がそれを周る文化祭? みたいなもの……かな。

何故かオバケ屋敷は六年しかやつちやいけないんだよ。

《28オバケ屋敷! 29素顔で出来たことが 30さらに人気を集めました》

……素顔で出来たオバケ屋敷?

どんな顔をしてるんだ卒業生……。

《31それを見て 32私達は 33捨て身になることを 34知

りました》

捨て身で、おい。

《35色んな 36辛いことを 37乗越えて》

急に話変わったね？

って言うかその“辛いこと”って一番の原因はこれを言ってる5年生じゃ？

何かそう思える。

……ってか、思いつきり思っちゃうんだけど。

《38皆さんは 39本当に 40強くなれましたか！？》

そんなに力いっぱい聞くな！ 可哀想だから！ 本気で！

《41それはともかく》

ともかくしてやるな！

《42卒業生の 43皆さん 44さようなら！ 45（女全）さ

ようなら！ 46（男全）さようなら 47（全）さーならっ！》

無理やりまとめたな！？

と言うか一番最後だけ適当だな！？

……あれ？ まだ続きがある……。

《48と見せかけて》

おい！ 見せかける必要ないでしょ！

《49（全）さよーなら！ グツバ！》

見せかけ違うじゃん……。

ってかグツバで。適当な……。

あれ、右下に手書きで何か書いてある。

《ボツ》

……良かったね、卒業生。

良かったのか？

44 じつこ遊び……か!?

ひえーっ!

岳だー!

暇だったから漫画を読んでんだけど、そばで死神トリオが某少年漫画ごっこ(しかも色々ごちゃ混ぜ)をしている。

そんな恐怖の状態にオレは陥っているのだー!

ただのごっこ遊びならこんなにビビったりしねーけどな!?

これはもはやごっこじゃねー!

だってな、だってな!?

家にある某少年漫画の技、リアルでやってんだぜ!?

炎の塊やら電撃やらごっこ来そうで怖えよお!

一応ねーちゃんがとっさに覚えさせた、これまた某少年漫画をまねた結界の中でやってるからまじだけど……。

透明な結界だからごっこ来そうで落着いて漫画読めねー!!

……ってな訳で、オレは漫画を読むのを諦めた!

「あ、これ面白そーだ。ちょっとどいてるよー……大〇字!」

おー……。

ちゃんと炎が大の字になってんじゃねーか、すげー!

「ハイ〇ロポンブツ!」

びしゃーっ!

あ、あつという間に消化。カ〇ックスもびっくりな勢いだつたな

……。本と、結界を覚えさせたねーちゃんに感謝だぜ。

これが無かつたらどうなつてた事か。想像したくねー。

「斬、何かいいのあつたかー?」

「……天〇」

「のおうえあ!? あちあちあちあちあち!! 何だこれ!?

黒い火!? 消えねー!?!」

うーわー、斬、お前は剣を焼き殺す気か!?

しかも何で万〇鏡写〇眼必要な術が出来るんだよ……。
分からない人に一言謝罪。ごめんなさい。

「……消した、まだ熱い?」

「う……いや、大丈夫。大丈夫だから! 氷、仕舞え!」

しかも氷が出てきた所つて剣の真上だしな……。

絶対頭の上に落とす気だろ。

で、火傷の手当てはしない気だ……恐ろしや。

「斬、十万〇ルト!」

おお、ピ〇チ〇ウ並に強そー。

「成」

おお、結界(参考にした奴からオリジナルを作ってた)で防いだ。
上手い!

「斬ー、ほれ」

ぼいつ

……え、爆弾!? しかもデカっ!?

何処に持ってた!?

オマケに何かベタな形してんなー……。

黒っぽい球に導火線らしき太い縄がついてんだ。

しっかりそれには火が……って、おい!?

「成……破」

パンッ

うわー、あんな大きい、ギャグな見た目してても恐ろしいものを
消したと言うのに、何て軽快? な音だ……。

「成」

「……え? 斬さん何するつもりでーすかー……」

剣の頭上にさっきの爆弾と同じくらいの結界を作ったんだな、斬
が。

「復」

そして今の一言(一文字?)でさっきのギャグな爆弾が復活した

んだなー。

「放」

そして今のでその爆弾が放たれて……。

「ちょ、ヤメツ、ざ」どかーんツ

剣の目の前で爆発。

剣は防ぐための結界を作ることさえ出来ませんでしたとぞ。
爆風は天が何とか防いでくれたけど。

……つて。

「剣ー、生きてるかー!？」

「剣だから大丈夫だ」

声をそろえて言っつてやるなー。可哀想だから。

「アチチチチチ……あーもー、ひりひりするじゃんかよ!」

……大丈夫だし。

「剣、元はお前のだろう?」

「うぐ……、天、それを言っちゃーいけねーよう」

事実なんだけどなー。

「……たーにい、他、ある?」

……まだやるのかツ!?

45 まきまき大戦争！！

『たんじょーび、おめでとー！』

「……あれ？ あ、そっか！ ありがとう！」
忍でーす。

今日が自分の誕生日だと言うことを綺麗さっぱり忘れてました。
春分の日って二十日だったり二十一日だったりするでしょ？
ややっこしいねー、全く。

……でも、晩ご飯が手巻き寿司なのに気付かなかったあたしって
どーなんだろ。

家で手巻き寿司なのはあたしの誕生日の時と岳の誕生日の時だけ
なんだよー。

理由は簡単、あたしと岳が手巻き寿司大好きだから。
だって何入れてもいいんだもん、楽しいでしょ？

「わーっ、すうっげー！ 色々ある！」

「にんじん、きゅうり、レタス、……魚が三種類？ 納豆……え、

紙？ それも沢山」

天、それは紙じゃない、海苔！

あたし達は山羊じゃないから！！

「……つぶつぶ」

イクラはそう言う物だから。

「いたーきまつす！」

「あゝ、岳お兄ちゃんフライングだ〜！」

「とか言いながらテメエの口元に米粒がついているのはどういう訳
だ、光？」

「あはは〜」

……あ、っ、出遅れたっ！ 突っ込んでる隙に！

「あ、父さん鮭取りすぎ！ ずっこい！」

「弱肉強食！ これぞ自然界の掟」

「……どっちかと言うとそれは早い者勝ち、だろ」

よし、この隙にマグロ（半額）……ん？

「いつの間にマグロが半分に!？」

『何!？』

そんなに息ピッタリに振り向かんでも、岳におとーさん。

もむもむもむもむ……

「光、犯人はお前か!！」

「やだな、何処に証拠が？」

『その皿の上の鉄火巻き（四コ）は何だ!？」

うん、ナイスハモリ？

さっきの二人+あたし。

「……戦争」

「戦争だな」

「止めるな！ 放せ！ オレは行く!！」

『行くな』

うんうん、天に斬、そのまま剣を押さえておいてくれたまえ。

だって、ね？ おとーさんはこの子達見えないんだから。

寿司が宙に浮いてたらどーなることか。

一番の理由はあたし達の食べる分が減ることなんだけどねっ！

「ほらほら、落着いて」

「母さん、皿の上のイクラ巻き（四本）は何だ!？」

「戦利品だよ？」

『ね』とか言いながら、微笑みながら光と顔を見合わせないで？

「まあ、落着け!」

「なっ、落着いていられるか!！」

「五月蠅いから落着け。近所迷惑だ」

「……はーい」

純兄凄い。うん。

「よし、落着いた所で……じゃじゃん!」

おとーさんが出したもの。

空のトレイ。

「……なんだよ期待させといて！」

「期待してたんだ？」

「当たり前だ！」

「おっかしーなー……」

いや、おとーさん、裏っかわ見ても何も無いから。

「あゝ、そこにあつたマグロなら食べちゃったよ？」

「な！？」

「だって、要冷蔵なのに常温でほつたらかしてたんだもの」

……この二人、間違いなく家では最強だな！。

女は強い。

……あれ、あたしは！？

「忍ねえ、ちよつと分ーけて？」

「巻く所からやってみる？」

「え、でも……」おとーさんはショックで意識三分の二程飛んでるから「やるっ！」

うん、いいお返事。

いいお返事だからテーブルの上にあるネタ全種類入れようとするなー！

「いっただっきまー」……もむ「なあああああー！」

斬の一口くらい小さいんだからいいじゃん。

「じゃあ私も。あむ」

「みぎやあああああああー！」

おお、天の一口は大きかった。

……多分剣を弄るのが目的かと。

「……あつ、マグロ……」

良かった、後一切れ残つてた……つて一切れだけ！？

あたしまだ食べてなかったのに……。

とられる前にとっておかないと。

シュツ

「……あ」

セーッフ、おとーさんにとられる所だった。

「……食べてなかったのに……。忍、おとーさんにそれよこしなさい」

「断固拒否!!」

渡してたまるか!

「子は親に尽くすものだ!」

「え、そなの? 今は別だ!」

「いつだろうと同じだ!」

なんだろ、えーつと……、親権乱用?

「ふーんだ」

「こら! 親にその態度は何だ!」

寿司のネタでそんなに変わるものかねー、性格って。

ま、いーや。はもつ

「あああああああああ……」

おとーさん、撃沈(?)!

この戦争は一時間もの間続いたのでしたとさ。めでたしめでたし。

そんな、誕生日な晩ご飯でしたとさ!

……ケーキは?

45 まきまき大戦争！！（後書き）

ツという事で、忍の誕生日でした。

伏線全く入れてませんでした（精々三月と言っただけくらい）。

忘れてたわけじゃないですよ！ 覚えてなかっただけで。

書いてて思いました。誕生日殆ど関係ない。

けーき……ケーキ……あ。

46 金魚ちゃん金魚ちゃん

じい ツ
びちびちびちびちびちびちびちびちびち

……なんだろ。

微笑ましいのか惨たらしいのか……どう反応したらいいの？
忍です。

死神トリオがね、現在進行形で家の金魚の観察してるんだけど、
天が金魚の尻尾つまんで逆さ吊りにしてるんだよね……。

しかもその金魚から見えるであろう位置には剣の操る水の球が。

「はーらほーら、水だぜー」

びちびちびちびちびちびちびちびちびちびちっ！！

「……………えさ」

びッチビッチびつちびつちびつちびつちびつちびつちびつち！！

剣、水を金魚に近づけたり離れたりって何のいじめ！？

しかも斬がエサ投げ入れてさらに誘惑してるし……。

「んみゃあ、んみゃあ（しのぶちや、しのぶちや）」

「あれ？ クロ。なあーん（どしたのー？）」

クロって言うのは近所の人が飼ってる猫ね。

クロなのに白猫。ウケ狙いでつけたらしい。

「ふなああん（あれ食べてい？）」

「みゃ（ダメ）」

減ったらおとーさんが悲しむから。

主に世話してるのおとーさんなんだよね。

「んみゃーあ、んにゃーあ（あれしてたら死んじゃうっけ？）」

最後の一文字を言わないのはクロの口癖、と云うかマイブームら
しい。

「……………」

……………さて、言い返せない。

「みーにやーん（多分死ぬ前に戻すから大丈夫）
多分、きつと、恐らく。……戻す、よね？」

「天、死にそーになってるぜ！」

「ん？ あゝ」

大丈夫、だよな！？ て言うか大丈夫であってくれ！

「成、癒」

あ、治しちゃった。

……便利ななあ結界。もう使いこなしてるし。

「はい、ぽちゃん」ぽちゃん

「……みゆうう（はああ）」

ク口、溜息を吐くな。

そんなに食べたいんならお祭りにでも行つといでよ。

今は無いけど。

「えいつ、えいつ」ばしゃっばしゃっ

「んみやあ、ふーなーあん（しのぶちや、次やろうとしてるけ？）」

「……よし」

庭の隅に転がってたプラスチックの小皿に、

水槽の水入れて。

「み、みゃん（はい、金魚水）」

一緒にメダカも入れてるからなー。

金魚メダカ水の方が正しいかも。

まあ、最近水槽洗ってないからきつといい出汁が出てるはず。

ぺろっ

「ふみやーお（ふうーむ……）」

一舐めする度に唸らなくても……。

どこの料理評論家なの君は。

「みやーみゆうーなうん？（金魚メダカタニシ藻炭水な？）」

……君、本とに料理評論家だったりしない！？

細かすぎるよー！

「ふうううふうふうふう……」

うん？ どしたの急に唸りだして？

かさかさかさかさかさかさ……

あ、ゴキさん。

水槽に向かつております。

ぼちゃん、じたばたじたばた

落ちました。

あ、家で一番大っきい金魚が近づいて……。

あぐっ

『……食った……』

「クロ、みーにゃーふなああん（あのでかい奴食べる？）」

「に、に、に、みーにゅあー（いい、いい、いい、いい、クロさんゴキは嫌いな）」

あ、逃げちゃった。

「……解剖、いい？」

「確かにどうなってるか気になる……」

止めんかあああああっ！！

47 熱があるようです

「うー、熱い、寒い、熱い寒い熱い寒い熱い」

「どっちだよ」

忍でえす。

今は二時間目、英語の時間。

授業を聞く気は欠片も無いので黒板に書いてあることをプリントに丸写ししながら落書きという名内職中。

で、最初に言ったようなことをぶつぶつ言ったら隣の純兄に突っ込まれた、という訳。

だって熱くて寒いんだもん。えーっと、ぬるい？ 違うなあ……。

「あれ？ 忍、顔赤くない？」

きつと暖房が効きすぎてるんだ。エコ温度は18 ですよー？

「ちよつと忍、じつとしてろ」

純兄ー、手、つべたいんだってば。

「あつっ」

「え、風邪か？ 保健室行った方がいいんじゃないの？」

「分かったよう。英語これ終わったら行くー」

暇だから今すぐ行きたいんだけどねー。

「そこー、五月蠅い」

「はーい」

『五月蠅い』と、いう奴の声が一番アカイ。

まさにその通りだよね。

……先生だから当然なのか。

「と、いう訳で今日はここまでー」

どついう訳でだろう。聞いてたら分かったのかな。

「きりーっ、れーい、さよーなら」

「さよなら違うー!」

ナイス突っ込み、誰かさん。

「じゃ、忍を保健室へ連行しよう」
しーちゃん、連行違う。

『うわあ』

保健室、満員。殆ど二年。

まあ三年は卒業した後だけだ。

「えーと、付き添いの人は戻ってー。 ややつこしいから」

「え〜。じゃあね〜、忍」

『え〜』言った割に行くの早いな桜！

「えー……高山さん、二組だっけ？」

「三組です」

「あ、そうそう四組」

「三組ですってば！！」

疲れてんのかなー、先生。

「……はい、熱測つといてね」

この体温計、音でるのかなー？

ほら、体温計って音出る奴と出ない奴あるじゃん。

ややつこしいよね。

「せんせー、俺帰る。早退。吐きそう。朝吐いたし」

「はいはい、体温測つてからね」

あ、あれは……こないだ水谷をいじめてたクラスメートAだ。

「……頑張つて体温上げよ」

聞こえてるよー、独り言。仮病なんだね？

「あれ、お前も帰んの？」

……いや、まだ体温測つてる途中だから。分かんないから。

でもさつき37 越してたんだよねー。

「多分？」

「ふうん」

……体温測つてるときほど暇な時間はない。

動いちゃいけないし。ついでに話し相手いないし。

保健室にいる人数でも数えてよっかなー。1、2、3、4……。
15人。多っ。

びびびっ、びびびっ、びびびっ

あ、これ鳴る奴だったんだーって、

38.6……。高っ!?

「せんせー、鳴りましたー」

「はいはいー? ……お母さん今日居る?」

「多分、きつと、恐らく?」

「……。連絡するからちよつと待っててね」

ちよつとつてどれ位?

まーいっか。

「体温測ってる人意外教室かえりなさーい」

きーんこーんかーんこーん……

あれ、ぶーちゃ……もとい東田先生。

一組は三時間目国語って聞いたんだけどなー。

え、だからから? それは秘密です。

「あ、チツ」

あ、A、思うように上げられなかったんだ。

「高山さーん。迎えに来てくれるらしいからね、荷物持って下りて

おいでー」

「はーい」

で、かばんの中に筆箱とか入れてたら清やら何故かAに吃驚されましたとき。

……どーゆー意味だろう。

48 おみまい

「大丈夫なの〜?」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

「……………斬」

「……………?」

「何でこうなつたんだっけか?」

純だ。

桜篠清が忍の見舞いに来てんだけど…………。

まあ、悪いこととは言わない。ただ、

忍はインフルだったんだよ…………。

「……………えと……………」

30分前。

プルルルルル……………プルルルルル……………

「はい高や「純君? 忍、大丈夫なの!?!」」

「インフルだつてよ」

「え〜っ!? インフル!? A? B? AB? それともO!

」?

血液型じゃねえから。

「Bだつたと思う」

「そっか〜! わたしお見舞い行くね!」

「ちよっ、おい……………」ぷっつ、っー、っー、っー……………。

現在。

……………それでなんで篠に清というオマケがついて来る?

答えは簡単。桜がすっかりそっちにも連絡したからだ。

「忍、ポ〇リ飲む？」
「え、あ、ありがと……それよりさ、うつっちゃうよ？」
それは玄関先で言ったんだけどな……。
「大丈夫！ わたしは年明け早々罹っちゃったから。あはは」
「あたしは去年の12月に」
「オレは馬鹿だからぜってえ罹りっこねえ!!」
……って絶対引こうとしねえ。
「……清、残念なお知らせ」
「うん？」
「馬鹿が罹らないのはね……風邪なんだよ」
……。
馬鹿でも風邪位なと思う。
「……大丈夫!! オレはそー簡単に病気に罹らねーぞ！」
「!」
「じゃあ最初の間は何だったっーんだ。
「……じゅーにい、馬鹿は風邪引かないなら俺と天も馬鹿になるん
だけど」
「お前等は別だから安心しとけ」
剣が入ってなかったのは……まあ、いいか。
「純兄インフルまだだったよねー。うつるよ？ 清も」
「ほっとけ」「だからそー簡単にうつらねーって!!」
一応マスクはしてる。
「うつすよ？」
『止めんか(!!)』
わざわざうつそうとしてどうする。
「けほけほけほけほけほ」
『本気でするな!!』
「いいぞー忍ー」
「篠、煽っちゃだめだよ。もっとやれ」
止めるか煽るかどっちかにしやがれ。

「あ、そうだ。お見舞いでリンゴ持ってきた」
「おおっ！ 流石しーちゃん！ 食べていい？」かぶ
「いいけど食べた後で言うな」
もっともだ。
「……紙の味がするよこのリンゴ」
「そりゃー」
「マスクの上から食べたら……ね〜？」
漫画じゃあるまいし……。本気がわざとか。
「あ、そか」
「……本気だったの？」
「まっさかー」
ぐさっ
そんな音が聞こえた。
「え、本気だった？」
「……うん」もっしやもっしやもっしやもっしや
えーつと……やけ食いか？
「ごめんね〜、忍〜」
「や、いーよいーよ気にしてないから」はもはもはもはも
忍、それヘタ。
「ええつと……ごめん？」
「いーよいーよいーよいーよ」がりがりがりがり
忍、それ種。
「なんてね」
「おいっ」
「めーえんぎでしょ。……種マズっ」
「お前なー」
「そー簡単にあたしが傷つく訳がない！ スルー力は自信あるよ？」
なんつー奴だ。
「このリンゴおいしーねー。何処で買ったの？」
「あそこ」

「どいぢ」

「あそこ」「どいぢ」「あそこ」「どいぢ」「あそこ」

「純、純」

「あん？」

「しゃがみながら服を引つ張らないで欲しい。」

「ほんとーに、忍は病人なのか？」

「一応な」

「病気になつても食欲あるし、喋るし動くし。」

「……何処が病人だよ。」

「うーん……ひよつとして、オレ等安眠妨害中？」

「ぜつてえ違つ」

「忍が病気になつて昼間に寝たことなんて見たことねえ。」

「でもま、大声が頭には響くかもな？ ついでに言つとお前つづるから帰れ」

「オレだけか！？」

「いや、あの二人も帰るよう言うけど」

「わーつたよー。おーい？ しのさく帰んぞー」

「混ぜるか……。」

「つかお前が言うのかよ。」

「え？」「何で〜？」

「悪化させたら後味わりーだろ、治つてから来ようぜ」
妹を説得する兄かお前は。

『それ見舞いつて言わない』

「……違つか。説得できてねえ。」

「……と、とにかくっ！忍は本とは安静にしとかなきゃい
けねーんだから「えー」「忍ー」《お前》が言うな！安静にしとけよ！
！」

「ぜんっぜん話が進まねえ。」

「分かつたよー。ありがとーね？」

「へっ？ あ、ん。ほら行くぞさくしの」

「順番が変わってる」

「どーでもいいだろーがそこは！」

しのさくの方が言いやすそうだったんだけどな。

「お邪魔しました」

「治ったら電話してよ」

「はい。ありがとねー」

「ちゃんと安静にしてるよー」

……って言ってもらったつーのに。

「何でゲームなんかしてんだテメエは」

「暇なんだもん」

48 おみまい（後書き）

今流行のインフル、皆様お気を付けください。
流行には疎いのに流行のインフルな呪理阿でした〜……。。

49 家庭内追いかけて

「だから安静にしてろつてのに！」

「やだやだやだあ、暇だもん！」

『うわ〜あ』

光です〜。

今ね〜、純お兄ちゃんとお姉ちゃんが追いかけてっこしてるんだよ〜。

お姉ちゃんもう治ってるんじゃないのかな〜？

でもまだ熱下がってないのか〜。

37 代つて言つてたから〜。

「ったく、これだからテメエはただの風邪でも回復に三日はかかん
だ。アホ！」

「むっ、アホとはなんだ！」

「標準語だから馬鹿以上、だ！」

関西だったらアホより馬鹿の方がこたえるんだつたよね〜。

「にーちゃん、ねーちゃん、オレも参加してもいーかつ！？」

「お前はこれを何だと思つてんだ」

「へっ！？ 追いかけてっこじゃねーのか！？」

「違つたの〜！？」

「……………追いかけてっこ言えばそーか。うん、そーだね……………うわ
っ！？」

「純お兄ちゃんの足払い〜。

「捕まえた。寝ろ。無理して」

「えーっ」

無理してつて……………。

あ〜。連行されちゃつた〜。担がれて〜。

「あんなのつて普通お姫様だつこじゃないの〜！？」

「忍〜、お薬〜。吸う時間でしょ〜？」

「ダメだぜ母さん！ 麻薬は二十歳になってからだっ！！」
べしっ

「それは酒と煙草だ。麻薬違う。第一お袋が言ってるのはインフルの薬」

「……だからってそんな力いっぱいにはたかなくてもいいと思うんだオレは」

「手加減したけど」

手加減してそれなんだね。

「純兄ー、おっかけっこの続きしよっ！」

「テメエな……」

純お兄ちゃん、疲れてるみたいだね。

「寝てろっつつてんだろ」

「ヤだ」

どさっ

大外狩り。

またお姉ちゃん捕まっちゃった。

「布団に突っ込んでみすぐ出ちゃうけどいーの？」

「睡眠薬でも買って来てやろうか？」

純お兄ちゃん。

買ってきてもお姉ちゃんが飲まなかったら意味無いよ。

リングの中にでも埋め込むつもりかな？

「てい」

どすっ

「つつ」

お姉ちゃんの膝蹴りが純お兄ちゃんの鳩尾に命中。

痛そ。

「純兄、油断大敵だよ」

「追いかけてっここか！？ オレも混ぜてっ」

剣くんだ。

頭に鎌が食い込んでるのは気のせいだよ。

「ひいねえ、気のせいじゃないよ」

「……………気のせいにさせて〜？」

剣くんが人間だったらとつくに死んでるくらい出血してるんだから〜。

ついでに左手凍ってるんだから〜。

「……………しーねえ病気じゃないの」

「一応ねー」

「……………クス」いいですいいですいいですって……………これはまとも

これ『は』って……………。

「……………ちゃんと動物実験してあるから」

「そつ！ 斬にしては珍しすぎる事に成功したんだぜ！」

「へえ〜っ」

「……………あれ……………」

「天ちゃん〜」

「ん？」

「動物実験の動物って……………」

「もちろん剣」

「やっぱりね……………」

「……………はい」

「ありがとーね」

あゝ、クスリ飲んだお姉ちゃんの顔が『うえっ』って言ってる〜。
不味いんだね〜。

「おかーさん、体温計貸してー」

「36.5 だ。治った!？」

「舌が痺れたりとかは？」

「……………岳お兄ちゃん〜。」

そんな普段見せない……………と言うか殆ど見たこと無いマジメな顔して聞かなくても〜。

「よし！ 純兄、もう一回！」

……まだやるの？

50 第二回！ 何と読むでしょー？

「てけてーん！ 第二回、何と読むでしょーの時間です」
「どういう時間なの〜？

光です〜。

また岳お兄ちゃんがさっきみたいなこと言い出したんだよ〜。

第一回っていつだったっけ〜……。

一ヶ月以上前だったような気がするな〜。

「第一問！！ 『晴朝』 分かる人！」

「ほーい。『晴朝』 『せいちょう』 で『成長』！」

「正解！ …… 見破られない自信あったんだけど……。」

そうなの〜？

「じゃ、あたしやるね？ はいっ 『音卵酸』」

おと〜？ うさぎ〜？ さん〜？

あ〜。

「『おとうさん』だ〜」

「ぴんぽん！」

「読んだ？」

『読んでない（よ〜）』

「しくしくしくしくしく」

三十六〜。

「次私ね〜」

『馬寝輝根子』

「馬が寝ながら輝き根元で子を産んだ！」

別のものになってるね〜。

「まねきねこ……ですか？」

「ぴんぽん〜」

……〜。

『誰（〜）！〜？』

よし、命名〜！

スケルトン人間さん〜！

「わたくし……こういう者ですが……」

「こういう者さんか……」。

「……光、何納得してんの？」

「すっげー、半透明な名刺だっ」

『酔化瑠豚』さん〜？

「……すける とん？」

「初対面で呼び捨てですか……すける とんではありません……」

「わかった！すける とんだなっ！〜」

「いいえ……す けるとんです……」

『名字短っ！』

す、なんて名字初めて聞いた〜。

「違います……す、が名前で、けるとんが名字です……」

「いや、それにしても名前短いし」

「そうだよ〜。お姉ちゃんの言うとおり〜。

「あ〜っ！ いたっ！ 水功弾っ！〜」

どたたたたたたたたたたたたたたたた

……剣くん〜。

まだ寒いんだから水の弾乱射は止めて欲しいな〜？

あ〜、何発かはあたったらしいね〜。

すさん居なくなっちゃった〜。

「わお、すげーもんが見れた」

……誰〜？

「さては貴様、泥ぼ「違う！」「何だ」

「あーっ！」

お姉ちゃん〜、突然大声出されたら耳が痛いよ〜。

「いつかのサンゴのおっちゃん「誰がおっちゃんじゃ！」「違うのかっ

！〜？」

「ちやうわー！」

「……関西人？」

「違う！」

「火星人！？」

「もつと違う！」

火星に人間なんて居ないんじやく。

「五月蠅い」

『ごめんなさい』

うわゝ、お姉ちゃんとお息ピッタリだ。

「で、何しに来たんだ産後のおっさん」

「産後ちがああうー！」

「………間違えた。サンゴのおっさん」

「どわゝゝからおっさん違うとゆーに！」

「年は！？」

「20」

うゝんゝ……。

『やっぱりおっさんだ(ゝ)(ゝ)』

「ちよっ！？ 今年成人式迎えたばっかだつてのに！？ まだ20

だぜー！？」

「あたしはもう14だよ」

「………だーっ！ どーいー返せつちゅーんだ！」

言い返さなくていいと思うんだけど。

「ふんつもーいーよーだおっさんでー(20になったら言い返したる)」

「で、結局何しに来たのさサンゴの兄ちゃん」

「お前せーかくわりーな！？」

「えへん」

「褒めてねえっ！」

………ぜーぜん話が進まないんだけど。

「何しに来たのつてさつきから聞いてんだけど」

「バイトで不思議現象の写真を」

「使い捨てカメラで？」

「そお。使い捨てカメラ『卯津螺変』」

……『うつらへん』？

なんか胡散臭いね。

「ねー、不法侵入者」

「誰が不法侵入者だ！」

「ピンポン聞こえなかったしー」

「うっ、じゃな！」

逃げた。

「あれ？ 何か落ちてる」

学生手帳？

「あれ、これって比較的近所の大学じゃん」

名前は……『苑土宇溝次』

……『えんどう こうじ』でいいのかな。

オマケ

「……写って、無い!？」

「そりゃ〜お客さん、使い捨てカメラ『卯津螺変』は写らないカメラですから」

「はあ!？ それカメラって言わない……」

「そりゃ〜……ドッキリように作られたうち限定の面白カメラですからして……」

「なら普通のカメラと同じ棚に並べるなよ!」

溝次さんドンマイ。

50 第二回！ 何と読むでしょう？（後書き）

まさかのサンゴの兄ちゃん再登場！。

忍と言い合いを始めたら止めにくい……。。

51 たまたま

すぱんっぽんっこんつとんつととと……
忍でーす。

今天と剣がスーパーボールで遊んでるのを見物中。

「すげーっ、めちゃくちゃ跳ねる！」

君が床にボールを叩きつける力はハンパなかったからねえ。

「よしっ、もう一回！」

すぱんっぽんっかんつとんつぱすっこんつがちゃ

「あ、純兄ー」

「……何してんだ」

えー？

スーパーボールに当たらないように本棚の上に乗ってるだけなんだ
けど。

「何かおかしい？」

「下りろ。つぶれたらどうする」

「ひどい。そこまで重くない！」

「重さが全く無いとでも？」

それじゃ幽霊だよ。

「あっ！　じゅうに危ない」

「ん？」

あ、スーパーボールが純兄の後頭部に……

当らなかった。

変わりに純兄の横をすり抜けてこっちに……って！

こんつ

「いたっ」

意外と痛い、スーパーボールの直撃。

「んなトコに乗ってなかったら避けられたかもな」

「うー」

「しいねえ、ごめん」

うんうん、今は天が投げた奴だったんだねー。
剣だったらこれよりも強いのかー。

「やーい、ノーコン、ノーコン」

「ん？」

「……何でも無いでーす」

天、怖い。

だってね、だってね。

にいつこり笑って大鎌構えてたんだよ!?

恐怖以外の何者でもないよ!

漫画や小説じゃありふれてるけど本気で怖いよ!?

「あ、こんな球発見」

あんな恐怖の笑みした後には元に戻られてもやっぱりさっきの恐怖の方が勝るねー。

ちなみに天が見つけたのはピンポン玉。

何故あるのかは不明。

「剣」

「ははははいつ!?!? な〜んでございましょう天おねーさま!?!?」

剣いそれで男かー。

おねーさまて……。

あ、そか。天は剣よか年上だったっけ。

「てい」

ちよつと待て! そのラケット何処から出した!?

しかも何故テニスラケット!?

「あれはバトミントンのラケットだと思っけど」

うっ。ちよつと間違えたっけ。

「いたっ」

あ、打たれたピン球が剣の眉間に直撃。

「んにやる何すんだ!」

「しかえし」

「んじゃーオレは……てえっ」

野球ボール……硬式の。

どっから持ってきた!?

って言うかピン球の仕返しでそれってつり合わないよ!

びきびきびきっ

……こおたー。

「お帰り、斬」

「……ただいま」

ちなみに、さっきまで斬は薬草取りに行っていました。

「あら〜お帰り〜、斬くん 何とって来たの〜?」

「……ナズナとか土筆とか……たんぽぽもあった」

訂正。野草取りだ。

「あらあら〜、助かるわ〜」

……今日の晩ご飯は野草の天ぷらに土筆の味噌汁かな?

「……何、してた」

「えーっと……球の投げ&打ち合い?」

「……こんなの落ちてた」

「……………」

斬が出したもの。

ボーリングの球。

何処にあった!?!? そして何処に持っていた!?!?

52 引越し来ました

「……あれ、お隣さん引越しすんの？」

「違うよ、引越して来たんだよ」

「……え？」

「忍です。」

ベランダで日向ぼっこしてたらね、お隣に引越しトラックが来たんだよ。

「お隣住んでたじゃん。あの人等はどーすんの」

「だから。お姉ちゃんがインフルしてる間に引越しちゃったんだよ」

「初耳ですが。」

「終業式の日だよ。ほら、お姉ちゃんのお友達が来た日」

「あの日!？」

気付かなかったのは回りが五月蠅かったからとか？

「でも、どんな人が来たんだろうね」

「うーん……おすそ分けとかくれるおばーちゃん」

「……それお姉ちゃんの来て欲しい人でしょ？」
「ばれたか。」

あ、煮物とかおすそ分けしてくれるおばーちゃん居たらな。

「同年のいい子な女の子居るかな」

「光……友達欲しいのね」

も、昼休み寝てばかりだし、話しかけたりとかしないし。

話しかけられるときは「〇〇貸して？」がお決まりだし。

うーん……まだこの状態か。

「はーちゃんみたいなのがいいな」

はーちゃんって言うのはね、前山口に住んでた時のお隣さんで、
本名海^{うみなかほる}中春ちゃん。

光といっつも一緒に……探検しながら落とし穴等罠を仕掛け……。

「ねー光。はーちゃんといい子にどういふ繋がりがあるか知りたいなー」

「えー、そんなの言わなくても分かるでしょー」
「分からないから聞いてるんだけどな」。

「話しやすいでしょー、明るいでしょー、言いたいことズバって言うっちゃうでしょー、悪い子にはお仕置きするでしょー」

そのお仕置きがとてつもなく怖いんだけど。

「あー、荷物入れ終わったみたいー」
トラックが消えてる。

ピンポン

「はいはーいー」

……………。

「光、今ピンポン押した人、こっから見えるけどさー」

「はーちゃんー!」

「やっぱりか!」

どーりで似てると思った! 3年くらいじゃ人ってそんなに変わらないね!

「ひーちゃんっ!」?

「あらー! あらららららー!」!

……………おかーさん出てくるのおそ……………。

「……………何の声だ?」

「純兄っいつの間にな!? どーでもいーけど海中家が引越してきたよ」

「……………マジで?」

マジです。

「よっ」

「出たあ!」

いつの間に入ってきた!?

純兄の後ろで片手拳げてる奴!

「ひでえ。幽霊扱いか?」

「そりゃーいつの間にか入っていつの間にか背後に立ってるんだもん」

「……………誰だ」
え。

「純兄ー、覚えて無くても何も困らないけど」「おい」覚えといてあげようよー。な……………な……………な……………あれ、何だっけ？」

はーちゃんの兄。

これくらいしか覚えてないんだけど。

「ひでえ……………。夏なつだよ、馬鹿」

ああ！

「なつくんだ！」

「そ。純、意外とオメー記憶力悪い？」

「人の不幸を笑い、その笑いをと切らせた奴を片っ端から屍にしていくような奴に知り合いは居ない」

しっかり覚えてるんじゃないか。

「人の不幸は蜜の味ってな」

最悪だこの人。

「……………変わってねえ……………」

多少は変わってることを期待してたんだ。
引越し直前まで笑われたからな。

違う、大爆笑されたんだ。

「で、なつくん等はどーしてここに？」

「親父の気分」

「おい」

「と親父の会社の都合」

……………良かった。マトモな理由があったか。

「忍しのく純じゆんくなつくん」

「何？」

「なつくんとはーちゃん家が落着くまで海中家泊まることになったからね」

……は？

『きゅーっったね〜ひーちゃん（はーちゃん〜）！』

いや、下から聞こえてくるこの声はほっとして。

スペースあるの？

「なつくん何で鉛筆なの？ シャーペンの方が楽じゃない？」

「どーせすぐ失くすから」

「失くすなよ」

純だ。

夏が引越の時に文房具を失くしたとか言うから、自分のシャー芯
買うついでに案内をしている。

夏は異常なまでに物を失くすし、探すのも下手だから二年の一年
間で消しゴムは14個、鉛筆は19本失くしたとか。

…… 小学の時は精々一年に十個以内だったのに。

「あれ、忍に純くんと……誰かさんだ」

「あ、桜！」

「俺は誰かさん呼ばわりかー……」

桜からしたら完全に誰かさんだろうが。

「桜も文房具買いに？」

「うっん、お母さんにお使い頼まれちゃって。賞味期限切れ直前
のものとか買いに来たんだ」

賞味期限切れ直前って。

「あ、ところで、その後ろの誰かさんだあれ？」

「なつくんだよ。山口に住んでた時のお隣さん。で、何故か今もお
隣さん」

「へえ、じゃあ学校で会えるのかな？」

会わなくていいと思う。

「……なつくん、水中だよな？」

「水中？ あ、水ヶ丘中の略か。うん」

「分かった、じゃあまたね」

「うん、じゃね」

「……可愛い娘だな、純？」

何故そこで俺にふる。

「で？ だから何だ」

「学校の友達だろ？ 今の。何か親しそうだった」

「俺は一言も喋ってないんだが」

「最初に純って名前で呼んでたよな」

だから何なんだ、ってのに。

「あれ、忍に純じゃん。何してんの？」

「あ、しーちゃん。見ての通り買物です」

「……そっちの純を問い詰めてるっぽいのは？」

「なつくん。別に問い詰めてる訳じゃないと思うよ、多分（きつと、恐らく）」

きつと、恐らくって聞こえてるんだけど。

「しーちゃんは？ 何か買いに来たの？」

「いや、あたしは母さんに弁当持ってきただけ。今朝忘れて行ったから」

「そっか、しーちゃんのおかーさんここで働いてたね」

「そゆこと、じゃな」

「ばいばい」

……この調子だと清まで来そうだな。

ま、それはねえか。

「純……今度は呼び捨てだったな」

「さつきから何なんだ。意味分かんねえ」

「友達か？」

「ん、まあな」

忍の、の方が正しいけど。

「……………お前さー、男の友達居ねえの？」
何でそうなる。

「居るっちゃ居るけど」

五月蠅いのが。

「よーっ！ じゅしのー！」

……出た。

「毎回毎回混ぜるな」

「何だー？ 混ぜるな危険？ 洗剤じゃねーんだからいーじゃん」
理由が訳分からん。

「およ、その後ろのは？」

「夏。前に住んでた所で隣だったんだけど……何故かまた隣に引越してきた奴」

偶然とは思えねえんだけどな、正直。

「へーっ、オレは清つつーんだ、よろしくな、夏！」

「あ、よろしく。……純、お前友達居たんだな」
どういう意味だ。

「あ、ところでさ、篠知らね？ アイツ弁当の箸忘れて行きやがってさー……一応篠の母ちゃんには届けたけど」

「篠？ さつきここに居たよ？」

「えーっ、まさかのすれ違い！？ ちえっ、何かおごらせようと思つたのに」

汚ねえ奴だ。

「それ位で篠は奢ったりしねえと思うけど」

「二十五回目なんだよ！ そんだけやったら流石に……」

「二十五回目！？ そんなに忘れてったんだな……」

……お前はそれ以上に物を失くしてると思うけど？

54 お雛様の過去

『……何で俺まで……』

「純兄ー、なつくん、岳、それ五回目だよ」

「そうだよっ！ いい加減あきらめてちゃんとやってよー！」

「うんうん〜」

忍でーす。

今皆で雛人形の片づけをしてるんだ。

何かほんつとに今更だよね。

確か出したのは二月の終わり、一ヶ月以上出しっぱなしだったんだなー。

「もういつそ年中出しっぱでよくね？」

「または最初から出さないか」

それじゃ雛人形ある意味無いでしょ。

「雛人形を片付けるのが遅いとお嫁に行くのが遅くなるんだよ〜？」

「そーだよっ！ 忍ちゃんとひーちゃんが お嫁に行くのがお婆ちゃんになつてからになつちゃたらどうすんの！」

それはいくらなんでも遅すぎると思うんだけど、はーちゃん？

「光はともかく、忍なら年中出しっぱでもいいじゃねえか」

「ん？ 妹はやらんぞーって？」

光の立場は。

「いや、忍を貰おうなんて奴いねえだろと思って」

「純兄酷っ！！」

なつくん、大爆笑。

あたしは全然面白くないんだけど？

「しっかしなー、誰だー？ 七段飾りがいいなんて言った奴」

「は〜い〜」

犯人はすぐに名乗り出た。

このお雛様おばーちゃんに貰ったんだよね、光が駄々こねて。

それってくれるおばーちゃんもおばーちゃんだけど。

「あ、コイツの首、紅いのが付いてる」

「キャ　　ッ!!!　血!?　血なの!?!」

はーちゃん……悲鳴が耳に響きます。

「人形が血い出すわけねえじゃん。ペンのインクだよ」

「なんだあ、良かった。でも何でそんなところに……」

『……………』

ねえ、純兄となつくくんが視線を逸らしたような気がするんだけど。

「純お兄ちゃん?」「お兄ちゃん?」

あ、気がしたんじゃないかって本当に逸らしてた。

「純お兄ちゃん達がやったんだ〜!」

「ひっどーい!　ウチもよく見たのに!?!」

『その時のお話、あるよね(〜)!?』

二人とも、顔近いよ。

その笑顔がとっても、素晴らしく怖いよ。

ん?　あたしは怒らないのかって?

あたしは乙女じゃないもん、雛人形そこまで大事にしてないも

ーん。

…………お雛様崇らないで。

「分かった分かった!!　分かったから、顔近い!」

五年前……。

「じゅんおにいちゃん〜、おひなさまかざるのでつだつて〜!」

「おにいちゃんもだよ!」

『えー』

『えーじゃない!　おひなまつりはおんなのこのいうときくんだけだ』

よ(〜)!?!』

光、はーちゃん、当時四歳。

言い出したらなかなかしつっこいお年頃。

「ちえっ、……あれ、赤のサインペンめっけ」

「本とだーっ！……ね、ね、ちよつとイタズラ」

「気付かれねーよな、多分」

忍、純、夏、当時九歳。

いたずら真っ盛り。

ちよつとしたいいたずら心で人形の一つの首に血の落書き。

子どもとは案外グロい落書きが好きなのだ。

そして気付かれぬまま（何故！？）……

先程自爆。

……あれっ！？

あたしも共犯！？

「お姉ちゃん？」「忍ちゃん？」

キヤーッ！？

「おみかん！ おふとん！ おしんぶん！！」

「……『お』はいらない」

「いいの！」

いいんだ？

岳でーい。

今菜美が遊びに来てんだ。

神谷はスイミングだつて。

最近何でも『お』を付けるのが菜美のマイブームらしい。

「天ちゃん、菜美ちゃんつて斬くん見えてるね」

「小さい子は皆見えるよ。大きくなったら見えなくなっちゃうのが普通だけど」

「そつかく、純お兄ちゃんは普通じゃないんだね」

ここにーちゃんが居なくて良かった。

あ、にーちゃんはねーちゃんと一緒になつくんとはーちゃんとの手伝いに行つてんだ。

オレ？ めんどくさかつたから行かなかつた！

光は菜美の面倒見るためな。

「おぱしょこん！ おりんご！ お……えーと、えーと……おはこ
」！」

「……十八番？」

菜美が言ってるのは『お箱』だと思うけど。

「菜美ー、それは箱じゃなくてプリンターだぜ」

「おふいんだ？ おふいん！ おふいんだべたいなー」

おふいん？ おふいん……おぷりん？

プリンかー！

わかるとちよつと嬉しい。

「岳にい、連想ゲーム化してね？」

「してるな、うん」

プリンターからプリンになった。

「たべたいなーたべたいなー、おたべたいなー」

「……だから、『お』はいらない」

「こまかえこといつてゆとはげゆよ？」

菜美……何処で覚えた、そんな言葉。

「……じゃあ天はもうハゲ」どういう意味!?」……そのままの意味」

斬……確かに、確かに細かい事言ってるのは天だなあ。

「天ちゃんはまだまだハゲないよ」

「……ひいねえ、それって将来ハゲるって意味？」

「はう〜っ!? そんなつもりじゃ〜」

そんなつもりだったんだろ。

目が笑ってるぜー。

「おいかり? おちちゆいてー、おそらたん」

ついに人の名前にまで『お』を付けるようになったか。

でも天は『お』を付けてもあんま違和感ねーな。

お空って言うし。

「ほらほら〜、おちついてー、お天たん」

「お前が言うな!」

みしっ

おー、毎度の事ながら痛そー……。

天の鎌ってしっかり研いであるから先っぽもすっごく尖ってたし。

「酷い」

「おいたい? おつゆぎたん」

「天の発音はちゃんとしてたってのにー。オレは剣だい、つゆぎじ

やねーよー」

剣ー、床にのの字を書くなー。

キノコを生やすなー。

食べられるキノコならOK。

55 お(後書き)

……しまった。

奈津と夏って読み方が同じだ……。

奈津の存在を忘れてた訳じゃないですよ！

ええ、ちよつと覚えてなかつただけです！

……あれ？

「ね〜お姉ちゃん〜」

「ん〜?」

「バナナの皮で滑って転ぶ人って本当に居るんだね〜」

忍です。

暇で暇でしようがなかった所に光がこんなことを言ってきました。
「バナナの皮で滑って転ぶ人か〜。小学の時は給食でバナナが出るたびに大量発生してたな」

わざつわざ教室の後ろにバナナの皮を蛸みたいに置いてその上を走るんだよ。

男子の半分はやってたんじゃないかなー。

純兄はやってないけど。ノリの悪いやつめ。

「そうじゃなくてね〜、学校から帰る時に〜」

ちなみに今日は離任式でした。あしからず。

「補導のど真ん中にバナナの皮が落ちてたのね〜、それで〜、ジヨギングしてた人が滑って転んで頭打って救急車で運ばれちゃったんだよ〜」

ジヨギングして滑って転んで頭打って救急車で運ばれた〜?

忙しい人だね〜。流石現代社会?

違うか。

「嘘だけど〜」

「嘘!?!」

何とまあ現実味溢れた……。

全ッ然現実味ないじゃん。

「今日はエイプリルフルだも〜ん〜。岳お兄ちゃんも引っかかったんだよ〜」

あ〜……そう言えばさつき岳が「翔も修也も古閑も引っかかったのに何で光は引っかからねーんだー!」しかも逆に引っ掛けられる

とはこれいかに!?!』って叫んでたな!。

五月蠅いの何の。

「純お兄ちゃんも引つかかるかな。試してみよ〜っと」
「いや、純兄は引つかからないでしょ。」

「さあ、どーだろな?」

「突然出てきて心を読むな!」

肘打ちっ!

ゴン

「いや……声に出てたから」

「嘘っ!?!」

「ピンポン」

膝蹴りっ!

ドスツ

「乱暴だなあ……意外と痛えんだからな?」

「心を読んだお前が悪い!」

「いや、そんな技ないから。あつても俺出来ねえから」

……あれ? じゃ、何で……

「忍ならそう考えろと思つた」

幼馴染恐るべし。

「ねーちゃんねーちゃん! 今は馬鹿が増える季節だって誰か言つてたけど、ホントだな!」

「ん? 何で?」

「頭に花が咲いてる人がいつぱいだ! 目の前にも……」

かかと落としっ!

ゴスツ

「つて嘘を考えた……ねーちゃんも引つかつたな!」
我が身を犠牲にした嘘!?

岳は嘘にどんな執念が……。

「忍ちゃん!」

あ、はーちゃん。

まさかはーちゃんも嘘を言いにわざわざ？

「家の片付け、終わったよ！」

あ、報告だったか。

「そっかー。良かったね」

「お兄ちゃんの部屋だけしてないけど！」

「よしなつくん、家に帰って片付けしといで」

「えー」

ぐいぐいぐいぐい

なつくんを押ししてベランダに。

理由？ なつくんはいつもベランダから入ってくるから。

完全なる不法侵入だよな。

「ほらほらーお兄ちゃん、早く片づけした方がいいよー。お母さんの雷がズドンするから」

起こるとこあい、春夏母。

「ちえっ」

「はい舌打ちしない。じゃねっ！ 忍ちゃん！」

「ほいほーい」

行っちゃった。

「お姉ちゃん〜。純お兄ちゃんも引つかかったよ！」

「嘘ッ!？」

「嘘〜」

……あたし、嘘と言う嘘には全て引つかかってるんだけど。

「……しーねえ」「ひいねえー」

あ、天に斬。

……誰かにエイプリルフールの事吹き込まれて引つ掛けに来たんじゃあるまいな。

「どっしたの〜?」

『お世話になりました』

………は?

「ほえ〜?」

「学校がね、明日から始まるんだ」

「……学校、全寮制」

「……ふむ、こーゆー嘘か。」

「だから今日のうちに行つとかないと間に合わないから……」

「はいストップ。嘘でしょ」

「……えいぷりるふーるでも、「コレ本と」

「………ありゃ？」

「ねーちゃんねーちゃんねーちゃん！ 剣がな！ 行っちまうって

「……」

「あれ〜？

ほんと？

「ね〜、学校つて、お休み無いの〜？」

「……春休み、夏休み、秋休み、冬休みなら」

「秋休みつてあるんだ〜……。」

「その時は〜、帰つて来るよね〜？」

「ばちくり。」

「そんな効果音がピッタリだな。」

「“帰つて”来て、いいのか？」

「つたりめーだ！ つつか帰つて来い！ 絶てーだぞー！」

「うんうん。」

「ここはあんたらの家うちでしょーが」

「………うん！」

「わあ、初めて斬の笑顔見た。」

「いや、おっそろしい薬持って嬉々としてるのは見たことあるけど

な……。」

「あれは黒っぽい紫のオーラが見えるから笑顔に見えない。」

「純兄には？」

「もう言ったよ。同じ事、言ってくれた！」

「にぱー、こんな効果音つきそう。」

「そか」

『行ってきます!』

『行ってらっしゃーい(´) (´)!』

桜はまだ咲いてないけど。

あの三人がちっちゃな桜の花びらみたいに見えました。

56 えいぷりる（後書き）

と言う訳で死神トリオ、しばらく退場です。

次出てくるのは夏休みかな。覚えていきますように（笑）
なにしろ三歩歩いたら忘れるもので……（鶏？）

57 電話のセールス撃退法

セールス電話撃退法。光の場合。

るるるる……るるるる……がちや

「はい、高山で、あ、もしもし、ナンタラ商業のおでんと申しませんがぺらぺらぺら……」

変わった名前だな。

それでもって早口だな。

「ぺらぺらぺらこのような製品ぺらぺら、わが社ぺらぺらぺらぺら
らぺらぺら」

早口言葉だ。

「ぺらぺらぺらとところでお宅のポットはぺらぺらですか？」

えっつと……。

聞き取れないよ。

これって所謂セールス電話ってやつだよ。

「何かよく分かりません」

「あ、そうですか、ぺらぺらぺら」がちや。

つーっ、つーっ、つーっ、つーっ

……あれ、切れちゃった。

忍の場合。

るるるる……るるるる……がちや

「はい、高山で、あ、もしもしナンタラ商業のどーたらですが、最後まで言わせてよ」

「ぺらぺらぺらこのような製品ぺらぺら、わが社ぺらぺらぺらぺら
らぺらぺら」

聞いてないな、こいつ。

これがセールス電話か。

初めて聞いたよ。

いきなりがちゃって言うのも可哀想だからちよつとだけ聞いといてあげよ。

「ペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーら」

なんだか外国語聞いている気分になってきたよ。

「ペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーらペーら」

よく息が続くな。

「ペーらペーらペーらとところでお宅のポットはペーらペーらですか？」

いや、んな事言われても意味分かんないし。

んーと……

「確信はありませんがステンレス製です。それが何か？」

「ペーらペーらペーらペーら」

分からんってのに。

「すいませーん、おーい……」「ペーらペーらペーらペーら」「この電話は現在

使われておりません！ 聞こえたよね？ 分かった？」「がちゃ

よし。

次に同じ番号でかかってきたらとってすぐ切ってやろつと。

純の場合。

るるるるる……るるるるる……

電話？ めんどくせえな……。

るるるるる……るるるるる……

五月蠅え。誰からだ。

《0120》

ぶつっ

切った。

0120なら知りあいじゃねえだろつしな。

岳の場合。

るるるる……るるるる……がちや

「はいっ！ 高山で」あ、もしもし、ナンタラ商業のどーたらと申しますがぺらぺらぺらぺら「誰？」

どーたらって何だよ。

「ぺらぺらぺらぺらぺらぺらぺらぺら」

んー？

早口言葉か？ オレ早口言葉はちょっと苦手なんだよな！。

「ぺらぺらぺらこのような製品ぺらぺら、わが社ぺらぺらぺらぺら」

製品ー？ わが社ー？

あっ！ コレがセールス電話か！ ヘーっ、ヘーっ！

「ぺらぺらぺらとところでお宅のポットはぺらぺらですか？」

ポットお？

「……………」

あー、何か待ってるし、何か言わねえといけねーんだよな。

「もー一度ゆっくりお願いします。聞かねーけど」

「あ、そうですね、それではぺらぺら」がちや

……あれっ？ 切れた。

ま、いつか。

「へーわだねえ」

お日様ぼかぼか、風はそよそよ。

おっさんうじうじ。

……うん？

『……ぶつぶつ、ぶつぶつ……』

うん……。

半透明だし、幽霊なのかな？

『ぶつぶつぶつぶつ、ぶつぶつぶつぶつ』

ぶつぶつ言いながらプランターの草むしってるけど。

……いや、実態がないからむしれてないけどさ。

『ぶーつぶつぶつぶつ、ぶつぶつ……』

……うん！

こつこつのは相手にしないに限る！

純兄がこつこつのに迷惑してるのはよく見てたからね。

「さて、光合成終わり！」

いや、あたし植物じゃないから光合成では無いけど。

さて、下手に関わらないためにも家の中に戻ろー……。

『見えるるじやる？ 見えるるよな！？ どうしたのって言うてく
れてもいいじやる！？』

あー……つと……。

めっかったー！

「おじさん、小さいね」

目測145センチ

『ほつとけー！』

「うん、分かった」

さて、望みどおりほつといてあげましようか。

『待て！ 何処に行く！』

「だって今ほつとけつて言われたから」

『話くらい聞いてくれ！』

「何の？ 『わしの！』 ヤだ『聞け！』 聞いて欲しいなら聞いて欲

しいと『言った！』 あ、そか。うん、それじゃ『待てと言つに！』

ヤだつてば『お前に拒否権はな』 あるもん」

家に入って、窓閉めて、鍵かけて。

これでよし！

『待〜て〜』

するっ

あー……しまった。

幽霊はドアが閉まってようが壁があるうがすり抜けられるんだっ
け。

「てい」

『んぎゃ！？』

対象に霊力がある程度あると無理らしいけど。

だからあたし達は幽霊を殴れるのだ！

『年寄りをもつといたわれ！』

「おじーさん年いくつ」

『わしは爺ではない！』

年寄りなのか年寄りじゃないのかどつちななの！？

「そーですか。どつちでもいいから成仏しなさい」

『いやじゃいやじゃあ〜！』

駄々っ子かお前は！？

「知り合いの死神でも呼んで差し上げましょうか」

呼べないけど。

『しにがみ？ あ、あの死んだ者の心臓を再び貫きにくる

あれか！？ あれでも成仏できるらしいが勘弁してくれ！』

へえ〜、そんな風にするの。

「大人しく成仏したら呼ばないであげるよ」

「いやーじゃー！ わしや高所恐怖症なんじゃ！ 五階以上にはのぼれんのじゃー！」

高所恐怖症と成仏とどんな関係があるの。

「知ったことか、成仏しなさい」

「高所恐怖症のわしに天へ上れと！？ 鬼か貴様！？」

鬼じゃないよ、人間だよ。

「……成仏の仕方教えてくれるかなー？」

「なんじゃ！ 知らんのか！」

いや普通の人は知らないと思いますが。

「天高く上るのじゃ！ 高く、高く、たか　　くな！　　大気圏を過ぎる位まで」

へえ〜……つて、あれ？

「それじゃあ宇宙に行った人全員成仏しちゃうじゃん」

「いや、わしはよく知らんが霊体以外は大丈夫らしい」

ふーん。

「何処で知ったのそんな事」

「……さあ？」

死んだら勝手に分かるようになるのかな？

死神のことかも含めて。

「へえ。分かった。ありがとう。頑張つて上つてね」

「鬼か！？」

「下を見なかったらいいだけでしょ？」

ぼんっ

「その手があつたか！」

気付いてなかったの！？

「ありがとな！ それじゃー！」

「うん、ばいばーい」

おじさん？ おじーさん？ どっちでもいいか、は天高く上っていきました。

……あれ、何か聞いて欲しかったんじゃ無かったの？

59 仕分け、中？

「ただいまー」

……親父か。

確か野草採りに行ってたっけ。

純だ。

「純ー、ちょっと仕分け手伝って」

「ヤだ」

めんどくせえ。

「そー言わないで。数多いんだし。どーせ暇だろ」

断定？

ま、事実暇だけど。

「分あったよ……」

「スギナはこっち。よもぎはこっちでカラシナはこっち、ノビルは
こっちね」

「へいへい……」

しっかし、量すげえな。

スーパーの袋四袋分位あるんじゃないか？

「えーっと、よもぎ餅の作りかたはー……んぎゃ!？」

「俺にやらせといて親父がやらねえのはどついう事だ?」

「えー、よもぎ餅の作りかた調べてあげてるんじゃない」

俺は頼んでねえ。

「大体よもぎ餅が好きなのは親父だけだろ」

「いや、だってね? たまたま会った人に『よもぎそんなに摘んで
どうするんですか』って聞かれて『乾燥させて一年分貯めておくん
です』って答えたら……」

貯めて、よもぎ茶にするんだろ?」

んな物殆ど誰も飲んでねえじゃねえか……。

「そしたら『あー、そっちですか。私は湯がいてよもぎ餅とかにしますねえ』って。別れてしばらくしてから『……湯がいてって言うてたよなあ……』って思ってた」

よもぎ茶は煎じてるからな。

「あの人はお湯の方を捨てて、俺は葉っぱの方を捨てて……」

「どっちが不自然かと聞かれたら明らかに親父の方だな」

「でしょ？ だからよもぎ餅の作りかたを調べておこうと思って」

……調べて、作るのが面倒だからって結局何もしないんじゃないかねえか？

「……って、それを俺に仕分け押付ける理由にすんじゃないかねえばしっ

「親を殴るとはなんちゅー親不孝もんだ！」

「知った事か」

押付けた親父が悪い。

「ちえっ。忍と純はよもぎ餅嫌いだから口に押し込んでやるうと思つたのに」

「それが本音か」

「なななあゝんの事かなゝあ？」

全部口から出てた……気付いてなかったのか？

「あ、そうそうもぐらの巣があったよ」

話思い切り変えやがった。

「で？ もぐら掘ったのか？」

「ないない。おにぎり持って行って穴にころころ転がしてたらどうする？」

おむすびころりん？

あれで穴の中に居たのはもぐらじゃなくて鼠だろ。

「どうもしねえよ。まず声が聞こえてくる訳ねえだろ」

「声が聞こえてくるまでやってたらどうする？」

はあ？

「単なる馬鹿だろ」

「単なる馬鹿だったらどうする？」

何がしたいんだか。

……とりあえず言い返して欲しいのか？

「単なる馬鹿だったら銀行員にはなれない」

「……ちい」

勝った。

60 ケーキ、ケーキ

「はーちゃん、行くよー！」

「おーっ！ やっちゃって！」

ぼふっ。

「薄力粉の煙が上がった……。」

「えーと、次は……混ぜる！」

「がちゃがちゃがちゃがちゃ」

「おーい、生地が飛んでるー！」

夏だ。

少しは箱が残ってるけど、落着いた家の台所でひーちゃんと春が何かを作ってる。

うん、コレがこの二人でなければ微笑ましいのになー……。

「なー、忍、こいつ等を止める手は」

「あると思う？」

「だよな……。」

「あるけど」

「あるのか！？」

「だれがないと言った？」

「あるとも言ってねえよな？」

「で？ どうやって止めんだ？」

「あの二人を台所から引き剥がす」

「何だ。最初っからやれば良かった。」

「とう」

「がしっ」

「わあっ！ お兄ちゃん何するんだよ！ 今ケーキ作ってるのー！」

「後ろから抱き上げたただけだろうが。」

「じたばたすんな！ 足が当たって痛い……。」

「出来たらお兄ちゃんにもあげるからー！」

「誰が欲しいと言った!?!」

「いらないうちも言っていないじゃん!?!」

俺と同じ言い返し方をすな!

「ね、離してよ、せつかくはーちゃんと久し振りに一緒に作ってるんだから」

「ほら! 離せ離せ離せ離せ!?!」

殴るな!

「痛い痛い痛い痛い」

「じゃあ離せばいいのに」

危険物を食わされるくらいなら殴られる方がマシだ!

「ちよつ、忍、へるぷ」

「女の子に助けを求めるなんて情けないよ、ウチは!」

何故に妹に投げかれにやならんのだ。

だいたい俺は忍を女の子視してねえし。

「頑張れなつくん、あたしは見てるから」

おまつ、ひでえ!

我が身可愛さに幼馴染を見捨てるか!?!

こいつ等のケーキとやらが出来たら大量に突っ込んでやる……。

しかも見てないし。視線は手に持つてる文庫本だし。

「はーなーせー、はーなーせー、はーなーせー」

言い方は間延びするようになったのに動きは激しくなったのは何故。

「えい〜い〜!」

「痛っ」

ひーちゃんに噛み付かれた……。

歯形がくつきり。

しかもかなり痛かった。顎の力すげえ。

「さっ! 続きするよっ!」

「お〜!」

止められません。諦めた。

ネバーギブアップ？ 何だそれは。旨いのか？
「あれいれてーこれ入れてー」
「ませませ〜」

数十分後

『出来た〜！』

ばんざーい、ばんざーい。

正にそれをやってる。

「はい、お兄ちゃん！〜」

「……ども」

見た目は安全なのになあ。

「はい〜、お姉ちゃん〜」

「あんがと」

今回は何が入ってるんだか。

ぱく

……あれ。

「とうとう俺の味覚はおかしくなったか？」

「旨いよー、はーちゃん、光」

『やったー(〜)〜！』

……あれ、忍が旨いって言うてることは別に俺の味覚がおかしくなったわけでは無いんだよな？

「なつくーん、おーい、戻ってこーい」

何処に？

目の前でぶんぶん手え振んの止める。

「旨いんでしょー？ 味覚がおかしくなったわけでは無いから安心しなよ」

「お前、何かした？」

「うん」

そこであっさりうなずかれるとは思わなかった。

「あの二人が入れそうな変なものは全て撤去しておいた」

……全て？

「そー言えばまだ家の冷蔵庫とか棚とかにそんなに物は入ってないし、調味料だつてちっちゃい容器にってるから移動可能だろうけど。」

「純兄も巻き込んで」

「……そーいや純は？」

「岳に百マス計算の勝負を挑まれて、ずっとやってる」
「何やってんだ。」

「あれ？ 変なもの撤去したつて俺聞いてねえんだけど」

「うん、隠してた」

「何故!？」

「気付かなかつた俺も俺だけどさ。」

「暇つぶし。これじゃ駄目？」

……俺、殴られ&噛み付かれ損？

61 かくれんぼー

「お姉ちゃん〜ん〜ん！」

「忍ちゃん！」

「忍ー！」

探されています。

何故探されているかというところ、もちろんあたしが隠れているからです。

忍です。

光&はーちゃんの妹コンビにより、ツインテールにされてしまった。

で、見られるの恥ずかしくて逃げ回ってる……と言つか隠れ回ってるというか。

だって絶対似合っていないもん！

さて問題です。

あたしは今どこに隠れているでしょーか？

「しーのーぶー、隠れる事ねえじゃん！」

一旦隠れたら出て行きたくなる。何故？

「あゝ、ここじゃないかな〜」

ぎく。

外から声が。

ぱか

……ぱか？ クローゼット？

小学の時クローゼットに隠れたこともあったな〜。

あそこは見つかりにくかった。

中でやたらリアルなパンダのぬいぐるみを見つけてびっくりしたな……。

しかもそれがおとーさんがおじーちゃんに貰った中国土産って聞いたときは“あいた口がふさがらない”を実行しちゃったな。

「居ないみたい」

「テレビの裏は？ よく隠れてたろ？」

「……もう入れないよ。」

「おお〜！ それがあつたか〜！」

「行くよひーちゃん！」

「お〜！」

「……よし。リビング行つたな？」

「あたしが隠れてるのは和室だからちよつと安心。」

「がらがらっ」

「忍ー、ここだろ」

「ぎっくうっ」

「うわーあ、開いた！ 開いた！」

「あたしの居る所の扉が開いた！」

「……あれ、居ない……。ぜつてえここだと思つたのに」「ぱたむ

……ほ。」

「見つからなかった……。」

「お兄ちゃん、居なかつたよ！」

「んー……何処行つたあ？」

「そー簡単に見つけられると思つなー！」

「なんだつて……」

「ちつちやい時から探すのは下手なくせに隠れるのは虫並に上手い

からなあ……」

「余計な一言が入つたよ！？」

「しかもそのたとえ何！？ なんで虫！？」

「何やつてんだ、テメエ等」

「……うげ。」

「あ、純！ お前も探すの手伝え！」

「主語を入れる。何を探すか分かんねえのにどうやって探せと？」

「ツインタールなお姉ちゃんだよ〜」

「光……ツインタールは余計だ。」

「……ツインなんたらは置いて、忍を探せばいいんだな？」
純兄、まさかツインテール知らない？
二つ結びだよ。って、聞こえないか。

「そうそう、それでしつかりからかってやろうという訳だ」
昨日の仕返し!?

それが分かってたから隠れてるんだよ！ 恥ずかしいのもあるけど！

「あ、そ」

うう……純兄の足音が遠ざかって行く……。
ん？ 遠ざかって行く？ 助かった！
今のうちにちよつと移動……。

「いなかっただね」

え、ちよ、早いよ!?! 10秒経ってないよ!?!

あう……今度は足音が近づいて……！
がらがらっ

きゃー！ 再び開いたー！

「純、そこはもう探したぜ？」

よし、いいぞなつくん！ そのまま純兄を別の所に……。

「ひゃうっ！」

足首？ まれたあ〜！

「……聞こえたか？」

『聞こえた（〜）！』

ああ〜……純兄絶対にやけてる。声がそんな感じだった！

「忍、居んだろ？ 出る」

命令形ですかー？

「出ねえと……」

痛い痛い痛い痛い！ 手に力入れないで！

「分かったよ！ もお！」

「牛〜？」

違う！

「おお、本当にツインテールだ」

「でもよく崩れなかったね。布団に潜ってたのに」
あたしが隠れてたのは押入れの布団の中。

分かった人！

……じゃなくて、恥ずかしいよ〜！

「へえ、似あつてんじゃねえか」

純兄からそんな言葉が飛び出すとは夢のまた夢のまた夢のまた夢にも思わなかった。

「餓鬼っぽくてよ」

「純兄酷い！」

おおいに予想してたけど！

「たーいまっ！」

「あゝ、岳お兄ちゃんだ〜」

うわー、岳来るなー！

「あれ、ねーちゃんどしたのそれ」

思ったそばから！

「もー、恥ずかしいんだから来ないでよう」

「え？ 忍恥ずいのそれ」

「なっくん、やってみる？」

ちっちやくて角みたいな奴なら出来るんじゃない？

「結構です」

「……………なー」

なんだよ岳。

「んなに恥ずかしいんなら解けば良かったんじゃねーの？」

「……………あゝ」

しまったあああああああ！

62 台所は罌だらけ？

かちやかちや

「純兄手伝つてくれてもいーのに……」
忍でーす。

今日から小学生達は学校。

おかーさんは今日仕事。

純兄とお留守番中です。

で、おかーさんに頼まれた台所の片付けしてんの。

食器を食器洗浄機に入れて、後はシンクを拭くだけだけどね。

……あ、バターでべったりなバターナイフ発見。

バター流しといたほうがいいよね、これ。

ジャーツ

よし。

……手がべたついたー。

石鹼で洗わないと取れないよねー。

固体石鹼は食器洗いようだから、液体石鹼ー、と。

ピシユッ

「きやわっ!」

何これ!?

頭押したらこっちに向かって飛んできたよ!?

何の罌!?

「忍? 腐ったみかんでも踏み潰したか?」

「違っよ!」

って言うか何で腐ったみかんなの!?

「純兄、この石鹼の頭、押してみて」

「石鹼? これがどうした?」

ピシユッ

「うお」

「わっ！」

またかかったあ！

「純兄なんで避けるの!?!」

って言うか何で避けられたの!?!

「いや、普通避けるだろ。予想してたし。テメエも避けたろ？ 避け切れなかったみてえだけど」

む。

確かに避けたけどさ。顔面直撃だけは避けたよ。

「何で分かったの?」

「テメエの服の肩んとこ。水がかかったみたいなお跡がある」

んむう。

「ちえっ。後は……コップだけか」

軽く流して、入れて。食器終わり、と。

「……純兄何?」

視線を感じます。

「いや、背伸びしないと食洗機に届かねえんだな、と思っただけ」

……どーせあたしはチビだもーん!

純兄の背が高すぎるんだもんだ!

まだまだ成長期だもん、あたし。

あ、食器洗い機の蓋、閉めとかないと。

ボタン ガンツドツガシャン!

「!?!」

た、たらい!?!

たらいが降ってきた!?!

あー……、食器洗い機の上においてたから……。

「びっくりしたあ……」

何の罰ゲーム?

いや、頭に直撃したわけじゃないけど。

「確認しとけよ……。よく置いてあんだから。鍋だったらどうすんだよ」

「純兄が見てくれてもよかったのに」
「見えるでしょー？」

「……普段からそこに置いてあるもんだから、違和感とか無くて」
「ごもつとも。」

後はシンク拭くだけかー。

さて、何が見つかるかな？

前やった時にはポツ〇ーを発見したんだよ。

多分……と言うか絶対おかーさんのつまみ食い用。
プスッ

「いった!？」

「今度は何だ」

「剣山!」

「はあっ!？」

あの生け花とかに使うあれ!

針がいつぱい生えてる奴!

「何でこんな所に……」

「……あ」

ん?

ゴンッ

「くっつたあ……」

何か硬いものが頭に直撃……。

「大丈夫か？」

「まな板!？ 純兄なんで教えてくれなかったの!？」

「一応当たらないように祈ってはおいた」

「意味ないし! 言ってくれた方がずつといいし!」

しかも一応つて。

「気付いた0・01秒後には当たってたからな」

0・01秒の祈りが通じるわけも無いしね。

「に、しても何でこんなに畏だらけなの?」

「……最初のやつ以外は注意してれば避けられたけどな」

.....不注意が原因だと？

63 新クラスは

「あつ、また同じクラスだ！」

「……………またか」

普通兄弟は離されるもんじゃねえのか？

純だ。

クラス発表の表は目の前にあつて。

それを忍と夏と一緒に見てるわけだ。

「あ、俺も一組だ」

「なつくんも？ あ、桜もあつた！ しーちゃんも！ あ、清も」

また全員同じかよ……………。

清の時だけでもいいような言い方なんだな。

「おはよ〜！」

「あ、桜ー、同じクラスだよ、一組！」

「本と？ 良かった〜！」

「よ」

「おはー、しじさな！」

混ぜんなつてのに。

「オレ探してくれた？」

「探しては無いけど見つけた。偶然。しーちゃんは探したけど。清は偶然」

そこを強調してやらなくても。

「しーちゃんも清も一組だよ！」

「皆一緒〜。転校生君も含めて」

「転校生？」「転校生？」

『転校生』を名前にするな。

「あーっ！ 夏！ お前居たのか！？」

「人を影が薄いみたいに言うな！」

「というのは冗談で」

夏、こけるな。

最初の『しじさな』の最後の『な』はデメエだろうが。

「ね、一組ってことはさ、担任って……」

「……しーちゃん。せつつつかく忘れてたのに思い出させないでくれるかな？」

一年、二年と一組の担任は嫌われてる教師なんだよな……。

嫌われてる理由は忘れたが。

ちなみにその教師、覚えてる人は限りなく少ないと思うが、前に『発音が悪い』って言ってた英語教師な。

「さ、お祈りの時間で〜す。牡蠣野胤かきのたね先生が担任にならないようお祈りしましょう」

なむなむ。

……俺と夏はしてねえけど。

「純、柿の種って人の名前か？」
字が違う。

「一応」

めんどくせえから訂正しねえけど。

黒板に名前書くときだつて長い何の……と、誰かが言った。
しかも自分で自分の名前書き間違えることもあるらしい。

蠣ってややこしいしな。

「無無明亦無無明尽乃至無老至亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得
無所得故……」

「忍、祈るのにはお経要らないの」

「やつぱり？ 半分まで来た所でそう思った」
遅っ。

「とゆー訳で、先生のこと知ってるとは思いますが、転校生も居るので一応自己紹介させてもらつと、牡蠣野胤です。柿の種では無い。いいねー」

結局、忍達の祈り（？）も空しく、担任は柿の種、もとい牡蠣野胤だった。

『ハア……』

この溜息のシンクロ率上げえ。

64 喧嘩を売る椅子

「痛っ」

「ねーちゃんどつたの？ 牛乳パックにでも指挟んだ？」

「な訳あるか！」

「だよな。」

「岳でーい。」

ねーちゃんがな、牛乳飲もうとして急に指銜えたからどーしたのかなーと思つて。

なんて姉思いな弟！

誰か褒めて。

「で、結局どしたの」

「牛乳がしみただけ。昨日学校の椅子に喧嘩売られたんだよ」

牛乳つてしみるんだなー。

ていうか

「学校の椅子に喧嘩売られたあ！？ どーやって！？ 椅子つて喋るのか！？」

『喧嘩〜喧嘩〜、喧嘩は要りませんか〜』……違つか。

「そーじゃなくて、学校の椅子の脚つて金属じゃん？」

「うん」

まさか脚が勝手に移動したとか！？ ……違つか。

「で、椅子引く時つて椅子の下に手、入れるじゃん？」

「いや、オレ足で引つ張る人」

「……あたしはそうすんの！ で、椅子の下に手、入れたら棘があつて……」

金属に棘！？ 何故！？

「四回くらい引つかかった」

ねーちゃん忘れっぽいしなー。

どーでもいい事は。

確か昨日名簿見ながら『これ誰?』って20人位は言ってた。

で、その内10人分はにーちゃんに突っ込まれてた。

『一昨年同じクラスだっただろが』って。
話を戻そう。

「それさー、椅子の気持ち考えたらさらにムカつくな」

「え? なんで?」

だつてさ?

一回目『あ、引つかかった』

二回目『あ、まあ引つかりよった』

三回目『ぷつ、また引つかかってやんの』

四回目『まだ引つかかる! アホや』

「……ムカつくね。何気に関西弁だとさらに
「な?」

あ、ねーちゃん、牛乳パック持つ手に力入れんな!

牛乳の泡出てるぜ!

「うん、ムカつくねー。そうでなくてもムカついたけど」

「ん? じゃー何かしたのか?」

椅子に。

……何かつて何を?

「うん、ムカついたからペンチで棘をねじ切つといた
でえっ!?!」

「そのペンチはどこから!?!」

「鞆の中からだけど? それが何か」

「何でペンチが鞆の中に入ってたんだよ!?!」

おかしいだろ!?! 普通に考えて!

「うん、しーちゃんと桜におんなじ事言われた」
そらそーだ。

光のポーチじゃあるまいし……。

光だつて持つてるか怪しいぞペンチつて。

「で、結局何でペンチが鞆に入ってたんだ?」

「んーつとねー。卒業式の前の週に何となくどっかで役に立ちそう
な気がして入れた」

で、しっかり役に立ったと。

ねーちゃんの勘ってすげー。

今回以外当たったことねーけど！

65 お花見！ ただし花を見ているかは不明

『花見をしよう！』

つというお父さんとはーちゃん父の言葉で……。……。

近所の公園にお花見に来ました。

はーちゃん一家と私達一家と、あと仙波家。

合計十四人！

光です。

この公園ね、桜の木がいっぱい植えてあるからお花見する人がいっぱいいるんだよ。

でも見た感じではお花を見てる人は殆ど居ないけどね。

「忍、何でわざわざ木に登る」

「だってこうしないと絶対花見れないもん」

見れないじゃなくて見ないの間違いじゃないのかな？

「じゃあいつその事何処まで上れるかやってみるよ」

「おけー」

「夏、煽るな。本気でやるから」

時既に遅し。お姉ちゃんは既にてっぺん近くまで上ったよ。

「あ、こら神谷！ オレの皿の上のおかず取るな！！」

「このおかずは神谷のだもん。たけるにいちちゃんのは……消えた！」

神谷君のおなかの中にね。

「はむはむ、おいし！ 秋ちゃん最高」

「……おだてても何も出ないわよ、凜」

「おだててないわよ？」

秋ちゃんって言うのははーちゃんのお母さんね。

凜って言うのはお母さんの名前。

幼馴染らしいよ、お母さん達も。

「ひーちゃん、これ美味しいよ！」

……何故めざしが……？

しかもいつかお兄ちゃんやお姉ちゃんの恐怖の対象になった真っ黒めざし〜！

「苦くない〜？」

「んむ？ 苦いけど、それはそれでおいしーよ！」

結局苦いんだね〜。

……ちよつと実験〜。

美味しそうだったら食べよう〜。

「お父さん〜！」

「はい？」

口の中に〜……すぽ〜っ！

「 # % \$ @ ○ ! ? 」

……いつかの真っ黒めざし食べたときと同じ反応〜。

危険物確定〜！

「はーちゃん〜、やっぱり苦いみたい〜」

「ありや、そお？ じゃあお兄ちゃんにあげよつと！」

……数秒後〜。

「さっきの人体実験見られてたみたい」

「使えなかつたらしい〜。」

「ひかりねえたん、たべゆ？」

……菜美ちゃんの小さいおててに乗っているのは桜の花びらなん

だけど〜……。

「食べられません〜。」

「菜美ちゃん食べたの〜？」

「ううん、じっけんなの」

「何処で覚えたのかな〜？」

「えいつたつとつ」「ていつてえっんっ」

「ひーちゃんひーちゃん！ なんだかそーだいな戦いが！」

「岳お兄ちゃんと神谷君〜……。」

煮物のこんにやくをお箸で取り合っている最中です〜。

箸が早くてまるでこんにやくが浮いてるみたい〜。

「ね、秋ちゃん。お父さん達何やってるのかな？」
お父さん達？

「……………向こうで草弄ってるけど。」
負のオーラを漂わせながら。」

「……………ほっときなさい」

「分かった。もしかしたら天ぷらのための野草採ってるのかもね」

「どうやったらあれがそう見えるのかしら……………」

秋さん……………遠い目をしないで？」

「しのぶねえたん！ なみ、かあい？」

「うん、かわいいーかわいいー」

「きゃーっ!!」

うわ、嬉しそ。

髪に桜の花挿してもらったんだね。

「春ちゃん、光、これ食べない？」

あ、名前は出たけど今まで登場はしてなかった奈津叔母さんこ
となっちゃん。

手に持つてるのは、レアチーズケーキ！

『食べる(〜)！』

「はい、どうぞ」

あむあむ……………むぐむぐ……………美味し。

ガチンッ

……………!?

今の何〜!? ガチンって言ったよ〜!?

……………スプーン発掘〜!

何故ケーキの中にスプーンが〜!?

「なっちゃん、スプーン出てきたよ〜？」

「あつ！ 昨日無くしたスプーン！ 何処に行ったのかと思ったら

……………ケーキの中に入ってたのね。ありがとう！」

……………どうやったらケーキの中にスプーンが入るんだろ。

「だだだだだだだ！」「ととととととととと！」

「両者一步も譲らない！ さて、さつま芋はどちらの手に……じゃなくて腹に収まるのか！」

あれ、岳お兄ちゃんと神谷君がとりあってたのはこんにゃくじやなかったっけ。

後いつの間にはーちゃんは実況を？

「さ、ひーちゃん食べよ！」

「いつの間にここへ……！」

瞬間移動……!? テレポーターション……!?

「ふっふっふ……実はあの二人の実況をする振りをして……さつま芋とリンゴの甘煮をくすねて来たのだ！」

レーズン入り……!

「はーちゃんでかした……! お主も悪よの……」

「失敬な。我輩を愚弄すむぐむぐ」

台詞最後まで言おまぐまぐ……。

おいし……

65 お花見！ ただし花を見ているかは不明（後書き）

お花見の時にちゃんと桜を見るのは何人くらいだろう……。最近浮かんだどうでもいい疑問です。

66 迷っちゃった校舎内

「ひーちゃん、何して遊ぶ？」

「ん〜……そうだね〜、あ〜、外でドッチボールやってるみたいだよ〜」

ドッチボール！？ いーね、いーね！

ウチ、ドッチ大好き！

はーちゃんこと春でーっす！

今はお昼休み。何して遊ぶか考えてたの！

「ひーちゃん、行こっ！」

「へ〜？ ……うん〜！」

目指すは運動場！

……………の筈が。

「ここ何処！？」

迷子？ 違う！ ちょっと迷っただけ！

……迷子か。

だってだって！ウチはこの学校に転校したてなんだもん！

まだ二日目なんだから迷子になって何が悪いの！

「ひーちゃん……？ あれ！？ いない！？」

あ………そっか、早く行きたかったから本気で走っちゃって……。

はぐれちゃったんだね。ドンマイウチ。

いや、『気にするな』じゃないよ！

教室にも帰れない！

落着けウチ。まずは現状把握……は、迷子で、現在地把握しないと。

どーやって？

ここ地図ないよ！

しよーがない。周りに何があるか見てみよう。

前：廊下

後：廊下

左：トイレ（何か臭い）

右：美術室

……分らないよ！

このトイレ使わないし！

美術室なんて使ったことあるわけないし！

うー……ん、誰か居たりしないかなあ。

ドアの上のほうは曇ガラスじゃないし。

「よいしょっと……」

誰も居ない。

接骨像とか気味悪いよ。

……あれ、石膏像だっけ？ まあいいや。

あ、棚の上には絵が乗ってる。

「……きやあああああ！！」

モナリザ！？ びっくりした。怖いよ！！

模写かな、さっきの……。

「何？」「どしたの？」「幽霊とか！」「んなアホな……」

あ、人が集まってる……。

「あれ？ はーちゃんじゃねーの。何してんだ？」

「あ、岳くん……。なんでもないよ。ちよつと美術室の中のモナリ

ザにびっくりしただけ！」

ところで岳くん、後ろに息切らした人が居るけどそれは誰なの？

「何だ、モナリザか……モナリザ！？」

「えっ！？ 何！？」

「この学校にモナリザ何て置いてねーよ！？」

……ええええええええええ！！

じゃあさっきの何！？ なんなの！？

「馬鹿。おいてあるよ。模写」

「お前が知らないだけだろうが……はあっ」

「そっだよ」

なんだ……びっくりした。

突然人ごみの中から出てきた人たちもびっくりしたけど。

「ばーか、オレだってそれくらい知ってた！ 忘れてただけだ！」

「……覚えてなかったなら同じじゃね？」

同意しまーす！

「あ、それよりはーちゃん、その女子トイレ気をつけるよー」

トイレに気をつける？ どういうこと！？

「花○さんが出るんだってさー！」

………トイレの花○さん！？

「きゃあああああああああああー！！」

67 教師の自己紹介……って？

はあ……。

つと、いきなり溜息なんかついて悪い。

今、学年集会中で……なんで教師の話は長いんだろつなと思って純だ。

「教師の話は長いつて言うけどな？」

言っではない。思っただけで。

「教師の話が長いときには三つのパターンがある」

俺の勘違いでなければ今は担当教師の自己紹介だったと思うんだけど。

……何故そんな話になる。

いや、誰かは知ってるからいいけど。

学年主任の池中。一部の人間曰くツンデレ、らしい。

……ところで、ツンデレって何だ？

「その三つのパターンの一つ目は、話聴いてない奴が居るとき。こら坂本お前だ。こついつのがいるから、何回も言つ羽目になる。」

二つ目は、内容が難しくて噛み砕いて言わないと分からない場合な」

そんな事あつたか？

「で、三番目は……お前等今ちゃんとこつち向いて聞いてるだろ？」

こついつ時にもつと話したくなって長くなる場合」

……忍、目を逸らすな。

「こら、目を逸らすな」

忍だけじゃ無かった。

「ん、まあこれで終わり」

唐突だな！？

1〜4組の担任の教師の自己紹介はごくごく普通だったから割合。はい、次は美術科担当になった川岸先生かわきし、よろしくお願ひします」

この教師は今年来たばかり。

見た目は……はつきり言って、はつきり言わなくても、教師に見えない。

はげた、訂正。そつた頭に眼鏡が乗ってる。

「はい、川岸明憲あきのりと言います。しよつちゆう『美術の教師』と言つとびつくりされる」

だろうな。

「で、よく何に見間違えられるかと言つと……不動産屋、とか……何となく分かる気がする。

「後、ヤクザ」

ヤクザ!?

「趣味はスノボとか山登り……ただしゆっくり」
太ってるしな。

「スノボはたまにインストラクターをやつてんの。『はいここをこゝ曲がつてはいよくできました!』つて。やつてんの」
その台詞を言う時だけ妙に声が高くなったのは……別にいいか。

「……はい、こんなもんでよろしいでしょうか?」

「ああはい、じゃあ次、魚有先生つおありお願いします」

この教師もさっきのと同じく、今年来た教師。

「ええと、さっきの川岸先生のような面白いことは言えませんので……」

それはいい。

「血液型はB型、趣味は因数分解」

どんな趣味だよ。

「ええ、最後にですね。さっきからずっと動いてますが」

ああ、前に行つたり後ろに下がつたり……。足を上げたりおろしたりその他諸々。

とにかくずっと動いてるな。

「じつとしてると落着かないんです。止まったら死んじゃいます」
鮪?

68 何でもバスケットー！

「んーと……昨日十二時代に寝た人！」

「ばたばたがたがた……」

「あ、いるんだ。」

「忍でーす。」

今日はね、昨日委員会とか係とか決めちゃってたからHRがやること無いんだ。

だからクラスのリーダー的な人の提案でなんでもバスケットやってんの。

『小学生かよ……』って呟いてた人も居ただけだね。

「純兄とか純兄とか純兄とか」

「……またおれ……」

「どんまい、水谷。」

「確か四回目だったね。」

「……男子」

「がたがたがたがた！」

「あたし、さつきからずっと動いてないんだけど。だつてね？」

男子の前が昨日十二時代に寝た人で、前が漢字で名前が二文字の人、それより前が学ラン着てる人。

「前に動いたのは七回前のなんでもバスケットだよ。」

「えーっ……まさかのオレ!？」

「まさかも何も〜」「三回目だし」

「桜、しーちゃんナイス。」

「清、早く言え」

「んー……アニメ、鉄道、銃器、何でもいいからオタク！」

「しーん……」。

「え、居ない!？」

らしいねー。

一部の人がわざわざ動く奴がいるか、な視線を清に送ってるけど。

「……じゃ、山口に住んだことがある人！」

そんなのあたしと純兄となつくんしかいないでしょ!?

……セーフ!

「えっ!? 夏お前山口住んだことあんの!？」

「え、言わなかったか？」

『聞いてねーよ』

ナイスシンクロ!

はい、座れなかったのはなつくんね。

「……………」

なつくん考え中……。

で、純兄の方を見たとなんにやって笑って。

「このクラス内にお……妹が居る奴」

なつくん、今弟って言おうとしたでしょ。

「俺だけだろ、どう考えても」

個人攻撃。見てる方は楽しいんだよ!

頑張れ純兄、止める者はいない!

「まだ生きたい奴」

全員でしょ!?

しかも何!? その地味に怖い質問!?

がたがたがたがた……

「イタツ!」

あ、誰か黒板のチョーク置く所に背中ぶつけた。

実はさっきから続出中なんだよ。

「うっそ、また!？」

このゲームを提案したお方。名前はまだ無い。

いや、覚えてないだけだ。

「いやー、もう。じゃあねえ……身長152センチの人!」

あ、あたし152。

「……あたしだけ!？」

「本とに居た!？」

居ると思つて言つたんじゃないの!？」

うう……んじゃーねえ……。

「生まれたことがある人!」

『全員だろ!？』

なんで純兄には突つ込まないであたしには突つ込むの!？」

「つて言うか生まれてなかったら居ないし」

「ごもつともであります。」

でもまあ、結構受けたみたいだからいいや。

「あう、なつちやったく」

残つたのは桜ね。

「教師」

考えもしなかったね。

「ナイス山内!」

えーつと、誰か分からないけどグツと親指を突きたてた人がある。

あ、よく見たら皆嬉しそー。嫌われとりますな。柿の種。

「ふむうん……じゃあ、A型とAB型つ!」

最初の『ふむうん』つて何。

つて、落着いてる場合じゃなかった! あたしAB型!

「また……」

水谷……本と『また』だね。

「……しじみ」

「シジミじゃないよ! 紫波しなみだよ!」

うおっ、本当に居た。

つて言うか、否定するなら動かないでおこつよ。

「あだ名はしじみ、つまりお前」

はい、『しじみ』もとい『紫波』が女の子だと思つた方!

残念! れっきとした男子です。

ついでに言うと『紫波』つて下の名前ね。

いや、それにしても、水谷友達で来たんだね。よかったよかった。

「酷いなあ……んつとーあつ！桜を見たことがある人！」

これも全員だよね！？窓から見えるし！

……………あれ？

「何でまた僕なの！？」

しじみ………何で座れなかったのかが不思議だよ。

69 ワークに突っ込んでみよう！ 屁理屈で

「……光、光、ちよつとこれ見ろよ」

「どれ〜？」

に「ちゃんが机の上に置いてた英語のワーク。

どーみても不思議なんだよな」。

岳だ！

「ほらほら、ここ。おかしーだろ！？」

「あいきゃんとりーどいんぐりつしゅ〜」

言えてるじゃねーか。どこで覚えた？

「とりあえず英語で何か読むように言われた時はこう言つとけ〜、
つてお姉ちゃんが言つてたよ〜」

「いや、オレは英語なんてちんぷんかんぷん異国語の様だから見て
ねーんだけど」

「……岳お兄ちゃん〜」

あん？

「英語は異国語でしょ〜？」

……あ。そっか。

「標準語だ！」

ということにしておこう！ 間違つてはいない筈。

「で〜？ なんて書いてあるの〜？」

「『お母さん、次に何を手伝いましょうか』」

隣に和約が書いてあつたからこそ読めたのだ！

おかしーだろ！？

いや、和約が書いてあつたことじゃなくて、内容の方！

「こんなことをこんな言い方で言う子どもがいる筈が無い！」

「あ〜、確かに〜。『じょうりゆうかいきゆう〜？ とか位だよ
ね〜」

日本にそんなの居んのか？

「あとこー!」

『来週あなたは十五歳になります』

「こころ? どうおかしいの?」

だって、だってな!?

「これが書かれた時に来週なら、今頃数年前とかになってる筈だろ!?!」

作られてからそこそ経ってるワークみてーだし。

「……岳お兄ちゃん、そこはね、アニメとかの登場人物が年を取らないのと同じ事だよ」

そーなのか?

「ドラ もんもの 太くんなんてね、ちゃあんと誕生日やってるのにずう〜と五年生のまんまなんだよ?」

あー……。いつ元の年に戻ってるんだろうな、あれ。

「あ、あとあとあと!」

「そんなに言わなくても聞こえてるよ〜」
んなこたー、わーっとる。

『わたしは医者になるつもりです』

「なれたかどーか、もんの凄く気になっちまうじゃねーか!」

「なれなかつたんだよ〜」

「おい!?!」

にっこり笑ってんな事をゆーな!

「え〜? じゃあなれた〜」

じゃあつて、おい。

「そーゆーことじゃなく「じゃあどう言う事なの?」……言い返せない」

なんだろー、この敗北感というかなんというか。

「なれなかつたんじゃないのならなれたしか選択肢ないじゃない〜」

「ごもつともでございます、はい。

はあ、妹に負けた。

次っ!

立ち直りが早いのが我の……えー……何だっけ。

次！

『彼を手伝って下さい』

「自分が行けよ！ なぁ！？」

「あゝ、そっちなのか？」

うん？

「てつきり〜、『彼って誰だ！？』かと思っちゃった〜
確かに。」

「彼って誰だ！？」

70 子供の相手とは大変なのである

「待てー！」

ぴたっ

「わあっ！」

あれ？

待てっって言われたから止まったのに。

「急に止まるな！」

「待てっって言われたから止まったのに！」

忍でーす。

いや〜、あのね？

近所の二年生の子が友達×5を連れて遊びに来ただけどね？

あたしは中学生虐待を受けてるのよ。

なんで!？

あたし一人で六人も相手にできるわけ……あるんだけど。

っって言つか現在進行形でやってるんだけど。

ほら、小学校低学年の子が相手なんだよ？ 蹴ったり殴ったり出

来ないでしょ!？

だから適当にこけさせるor逃げるしか方法が無いわけであって。

あたしはまだ制服を着替えていないのであって。

とてつもなくやりにくい。

「にいちちゃん行くぞ！」

「誰かにいちちゃんだ!？ スカートはいてるでしょ!？」

制服以外には持ってないけど。

「あ、じゃあオカマ？」

「何でそうなる訳!？」

せめて着替えさせて欲しい。

スカートって広がるから動きにくいんだよ!

とりあえず部屋まで逃げ込めば後は何とかなる!

……と考えたあたしが馬鹿だった。

あたしと光の部屋には鍵がない。勝手に入ってこれる。着替えられるじょーたいじゃないでしょーが！

はあゝ。

とりあえずブレザーとスカートだけ脱いどこ。

スカートの下に体操服のズボンはいといてよかったよ。

「えいえいえいえいえいえいえい！」

はあゝ。無防備な状態で何故こんなに殴られないといけないのだろっかー。

ぬいぐるみで、なだけましかけど。

「こら、女の子が乱暴なんかしちやいけません！

……とするとやってるあたしって？」

どうしよう。自分で言っというてちよつと悲しくなった。

女の子が一人混じってたんだよね。

「よー……って、なんだ。忍まだ着替えてねえの？ いや、どっちかつつーと着替え途中？」

まあたなつくん不法侵入してー。

でも今は！

「なつくん、丁度良かった！」

「丁度悪い所に来たようだから俺帰るな」

「酷い！」

しかも本当に帰っちゃうし！ ベランダから。

「忍ー、無事か？」

「無事だけど手伝ってよ純兄！」

すがり付いて来られるのって暑いんだよ！

あと地味に殴られるの痛いし。

「必殺！」

うん？

空気入れポンプのホース？

何で口に銜えてるの？

「ほーふこうれき（ホース攻撃）！
ふーっ

……………終わり？

「何にもなってるないから」

「てへっ」

おーい。

……………あー、のど渴いた。水飲みたい。
となったら一階したに下りないと。

「あっ！ 逃げたー！」
ダッシュ！

「階段下りるの早っ!?!」

ふふふ、何しろ毎回駆け下りてるからね。慣れたのだ。
皆は真似しないでねー。うちの階段急だからー。
って、思うだけ。

言ってる余裕無いんだもん！

こっぷー。

「あ、あそこ！」

……………二年生の皆さん、下りるの早いねー。

「水くらい飲まして？」

『ダメー!』

何で!?! 酷いよ!?! 人権無視ですか!?!

……………二年生じゃまだ分からないかな？

「じゅーんにー! へるぷみい!」
「断る」

酷いよ!

しかもいつの間に一階したに!?!

「もっかい言うよ? 水飲ませて」

『ダメー』

残念ながらもう飲んでます。ごくごく。

うん、のど乾いてる時が一番おいし。

「あっっー」

しかし体温はすぐには下がらない。

「カッターのボタン開けるよ。第一第一ボタンまで閉めるから暑いんだろっが」

あ、その手があつたか。

「ありがと、純兄」

「どういたしまして。よく気付かなかつたな」

あ、何か今ものすごく馬鹿にされたような気がする。

「それーっ」

「のあっ!?!」

また来たーっ!

「逃げるっ」

『逃げるなー!』

「逃げるっ! 大事なことなので二回言いました」

「何処がどう大事なことなのか五十文字以上で説明して欲しい」

純兄が何か言ってるけど無視!

今はとにかく身の安全をはかるのだーっ!

71 お兄ちゃんを起ここしまじょう

「純兄ー！」

「……………すー」

無視されたー。

「起ーきるー」

「……………すー」

また無視されたー。

忍でーす。

純兄がね、いつもムダに早く起きるのに今日はなかなか起きないんだよ。

えっと……………今は、六時。

純兄だったらいつも五時半には起きてるのになー。

あたしは今日早く目が覚めたんだよ。二度寝が出来なかった。

で、純兄に相手してもらおうと思ったたらこの状態。

「純にー、上乘るよ？」

「……………すー」

OKとあたしは解釈した！

そーれっ

ぼふっ

「うぐっ」

あ、起きた？

「……………すー」

ううむ、なかなかしぶとい。

おとーさんなら今ので起きるのに。

うーん、次の手は……………。

「純にー、殴るよ？」

「……………すー」

OKと再び解釈した！

とう

ぼすっ

……避けられた。

ほんとーに寝てるの？

「純にー、起きないと耳元で叫ぶよ？」

「……………すー」

OKと二度解釈した！

すうううううう

「起きろおおおおおおおー！」

「……………すー」

すげえ、起きない。

岳なら一発なのに。

「ねーちゃん……………五月蠅い……………」

「あ、丁度いいところに起きたな岳！」

「悪い所に起きたようだからオレ寝る。やーすみ」

くおら。

昨日もなつくんにおんなじことやられたような気がするぞ。

「岳、純兄起こすの手伝ってよ」

「えー……………後がこえーもん。ヤだー」

「そー言わずに」

「どー言わずに？」

そー返されるとは思わなかったよ。

「ヤだと言わずに」

「じゃあ絶対に嫌だ」

強くしないで。

「だからそー言わずに」

「どー言わずに？」

……………止めた。無限ループしそうだ。

「お姉ちゃん〜、どうしたの〜？」

「お、ひーちゃん手伝って」

ひーちゃんと呼んだのは単なる気分だ、うん。

「何を〜?」

「純兄起こすの」

「純お兄ちゃん寝てるの〜?」

見て分らんかー!。

そして手に持っているマッ◯◯(黒)はなんだー。

「落書きしよう〜」

おい。

いいね!

「ねーちゃん、光、後がこえーぞー」

「……………」

それもそーなんだけど。

純兄がこんな隙だらけなのも珍しいものでー。

「せめてまぶたに目」

「やめとけって」

「そっいえば〜」

ん?

「どうして純お兄ちゃん今日は起きるの遅いの〜?」

そー言えは。

いや、普通に考えてまだ早い時間帯な気もするけど。

「純兄の机に何か手がかりが」

あつた。

一瞬にして見つかった。

それはもう、電光石火のごとく。

「にーちゃんこれやってたのか?」

「ぼいねー」

「凄い〜。最後までやってある〜」

それは…………。

えっと…………。

ほら、9×9のマスの中に縦と横で1〜9の数字がかぶらないよ

うに入れるアレ。

3×3のマスの中でもかぶっちゃダメな奴。

「魔方陣？」

「ねーちゃん違う。数独」

あ、そうそうそれ。

「純お兄ちゃんこれやってたんだね〜」

そー言えば前におばーちゃんが『やり始めたら止まらない』って
言ってた。

「さあ！ 理由も分かった所で、純兄を起こそう」

「結局そこに戻んのかよ！？」

あたりまえではないか。

同時刻。お隣の夏の部屋。

「お兄ちゃん起きろっ！」
ぼすっ

どどどどどどどどどど！

春の小さな拳が夏の周りに降り注ぐ。

「ったっ！」

「よしっ！ 一発入った！！ まだまだ行っくよー！」

どどどどどどどどどど……

「危ねっ！ 痛えっつってんだろっが！」

「聞いてなーい」

春の、春による、春の楽しみのための、お兄ちゃん起こしが行わ
れていた。

いや、もう起きてるけど。

72 最凶×3 教師の崩壊

「待てッ!!」

「待てと言われて待つ奴がいるものか」

「……同感」

逃―げろ―ッ!

あ―、楽し。

剣だ!

凶、訂正。今日も今日とてオレ達（オレ&天&斬）は学園内を走り回ってるぜ!

理由? 教師に追いかけてられているから以外に何がある?

実はな、オレ達を追い掛け回すという（ある意味）度胸のある教師がこの学校には一人だけいるんだよ。

それが、我等が担任! 灯雷羅音（先生）!

オレ的に『い』が足りないと思う。

だってさ、『らいおん』の方が迫力あるじゃねーか。

「いー加減止まれ! おれを走り殺す気か!？」

「……らおんが止まればいい、それだけ」

「うん、斬の言うとおりでと思うな」
オレも。

あ、ちなみに、何で追いかけてつかと言うと……。

……あれ?なんでだったっけか?

「クソッ! さっさと答案用紙返せ!」

あ、そーそー!

成績に関わるとか言うだーいじなテストの答案用紙（採点前）を盗ったんだった。

実は、オレ等のクラスの奴、一部頭悪くてな、『やり直したい』
という声が殺到。

だから! オレ等でそのテストのやり直しをさせるべく、答案用

紙を消してしまおうと言うわけだ！

いやー、こつこつことばっかりやるから教師には目の敵にされ、生徒には人気者にされ。

うんうん。ベストな状態！ か？

「そついえば、剣」

「あん？」

「答案用紙、どう処分するんだ？」

「……………」

「斬」

「…………凍らしても何にもならない、と思うだよなー。」

「とりあえず、教室に持ってくか！」

「OK」

目の前の曲がり角を右に曲がればー。

はい、とーちやつく。

「皆のものー！ 答案用紙を取り返してきたぞー！」

『でかした！』

褒められた！

ちなみに、一クラス10人程度しかいない。

だから対して混雑せずに答案用紙は皆の下へ。

よし！ めでたしめでたし！

……………つて、あれ？

「こらッ！ 今すぐ戻せ！ ……はあ、はあ」

息切れしとる。

まだ若いのにー！

「それ行け！ 斬！」

「…………語呂悪い。後俺は空飛ぶアンパンじゃない」

あ、言った後で思った。

「はあ、はあ……………でえっ！？」

どかーん

あ、床に穴が。

「おいっ！ これの修理は誰がすると思ってる！？」

「誰がするんだ？」

天の言うとおり！ オレも知らん。

「こーゆーところの修理は教師がさせられるんだよ！ 覚えておけ
！」

テストにでるのか？

「……そもそもらおんが避けなければ床に穴は開かない」

「うん。そうだな」

「だあほっ！ おれに風穴が開くわ！」

……えーっと、関西弁当？

違っ たっけ。

「……大丈夫。穴が開いても氷で塞ぐから」

スケートリンクの出来上がりーってか？

「止めてくれ……」

あ、らおん顔色悪い。風邪か？

「らおん、医務室と病院どっちがいい？」

「……そうだな、できれば精神科の病院に行かせて欲しい。

お前等の担任をやっていることが夢か、幻覚、幻聴だったら……」

おーい、遠い目をするなー。帰って来ーい。

72 最凶×3 教師の崩壊（後書き）

夏休みに出すつもりが……。

何となく恋しくなって出しちゃいました。

らおん、頑張れ。

君の苦勞はいずれきつと報われる……。

報われないかもしれないが（笑）

73 ドンマイ先生!

「はい、とゆう訳で、先生の自己紹介はこれで終わりー。質問とかある人!」

はい。

おお、結構上がってんじゃん。

岳だ!

んとな、今音楽で、今年度の音楽の先生が変わったから先生が自己紹介してた。

名前は……えっと……忘れた!!

「んーと、じゃあ……はい、高山、くん?」

「高山だ! まんまだろ!」

「どーやったら『たかやま』が『こうやま』になる!」

「あはは……はい、どうぞ」

あ、流しやがったな。

「先生彼女いる!」

「それ! これやっぱり聞かないと!」

シーン……。

シケたな。花咲。

「ちよっ!」

『ぎやははははははは!』

「ちよっ!? もー……」

なんだかものすごく微妙な顔してる……。

笑ってっけど。

「先生彼女いると思う?」

『居ないと思う!』「いるでしょ! ……あれ?」

シーン……。

またシケたな、花咲。

「……はい、居ません」

「えーっ!?! 何で!?!」

「いや、何でと言われても……」

その顔じゃなー……とは可哀想だから止めとこっつ。

「はい次ー……、中谷くん?」

「ア○パ○マンとプ○さんどっちが好き?」

翔……なんだその質問。

「え……中谷はどっちが好きなんだ?」

「え、おれ? おれはア○パ○マンかなー」

ほー、初耳だ。

「最終的に毎回強くなるし……いざとなったら食べられるし
非常食!?!」

「プ○さんだつて蜂蜜持つてんじゃん」

「アンパンの方が腹膨れるだろ」

やっぱり非常食だ。

「はい、次はー……花咲」

「よし来たッ!」

早く言えー。

「好きな芸能人は!?!」

「芸能人? ……芸能人分らん」

おお、仲間だ。

いやだつて、家でテレビ付いてるのつてニュースとかクイズ番組
とかくれーしか見ねーんだもん。

「えー」

いや、えーつつつてもな。

「よし、じゃあ次で最後にするぞー」

「えー」

キーンコーンカーンコーン……

おりよ?

「あれ!?!」

『終わったー!』

何とか先生、これから赤ちゃんと時間をみて授業してくれよ！

「あのー……」

「ん？」「あ？」

純兄、その返事の仕方はどうかと。

「え、ええと、部活の場所分からなかったんですけど……」
「忍でーす。」

そっか、今日から一年は部活見学なんだ。

「何部行きたいの？」

「テニス部です……」

「あれ？ 外に居なかった？」

「おっかしーなー。」

今は晴れちゃ居ないけど雨降ってる訳でもないし……。

あ、今朝雨降ったんだっけ？

「それが……三年生に聞いたら中って言われて、二年生に聞いたら外って……」

おい、テニ部……。

「外は見てみたのか？」

「あ、はい」

純兄、心当たりあるのー？

「……その廊下曲がった所は見たか？ 後、三階の同じ場所」
「いえ、見てないです……ありがとうございます！」

行っちゃった。

あ、ちなみにここは二階ねー。

うちの学校、一年は四階で二年が三階、三年は二階なの。

「純兄なんで知ってるの？」

「雨の日に残ってたなら、たまに見かけるからな」

「ほー。……いつ残ってたんだろ？」

「あのー」

……名札と上靴が黄色。また一年生。

「吹奏楽部って何処ですか？」

「いや音聞こえるでしょ！？ 三階の音楽室だよ！」

今も聞こえてるよ！？ ほら、あの某体は子ども頭脳は大人名探偵のテーマ曲！！

「あ、そー言えばそーですね。ありがとうございます」

そー言えばって……。気付かなかったんかい。

「あの一」

……またまたかい。

あれ？ 上靴が緑だから三年？

「卓球部何処？」

あれ、この人見覚えが……。

「体育館か多目的室だろうが。会長兼卓球部部长」

ああ！ 生徒会長だ！

って、卓球部部长！？ 自分の所わかんなくてどーすんの！？

「あ、そうそう！ ありがとう一」

え、まさか本当に忘れてた！？

「一年生が聞きに来たらそうやって答えてね」

『あたし（俺）等は案内係じゃない（ねえ）！』

そもそも案内係居ないから！

あー、行っちゃった。

聞いているのかな一。

「あの一」

またまたまた！？

今度はちゃんと一年だ。

「卓球部どこですか？」

「……今階段下りていった人見えた？」

「はい」

「その人について行ったら着くよ」

「はい。ありがとうございます！」

今のでいいんだ。

「あー」

またまたまたまた!?

「オカルト部何処ですか?」

「んーと、オカルト部は……オカルトおかると……オカルト!?!」

「え、はい」

そんな部活あつたつけ?

「そんなのあつたか?」

ああ、純兄も分からなかったのね。

「あれ? でもポスターが……」

「何処に!?!」

「そこに」

んーと? 階段のところか。

『オカルト部部員募集!』

ちよーつと不思議な雰囲気

ちよーつと不思議な部活です

上下関係は無いに等しい!!

不思議な体験したい方、どうぞ入って見てください!!!』

……はあ……。

こんなのあつたかなー?

「場所くらい書いとけよ……」

確かに。ポスター意味なし。

「あれ? でもさ、新入生歓迎会新歓の時なかったよね? この部活」

「だから余計気になって……」

ふーん……。

とにかく、

「それっぽい所を探せばいいよね?」

「……は?」

『は?』じゃなくて、探してみようよ!

あたしが気になるから!

75 オカルト部……と言っているのだろうか

「めっかんない」

見つからないも何も探したのは理科室と体育館裏だけだろうか。純だ。

前回到引続き『オカルト部』とやらを探している。

「うーん、何処にあるんだろ……。体育館倉庫の中とか？
体育館の部活の邪魔になるだろうが。」

「いつそ片っ端からさがしたらどうだ」

「えー……。面倒だけどそれが一番早いのかな？ それでいい？」

「はい。ありがとうございます」

「あれ？ 誰か居る？」

三年五組……空き教室で、A教室とか言われている。
がらっ

「よーこそオカルト部へ！！ 皆皆っ！ 三人も来たよ！」

……光並のチビだ。

そして超音波並のキンキン声だ。

……って、待て、俺等は見学じゃねえ。

いや、忍は見学か？

「……え、えっと……」

「この馬鹿。いきなり引かせてどうする
スパコンッ

え、ハリセン！？

何処から出した！？

さっき見た時には持ってなかったはず……。

「それどっからだした！？」

「どっからって……内ポケットから？」

何故疑問形？

「いや入らないでしょ!？」

「あの、突っ込んだじゃ駄目ですよ。」

古賀先輩のハリセン……、何処から出てくるかなんて分からないので」

慣れっつてすげえな。

いや、何となく思った。

「えっとー、あれ？ 部活見学に来た子につて、何を言えればいいのかな？」

おい。

「……活動内容、とかではないですか？」

「おー、なるほど、マコちゃんナイス！」

「ですから……。マコちゃんと呼ばないでください」ヤ」「
即否定？

「えつとね……普段はまあ、殆ど何もしてないに等しいんだけど」

「先輩！ イメージ悪くしてどうするんですか!！」

事実なんだろうが。

「たま〜に幽霊を引き寄せる術式を書いたりするよ！」

「……一年の目が輝いてる……騙されるなよ？」

「今それ出来ますか!？」

いきなり大声なんか出すからびっくりした。

「出来るよ！ 頼んだハルやん」

「俺回しか!？」

色々な意味でフリーダムな部活だな。

それより前に、これ部活か？

「……あ、ちなみに、部活って勝手に言ってるだけですよ？」
説明どうも。

オタク……というか自由人の集まりか？

「……はい、コレでいいな」

早。

なにやら怪しげな文字の中に火のついたローソクが……って。

「ローソク!? 学校にこんなの持ってきていいの!?!」

ああ、突っ込む手間が省けた。ナイスだ忍。

「大丈夫! 持ってきたわけじゃないから!」

なら何処から。

「……理科準備室から頂戴した」

おい。

「さーそろそろ集まってくるよ! 幽霊さん!」

……。

三分待った。

「悲しいことに一人も来てねえな」

「うん」

まあ、所詮こんなもんだろ。

「忍、気は済んだか?」

「あれ? 純兄待つててくれてたの?」

俺、待ち損か?

三十分くらい無駄にしたな……はあ。

「ちよーつと待ったあー!!」

いい加減耳が痛くなってきた。

決めた。こいつのあだ名は超音波だ。

「ねえねえねえ! もしかして君達幽霊見えるの!?!」

「見えたら何だ超音波」

ぼん

何故か古賀に肩を叩かれた。

目がいつてる。「分かつてるな」と。

……迷惑してるんだな、このキンキン声。

「ねえ入ってよ! たまにでいいから! 臨時でいいから!」

「だって、頑張れ純兄」

いやテメエもだから。

「あっ! 逃げた!!」

「純兄待ってよー！ 逃げることは九割がた予想してたけどー！」
だって……なあ？

断るのだって面倒だし。

逃げるが勝ち。……いい言葉だなあ。

76 これでもクッキーを作っているのです

「待ちなさい。貴方達は一体何を作るつもり？」

『クッキーだよ（〜）？』

変ね。私の目がおかしくなったのかしら。

秋よ。

家で凧とお喋りしてたら妹二人がクッキーの作りかたを聞きに来たのね。

それで、凧が『変なものを入れない』という条件付で何故か私まで教えることになったのだけど……。

この子達のそろえた材料の中にどう見ても、

どう 見ても おかしなものが入っているのだけど。

この子達凧の言つてたこと聞いてたのかしら？

からしでしょ、しょうがでしょ、ネギに蜂の子。

え、蜂の子？ 何処から持ってきたの？

切りがないから切るけどコレのほかにも色々。

……よく集まったわね。

そんなことより。

「凧、変なものを禁止したのは貴方じゃなかった？

何便乗してるのよ」

「だって〜」

だってじゃないわよ。

「誰かを引つ掛けるためのハズレに使うって言うんだもの〜。

楽しそうだったから乗っちゃった〜」

単純……。

「大体誰かって誰よ」

「分からないよ！ 無差別殺人だもん！！」

春、殺さないでちょうだい。

「違うよ〜。無差別引つ掛けだよ〜」

「……………それならまあ……………楽しそうだし、いいわよ」
止めるのはやめにするわ。

だって、コレを始めたこの子達が引つかかる所を見てみたいもの。
いっつも引っ掛けていてる方だから。

……………ついでに、純もね。あの子見事に引つかからないもの。

「よ〜し〜！ 型抜きしよう〜！」

え？ もう？

生地できてるし……………。って、ちょっと待ちなさい。

「それ、ちゃんと寝かせた？」

「寝かせる？ これに布団なんかかけたら、自分が寝るとき気持ち

悪いよ！」

そうじゃなくてね……………。

「あ〜！ 忘れてた〜！ 秋ちゃんくつしよふ〜」

濁点が抜けてるわよ。『』が。あとカタカナね、それは。

二時間後

「よ〜し〜！ 今度こそ型抜き〜！」

「肩たたき〜？」

どうやったたらそう聞き間違えるのよ。

「あれ〜、光やってくれるの〜？」

「ウチもやるよ〜！」

何がしたいの貴方達は。私もやってほしいけど。

「型抜きするんじゃないの？」

『ああ（〜）〜！』

『ああ』じゃないわよ……………。

「誰か、コレに挟むネギ等等切つといた方が効率的だよね！」

それを言いながら私に視線を送るのは私に『やれ』と？

「口で言いなさいそういうことは」

「はい。ねぎ切りお願いしま〜す〜！」

……スーパーとかでは見かけないわね？ このねぎ。

「それね〜。いつか光たちがカレーを作ったときに発掘した、芽の生えた玉ねぎを庭で育てて取れたんだよ〜」

……。何から突っ込めばいいのかしら。

発掘したことについて？ 庭で育てたことについて？ コレが安全かということについて？

……まあ、コレくらいの量なら、大丈夫よ、ね？

「見てみて！ 季節外れ！」

クリスマスツリーって……。ホント、季節外れもいいところね。

「こっちは季節ピツタリだよ〜。ほら〜、桜〜！」

もう殆ど散っちゃってるけれどね。

「ねえひーちゃん、その桜ちよつといがんでないかな？」

「え〜？ 本当だよ〜！ 何で〜？ 何で〜？」

まず、型がいがんでるのだけど。

「あ〜、その型ね〜。かなり前なんだけど床に落として踏んじやつたの〜」

凜……直そうとか言う気はなかったのかしら？

「よし！ じゃあハズレを作っていこう！」

丁度、ねぎも切れたしね。

切ってから言うのも何だけど本当に大丈夫かしら、これ。

「え〜つと〜、これは岳お兄ちゃん用〜」

「これ、お兄ちゃん用ね！」

……。あら？ 数十数行前に『無差別』と言ったわよね？

「さ〜、皆よろ〜」

……。ああ、岳と夏はとりあえず絶対引っかかるようにしたかったのね……。のね……。

77 クッキー騒動

「ねえ、待ってよ！」

「何で逃げるのっ!？」

「そりゃーな!？」

「普通そんなもの食わされそうになったら逃げるだろ!？」

「何でクッキーがそんなに赤いんだよ!？」

「岳だっ!」

「今日、にーちゃんの誕生日でな!？」

「はーちゃんと光が何かクッキー作ってきたんだけど!」

「その一部をオレとなっくんに食わそうとしてんだよ!」

「岳、試しに食べてみなよ。こっちはおいしいよ?」

「いや、ねーちゃん達食ってんの普通の色したクッキーだろ!？」

「さっきなっくんの方見てみたらネギが入ってんのが見えた。」

「つかしーな。母さん達と一緒に作ったって聞いたんだけど。」

「……さては、」

「母さん達もグルか!？」

「違うよ!」

「面白そうだから放っておいただけで、断じてグルじゃないわ!」

「それってグルじゃねーの!？ 見て見ぬ振りはいけませーん!」

「まあ、俺には被害がねえみてえだからよしと言っことで!」

「良くねーっ! にーちゃんずっこい!」

「辛っ!？」

「えっ?」

「ねーちゃんが食べた奴が辛い!？」

「ま、まさか……大皿においてあった奴の中にもハズレが!？」

「おめーら、もっと安心して食えるものは作れねーのか!？」

「と・に・か・く! お兄ちゃん達素直に食べなさいっ!」

「断る!」

断らない奴が居るのならここに連れて来い！！

……いや、探せばいるか。マゾとか。前言撤回で。

「ねー、コレさえ食べればあっちも食べられるんだよー？」

「あっちも大概危険だろうが！」

激しく同意！

「岳お兄ちゃん〜ん〜？ 食べなかったら岳お兄ちゃんのお誕生日の時も同じもの作るよ〜？ 当たり無しで〜」

勘弁してくれ……。

「……純兄と同一年の時ってきつちり一ヶ月しかない
いや、一ヶ月と一日だぜー」。

って、ねーちゃん助けてくれる気はねーの！？

にーちゃんも何かクリスマススツリーかじってるし！

ちよつと実験。

「ねーちゃんにーちゃんヘルプ！」

『ヤだ』

やっぱり！

頼りがいと言うかなんと言うかそれが欠けた兄姉め！

「……たまには助けてやれよ」

「純兄こそ。むしろ純兄にそのまま返すよ」

何でこう思ったときだけ！！

「じゃ、テメエは岳で俺は夏……って、夏居ねえし」

あれ？

さつきまでちゃんと逃げてたのに。

「ひーちゃんっ！ お兄ちゃんが隠れたっ！」

……あ、その手があったか。

「……テメエの家の、テレビ台と壁の隙間」

「え？」

「そこ探してみる」

「分かった！」

にーちゃん！ 何て殺生な！

そんなところで見つかったら逃げられねーじゃん！

「えい〜」

あっ！？

もぐもぐ、ごっくん

「辛っ！」

多分これは七味唐辛子だ！ のど痛えっ！

「はい水」

サンキューねーちゃん！

追いかけてられる時に助けられればもっと嬉しかったぜ！

オマケ

「居ない！」

「残〜念、こつちだ！」

上から声があった……。オバケ！？ イヤーッ！！

って、違うよね、お兄ちゃんの声だったし。

……。あ、テレビ台と壁に手と足使って登ってる……。

大した隙間無いのに。すごい。

……。クッキーが口に届かない！

よし、この作戦で行こう！

3時間後

「お兄ちゃん、その体制キツくない？」

「お・ま・え・な・あ……」

必殺、疲れさせておろす攻撃

78 ちまちま、ちまちま

ちまちま、ちまちまちまちまちま

「ねーちゃんにーちゃん、そんなちまちまやって楽しいけ？」

『お前が言うな』

岳だつてやつてるくせに！

忍でーす、

んとね、あたしはビーズでストラップ作つてて、純兄は……純兄もストラップかな？ を、紐で作つてるの。

使わないんだけどね。殆どあげたり放置したり。

岳は何か縫つてるし。

学校の宿題だつてさ。

「オレは好きでやつてんじゃねーもん。つてかねーちゃんやってよ」

「ヤだ。だつて縫い物つてあんまり好きじゃないし、得意じゃないもん」

まーっすぐに並縫いが出来る人つて尊敬するよ！

「えー。じゃ、にーちゃん」

「ヤだ。面倒」

「それは面倒じゃねーの！？」

あ、あたしも思った。

紐で何か作るのも面倒なんじゃないかな。

「いや、これは結び目作るだけだし……。後、針が指に刺さるのはごめんだな」

……そういえば去年縫い物の授業の時何回か刺してたね。器用なんだか不器用なんだか。

「結び目作るだけつて、その結び目むちゃくちゃ多いだろ！？」

「作るものによつて違うけど。これは……大体十個くらい少なつ。」

いや、結び目だけだつたらあたしの方が少ないけどさ、三個くら

いだし。

だってビーズだよ？ 何個も結び目作らないって。

「あれ？ 大分前ねーちゃんにあげてたミサンガ？ プレスレット？ は異常なほど結んであつたけど……」

平結びの奴ね。結び目は確か三十越してたよ。

パワーストーンつき。効果は魔よけだって。

「一昨年貰った時は純兄が持ってた方がいいんじゃないかなーと思つたけど。」

「それより岳、それって宿題だよな？」

「へ？ うん」

「……一体何を作ってるの？」

もう見た感じじゃサツパリわかんないんだけど。

「……なんだつたかなー」

おい！？

もう糸があつちこつち絡まって大変なことになってるんだけど！？

「忍、聞いた所でムダ。岳と器用は無縁以上だから」

「むしろ何処かのねじが吹っ飛んでるって感じだもんね」

うんうん。我ながらしつくり来る。

「待てえい！！ それじゃオレの頭のねじが吹っ飛んでるみてーじゃねーか！」

えー。だれもそんなこと言ってるのに……。

「んじゃあ指の運動神経が切れてるとか？」

「だったら指動かかねーだろーが！ ってか怖えよ！」

あー言えばこー言う。

「じゃあ何て言えば満足する？」

「え？ ……えー……って器用じゃないってオレをからかう言葉をオレに考えさせんじゃねーっ！」

『せめてもの情け？』

「そこ八モんなーっ！」

いや、だって。

からかつことは確定してるんだもん。

79 激しく微妙な夢

「わーおう」

でかー。

忍です。

ただいま夢の世界を冒険中です。

早い話が今回は夢オチなのだ。

で、今日の前に居るのは……えーっと、居る？ に入るのかな？

まあ、とりあえずなんとも言い表しにくい、ぶにぶにのぼよぼよのまっくろくろすけの物体が目の前にどーんと座ってんの。

じゃまで前に進めなーい。

「おい、そこじゃま」

あ、純兄登場。

一蹴りしたら真っ黒ぶよぶよ君が消えた。

……えーっと、これって戦闘不能？ 倒した？ クリア？ どれでもいいか。

しばらくして、また道のご真ん中にぶにぶにのぼよぼよのまっくろくろすけが居た。

あ、これは例えられるよ。

マシユマロ！

……食べちゃダメかな、食べちゃダメだよな。一応生きてるみたいだしね。

ぱくつと言った瞬間内臓ぐちゅって口の中に入ってくるのはかんべんだしね。

……自分で言ってるてなんかグロイ。お食事中の方ごめんなさい。

ここは夢の中だから食べても感覚しないのかなー。

「あむっ！ やわらか〜い！ ねっ！ ひーちゃん！」

「うん〜、おいしいね〜、はーちゃん〜」

……何か、食べてるし。おいしいとか言ってるし。

しかもどんどんどんどん減ってるし!?

うわ〜、凄い大食い……。おっそろしいな。

「ふ〜、おいしかった!！」

完食!?

あの、高さは二十五メートル越してそうで、半径二十メートルありそうなあれを!?

「じゃあまた探しに行こう〜」

何を!?! まさか食べるもの!?!

こわ……。

さらにさらに進んでいくと。

今度は三人がけのソファー位の大きさの何かがまたどーんと座っていた。

いや、丸くてうごめいてるから座ってるのかどうかイマイチ分からないんだけど。

つんつんつんつんつんつんつん……。……。

で、何かそのみよーな物体を、岳を初めとして翔(だっけ?)と古閑(かなあ?)と、しゅうや(漢字はもはや思い出せん)が棒切れでつんつんしていた。

んー……。つと、これはスルー出来る大きさだからぐるっと周っていいじ。

……。ところで。

あたしは何処に向かってんだらう?

ついでに言つと。

この道は何処に繋がってるんだらう?

はい、分かっているとってた方ー。手ーあげてー。

分かるかっ!!

だってだって! 全然前見えないんだもん!

……。というところで目が覚めた。

何故か顔の上にハンカチ。

……誰か知らんが殺すなああああああああ！！

前が見えなかった理由って、コレ！？

ついでに、枕元にはマシユマロ……と、何故か真っ黒なスライムさて。

あたしは何に突っ込めばいいのでしょー？

んでもって、

あたしは何をぶっ飛ばしやあいいのでしょー？

80 夜道にて

たたたたたたた……

「じゅーんに、早くっ！ 日が暮れちゃうよ！」

「いや、とつくに暮れてるから」

うん、そーだね。

真っ暗だし。

忍でーす。

さて、何故あだし達がこんな暗い道を走って……いや、純兄は歩いてるけど……いるかという。

おばーちゃんの所に行っていたから。

何故おばーちゃんの所に行っただけでこんなに暗くなってしまったかという。

おばーちゃんに英語を教えてもらってたから。

何故おばーちゃんに英語を教わってたかという！

塾の先生をしてるおばーちゃんがあだし達を突然に教える気になつて、何故か月曜と木曜がその日になつてたから。

……はてなあ。あだしも純兄も同意した覚えは無いんだけど。

まあいいや。

「そんなことよりっ！」

「どんなことよりだよ」

……まあ、それはともかく。

「純兄走つてよ！」

「ヤだ」

「晩ご飯できちゃってるかもしれないじゃん」

「ふうん？」

あ、純兄時計出して確認。

何でポケットに入れてるのかなー。付ければいいのに。

あ、もしかして時計も没収大賞のかな？ 校則なんてちゃんと

覚えてないから分からないけど。

「ん、まだ大丈夫。少なくとも後二十分は」

「……いま、八時ジャストなんだね」

「たいてい八時半前に晩ご飯だし……」。

「つて、そんなことより走ろうよー」

「何でそんなに走りたがる」

「早く帰ったほうが安全でしょー。不審者出るかも」

「ほお？」

あ、何か馬鹿にされたような気がする。

「とりあえず、あたし走るからね」

よくよく考えればあたしだけ走ればよかったんじゃない。

「……あれ？ 純兄結局走ってるんじゃない」

「テメエが走るからだろうが！」

あ、怒られた。

「何であたしが走ったら純兄が走るの？ あ、分かった。か弱い女の子のあたしをほっとくのが出来ないんだ」

「何処にか弱い女の子が居ると」

うん、そういわれると思った。

「あー疲れた」

「早」

いや、全然疲れてないけどね。飽きただけ。

あと、どーやったら純兄が動くかとかが分かつ……。冗談です。

純兄にらまないで。こあいから。

「うーん、桜は見事に散ったねえ。さくらんぼ食べたいなー」

「どーやったらそうなる」

「こーやったら」

「……………もういい」

あ、そ。

疲れた顔をされたのは何でだろう。

8 1 結局、六年二組とは

「くそっ！ 逃げるな！」

「いやっ、とっ、逃げるなっつたっつたっつな……わうっ、よっ」と
凄いな……。

なんかよく分からないけど、とゆうより褒めていいのかわかんないけどとりあえず凄いなー。
翔です。

「おい、二人ともー。程々にしとけよ」

『止めるよ！？』

まあ、うちのクラスじゃお決まりと化してきた突っ込みはともかく。

何が凄いかとゆうとー。

まず修也から言うと、

1 幕の攻撃がハンパなく早い。

それはもう、前世で槍使いでもやってたんじゃないか、と思うほど。

2 なんだかんだで窓ガラスとかを割らない。

いや、割りそうにはなったことあるんだけど、スレスレで止めてんだよ。

続いて、岳

1 もう絶対本気だろ、な修也の攻撃を全て避けてる。

しかも、教室内を飛び回って。前世で忍者でもやってたのかお前は。

2 避けながら修也をからかう余裕っぷり。

前に机から落ちたことなんて綺麗サツパリ忘れてるだろ。

あー……、あと、ギャラリー（おれ含む）は

なんだかんだでそれを見て楽しんでいる、ってとこかな……。

古閑でさえ大人しく傍観してると言う慣れっぷり。

さらに、先生。

二人の格闘？ 喧嘩？ ……微笑ましい追いかけて？ これは
ないか。をビデオでとっているところ。

ビデオカメラ持ってないんじゃないのか。

そして取った奴は何処で使うんだ？

「せーんせー。ビデオカメラどーしたの？」

「買った」

『何のために！？』

「もちろんこの二人のビデオを取るために」

『必要あるのか！？』

ある意味、この先生は超人なのかもしれない。

……いや、変人かなあ。

「岳お兄ちゃん」

「たっけるくん！ おー、やってるね！」

「よーっ、どした？」

あー……岳の妹。そしてその友達。

ごくごくまれに来るんだよなあ。

畜生、変わってくれ。おれもこんなかわええ妹が欲しかった。

修也との喧嘩？ はしたくないけど。

「んっつとね、……あれ？ 何だっ たっけ」

『おい』

突っ込みは忘れません。

これぞ六年二組。

「ほらっ！ あれだよあれ！」

『あれって何だよ！？』

「あ、あれね」

『分かるのか！？』

すげー。

「とゆーわけでっ！ 岳くん、かくかくしかじか」

『分かるか！？』

「おっけー」

『分かるのか！？』

こ、これで分かるって……んと、なんと呼べばいいんだろう。

「とりあえず、そのかくかくしかじかを日本語でもう一度」

『日本語だ！』 『分かってなかったんかい！？』

おお、クラスの人数半分ずつで突っ込むとは。

……もしかして、六年二組は全員奇人変人だったりする？

いや、『日本語だ！』の突っ込みがずれてるような気がしなくも無いけど。

82 面倒オカルト部

「あー、いー天気だなー」

「……現実逃避したいのは激しく分かるけど……今、雨降ってつか
らな」

純兄だつてさっき現実逃避してたじゃん。

蜘蛛、もとい雲っていいなーみたいな感じで。

忍です。

さて、何故あたし達が現実逃避しているかというところ……。

「待つてよーっ！！ ちよっと協力してくれるだけでいいんだって
ばー！」

「少しだけ、ですから」

「その『少しだけ』がどれくらいかという突っ込みは受け付けない
からな」

「……古賀先輩、もう少し協力してくれるような事は言えないんで
すか？」

つとまあ。

コレで理解できる人がいるかどうか分からないけど。

オカルト部の四人と、こないだ案内した子……この様子じゃ入っ
たのかな……。に、追っかけられてるの。

はー、もう最近昼休みの一部はコレで潰れてるんだよね……。

「ねえっ！ 今日だけでいーからー！！」

『叫ぶな超音波！』
すばこーん

純兄と古賀（だっけ？）のハモリの直後にハリセンの音……。

もう後ろの様子が手に取るように分かるよー。

「とりあえず……せめて、今日だけ」

「昨日も今日だけつつつてなかったか……？」

言ってた言ってた。よくいるよね、こういう人。

特に子供とか子供とか子供とか……。

「ほ、本当に今日だけですから！ ……ね？」

いや、そんな可愛い顔で『ね？』とか言われても……。

「ヤだと言ったらヤだ」

純兄ってオンナノコに興味持たないよねえ。一生独身だったらどうしよう。どうもしないが。

「むうっ。この枝奈えいちちゃんのプリチー笑顔に引っかからぬとは！ おぬし等なかなかやるな！」

……いや、そう言われても……。

とゆーか誰？

「ちよっ！？ 私はそんなつもりは無かったですけどー！？」

「うん、無意識でも可愛い！ー！」

「あうあうー！？」

あー……、何か、後ろが何か訳の分からないことになってる。

「純兄、さつさと撒いちゃお」

「言われんでもやるわボケ」

だよねー。でもボケは無いだろうが。

「なっ！？ さらにスピードを上げるとは……。何なんだお前等！
！」

いやー、何って、人間ですけど？

古賀、ちよっちよっと小説か漫画の読みすぎじゃない？

「と言っ冗談はさておき」

冗談……言っようには見えないんだけどなあ。

「ちよっと見てくれるだけでいいんですよ！」

『何をだよ』

「あ、やっちよっと話聴いてくれた！」

しまった……。ここは返しちゃいけなかったのか。

「ですからー、悪魔償還しますので償還できてるか『断る』酷い……話くらいちゃんと聴いてくれても」

おーい、暗いオーラを出すなー！

「ちょっと!」

んむ?

「止まらないと……」

何?

「大声で叫ぶよ!」

『もう叫んでるだろうが!』

「えっ!? あっ……もっと大声で叫ぶよ!」

結局。

なんだかんだで鼓膜を破るような音を発する部長に折れ……。
悪魔償還とやらに付き合わされることになったのだった。

83 悪魔、召……喚？

「いよっし！ コレで完璧だよ！ パーペキだよ！！」
雨は降り続いております。

グラウンドに書いた魔法陣なんてすぐに消えちゃうんじゃないの？
忍です。

何が悲しくてこんな雨の中海みたいなことになってるグラウンド
に出にやならんのだ。

それより前に。

「何で魔法陣がそれなの！？」

「ふえ？」

魔法陣は魔法陣でも、縦横斜め全部同じ答えになるように数字を
入れる魔法陣なだけど！？

これで悪魔が出たらあたしは全財産ならぬ全お小遣いオカルト部
に寄付しちゃうよ。

「……本当？」

「後ろから出るな！」

部長か呼んでたので言うとマコちゃん！

不気味だから！

「って言うか、口から出てた！？」

こくこく

そんなに顔かないで。

「よーし、それじゃ、行っきまーす」

とてもこれから悪魔召喚をする人の言葉には聞こえない。

「ランマスカミラエ・ママニスジャムエーリマ」

……一体この呪文にはどーゆー意味があるんだろう。

「我の朝餉は味噌汁、スープ、パン、米」

本とにどんな呪文だよ！？

しかも部長の朝ごはん、どーなの。

「夕餉のメニューは鶏肉、豚肉、牛肉」
野菜食えよ！

「……と、菓子パン」
健康に悪いから！ 絶対！

「一昨年の朝餉はエスカルゴ」
どんな朝ごはん！？ 金持ちだな。
って言うかよく覚えてたね……。

「アイムハングリー」
いや、突然お腹すいたって言われても困るんじゃ……。
「アイドンドライクゴッド」

天罰当るよ。

いや、神様いるのか知らないけど。

「アイライク納豆ベリーベリーベリーマッチ」

あ、そこ悪魔じゃないのね？

しかもご丁寧に納豆は漢字なのね？

……それはそーと、あたし達は何をやってるんだっけ？

悪魔召喚？ 何処がさ。

シュ

え。何か煙出てきたんだけど

「きゃっ！ 悪魔ですか！？ 出るんですね！ こんなので！」

こんなのって言うてるし。

魔方陣の真ん中から出てるけど……。何故に？

ぼんっ

と、軽快な音を立てて現れたのは……。

大体幼稚園児か、小学校低学年位の、

真っ黒な和服に身を包んだ、

黒髪の女の子一人と男の子が二人。

体が小さい順に瞳の色は赤、黄、青とゆー、信号みたいな色。

そこにいたのは……。

「死神トリオ!？」

「あ、やつほー忍ねえ、純にい」
何でまたこんなところに!?

……あと、足元で倒れてる老けたサラリーマンみたいな奴は何。
「あれ!?! 出てるの!?! 出てるの!?! わーい!?!」
『叫ぶな』

おお、純兄と古賀(だっけ?)のツッコミがシंकロ。

……いや、純兄はハリセン出したりしてないけど。

「……それより……何した?」

「なにやらオカルトオタクが悪魔とやらを召喚したかったらしい」

「で、多分これは失敗だねー」

「……はあ。じゃあ寄付は……」

いや、元からする気なかったし。

「……剣、斬。あれどうする?」

天の指した先には。

なにやら髪を振り乱し、鬼のような形相で、地面を走っていれば
砂煙がもうもうと立つてであろうスピードでこっちに向かってくる男。

ふっつー……に、怖い。

「おゝまゝえゝらゝ……」成「ぐはっ!?!」

あ、見えない壁にぶつかった。

「行くぜらおん! 水龍! 大攻流!」

龍のような水が……えっと……らおん? に、向かって突き進む!

「え、ちよっ!?! ま……がぼっ!?!」

あ、流された……。

えー……安らかに眠りください?

「……なんだったんだ、あれ」

「あ、学校の先生」

『は!?!』

いいの!?! あんなに先生ぎったんぎったんにしちゃっていいの
!?!

「じゃ、私達授業の途中だったから」

「まったなー！」

「また、な」

あ、行っちゃった……。

足元に転がっていたサラリーマンの霊を引きずりながら。

84 じじつけことわざ教室!

「それじゃ、ことわざ教室を始めます」

「始めるよー!」

『はい!』

変なことわざは教えんなよー。

岳だ!

何か突然光とはーちゃんが菜美と神谷相手にことわざ教室を始め
たからちよつと見てんだ。

「よし! じゃ、まずは……聞いたことあるかな?

『蟻も歩けば棒を上げる』」

違う違う違う!

いきなり間違えるな!

『犬も歩けば棒に当る』だろ!?

「意味はね、蟻さんが歩いたら棒にだって登れちゃうってことだ
よ」

まんまだな……。

つて、違う! 充分予想はしてたけど意味も違う!

「蟻すつごい! こーくん蟻になりたい!」

ならんでいいから!

「なみたんも!」

「うんうん、いつかなれるよ。覚えた?」

『うん!』

ならんでいいし覚えんでいい!

「じゃあ次行こ」。

『おへそ隠して足隠さず』」

どーゆーこつちゃい。

『頭隠して尻隠さず』だろ!?

「意味はね、雷がなって、おへそを取られないように隠しても、雷

さんは足を取っちゃうって事！」

怖えよ!?

雷さんハンパなく怖えよ!?

「じゃ、こーくん雷がなったらお布団に潜っちゃう！」

「なみたんも！ なみたんもー！」

お前等も信用すんなって。

「覚えたね〜？」

「うん！」

だから覚えなくていいってのに！！

「じゃ、次！」

『海苔に金棒』

海苔!?!鬼だろ!?!

「意味はね〜、海苔に金棒を持たせてもあんまり意味がないって事だよ〜」

あんまりどころか全く意味ねーだろ！

大体どーやって海苔が金棒を持つんだよ!?!

「じゃあこーくんが金棒持つ！」

「なみたんがもつもん！」

「こーくん！」

「はいはい、一本ずつ持とうね！」

「うん!?!」

何本金棒あるんだよ。

「次ね〜。」

『赤巻紙青巻紙黄巻紙』

最早ことわざ関係ねーっ!?!

早口言葉じゃねーか!?!

……しかも、何か結構光早口なのに引っかかってねー。

「あかまきやみあおまきやみきまきやみ？」

「言いにくーい」

早口言葉だもんな。

「意味はね」

あんのか!?

「赤巻紙も、あおまきまみ……も、きまきまみ……も、けっきよき

ゆ……は、色が違うだけで同じって、意味だよ!」

はーちゃん……噛んだな。噛み噛みだな。

「ね、巻紙って何?」

「んー……と、トイレットペーパー?」

巻物じゃねーの?

「多分ね。きっと中国語で書くと手紙だよ」

何故に中国語で言い直すのかわからん。意味同じだし。

85 けつえきがたしんだん？

「……………わー」

シヤクシヤク

「……………へー」

シヤクシヤク

「……………おー」

「さつきから何読んでんだ」

純だ。

千マス計算（岳作）をやってたら、何やら勝手に忍が入ってきて、何やら勝手に人の机の上上がり、何やら勝手にリンゴ食べながらそこで読書始めやがった。

「んつとね、血液型診断」

「ふーん」

「あれ？ 純兄は興味ないの？ 面白いのにー」

「無い」

信じてねえし。

保険の教科書か何かに『脳は血液型を知らない』とか書いてあったし。

「んつとね、純兄はABだからー」

「興味ないって言ってるだろうが」

「またまたー、書いてあるのを見るのが楽しいんじゃないか」

「信じる訳ではなくて？ そう読むものか？」

「んつと、性格『クール』……………ええと、涼しい？」

「いや、絶対違うと思う」

何だよ、性格が『涼しい』って。

ああ、でも和訳するところなるしな……………。

あ、和訳すること自体が間違ってるのか。

「んと、で、『面倒臭がり』」

「否定はしない」

「あたしは全力で肯定したいけど？」

「そこまで面倒臭がりでも無いと思うけど……。」

「んで、『喧嘩っばやい』」

「否定する」

「幽霊によく喧嘩売ってるじゃん」

「あれは向こうか「買ってるじゃん」言い直すな」

「にしてもそんな診断結果とか聞いたことねえぞ。」

「いや、まずこういうのも殆どしたことねえけど。」

「さらに『動物にたとえるとミジンコ』……ミジンコって動物に入
れていいのかな」

「……ミジンコってどういう意味だよ。」

「えーと、『早い話が小心者』」

「どついう意味で早い話だよ」

「ミジンコと小心者にどんな繋がりがあんだよ。」

「あと、『ガキ』」

「……喧嘩売ってんのかその本は」

「んで、『実は……いや、なんでもない』」

「マジで喧嘩売ってんのかそれ」
「なんでもないなら書くな。」

「さらにさらに『ちよつとあんなものにも興味がある』」

「あんなものって何だよ」

「さあ？」

「……。」

「『実は……怖がり』」

「『実は』の後の間は何だよ。』『って何だよ』」

「んー、さっきの『実は……いや、なんでもない』の奴かな？」

「訳の分からん本だな……。」

「あ、こんなのも書いてある『手のひらサイズ』」

「……どついう意味だ？」

「うーん……体重が手のひらサイズ？」

「意味わかんねえよ」

まず『サイズ』じゃねえし。

「じゃあ身長が五キロメートル以内とか」

「単位が明らかに間違ってるんだろが」

「細かいことを気にするな！ A型じゃないんだから！」

いや、確かにA型じゃねえけど

「……でも、清は全然細けえこと気にしねえけど」

「ええええ！？ 清ってA型なの！？」

「何を今さら」

「B型かと思ってた！」

あー……そう言えば。

「一回も血液型当てられたことが事がねえって自慢してたな……」

「……だろっね」

とっころで。

忍の食べてたリンゴが種とヘタだけになってるけど、いつ食った？

……あと、その本燃やしていいか？

85 けつえきがたしんだん？（後書き）

この作品はフィクションです。

こんな血液型診断書は存在しません。あしからず。

86 「んな起こし方をしてみた

「お父さん〜!」

「ぐおあつ!?!」

「朝だよ〜!」

……………うーん。

起こそうとしてるのに気絶させそうになっているとはこれいかに?
忍でーす。

「光ー、いきなり腹の上にダイブはきついんじゃない?」

「そうかな〜?」

そうだと思っに一票。

「お父さん〜、あ〜さで〜すよ〜!」

「うう……………後五分」

母親に起こされる小学生かアンタは。

「だめ〜! えい〜」

「ぐほあつ!?!」

腹の上へのしかかり、再び!

……………さて、ここで出てくる選択肢は二つ

一、このままほっとく

二、参加する

んー……………よし。

一、起こしよじ。

え? おとーさんを助けるって選択肢がない?

だって助ける気全く無いもん。

0・01ミリも。

だから増やすだけ無駄。

「おーっ! 光、オレも混ぜて!」

「お〜け〜」

「よしやっ!〜! とぅっ!〜!」

岳乱入……、って、ちよつと待て！

岳までジャンピングのしかかり（？）はきついだろー！

「うえあー!?」

『何でよけ（んのノるの〜）!?!?』

「いや普通よけるからね!?!」

うん、流石に同意。

だって岳、小六じゃ背高いほうだし。

とーぜん体重だって光よりかずっと重いわけで。

「んー、じゃ、起きろ」

「……………ぐー」

起きろよ!?!?

「って、んな分かりやすい寢息（鼾?）立てる奴が居るわけねーだろー!」

とつ、とゆー声と同時に拳が一発。

おとーさんの腹に入った。

「ぐおえ」

「ご臨終です」

「殺すな!」

あ、復活した。

「うっせえな……………何やってんだよ」

『おはよ〜』

「いや、さっきから起きてたから」

ああうん、そんな気もするな。

『おはよ〜』

「だからさっきから起き」『おはよ〜』……………はいはいおはよ
随分投げやりな挨拶ですな。

まあ投げやりにもなるかな。

「ほらほら〜、お父さんもお早うだよ〜!」

「Z Z Z Z」

「分かりやすすぎるだろー!」

何もアルファベットを言わなくても……。

「起きないと〜……………」

「次は何すんだ?」

「起きないと〜……………」

起きないと?

「ええつと〜……………うわ〜、選択肢が多すぎて選べないよ〜!」

どついう選択肢が頭の中を回ってるのか見てみたいんだけどな。

「よ〜し〜、これで行こう〜!」

『何?』

「朝ごはんのホットケーキ生焼けにしちゃうよ〜?」

……………地味にやだなあ、それ。

だって生焼けだとねちよねちよするし。たまにお腹痛くなるし。

「……………むにゃむにゃ」

「寝たふりがものすごくわざとらしいな……………」

うんうん。

「むう〜。じゃあね〜、朝ごはんのホットケーキ焦げ焦げにしちゃ

うよ〜?」

焦げ焦げって。まずそー。

「ぐー」

……………効いてないし

「んむう〜。じゃあ〜、朝ごはんのホットケーキ生地を焼かないで

出すよ〜?」

うわ、それは酷い。

……………あたし的にはおいしいけどね。あれ。

うーん、深皿とスプーンがいるな。

「すーぴー」

「むむ〜、なかなか手強い〜」

「本当にやらないと思ってんじゃねーの?」

んー、確かに。

「じゃあ、親父の朝飯のホットケーキは光オ리지ナルのホットケー

キの生地を光が焼いてそれを口に押し込む、とか」

いい加減朝ごはんのホットケーキシリーズから離れようよ。

「起きるよ、起きてるよ、さー、お母さんのホットケーキが朝ごはんだよな」

おお、凄い効果。

ええつと、どっちを褒めればいいのかな。

光の料理とゆー言葉か、はたまた純兄が言う、とゆー現実味溢れる言い方が。

「ふふ、今日の朝ごはんのホットケーキは私が作ったばた

あ、トドメ。

87 ちょっと変えると

『ゴールで〜』

たたたたたたた……

『ウインク〜!』

ぱっちん!

光です〜。

あのね〜、はーちゃんと走ってね〜、それで止まってからウインクしたの〜。

名づけて『ゴールでウインク』〜!

ほら〜、もうゴールデンウイークでしょ〜?

『ゴールデンウイーク』を〜、

『ゴールデン—ウイーク』って分けたら〜……。

『ゴールでウインク』って聞こえない〜?

私にはそう聞こえるんだけどな〜。

「よっしひーちゃん! 次は……これ!」

ばば〜ん〜。

『このはしわたってはいけません』

う〜んと〜。『この橋、渡ってはいけません』か〜。

「ごう切って……じゃじゃん!」

『このはしわ—たってはいけません』

『この橋は、立ってはいけません』だね〜!

「でも〜、これって『このはしわ』の『わ』を『は』に変えちゃってるよ〜?」

「うーむ、痛いところをつきますな」

誰の口調〜?

「ごんなのは〜?」

『このは—したってはいけません』

『木の葉、慕ってはいけません』

「誰が木の葉なんか慕うのさ」

「うん〜。純お兄ちゃんの友達のこと……うん……清くんとか〜？」

「じゃ、じゃ、次！」

『あやとり』〜？

どろちやって変えるの〜？

「ほら、ここで切ったら」

『あやとり』

『彩と理』

「彩ってだれ〜？ 理って居るの〜？」

「あはは………やっぱり無理があったね」
「もちろん〜！」

「これは〜？」

『ごどもものひ』

じじすると〜。

『ごごーものひ』

『子土藻の火』

「いや、もはや当て字じゃん
びんぽ〜ん〜。

思いつかなかったんだよ〜！

「こんなのは」

『えすかる』

『エスカレーター』

はーちゃん〜。

「全く別のものになっちゃってるよ〜！」
「うん！」

力いっぱい頷いてくれなくても……。

「あ、あ、じゃあ」

『まるたけえびすにおしおいけ』
これって歌詞じゃない〜？

「こーして」

『まるたけーえびすにーおしおーいけ』

『丸田家、恵比寿に、お塩行け』

「丸田家さんは恵比寿さんにお塩をやった！ とゆーか撒いた！
」

恵比寿さんは悪霊か何かなの〜！？

丸田家は何〜？

「これは〜？」

『あかいくつ』

『赤い靴』〜！

……あれ〜？

「はーちゃん〜？」

「ひーちゃん、それ、正しいから」

……え〜！！

『赤井靴』で『赤井さんの靴』じゃなかったの〜！？

88 食べましょー

「なあっ!?! ちよっ、ひでーよ! ずっこいだろ今の!」

「ふふふ、早い者勝ち。これがこのルールだ!」

「だ もう! にーちゃん! 何か言ってくれよ!」

「ん?」もむもむ

「なっ! にーちゃんその肉は何処で!?!」

えーっと、これを一言でたとえるのなら………戦場?

忍でーす。

晩ご飯に、庭で肉とか色々焼いて食べてまーす。

うんまあ、こういう時は90%の確率で海中一家も混ざるんだけど、今回もそのルールのなものには逆らわず、なっくん達もいるよ。

「お兄ちゃん! あたしのフランクフルト食べたでしょ!」

「んあ? 俺フランクフルト一本も食ってねえんだけど」

「え!?! じゃあ誰が………皆動かないで!?!」

いや、動くなって。

動かなかつたら出てくるわけじゃあるまいし。

「はーちゃんごめんね、食べちゃった」

「なーんだ。ひーちゃんだったら許すよ!」

何でなっくんには怒るのに光には怒らないの?

「純、その肉俺にもよこせ」

「断る」

あれ、なっくんいつの間にあっちに?

あたしも混ざろー。

「純兄その肉あたしにもよこせ!」

「テメエのは皿の上に乗ってんだろが」

しまった! バレた!!

いや、隠してなかつたけどさ。

「そうそう、だから純の肉は俺のもの」

「馬鹿、俺の肉は俺のものだ」

おお、何か肉をめぐって小さすぎる争いが発生。

「わっ!?!」

「あっ! 忍ちゃんごめん!」

あー、箸落ちちゃった。

「何してたの?」

「お母さんがよもぎ……じゃなかった、きゅうり食べなさいって
言ってくるから逃げた!」

よもぎときゅうりには何処に間違える要素が。

「ほら、春。少し位食べなさい」

「やだー!」

あ、行っちゃった。

……あ、箸の存在忘れてた!

「んー、落としちゃったけど三秒ルールで大丈夫だよね!」

『三秒どころか三十秒以上経ってるから』

うう、純兄となっくんにシンクロで突っ込まれた。

「はい、箸」

「ありがとー」

割り箸だから落としちゃった分は肉焼くところにばい。

ぎ・リサイクル!

うんうん、大切だよね。

「だーっ! 何で父さんはオレが取るうとした奴片っ端から取って

くんだよ!」

「取るうとしたのかー、それは知らなかった」

「嘘つけ! オレが取るうとして箸出したらその先の肉取るくせに

「!」

「んー? そーだっけー?」

口調が語ってます。

「お母さん、焼きおにぎりするの?」

「するよ」。一個だけ当たり作るうか」

『お〜!』

……………おい。

当たりって……………つまりハズレじゃ?

「さて〜、この中に一つだけ当たりがあります〜」

「誰があたりを引くことが出来るでしょーかつ!」

引きたくない当たりだね。

何が入ってんだか。

「ん〜と〜、お姉ちゃんから右回りね〜」

「まだ食べちゃダメだよ〜」

う……………一番最初って一番迷うんじゃない?

当る確立は九分の一だから大丈夫!

……………ということにしておこう!

はい、ちなみに引く順番だけ言っとく、もとい書いとくね。

あたし

なつくん

はーちゃん

光

おかーさん

秋ちゃん(春&夏母)

冬くん(春&夏父)

おとーさん

純兄

つてな感じですよ。

「……おとーさんだけ名前無いんだよねー。どうでもいいけど。

「じゃあ皆でせーのーで！……で、食べるよ！」

「やーこしいな、食べかけちゃったよ。」

「せーのーで！」

「ぱくっ！」

『辛っ！？』

「何で！？ 何で皆辛いの！？」

「ん？ なんともねーじゃん」

「はうう、当たりは岳お兄ちゃんのようにすすす」

『は！？』

「当たりは一個つて……。」

「何も入ってないのが一個だけつて事！？」

89 豊ちゃんの苦手は

「あー、へーわだ」

そして暇だー。

どっすつかな。わざわざ修せん家までからかいに行くのもあれだしなー。

岳でーい。

『しくしくしくしくしくしくしくしく』

三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三十六。

つて、え？

今の九九じゃねーよな。泣き声だよな。

「どこだー？」

『しくしくしく、しくしくしく』

……何かわざとらしく聞こえてきた。

んー、植木鉢の陰に女の子居るけど、無視だ無視。

「へーいわだなー」

『ちよつと！ 女の子が泣いてんのよ！ 反応位しなさい！』

何コイツ。

「はあ〜」

『えっ！？ 嘘！？ 見えてるの！』

「見えてねーよ」

『見えてるじゃない！』

見えてねーもーん。

「見えてねー、見えてねー」

『いい加減に死なさい！』

おい、死じゃねー！ しだ！ ひらがなだ！

「はあー。何だよー」

『つぶぶー、あ・の・ねー！』

「聞くのやーめた」

『何だよ!』

いやだつて、うっとしかつたんだもん。

『聞いてよ!』

「えー」

『聞きなさい!』

「命令形!？」

まーったく、何だよコイツ。

『いいい! 耳の穴かっぽじって聞きなさい!』

「んー、やだ」

『聞きなさいってば!』

「わーっただわーっただ」

耳元で叫ばないでくれー。

『ふふ、あのねー』

うわあ。声がつっげー変わった。

『あれ? えつと……なんだつたつけ……あれー?』

おーい。

「はい、思い出せねーんなら聞けねーなー、残念残念」

『あつ! 思い出した!』

あー……残念残念。

『あのね! プランターの端っこにね!』

プランターの端っこー?

『でんでんむしちゃん居たの!』

……。

「……で?」

『かーわいいでしょ! 見てよ!』

「見たら成仏すんのかー?」

『えー……うう、分かつたわよう』

あり? こんなあつさり行くとは思わなかつた。

『ほらっ! こっちよ!』

「……って、これ……どっからどーみてもナメクジだろ？」
殻ねーんだけど。

『ええええええー！？ いやーっ！！ナメクジいやーっ！！』
「え？」

すげー、何かナメクジって分かった途端飛んでった。

……わっかんねーユーレイだったなー……。

90 盗人姉弟参上!

「じゃじゃーん! 未理^{ミリア}阿ちゃんでした!」

「霧瑠^{ムルイ}依くんでした!」

「……………えっと。」

「どー反応しろと?」

「忍です。」

何か、突然変な子×2が入ってきたんだけど…………。

薄い水色のローブ(って言うんだっけ?)着てる女の子と、男の子。

大体小学四年位じゃないかな!。

「えっとー、どちら様で?」

「双子の姉弟、ミリアちゃんアードムルイくんでした!」

「えっとー、風邪の民、らしいよー」

「風邪じゃないでした! 風でした!」

「……………分らん!!」

「って、また誰って聞いても同じ答えが返ってきてそっだから質問を変えよう。」

「何しに来たの?」

「しらなーい」

「ムルイくん! 寄付してもらいに来たんです!」

「何の寄付?」

「ちよつと昨日買った本でお小遣いやばいんだけど。」

「お母さんがね……………お母さんが……………」

「ん? 何か目がうるうるに。」

「死にかけだからお薬買ったための寄付でした!」

「なんだろ、ものすごつく胡散臭い。」

「お母さん死にかけてないよ!。大体一ヶ月以上会ってない!」
「おい。」

二人でぜんっぜん話が違っじゃんか。

「ムルイクン！ またまた騙すのに失敗でした！」
おいこら。

「結局何がしたかったの」

「えっとねー、ミリアちゃんはお金を騙し取りたかったらしー」
親の顔が見たい。

親の職業は何だー？ 詐欺師か何かかー？

「ムルイクン！ バラしちやだめでした！」

「盗めば楽なのにー」

親の職業に盗人疑惑が新たに浮上中！。

「あーっ！ でした！」

「あー」

ん？

「ムルイクン！ 逃げるでした！」

「おけー」

ふむ。

がしっ

「何するでした！」

「はなそー」

とりあえず足をつかんでみました。

いや、だって。何かあたしの大切なお小遣いを盗るつもりだったらしいし。

「ああ！ 来ちゃったでした！」

「見つけ！」

あれ？ 剣？

「あ、しいねえ」

「……協力感謝」

天に斬！？

もう、何が何だか分からない！

「んじゃ！ 戻りましょー！ 未理阿先輩に霧瑠依せーんぱい」

先輩!?

「バナナ一か月分の約束ですよね？」

バナナ一か月分って!?

「……約束、破ったら……これ」

ざーん! その手の中の小瓶を放しなさい!

どす黒い液体を捨てなさい!!

ああ、適当にぼーいっと捨てられても困るけど……。

「うう、分かったでした! 次は負けないでした!」

「うー、ミリアちゃんがお金騙し取りに行こって言うからー」

「ムルイクんだって賛成したでした!」

えっと、説明をしてくれないかなー。

「あ、忍ねえ。この二人学校の先輩なんだけどな、人間界に逃げたのが見つけれたらバナナ一か月分くれるって言うから……」

「何となく参加してみたんだ」

「……違う、天がバナナ欲しい言ったから」

「ちよっ、斬!」

へえ、天の好物はバナナ?

でも一か月分って……漫画とかでよくありそうな商品だねー。

……あ、それだったら一年分かな?

「じゃあ、バナナ盗みに行くでした!」

「おー」

待て待て待て待て待て待てえい!

90 盗人姉弟参上！（後書き）

ミリアちゃんとムルイくん。

ミリアを一文字ずつ下にずらすとムルイになりまーす。

はい、どうでもいい裏話でした。

9 1 積み木タワー

「そーっとだよ！ そーっと……」

「分かってるよ」

「そーっと、そーっと」。

四段目完成！

光です」。

はーちゃんと積み木でね、タワー作ってるの」。

ほら、ひらがなが書いてあって、裏に絵が描いてあるような平たい積み木ってあるでしょ」。

『あ』で『あひる』とか」。

あれをね、一段三個で積み重ねてるの」。

「つ、次ウチね……そーっと……つよし！」

五段目完成」。

「そーっと……」

あわわ、ぐらぐらしてるよ」！

……せーふ」。

「七段目行くよ！」

がらがらがら

『あ〜っ！〜！』

「五月蠅いっ！」

うう、はたかれた」！

「だって、なつくん」！

「せっかく七段目までいったんだよ！」

「そりゃー、十何段かいつて崩れたんだったら悲しいの分かるけど
な……」

わっっ！ それは悲しいね」。

「お兄ちゃんは最後までいったことあるの？」

「ん？ 一応……もう少して完成って所までいつて崩れたからムカ

ついで止めた！」

一回で〜？

「な〜んだ。お兄ちゃんいったことないんじゃないん？」

「俺はな。純と忍はいった筈だけど……」

「純くんはともかく！」

「お姉ちゃんがいったことあるなら私達も〜」

『出来るよね（〜）！』

やる気が出てきた〜！

「……判断基準がイマイチ分からん」

なつくんが何か言ってるけど虫〜！ じゃなくて無視〜！

再び挑戦〜！ の十段目〜！

「ひーちゃん！ 十段だよ！ 次で！」

「お〜！」

「では任せた！」

「任された〜！！！」

そお〜つと〜……。

「うわっ！〜？」

どどどどどどどどど

「わ〜っ！ 何〜！〜？」

がらがらがらがらがら

『あ〜！！』

「ちよつとお兄ちゃん！ 何やったの!〜？」

「びっくりして崩しちゃったよ〜！」

せっかくの十段目だったのに〜！

「悪い。ちよつと階段で足滑らせて……」

『お兄ちゃん?』 『なつく〜ん?』

「あー俺、純ん家行つて来るなー」

逃げた〜！

でも何で上に逃げるの〜!?

またベランダから行く気だな〜。

「も〜……ひーちゃん、やる〜!」

「うん〜、ごめんね〜」

「ひーちゃんは悪くないよ! 悪いのはお兄ちゃん!」

三度挑戦〜! あきらめないもん〜!

三度挑戦〜! の十五段目〜!

「はーちゃん〜、もうすぐ完成だよ〜!」

「うん! ……そ〜っと」

よし〜!

うう〜、最後の一段〜……。

ぐらぐらしてるし緊張するよ〜。

一個目〜……二個目〜……。

これで最後〜!

三個め〜!

「はーちゃん〜!」「ひーちゃん!」

『出来た〜!〜!』

……あ、最後二つ残ってるな〜。

「ひーちゃん、これ最後にT字に乗っけようよ〜!」

「そうだね〜!」

一個〜……二個〜!〜!

『やった〜!〜!』

ぴよ〜ん

嬉しくて飛んじゃうよ〜!

ぴよんぴよんぴよんぴよん

「やつ、たっ、ねっ!」

「う、ん、〜!」

どんどんどんどん

がらがらがらがらがらがらがら……

……………。

『あああああ〜っ！〜！』

「やれやれ、プラレールとはお子さまですなー」

「いや、お前も子どもだろうが。」

「確か小三だったはず。」

「純だ。」

「ここは、ろーやだから入っちゃダメよ！」

「プラレールするんじゃないのか？」

「お袋と秋さんの友達が来てて……、で、その子供の相手をさせられてたりする。」

「頼まれたわけではなくて……何故か巻き込まれて。」

「光と岳と春はノリノリで遊んでるけど。」

「ほらほら、日向子ひなたここっちこっちー」

「あー……忍もだった。」

「純ー、おお、何かよく分からんが凄いことになってるな」

「ん」

「あれ？　なんでここ閉まって……「開けちゃダメー！　ろーやなの！」牢屋……なんで？」

「意外と子供って閉じ込められるの好きだよな……。」

「確か忍もやってたような。」

「トイレに閉じこもるもんだから大変だった。」

「見て見てー、光ちゃん！　びゅーん！」

「わー！　凄いねー！」

「高いところも好きだよな。」

「忍ちゃん忍ちゃん！　高い高いして！」

「はゆたんはゆたん！　ぐゅぐゅして！」

「ひかりちゃんだっこー！」

「……遊具と化しているような気がもの凄くする。」

「オレは！？」

『どんまい岳』

「にーちゃん達ひでえ！」

じゃあ何を言えと。

夏、笑いすぎ。

「岳くんプラレール出来たよー」

『早っ!?!』

……あ、脱線するであろう場所がぱつと見ただけでも数箇所。

ところで所々プラレールとは関係ないものが組み込まれているのは何故だ。

ビデオテープとかビデオテープとかビデオテープとか。

「子供らー！ ピザ来たよー！」

「お寿司も〜」

『わーい!!--』

……一瞬にしていなくなった。

食い物つてすげえ。

「やれやれー、ご飯に釣られるとはお子さまー」

「里奈、行きたいんでしょー、行く」

「あう。うん！」

結局行くのかよ。

「おーい」

『……………』もぐもぐもぐもぐ

「……………食い物つてすげえな。こんなに静かになるって」

いや、声を発してないだけでかなり激しい争いが繰り広げられているけど。

忍がマグロを取ろうとするだろ？

すると横から電光石火の早業で実由が取る。

……………と、その繰返し。

「はーい、お兄ちゃん達の分ね。難を逃れた。つまり人気の無かつ

たネタ」

『あ、どうも』

はつきり言うな、この人。

「ホタテにアジにネギト口にウナギって……人気ねえのか？ 本当
に」

「少なくとも忍岳光しのたけひかりは食べねえな」

「……あ、違う、お菓子に行ったんだあいつ等」

……まだ一時なただけど。

「ポテエトオ！」

『わー！』

なぜにわー？

「……あ、純純、あっち見ろよ」

オバサンもとい大人の方？

……何だかポテトよりは高分高そうなお菓子が数種類。

そしてちやつかりそのお菓子を盗ってはパクつく忍。

「行くぞ夏」

「あ、やつぱり？」

当然だ。

「あ、純兄ー、なっくん。おいしいよこれ」

忍、その手に持つてるのは何個目だ。

「んじゃ俺も貰お……って。ねえし」

「あーごめんねー夏君純君！ 食べちゃった」

……まあ、予想はしてただけど。

93 猫猫会議

『さて、今日の議題は……何故人間の子供は魚が嫌いなのか！で
あゝる』

『議長！』

『なんだ』

『僕の飼い主の男の子は魚大好きです！』

『議題変更！ 何故人間はキャットフードを食べないか！』

結局食べ物なん！？

クロで。

白猫だけどクロって分けわかんないな。

あ、ミイがわかんない人は46話を見。

まあとにかく今は猫猫会議に集中しよ。

『ふむう、確かに人間がキャットフードを食べないのは不思議です
なあ』

『うちに赤ちゃん居るんだけど、その子がキャットフード食べよう
としたらお母さん止めるんだよ！』

『あ、うちもだ。「ばつちいから止めなさい！」って怒るんだ』

はっ！ こ、これっ！？

『人間はキャットフードが汚いものだと思ってるん！』

『ななっ！？』

『キャットフードとは人間が考え出したものだろう！？』

『わたくし達はばつちい物を食べさせられていたということですよ
！？』

むむ、人間！ それは酷！

『でもでもおゝ、ちよおゝと待ってくださいよおゝ？』

『何だミルク』

『はい、人間が食べるものですけどねえ？ 例えばチョコレー
ト……皆さん食べますかあ？』

チョコレート？

あの茶色い、べとべとの奴？

『食べないよおっ！ ぼくぼく、あんなべとべと食べない！』

『うむ。我輩も食わん』

『ちよっと舐めてみましたけど、舌がじーんてなるほど甘かったですわ』

『ミイも食べな』

『ですよねえ。それと同じような感じでは無いですかあ？』

わあ！ そういう考え方があった！

『なるほど！』

『納得ですわ！』

『では盛り上がった所で次の議題行きましょう！』

何故人間はネズミを食べないのか！』

『ぼくぼく、ネズミ食べないよ！？』

『ミイも食べな』

『俺も』

『わたくしも食べませんわ』

『ええ、私も……』

『我輩も』

議長は食べるのか？

『……まずネズミなんてそうそう見ないよなあ』

議長も食べないのか！

『絵でしか見たこと無いな』

『そうですな』

『わたくしの飼い主は猫がネズミを追いかけてやられるアニメが好きです。でも、そんな光景実際には見たことありませんわ』

『あ、ぼくぼくネズミは森の中に居るって聞いたことあるよ！』

……森の中行っただ、迷っちゃっと思。

『よし！ この件は保留で！』

それでいいの！？

94 理科の先生を怒らせるべからず

「はい、それでは始め！。よいどん！」
何故に理科の実験始めの合図がそれ？
忍でーす。

硫黄と鉄の化合物の実験……を、始めたところ。
「はい忍、硫黄と鉄の混ぜ混ぜ頼んだ」
「頼まれた」

最初っから混ぜてくれたら楽なのになー。
いや、混ぜるだけだけどさ。

「せんせー、遅れましたっ」
ありや、清。

そーいや居なかつたねえ。

……斜め前の席の、それも結構うるさいほうの人間がいなかった
のに気付かなかつたあたしって？

「高崎君遅刻ー、はい、何してたの？」

そー言う事言いながらノートに書き込まれるのって見ててちよつ
と怖いよなー。

……と、前に清が言っていた。

「実は腹痛くて保健室に」

「清ー、嘘つくくなよ？ あはは」

おー、なつくんナイス。

清ー、嘘はいけないよお？

「う、実は頭が「はい嘘お〜」捻挫して「……体育なかつた……」
階段から落ち「高崎君、怒るよ？」あう」

ちなみに、最初が桜で次が水谷。最後は先生ね。

はい、清の言ったことをつなげてみよう！ の巻。

『実は頭が捻挫して階段から落ちた』

……何か凄いことになつてるな。

「くそっ！ 白状します！」

「はい、何？」

「昨日の晩熱出した母の看病してて寝てしまつて遅れました！」「嘘つけ！！」

それは学校そのものに遅刻した時の言い訳でしょうが！！

ぜつたいにそれでは言い訳できないだらうけど！！

「高崎くん？ 白状するんじゃないかなあ？」

「先生怖え」

何か黒いオーラが見える。

そして超のつくにこにこ顔が怖すぎる！

「どくしても君は硫化水素の臭いを嗅ぎたいようねえ……。硫化鉄できた班！」

『はい』

実はあたしたちはしつかりやつてたのだ。

そしてさつきからゆで卵の白身の臭いをきつくしたよーな、教科書で言うところ『腐った卵のような臭い』がしつかりと出てたり……。

うーん、一応知ってたけどこんなにかついととは思わなかった。

「ちよつと貸してね？ ……さあ、高崎君、君の鼻の寿命はこれまでよ。ふふつ。塩酸を入れるから試験管の上にお鼻を持ってきなさい」

おー、ひどい罰だー……つて！？

「先生ストップ！」

「それ危険だから！」

「だから実験の後で水入れなきゃいけないんでしょ！？」

「あらら、そうだったわねえ。じゃあ薄めてない塩酸ぶっかけの刑で許して『余計危険になつてるから！』」

この人大丈夫か！？ よく教師になれたな！？

「じゃあクロロフォルムを嗅がせ『眠らせてどうする！？』じゃあ何ならいいのっ！」

いや、そこでキレられても……。

っていうかクロロフォルムなんてあるの？

「金魚丸のみの刑」

なっくん、何そのトンデモない刑。

「だめ！ 金魚さんがかわいそうだと思わないの！？」

清の心配はせんのかい。

結局。

今回の実験で使った実験器具洗いの刑になりましたとさ。

ピカアッ

.....

どーん！ どん々どん々どん々どん々どん々どん.....

『きゃーっ！ー！』

雷怖え！

いや、雷は怖くねーんだけどな？

雷鳴った時の女子の悲鳴が高くて高くて怖え！

岳だ！

「怖いよオ！ 学校に落ちちゃったらどーしよー！」

「避雷針あるから」

「それでも怖いよ！」

んと、何か叫んでるこいつは……里山璃々（さとやまりり）だっ
たと思う。

「ところで修也は怖くねーのー？」

「はあ？ 何がだ？」

「いや、この流れるに雷だろー？」

「まさか。お前は怖いのか、くく」

おーい、笑うなー！ 誰が怖いと言った!？

「修也怒るぞ！」

「それは怒ってねえのか」

怒っとなる。

ところで。

なーんで話し中なのに攻撃されてるんだオレは!？

まあ、いつもの事だけどー。

「岳ー」

「何だー？ 最近出ても台詞一つしかない翔」

「……酷い。そのうち転ぶぞ？ 床湿ってんだから」

「もうとつくに転んだ!」

「いやそこ威張るなよ」

えへん。

別に転んでも痛くなかったけどな。

あ、ただ床の木の臭いがきつかった。

ぺカツごろごろごろ……

「きゃーっ!」

耳がいてー。

「ちよつと! 近くなかった今の!？」

「近いよオ! 近いよオ! 一秒も無かったよ!？」

学校ん中いたら大丈夫だろー?

避雷針あんだし。

「せーんせ、何食ってんの?」

「雷ビスケット」

何そのまんまな名前&形のビスケ。稲妻形って。

一枚いただき。

ほりっ

ぱちぱちぱちぱちぱちっ!

「んにゃっ!？」

口がー、舌がー、しーびーれーるー。

「ほら、雷ビスケットでしょ?」

んー、まだしびれる。

もう一枚いただき

「しゅーっーやっ」

「いらん」

そー言わずに、はい、口開けるー。

「と見せかけて、はい翔!」

「むぐ!? むむむむむむ」

うんうん、旨いかー。何かよーわからん声発してるけど。

「お、オレ今日はお菓子貰うのやめとこ……」

「あたしも……」

うん、正しい判断だと思うぞ。

ぴかっ

どーんごろごろごろごろごろごろ

『きゃーっ!』

そんなに叫んで疲れねーのかな。

オレの鼓膜は大分疲れてんだけどー。

と鼓膜の音が聞こえるような気が……しない。

96 岳と蛙

げごーっ、げごーっ

「はぁー」

「……純兄どーしよ。岳が暗い」

暗くて変で怖い。

蛙の声聞きながら溜息ついてんだけど。

忍でーす。

学校から帰って来たらなにやらこんな状態だった。

「ほっとけ」

「ほいな」

あれ？ ほっといていいのか？

「……まあいいや。」

「ねーちゃんとにーちゃんがひでえ」

岳、君は一体何に話しかけてんの。

「どつたの岳」

「あんなー、裏山オリエンテーリングあるじゃん？」

ああ、小学の毎年の恒例行事。

学校の裏山登って、頂上でアメ貰って帰って来るだけなんだけど
ね。

「……裏山には名前無いのかなあ。」

「〇〇山とかって。裏山が名前？」

「で、今日雨じゃん？」

「延期になった？」

今日だったんだー、って感じなんだけど。

「うっん。中止……はーっ」

岳……そんなに楽しみだったの。

まあ、岳六年で最後だしねー。

小学ん時『雨学年』と呼ばれたあたし達でも晴れたのに。

五年の時の林間学校なんかは嵐だったけど。

「中止になったせいだな!？」

あれ? 続きがあるの?

「授業があつたんだよ!」

そっちか!?

そっちなのか!?

「オマケに!」

まだあんの?

「教科書全部忘れた!」

うわ。それは悲しい。

「置き勉強してねえのか?」

純兄、小学生って普通置き勉強しないんじゃない?

あたしはともかく。

「いつもしてたけど」

してんのかい。

「そのつもりで偶然うっかり持って帰っちまってさ……」

どのつもりだよ。

「とりあえずそんなこんなでオレは凄く落ち込んでるんだ!」

そんなに力いっぱい言わなくても。

「岳お兄ちゃん」

「んあ?」

「見て見て、捕まえたの」

おー、蛙……。

「つて、大丈夫かこの蛙!？」

何か凄いくたーってしてるけど!?

いったいどーゆー捕まえ方をしたらこうなんの!?

捕まえたのが何分も前なら分かるけど……。

それならもつと前に持つてくるはずだし。

「あのね、はーちゃんとイロイロ使ってギリギリまで追い詰めながら遊んでね」

光、はーちゃん、それはあんまりだ。

「……ねーちゃん」

「ん？」

「オレ、何かちょっと元気になったわ」

何故に。

「この蛙の方がよっぽど大変だよな……うん。こんなことで落ち込むなー、オレ」

……やっぱ、今日の岳変だ。

97 鶴を折ろう

「それじゃ、折り紙配るのでとりあえず一羽ずつ折ってください」
わゝ、わゝ、千羽鶴だゝ。

いや、だから何って訳でもないけど。
忍です。

修学旅行でね、長崎行くんだけどそれで千羽鶴を折ろうって事に
なった……らしい。

聞いてなかったから分かんないや。

「篠、折り紙変えて」

「いいけど……何で？」

「わたし黄色嫌い！」

小学生みたいな理由だなー。

「あそ。はい、赤でいい？」

「うん、ありがとゝ」

……そー言えば。

赤も黄色も千羽鶴で使っちゃいけないんじゃないやなかったっけ。

よく見れば純兄黒だし、なつくん金だし、清銀だし。

よく金銀取れたなあ……。

オマケにあたし白じゃん。

使っちゃいけない色のオンパレードだっ！

まあ、たいして関係ないらしいし、いつか。

「……忍、鶴の折り方ってどんなだったっけ？」

ありや、なつくん忘れたの？

「三角に半分折って、さらに半分折って……」

「ああ、分かった、サンキュ」

コレで分かるの！？

最初の最初だけなの！？

まあいいや。

あたしもさつさとやるつと。

「……………篠」

「お前意外と不器用だったんだな」

「うっさい」

「言われないと鶴って分かんないんだけど……………」。

「羽がある事くらいしか。」

「幼稚園の時はもつと酷かったぜ？」

「これ以上!？」

「だって羽があるかも分からな……………ぎゃっ!？」

「うっさい」

「しーちゃんが怒ったあ!

「篠の怒りの鉄拳! 清君の後頭部にヒットしました!」

「そーいや清のは?」

「あ、机の上にあつた……………って、

「テメエは折ってもねえじゃねえか」

「オレは十五秒あれば出来るからな!」

「早っ。」

「じゃあやってみて。よーい……………」

「桜、その手の中にあるストップウォッチは何処から出した!？」

「スタート!」

「1……………2……………3……………」

「早っ!？」

「もう正方形に開いて潰すまで行っちゃった。」

「……………15!」

「セーフ」

「……………ぎりぎりで十五秒だったんだね。」

「すげえ!」

「何か凄い綺麗だし……………」

この才能の一部を数学に割けたら……。
何も変わらない気がする。

98 お友達できちゃった!

「えいつ!」

わゝ、ダブルアウトだゝ!

はーちゃん凄いゝ!

「わあっ!?!」

当たっちゃったゝ!?!?

はーちゃん……ええとええとゝ。ドンマイゝ。

光ですゝ。

お昼休みだからねゝ、クラスの人たちとドッチボールしてるのゝ。
前はこの時間寝てたのにねゝ、はーちゃんに連れてこられちゃっ
たのゝ。

「高山っ! 取れ!」

「ほへゝ?」

わわゝっ! いつの間にかボールがこっちにゝ!?!?

「えいゝ」

セーフゝ、なんとか取れたゝ。

うゝん、何だかまだ外で遊ぶの不思議な感じするなゝ。

皆でいっばいで遊ぶの、はーちゃん来てからだもんゝ。

はーちゃんゝ……にボール渡したいけど人いっばいいるなゝ。

「佐紀ちゃんゝ」

「はーいつ! ありがとうねん、ピカちゃん!」

何で私はピカちゃんなのゝ?

佐紀ちゃんいっつもこうなんだよゝ。

皆に変わったニックネームつけるのゝ。

「ムー ン覚悟!」

「俺は某カバそっくりの妖精じゃねえっ!」

ムー ンの名前は睦月むつきくんねゝ。

『む』しか合ってないよゝ。

「ありやゝ、取られちゃった。」

「よしっ」

「あっ！ みよよん危ないーい！」

「みよよん？」

「あゝ、相手コート近くで本読んでる子かな？」

「危ないってことは味方なんだよね。」

「……ドツチボールしながらよく本読めるね。」

「え、村田いたのか！？ 影うつすいなお前」

「……佐紀ちゃゝん。バラしちゃってどうするの。」

「みよよん逃げろ！」

「……美代、こつち……だけど」

「みよよんって美代ちゃんって言っただけ。」

「えっ？ あれっ？ だーもう！ ややっこしいからアツチ投げる

！」

「えゝ！？こつちゝ！？」

「はわゝ、逃げなきゃ。」

「美代ちゃんのところ逃げたらわかりにくいかな。」

「美代ちゃゝん」

「……影うつす横へ……よーこそ」

「ほへ〜？」

「影うつす横？」

「『影が薄い人の横』かな？」

「さっきの傷ついてたのかな。」

「何読んでるの？」

「……『知ってるようで知らないどうでもいい事』」

「……不思議な題名だね……」。

「美代ちゃんがまず不思議な子だけ。」

「ひーちゃん危ないっ！ 後ろ後ろ！」

「ほへ〜？」

「わわゝっ！ 真後ろ三十センチ以内に睦月くんが！」

……当たったんだね。

そしてはーちゃんが入ったんだね。

「あう、当たっちゃった。」

「よっしゃ、入れる！」

一歩進んで、はい外野。

私命中率もスピードも低いから一遍出たら入れないんだよね。

お姉ちゃんも言ってたよ。ダーツの的には当たるのにドッチボールでは的が動いて当たらないって。

だから美代ちゃんとお話ししてよと。

「美代ちゃん、今日遊ぼう。」

「今日？ ……今日、ピアノ。」

ありやいや、ピアノか。

「明日は？」

「……大丈夫。……家どこ？」

「水ヶ丘町。」

「それは……全員。」

だよ。

「うんとね、うん……学校で待ち合わせて行く。」

「……うん。」

もしかしたら私から誘って遊ぶ人って美代ちゃんが初めてかも。

明日楽しみだな。

99 べっこう飴作ります

……さて。

これはどーゆー事だろう。

皆で考えよう。シンキングタイム！

……って、何を考えるか分かんないね

忍でーす。

何かね、光達がまた台所に居るんだけど……。

光には「ちゃん、で、何かもお一人居んのよ。」

人を一個って言っちゃいけない？ じゃもお一人。

「あ、お姉ちゃんお帰り〜」

「いや、あたし何処にも行ってなかったから」

なのに『お帰り』ってちょっと傷つく。

「……お姉さん？」

「そ！ 忍ちゃん！」

「美代、です……おじさま……しています」ぺこり

わ〜、礼儀正しい。

「なっくん見習え」

「何だよ」

「何でって」

そりゃー、いつもベランダから入ってくるといってるといって不法侵入が礼儀正しいなんて言えないし。

「わ〜っ！ 焦げてるよ〜！」

「わわっ」「……わー」

フライパンから煙がーっ！

……って、何作ってんの？

「うわ、べっこう飴か。何か懐かし」

小学の理科クラブでやったなー。

「あ〜、コレ食べれないよ〜」

「美代に、ちょうだい……」

食べるの？ 体に悪そう……。

「……兄上に、お土産」

「おいっ！」

美代にも兄さん居るの！？

とゆーか何で兄上！？

あと光！ はーちゃん！ 親指を立てるなーっ！

「どんな感じだったか教えてね！」

「……写真、撮っとく」

おいおいおい……。

止めるのやめた。頑張れ、美代兄^{あに}。ははは。

「最近の妹はこんな奴しかいねえのか？」

「あたしは！？ あたし純兄の妹！」

「あ」

『あ』ってなに！？ 『あ』って！

「よし、気を取り直してもう一度」

アルミカップに……

どさっ

砂糖を入れ……

「つて、多っ！？」

「あゝ、失敗」

よかった、失敗で。

明日砂糖がなくなったらどうしようかと思った。

いや、明日砂糖使うわけじゃないけど。

「水入れるよっ！」

ばしゃっ

「おい、水は数滴で充……フライパン、入れる……ね」おい

うーん、さっき焦がした奴は焦がしさえしなけりゃ普通に出来て

たのに……。

これじゃべっこう飴じゃなくて砂糖湯になっちゃっよ。

「ところで忍、純は何処行った？」

「岳の友達とナ○プレしてる」

何でまたそんなことになったんだか。

「岳の友達？ 岳は？」

「他の二人の友達とゲームしてる」

赤い帽子にヒゲのおじさん達がカーレースするやつで。

「よし、じゃ俺はそつちに混ざろ」

ありゃ、行っちゃうの。

「お姉ちゃん」

「何？」

「砂糖が消えたのっ！」

「……砂糖の、色の、水だけ残った」

溶けたんだよっ！

100 ただ暴裏話！ その一

「じゃじゃん！ そんな訳で、ナントただいま暴走中！略してただ暴第100話だぜい！」

「どんな訳で？」

「さあ」

「おーい、盛り上げろよ！」

「こんにちは！ そんな訳で、どんな訳かはともかく作者の呪理阿じゅりあです！」

「100話で何するの？」

今日は裏話と言う事で、キャラをどういう理由でつくったか、と名前の由来を……。

「後付か」

何故断定するのかな純君？

違います！ 名前は考えたっちゃ考えたんです！

考えてそれか、とか突っ込まれそうですけど。

さて、まずは忍。

「ん？ あたしから？」

彼女の名前は、私が初めて投稿した『おとーさんが語るお話』シリーズの『おとーさんが語るお話 桃太郎』の、突っ込み役を作ったときに考えました。

「由来は？」

うちの母に『男にも女にも居るような名前ない？』と、聞いて…。

「ちょっと待て！ 何でそういう質問なの！？」

マコトとかジュンとかいうのもあったけど？

「ジュンって……俺の名前と被るじゃねえか」

その時はまだ純という存在すら考えてなかったのだ。

「わー、にーちゃんドンマイー！」

岳の存在も考えてませんでした。

「うう」

で、何で『男にも女にもある名前』かと言つと。

「何で？」

名前が被る男子を作つてみたかつた。以上！

「居ないじゃん！」

今まで忘れてましたから！

「威張るな！」

さて次。光！

「無視するな！つ！」

光は、さつき言つた『おとーさんが語るお話 〈桃太郎〉』の、おとーさんにお話頼む役として作りました。

「本気で無視されたあ」

で、名前の由来は……。

えーつと、こちらは大分さらーつと作つたので……。

「ひどい〜！ 忘れたの〜？」

あう。

多分、できるだけ女の子して欲しいなー、と言つ事で「ついでに名前前にしたんじゃ……」。

「結局忘れてんじゃねえか」

「わー、わー、じゅりあひつでー」

何故にひらがなになつているのでしょうか。

「読みにくいからな！ オレが！」

「呪理阿つて当て字でしょ？」

はい。当て字です。

つ、次行きます！

名前つけた順で言っているので……。

「次オレかつ！？」

あー……うん、そうだ。岳です！

「よっしゃ、にーちゃんに勝つた！」

存在自体は純の方が先だったんですけどねー。

「何だよ何だよ、けーつきよくオレ最後かよ」
多分……。

二人ともただ暴を考える時に作ったので覚えてないですが。

「あやふやな所多すぎねえか？」

あう。三ヶ月以上も前の事覚えてないですよっ！

「にしちゃ、忍の所ははつきりしてたけど」

人に質問して考えたものは覚えるものです。

「そーゆーモンかあー？」

そーゆーモンです。

はい、岳の名前はー。

ぶっちやけ適当です。

「おーい！」

電子辞書でぴこぴこしながら男の子の名前に使えそうなの探しました。

「これ、考えたって言うのか？」

考えましたよー。イメージに合いそうな探したんだから。

「ほお」

……で、結局文字を書き出してた紙が訳わからん事になったので、

「何かオレ、雲行きが怪しくなってきたような気がすんだけど？」

もうコレでいいや！ と、岳になりました。

「結局適当かよー！」

だって私、めんどくさがりですから。

「いやいや、そこ威張れないから」

が！ しかしー！！

「え〜？ 何かあったの〜？」

そのめんどくさがりが面倒な事と呼んでしまいました！

「ええっ！？」

実はですね……。

『たける』と、キーボードでうちます。
変換します。

この時は『岳』と素直になってくれるんですが……。

「キーボードに素直もくそも無いだろうが」

そこはともかく。

「それ以外がなってくれない？」

「そうなんです。『たけるは』とうちます。

変換します。

『猛は』となるんです。

「並べ替えすればいいのに」

「そう思うのですが……。」

「やり方が分からない、とかか？」

「いえ、やり忘れる、ですね。」

「一回なつても『後でやる』となつて……。」

「このめんどくさがり屋！」

「はい次行きまーす。」

「何か流されたような気が」

「気のせいかと。」

「はい、最後は純ですね。」

「流れからして絶対由来も何も無いと思うんだけど」

「純はですねー。」

「私がお兄ちゃん欲しかったなーという理由で作りました。」

「そんな理由!？」

「だって小さい時からずっと欲しかったんだもん！」

「……純兄は何で中三なの？ できない事は無いけど、多少無理が

あるんじゃない？」

「高校生活とか大学生活とか、仕事してる人の生活ってはっきり分
かないんで。」

「ありゃ、マトモ？」

「で、名前の方は……。」

『優斗』とか『快都』とかその他候補があつたりしたんですが。

「純お兄ちゃんだけ〜?」

いえ、一応全員ありました。

忍……は、さつき言いましたね。『真琴』や『純』

光 『鈴鹿』 『未奈美』

岳 『勇氣』 『馬鹿』

「ちよーつと待ったーっ！ 何か聞き捨て、読み捨てか？ 出来ね

ー奴があつただけだ〜!？」

『勇氣』ですか？

「違あう！ 『馬鹿』の方だよ！！読み方変えりゃ『ばか』だろ！？」

これはギャグで作りました。

本当には使わなかつただからいいじゃん、ということだ。

「ギャグ!？」

はい、で、純の名前の続き行きます。

「……ねえ、何か今までの中で最長になつてる」

はいそこ突つ込まない。

100話記念、つて事で、読者様もじゅりあの戯言にもう少しお付き合いください。

純の名前の続き行きます！

候補出した後で、他の三人の名前が『忍』『光』『岳』で、あれ、全員一文字じゃん。と言う事に気が付きまして……。

「遅くない?」

「自分で作つたくせに〜」

そこ突つ込んだじゃだめなの。

それでっ！

ここまで一文字続いたんだから全員一文字にしちゃおう！ と言
う事で『純』になりました。

「なんでここでお姉ちゃんの名前候補が復活するの〜?」

一文字の名前が思いつかなかつたんです！

「清とか剣とかは？」

後であ、こんな名前もあるじゃん、と、そいつ等を作ったときに思いつきました。

「おい」

はい、それでは今回はこの辺で失礼いたします！

『突然だな！？』

それでは、今度はどこかで突然現れて見せましょう！

「いや、いらぬからそれ」

あう。

それでは失礼いたします！

読者の皆様、これからも『ただいま暴走中！』をよろしくお願
いたします！

101 清、宿題をする

「よし！」

『ん？』

「今度こそ……オレはやるー！」

……何を。

忍です。

いや、何かね。

今数学が終わったところなんだけど、突然清が叫びだしたんだよ。

「何するの〜？」

「宿題！」

『今までやってなかったのかよ』

わあ、コレがハモるってちょっと凄くない？ ほら、長いし。

「やってなかったと言うかできなかったと言うか」

どっち？

「とにかくっ！ オレはやるぜ！」

どーん

うーんと、この場合背景って荒波の方がいいのかな、爆発の方がいいのかな。

「うっ」

あれ？ 何かプリント広げた瞬間動かなくなった。

「いきなり難問が……」

「さっきの授業でやったばっかだろうが」

「夏、コイツにそんなのは関係ねえ。ば「馬鹿だからな！」……」

あ、純兄が清にらんでる。

で、何か拳作ってる。

つまり。

「開き直るな」ドスッ

こっぴうことだよな。

「純君のパンチ……あれ？ 突き？ が、清君の鳩尾に直撃！」

「ぐおおおおおおお！？ ちよつ純！ 今のマジで痛えぞ！？」

「当然だろ？」

「ははっ、相変わらず」

「夏そこ笑うトコじゃねーっ！ そして当然でもねーっ！」

なつくんにそんなものは通用しな〜い、純兄にとってはそれがと
うぜーん。

「で、いつコレはやるの」

「篠ー、助けてくれてもよくね？ 色々から」

「……ふむ」

しーちゃんが筆箱を探して……取り出しましたるは。
はさみ。

「えー……篠さん、それは一体なんでございましょう」

「見て分からないか、はさみだ」

流石にそれは分かってると思うんだけど……。

「それで何をしよう？」

「ふふ」

怖いから！ その笑み怖いから！

「と、冗談はともかく。やるのかやらないのか」

少しいいですか？ さっきの少し本気に見えたのですが。

と、言っても聞き流されるだけだよ〜。

「やりますから教えてくれ！ 答えを」

意味無いじゃん。

ちなみに、一問目は展開でこんなだね。

問一 $(x+3)(x+5)$

……清、本格的にヤバイかも。

「は〜い清君、ちなみにドコまで分かる？」

「コレが暗号だという所まで……」

「あほだろお前」

「数学のみという意味なら何を今さら」

開き直るな。

「じゃあ基本の基本から言つよ？ これは乗法公式？を使って……」

「あ、それなら分かる」

「じゃあ解けるだろ」

「へ？」

いや、そこで『へ？』って聞かれる方が『へ？』何だけど。

何で乗法公式？が分かるのに解けないの。

「aもbもねーじゃん。ほら、乗法公式？って $(x+a)(x+b)$ だろ？」

『はあ！？』

「……清、この場合は多分アタの言ってるaが3でbが5」

清、ちよつと沈黙。

「ああ！ そーゆー事！？」

『はあ！？』

102 強いものいじめ？

「なあ」

「えー、なつくん、また鉛筆なくしたの？」

「おーい」

「机の下は？ 鞆の中は？ ……えーと……ゴミ箱の中は？」

「いや俺イジメられてんじゃねえから」

「おいってば」

「だよねえ」

「無視するなあ！」

ひゃわっ！？

びっくりしたあ……。

忍です。

誰だよー、後ろで突然怒鳴ったのは。

くるっ

……………。

「誰だろっ」

「おいっ！ー！」

テンション高いなあ。

さてさて、顔に見覚えはあるんだけど、誰だったかな。

「あ、確か……悪い、自己紹介してくれたことは覚えてるが忘れた」

「忘れるなよおい！」

しよーがないよ、なつくん忘れんぼだし。

ああうん、あたしがいえた事じゃないね。

「村田だよ！ 村田岬^{みさき}」

「誰だっけ」

「忍、コイツのゆーこと聞かなくていいって」

あれ、清が妙に冷たい。

…………… ああっ！！！！

「水谷イジメのAだ！」

「A！？ 何で俺がA！？ 後なんか人聞き悪いぞ！？」
はい、分からなかった方は41話参照。

「だーって、ねえ？」

「事実だからなー」

「ちなみにあれから水谷に謝りましたA君？」

「だあもう！ 今まさに俺がイジメられてるよな！？」

あら、やっぱり可哀想かな。

「ごめんね、えつと……で、謝った？」

「はあ……何でこんな奴に話しかけてんだ俺」

聞こえませーん。

「うう……もー、謝ったよ、謝った」

ありや、素直な奴。

どんな謝り方したんだか知らないけど、いじめっ子が謝ったって
凄くないかなあ。

「で、何の御用で？」

「ああ、それ。やっと本題に「早く話さないとAって呼んじゃうよ
はあ……」

溜息二回目ー。

「お前さ、妹いる？」

「いるよ？」

それが何か？

「そいつ、今小四？」

「そーだ……って何！？ まさかうちの光を……」

って、こないだ初めて読んでみた小説ラノベでこんなのを見た事がある
なあ。

「いやそれ意味分かんねえから……って、光？ やっぱそっか……」
何が。

「ところで村田あ、おめー顔青くね？ 大丈夫か？」

清、何かさつきと態度が百八十度変わっております。

「大丈夫……じゃ、ねえかも」

「何？ 変なもの食べた？ 拾い食いはダメだよ？」

「ああうん、分かってる。昨日思いつきり思い知らされた」

えっ！？ 否定しようよ『拾い食いなんかしてねえ！』って否定しようよ！

「拾い食いしたの？ 何を？ どんぐり？ 梅？ リンゴ？」

「全部今の季節じゃ落ちてねえよ！」

「しかもリンゴで」

冗談に決まってるでしょ！

「いや、そうじゃなくて……テーブルに置いてあったカップケーキ食っただけ」

「それ拾い食いって言わなくね？」

「どちらかと言うと盗み食いかつまみ食いだね」

あたししよっちゆうやるけど。

昨日もなにやら妹三人組のカップケーキのちゃんと出来た奴つまみ食いしたし。

美代はちゃんと作ってくれるからね！

何個か変なのは作ってたけど……。回収してくれたし。

『兄上にお土産』って言う……あれ？

「もしかして……そのカップケーキ、黒かった？」

「ああ、チョコかココアでも入ってんのかと思って食ったら……」

一瞬の沈黙。

そして。

「焦げたトースト味って何なんだよっ！？」

叫んだ。

「焦げたトースト味い？ あ、春の奴が言ってたな。『今回は凄く新しいよ！』って」

どういう意味で新しいんだろう……。

少なくともいい意味じゃないね。

「お前の妹も共犯か！」

「あれ？ 美代の兄さんって村田だった？」

「そーだが何か！？ 三日前も『兄上お土産』って焦げたべっこう飴渡してくれるし！ 何なんだよ！」

さて、一つ疑問が浮かびました。

美代は村田の焦げたべっこう飴を食べた時の写真を本当に撮ったのだろうか。

撮ったんだったら今度見せてもらおうと

103 何かわけのわからん事に

「修也ー、こっちこっち」

「……これってもしかして卒業まで続いたりするのか……？」
「いんや。中学行っても続けるつもりだぜー、オレは。」

「岳だー！」

何かいつも通りのようで最近ちょっと変わったところがあんだよな。
それは……。

「修也がホーキを使わなくなった！」

「何を今さら……」

あ、声に出た。

何か修也曰く気分的に自分が悪いような気がしてくるかららしい。
何を今更。

「岳くーん！」

「岳お兄ちゃん」

「……岳、くん」

あ、美代含め妹三人組。

「あゝっ、岳お兄ちゃん後ろ〜！」

「んあ？」

『ぴやうあ!?!』

どんな驚き方だよ。

「何も居ねえじゃん」

「何々!? もしかしてユーレイ居ちゃったりするのオ!?!」
里山大正解。

……いや、何か今回はでっけー耳がついてるけど。

ほら、えーっと……うん、何か分らんがでっけー耳がついてんだ!
だ!

で、耳で立ってんだ。

「なんじゃこりゃあ!?!」

「おい高山、お前は頭がおかしくなったか」
せめて疑問系にしてくれよおい。

「なんじゃこりゃあ!?!」

『え?』

せんせーもまさか見える人?

「何々!?! ビデオカメラがどーしたのオ!?!」

「見せて!」

.....。

沈黙。

『なんじゃこりゃあ!?!?』

あれ?

「どーなってるのアレ」

「さ?」

「凄いよ! ひーちゃん! カメラにね! 目では見えない変な物
体が映ってるの!」

まさかそれって.....。

『むみゅみゅ! 変な物体とは何でしゅかあ!?!?』

『お前だよ!?!』

あれえ?

あのカメラ越したと皆にも見えてんのか?

『みゅーちゃんは変な物体では無いのでしゅよお!?!』

『ドコが!?!?』

『ちゃんと耳で立って』おかしいだろ!』みゅみゅっ!?!?』

えー.....なんだろ、なんなんだろコイツ。

「おーい、ちよつとお前」

『みゅーちゃんはお前では無いのでしゅ』

「いや、それはいいーから』よくないのでしゅよお!?!』はいはい」
何かすっげー疲れんだけどコイツ。

「はい、みゅーちゃん?」

『はいでしゅ』

はいにも『でしゅ』ってつけんのかよ。

「私の質問に答えてね〜」

『おっけーでしゅ!』

「みゅーちゃんは幽霊〜?」

『違うでしゅよお! 何を隠そうみゅーちゃんは妖怪なのでしゅ!』

『妖怪!?!』

実在するのか!?

しかも隠せてねーし。

いや、幽霊が居るんだから妖怪が居ても……

「おかしいだろ!」

やっぱおかしいか。

「何でお前等何も無しでそいつ見えてるんだ!?!」

あ、そつち?

「何でつて言われても……なあ?」

「ねえ〜」

まずはそのビデオカメラから突っ込むべきじゃねーかなー。

『むみゅみゅっ! そーいえばそーなのでしゅ! 何ででしゅか?

なんででしゅか?』

「だあもつ! 見えるもんはしょーがねーだろ!」

「死神トリオに分けてもらったら見えるよ〜」

『死神い!?!』

何か……余計話がややこしくなった気がする。

「よばれて飛び出てなんとやらー! 未理阿ちゃんでした!」

「噂をすれば影が差すー。霧瑠依^{ムルイ}くんでしたー」

……あれ、こいつらって確かねーちゃんが言ってた……。

忘れた!

「ああつ!? 先生のお菓子が凄く減ってる!?!」

「おかしいよ! お菓子が浮いてるの!」

「あ、カメラで見たら何だか人が増えてる……」

「未理阿ちゃん、これおいしいよー」

……すっげー早業。いつ盗った!?

「いったただつきまー」どかつ

『わーっ!』

あれ、何か急に二人吹っ飛んだけど。

「貴様等……これは遊びでは無いと何度言えば分かる?」

なんか知らんがさらに増えた!?

「あう、妙羅先輩……」

「いきなり蹴るのは酷いですよー」

「知った事か。ミュウ、お前も勝手に人間界に出るな」

うわっ踏ん付けてる。止めた方がいいか?コレ。

『あ、みよーら! みゆーちゃんね、みゆーちゃんね』

「黙れ。勝手にふらふらするな」

『はい』

うっわ、素直!

「貴様等もいつまで転がっている。戻るぞ」

「先輩が吹っ飛ばしたんですけどねー」

「じゃっ! おやつもおいしかつたし帰るでした!」

……窓から出入りするのは死神と妖怪のお決まりなのか!?

「……衝撃映像が取れた……さすが『卯津屢出』だ」

『何だよそれ!?!』

当て字にしか見えねえっ!

あ、当て字か。

「岳……なんだったんださっきの?」

「知るかよ!」

104 二つで寝るな

「……眠い」

「またか」

今日だけで三十一回目だ。

「ねーむーいー」

「知るか」

純だ。

「そんなに眠くてテストは出来たのか？」

「うん、出来たよ。数学も公民も、解き終わった瞬間寝た」

ああ、そういえば目の前で突然倒れたな。

……数学は残り一分だったような気がするけど。

「純兄ー、11111の素因数分解の答えって何？」

「覚えてねえな」

「あたし、アレ解くのめんどくさくなって途中で止めたんだけど」

……このめんどくさがり屋……って、人のこと言えねえか。

「うーん、まあとりあえず適当に入れたからいいや。お休みー」

「二つで寝るな」

「……すー」

……俺が寝るまでに起きる事を願おう。

じゃねえとベット盗られる。

十一時。または二十三時

「おーい、起きろ」

「……すー」

……くそ、本当に盗られるとは思わなかった。

オマケになかなか起きねえし……。

どれだけ眠かったんだよ。

「涎垂れてるぞ？」

「知った事かー」

いやそうじゃなくて……って。

「テメエ起きてんだろ」

「……………むにゃ？ 朝ー？」

「夜だ馬鹿」

「お休みー。……………すー」

おいこら。

こんなにコイツ寝付くの早かったか？

寝たふりか？

「おい」

揺する。

叩く（軽く）。

叩く（若干強め）。

ああもう、こういう時ばかり演技上手いんだから分かりにくい。特に寝たふりは幼稚園の頃くらいから練習してたしな……………。

理由？ ソファーとかで眠くなって、そのまま寝たらベットまで

運んでもらえたからだ。

って、前に自分から言ってた。

「おい、次は殴るぞ？」

「……………すー」

何かイライラしてくるな、これ。

女殴るのは好きじゃねえけど、妹だしいつか。

ぼすっ

「こぶっ」

……………起きたか。

「……………すー」

ああもう！

コレでも起きねえってことはあれか？

俺が忍ん部屋まで運ばねえといけねえのか？

考えただけでもめんどくせえ……。

くそ、最終手段。

「んっ」

「きゃわっ!?!」

どた

必殺、引き摺り下ろす。

……最初からこうすればよかった。

「痛いよ!」

「五月蠅い。そこで岳が寝てんだから静かにしろ」

「んー。じゃあお休み」

「ここで寝るな!」

「えー」

えーじゃなくてだな……。

「んしよ」

「何で担ぐの。お腹痛い」

「知るか。運んでやってるんだろっつが」

……何となく敗北感がするのは気のせいかな?

105 テスト、皆の珍回答集

テスト珍回答集。

忍の場合。

理科

『右の人物の名前を答えなさい』

正答：アボガドロ

忍：アボカド

「食う気か!？」

「違うよ! だって、何かそんな感じしない?」

「ちなみに、学年で最も多かった間違いは『アボガド』らしいけど」

「……………」

国語

『漢字に直しなさい』ことわる『』

正答：断る

忍：誤る

「…………え? これ小学の漢字」

「思いつかなかったんだもん」

「胸を張るな」

清の場合。

数学

『展開しなさい。』

(a + b) (c + d) 『』

正答：a c + a d + b c + b d

清：a b c d

「分かってたんじゃないの?」

「いやー、引つ掛けかと思って」
『なんでだよ!』

$$\text{『 } (x+a)(x+b) = x^2 + (a+b)x + ab \text{』}$$

左辺を右辺のような積の形に戻す事を(A)すると言つ。

(A)に入る語句を入れなさい』

正答：因数分解

清：困数分解

「何困つてんだよ」

「つい。今回はたまたまだぜ!? たまたまだ!」

「……たまたまで漢字つて間違えるかねえ……?」

「うっ」

篠の場合。

『水酸化ナトリウムを加熱した試験管の口元についた液体を調べるために使う試験紙を答えなさい』

正答：塩化コバルト紙

篠：リトマス紙

「しーちゃんがここで間違えるとは珍しいね」

「五月蠅い」

「この単元でリトマス紙は使わなかつ……て、何? 何で拳用意してんの?」

「ふむ、忍のほうが点数が良かった嫉妬心からだとも思つといて」

「ちよっ、一点差でしょうが!」

社会

『1889年に発布された、天皇主権の憲法をなんと言いますか』

正答：大日本帝国憲法

篠：大日本帝国憲法

「うわゝ、惜しいね。皇国って書いたのはもしかして『天皇』の『皇』の字を取ったの？」

「うん」

「そっかゝ。でもでも、わたしの『大日憲法』に比べれば正解だよ
ね」

「そこは比べる所か!？」

桜の場合。

理科

『水酸化ナトリウムと、それを加熱した後の白い物質の性質が違う事を確かめる方法を二つ書きなさい』

正答：水に溶かす

フェノールフタレイン溶液を入れる

桜：水に入れる

フェノフタ液を溶かす

「……特に突っ込んでおくべき所にだけ突っ込んでおく。

『フェノフタ液』って何だ!？」

「『フェノールフタレイン溶液』の略だよ。」

ノートにコレで書いてたらうつかり……テへ」

「……略するか？ 普通」

「あははゝ」

社会

『日本国憲法が発布されたのは何月何日ですか』

正答：十一月三日

桜：二月三日

「……節分？」

「三日しか覚えてなくて。どうせならお兄さん「鬼さんね」そう

そう、が居ない時にするのかな、と思って

「はいっ、ちなみに施行は何月何日!？」

「五月三日!」

「なんでこれは合ってるの!？」

「……ん、コレで全部か」

「あれ? 純兄のは？」

「コイツ珍しい間違い一つもなくってよー」

「あれ? これは? 『フランス革命』が『フランス革命』になっ
てるよ〜」

「フランスって誰だよ」

完

106 リコーダーを吹こう

「ぼーぱーぱー、ぱぼぱーぼー、ぱーぼーぷー……」

「リコーダーか？ 久し振りに聞いたな」

「うん、五ヶ月ぶりに吹いた」

「忍でーす。」

棚で綺麗サツパリ忘れ去られて転がってたアルトリコーダーを見つけて、んで吹いています。

二年の時ちよつとはまつてたんだよね。

ほんつとにちよつとだったから一ヶ月も持たなかったけど。

「お姉ちゃん〜、私もやる〜」

「やればー？ ……あ、コレを？ アルトの方を？」

「やってみたい〜」

「いいよ」

「……指、届くのかなあ？」

「……うから高いレまでしか出来ないよー！」

それはアルトだからレからソね。

「ソプラノの方やったら？」

「うう〜、分かった〜」

「はい、取りに行つてらっしゃい。」

「リコーダーの何が楽しいんだかサツパリ分かんねえな……」

「純兄、リコーダーは中の下だもんね！」

「……上の上と言われると馬鹿にされてるとしか思え「馬鹿にしてるんだよ」「……」

純兄に勝てるのなんて殆ど無いんだもん！

「お姉ちゃん〜、取ってきたよ〜」

「おー、おかーり」

ソプラノリコーダーって、アルトリコーダー見た後だと凄くちっちゃく見えるよね。

「にーちゃん！ 百マス計算！ 今日こそ勝つっ！」

「後数十年は無理だろ」

「あゝ!?!」

「ほら、やるならさっさとやるぞ」

純兄も岳も、好きだねえ、百マス計算。

「お姉ちゃん、何吹くの？」

「んー……、茶色の小瓶とか？」

「何？ それ？」

「こんなの」

ぽぽぽぽー、ぽぽぽぽー、ぴぴっぴ、ぽぽぽっぴっぷっぽー

「あゝ、前にお姉ちゃんが吹いてたやつ」

「そうそう。これ楽譜」

音楽の教科書だけど。

オマケに岳のだけど。

五年のだからいいよねっ！

「高いミってどうやるの？」

「普通にミの指して。んで、後ろの穴をちょっとだけ開けるの。そ

んだけ

「おゝ。簡単」

ぽぽぽぽー、ぽぽぽぽー、ぴぴっぴ、ぽぽぽっぴっぷっぽー

「吹けるようになるの早っ!?!」

「えへへ」

前にやってたんじゃないの？

「前にお姉ちゃんが教えてくれたもんね」

はて。それはいつだろう。

覚えがない。まさかボケたかつ!?!

……ただの物忘れか。

107 ラジコンカーの悩み

「うおーっ、何かすっげー久し振りに見たコレ！」
「何何〜？」

「うわ、オレってばすんごい見られてるー。」

「わ〜！ 本当に久し振りだね〜」

「ああ……押入れでの生活は苦しかったぜ……。
オレが誰か？」

「ふっふっふ……ああ、ちょっと待った、閉じるボタン押さないで。
ラジコンカーだ！」

「電池入ってるかな」

「やるの〜？ やるの〜？」

「ったりめーだ！」

「何が？」

「おおっ！ かつての持ち主！」

「うわっ、なつつかしー」

「電池オツケー、よし、ちよつとどいて」

「よしっ！ 久し振りに走るぜい！」

「……………」

「あれ？ 電池切れてんのか？」

「違っよ〜、これちゃんとはまってない〜」

「っていうかフタは？ 電池のどこの」

「大分前から行方不明……ああ、オレの骨！」

「内臓丸出しじゃん、これじゃ」

「……電池を内臓にたとえるなーっ！」

「ま、いーや。行っけーい！」

「びゅんっ」

「ひゃっほーい！ 気分爽快！ 走るのはやっぱり気持ちいーっ！
ごん

……いつたあっ!?

「いきなりぶつかってどーすんの。ちょっと貸して。……あれ、また動かなくなってる」

内臓でんちがズレた……。

「よっし、今度こそー」

びゅんっ

ひょーっ! スレスレで椅子の足とか通るからスリル満点っ!

相変わらず上手いな!

がたっ……

段差に引つかかって内臓でんちズレたあっ!

だあもう! フタ見つけてくれよ!

「何やってんだ?」

『ラジコン(〜)』

ああっ!? お前は……!

かつてオレをバラバラに分解した恐怖の……ええと、いい言葉思いつかん。

「ああ、コレか」

びくびくびくびく……

「次私にもやらせて〜」

「ほいな」

……ほっ、大丈夫そう……いやまてオレ!

前は大丈夫だと思った瞬間やられたんじゃないかっ! 気を抜くな……。

「……あれ? さっき電池ちゃんとしたのに動かない〜」

「ん? ちょっとコントローラー貸せ」

びくびくびくびく……

「……動かねえな。こっちに問題あんのか?」

ぎゃーっ! こっち来るなこっち来るなこっち来るな!

「……忍、悪いけどドライバー取ってきてくれ」

「はいよー」

ぎゃあっ！　ぎゃあああっ！

ぶーんーかーいーさーれーるー！

戻れるのか？　戻れるのかオレっ！？

カチツカチツ

何かボタン押されてるーっ！

「……動かねえな」

……はっ！

警戒するのに夢中で動くのを忘れてたあっ！

じゃあ何か？　オレは自分のせいで分解されようとしてんのか！？

カチツ

ギョルルルルル……

「あ、動いた」

「ほんと？　貸して貸して」

ふう、分解は免れたな……。

「よーしー、ゴー」

ぎゅーごん

いってえっ！

何でいきなり追突事故起こさなきゃならんのだあっ！

108 お風呂は覗だらけ？

「うわあっ!?!」

何コレ何コレ!?! 髪の毛!?!

怖っ!

忍ですっ!

んとね、何かお風呂入って、風呂桶の蓋開けたら謎の物体Xが漂ってた……。

『どうした?』

「お風呂ん中に何か変なの入ってる!」

髪の毛だったらヤだな!。コレ何?

『……親父、風呂ん中に何か入れたか?』

『あー、スギナ入れた。スギナ風呂』

へ?

『聞こえたか?』

んー、あ、ほんとだ。

よく見たら草だ……。

せめて出汁パックか何かに入れてよ!

何も無しでポーンと突っ込まないで……。

「あー、びっくりした。純兄ありがと」

『ん』

『……純、いきなり殴るのはあんまりだと思っぞ』

殴られたんだおとーさん。

うん、とりあえず頭洗お。

シャンプーシャンプー、っと。

ピシユッ

「きゃわっ!?!」

何コレ!?!

何か前にもあったような気がするんだけど……。

何でいきなりこっちに飛んでくるの!?

『……あっそだ、ねーちゃん』

「何ー?」

ああもう、目に入ったあ。

『ごめん、シャンプーの先っぽ、さっきオレ入った時に折っちまった』

「はあ!?!」

どうやったら折れるの!?!

『あははー、そーゆー訳で、気い付けて』

「遅いから!」

『ドントマインド! 略してドンマイ!』

気にするなって……おい。

「やった本人が言うな!」

『……よし、逃げよう』
「うら。」

もー。ほんとにどーやったら折れんの、これ……。
がん

「いつ!?!」

お風呂の蓋倒れてきたあ……。

何か色々と前にも似たような事があったような気がすんだけど?

さっさと頭洗お。

ピシユッ

「きゃわっ!?!」

ああもう、また引っかかった!

「んーと、リンス」

かちや

……水?

「あれ?」

『あゝ、お姉ちゃん』

今度は光かー。

『ごめんね、リンスなくなっちゃったからお湯入れちゃった』

「何で!？」

『誰か引つかかるかなって思ってた』

しっかり引つかかったよ!

はあ……。

「リンス位入れとこうよ」

『めんどくさくて』

さすが我が妹。

ぜんっぜん嬉しくないけど。

『リンスとろうか?』

「や、いい。いっそおとーさんも引っ掛けよう」

仕返しはきちんとしないと。

岳と光はもう入っちゃったしなあ……。

純兄は何も仕掛けてないからやっちゃ悪いし。

……めんどくさいからもういいや。

「じゃじゃーん! 未理阿ちゃんでした!」

「霧瑠依くんでした!」

「……あゝ! もしかして……」。

「お姉ちゃんと岳お兄ちゃんが言ってた盗人死神姉弟さん?」

「未理阿ちゃん、霧瑠依くん達有名みたい!」

おおゝ、本当に盗人死神姉弟さんだゝ。長いなゝ、呼び名ゝ。

「隙ありゝ」

「あー、ポツ〇ー取られた!」

「何やってるでした!」

うゝんゝ、盗るのは得意でも盗られるのを阻止するのは得意じゃないとゝ。

「取り返し!」

「……ところでゝ」。

「そのポツ〇ー私のなんだけどゝ」

「盗った物は盗った人の物でした!」

「じゃあこれは私の物だねゝ」

『ああつ!?!』

おにぎり盗つたりゝ。

何かねゝ、ロープのフードの中に入ってたのゝ。

「何味ゝ?」

「あー、ちよつとー……」

ぱくつ

「あーあ、やっちゃったでした!」

「……」。

「何がゝ?」

普通のご飯の味だよゝ。

「あれあれー? なんでだろー?」

「おかしいでした!」

うっん、何がおかしいのかな。
ぱくっ

「あう、梅干だ」

すっぱい。

でもおいし。

「ふふふっ! 引っかかったでした!」

「剣に貰った最強兵器ー梅干君ー!」

そう言えば前に剣が梅干食べて騒いでたっつて、お姉ちゃんに聞いたな。

「もぐもぐ」

「き、効いてないでした!?!」

「そんなバナナー」

うっん、おいし

「はいどうぞ」

梅干の種。口にぽんっ。

でも実はしっかり付いてるよ。

「すうっぱあああああいでした!?!」

「えー? 何が失敗?」

失敗じゃなくてすっぱいだよ。

「隙だらけ」

バナナゲット、ロープゲット。

……ロープなんてどこで使うの?!?

「あ、未理阿ちゃんのロープがー!」

「霧溜依くん盗り返すでした!」

「おー……つて、やるのムルイくんだけだよねー」

あ、霧溜依くんもロープ出した。

「我の命に従え。目標を捕縛。続いて収縮」

お、凄い!

ロープが勝手に動いた!

未理阿ちゃんのほうのロープ盗り返されちゃった。

「ふっふっふー、見たでした!? 未理阿ちゃんたちが本気を出せばこんなものでした!」

「うん、凄いね」

もぐもぐもぐもぐ。

バナナおいし

「ああっ!? ミリアちゃんのおやつがでしたあっ!?」

「バナナはおやつに入るんだねー」
「入るんだね」。

110 だーっしょー

「ていつ」

すつ すつ すつ

「えつと〜……真ん中と〜、十五の二倍と〜、七の三倍で〜……百

一点〜！」

「おっしゅっ！」

岳だーっ。

父さんが何処でか知らんけど前に貰ってきたダーツやってんだ。

「あ〜、そうだ〜。岳お兄ちゃん〜、これで一番点数たくさん取れるとこ教えてあげようか〜？」

は？

「んなもん真ん中の五十点だろ？」

「違うよ〜」

んじゃー何処だよ？

「ほら〜、ダーツの二十点の扇形あるでしょ〜？」

ん。

「で〜、その一番端っこの太線が二倍で〜、真ん中の太線が三倍だよ〜？」

……………あっ！

「そっか、二十の三倍は六十だから……………」

「ぴんぽん〜」

よっし、んじゃーこれからそっちを狙おう！

「ていつ」

「二十点〜、一点の三倍〜、五点〜。惜しいね〜」

ちい。

「でも岳凄いいじゃん。あたしなんて真ん中狙って端っこまでずれるんだよ〜？」

「純お兄ちゃんは文字に当るよね〜！」

対して変わんねーじゃん

ああ後、にーちゃんそこに居るんだけど。

表情的に怒ってるなー、ありゃ。

「よしっ、もっかい！」

とおっ

「五点の三倍〜、一点〜、十八の三倍……ってええっと〜」

「十八の三倍は五十四だ」

「って、十八の三倍も真ん中より大きいじゃん」

ちよっと待てよ？

んじゃー、とーぜん十九の三倍も真ん中よりおつきい訳で。

「あ〜、十七の三倍も大きいよ〜。五十一だ〜」

……真ん中より大きい所って、意外と多かつたんだな！

「もっかい！ とっ」

「六十点〜！ 全部二十点だ〜」

何で綺麗に二十の三倍の所にいかないんだよ！

「岳お兄ちゃん〜、貸して〜」

「ん」

「えい〜」

すと、すと、すと

「二十点の三倍、十九の三倍、十八の三倍……って、ええっ！？」

「えへへ〜、百七十一点〜」

ウソー……。

「おまつ、百八十点いけるんじゃねーの！？」

「無理だよ〜」

そうかなあ……。

「だって〜、全部は枠に入りきらないもん〜」

あ。

111 おやつは別腹、これは常識

「ただいま」

『おかえりー』

忍でーす。

さっきまでおばーちゃんに英語教えてもらってて、終わったからおやつ食べてるよ。

「おつ、いいところに帰ってきたみたい」

これ、あたしと純兄のおやつなんだけど。

「ん、爺さん太るぞ」

「もう太ってるよ、純兄」

「……死ぬぞ」

「何でいきなりそうなる!？」

何か色々すつ飛ばしてるような。

「生活習慣病で。婆さんに隠れて酒も飲んでんだろ？」

「何でそれを」かかった。婆さん、爺さん酒飲んでるらしいぜ」あ

あっ!」

おじーちゃんが青くなった。

白くなった。緑になった。……ええっ!？」

「お祖父ちゃん? あとでちょーっと、お話があるのだけど……」

「ひいっ」

おばーちゃん怖い。

「まあ、野菜クッキーくらいなら食っても大丈夫だろ？」

何かしつかり原材料確認してるけど。

「おお純!」

「ああ、やつぱダメ」

「はあ……」

凄い。何か表情の変わり方が凄い。

さっきは後ろにばあって花が見えてたのに……今は何か青黒いオ

「ラが見えるよ。」

「ついでに青い火の玉とかも。」

「と言うのは嘘で、まあ、こんくらい大丈夫だろ」
「ぱあっ」

「うわ、分かりやすっ。」

「あ、そういえばテスト、あつたんだっけ？」

「ちよっと前に」

「どうだった？」

「全体的にあたしの点数が上がって純兄の点数が落ちた。」

「俺は合計473点。忍は……」

「覚えてないよ。計算して」

「……えっと、とりあえず460代だったと思う」
「計算してたんだ？」

「理科はね、クラストップだったよ」

「へえ！ 純超えたの？」

「うん！ ……一点だけけど」

「あ、何か純兄が不満げな顔になってる。」

「お兄ちゃんのプライド？ って奴なのかな。」

「……あ、何かクツキー減りすぎでしょう？ これ。お祖父ちゃん？」

「ち、違う違う。忍！」

「む、孫に罪をなすりつけようとしても？」

「あたしそんなに食べてないもん。」

「……お腹いっぱいだからもういいや」

「つまりそれだけ食ったって事だな」

「あう。」

「五枚しか食べてないもん！」

「五枚も食ったのか」

『しか』と『も』で、印象って凄く変わるよね！。

「育ち盛りだからいっぱい食べても大丈夫！」

「何か話がそれてるような気がしないこともないんだけど」
「気のせいだよ！」

「あ、そうそうチョコレートあるけど食べる？」

「うん」

「まだ入るのか？」

「純兄、おやつは別腹なんだよ？ 知らない？」

「人間の胃は一つしかない事しか知らないな」

「ああ言えばこう言う。」

「別腹は別腹なんだもん！ ねえ？」

112 てるてる坊主

「ねえなつくくん」

「んあ？」

「てるてる坊主の歌詞ってどんなのだったっけ？」

「んんー？ てるてる坊主？」

「てるてるばーずー、てるばう」「そこは分かってるよ」「夏だ。」

「ああもう、寝てたから頭回んねえ。」

「桜が何か聞いてきたから答えてる、ってくらいしか分かんね。」

「三番ならあだし分かるよ」

「てるてる坊主の三番ねえ……。」

「ああ、小二ん時ちよつと流行ったな。」

「どんなの？」

「てる坊主の後から言うつー。」

「それでも曇って泣いたなら、そなたの首をちよんと切るぞーだよ」

「嬉しそうに歌うところか？」

「怖いよお！」

「忍がここを歌うたびに回りの奴……特に先生がこわばった顔してたな。」

「あれは面白かった。」

「そうぞうしてみ？」

「小二の、小さめの女の子が笑みを浮かべて可愛らしくい声で『そなたの首をちよんと切るぞ』なんて歌ってたぜ。」

「そら怖くもなるわ。」

「……今でも衰えてないんだなあ。」

「一番と二番は？」

「んんー……一番が」

「いつかの夢の空のよに晴れたら………忘れた。何あげるんだっけ？」

晴れたら……金の何たらだったと思うが。

「金の鈴だろ？」

「清くん知ってるんだ！」

「……今のとてどういう意味の言葉だ!？」

まんまの意味として受取っとけよ。

「一番はなんだっけ？」

「私の願いを聞いたなら……辛いお水をたと飲ましょ？」

何のばつゲームだよ。

「違つて。甘い蜜をたと飲ましょ、だろ？」

違つだろ。

「甘い……お菓子をたと飲ましょ？」

「それ飲むって言わない」

『うーん……』

こつこつ思ひ出せねえとすつげえイライラするよな……。

「とりあえず、甘い何とかだよな」

「甘いといえば？」

「お菓子！」

それはさっき言った。

「ジュース……じゃ、ねえよなあ」

「炭酸？」

「それジュースだろ」

「お酒！」

酒？……甘酒か。

「あ、それじゃん！」

「甘酒つて本当に甘いのか？ 飲んだ事ないんだけど」

純に聞いても意味無いと思うが？

「俺が知ってると思うか？」

ほら。

「……まあ、甘いから甘酒なんだろうけど」

甘いから、本当に。

「未成年の飲酒は禁止されています！」

「甘酒は酒に入らないかと」

「そなの？」

どちらにしてもてるてる坊主は飲酒とか関係ないと思うがなあ。

「本当に晴れたら鈴とか甘酒とかあげるの？」

『まさか』

「そのままゴミ箱に直行だな」

何か罰当たりな感じしねえか？ それ。

「弟が紐巻いて砂糖水すわせる程度だな」

「しーちゃんの弟？ ……紐つて？」

「鈴を巻く時の鈴無しバージョン……と言ってたと思う」

結局単なる紐かよ。

「あ、でもしつかり首を切り落とすのはやる」

「どっちかというところ切ってるだろ？」

……………。

罰当たりな奴等だな！ 本つとに！

113 格闘じっご!

「ひーまだー」

「暇だな」

純兄の口から暇って聞くのは久し振りな気がする。

「てい」

「暇なのは分かったから蹴るな」

だって暇なんだもん。

忍でーす。

「純兄、純兄、やろうよ」

「……まさかとは思うが格闘じっごじゃねえよな?」

「それだけどなにか」

「はあ……めんどくせえ。でもそれを止めさせるのもめんどくせえ
しなあ」

何か純兄のめんどくせえモードが全開だあ。

「岳ー、光ー」

『何() ()?』

「純兄があれしてくれるってー」

『おお〜っ!』

あ、純兄の顔歪んだ。

「ああもう、めんどくせえ……って、まさか俺対テメエ等三人じゃ
ねえよな?」

「そのまさかですが何か」

「はあ」

「よっし、にーちゃん行くぜ!」

いきなりだねえ。

「とお」

パンチ。

受けられる。投げられる。

あっさり終了。

……とは行きません。

「まだまだーっ！」

「えい〜」

二人が行ったところであたしも混ざろう。

「岳、足払いつ！」

「おりゃ」

で、簡単に倒れてくれないのが純兄なんだなあ。

「わ〜！」

代わりに光が投げられてるし。

「ひーちゃんひーちゃん、何やってんの？ あたしも混ぜてー！」

「おいおい嘘うそだろ……」

残念ながら現実ほんとうです。

「よお純。手伝おつか？」

なっくん、笑ってます。

……大爆笑？

「いや、むしろ交代してくれ」

「それは嫌だ。せつかく面白いのに」

うん、楽しそうだねえなっくん。

「じゃあ忍、岳、夏の方行け」

「おまつ、面倒な方押付けやがったな!？」

「当然だ」

残念ながらあたしは動く気はありません。

「いっくぜーなっくん！」

「うあ」

「純兄いっくよー」

「はあ……」

溜息ばかりついてると……ええと、なんだったかな。

不幸が逃げる？ それだったら皆溜息付きまくるわ。

あ、なっくんが逃げたの見えた。

あ、足つかまれた。
投げられた。

「ああもう！俺ってば今日はお前等を笑いながらゆっくりしよう
と思っただけだぜ？」

「ん。それはしつかりぶち壊してやるから心配するな」

「分かった。今日の予定は明日にずらしておいてやるよ」

全然解決になってないような気がするんだけど。

「あつ！何か凄く効率的になってる！」

「効率的〜？あゝ、背中合わせだから〜？」

「そうそう！あれって後ろからの攻撃できないもん！」

何か某体は子ども、頭脳は大人の名探偵の映画にあつたなあこ
んなシーン。

やってるのも、その相手も真逆と言っただけでいいほど違っただけ。

「とうっ！」

「ん」

「あぎやっ！？」

大丈夫かー。頭から落ちたけど……。

「岳お兄ちゃん〜、畳でよかったね〜」

「フローリングだったら絶対痛かったよ！」

「あ、ああ……良かったのか……な？これ」

どうだろう。良かったんじゃない？

「よし！一斉攻撃行くよ。その名も数より量作戦！」

「凄く頭悪そうな作戦だね！忍ちゃん！」

ならどうしようと。

「ほい、ほい」

「結局全滅だな」

『あう〜』

光とあたしが純兄、はーちゃんと岳がなつくんに押さえつけられ
てます。

痛い、重い、苦しいの三拍子がそろって最悪だね。

「つぶれるよお兄ちゃん！　ウチがつぶれちゃったら、お兄ちゃん殺人罪だからね！」

「そこまで酷くつぶれるのか!？」

「あれ、つぶれる事は前提なの？」

「……………にゅ〜」

「あつ純兄！　光本当につぶれかけてるから！」

「ん？」

「痛い痛い痛い！」

光にかける体重を減らす分がこっちに来てるの!？　ねえそうなの!？

「ぱふ〜っ！　抜け出し成功〜！」

『作戦か!』

「ふふ〜　はーちゃん〜、すぐ行くよ〜」

あたしは？　ねえ。あたし手伝ってあげたのに。

いや、気付いてなかったけどさ。

114 家出なといれの華子さん 前編

「うわあっ!?!」

「うわあっ!?!」

「……びっくりしたあ。」

「いきなり大声出さないで! びっくりするの!」

「あたしだってびっくりしたよ!」

「忍です。」

トイレのドアを開けたら何故かおかつぱに赤いスカート、白いブラウスという姿の女の子がおりました。

えーっと……。これってアレだよな。

「トイレの花子さん?」

「違うよ! といれの華子さん!」

ええっ!?!

え? 『花子』の『はな』って『華』の字なの!?

「あと『トイレ』が『といれ』なのにはどういう意味が?」

「ひらがなの方が可愛くない?」

「……違いが分らん。」

「『花』と『華』にはどういう意味が」

「『華』の方がお嬢様みたいでしょ?」

全部イメージの問題かい!

「それはともかく……。何でトイレの花子さん……。もといといれの華子さんが家のトイレに出てきたわけ?」

「家出なの!」

「速やかにお帰り願います」

「酷い!」

だって……。家のトイレ狭いんだよ?

邪魔だよ……。

「せめて家出した理由くらい聞いてくれてもいいでしょう!?!」

そしてそこから新たな友情……うつん、愛情が芽生えて最後には「ちよつと待てえい！」え？」

何だ！？ 何か聞き捨てなら無い言葉が聞こえたよ！？

「何で愛情が芽生えるの！？ その愛情ってああいう意味の愛情だよね！？ 君はアレですか！？ ユリかなんかですか！？」

あまりにびつくりして敬語になっちゃったよ！

「え？ ええっ！？ お、女の子！？」

「お前な……。男子にしちゃ髪長いとか思わないの？」

「それが流行りなのかとおもって」

何で！？

いや、最近の流行とかサツパリ分らないけどさ。

「そうでなくてもさ……」

「それに服が男の子っぽいし、胸ペツタンだし、色っぽくないし……」

……

「服とかどうでもいいし。後の二ついらないもん」

「ほらあ！ 全然女の子っぽくないあー！」

そんなこと言ってもねえ。

服なんて純兄のお下がりだし。

だいたい中三で色っぽい子なんているの？

……学校にはスカート短くしてる奴がわんさかいるけどさ。

「っていうか、それ以前に」

「？」

「小説か漫画の読みすぎ」

「うわあああああん！」

何で泣くの！？

「あんな素敵な恋をしてみたかったのに！ 私の小さな夢だったのに！ 夢が壊されたあああああ！？」

そんな事言われても……ねえ？

「な、何かよく分からないけどごめん……」

『ううう……』

「ところで、そこどいてくれないかな？ さっきから我慢してるんだけど」

『家出した理由聞いてくれないの？』

「速やかに以下略」

『略するなあああ！』

五月蠅い子だな……。

「ねーちゃん何やってんの？」

『あ、岳。明日学校行く時この子連れてって』

「おおっ！？ 何々？ トイレの花子さん！？ マジでいんの！？」

らしいよ。

『とこれの華子さん！』

「……あれ？ って言うか華子さん成仏しないの？」

『とこれの華子さんはオバケだからいいの！』

幽霊とオバケは違うのか？

「ねーちゃん、オバケは妖怪の一種でいーんかな」

「いいんじゃない？」

『良くないもん！』

ああもう、面倒なものが迷い込んできたなあ……。

115 家出なといれの華子さん 後編

「何やってんだ？」

「あ、純兄」

忍でーす。

なにやら『といれの華子さん』を名乗る『トイレの花子さん』が迷い込んできて……。

さつきから我慢してるのになかなかトイレに入れずに居ます。

「なんだ。といれの華子か」

あれ？

『華子さん！ 何回言ったら分かるの！？ 高山純！』

「五月蠅い。帰れ。また姉妹喧嘩だろ」

『酷い！』

「え？ え？ 知り合い？」

って言うか姉妹喧嘩！？

華子さん姉妹居るの？

「小学校の三階の美術室の前にある使われてねえトイレあるだろ」

「うん」

「あそこで四人姉妹が順番にトイレの花子さんをやってるって聞いたけど。まだやってたんだな」

『五月蠅い五月蠅いうるさーい！』

君が一番五月蠅いよ！

「純兄トイレの花子さん知ってたの？」

「調べに行こうと言ったのは誰だ？ あ？」

んー。

「私ですごめんなさい」

あの時はもやんとしか見えなかったけど気になって。

「ん。分かればよし」

思い出す、だと思っよこの場合。

「で、どーすんのコレ」

『コレって言わないの!』

「アレ」

『アレじゃなあい!』

「ソレ」

『ソレでもなくて!』

「ドレ」

『分からなくなってるじゃない!』

「ざ・こそあど言葉!」

それがしたかっただけなのね、岳。

「で、純兄コレ『コレじゃな』どうしたら帰る?」

「華子の弱点を忘れたか?」

「忘れるも何もあの時はあだし幽霊見えなかったし。聞こえなかったし」

「ああ、そうか」

忘れてたんだ。人のこと言えない。

「華子は酒を少しやれば赤くなってふらふら『酔うのかよ!?』そういうことだ」

……………。

「で?」

「え?」

いや、酔わせてどうするのって聞いているんだけど。

「酔えば自分のトイレに入って休みたくなるらしい」

「はい、お酒持ってきたよ」

光…………。その行動の速さは何。

「華子さ…………ん!?」

「うあ」

キノコ生えてる!?

暗いオーラが漂ってる!?

妙に静かだと思ったら…………。

『誰も構ってくれない……。ふふ、どうせ私なんて、私なんて空気なんだわ……。アンモニアよ……。単一よ。ふふふ……。』

『怖っ!?!?』

ハンパなく怖い!

「ん、マイナス思考も相変わらず……。あ、少しは発動までの時間が延びたか?」

「どうでもいいよ!」

「花子さん〜、あ〜」

うわ、こんなところで名前間違えたら……。

『そうよね。名前覚える価値さえないわよ。うふふふ……。』

「華子さん〜、お酒〜!」

『むぐうつ。ひっく』

おお、酔った。

『ひっく。あは、あはは! じゃあね〜、また遊ぼ! あはははは。』

追いで追いで〜』

『怖えっつて!』

「いや、アレはトイレに遊びに来いという単なる誘いだ」

……ややこしいというか、結局怖いというか。

とりあえず。漏れないうちにトイレ入る。

116 トイレの〇〇さん姉妹

「はーなっこさん!」

「ねえ、本当に居るの?」

「イマイチ信じられないな」

いるってば。

こないだお前等妖怪&死神ご一行様見ただろ!

カメラごしで。

岳だっ!

昨日のといれの華子さんに誘われたから、ちょい臭いのをがまん
してきてみたんだ。

姉妹見てみてえし。

『きゃーっ! 男の子!』

『きゃーっ! 女の子!』

「うわっ!?!」

「きゃあああ!」

「マジか……」

マジなんだなあコレが。

あ、先生にカメラ借りてきたから他の三人にも見えてるぜ。

『お静かになさい』

……全員おかつぱ赤いスカートなんだな。

でも髪とスカートの長さが違うな。

年上っばい奴から年下っばい奴になるほど短くなってる。

『あーっ!こそあど言葉!』

「それ、オレの名前!?!」

『あたりまえでしょ?』

あたりまえなのか!?

「高山、お前アイツに何したんだ」

「色々」

「何い!？」

おい翔。お前何に驚いた？

「ごめん、自己紹介よろしく」

「わたくし、花子と申します」

「私のことは知ってるでしょう？ 華子」

「あたしはなこよっ！」

「自分、ハナコね」

……っ。

『全員音同じじゃねえか!』

『そうでない』トイレの花子さん』になりませんわ』

……いや、そうか？ そうなのか……？

「修也あ……怖い」

「……大丈夫だ」

えー、何かピンク色になってるあそこはほおって置いてだな。

ああ、何か華子とはなこは興味あるっぽいけど。

『華子がお世話になりましたね。お茶でもいかがです?』

「こんな嫁が欲しい」

翔、お前はいくつだ。

『どうぞ』

早っ。

……。

「ごめん、花子さんちよっといいか?」

『はい?』

「このお茶、何で白いんだ?」

『洗剤茶です』

飲めねえよ!

「ううっ……」

「翔!？」

飲んだのか!? 飲んだのかあれを!

「お、おいしかったでえっ……す。キユウ」

「気絶した！？ 保健室に運んだ方が良くない？」

「運ぶに決まってるんだろ！」

ああもう！

「花子さん、少し聞きたい。この茶？ を作った水って……」

『トイレで汲みました』

「やっぱりか！」

修也！ やっぱりってそう思ってたなら最初に聞け！

「けほっけほっ」

古閑！？ お前も飲んだのか！？

……今日の発見。

翔と古閑はアホだ。

後、花子さん等に出されたお茶？ は飲んではいけない。

……いや、普通に飲む方が間違ってるよな、コレ。

117 暇人の会話

「にーちゃん」

「宿題なら手伝わねえぞ」

「オレ、宿題頼んだ覚えは一度もねーんだけど」
頼まれた覚えもないな。

純だ。

「にーちゃん」

「用があるならさっさと見え」

「……すっげー暇そうなのにそう言う奴って始めてみた」
そうか？

「で？」

「オレも暇なんだよ」

「で？」

「いや、で？ って言われても暇なんだよ」
だからなんだ。

「何かいい暇つぶしねーの？」

「そんなものがあつたら俺が聞きたい」

「んー……あー……考えるのめんどい。にーちゃんのめんどくせえ
病に罹つた」

「人を病原体みたいに言うな」

「それにしても……暇だな。」

「てい」

「いきなり蹴るな」

「いきなり足払いすんなよー」
蹴ってくる方が悪い。

「なーなー、にーちゃん修学旅行いつ？」

「ん……次の日曜からだったと思う」

「思つって」

たいして興味ないからな。

「それが？」

「お土産期待していいか「ダメだ」えー」

「かさばらなくて安いものなら買っというてやるから」

「えー、安モンかよ」

お小遣いの残りは自分のものになるからな。

「忍にでも頼め」

「ねーちゃんもおんなじこと言うんだよっ!」

「じゃあ自分の修学旅行で買うんだな」

小六なんだからあるだろ。

「えー。オレの小遣いの残り減るじゃん」

……結局俺等と同じじゃねえか。

「まあ少しは期待しておくぞ」

「つてオレはにーちゃんの分買わなきゃいけねーのかよ!？」

「当然だ」

「うーわ、うーわ、にーちゃんずっこ!」

何を今さら。

「京都だったか？ 俺は八橋がいい」

「じゃあオレカステラな。にーちゃん達長崎だろ」

「……………」

「何で黙るんだよ!」

カステラはかさばりそうだなあ、と思って。

「小さくて安いものがあつたらな」

「結局安モンかよ!」

「ガチャポンよりいいだろ」

「最初そのつもりだったのか!？」

何も無しは可哀想かと思つたしな。

あるのかは知らないけど。

「純お兄ちゃん」

「あ?」

……何を言おうとしてるのが顔から凄く分かる。

「お土産なあに〜?」

「あま〇うのハイ〇ユウでいいな」

「え〜。それは吸収限定でしょ〜?」

九州な。

何を吸収するつもりだ。

「忍に頼めよ」

「頼んだよ〜?」

「断られたか」

「ううん〜。何かストラップ買ってくれるって〜」

「なっ!? オレには安モンだったのに!」

……欲しいのか? ストラップ。

どうせほっとくだけなのに。

「純お兄ちゃんは〜?」

「何を売っているかによる」

「じゃあ期待してるね〜!」

にっこり

期待を裏切るな、という脅しか? これは。

「ぐはぁーっ！ 疲れた！ マジやべー。ねーちゃん水ー」

「ねーちゃんは水ではありませんーん」

「いやそーゆーのマジでいらねーから水くれって！」

なら最初からそういえばいいものを。

忍でーす。

何か岳が帰るなり水を求め始めました。

「水筒のは？」

「飲みつくした」

「がぶ飲みは……ええと、何とかの元だよ」

「何とかって何だよ」

「さあ？」

何だったかなー。

うーんと、えーっと……。

「水う！」

「自分で注いだほうがよっぽど早いでしょうが！」

「何でキレイらんなきゃいけねえの！？」

事実でしょ？

「はい、岳お兄ちゃん水」

「お、サン……んぐんぐ」

お礼くらい最後まで言えよ。

「ぶはっ」

「はいおかわり」

「おおっ！ 光すげえ！ んぐんぐ」

「えへへ」

んつとね。

光、何で水の入ったコップがテーブルを半分も埋め尽くしているのかな？

いつの間に用意したのかな？

「はい、おかわり」

「もういらねーよ！」

あ、十五杯目でダウン。

「え。せつかく金魚水用意「げほげほげほげほ」……嘘だよ」

ほんとだつたら怖いから！

「あ、ちなみに岳。喉に手突つ込むと吐き出せるらしいよ」

「んな助言いらねーっ！」

別にあつて損しない知識かと……うーん。

知らないなあこんな知識。何処で使うの。

「ところで。何でそんなに水欲しかったの？」

「だーってな！？ だーってな！？ 体育大会の練習三時間ぶつ通しであつたんだぜ！？」

「給食はさんだんでしょ？ 帰つてまで欲しいって事は」

「そーだけど放課後は応援団のもあつたんだぜ！？」

へえ。

「岳が応援団だとは知らなかつた」

「私も」

「ねーちゃんはともかく光は知つとけよ！」

何かともかくされた。

「味方チームの事は興味無いも〜ん」

「おいっ！？」

「あ、チーム同じなんだー」

「ねーちゃんはそっからかよ！？」

「お弁当の色が楽だね、おかーさん」

「そうね。お赤飯しないと」

あ、赤組なんだ。

赤い食べ物つて何があるかなー。

トマトでしょ、リンゴでしょ、すももでしょ……。

「あ、ねえ光一。水入りコップ一個貸して」

「は〜い。何するの〜?」

赤い着色料持ってたこと思い出して。

ちよつと溶かしてみよう。特に理由はないけど。

はい、コップがあります。

着色料買った時に付いてきた小っちゃいスプーンで着色料入れます。

おー、赤くなった。

……え? オチ? 無いよ?

「これがこうなって……んでこーして……」
うん。これでよし。

でー、次はー。
忍です。

図書室で借りてきた本見ながら折り紙してます。

「あれ？」

むむ？

……分かん。

「うーん」

やっぱりこういうときは

「純兄ー」

「あ？」

「ここどうなってんの？ 十番の所」

折り紙の説明書ってたまにわかりにくい事あるよねー。

「……折り紙の説明書読むのはテメエの方が上手いだろうが」

「わー、何か純兄に褒められたのって初めてな気がするよ？」

「まさか」

そーかな？

「じゃあいつ？」

「……」

答えられんなら言うなよ！

「んで、これどうなってんの？」

「だから俺に聞くなって」

「見る位してよね」

「ああもう、分あったよ……」

あ、断るのめんどくさくなつたな。

はい、折りかけ折り紙。

「説明書貸せ」

うん、折り紙だけで分かつたんならどうしようかと思つた。
いや、どうもしないけど。

「ここを開いて……なんで？ ああ」

「分かるんじゃない！」

「ん？ 何か悪いか」

いや、いいけどさ……。

「ありがとう」

んで、あとはここを開けたら……

「出来た！」

「ライオンか？」

「犬だもん！ パピヨンだもん」

顔の周りに茶色いのがあから見えなくは無いけど……。

「よし」

「どうした？」

「岳と光とおかーさんにコレが何に見えるか聞いてくる」

「……あそ」

帰つて来たらおとーさんにも聞こつと。

犬だもん！ パピヨンだもん！

「光」

「何？」

「……何してるの？」

「え？ 見て分からない？」

いや、分かるけどさー。

文房具の手入れでしょ？

「必要あるの？」

「あるよ〜!」

「何処にその必要が?」

「……………」

答えられないなら自信たっぷりと言わない!

「まあいいや。これ何に見える?」

「ん〜……………ライオン?」

あうー。

「でも首より上だけを見たら〜」

あれ、続きあるの?

「エリマキトカゲに見えるな〜!」

何か余計ややこしくなつたあつ!

「おかーさん」

「は〜い〜?」

「あつ! 何食べてる!? 何食べてる!?!」

「見つかった〜!」

目の前で堂々と食べてて見つからないとでも。

「食べていい?」

「……………」

考えないでほしいなあ。

「ダメ〜」

「えー」

「じゃあいいよ〜」

じゃあつてなにさ。

チヨコチヨコ。

「あ、コレなんか高そう」

「だからばれないようにしてたのに〜」

のわりには堂々と食べてたけどね。

「おかーさんコレ何に見える?」

「犬かな？」

「やった！ 犬派来た！」

「パピヨン？」

「ピンポン！ あ、そだ岳は？」

「見当たらないんだけど。」

「まだ帰ってきてないよ。団長さんだからね。」

「あ、岳団長だったのね。」

「そっだよ、よく聞いたら声聞こえてくるよ。」
「聞こえない聞こえない。」

「ほら、また「ただけ耳いいんだよ！？」」

「うわあ」

「はーっ……はーっ……」

「岳が死んでる。干からびてる。干物になってる。」
「ばしゃ」

「ぶはっ！？」

「よし、生き返った」

「いきなり水かけんなよ！」

「うん、叫べるならよし。」

「岳、これ何に見える？」

「悪の使い魔」

「……水飲む？」

「ん」

「おお、一瞬でコップの水が消えた！？」

「はい、もっかい聞くけどコレ何に見える？」

「んー、犬じゃね？」

「よし！」

「ご褒美にチョコあげる」

「マジ！？ サンキュー！ 何か知らんがラッキ」

犬が二票、ライオン二票で……あー……ついでにエリマキトカゲ一票か。

おとーさんは何て言うかなー。

「お帰りー。おとーさんこれ何に見える?」
「折り紙」

……いや、そうだけどさあ……。

結果

犬：二票、ライオン：二票、折り紙：一票、（エリマキトカゲ：一票?）

あたしはエリマキ犬オン折り紙を折れるようになりました。

120 お土産欲しいな

「さて」

「さてさて」

「明日にーちゃんとなーちゃんは行っちゃう訳だけでも」

「逝っちゃうみたいない方だね」

怖くすんな！

岳だっ！

「分かった、言い直す。修学旅行に行っちゃうわけだけでも」

「お土産に何くれるか会議」

と、ゆーわけだ。

前に聞いたけどさー。イマイチ真面目に聞いてくれないじゃん？

ガチャポンとか安モンとか安モンとかって。

「お姉ちゃんはいいんだけどね」

「オレはどっちもよくねえっ」

ねーちゃんは終始無言だったんだぜ！？

聞きに行った時！

考えてるみたいだったけど……。あれは暗算してる顔だった。

間違はなくお小遣いの事考えてやがった！

「さてさて、何かしてくれるのかな？」

「長崎つつつたらやっぱカステラだよな」

「ビードロがいい」

「ビードロかー」。

……。えっと。

「ビードロって何だ？」

「んーっと……。きつねがつるに意地悪してスープを平たいお皿で

出して、その後でつるに仕返しされるお話あるでしょ？」

「うん」

あのつるの仕返しってさ、手で持って飲めばいけるよな。

「つてずーっと思つてんだけど。」

「あれのつるが仕返しに使つた皿みたいな形のガラスのおもちゃだよ。」

「……あの絵本についてたやつみたいなのだと……。」

「でっか」

「もつとちつちやいの。丸い所が手に収まるくらい。」

「ふんふん。」

「……おもちゃ？」

「何処がおもちゃ？」

「ミニチュアつる仕返し皿だとほそい管がついてるでしょ？」

「無理やりまとめた！」

「コレだと何かつるがちつちえー見たいなんだけど。」

「あそこから息吹き込んだら音が鳴るんだって。」

「あ、見たわけじゃねーの？」

「お母さんに聞いたの。」

「ふーん。」

「ガラスだから乱暴に取り扱ったら割れちゃうけどね。」

「えー。やっぱそんなら食いもんの方がいいな、オレ」

「キレイだつて言つてたもん。」

「オレは綺麗より旨い派だ！」

「綺麗でも割れたら終わりだろ。」

「瓶詰めにするもん。」

「つておーい。」

「何ムキになつちやつてんのお前」

「欲しいんだもん。」

「いや、これで買つてくれるわけじゃあるまいし。」

「欲しいんだもん！」

「オレに言つなよ！」

「違つよ。」

「何で急に小声になるんだよ。」

「純お兄ちゃんと忍お姉ちゃんって地獄耳でしょ〜」
「そーだな。うん。」

前に宿題の分かんねーとこ聞きに言った時、オレが言うより先に解き方教えてくれてびびった。

「だから普通の声で言えば絶対聞こえてるから〜、買わないわけにはいかなくなるでしょ〜?」

「……おまーな」

聞こえて無かったよ設定で買ってくんねーかも知れねーじゃん。

「だってさー、純兄」

『うえっ!?!?』

「急に〜によ〜によってなったから聞きに来てみたら……」

「あ〜……」

あー、逆に怪しまれちまってたわけね。

「ビードロねー。高いのかな?」

『さあ』

「……いや、そう返されるのは分かってたけどさ」

ガラスで綺麗って何か高そうなイメージあるけどな。

「買ってくれる? 買ってくれる? 買って買って〜」

「オモチャねだる子供?」

「オモチャビードロねだる子供光だもん〜」

「……あ、そか」

おーい。

「もー、しょーがないから買っとくよ。あつたらだからね!」

「やった〜!」

えーっ!?!?

「んじゃオレカステラー!」

「それは元から買っつもり」

「俺等も食いてえし」

なんだよ。それ。

「この食いしん坊!」

『お前（テメエ）が言うな
にゃはよ。』

121 忍の修学旅行記…お菓子食べよう

「お菓子くれ！」

「えー」

「いいよ、飴でいい？」

「はい、チョコ」

忍です。

待ちに待った訳でもないけどとりあえず少しは待ったかもしれない修学旅行です。

と言ってもまだ新幹線の中だけ。

「サンキュ！ 篠は……うん、頼んだオレが間違ってたな」

「しーちゃん、お菓子出そうとしてたけど今ので引込めたよ」

「ウソオ！？」

ウソ言っでーすんの。

「んー！」

「……なぜオレに向かって手を差し出しているのでしょうか桜さん？」

「お返しは？」

ほんとだ、お返しは？

「無い！」

『威張るな！』

「……チエツ。はい、野菜スティック」

一本だけ？

「もうちょっと〜」

「もう一声」

「オンナノコのためを思ってそのお菓子カロリー控えめだぜー」
むう。関係ないし。

んと、さつき清にあげた飴の袋……。

「ほい」

“ カロリー 35% off ”

「 ……なんか負けた気分になったのは何故だ」

「 お前はいつも負けてるからな、うん」

「 夏、お前は何言っちゃってくれて……かりんとうちよーだい」

あれ、こめかみぴくぴくしてたのは何処やった。

「 牡蠣野せんせー」

「 あれ、しーちゃんそれあげるの？」

プチ饅頭。

「 うん。牡蠣野せんせー」

「 オレにはくれなかつたくせに！」

清、かりんとうもらえたのかなー！。

「 ……」

先生ぜんぜん反応しないし。

「 ……柿の種え！」

「 牡蠣野胤だ！」

やっと気付いた。

……突っ込みのためだけに反応したように見えなくもないんだけど。

「 あげる」

「 おっ！ ありがとう」

「 はい、せんせー。カロリー 35% off」

「 ……いや、先生太ってないからね」

とか言いながら受け取るんじゃない。

「 ほぐら、こつちだよ。ふふふ」

なんかこつちはこつちでなんかやってるし。

「 くそっ」

清達の席あたしらの前だからねー。

お菓子の取り合いしてるみたいだけど、なんかやりにくそー。

「 ほらほら、こつちこつち」

「 桜、何してんの？」

「餌付け」

……餌付けて。

「オレは犬か!??」

「いや、どちらかという餌に釣られるマヌケな猿だ」

「さらに酷くすんな純!」

「いや、猿のほうが犬より頭いいんじゃない……」

「だんだん、というかどんどん話がそれてる気がする。」

「中谷達はトランプとか持ってきてないのか?」

「しーちゃんと先生会話続けてたの?」

『持ってきてない。だって……』

「じゃま」「面白くない」「めんどくさい」

「……さいですか」

「きれいに三拍子そろったねー。」

「忍おまえー、なんかねえ?」

清はちよつと五月蠅い。

122 清と桜の修学旅行記：ホテルだ！ ベットだ！ 飛び跳ねるのだ！

1 女子部屋

「わっ！ 和洋室だっ！」

「ベットだ！」

「喧しい」

篠く、ノリ悪いなあ。

桜でえす！

「跳ねる跳ねる！」

「やっぱりこれはやら無いとダメだよね」

ホテルのベットってトランポリンみたい！

何だか筋みたいなのが足から伝わってくるけど……。

「しーちゃんもやるーよ。ほら、……………玲奈れなさんも！」

忍く？ 鈴木すずきさんの名前忘れてたの？

なんかやたら淡々と荷物の整理してたのは鈴木玲奈さん！

不登校だったんだけど……………んくと、何があったのか知らないけど

修学旅行には来てくれたの！

「……………あたしはやらないから」

「視線はすっごいベットに向いてるよ？」

「べ、別にやりたいなんて思っ
てないわよっ！」

……………これって、もしかして、これって……………。

「ふーん、そっか」

「って忍く！」

「へ？」

これはアレだよ！ 絶対アレだと思っ
うよ！

「きつと鈴木さんツンデレなんだよ！」

「……………」

こてん。右に首をかしげる。

こてん。左に首をかしげる。

「……つんでれって何？」

『そっからか！？』

「鈴木、ツツコミするんだな」

「ば、馬鹿にしないでよねっ！」

うっん、それにしても忍はツンデレの意味知らなかったんだね。

純君だったら知らなさそうだけど……。

「忍、ツンデレって言うのはね、普段ツンツンしててたまにデレくつとする人のことだよ」

「擬音ばっかじゃん」

これ以外に説明できないんだもん！

「あたしは別にツンデレなんかじゃないんからねっ！」

「んじゃあつんでれを代入し『数学！？』て考えたら玲奈さんはベツトぴょんぴょんしたい、となるわけだからおいだよ」

ツツコミスルーしたよね？ 今。

「……玲奈でいいわよ。高山」

「何でこっちが名前で呼ぶのにそっちは名字なのさ」

「え、だって」

「いや、だってじゃなくて」

「だって！ 下の名前知らないもの！」

「そこかあああああ！？」

自分だって忘れてたくせに。

2 男子部屋

「おーい、じとしもやるーぜ！」

ぼん、ぼん、ぼん、ぼぼん

「何そのまとめ方！？」

純、亮、紫波に決まってるじゃん。

オレと夏はやってんだし。

清だ！

「清、多分それは下にも響いてるぞ」

「そんなのオレの知ったこっちゃねー！」

「だってどーせ下、うちの学校の女子だし。」

「たしか篠ん所だったし。」

「んー……響いてるのなら止めとくよ」

「……シジミ、やろうとした？」

「シジミじゃないってば！ 紫波だってば！」

「今日だけでそのツッコミ何回目だよ。」

「俺やめた。後で怒られんのは清だけで充分だしな」

「どーゆー意味だよ、おい。」

「……暇だな」

「お風呂って何時からだったっけ？」

「五時」

「今は？」

「四時」

「うえー。一時間もあんじゃん。」

「誰かトランプとか持ってないの？」

「……持ってない」

「てつきり夏が「ねえよ」「うん、オレもねー」

「俺もだ」

「じゃあ僕のを出そ『初めから出せ！』あはは」

「やーこいやっちなあ……。」

123 紫波の修学旅行記：班別研修

「おお」

「見事ね」

「うん。見事に……」

「迷ったな」

紫波だよ！

んつとね、今長崎の観光……もとい班別研修中なんだけど。

うん、もうこれ以上ないほど見事に迷っちゃった。

おつかしいなあ、眼鏡橋行くはずだったのに。

それでちりんちりんアイス食べる筈だったのに。

「高山君、ここどこだろ？」

「長崎」

「そうじゃないでしょう！」

あゝ、鈴木さんって意外と元気だなあ。

てつきりもつと高飛車な人だと思ってたんだけど。

「シジミ」紫波だよ！」どっちでもいいで「よくないよ！」話が進まないでしょ！」

だってだって！

「純兄にはこういうの聞いちゃ駄目だよ。純兄、全く知らないところじゃ方向音「お前もな」だから」

「ふうん。てつきり何でもできる天才君だと思ってたわ」

「……嫌味か？」

「それ以外にどう聞こえたっていうの？」

あー……うー……前言撤回。

鈴木さんは高飛車です。

「つという訳でー、まずはここがどこから探さない」と

「目印になるような場所なんてどこにもないじゃない」

「あーうー……とりあえず！ アッチが南で「馬鹿。そっちは東

だ「純兄わかるの?」

高山さん……。適当なことは言わないでほしいなあ。

「時計で調べられるだろ」

あ、時計の短針を太陽に向けて文字盤の十二時との真中が南ってやつかな?

今は十時半だから、あのどどーんって建ってるビルの方が南だ!

「あゝ、見て見て、あそこになんか面白い子がいるよ」

「……迷ってる?」

迷子の面白い子?

「うう……。ええっと、アツチが南でコツチが北で……。あつれー?」

「えださこ枝里さんテンパっちゃうよ……」

「んとんと……。太陽がこつちじゃからやっぱりコツチが南になって

……ぶつぶつ」

うわー。凄いな、なんかあれだね。

モロ不思議ちゃんだね。

「ああーもう! 純兄わからん!」

「うっさい」

あ、まだ続けてたんだ。

「もう! 貸しなさいよ。あたしが地図読んであげるから!」

「あれ? もしかしてこっぴつこの得意?」

「ま、まあね!」

『最初から言えよ!』

「うるさいわね! ちょっと黙りなさいよ!」

はあい。

「あ、忍、桜、玲奈。ちりんちりんアイス発見」

嘘っ。

「どごごご?」

「ほんとだ! しーちゃんナイス!」

「ちよつと!?! 眼鏡橋は「眼鏡橋に行く目的、それはちりんちりんアイスが食べたかったから」……よって目的はもう達成される、

と言いたいの？」

そういうことだよ！ だってだって、予定表自分たちで作るでしょ？ 『眼鏡橋の欄はちりんちりんアイスを食べる』って書かれてるんだもん。

一応眼鏡橋を見る、とは書かれてるけどそれは十五秒って書かれてたりしてねー。

「玲奈分かってんじゃない！」

「さあ行こう〜」

おおーい！

「分かったわよ……。べ、別に、アイスが食べたいわけじゃないんだからねっ！ あなたたちが行きたいって言うから「誰も聞いてないよ〜」あう〜」

……鈴木さんって、僕にはつかめないような気がしてきたよ。

「あ、あつちにお土産屋がある。カステラの試食あるかな？」

どうせ買って帰るなら美味しいのがいいしな〜」

「……紫波「シジミだよ！ ってあれ？ 合ってた？」シジミ」言い直さなくていいよ！」「」

ああもう！ どーせ僕はシジミなんだ！

お味噌汁の具なんだ！ 佃煮なんだ！

「ん、とりあえず一方的に思ったこと言うておく」

うう……？

何か温かい言葉でも言うてくれるの？

「班別研修何処行った？」

ぜんっぜん関係なかったあつ！

高山くんにこう言う事期待しちゃいけないんだね……そうだった。

「うわー、これ美味しい！」

「うんうん、いっぱい食べて」

「はい！」

少しは静かにしろ！

……と、思うだけで口には出さない。

篠だ。

「いっぱい歩いたから飢餓で飢えそうだったんだ」

『……………飢餓で飢える？』

飢餓＝飢えでしょ。

「はうっ！ 違うの！ 飢餓が飢えそうだったの！」

飢えが飢える？

「余計におかしくなってるわよ！」

「飢え死にしそうだったの！」

「飢餓を使うのあきらめた？」

……………とりあえずすぐおなかが空いてたのは分かった。

「あう……………お、美味しいね！ ちゃらんぼらん！」

ちゃらんぼらん：いい加減で無責任なこと、そのさま。

意味不明。

『ちゃんぼんね（よ）！』

「あわあわあわあわ」

「とりあえず落ち着きなさいよ！」

「ふう〜」

「落ち着くの早っ!?!」

「あわあわあわあわ」

「慌て直さんでいい！」

「す、こ、し、は、静かに食べる!」

まったく、やかましい。

「し、篠が怒ったわ！」

「お、お母さん!？」

「人を勝手に母親にするな」

長女だから半分癪みたいなものなんだよ!

「いや、だってだって、ねえー? 桜」

「はわっ!? え? 何々? 納豆に集中してたの」

「納豆に集中つて……。どこに集中するようなどころがあるのよ?」

「ほら、この最後の、ほら!」

分らないから。

最後の粒を取るのに集中してたってこと?

「バターのバター焼き……」

『何て!?!』

何でこんなに話がころころ変わるんだよ!

「あ、いや、なんとなく思いついたただだからスルーして?」

「しようにもできないわよっ! 何よそのわけわからない単語……」

単語? 熟語? 文?」

バターのバター焼きつて……。どうなのそれ。できるのか?

「ほら、なんか、なんかわからないけどできそうな気がしない!？」

「わかるよ」 「分からないわよっ!」 「……………」

何とも言えない。

何このバラバラな意見。

「あ、あのね、今日バスに乗ってる時に玲奈面白かったんだよ!」

「え? この話終わりなの!？」

玲奈、しばらくすればきつと慣れる。

「あのね、バスに乗った時椅子がすごく倒れてたからね、戻すためのレバー探してたの」

ふむ。

「それでね、玲奈の席、補助席ついてるところだから、椅子倒したり戻したりする黒いボタンがあったでしょ? 「ちよっ」それでね、玲奈ってば「やめ」それは椅子戻す奴じゃないって勘違いして

たの。一回それをポチツて押して、『戻らないじゃない』とか言っ
てね「止めてつて言っ」結局レバーを探し続けるのがかわいかった
よ〜」

ポチツくらいじゃ戻らないわな。

「それでね〜、わたしが押してあげただけどね〜。ふふ、ふふ「
ちよつと！」その間、ね！ ずっと、補助席抑えてたの！」

補助席？

「だって！ あそこを押したら補助席が開くんだと思ってたんだも
の！」

「玲奈、顔がイチゴみたい」

「う、うるさいわね！」

「今じゃ白いイチゴもあるけど……。」

「そうそう〜、このイチゴ美味しいよ〜」

「いつの間に食べてたの？」

「ずっと食べてたよ？」

「ん〜、あたしもうお腹一杯なんだけど……。」

茶わん蒸し残ってるな。

「わたしが食べるよ〜、貸して」

「え、まだ入るの？ マジで？」

「いつもお弁当少ないのに……。」

「昼は少食だけど朝と夜はいっぱい食べるよ〜！」
なぜ？

「あ、ね〜、イチゴ食べるときにさ〜、フォークでプスツて刺す感
触気持ち良くない？」

グサツツ

『……プスツ？』

125 皆の修学旅行記：短い詰め合わせット！

ホテルの夕ご飯

「……うーん、誰かがこれ食いさえすればここは完食なんだが」
夏の目の前には一人分のサラダ。

夏が隣の清に視線を移すと、

「オレ無理。もうパンク寸前！」

で、さらに隣へ視線を移すと……。

「僕もー」「おれも……」「俺も」

そして、最後の一人に全員の視線が向けられた。

「俺だつて無理だからな!？」

岬だ。

……うわあ、俺覚えてもらえてるのかなあ……。

あ、考えたら悲しくなってきた。

「ちえっ、美咲ちゃんも無理か」

「美咲ちゃん!？」

字が違う！ 性別も違う！

「うーん……、よしっ、中国では少し残すのが礼儀だから中国流で
行こう」

「アホかつ!？」

「……頭固いな、美咲さん」

ああああああもっ！

「村田さんだからな」

高山までえっ!？」

普段女子に『さん』とかつけないくせに!？」

民泊にて

「高山君、高山君」

「あ？ ……紫波か」

「眠れないよお ……」

「知ったことか」

俺にどうしろと？

「酷いよお ……。ちよっとくらい相手してよお」

「ああ、あれか？ お前はひ弱な小さい子だから暗い所で、他の人が見えないと怖くて怖くて眠れないってか？ 忍の暇つぶしに毎晩毎晩十二時近くまで寝れない俺がせっかく今日は寝れると思っただのにそれを妨害してまで怖いって言うのか？ なら俺は寝る」

「 ……ええと、なんか、ごめん」

「分かつたらさっさと寝ろ」

「はあい」

……ん、あの話は半分以上が嘘だけだな。

「高山君 ……」

「寝たんじゃなかったのかよ」

「ゆ、ゆ、ゆ、幽霊なんて、いないよね？ ねっ、ねっ、ねっ？」

「 ……はあ」

どういう訳かこの辺りは幽霊がやたら多くて追い払うのに苦労したのに ……。

「嫌な事および面倒な事を思い出させるな」

「ええええええええ！？ ど、ど、ど、どう言う事！？」

「あ ……いや、なんでもない。とっとと忘れて寝ろ」

これで素直に引き下がってくれば楽なだけだ。

「え？ なんでなんで？ あうあうあ ……気になるよお。でも怖いし ……うっ ……」

……結局怖いのが原因なのかよ。お前はいくつだ紫波。

「はいはい、いいからとっとと寝ろ。幽霊なんざいねえから」

「そ、そうだよねっ！ ふう ……お休み」

「ん」

……夏、清、水谷。

よく起きなかったな、紫波の声大きかったのに。

民泊にて 2

「眠くなるまで、しりとりしようよ!」

「しりとり? ん、いーよ。しーちゃんと玲奈もやるよね」

「いいぞ。暇だし」

「いいわよ」

別に、やりたいわけじゃないけどねっ。

「りからね〜。リス!」

「えー……と、次はあたしでいいのかしら?」

す、でしよう?」

「スイカ」

「次あたしねー。カメレオン」

『……………終わったああああああ!』

嘘でしょ!?

「あっ!? ごめんっ! ごめん! 今のなし! カメラ!」

カメレオンなんてややこしいものが何で最初に出てくるのよっ!?

「あたしか。ランタノイド」

『何て!?』

「ランタノイド! ほら、元素の周期表の下の方に書いてある……………」

だからなんでそんなものがパッと出てくるのよ!?

「ど? ど…………ドミニカ共和国」

…………妙なものしかだしてはいけないなんてルール、あったかしら。

「くるみ」

「ミノタウルス…………あれ、これなんだっけ」

分からないなら言わないでしょう!?! ふっつ。

「スカンジウム」

「なんで元素ばかり出てくるのよ!」

「む、む…………むちむち!」

効果音！？

「ち、チタン合金……」

あたし、もしかして、遷った！？

「終わったよ！」

しりとりって、こんな簡単におわるものだったかしら！？

125 皆の修学旅行記：短い詰め合わせット！（後書き）

しりとりを書いていたらなぜか出てきた言葉の半分以上が最後に「ん」がつく不思議……何故でしょう！？

126 帰ってきました

「あー、三年終わったあ」

「早っ」

「いやー、だつてさ？ 何かほら、何か一番のイベント終わったから……」

「分かんないよ」

とりあえず今は、電車の中立ちっぱなしで足が痛いなー以外には考えられないや。」

忍です。

「やあつと帰れる……俺帰ったら即行寝るけん、忍ちゃん起こさんとつてな」

「夏、何で山口弁「何となく」……あそ」

あ、純兄絶対に沈黙の時「話し続けるのめんどくせえ」とか思った！

「皆だるだるだね」

「だらしないわねっ！」

「まあこいつらだし」

おいこらー。

「お兄ちゃんっ！ 忍ちゃんと純君もお帰り！」

「お帰り〜。お土産は〜？」

光、いきなりそれはどうかと。

「うわ、帰ったら絶対会う前に寝ようと思った奴に会った」

「ちよつと、お兄ちゃん？」

なっくん……。

「わ〜、光ちゃん久しぶりだね！」

「お久しぶり〜」

「……兄上……岬、知らない？」

おわっ、美代までいた！？

「岬？ んーつと……あ、おーい！ 美咲ちゃん！」

「人の名前を勝手に変えるなど言うに！」

「……居た、姉上」

「美代はまねすんな！」

完全にいじめる側からいじめられる側になってるねえ、美咲ちゃん。

「お袋か秋さんはどこだ？」

「いないよ？」

あれ？

「母上に……会いたかったの……？」

「黙れ。つまり、テメエ等だけで来たと？」

「純兄、五つ下の子に黙れはどうかと。」

「そつだよ？」

『ここは校区外だ！』

「うわつ、なつくんまで！？」

「三人居るから大丈夫だもん！」

「関係ねえよ。ああもう、何かあったらどうするつもりだ？」

「でもでも、校区外が一番遠いところよりこっちの方が近いよ？」

へ、屁理屈！

「それでも駄目だ。光、ビードロ抜きだな」

「ご飯抜きみたいな言い方だね。」

「ええ〜っ！？ 買って来てたの〜！？ もうしないから〜！」

「本当に？」

「本当だよ〜！」

「……………」

「あう〜、お姉ちゃん……………」

叱ってる時の純兄の沈黙って怖いんだよね。

オーラというか、何というか。

「んー…………、でもまあ今回は光が悪いからなあ」

「お姉ちゃん〜」

「純兄ー、今回はいいじゃん、大丈夫だったわけだし」

「ああ、光はダメエじゃねえからな」

「どーゆー意味だよっ!？」

「純、純」

「あ?」

「土産抜きはねえだろ。こいつ等、早く土産が見たかったから来たんだと。それじゃ踏んだり蹴ったりだ」

「本当に土産抜きにする気は無かったけどな」
「だろっね。」

「ああ……何かもう面倒になってきた。ついでに疲れた。ん、光、もうすんなよ」

「うあ、何か突然ぱつきりと終わった。」

「はい」

「ん。ほら、ビードロだ」

「やった〜! 開けていい?」

「家に帰ってからだ」

「え〜」

「ありや、桜たち居ないや。帰ったのかな。」

「はあ……。帰ったら父上にまず報告するのがコレかよ、おい」

「……嫌なら、しなかったらいいのに」

「馬鹿鹿。言わんでもばれてるだろ、どーせ」

「……むう。父上、怖い」

「んなこたどつくに知ってる」

「……うん、だから……。兄上も一緒に「絶対に嫌だ」ふふ」

「ふふつてなんだ!? ふふつて!？」

「帰るかー」

「帰ろ! 帰ろ!」

「……さっきから歩いていたのは帰るためではなかったと?」

「いやー、何となくな。何か喋ってないと出そうな気がして」

「幽霊見ても怖がるやつじゃないくせに。」

「そうだな、こんな時に出られるのは迷惑極まりない」
いつ出ても迷惑がってるくせに。

「……でも、ここの踏み切りって」
「そういえば岳は来なかったんだな？ テメエ等が行くと言ったら一緒に来そうなのに」
「話遮ったね。」

「ここの踏み切り通らなかつたら遠回りになっちゃうもんね。」

「だから周りの幽霊達をスルーしよう」と頑張って話そらしてるんだね……。」

「岳くんならひーちゃん家で屍になってるよ！」

「明日体育大会だから、ものすごく練習してたんだって」

「声がかれないように押さえてた」って言ってたけど。動きとかが激しいって」

「そっかー、明日なんだ、体育大会。」

「んじゃ、宿題は『早く寝る』とかかな？」

「でね、宿題は『中学生にお兄ちゃん、お姉ちゃんが居る人はお土産をしっかりと味わう』だって」

「何でだよっ!？」

127 体育大会、開会っ！

「つつー訳でデメエ等あ！ ぜってー優勝すつぞー！」
『おーっ！』

いよっし！ 気合十分！ 練習十分！

小学最後の体育大会、ぜってー優勝してやるっ！

岳だっ！

「いやー、しつかしあのお菓子大好きせんせがあんなこと言つとは
思わなかつたな」

「あたしも……むしろ高山くんのセリフだと思つてた！」

「同じく」

いやー、オレってば意外とああ言つ事は恥ずかしくてできないの
よ？

「あー、開会式めんどくせえ」

「それでいいのか応援団長!？」

「うっせ。どーせならチームリーダーにも言つてやれよ、それ」

「……それは俺がやる気ないように見えるという事か？」
うん？

「あるのか？」

「あるとは言いがたいな」

『結局ねえのかよ!？』

「修也はそう言つ事は表に出さないのよ!」
ほんとーにねーかも知れねーじゃんよ。

開会式終わったあ！

と、本当に声に出しては言えないから心の中で叫ぶ。
ずうっと立ちっぱってしんどいよなー。

しかもオレ応援団だから座れねーし。

最初はエール交換だからさ。

「応援団！ 円陣組めーっ！」

……せんせのこのテンションってまさかずっとこのまま？

「よし、組んだな。んじゃ団長、何か言えー！」

何か！？ えー……よし。

「カステラパワーだ！」

「分かんねーよー！！！」

とか言いながら足は踏み込むのな。

「よし、行って来い！」

『おうっ！』

……ところで、応援団には女子もいるのに何でこんな返事ばかりなんだ？

「赤組のーっ！ けんとー願ってーエールよーい！」

『そーれっ！』

「フレーツ！」

『フレーツ！ あーかーぐーみつ！ そーれ！』

うーん、はつきり言って、これを待っている間が一番きつい……。

だってエールってほとんど同じだし！

応援合戦の方が見てもやっても楽しい。

『次、赤組お願いします』

いよっし、来た！

昨日は『声がかれたら困る』とか言われて思いっきり喋れなかったからな！

ストレスはっさーん！

「あ……白組のーっ！ けんとー願ってー！ エールよーい！……」

あつぶね、赤組って言いそうになった。

『そーれっ！』

「フレーツ」

『フレッツ！ あーかーぐーみつ！』

全員間違つてんじゃないかよっ！？

『フレッツフレッツ、ある組』

混ざつたあ！？

『フレッツフレッツ、白組っ！』

ああ、元に戻った。

『お〜〜〜………ファイトお！！』

ピッ

よし、とりあえずこれでもいーじゃん思考で行こつ。

過去は振返らない主義だ！

『プログラム二番、五年生の100m走です』

「応援だーん！」

水くらい飲ませろっ！

「よお、岳

「にーちゃん！？」

いっつも来ねーくせに！？

明日は雨かあ。

ぺしっ

「いてーな」

「ん、余計なことを考えるお前が悪い。声に出てた」

ウソお！？

「ま、頑張れよ。俺のカステラ食ったんだからな。負けたら殴る」

その笑みを消せえっ！ 怖え！

何！？ まだ根に持ってたのか！？ いやまだ一晩しか経ってね

ーけど！

いや、昨日な、カステラがあんまり旨かったもんだからにーちや

ん達の分までうっかり（ここ重要）食つちまって……。

はあ。めつたに見せない笑みをここで見せられると怖さ十……百

……いや、千倍かも。

「たっける〜」

「あ、ねーちゃ……うげ」

ねーちゃんのも食っちまったんだけど……。

「あたしの分のカステラ食べたんだから、負けたらチリンチリンア
イスのドロップあげない！ プラス……うん、言わないであげる」

「余計怖いわあっ！」

「はい、分かったら光のためも含めて頑張る！ 行って来い応援団
長！」

どん

はたくなあっ！

「いってー。ああもう、100m走始まってんじゃん。行くぞ！」

『おう！』

だからなんで女子までそんな返事なんだよ！？

と、とにかく、何が何でも勝たないわけにはいかなかったあっ

！

128 六年、全員リレー！

「おー、すっごいいい勝負」

125対128かあ。

「お姉ちゃん〜、嬉しそうにしないでよ〜」

「負けてるんだよ!? ウチ等!」

たった三点じゃん。

「……たかが三点、されど三点……」

「もぉー。後玉二個入れたら勝つてたのに!」

玉入れてそうそう入るものでも……無いこた無いなあ。

「あれ〜? そういえば純お兄ちゃんは〜?」

「帰った」

「え〜!？」

岳脅すだけ脅してさっさと帰ったんだけど。

「気付かなかったの? 次の六年の全員リレー終わったら昼休みでしよ?」

「だって〜」

「純くんなんてどこフラフラしてるか分かんないし」

……まあ、そうかも。

「フラフラするのは忍だ」

「純兄!? あれ!？」

帰るって言うってたのに!?

「……帰って、無いよ?」

「もう一度来たただけだ」

「純兄が!？」

「……どういう意味だ?」

わざわざ純兄がもう一回来るなんて……。

「明日は……うん、雪とまではいかななくても雨だ」

「何か岳が来いとか言ってたからな」

なんかスルーされた。

「あたしそんなの言われてないんだけど？」

「テメエは言わなくても来てるだろうが」
来ないかもしれないじゃん。

「忍は暇人だもんな！」

なつくん、嬉しそうに言わない！

「あ、お兄ちゃん！」

「ほら、もう始まってる。応援しなくていいのか？」

あれ？ あ、ほんとだ。始まってる。

たーけーるーはー……。

「あゝ、岳お兄ちゃんアンカーだよ」

「……チツ」

え、純兄今の舌打ち何！？

「^{アイツ}岳……今俺がいた方が怖くて速くなるって言いやがった」

読唇術……便利だよねえ、こんな時。

「事実じゃない？」

「ん、岳が負けた時はついでにテメエも……ああ、言わないでおい
てやる」

あたしが岳に言ったのと同じ事言ったあ！

「なつくーん、純兄が怖い」

「あはは、頑張れ。俺は白を応援するかな」

人の不幸を笑うなあっ！

「おにーちゃん？」

「……敵だ」

「やっつけるー！」

「はい？」

人を呪わば穴二一つ。

……人を笑わば穴二一つ？

体に穴が開かないように気を付けてね。

「お前らとにかく応援席座ってる！」

「お兄ちゃんたちが居るから」「よし、んじゃ別のところに行くか」「えーっ」

えーっ。

ここが一番見やすいんだけど。

「ところで忍？」

「何？」

「ずーっと鉄棒の上に座ってて足痛くならねーの？」

ここが一番見やすいんだけど。

「んー。若干……あーいや、大分痛い」

棒に当たる位置変えてるんだけどなあ。

「本部席の方意外と見やすいぜ。ゴールもあっち側だしさ」

「行く」

くるんと回ってー。

元に戻った。

一回転。

「天国回り」

「地獄回りは」

できません。

「行くならさっさと行かねえと……あとちょっとしか残ってねえし」

アンカーまであと二人じゃん。

「よし、走ろう」

「えー」

「何で言いだしっぺが文句言ってるの!？」

あ、あ、あ、後一人。

「とりあえず行こ!」

「うっ、いいな、お姉ちゃん達」

「……後三年」

「ウチ等があっち側に行くまで？」

「……うん」

「あーっ！ こけた！」

「やべえじゃん。抜かれた」

「ん、これはこれで『よくねえよ！』面白『くない！』五月蠅い」
だつて純兄がボケるから。

「これ団体競技だからドーンと入るだろ？ 得点」

「一位四十点、二位零点、引き分けで両方に二十点。変わってなければ」

「詳しいな」

「二年連続得点係だからね！」

これはあたしだけだつた。

「ん？ 三年連続だろ。中一の時乱入してたから。知り合いがいるのを使つて」

「頼まれたんだよ！」

言い方によつて凄い違い。

「あ……白の奴速え……。大丈夫か岳」

「さあ？」

「……おい」

だーつて。

「あ、やつとバトン渡つた。岳は……白と同じ位じゃねえか、足の速さ」

うー……。

四十三点差はキツそうだなあ。

「……あれ？ 何か岳、速くなつてね？」

「ん？ あ、ホント。さっきまでの何さ」

そんなら最初っから本気出せばいいのに！

「ねえ純兄……？ あれ、純兄は？」

「へ？ いねえの？」

んー、まあいいや。

「あ、あ、あ、後ちよつとで追いつく！」

「でもゴールまでも後ちよつとだぜ？」

「岳ー！ 負けたら怒るよ！？」

あ、さらに速くなつ……ちやいないな、うん。
つて言うか、これ位で速くなつたら凄いなあ……。

「よっし！ 追いついた！」

パンツパンツパンツ

あ、終わった……。

どっちが勝つたの？

引き分け？

「ん、ぎりぎり勝つたな」

『純（兄）！？』

「どこ行ってたの！？ つていうかそのカメラどっから……」

「親父が持ってたから借りてきた。ほら」

んー……？

あ、ちよつと岳の方が早くゴールしてる。

そついえば最後の最後で飛び込み前転してたような。

「これ借りに行ってたんだ。わざわざ」

「いや、岳を脅しに行った。これはついで」

岳が急に速くなったのは純兄が脅したから？

純兄……。

なんというか、凄すぎる。

129 いつもと違うことをするのはよくないらしい

「さあつて、今三点差で負けてるわけだが」

「ぜったいリレーの最後、高山君の方が速くゴールしたわよね？」

「……まあ、そこんところは得点係の判断だから」

「え、おれのせい!？」

何でだよ。

リレーの時は五年がやってたろーが。

岳だ!

今はとりあえず、昼食休憩中。

んでもって作戦会議……先生曰く。

ぜんっぜん作戦練ってねーけどな。

「あー、赤飯うめー。赤だぜ、赤。俺らの赤!」

「五月蠅い」

「うん、オレも思った……」

「落ち込むならやめときゃいいのに」

とゆーのはまあ、冗談で。

「作戦どうしますチームリーダー」

「……なぜそこで俺に振る」

「オレってば応援専門だから!」

あれ、なんでオレ目そらされたの?

「はあ……」

あれ、なんで修也溜息ついたの?

「修也ちゃん疲れてるなら「お前のせいだ」えー!?!いや、わかっ

てたけど」

「分かってたならやめんか!」

「それはともかく」ともかくするな!」「いつものやるか!」

ちようど弁当も食い終わったし!

食後の運動だ!

……うん？食後の急激な運動は体に悪い？

オレいっつもこれやってるもーん。だから大丈夫だ！

……たぶん。

「さー、修也！かかってこい！」

「……岳、岳」

「あん？」

「今日は椅子運動場に運び出しててみんな机に座ってんだから……」

机の上を飛び回るなって？

誰がいつそんなことをした！

……オレいっつもやってますね、はい。

「んー、よし、廊下でやるうー！」

「ったく……」

とか言いながらついてくる修也ちゃん。

文句言うつもり無いっしょ？

「そこ二人！今日は暴れるなよ！うちのチームの切り札なんだからな！腹壊されたら困る！」

「でも残ってんの100m走と組体だけじゃん」

「馬鹿！その100m走で思いつきり走れなかったらどーする……」

うーわー。

いつものせんせの面影ゼロじゃん？

「とゆーわけで今日は駄目だ！」

『はい』

『プログラム17番、六年生の100m走です』

「うう……」

「岳？どうした？」

「暴れ足りなくて逆に腹痛え……」

普通逆だろ！？

と、自分の体につっ込んでみる。

「普通逆だろ!？」

あ、突っ込まれた。

「大丈夫かよ……お前、うちのチームで一番足速えんだぞ？」

「はい、一つしつもん。修也、50m何秒」

「7.9秒」

あーうー……。

「オレ7.7。チエツ、せつかく一番を修也に仕立て上げよう」と
思うなよ」「……」

だあってえー。

よし、最終兵器。

「にーちゃんどこか分かんねー？」

「お前兄さんいるのか？」

修也はそつからかよ!？」

「えーつと……なんか!あの人だよね!」

古閑!んなんで行かるか!？」

「んー……と、あのガ……元氣いっぱいの人」

「そりゃねーちゃんだ!」

最初の『ガ』についてはスルーしてやる。

たぶん『ガキ』だろ？」

「にーちゃんは……ほら、あの……何てーか、怖え奴」

「ああ!よく岳が百マス計算挑んでる」

「それ!」

あ、最近やってねーな、百マス計算。

「そーだなー……。確か、リレーの前は鉄棒近くにいる……」
役に立たねー情報だなおい!？」

大分前じゃねーか!

「今は給食室の前に」

「遠っ!？」

うーわー、遠っ。

うーん、でもいるってことは見てるってことだよなー。

「うーん、うーん、にーちゃん見てるんだよなー」

うーうー、ぷれっしゅー。

「ちょ、余計具合悪くなってるない？大丈夫？高山君」

「古閑、お前次」

「あっ！」

うーん、うーん。オレの番まであと五人ー。

「あ、おれも行ってくる。修ちゃん頼んだ」

「だれが修ちゃんだ」

脱力させるなあっ！

わー、にーちゃんこっち見てるー。

「おい、高山お前次だからな」

うーうー、オレ次だから間違いないにーちゃん見てることになる

よなー。

「はい次ー」

わっ！オレの番。

にーちゃん見てるぞー。

よし、プレッシャーOK！

「よーい……」

パンッ！

ああもう、この音心臓に悪いからやめてくれよ！

んな事より、ほらほら、にーちゃん見てるぞー。

よし、行ける！

「……高山、腹痛いんじゃないのか？」

「とてもそうは見えないけど……」

「あ、アイツ純さん利用したな！」

「純？」

ああ……そーだった。

「岳の兄さん」

「ああ、そう。で、利用って……」
「なーんかなー」。

前からピンチになったら、岳の奴純さんで自分にプレッシャーかけて……。

というか、恐怖でピンチ乗り切るのが癖みたいなんだよな。
パンツパンツパンツ

「ふへえー。怖かった」

「ほらな」

『……………』

「わゝ、凄い」

「ひらひら!」

「……うねうね」

「今ねゝ、岳お兄ちゃん達の組体操だよ」。

「光です」。

「なつくん、何だっけあれ？ イソギンチャクだっけ？」

「え、名前あんの？」

「……もついいや」

「あのねゝ、組体操のねゝ、腕を交差させて隣の人と手をつないで」。

「波みたいに体を起こしたり倒したりするやつだよ」。

「あ、終わった」

「バラバラになって」。

「あれゝ？二つに分かれた」。

「……新聞記者、邪魔」

「うん。邪魔」

「せつかく綺麗なのにうるうるされたら違和感が」。

「あ、騎馬作ってる！それぞれ二列目の方」

「一列目の方は……なんか構えてる？ 剣？ とか弓？」

「……チャンバラ」？

「それとも昔の戦」ごつごつ？

「あつ！ 歩兵前に出た！」

「やっぱあれ歩兵なのね」

「弓が思いつきり関係ないところ向いてるけど」

「……あさつての方向」

「あのまま撃つたらぜつたい弓が行方不明になるね」。

「パントマイムだけ」。

『わー!』

「あ、騎馬も出た!」

「あ、あ、あ! あはははは!」

「新聞記者、巻き込まれてやんの!」

お互いの方に走って行って行ってるからね。

その間に立ってたら挟み撃ちだよ。

「あー、ぎりぎり抜け出した」

「惜しい!」

あゝ、ぶつかつた騎馬が壊れ始めた。

「……よく見たら、白組ばかり騎馬壊れてねえか?」

「赤組もちよつと壊れてるよ? ほら、おんぶ状態になってる

やつもある」

「組みなおせよ!」

ほんとにね。

「あ、白が一騎になっちゃった」

「最初から真ん中にいたし、お頭かな?」

「……盗賊団?」

「海賊じゃない?」

……海賊は馬使わないよ。

「あ、お頭も倒れた」

「結局お頭って呼ぶのかよ」

「なんか気に入った」

「……あそ」

赤が勝った!

つまり私たちが優勝できるのかな?

「そーいや純君は?」

「純兄? 帰ったよ」

「また!」

「結果だけ教えるってさ」

どうせなら見て帰ればいいのに。

「……赤も崩れた」

「えーっ」

何でっつ？

「次何するのかな」

「そろそろ終わりだから何か大技でもすんじゃねえの？」

「五十段タワー！」

「人数足りねえだろ、どー考えても」

んっつと。

「六年生は確か全員で六十五人だよ」

「それ以前にバランスとれないよ！」

「……うん、分かってたからね。分かってたけどなんとなく言ってみただけだからね。だからそんなに色々言わなくても……」

言わなきゃいいのにっ！

「あ、でもタワーはやるみてえじゃん。ほら」

おっ、いっぱい積みあがってる。

男子ばかりっ！

「五年生も交じってるよ！ 名前知らないけどクラブにいる人がいる！」

「名前くらい知つとこうよ」

「^{ただの}多田野ひ……くんだよ。名前くらい分かってるって！」

……下の名前分からなかったんじゃっ……。

「五段タワーじゃん！ あたしが言ったやつの十分の一だから五は合ってたよ」

「はいはいよかったねー」

「……なんかすごく馬鹿にされたような気がする」

「馬鹿にしたんだよ」

はっつきり言うね。

「あ、女子は女子で三段タワーしてる」

「スルーですか忍さん」

「嫌なことはすぐ忘れる主義なんだ！」

知らなかったよ。

「つらやましい主義だなおい」

……五秒も覚えてなかったね。

131 体育大会、閉会！

『成績発表をします』

どきどきどきどきどきどきどきどきどきどき……

とまではなつてねーけど、緊張すんなー。

岳だ！

体育大会終わって、んで閉会式の成績発表。
を、得点係の翔がやってる。

『白組、325点』

……マジで？

うわ、もしかしてヤバくね？

「た、高山君……汗凄いよ」

「そりゃそーだ。朝からずつと運動してたんだから」

「えーと、冷や汗凄いよ。漫画みたい」

漫画で。

でもなー、やっぱり負ける可能性が大分高いんじゃないかね？とか思っ
てたらな、そりゃー怖くて怖くて冷や汗だらだらにもなるっしょ。

にーちゃんとねーちゃんが何してくるか！

……ああ、余計怖くなった。とりあえず考えるのやめた。

「でも、中谷笑ってるから勝ってるんじゃないかねえのか？」

「んー、そっか！ んならよし！」

『単純……』

単純で何が悪い！

『赤組、325点。引き分けです！』

……まさかの引き分け！？

すげー。

ま、負けてねーから帰った途端絞め技とかはねーよな！

ねーよな！？

帰った途端とび蹴りとかねーよな！

な!?

あーうー、怖えから考えない。

「……喜ばばいいの!?! 悲しめばいいの!?!」

「リアクションをしなければいいだろう」

「それはそれで何か悲しいもん!」

「なら悲しめば……」

「あ、そうか……なあ?」

違うと思うんだけど。

「翔ーっ! 何で引き分けなのにあんな嬉しそうだったんだ!?!」

「こ、怖いから突進するな!」

そっか?

「質問の答えになつてねー」

「だから怖えよ番長!」

「だーれが番長だゴラ! いーかげんなこと言ってんじゃねーぞコ
ラァ!」

「ノリノリじゃないかあ!」

うん、ちよつと楽しかった。

「つてそれも答えになつてねー!」

「あ、ごめん。んーと……ごめん、その質問には答えられない
ハァ?」

「なんでだよ?」

「そ、それは……実に言いにくいんだけど……」

なんだ? まさか質問を聞いてませんでしたとかじゃねーだろ?

「質問を聞いていなかったのだ!」

まさかのそれがよ!?

「威張るな!」

「高山君、首絞めるならもーちよつと手加減を……」
んー、じゃあちよつと手加減。

「余計強くなつて……ぐふう」

「あ、氣い失つた」

「ええっ!?!」

「失つてねーよ!」

まあ冗談は置いて。

「んで、さつさと答えるよ」

「そ、それは……実に言いにくい」「それはもういいから!」「じゃあ質問をどうぞ」

占い師?

それともあれか?えーと……

ロシアンルーレット!

……違うな。

「何で引き分けだったのにあんなに嬉しそうだったんだ」

あ、修也ナイス。

言うのを忘れるところだった。

「あー、それは……うん、引き分けだったらどっちのチームからも文句言われないしさ、楽なんだよ」

文句う?

「数え間違いないの!? とか?」

「そうそう、そんな事去年言われた」

「そりゃそうよ、あたし言ったもん」

「お前もかあ!」

何人に言われたんだろー。

いや、誰かが数えてるわけじゃないけどさ。大体で。

「だ、だって……修也のチームが負けてたんだもの」

「……お前いつたいいつから修也が好いやーっ!」耳があああああああ!」

今のは翔が悪いつ!

「おーい、そこ。チーム集会始めますよー」

あ、せんせが元に戻ってる。

「それじゃあ最後にエール！ 行け！ 団長！」

オレはポ モンか！？

ってかなんかまた熱血になってるし！

「ふー。よし！ 行け！ 応援団！」

『ポ モンかよ！？』

あー、最後まで女子も男口調な突っ込みだったなあ。

「赤組のーっ！ …… あー、違うな。ちよつとせーんせ」

「何だ？」

「いやー、んとな……」

『赤白のーっ！ 引き分け祝ってーっ！ エールよーい！』

『そーれっ！』

……んーとだな。

『フレッツ！』

どーせ引き分けなんだからエールなんて全くおんなじことになる
でしょーと思つて。

『フレッツ！』

赤白合同で最後のエールをやるうということを提案した！

『あーかーしーろっ！ そーれ！』

うお、オレってば結構いい事したんじゃねー？

『フレッツフレッツ赤白』

白組の女団長もノリノリだったし。

『フレッツフレッツ赤白……』

皆の息もなんかそろってるしな！

『オオ ツ、ファイトオー！』

ピッ！

まあとにかく、最後の体育大会はすっげー楽しかったということ

で！

『ありがとうございます！』

……中学の応援団は学ランらしいし、やってみようかなー？
オレは番長！ってな。

132 数学しま……す！

「はい授業始めるぞ」

「きりーつ、れーい」

『さようならー』

「こらっ！」

きつと今日はみんな帰りたい気分だったんだよ。

忍でーす。

んとね、どういう訳か、そんでもっていつの間にか『ドッキリ係なるものが作られてて。

その第一回目のドッキリとして今のやり取りが出来上がりました。

「鈴木！ お前意外とこんな才能があつたんだな」

「ば、馬鹿にしないでよね！」

玲奈の不登校もどつか飛んでっちゃってたし。

相変わらずのツンデレ（だっけ？）だけど。

こつというクラス全員の協力が必要なモノが出来るようになったってかなりの進歩じゃない？

教師はまあ、大変だろうけどさ。こんなことされたら。

「今日先生へらへらなんだからさっさとやるぞ」

「へらへら？」

へらへらつて、なんか笑ってるやつ怒るときに言う『へらへらするんじゃない！』のへらへら？

「へるへるのちよつと軽いものバージョン。おら、プリント配るぞ」

「」

「へりへりは？」

「へらへら以上へるへる以下」

「へるへるは？」

……プリントは？

「へろへろ以上」

「へれへれは？」

「へろへろ以上へるへる以下」

「おお、へろへろ五段活用……って。」

『プリントはー！？』

「お前らが質問するからだろが！」

「あゝっ、人のせいにした」

「やかましい」

否定しないんだ。

「あ、せんせー、車の中の卵入れ取ったんだって？」

卵入れ……？

卵入れ！？

なぜに！？

「日焼けしたから捨てた」

もったいない。

「卵入れって何？」

「買った卵を置いておく所。割れなくて便利だったんだけどな」

「……それをつける前は割れてたのか？」

「……………」

割れてなかったって意味だよな、この沈黙。

「でもさー、そんなの卵置き忘れたらピーちゃんなるじゃん？」

『何で生まれるんだよ！？』

「普通腐るでしょ！？」

あ、一人だけ違う突っ込みした。

誰かは不明。声だけじゃわかりません。

「はいプリント回ったな、回ったと言え。よし、んじやまずー」

確認になっていない気が。

「はい、これーセンチーセンチの正方形。これが四つ集まったのがこれ」

黒板に図ペタリ。ポロリ。

「あ」

「図落ちたー。」

「磁石が弱いんだね。」

「どー見ても一センチ以上あると思いまーす」

小学生がお前は。

「はい、この面積は」

「おお、見事なスルー。」

『四平方メートル』

「はい単位違うなー。平方センチだから」

「見た目はもつと大きいけどねー。」

「はい、実はこれを使って二平方センチメートルが出来る！……あ」

ポロリ。

また落ちた。

「はい、四つの四角の対角線をそれぞれ結ぶ！……あ」

ポロリ。

「なんか落ちるまでの時間が短くなってきたような。」

「はい、こうすれば中にできたこの四角は半分になって二平方セン

……」

ポロリ。

「つまり、一辺×一辺が二になるわけだ」

「いちいちはりなおさなくても、手で持った方が早くないかなあ。」

「2？」

「そうこれを発見したのが」

「マゼランとゆかいな仲間たち！」

「なんでだよ！？今は数学！地理の時間じゃない！」

ポロリ。

「ピタゴラス！」

「違う」

「アルキメデス！」

「の弟子」

『ええー！？』

弟子いたんだ！
ポロリ。

「その磁石、むなしく落ちていくなあ、先生みたいに。あ
はいそこー。」

……えと、花坂はなざかって言ったかな？
顔が笑ってるよ。

「くそっ」

あ、なつくんなんかは大爆笑中だ。

「先生若いな！」

清、追い打ちをかけるようなこと言わない。

「もついい」

あ、落ち込んだ。

「今日は宿題なしのつもりだったけど出す！はい配るぞー」

『花坂あ！ついでに海中！』

「いやーっ！ごめん！ホントごめん！」

「何で俺までっ！？」

しかももついでだって。

133 二者懇って

「高山さーん、高山忍さーん」

「ここは病院だったっけ？」

「はい、遅くなってごめんな」

「いえ、話をするような相手はみいんな部活行っちゃっててもう暇で暇でしょうがなかったうえに純兄にはとっとと帰られちゃって表に出さずに物凄くイライラしてたけどぜんっぜん怒って無いですよ？」

「……はい、ごめんな。どうぞ」

「だからー、怒ってないってばー、あははー。
忍でーす。」

今日二者懇で、とりあえず本来の自分の時間までは待つてたんだけど……。

何か知らんが部活を待たせるとかいう理由で他の人が入ってきて遅らされてー。

「いっちばん最後になってしまった。」

「はい、それで……どんな感じ？」

「何がですか柿の種………先生」

「……と、とりあえず、クラスで」

「クラスがどんな感じか？」

「んー……、五月蠅い」

「ああやっぱり」

「やっぱりと思ってるんだったら何とかしてー。」

「どの辺が五月蠅い？」

「えー……花咲とゆかいな仲間たちがくん」

「え、何？何かギャグアニメみたいなのけ方したよこの人。」

「そ、そうか。で、五月蠅いから席替えしようとしてるけど、それ」

「についてはどう思う？」

「その席気に入ってるんですけど」

「がくん

またこけた。

あたしの席、真ん中の列の一番前で、今教師が座つてるとこなんだけど……。

五月蠅くても聞こえるから、気に入ってるんだよねー。

「……と、ところで成績いい方だけど、塾は行ってないんだよね？」

「行ったところですがすぐにやめると思っています」

「がくん

……癖なの？

「自分で勉強してません」……やったらもっと伸びるでしょうに。特に社会」

「歴史なんてどこで使ってますか」

「いや、あのねえ……」

「今やってるのは公民だけだよ。」

「志望校とかは？」

「今のところ無いです」

「んー、そうか」

あれ、終わり？

さっきから全然話続かないねえ。

「高山は兄弟とかいるの？」

「高山純はあたしの兄ですが何か」

「ああそうだった、ごめん。弟とか妹とかは？」

「純兄に聞かなかったのかなあ。」

「どっちもいます」

「ちゃんとお姉ちゃんしてる？」

「うーん、何て難しい質問だ！」

「多分？ きつと？ 恐らく？」

「……純は家ではどんな感じ？」

「家族全員の恐怖の対象！」
がくん

若干このリアクションうっとうしくなってきた。

「ああでも、たけ……弟と百マス計算勝負とか、最近ではナンプレも勝負やってます」

「そっか、弟はいくつ？」

「小六」

「あ、来年入ってくるんだ」

……あ、柿の種がずっとこのまま学校に居るんだったら岳の学年持つことになるんだ。

岳！一組だけにはなるなよー。

「はい、最後に気になることある？」

「気になること……気になること……？ うーん」

教室見回してみるけどー。思いつか……あ。

「バルコニーの花壇が雑草だらけです！」

「そこは気にしちゃダメだ！ 抜きに行かないで」

「誰がいつそれを抜いたんですか。どっちかっていうと食べられるのが無いのかの方が気になってるんですけど」

食べないけどさ。苦いから。

「そ、そうか……まあ高山は不思議だからなあ。他には？」

あたしのどこが不思議なの！？

いや、たまに言われるけどさあ。

んー、他ねえ。

「ほら、藤原君が腕時計つけてますとか」

そーなの？

「小浜君の眉毛ありませんとか」

「そーなの！？」

知らなかった……今度見てみよう。

「あ、そうそう。一昨日の音楽室の掃除が無かったってこと聞いてなかったんですけど」

おかげで掃除がサボれた。

「あー、あれな。あの日先生職員室によらなかったからそのこと書いた紙見てなかった」

「うわあ、音楽の八木田先生やまだが言ったことと全く同じだ。

「ほら、先生渡り鳥みたいにあっちこっち行ってるから……」

「先生」

「ん？」

「渡り鳥を馬鹿にはいけません！」

「それ先生馬鹿にしてることになるからな!？」

あはは

「先生くくく渡り鳥」

「お、ま、え、なあ……」

先生くくく渡り鳥!

テストに出るよ!

134 懸賞に応募しよう

「父さーん、何してんだ？」

はがきだらけだけど。

「懸賞に応募しようと思って」

「懸賞？何の？」

チラシもいっぱい。

岳でーい。

「今書いてるのはこれ」

ふむ？ 何々……。

《男女虫キャンペーン！

パッケージについたシールをはがきに貼って送ると抽選で五十名様に男女虫パペットをプレゼント！》

……ええと、どー反応すりゃいーんだ？

「……欲しいのか？」

「いや」

欲しくねえなら応募するなよ！？

「ほら、こーいう誰も応募しなさそーな奴は当たる確率が高いだろ？」

そーいう考え方をする奴は他にもいるんじゃないかなあ？

「んで、もしそれが当たったらどーすんだ？」

「喜ぶ」

「……で？」

「終わり」

「終わりかよ！？」

もったいねー！

「結局邪魔になるだけじゃねーかよ！？ 大体なんだよ男女虫って！？」

「知らん」

「知つとけよ！」
「とあるお菓子のキャラクターだ」
「知ってんのかよ!？」
「あー、なんかすっげー疲れてきた気がする。」
「オレ、年かな」
「……小六が何言ってるの？」
「お前のせーだ！」
「人のせいにしてはいけません」
「やかーしい！ 本当の事だろが！」
よし、落ち着けオレ。
とりあえず話を変えよう。
「んで、応募するやつ他にねーの？」
「無い」
「ねーのかよ!？ はがきこんなにあるのに!？」
「と見せかけて」
「見せかけんでいい！」
「実はこっちに本命が」
「だったら全部そっちに出せよ……。」
「たたたたたたー。ニ テ ドー3 Sー」
「おおおおおおお！」
まずは何で青い狸が不思議な道具を出すときの音楽を口で言った
のかから説明してほしい！
「3 Sって、これあんの!？ 応募すんの!？」
「いや」
「しろよ！ 何で出したんだよ!？」
「応募したいんだったら自分で書いて」
「あ、うん」
……あれ？ 何かはめられた気が。
父さんもしかして自分で書くの面倒だっただけなんじゃ……。
「あれ〜？ 何やってるの〜？ 二人して〜」

「あ、母さん。懸賞書いてんの」

「……………お父さん？ まさかまたいらぬ物貰おうとしていないでしょうね？」

あ、父さん硬直。

おもいつきりいらぬ物貰おうとしてたもんな。

「あゝ！ やつぱりまたやろつとしてたのね！」

「母さん、またつて？」

「十年くらい前にね、冗談でこおゝんなぬいぐるみの懸賞に応募して」

こおゝんなつて……………見た感じ冷蔵庫位ありそうなんだけど。

「当たつたんだ」

「ううん、十枚外れたの」

「ならいいじゃんかよ！」

「出したはがきは十二枚よ？」

んじゃ二枚は当たつた……………つて！？

「そおゝんなぬいぐるみが二体も当たつたのか！？」

「そうなのよ。ほら、そのうち一体は保育園にあげただけだね」

何だ、あげたのか。

「もう一体は？」

「……………はあ」

え、なんで溜息吐くの？

「岳が物凄く気に入っちゃったからあげたり売ったりできなかったんじゃない！」

「ええええええええ！？ オレのせい！？」

記憶にはない！

いや、十年も前なんだつたらオレ一歳か二歳なだけどさ。

「オマケに忍まで気に入っちゃってるし、純はぬいぐるみは興味なさそうだったのに二人の味方するし」

おおゝつ、五歳のに「ちゃんやっさしー！」

あれ、光は？ そっか、生まれてねーな。

「で、結局今は押し入れでぐっすりなのよ」
あるのか!？」

よし、このはがき書いたら探してみよう。

135 不思議満載なぬいぐるみちゃん

「ねー、ホントにこん中にあるの？」

「母さんが言ってたから間違いない！ 多分」

そこに多分をつけないでよ。やる気なくなるから。

忍でーす。

岳が、押し入れにでっかいぬいぐるみあるらしいから探そーぜ！
なんて言ってきたから探してるんだけど。

「無いじゃん」

「うーん、ここじゃねーのかなー？」

「んじゃもう一個の押し入れ探そうよ」

見つけてどうするつもりなのか知らないけど……。

「えー。あつちの押し入れ？」

「あつちの押し入れ」

嫌がること無いでしょうが。

普段からおとーさんとおかーさん使つてるとこなんだから……。

「はい、さつさと来る」

「なんだかんだで探すのノリノリじゃねーかよ」

だつてー！。

探してるのつて冷蔵庫位大つきいぬいぐるみでしょ？

ちよつとくらい覚えてるよ。

たしかあれは……。

「あつたあー！！」

「……………え、これ？」

なんとというか、無残なことになってる気がしないでもない……………あ
あいや、思いつきり無残なことになってるけど……………。

「胡麻和えー！！」

「どんな名前だよこのぬいぐるみ!？」
だから胡麻和えだってば。

……何でこんな名前がついたんだろう。
あたしがつけたような気がするけどさ。

「えー……まあいいや。何でその胡麻和えの胸が赤いのかから説明
してくれねーか?」

全身クリーム色なんだけどねえ。

なぜか左側が胸のところから赤いという……。

「これケチャップ」

「どーやったらぬいぐるみにこんなにべっとりケチャップがつくん
だよ!？」

「何でだったかなー」

んーっと、んーっと、確か……。

「あ、思い出した。開封直後のケチャップを思いっきり握っちゃって、
それでぶしゅーっと噴出されたケチャップが胡麻和えの胸に直撃!」

「アホか!？」

「四歳のかわいい過ちだよ」

「やったのねーちゃんかよ! しかも結果は全然かわいくねーよ!
むしる怖え!」

突っ込み長い。

んでもって、

「やったのなつくんね」

「なつくうん!」

何で壁に向かって叫んでるの。

「呼んだ?」

そして何でなつくんがここに居るのかな!?

「いや、呼んでねーよ別に」

「あそ。って、うわ、ハウレンソウのお浸しじゃん!？」

「どんな名前だよ!？ ってか、え? 胡麻和えじゃねーの!？」

あれ、名前が長いって所には突っ込まなかった。

「胡麻和え？ こいつの名前はホウレンソウのお浸しじゃねえの？」

「そーだっけ。ああでもそんな気もしないこともないけど」

「あれ？ やっぱ胡麻和えだったっけ？」

「あれあれ？ こいつの本名何だっけ？」

「よし、とりあえずまずこのキラクター名を思い出そう」

「それよりまず、押し入れから引っ張りだそうよ」

「まだ出してなかったし。」

何か突き出た鼻が突っかかって見てて痛いし。

「よーいしょ。うわ、意外と重っ！？」

「そーそー、重から移動させる時は皆で蹴ったり体当たりしてたよね」

「あと転がしたりな。香ちゃん面白かったなあ……」

ええと、香ちゃん……ああ！ 山口の友達の中で一番の不思議ち

やん！

ちよつと天然も入ってたし、小っちゃかったし、なんか皆の妹香ちゃんとか言われてたな！。

……今度山口行ったときあたしの方が小っちゃかったらやだなあ。

「なつくんとねーちゃんも手伝えよ！」

「ああ、悪い」

さー、皆で引っ張ろう。

「……何やってんだ、テメエ等」

『あ、手伝って。てかやって』

「質問の答えになつてねえ」

え？ 質問してたの？

「ほら、この押し入れの中のぬいぐるみ出すの手伝ってって」

「ああ、氷漬けな」

『また新しい名前出たああああ！！』

でも何でおかずの名前じゃないの！？

「ん？ きんぴらごぼうだったか？」

結局おかずの名前だし！

「ちよ、ちよつと、やっぱ一回これ出すのやめて名前思い出そう!」
「そだね、ええと、お味噌汁!」
「それだああああ!」
「一発で分かった!」
「よし、すつきりしたところでお味噌汁出そう」
「わかめの味噌汁だっけ、豆腐の味噌汁だったっけ」
「余計なところに突っ込むな! 気になる!」
「なっくん、細かい所気にしすぎじゃない?」
「そうでもない?」
「わかめと豆腐の味噌汁だ」
「ああ、すつきりした」
「したのか!? これで!? なっくんすげー」
「すごーい。」
「……何が?」
「んじゃ出そう」
「ずば」
「……何この音」
「ぬいぐるみが抜けた音だろ?」
「こんな音ふつうしないよねえ。不思議だ。」
「やっぱでけえな、わかめと豆腐の味噌汁」
「やっぱなめこの味噌汁じゃない?」
「もういいから……」
「あ、疲れた?」
「んで、このキャラクター名ってなんだっけ」
「たしか、なめっこだ」
「何のキャラクターなんだろ、これ」
「……やっぱなめこの味噌汁かも」
「違う! こいつはニンジンとサツマイモの甘煮だ!」
「何か無駄に長くなつたあ!」
「何を突然……あん時お前一歳だったろ」

「背中にこんなのが挟まってた！」

背中に!?! どーやって!?!

《このぬいぐるみのなまえはにんじんとさつまいものあまにです。
かわいがってください》

……………捨て猫? もとい捨てぬいぐるみ?

「すげえ、字は明らかに子どもの字なのにぬいぐるみの事『この子』
じゃなくてちゃんと『このぬいぐるみ』って書いてある」

「……………誰が書いたんだ、これ」

「え? これってあれだろ、俺等で名前を忘れないようにしようっ
て書いた奴じゃ……………」

何でそれが捨てね……………ぬいぐるみみたいになってるんだろ!?!
不思議だなあ。昔のあたしたち。

136 めいぐるみだつて悩みます

こんにちは。昨日発掘されました、ニンジンとサツマイモの甘煮です。

ただいま、今まで見たことのない女の子に破れたところを繕ってもらっています。

ああ……親切だなあこの子。

「でもよくこんな特徴的なめいぐるみの存在忘れてたよね」

……独り言で妙にぐさりとくる言葉を吐きますが。

わたくし私、忘れられてたんですね……。

「おお、お前は！」

え、なんでしょうこの青い車。

「お前は……」

何やら私のことを知ってい……。

「誰だ？」

る訳がないですね、はい。

でも私はこの声を聞いたことがあります。

「ラジコンカーさんですか」

「おおうつ！？ ま、まさかオレって有名！？」

ええと、馬鹿なのでしょうか、アホなのでしょうか。

それとも、両方なのでしょうか。

「あれ〜？ なんでラジコンがこんなところにく〜？」

「何ですか？」

「オレの家にオレ押し入れがいて何が悪い！？」

あら。

「その家は皆押し入れの物です」

「……なんか、お前って頭固そうだな」

「がちがちのプラスチック頭が何を言うんですか。私の頭は布と綿でできていますから当然やわらかいですよ。ふわふわです」

もまれてもまれて擦り切れるほどの気持ち良さだったんですから。
……いえ、私はひりひりして痛かったんですけどね。

『そーじゃなくてなー。やっぱりお前頭固え』

『どう思います、ウサギ人形さん』

『やっぱりい、あたしがいつちばん可愛いわよねえ』

ああ、聞いた私が馬鹿でした。

「ああ〜っ！ みみちゃんだ〜！ こんなところに〜！」

あ、あの、ちよつと!?

私の背中に針を突き刺していかないでください!!

縫う位ならちよつとちくつとする程度で済みますけどね!?

こんな針山みたいにグサツといかれたらすうっごく痛いんですよ!?

『あらあ、光ちゃんじゃなあい。って、ちよつ!? 耳! 耳つか

まな……あふう、あれえ? なんだったっけ』

ウサギ人形さんのもう一つの人格が出たあ!

このうさぎちゃんはラビットちゃんと違ってとてもいい子なんですよねえ。

じゃなくて! 針! 針! 抜いてください!

「あ〜、うさちゃんも耳のところがちよつとほつれてるよ〜」

……もう、いいです。

あきらめました。はい。

この針の痛みを我慢してこそ、真のぬいぐるみになれるのです!

『なんだよ、それ』

『何故私の心がつ!?!?』

『いや、心の声がオレらの声だろっ!』

はわわわわ〜! 忘れてたのです!

ということ私の考えてたことすべてダダ漏れだったのですね!?

『そうだよ。ニンジンとサツマイモの甘煮ちゃんったらうっっかりさ
なんだから〜』

はう……。

『ところでいつこの針は抜けるのでしょっかつ!?!』

『……………』

何か答えてくださいよおっ!

137 美代の人物ファイル

「じめじめだな〜」

「じめじめだね」

「……じめじめ」

うーん〜、何しようかな〜。

光です〜。

梅雨でしょ〜。雨でしょ〜。暇でしょ〜。

皆じめじめでテンション低……。

「いよつしやあああ！ 俺様大富豪！」

でもないみたいだね〜。

「俺様っ！？ 俺様っていう奴本当に居るの！？」

「……危険人物、登録されてる」

「危険人物〜！？」

というかその小っちゃいファイル何〜！？

「……水ヶ岡小学校全人物調査ファイル」

『全人物！？』

「……三から六年までの」

それでも多いよ〜！

「見せて見せて！」

「……プライバシー保護のため……」

だったら作らなかつたらいいのに〜！

「じゃあじゃあ、ウチのとかかひーちゃんのところでいいから！」

「……ん。はーちゃんの……はい」

どれどれ〜？

うみなかはる

《海中春》

生年月日 2001年11月20日《》

「……春って名前なのに……誕生日、秋とは思わなかった」
不思議だよね〜。

なつくんはちゃんと誕生日夏なのに〜。

「お父さんが冬で、お母さんが秋で、お兄ちゃんが夏なんだもん！だからお父さんが全部揃えようってこうなったらしいよ」

「……メモ、メモ」

メモするんだ〜。

「他になんて書いてあるの〜？」

《声がかい。五つ上に兄がいる。以外と反射神経は鈍い。ついでに方向音痴》

ついでについで……。……。

「あれ〜、はーちゃん反射神経鈍いの〜？」

「どっちボール……。よく当たる」

「あ〜！」

「それだけっ!？」

こくん。

あつさりうなずかれたね〜。

「うー。ひーちゃんは？」

「……あ、消し忘れ……」

ん〜？ 何を消し忘れてたんだろ〜。

「……はい」

え〜つと〜。

《高山光

たかやまひかり

生年月日 2002年1月23日《

………ところ〜。

「何で消した後のところに危険人物って跡があるんだろ〜」

「危険人物だったから……」

あつさり言われた〜。

「なんでなんで？」

「……ポーチ」

ポーチ〜？

「これがどうしたの〜？」

「何がdてくるか……わからない」

文房具しか入ってないよ！

「前……カッター3本くらい入ってるの、見えた」

「惜しいな、四本だよ」

「いるの!？」

……うん。

「水小祭りのときは大活躍」

文化祭って言うのかな？

お化け屋敷は六年しかできないけど楽しいの。

保護者が来たりとかは無いけどね。

「他に何て書いてあるの？」

《語尾が伸びる。四兄弟の末っ子。地味に運動神経はいい。昼寝好き》

「地味につて？」

「めったに、本気出さない」

あはは。そうだっけ。

「そういえばそうだよ。体育大会の時もぎりぎり一位取れるくらいに手加減してたし」

あはは。

「なんでバレバレ!？」

怖いよ！ 純お兄ちゃん位……よりはマシだけど怖いよ！

『だって、本気見たことあるし』

いつの間に!？」

「……電気から落ちたカッターをつかんだとき」

あ……。

「大分前だけど、幼稚園からの帰りに雷鳴って走ってっちゃった時」

ああ……。

そういえばそうだね。

「……メモメモ」

「あ、そういえばさっきの大富豪野郎は何で危険人物？」

「……カッター、けんかに使った」
あ、、そ、う、い、え、ば、あ、っ、た、な、。

「きゅうりにウエストがあるの!？」

「きゅうりの一番太い所」

「知らなかった」。

「……忍、まさか信じてねえよな」

「えっ!？ 違うの!？」

「信じてたのか!？」

「……違うよね。やっぱり。」

「さてさて、このきゅうりはどうやって料理しようかな。晩御飯何がいい」

『ステーキ()()』

「あはは、怒るよ？ あ、大丈夫よ純。あなたが言っていないことは分かっているから」

「ん」

『ごめんなさい()()』

純兄だけズルい。

いや、言っていないんだからズルいってこたないんだろーけどさ。

「で、晩御飯何にしようかな」

「オバキュウの寿司!」

「それってかっぱ巻きって言うよね」

「あ、そか」

「おい。」

「オバキュウとサツマイモの甘煮」!」

「ニンジンとサツマイモの甘煮の影響!？」

「ぴーんぼーん」

「当たり前なの!？」

「オバキュウのジュース!」

「美味しいの?」

「美味しいってこないだ見たサイトに書いてあった! ……気がする」

「おい!」

「オバキューのドックフード」

おとーさんまで！

「何で犬！？ここはキャットフードでしょ！」

「そこは突っ込むところじゃねえ」

やっぱ猫だよ！可愛いよー。

「オバキューの回し蹴り！」

「どんなのを見てみたいよ！」

想像してみた。

オバキューがぐるぐる回っている。

以上。

……えと。

「オバキューのはちみつ漬け〜！」

「やっど食い物に戻った……のはいいけど、何故はちみつ漬け？」

「メロンの味なんでしょ〜？」

………それでもなかった気がする。

「オバキューの胡麻和え」

「オバキューのお浸し！」

「オバキューの氷漬け〜」

「きんぴらオバキュー」

「オバキューの味噌汁っ！」

以上、ニンジンとサツマイモの甘煮という名前にたどり着くまでに出たおかずのオンパレードでした。

……あれ、一つおかずじゃないのが交じってるよ？

『いただきますーす』

結局。

オバキューの塩ごま油和えになりました。

それは、突然現れた。

手がするりと滑ってしまいそうなめらかな肌。

人間とは思えない、すれ違った十人中十人が振返ってしまいそうな顔立ち。

ツンとした唇。

……こう言えば、聞こえはいいか？

純だ。

いきなりだけど、前言撤回。正確に言おう。

手がぬるりと滑ってしまいそうなぬめぬめの肌。

人間とは十人中、百人中だって一人も思わないだろう醜い顔立ちとがったくちばし。

「かつばあ!？」

目の前にいるのは正真正銘、怖い話やら昔話やらに出てくるかつばだった。

……手にきちんときゅうりを持っているのは褒めるところか？

「あらあ、なあに〜？ あたしの美しさにびっくりしちゃったあ〜ん？ うふっ」

かつばではこんな顔が美人なのか……？

それともブスなのにナルシスト、とか？

「純兄っ！ あたしたち何も見てないよね！ 帰ろう！ 走るよ！」

「ああ、いつもなら反対するけど今日は別だ」

「行くよーっ！」

よーい、どん！

つて、聞こえたのは気のせいということにしておこう。

『つてちよつとお！ 待ちなさいよ！』

「何かきゅうり飛んできたあ！」

……当たり所が悪かったらあっさり気絶しそうな勢いで飛んでく

るんだけど……。

『ほらほら、恥ずかしくて無いでこっちにお・い・で
さん』 お兄

ちよつと待て。

「あたしは帰っていい？」

『あたし、女には興味無いの』

……はあ……。

「と、いう訳であたしは先に帰ります！　じゃあねー」

この兄不幸者。

人のことは言えねえけど……。

んなことより。

「テメエ生臭いからとつとと池に戻れ！」

『じゃあ来てくれるう？』

「分かったからさっさと行け」

『うふ』

よし、向こうを向いたな？　向こうを向いたなら俺は帰……。

がし

「放せ」

『い・や・よ』

よし、どちらにしても帰ったらまず念入りに手を洗おう。

「放せ」

『い・や・よ』

腕を外向きに回せば痛くて放す……ハズ。

人間じゃねえから分からねえけど。

ぐるん。

ああ、取れなかった。

「何で腕が一回転するんだよ……」

『あらあ。知らないのお？　かつぱの両腕は体内で繋がって……ち

よつとつ！？　何するつもり！？』

小学の時にそんなことを怖い話に出てくる妖怪撃退法みたいなも

ので読んだことがあるのを思い出してな。

確か、かつぱの両腕は体内でつながっているから片方の腕を引っ張るともう片方の腕が縮んで、そのまま抜けてしまうこともあるとかないとか……。

ずぼ

……抜けた。

『いやあああああ！！ あたしの腕え！ 返しなさい！』
ん？ 痛くはないのか。

「あ、体から離れると力も抜けるのか」
べりっ

……なんだ、べりつて。これが手のはがれる音か？
粘膜が乾いたからか。

『返しなさい！！』

「ほらよ」

『あああああ！ あなたいったいどこに投げて……』
ぼしゃん

よし、ちゃんと池に入ったな。

いや、入らない方がどれだけノーコンなんだって話になるけど。

……あ、かつぱつてすごいな。

開いた口がふさがらない、なのか顎が地面についている。倒れるわけでもないのに。

「さあ、取ってこい」

『お、鬼い！！』

「はは、なんとも言え。もとはと言『鬼、鬼、鬼、鬼、鬼』だ
れがいつ何度でも言えと言った？ あ？」

『いやあああつ！ 許してええええ！！』
反省しているのならよし。

二度と出てくるな。

『うう……。二度とあの鬼、この道を通るな！ え、え、あれ、な
んでだろ。またあの声が聞こえるよあははー』
『どうしましょう。この人幻聴に悩まされているようですよ、先生』
『しばらく入院させましょう』
こうして、かっぱの精神科病院の入院患者が一人増えたのであつ
た。

b
y

かっぱの看護師

140 お久しぶりです、オカルト部

「まってーっ！ ねえ！ ちょっとでいいからちよつと来てよ！」
ちよつとを二回言うとなんだか怪しく聞こえてくる！

『何度叫ぶなと言えは分かる！』
すばこーん

「いったーい！ 今のはちよつと痛かったよハルちゃん！？」
いい
加減ハリセン携帯するのやめてよ！」

あれ、突っ込むところが若干ずれてるような気がしないでもない
んだけど。

忍です。

最近静かだと思ってたら、再び追いかけられるようになりました。
あの、きょーふのオカルト部……あ、部活とは認められてない
だった。オカルトオタクの集まりにつ！

「いけーっ！ タツノオトシゴ！」

「はいっ！ って、結局オレのあだ名それですか！？」

あつさり返事しちゃってから言っても……。

って、今こっちに単独突入（？）してきた男子、オカルト部に連
れてったあの一年じゃん！

「タツノオトシゴーっ！ 頑張つて下さーいっ！」

えっちゃんこと枝奈さん、年下にもあなたは敬語を使っんですね
！。

「ちよつと来てくださいッ！ せめて話くらいは聞いてくださいよ
！」

「どう考えても頼む奴の態度じゃねえだろうが！」
いきなりとび蹴りしてくるって、どーよ？

「……よし、こうなったら忍。応戦しろ」

「やだよ！ あたしおいて逃げるつもりでしょ！」

「当然だ。昨日俺にかっぱを任せて逃げたのは誰だ？」

だつてだつてえ！ 昨日のあのかつぱ、明らかに純兄にしか用事
なかつたんでしょ！

流石に方手べつとりさせて帰ってきたのにはビビったけどさー。

「……それだ、それが聞いたかつた」

「そうそう！ マコちゃんナイス！ 何の用事が忘れるところだつ
たよー！」

ならそのまま忘れて追つてくるなあ！

「ですからマコちゃんと呼ばないで下さいともう693回言ってい
ます」

何で数えてるの。

「かつぱつて言ったな？ どこで見た」

できればその手のハリセンをしまつて下さい。ついでにストロボ
写真も取らせて。

運動を見るんじゃないやなくて、どこにしまったのを見るために。

「砂原池。これだけでいいならもう追つてくるな」

「砂原池？ 部長知つて……る訳が無いですぬすみませんでした。

古閑先輩知つてます？」

タツノオトシゴー。地味に失礼。相手が部長だからいいけど。

全員知らないと言わないですよ。

「いや、俺は知らない。枝奈は？」

「私も知りません……誠君知つてますか？」

「もちろん……。水ヶ岡小学校の近くにある大きめの池。鯉やカメ
などが生息している。かつぱを見たという子どもは後を絶たない。

しかしそうは言つてもは甲羅や皿を見ただけなのでおそらくカメ
の甲羅か水面に映つ「もういいよ」……」

ずいぶん喋つたね、この人。

あれ、途中で話しきられたからか知らないけどちよつと表情が暗
くなった。

「それじゃ、そのことは教えたから俺らはもういいな。もう追うな」
命令形ですか、純兄。

「あ、いえ……どのあたりで見たかもできれば教えていただきたいので……」

「明日は土曜日だしっ、一緒に来てね！ 待ち合わせ場所は……」
ちよつと待て！

「何であたし達行く前提で話が進められてるの!？」

「あ……どちらかお一人だけでもいいですよ」

よし、こうなったら……

「よし、任せたぞ忍」

「もっと平等な決め方は無いの!？」

「昨日俺にかっぱを押し付け」それはもう聞いたよ」ああそうだ、先週テメエが光のお気に入りのハンカチでうっかりごま油を拭いてしまつてそれが取れなくなつてそれをこっそり隠していることは……

……

何で知つてるの!？」

「しつかり証拠写真も」何でそんなことは面倒くさがらないの!？」
こういう時に役立つからだ」

「鬼！ 悪魔！」

「ん、褒め言葉として受け取つておく」
ぜんぜん褒めてない!

「じゃあ、よろしくね!」しののん!」

しののん? ああ、タツノオトシゴよりはマシかあ。

141 かつばでなくても良かったらしい

けきよけきよけきよけきよけきよ……

わー、スズメってよく息続くねー。

え？ あれはスズメじゃない？

現実逃避に突っ込まないでください。

忍でーす。

約束を破るのもなんか罪悪感するので、結局オカルト部のかつば調査（と言えるようなことをこの人たちがするのかどうかはともかく）に、同行してしまった。

ところで、あたし達が一昨日かつば見たのは橋の上だったんだけど……

今いる場所が本来立ち入り禁止の池のほとりというのは、どう言う事でしょう？

んでもって、何故その池のほとりの一部だけが砂でおおわれているのでしょうか？

『池のほとりが砂地になっていることから砂原池と名付けられた』

（マコちゃん談）

一部だけ、それも一人が立てるくらいの広さしかないんだけど、砂地。

「何でここだけ砂なんでしょうね、えつちゃん先輩？」

「ええっ！？ 私だって知りませんよ！ 聞くならまこ……」

どよぐん

絶対、漫画ならこんな効果音ついてるよ。

知らない情報、っていうか自分の情報が間違ってたことかな？

がよっぽどシヨックだったんだね……。

「マコちゃん！ 正しい情報がわかったんだからいいじゃん！ ね

？」

「そう、ですね……はい」

おお、立ち直った。

たまにはいい事するねー、部長。

「で、本当にこれ何ですかね、不自然極まりないんすけど」

「掘ってみよう！」

ところで、あたしは居る意味あるんでしょうか。

「こんなこともあるかとシヤベルを持ってきてある」

「さーすがはるやん！」

何でこんなことがあると思ったのか、砂のことよりそっちの方が気になるんだけど。

「ほらほら、しののんも！」

「はい」

砂くらい手で掘ればいいのについて思ったあたしは前世モグラだったとかじゃないよね？

『殺すぞ、殺すぞ』

「へ？ ハルやん、何か言った？」

「いや……でも、声は聞こえた」

「あ、あの……今の、砂の中から聞こえた気がするんですけど……」
『ええっ！？』

まさか。

……と、はつきり言えない自分が悲しい。

『黙れ、帰れ。それとも埋まるか、死ぬか』

「せせせせせ先輩、どうしましょおおおおおー！」

『まず、お前、お前』

「へっ！？ うぎゃ」

『タツノオトシゴーツー！』

何か、あだ名のせいでいまいち緊張感が無い。

タツノオトシゴの足が膝くらいまで砂に埋まったんだけど……。

「あの、砂の面積広くなってません？」

んー、そういえば、さっきの倍くらいの大きさに……。

「ってどーなってるの！？」

「うあ」

あ、腰まで沈んだ。

「あわわわわわ、タツノオトシゴーツ！」

「叫ぶなアホーッ！」

あ、ついに部長をアホ呼ばわりした。

すでに胸あたりまで沈んでるし……。

『帰るか、帰るか』

「帰るッ！ 帰るから……離して……」

離して？ 足でもつかまれてるの？

『シャーモ、何してるか。とつとと離すね』

……お知り合いですかー？

「わあっ、チャイナ服！ さらに中国なまり！」

「あれ？ 見えるの？」

どー見ても霊体なんだけど、この子。

身長あたしと同じくらいだー。

『私らなめるな！ ニンゲンに姿見せるくらい簡単ね！』

怒られたの？ 怒られた感しないけど怒られたの？

『ほらシャーモ！ いつまで潜てるか。お前もそいつ離してさっ

さと出てくるね』

『……む』

わあ。この一文字だけですごく不機嫌ってわかったよ。

「ああ、やっと手え離れたあ！ 怖かった……」

「だ、大丈夫ですかタツノオトシゴ……」

『これでいいか、いいか』

『ばっちぐーね』

あ、出てきた。こっちもチャイナ服。

……あのお、ところで。

とても手を離れただけでは出てこれないような深さまで沈んでますけど。

『で、お前らいたい何しに来たか？』

「あれ？ 何しに来たんだっけ？」

「…… かつぱを探しに来たはずです……」

「忘れてたの！？ あたし、凄く損した気分……。」

「でもまつ！ この人たち、未確認…… ええと、まあ見つけたんだからいいや！」

「かつぱ？ 皿帽子のあれか？」

「それだな」

皿帽子って言うとなんだか帽子の一種に聞こえてしまう不思議。

「昨日、昨日、どこか、消えた、消えた」

「ええええええええ！？」

あれ、純兄が原因？

「…… どんな感じだった……？」

「先頭に、怖い怖い騒ぐ皿帽子がいたある」

ああ、絶対純兄が原因だ。

「その回り、回り、医者か固めてた、固めてた」

入院でもしたのかなあ。精神科の。

「じゃあ会えないんだー。ざーんねん」

「つてか、オレはいつここから出れるんスカね？」

「あーっ！ ごめんねタツノオトシゴ！ 忘れてた！」

「…… いや、そうだと思ってましたよ。ええ。分かっちゃいましたとも」

あれ、傷ついた？

「シャーモ、出してやるね」

「……む」

「ぎゃあああああっ！」

おー、手をちよっと動かしたただけなのに、砂がタツノオトシゴ放り投げた。

…… 吐き出したように見えたのはあたしだけではない筈。

「シャーモ、お前も少し丁寧を覚えるべきね」

「いらぬ、いらぬ」

説教してる場合ではないかと。

余裕で木の高さ超えてるよ？

「ちよつと！？ あの高さから落っこちたらタツノオトシゴ、死んじゃいますよ!?!」

『まったく、人間は弱いある』

やれやれって……… いったいあんたはどれくらい丈夫なの。

一瞬後。タツノオトシゴはきれーいに着地。

女の子に抱えられて、だけど。

142 絶賛暇中の四人組

「暇だなー」

「暇だね」

「暇ねー」

「他に何か言う事はねえのか。……暇だということは否定しないが」
否定しねーんならいーじゃん。

岳だー。

友達と遊んでて暇というのはどーゆーことだろーな。

「よし、山でも登るか!」

「岳ー、何が悲しくてこの暑いのにさらに暑くなんなきゃならねー
の?」

山の中って涼しいぞ?

……いや、登ってたら暑くなるけどさー。

「涼しい所って言ったらあそこよね、水辺!」

「まず木陰まで移動することが先だと思うが?」

ちなみに、今いるのは遊具なんて全く無いくせしてこの辺じゃー
番でかい公園。

とーぜん、そんなところに居たら影に入ることなんてできるわけ
無い。

『だよな(ねー)』

移動開始。

……どこへ?

「岳、どこ行くんだ?」

「知らん」

「んな無責任な……」

無責任? だからなんだ!

「あ、ねえっ! 砂原池行かない? ひとりなら涼しいよ! 木も
いっぱい生えてるし……」

「おおっ！ 古閑ナイス！ 一昨日にーちゃんがかつぱに絡まれたところだし、それに会えたら怖くてさらに涼しく……あれ、古閑ってビビり？」

修也の腕にがちりしがみついているけど……。あ、修也ー、顔赤いぞ？

「いちやつくなら邪魔者は退散するべきだよな！」

翔、身を乗り出して言う言葉か？

「暑いから離れる！」

「だだだだだだだっ！ かつぱだよ！？」

『かつぱならもういないある』

「いやああああ出たあああああッ！！」

あのー。

古閑の悲鳴の方が怖いと思ったオレはおかしいのか？

『五月蠅い、五月蠅い。シャース、埋めていい、埋めていい』

埋める！？ 埋めるって言ったか！？

「はうっ」

「奈那子！？」

あらら、気絶した……。

「はうっ」

「って翔もか！？」

何っーか……情けない。

『シャーマ、人間はそうホイホイ埋めるもの違うね。たまににするべきね』

たまにならいいのか！？

『……む』

「高山、声だけのこいつ等はお前の知り合いか？」

「生憎こんな物騒な奴に知り合いは……あぁいや、物騒な知り合いは居るけどこいつらは違う」

斬はどー考えても物騒だよなあ。

次会うときマシになってるといいなと思ったオレはよくばりなの

か？

「……………物騒な知り合い、居るのか？」

「そこは突っ込んだら負けだ修ちゃん」

「誰が修ちゃんだ！」

何で怒鳴られにやならんのだ。

「ええと……………とりあえずどこ向いて話せばいいのかわかんねーから出てきて？」

シャースとシャーモつつたっけ？

『さつきから後ろに居るね』

「うおっ、背後霊かお前！」

『背後霊なんていないね！』

たとえだ、たとえ。

『シャース、シャース』

『何ね。今会話中ね』

『もう、時間。帰る、帰る』

……………時間？ こいつ等門限あんのか？

『あぁっ！？ 本当ね！ もうすぐみるすなの放送時間ね！』

『アニメの、どこがいい。分からない、分からない』

アニメエツ！？

『お前にあの良さ分かるか！ とにかく帰るね！』

ばしゅっ

つてな感じの音立てて、砂ん中に潜ってっただけど…………。

「何だったんだ……………」

「さあ？」

それよりオレはこの妙にふかい穴の方が気になる。
入りたかねーけど。

「うう……………あれ、おれどーしたんだっけ？」

「はっ！？ 修也、修也！ 埋まってない！？ 食べられてない！？」

食べるは何処から出てきたんだ。

「お前は大丈夫なのか？」

「はう……よかったあ。うん、あたしは大丈夫」

「おい誰かー、おれの心配をしてくれー」

それを言ってる時点で大丈夫だろ。

それにしてもー。

「暇だなー」

「暇だね」

「暇ねー」

「他に何か言う事はねえのか。……暇だということとは否定しないが」

否定しねーんならいいじゃん。

そろそろ涼しくなってきたし、帰るかなー。

「あぢー」

「わゝ、なんだか清君不良みたい」

「カッターシャツ全開、その中に赤いシャツ。」

「……確かに。」

「制服が学ランだから余計に不良っぽく見える。」

「忍でーす。」

「あぢーもんはしょーがねえだろ」

「あー、激しく同意。夏嫌いだあー」

「まだまだこれから暑くなると思うんだけど。」

「それよりさー、忍も桜もよく長袖でいられるな？ オマケに第一
まできつちり締めて」

「それがあたしですから」

「なんとなく？ あははゝ」

「大体、皆長袖だし。袖まくってる人の方が多いけど……。」

「せめて第一は開けてくれよー、見てて暑い」

「黙れ変態」

「篠、なーんでオレは変態呼ばわりされにやならんのだ？」

「しーちゃんの変態基準は低いもんねー。」

「んな事より「んな事なのか！？」「違うのか？」」

「おー、なつくんどドメ刺した。」

「「この学校クローラーあるんだろ？ 俺それ聞いて凄え楽しみにしてたのに……何でつかねえの？」」

「前の学校なかったんだ。」

「後0.2 で付くよゝ」

「はあっ！？ それくらいまけてくれてもいいだろ、カバ校長」

「校長カバ呼ばわりって……あー、おとーさんも言ってたしいいか。」

「校長の顔、カバに似てるって所から付けられたんだけど、まんま」

だよね。

「あ、後0・1」

「つけー、つけー。暑い。」

「誰がカバだつて？」

『突っ込み遅いよ!?!』

「というか、居たの!?!」

「暑い」

「いきなりそれかよ!?! つつか突っ込みは何処にやった!?!」

「では」

「聞けよ!?!」

「つて言うか、何しに来たの？」

「あ、後0」

「よっしゃあ! つく!」

「.....」

「ついてねええええええ!」

うるさあい。

「よし清、どう言う事が聞いて来い」

「何でオレ!?! ちよつと純、どー思うこれ」

「ん? どのと言われても..... やっぱり清が行くべきという方

に一票」

純兄聞いてたの?

「ああ、お前に振ったオレが馬鹿だった」

『何を今さら』

「うわつ、お前ら覚えてるよ!?! 今回の期末オレ勉強してるから

な!?! 負けても文句言うんじゃないぞ!?!」

明日は雪かな? 今なら大歓迎。

「生憎だがあたしも勉強してるぞ」

「わたしも」

「あたしも」

「うわ負けたあああああああ!」

おい。

「まあ、清が本気出したらどうなるかは分かんねえんだからさ。気を落とすな」

「夏う！」

「上げて落とす。はは」

「ぎゃーっ！」

おい、清？

なっくん何もしてないよ？

ぶおおおお

あ、クーラーついた。

『……………暑い』

風が生暖かいっ！

144 結局何しに来たんだか

「うー、暑い」

「暑い？」

「……？」

ちよつと人間のマネしてみたただけだッ！

だからんな変なモノ見るような目でオレを見るな！

剣だ！

「えと、斬。今日もバナナは美味しいな」

「……普通」

「……」

何かぜんっぜん会話続かねー。

「んで、オレ等何しに現実世界来たんだっ たっ け？」

「んむ、んぐむぐむぐ？」

「……とりあえずバナナ飲み込んでから喋ろうな？」

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ……

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ……

「……いつまで囓むんだ！？」

「……バナナ、溶かす？」

斬、それって確か人の体溶かすクスリじゃなかったかー？

「んむつ。いらん！ 砂人すなびとが出たから、幻想的世界あっちに戻せ、って事

じゃ無かったか？」

さりげなく二本目のバナナスタンバイ。

「……これ、普通自分達にまかす？」

「斬の言うとおりだッ！ よってオレ等はこの仕事をサボる！」

「お前らああああああ！！ 仕事をサボるとは何事だああああ！

？」

「らおん！？

「いつもの事ながら見事な走りっぷり。エネルギー補給にバナナい

るか？」

「ああ、どうも……って違う！」

とか言いながらちゃっかりバナナ貰ってんじゃないか。

「あむっ、もぐもぐもぐ……いいかお前等、今回の仕事はだな、あむっ」

食いながら話すなって、入学直後オレに説教してたのは誰だったっけ。

「……そもそも、学生に仕事与えるのが変」

「その通りだ！　ごちそうさま」

認めるんだ？

「バナナの皮はその土に埋めたらいい肥料に……」

「ん？　そうだな。って話を逸らすな！」

ノったのは誰だ！

「えー、話を続けるぞ。学生の、というか天を除いてこんな六つにも満たないガキが学生ということ自体がまずおかしいのだが」

「はーい」

「何だ剣」

「オレもはこないだ五歳になりましたー」

ハッピーバースデーアオーレ

「そうなのか？　お前等誕生日分かってたんだな……」

「オレ等三人で作りましたー」

「こらッ！　つと、言うか五歳も六つに満ちてない！」

「だあって、本当の誕生日なんて知らねーもん。後簡単に引つかかっただのはだーれだ」

あのー、地味に悲しそーな顔するのやめて？

いや、なんかすぐ青筋浮かんだけどさ。

「まあ、ええと、とりあえず！　天はともかく剣と斬までもが何で学生なんてできているかと言うと！」

「尊い実験台^{モルモット}の犠牲と、校長の離婚、後裏でコソコソやってる奴の逮捕。そのほか臨死体験をした教師の皆様の犠牲の……」

「思い出させるな！」

あれ、らおんにもやったっけー。

あ、確からおんにはバナナの皮ですってんころりのシャシンって言うのを取って皆に見せよーってやったんだ。

「はあ……。なんだかすごく疲れた。疲れたからさっさと言うぞ。

つまりな、お前等は実力で教師を動かして学校うちに居る。

早い話が、んでもって認めたかないがおれ等教師よりお前等の実力は上だ」

おおー、なんか大人。何か知らんが大人だー。

「……さっさと話すと始めに聞こえた気がした」

「空耳だろう？」

……お前等、話が長いの基準低くね？

「だから！ 少しずつ仕事を与えて、それをきちんとこなせるよ
うならば卒業させてもいいんじゃないか、という話が出た」

二か月……。あー、もう三か月くらいかな？ だけで？

「オレ等つてば結構目、かけてもらってるんだなー」

「嫌でも目に入るだろ！ 毎日毎日毎日毎日問題ばかり起こしやが
つて！ オマケに生徒には人気なんだから質悪い……」

あれ、面倒事からの解放が目的？

「まあ、そう言う事だ」

「そっかー」

さて、どうしよう？

「はいまず、天君！」

「私は今の生活が気に入っている」

「斬君！」

「……特に意見は無い」

「はい、剣君」

あ、自分で言おうと思ったたら天に言われた。

ぐっじよぶ。……使い方あってるよな？

「オレも天と同じー！ という訳で帰ろーぜー」

「アホかあッ!？」

「うむ。それにしてもいたずらに使う力をもう少し抑えたほうがいいか？ そうすれば卒業なんて話も出ないだろうし……」

「うん、でも思いつきり暴れられねーのもなあ……」。

「……とりあえず、ペーパーテストは白紙で出せば……」

「んーでも、入学前からあんなこと思われてるんだったら……。どーするべきかなあ。」

「……けきよく、何しに来たかあいつ等」

「知らない、知らない」

「せかく家に帰れる思たのにな」

「そもそも、迷子、シャースのせい、シャースのせい」

「む、お前だて乗り気だたある!」

「アイツ等、声かければ帰れた、帰れた」

「あ……何でそれ早く言わなかつたか!？」

「気付いて、なかつた？ 馬鹿、馬鹿」

「五月蠅いある!」

「……うん？ 何か後ろの方で砂柱みたいなのが出来た気がするんだけど……」。

「気のせいか!」

145 砂人と死神と妖怪と人間と

「太陽さん、もうちょっと……もっと、かなり遠慮していいですよ？」

「暑いよー！」

「雲！ もうちょっと出しゃばっちゃっていいんだよ！」

「……あ、蜘蛛の、巣」

「蜘蛛は出しゃばらなくてもいいんだけど。」

「光です。」

「二度目ですが、暑いです。」

「あれ、お前もしかしてあの性格悪い中学生達の妹じゃねえ？」
「はて。」

「何やら後ろから声がするのですが。」

「ひーちゃん！ みーちゃん！ 逃げるよッ！」

「おー！」

「……えと、お？」

「みーちゃん、もうちょっと思いつき言っていいたよ？」

「逃げるなよおい！」

「犯罪者にあつたら子供百当番の家にすぐ逃げ込んで、警察を呼ぶのが常識！」

「人を勝手に犯罪者にするなあああああ！？」

「違うの？」

「……犯罪……誘拐、未遂、者」

「違あうー！」

「ほらほら、買い物帰りのおばちゃんに見られてるよ？」

「はあ……あの兄妹と血いつながってるもんな、しょーがねーよな」
「簡単にあきらめられちゃ面白くないんだけど。」

「あれ、ひーちゃん知り合い？」

「ある意味。」

一回しか会ったことないけどね。

「サンゴのおじちゃんですよ。」

「だ・か・ら、おじちゃん違う!。」

さつきから違うしか言ってるよ。

『この、不届きもの!?!?』

「はい!?!?」

あれ??

なんだかサンゴの人が飛んでっちゃった。

すぐそこに墜落したけど。

『子どもに手、出す。何事ね!』

「お前も大概子どもだろうが!。」

突っ込むのそっちなの??

確かに私と同じくらい背しかないけど。

『何言うか! 私、今年で十三ね!』

以外?。

「十分子どもだ!。」

『年寄り黙るね!』

「年寄り!?!?」

じゃあおじいちゃんやおばあちゃんは何になるんだろう?。

「……ひーちゃん、あの子知り合い?。」

「違うよ。」

「……こっちに、もう一人、居る」

ほえ?

あ、本当だ。

地面から生えた男の子がいる。

『きゃあああああああ!?!?』

生えてる?!? 生えてるよ?!?!

『……人間、うるさい、うるさい』

思いつき人間じゃないよ発言。

「じゃじゃーん! 未理阿ちゃんでした!。」

「霧瑠依くんでしたー」

あ〜！

「久しぶりだね〜、盗人姉弟ちゃん〜」

「わっ！ 光でした！ お久しぶりでしたー！」

「久しぶりー、お菓子持ってるー？」

今日は持つてないな〜。

いつも持つてないけど〜。

「……ひーちゃん、何か、居る、の？」

あ〜、二人には見えないんだっ〜。

「ほら〜、大分前に岳お兄ちゃんの教室に出たでしょ〜？ おっきな耳の妖怪とか〜」

『みゅみゅっ！ それはみゅーちゃんのことかしゅか！？』

……出た〜。

耳で歩く妖怪ちゃん〜。

「貴様等……来るなと言ったはずだが？」

出た〜！

なんだか偉そうだった人〜。妙羅だっけ〜？

「あれ居るの！？ 見たい見たい！」

……どうやって〜？

「……そう、大変、だね……」

『んむ』

みーちゃん、なんで生えてる男の子と意気投合してるの〜？

「未理阿、霧瑠依、帰れ」

「ええーっ！？ いいじゃないでしたーっ！」

「迷子の保護みたいなモノっばいですよー？」

迷子？

『そうそう、それでどういう訳かこんなところに出たある』

「そっかー、やっぱりお前迷子じゃねーかー！」

『ちよとまよただけある！ 他人に迷子言われる筋合い無いねー！』

「訳分かんねーよー！」

こっちはこっちで意気投合してるよっかな？
えっつとっ……かおす？ だね。

146 扇風機

「あー」

ぶおおおおお

「うー」

ぶおおおおお

「わーれーわーれーはーうちゅーじんだー」

「……馬鹿が一人発生した……」

へー、誰のことー？

忍でーす。

扇風機で遊んでました。

馬鹿じゃありません。子供^{ガキ}じゃありません。

「暇なんです」

「何故敬語？」

「暇なんです」

「……で？」

「暇なんです」

「俺にどうし」「暇なんです」「そうか」

「暇なんです」

「……」

あ、純兄ひどい。スルーするつもりだ。

「暇だ暇だあ。おにーちゃん何かない？」

「ガキか」

「おっさんに言わせれば中学生もガキ」

「で？」

「純兄もガキ」

「少なくともお前よりはマシだ」

あら、あっさり認められた。

「あー、わわわわー」

「……気い散るから扇風機に向かって声を出すな」

「やりたいの？」

「何でそういう結論になんだよ……」

やりたくて気が散るという意味にもとらえられないこともない。

「純兄何やってんの？」

「テスト勉強」

「……まっじめー」

「うん？ テメエも昨日はやってたろうが。それもなんと二時間半、
テメエが」

塾行ってる人から見たら少ないんだって。こんなに多いのに！

「ただし理科だけ」

「他の奴はやる気なし！」

「何でそれを扇風機に向かって言う？ ……やる気がないという割
には一昨日学校に行く途中に何やら社会の暗記に夢中になって電信
柱に……」

口元だけで笑うなっ！ これならなつくんみたいに大笑いの方が
マシかもしれない。

……あーいや、どっちも嫌だ、やっぱり。

「社会はやらないとまずいもん」

「そうだな、授業全部聞き流してるとか言いながら全部聞いててし
っかりノートとってるくせに社会だけ覚えられないんだよな」

笑いながら頭を撫でるなあっ！

「すっげー馬鹿にされた気分だ、にーちゃん」

「岳のマネか？」

うん。なんとなく。

「ちなみに思い切り馬鹿にしている」

「してんのか！ やっぱりしてるんだ！」

声を殺して笑うのやめーッ！

……よく笑うなあ、今日の純兄。

「ぜったい今回は理科負けないから」

前回、小さな暗記漏れひとつで純兄に負けました。

「ほお？」

「いや、まあ終わったテストのこと言ってもしょうがないけどさー」
理科のテスト、今日だったし。

「なら英語で勝負するか？ 明日だし」

「ええーっ」

自分が苦手じゃない教科持ってきたな。

得意じゃないらしいけど。本人曰く。

「よしっ、英語と音楽！」

得意教科、んでもって純兄の苦手教科を持ってまいりました。

「ぐ、音楽……まあいい。じゃあそれで」

あら、結構あっさり。

あ、そっかー、実技教科のテストは暗記でどーにかなるって美術のヤツちゃん……もとい先生が言ってたもんね。

「純兄ー、運指だいじょーぶー？ んでもって譜面は暗記できたー？」

「……それは扇風機に言ってるのか？」

「さーねー」

ぶおおおおお

すーずし

147 感動のない再会

「純お兄ちゃん」

「……まず、何故窓から入ってくるような事になったのかと言ったところから聞こうか。後ろの諸々は後でいいから」

「やってみたかったの。そしたらね、妙羅……ええと、先輩く？ がやってみるか、って言うから」

「……………純だ。」

妙羅、つてのは多分、絶対、間違いなく後ろの偉そうな死神か……。

「うちの妹に悪い影響を与えないで欲しいのですが、妙羅置物生徒会長」

「誰が置物生徒会長だと？」

「え？ 知り合い？」

最後にあつたのは小学生のころじゃねえか？

「わう！ よく知ってるでした！」

「その通りだよ。あれ、君は誰？」

『みゆみゆっ！？ みよーらは今は置物ではないでしゅよ！ かいちよーでもないでしゅよ？』

「貴様らは少し黙らんか」

襟首つかんで投げ捨てるこた無いと思うけど……。

ああ、ちびっこい耳で歩いているやつは耳をつかまれてたけど。

何か黙るところかどっか行ってるし。

「んで、光？ 何してこいつと会った？」

「んっつとね、はーちゃんとみーちゃんと一緒に遊んでたら飛んで来たの」

「悪い、聞いた俺が馬鹿だった」

「酷いな。で、純お兄ちゃん知り合いなの？」

今までで一番いい思い出のない知り合いだな。

「小学……たぶん五年の時、一年間授業妨害してきた迷惑野郎だ。他人以上かも知れねえけど知り合い以下だ」

「……とりあえず最高ランクで知り合いにしておくね」
他人でいいんだけど。

「貴様、何故それを知っている？ それを知ってるのは純とか言う口の悪い小学生だけのはずだが。……それともアイツ、喋ったか？」

「馬鹿かお前、あれから何年たったと思ってるやがる」
三年と少しだぞ？

「純お兄ちゃんがお前って言った〜！」

光は何か驚くところがずれてるだろうが。

「貴様、純か!？」

「気付けよ!」

馬鹿だ、絶対に馬鹿だ。

置物とは言え、よく生徒会長なんかになれた。

「………大きくなったな」

「子供の成長を楽しむ爺婆かテメエは!？」

「すぐに殴る癖は改めろ」

あっさり受け止める癖に……。

「すぐに殴る相手はテメエだけだ」

「そうだった〜」

光、テメエはどっちの味方をするつもりだ？

「んで、今は置物何をやってんだ？」

「誰が置物だ」

「置物であるからこそお前だろ？」

「そうか、その置物に貴様は何度組み手をして負けた？」

「素人が鍛えている奴相手にかなうものか」

オマケに霊体の奴は身が軽いし。

………つか、浮くし。

「………思い出せば思い出すほどお前の方が圧倒的に有利じゃねえか」
「人間は不便利な体してるな」

お前らが便利すぎるんだ。

『みよーら、みよーら！ みゆーちゃんこんなにお菓子貰っちゃったでしゅ！』

「捨てて来い」

『みやああああ！ お菓子！』

……いきなり窓から投げ捨てるこたねえだろ。

「妙羅先輩！ お菓子が降ってきたでした！」

「違うよミリアちゃんー、妙羅先輩が投げ捨てたんだよー」

「ななっ！？ 何するでした！」

急に騒がしくなったな……。

「そいつらは？」

「卒業して無いくせして勝手に仕事についてくる馬鹿姉弟と+

+ って……。

「馬鹿姉弟とは何でした!？」

「成績優秀の十歳にして十年生の天才ですよー」

自分で言うなよ。

『ぶらすあるふあ？ なんでしゅかそれ？』

「……耳が大きいという事だ」

『褒め言葉でしゅね!』

褒め言葉なのか!？」

「よし、帰るぞ」

「ん、帰るのか。二度と来るなよ」

「やっぱり妙羅先輩って嫌われてるでした!」

「自業自得ってやつだねー、ミリアちゃん」

やっぱりってなんだ。分からないでもないが。

自業自得は思い切り納得してしまわないでもないが。

「こいつの二度と来るなはまた来いという意味だ」

「えーっ、ありえないでした!」

「あつたらびつくりー」

……こつちを見てくるな、こら。

「そういう意味だ。な？」

結局こっちに振るのかよ……。

「はぁ……、あぁ、それでいい」

だって、何て言っても意味ねえし、こいつ。

『最近、この家の子たちはおもちゃで遊びませんね』

『前からだぞ。特に一番上の……あの恐怖の……ええと、取り合えずアイツがおもちゃを欲しがってるところなんて見たことねえ！』

恐怖の、の続きが思いつかなかったんだね……。ラジコンさん。後、遊ばないね、から欲しがらないね、に話題がいきなりそれてるよ……。

ウサギ人形です。

今は真夜中、光ちゃんの枕元からこっそり抜け出しておもちゃ会議に参加してるの。

『ラジコンさん、何を言っているんです。子供とえばおもちゃ売り場で欲しいものを見つけないではありませんか。その時に母にねだるのです』

『んなこたねーぞ！ 光はウサギ人形が欲しいって一日中かーちゃんにねだってたんだぞ！』

そうなの？ こ、光栄です光ちゃん。

『岳もそーだぞー。おもちゃの銃をずっと欲しがってたぞー』

あ、こんばんは。ボールさん。

相変わらずぺっちゃんこ……。

『そうなのですか……。ああ、そういえば忍さんはラジコンカーさんを欲しがってましたねえ……』

『うお、マジで？ やったね！』

忍お姉ちゃん……もうちょっと女の子らしいものは欲しくなかったのかな？

あ、悪いとは言っていないよ！

『純ちゃん、何か欲しいもの無かったのかなあ、みんなで考えよう！ ほらほら！ 特にお年寄り！』

『ミニカーさん、まさかそこに私も入れてはいませんか？』

『違うの!?!』

ミニカーちゃん、ニンジンとサツマイモの甘煮さんが怒ってるよ!
『ううむ……あの子は昔っから一人でぶつぶつぶつと不気味な
子じゃったからの……』

がらがらお爺さん、今ですよ。

昨日は宙に向かって話すどころかパンチしてたし……。

光ちゃんも一緒に……いやあ! 光ちゃんが痛い子になっちゃっ
つ!

『今はみんなそんなことになってるよね!』

『うわあつ! 持ち主い! オレが助けてやる!』

『何からですか』

全くだよ。

『た、た、たけにゃんがおかしな子に!?!』

いたんだ……、ダーツさん。

『とりあえずみんな落ち着けーっ! 落ちつけたら落ち着けーっ
!』

『一番暴れてるのはテメエだ、おはじき』

みんな揃って飛び跳ねないで……。

『あつ、お前はルービツクキューブ!? めずらしー……』

この家にルービツクキューブがあつたの!?!

初めて知つた……。

『あ、そういえばありました、純さんが欲しがっていたもの
何!?!』

わ、流石お年寄……いえ、なんでもないです。ニンジンとサツ
マイモの甘煮さん、こっちをにらまないでください……。

『ルービツクキューブさんをはじめ、立体パズルの皆さんはほとん
ど純さんの欲しがつたものですよ』

『ん? そうなのか?』

口調がそう言ってるよ……。

私も光ちゃんに合わせようかな。

『おお！ そうじゃった、そうじゃった。それを言えばモデルガンだとかダーツだとか、的当てみたいな奴らは岳の欲しかった奴じゃぞ』

『そういえば……そう、っぽい？』

『じゃあ、光ちゃんはお人形とかぬいぐるみとかだね』

『一番女の子らしいな！』

『一番も何も女の子は二人しかいないよ。』

『………忍さんは？』

『………』

『忍お姉ちゃん……。』

『ここにいる人だと、ラジコンさんでしょ、おはじきちゃん達でしょ、ボールさんでしょ……。』

『一番守備範囲が広い奴だ！』

『何でもOK？』

『そんな感じですね』

『もしかして、忍お姉ちゃんの方が純お兄ちゃんよりも、謎？』

「よし、お父さん特性皿うどん！」

『これが？』

どっからどー見てもざるうどん……。

「しまった、間違えた。ざるうどんざる抜き！」

『……………』

ええと、とりあえず冷たくて、つゆにつけて食べるうどんだから
ざるうどんでもいいか。

忍でーす。

おかーさんが何やらママさんバレーボール？ みたいなもん行っ
てるから、おとーさんがお昼ご飯を作りました。

「私が作るって言ったのに〜」

光は何やらすねています。

「ねーちゃん、これ抑えとくの、すっげー疲れたんだぜ？」

「で？」

「……………いや、続きはねーんだけど……………」

岳は何やら疲れています。

純兄？ 純兄は何やら死神に絡まれています。妙羅とか言ったかな。

「早く食べよー」

おとーさんは一人悲しく席に着いています。

『いただきまーす』

「って言うって何でみんなまず氷を取るのかな!？」

『だって暑いんだもん』

しよーが無いんだもん

「……………野菜が無いね〜」

「ベランダからキュウリ採ってこっか？」

「ねーちゃん、念の為聞いておくけど、誰が？」

「おとーさんに決まってるじゃん!」

「んならいつか」

「決まってんのかって突っ込みは無し？」

「決まってんの!?!」

「あ、入った。」

「今決めた」

「決めるな!」

「じゃあ誰が取りに行くの。」

「出さんが負けよ、じゃーんけーんほい」

「えっ、ちょい待ち」

「あゝ、お父さん出してない。お父さんの負け」

「いてらー」

「行ってらっしゃーい。」

「うう」

「……………」

「急にニンジンとサツマイモの甘煮が食べたくなってきた」

『何で(ゝ)!!?』

「また押し入れに閉じ込められているであろうデカブツを思い出し

たらなんとなく。」

「純ー、ご飯出来てるぞ」

「ん。すぐ行く。という訳で帰れ」

「帰れ!?! ここはお父さんの家!」

「ああいや、親父に言った訳じゃなくてだな……………」

「じゃあ誰に……………」

「あれ、なんか上は修羅場？」

「キュウリが来るまでもうちよっとかかるかな。ずるずる。」

「もむもむもむもむ……………ももーもー、もむもー」

「あー、はいはい、光、口に物を入れて喋らない」

「何が言いたかったのか凄く気になるから。」

「むー。もむもむ……………」

「後岳ー、一回にそんなに取ったらつゆに入りきらないでしょーが」

小鉢パンパン。

「今それに悩んでんだ！」

んじゃしなかつたらいいのに。

「けほっ、けほっ」

「……光さん、まさか丸のみとかしてないよね？」

「けほけほけほけほ」

そのむせているのはした、という意味でございましょうか。

「ほいほい、ちよつとずつ食べよ？」

「うっ」

あ、おさまった？

「だから、あー……説明めんどくせえ……三回目だろ……」

「納得できないって！」

いつになったらきゅうりは食べられるのかなー。

150 バランバランな点数

「皆せーので行くよ、せーのーでっばっ

玲奈：七十一點

清：七十五點

しーちゃん：九十四點

桜：六十一點

なつくくん：六十點

純兄：九十五點

あたし：九十五點

忍でーす。

理科のテストが戻ってきたのでせーので見せ合いつこしてます。

「うわあん！ なつくくん」

「俺最下位……俺最下位……平均点も明らかにレベル高すぎだろおい？ うあああああ」

ちなみに平均点は七十點でした。

「ちよつと！ 何であたしが高崎何かに負けないといけないのよ！

？ 別に、悔しい訳じゃないからね！」

「嘘つけて、オレ様に負けて悔しいんだろほれ、言ってみ、ほれ」

えー、あー、うん。

「とう」

「ぎゃあああああ！ ちよつ、忍！？ 今日の方からゴキツって！？」

「久しぶりに出ました凶暴忍ちゃん！ 今日合気道で清君をやっつけるようです！」

あ、これ合気道なの？

やった本人が知らない。

「む……また忍に一点差で負けたっ！」

「しーちゃん殴るのやめーっ！」

そういうあたしが清の腕ひねってたら説得力無いけどさっ！

「忍と同点？ やべえ……」

「ちよつと純兄、どついう意味？」

「そのままの意味だ」

何であたしと同点だったらやばいの！？

「ちよちよちよつ、しーのーぶー！ 痛い！ 痛い！」

「男の子ならこれくらい我慢しなさい！」

「はあっ！？ 無理！」

全く、情けない。

「し、忍……あなた、意外と頭良かったのね！」

意外と……ええとー、褒められてるのかけなされてるのかわからない。

「褒め言葉として受け取っておけ」

「はい」

「……す、素直ね……」

そーお？

ええー、そーお？

「しーんくーん、大丈夫？」

「はう、やっぱり桜はめが「言わなきゃよかった」前にもあったぞこの展開！？」

そーお？

「だからー！ 僕はシジミじゃないの！ 紫波なの！」

「……じゃあ、頭の中が……シジミ並？」

「ひっどーい！」

シジミ並の頭って……初めて聞いたよ、そんなたとえ。

「紫波ー、何点だった？」

「だから僕はシジミ……あ、合ってた」

紫波……ちゃんと名前を呼ばれても突っ込むんだ。

「で、何点だったの、シジミ」

「シジミじゃなあい！」

「話が進まなあい！」

「ええっ!?! 僕のせい!?!」

さあ。

「んで結局何点だったの？」

「……………わ、笑わない？」

「点数による」

「言わない？」

嘘つかれるよりマシでしょ？

「じゃ、笑わない」

「じゃ、ってなに!?!? じゃって!?!?」

細かいことかどうかはともかく、細かいことは気にするな!

「そういう訳で、何点？」

「どろろ訳で!?!?」

こつこつ訳で。

「……………四十五点……………」

……………んと。

「大丈夫! 下には下が居るから!」

「フオローになって無あい!?!?」

そーお? (確信犯)

151 テストとテストと死神さん

「せーのーでっ！」

んあ？

昼寝してたのに……ねーちゃんの声で起きちゃった。

岳だあ。

「うあ、うあ、うあ！ 純兄に音楽で負けるとは!？」

「……英語、一点差……勝ったはいいけど、一点差かよ……」

んー、テストか？

「見せて見せて」

「光、いつの間に……」

今来たところだぞー？

「うわわ〜！ お姉ちゃんもつたいたいよいよこれ〜!」

「光、オレもオレも」

えーっと、あ〜、一番最後の楽譜写しのところ？

……確かにもつたいな〜！

だってな、だってな？

終止線が縦線になってるし、四分の四拍子の上の四が途中から書かれてねーし……。

a tempoが、a tempoになってるし……。

「良かったね〜、純お兄ちゃん〜。忍お姉ちゃんがうっかり者で〜」

「ああ、たしかに」

「良くないもん!」

んな事言っても。

「にーちゃん、オレ中学のテスト0点取る自信が出てきたぜ!」

『威張るな』

にやはは……。

「英語は〜?」

「見ーしてっ」

「うおう、読めねー。」

「よし、中学なったら先生に言っただけでやる！」

「日本にいて英語なんてどこで使うんだ！」

「外国人に道聞かれたってこう答えりゃいいんだ！」

「アイドロンノウ。」

「完璧。」

「あゝ、これ分かるよゝ！ プランでしょゝ！」

「惜しい！ それはプレイ！」

「むゝゝ……これは……セエン……？」

「シーンね！」

「ええーっ、だってseenだぜ？ セエンとしか読めねーじゃん！」

「ローマ字読みだけどさー。」

「これは分かるぜ！ 五だ！」

「数字だから！ 読めないとまずいから！」

「だってここしか読めねーし。」

「ずいぶんと騒がしいな」

「……妙羅……ほんつとにお前、置物なんだな」

「置物？」

「何だこれは」

「読めるか？ 和約してみ」

「……マークは映画を見たことが無い」

「おお、すげーっ！」

「死神って英語もできるんだ！」

「人の名前からして違うな」

「違うのかよ!？」

「マイクは映画を二度見たことがある、だ」

「で、貴様は何がしたいのだ？」

「自分より上の奴をからかうって面白いもんだぜ」

「……これはからかわれているのか？」

「激しくビミョーなとこだな。」

「そうだな、馬鹿にしているということにしておく」

「純、表に出る」

あ、怒った。

「めんどくせえから今度な」

にーちゃんの今度ってぜってーこねーぞ！

先にめんどくせえがついたときは特に！

「妙羅先輩っ！ 大変でした！ あ、未理阿ちゃんでした！」

わざわざ言わなくていいから……。

「霧瑠依くんでしたー。妙羅先輩ー、大変大変ー」

「貴様等はいつたいつ学校に行っている？」

おめーこそ。

『そこんどこどうでもいいのでしゅ！ みよーら、お仕事でしゅよ
』！

仕事と聞いてめんどくさそうな表情になるあたり、にーちゃんの
同類なのか？

「何だ」

『んとでしゅねー、ユーレイの保護でしゅ』

「保護？ 成仏させるではなくてか？」

『んとでしゅね、どこかの誰かさんのうっかりミスで死なせちゃっ
た人でしゅから』

おいおいおいおいおいおい！？

うっかりミスって！？ うっかりミスで死なせちゃったとか言わ
なかつたか！？

「そのどこかの誰かさんを調べておけ」

『はいでしゅ！』

……耳で走ってるのに、なあんであんなに速いんだろうなあ……。

「そういう訳で、仕事が入った」

「とつとと行って来い。戻ってこなくていいぞ」

「はは」

今の笑いってなんだろ……。

「忍お姉ちゃん、落ち込まない、落ち込まない。次勝てばいいでしょ」

「……うう」

ねーちゃん……静かだと思ったら落ち込んでたのか。

151 テストとテストと死神さん（後書き）

日本にいて、どこで英語なんて使うんだ！
誰もが一度、思ったことがあるはず（笑）

152 ジャンケン

「……………うあ」

「あら？ 高山、どうしたの？」

「雨、さっきまで小降りだったのに……………」

「……………ああ、傘忘れたの」

「違う。」

「純だ。」

「忍の奴、いつの間にか傘盗りやがった」

「折り畳み傘、鞆に入れてたはずなのに。」

「居残らなきゃよかった……………」

「なっさけないわねー」

「そういう鈴木は何でここに居るんだ」

「べ、別に傘忘れたわけじゃないわよ!？」

「……………へえ。」

「テメエそれだから、ダウト弱えんだよ」

今日の昼休み、清のトランプでやってたんだけど……………こいつ、演技力の欠片もねえし分かりやすいったらありゃしない。

忍と桜が強かったな。

「悪かったわねっ!」

「誰も悪いとは言ってねえよ」

「こいつ、ばばぬきも弱えんだろうな。」

「やるか、ダウト。雨がやむまで暇だし……………」

「いいわよっ、やってやろうじゃない! ま、負けても知らないわ

よ……………」

絶対自信ねえな、こいつ。

「でも。二人じゃつまんねえな」

「そもそもアンタ、トランプ持ってるの?」

「まさか」

「……元からダウトなんてできないじゃないの……」
やる気もなかったけどな。

「ねえ高山、じゃんけんしない？ 別にアンタが弱いとか思ってるわけじゃないわよ？」

思ってたんだな。

「……出さ者負けのジッケッタ」

俺はパー、鈴木はグー。

「ズルいわよっ!？」

「知ったことか」

「知つときなさいよ!」

嫌だと言つたらどうなんだ？

「もっかいよ! ジャン、ケン、ポン!」

「俺はジャンケンホイを推する」

「知らないわよそんなこと!」

「知つとけよ」

「嫌よ!」

「……」

ああ、会話が続かなくなるんだな。

「あ、悪い。お邪魔だった？ すぐ出るから……」

「邪魔じゃないわよっ!？ 余計な事言わなくていいんだから!」

「え、あ、ごめん……?」

余計?

「村田、テメエバスケ部？」

「おう、それがどした？」

「続きがあるとも思ってたか？」

「……やっぱお前、高山と兄妹だよなあ」

……俺も高山なんだけど。

「ほらっ! さっさと行かないと練習時間減るわよっ!」

「タオルだけ取ったら出るって」

「高山っ! ジャンケンの続きよ! 一回もまともやってないじ

やない！」

二度しかやってねえし。

「ジャンケンホイ」

「速いわよっ！」

「テメエが遅いだけだろ」

「何よっ！」

叫ぶの好きだな。

「行くわよ！ 今度はちゃんとよ？ ジャン、ケン、ポン！」

俺はチヨキ、鈴木はグー？

ぺん

「待て、いつからたたいて・かぶってジャンケンポンになった？」

「不意打ちだったら普通に叩けるのね……」

「ん？ カウンターを打つても良かったとでも？」

「よくないわよっ！」

全く痛くなさそうだったから別にいいかと思っただけ……。

よく考えたら女子に叩かれるのって微妙にイラつく気がする。

「ジャン、ケン、ホイ」

パシッ

「あ、防いだわねっ！？」

「防がなかったら『かぶって』の部分が無くなるだろうが？」

「何よっ！ 二度連続で負けたくせに！」

……関係あるのか？

「あ、雨やんだか？」

「やんでないわよ。ちよつとパラついてる程度だけど」

「それくらいなら大丈夫だ。また降ってくる前に帰る」

出た途端降ってきたら最悪だけど……。

「そう、ならあたしも帰るわ。別にアンタが帰るからじゃないわよ

！？」

「その『別に』は口癖か？」

「そんなに言っていないわよ！」

153 短冊に願いを込めて？

しとしとしとしと

「……雨だね」

「雨だ」

「雨だね」

「他に言う事はねえのか」
だつてえ。

忍でーす。

七夕なのに星が見れません。

「せつかく短冊書いたのに」

「何だ、その量……」

パツと見二十枚超してるけど？

「学校で書いたの」

「答えになってねーし」

織姫と彦星見たかった！。

「純兄、天気変えられるような霊とかいないの？」

「居る訳ねえだろ」

どーかな、知らないだけで居たりして。

「光、短冊見せて」

星の方はあきらめた！

「どれがいい？」

「どれでもいいよ」

んーと？

『欲しい！』

何が！？

「これ学校の人の奴もちょっと混ぜてるよ」

「これ誰？」

「佐紀ちゃんだよ」

誰。

「これは？」

『食べたい！』

何を！？

つ、次！

『行きたい！』

どこに！？

「正確に書いてる奴はいないの！？」

「え〜……あ〜、これは細かく書いてあるよ〜」

どれどれ？

『週刊フォア・ア・ウィーク三十五号の十ページから十五ページを独占して乗りたい！』

「細かすぎるよ！」

て、言うか週間フォア・ア・ウィークって……。

週刊一週間？

「普通のは無いの？」

「注文が多いな〜。これは？」

あまり期待はしてないよ。

『お花屋さんになりたい』

うわお。なんだかすごく普通。

「あ〜、 屋さんになりたいシリーズこれだけあるよ〜」

四分の一くらいこれじゃん。

ケーキ屋、パン屋、本屋、八百屋……あれ、なんか珍しい気がするものも。

サッカー屋。

……………え。

「サッカー屋って何！？」

「サッカーを売るんじゃないかな〜」

どうやって！？

「サッカーボールを売るんじゃないかな〜」

言い直した……。

「サッカーグッズを売るとか？」
「それだけで儲かるのかな……。」

「あゝ、こんなのもあったよ。」

『パズルマスターに俺はなる！』
「頑張ってください。」

「純兄、会ってあげたら？ この子」

「嫌だ。面倒」

「バツサリと」

「パズル好きなくせに。」

「これ……何かすげー」

「どれ？」

『一寸法師になりたい』

「……………マ キノコでも探ってくればいいのかな？」

「こんなのもあるよ〜！」

『楽しかったあのころに戻りたい』

「君はいくつですか。」

『最近すっかり老けちゃったよ』

「だから、君はいくつですか。」

『十五人目には？ラれたくない！』

「何て!？」

「……………真面目に書いてるやついねーし」

「これ書いた子は真面目だって言ってたよ〜?」

『織姫さん、オレと付き合ってください!』

「モロふざけてるだろ!!!」

「織姫って美人なのかな? やっぱり。」

「すつごく真剣な顔してたよ〜?」

「……………すげー」

「すげー。」

「ん、何を応援しよう。」

……織姫を取られないように頑張ってる、彦星。

「お供仕りまする!」

「仕らなくて結構です」

「なっ!?!」

いや、なっ!?! ってあたしが言いたかったことなんだけどね? 忍です。

黒髪ポニーテールな一寸法師? つぽいモノが話しかけてきた。

目測三センチ?

「そ、そんなっ!?! 拙者にいつたいどうしろと申されるのでござるか!?!」

「知らないよそんなこと」

「っ、冷たい……」

いやだつて……ねえ?

「一生懸命川を上ってきたというのに!」

「……ほー」

これ、川じゃなくて、ドブね。

「お椀の船に箸の櫂は?」

「今時手漕ぎで来いと!?! ふ、古い考えでござるな。もしや今は日常でも手漕ぎの船を使うのが常識だとも言うのでござるか」

侍な格好して何を言うか。

「ええと、質問変えるね。何でアンタ濡れてんの?」

しかもあたしが最初に見たとき、ドブからよいしょって出てこなかつた?

「ふっ、水底を歩くのもなかなか大変でござった」

「……今時、水底を歩くのが流行ってるの?」

「む……拙者だつてモーターボートを使ったか?……」

モーターボート!? モーターボートって言った!?!

「しかし拙者は重くて……」

「何言つてんの？　こんな小っこいのにもーターボート乗れないほど重いわけが……重お！？」

え、こいつの襟首つかんで持ち上げようとしたら、逆に引っ張られたんだけど！？」

「ほら！　ほら！　拙者は一七法師、その名の通り体重は一七でござるー！」

はあっ！？

「こうしてる間にも少しずつ地面がへこんで……」

一寸法師、もとい一七法師が片足を上げると……。

コンクリートだというのに足跡がくつきり。

「しばらくすれば都市伝説になれるんじゃない？　いちいち足跡つくんならそのうち誰かが見つけるかもしれないし」

「おお！　拙者の伝説でござるか！？」

小さすぎて誰にも気づかれないかもしれないけどねー。

とは、言わないであげよう。

「ところで、最初の『お供仕りまする』って、何」

「一辺言ってみたかったのどござる」

ほお。

「殴つてもよろしいでしょうか」

「ご勘弁を」

あら、意外と腰抜け？

「んで、アンタは何しに来たの」

「爺婆に頼まれて八つ橋を買いに……」

八つ橋？　ってあの八つ橋？

京都のお土産のお菓子？

「……どっから来たの」

「大阪湾から上り始めたでござる」

「いったいどーやったら大阪湾からここまでたどり着くのでござるでしょうか？」

「大阪湾から淀川を上って……京都府に入ったあたりでなんと三つ

に川が分かれていたでござる!」

はいはい、三川合流地点?

「迷って迷って泳ぐ手を止めた隙にすっかり魚に食べられそうになつて……」

泳ぐ? 歩いたって言うてなかった?

「必死に逃げたらここにいたでござる!」

「なんでだよ!」

「ええっ!?!? こゝ、ここは何処でござるか!?!?」

「水ヶ丘町ですが何か」

分かるのかな。

「な、なんでえっ!?!?」

分かるんだ?

「きよ、京都はどつちでござるか!?!?」

ええー!?!?!?!?! 西でしょ?

「あつち」

「分かったでござる!」

おお、走り出した。

足跡凄い。

んでもって、

「何で東に行くかなあ? 近道?」

「ここは何処でござるかーっ!?!?!」

……違つ、単にすっごい方向音痴なんだ。

「推古、舒明、皇極、孝徳、斉明……えーっ……クソッ次何!？」
「天智」

「それだあっ!」
忍です。

どーゆー訳か岳の『天皇言えるかな』に付き合わされています。
「覚えてどーすんの、これ」

「せんせの前で修也と言ってく!」
「で?」

「多く覚えてた方が勝ち!」

……それだけ?

「修也には負けねーっ!」

おおー、アニメか何かだったら後ろで火がメラメラ燃えてそう。

「という訳で、推古、舒明、皇極、孝徳、斉明、天智、弘文、天武」
ほんつとに、勝負以外にどこで使うんだろ……。

「修也つて言っつと……前に純兄とナンプしてた子?」

「持統、文武、元明……あぁもう! 集中してたのに!」

「ごめん」

「許す!」

うわ、あっさり。

「表貸してくれてるのねーちゃんだし」

うむ、感謝せよ。

……流石にこれは声に出せない。

「ええーっつと、次は……元正で、聖武で……えーっつと」
「孝謙」

「それ!」

よく覚えたなー。いや、完全に覚えてるわけじゃないけど。

「ヘルクレス、牛飼い、竜、獵犬」

「……光は何やってるの、星座早見盤なんか持って」
「星座覚えるの」

……何か覚えるのが流行ってるのかな。

「淳仁」「大熊」「称徳」「子獅子」「光仁」「獅子」
頭眠くなってくる……。

「よ、忍」

「あ、なつくん。また不法侵入した？」

「いんや、今日は珍しく玄関から」

自分で珍しくって言った……。

「純兄知らない？」

「何か変な小つこくて重いのに絡まれてる」

……一七法師？ まだ居たの？ 八つ橋どした？

「んで、俺は打ち出の小槌を探して旅をだな……。引かんとって」
だつてえ。

「打ち出の小槌ならその神社で売ってたよ」

「マジ？」

「マジ」。小つちゃくて可愛いの」

キーホルダーか。本物かと思ってびっくりしちゃったよ。

「ところで、岳は何やってんだ？」

「歴代天皇覚えるんだって」

「天皇？ 何でまた……あー、なんとなく？ やっぱ」

おー、流石、よく分かってるねー。

「でも違う」

「嘘っ!？」

何故にそこまで驚かれにやならんのだ。

「俺は元素覚えるのなんとなくだったぜ？」

「誰もそんなこた聞いてない」

って言うか、元素何て皆覚えてるじゃん。理科で、カルシウムま
でとちよつと。

「元素、全部覚えるの結構大変だったんだけど」

「ぜんぶ!?!? 百ちよつと!?!?」

「そーそー」

疑いの眼差し。

「……水素ヘリウムリチウムベリリウムホウ素炭素窒素酸素フッ素
ネオン……」

証明?

「……マンガン鉄、コバルトニッケル銅亜鉛、ガリウムゲルマニウ
ムヒ素、セレン、臭素……」

長いなー。

数えてたら、これでまだ三十五?

「……ハフニウム、タンタルタングステンレニウムオスミウム……」
早口なのに、長いなー。

「フェルミウムメンデレビウムノーベリウムローレンシウム……」

ローレン氏、生む? すごいねー。

うう、まだ終わらない!。数えるのは七十個目で止めた。

「……ウンウンオクチウム! ぷはっ、息キツイ……」

「じゃ、やらなかったら良かったのに」

「忍が疑うから」

あ、あたしのせいにしたっ!

「あはははは」

何で笑ったの、この人。

大股で一步後ずさり。

「いや、おまーな……」

何か怖くて。

156 屋根、もとい屋上

「じゅーん！　じゅーん！」

六月？

「純！」

違うよね、やっぱ。

忍でーす。

「何？」

「ちよつとこれ引つ張り上げて！」

はしご？　しかもでかつ。

「えー」

「えーじゃなくてだな！」

「いくら？」

いくらつて。

「金とるのかよー！」

「いや、小遣い」

「同じだあつ！」

おとーさんよく叫ぶなあ。

明日声かれてても知らないよ？

お客さんの相手できなくなっても知らないよ？

「いいからこれ引つ張り上げろつて！」

「いくら？」

何か無限ループしそう。

「だあもう！　十円！」

あ、あっさり折れた。

「ん」

あ、十円で納得した。

まあ、はしご引つ張り上げるだけだしね。

無いより良いじゃん思考？

「買ったてか」

「純兄純兄、このビニール破っていいよね」

「そりゃいいだろ。出さなきゃ使えねえし」

「ビニールを思いつきりびりびりって破くの、何か気持ち良くない？」

「わゝ、大つきいゝ」

「何これ何これ！ すっごーい！」

「……どーん」

美代さん、何故に効果音？

「うおっ、でっけー」

「あれ、岳何持ってるの？」

「スノコ。父さんが持ってけて人使いが荒いなあ。」

「よしっ、屋上に上ろう！」

おとーさん上るの早っ。

さっきまで庭にいたのに。

「……アホと煙は天のぼる」

「純、テンション下げようような事言わない」

「ん？ 前に自分で言ってた事じゃねえか」

「……いや、まあ言っただけど……」

溜息吐かないの。

「……あと、屋上というより……屋根じゃない？」

「ホントだねゝ、みーちゃんの言うとおりだゝ」

「ねえねえっ！ 上るなら早く上ろうよ、おじちゃんっ！」

肩落とさないの。

「父さん、このスノコどーすんの？」

「屋上は滑るから、敷いとくんだよ」

あくまで屋上って言うんだね……。

「……押し入れスノコを？」

「何考えてんの」

「大丈夫だ！……………多分」

最後にとてつもなく不安になる一言が付け加えられてた気がするんだけど。

「みよーら！ これ美味しいでしゅよー！」

「ホントだー」

「塩かけたらもつと美味しいでした！」

「だ・か・ら、勝手にについて来るなど言っている！」

あれ、なんか今一瞬にしてプランターのキュウリが五本くらい消えたような。

んでもって向こうの方に子供×2と耳がドでかいチビがぶっ飛んでるような。

さらに何か和服の男がそれを地面にたたき落としてるような。

……………気にしない方向で。

「おーい、純、具合でも悪いのか？」

「ある意味……………。俺部屋に戻る」

「どういう意味？ ……具合悪いなら寝とけよー」

「うん……………」

ぜったいたい原因妙羅だよな？

「じゅ、純が素直だ……………！」

「父さん感動するレベルが低い」

「純お兄ちゃんってたいてい素直だよな〜」

そーかなー？

「ううっ。気を取り直してっ！ 屋上上るぞー！」

「……………気を落としてたの……………ひーちゃん父上、だけ」

「うんうんー！」

「ううっ！」

いちいち泣かない！

ってか、泣けてない。

「うおーっ！ たっけーっ！」

「そりゃそーだよ岳くん！ 屋上だもん！」

「オメーも大概テンション上がってんじゃねーか！」

「当たり前でしょ！」

「うーみーはーひろいーなー……もとい。」

「そーらーはーひろいーなーおーっきーいなー。」

何か普段建物に遮られてるだけに余計大つきく見える。

あたしん家、山の途中にあるしねー。

回り家ばっかだけど、しっかり斜面ある。下校時キツイ。

「みーちゃんも上がっておいでよ〜」

ふるふるふる

「高所恐怖症〜？」

こくっ

って、喋ろうよ。

「ベランダは大丈夫なの〜？」

「……………！」

ありゃ、一瞬で中に入っちゃった。

気付こうよ！ ベランダってこと。

「やっほーっ！」

「恥ずかしいからやめなさい」

「うん、ウチもやってから気付いた」

顔赤いし。やめときゃいいのに……。

「おー、何々？ 屋根上ってんの？」

「なつくんも来る？ 止めとく？ はし〜怖い？」

「うん、怖え」

あら、あっさりと言ったね。

なつくんね、小つちゃい頃にはし〜で遊んでて、足滑らせて落っ

こちっちゃったの。

それ以降はし〜恐怖症だって。

高所恐怖症じゃないんだー。

「こっちウチン家だよ！ 行こ！」

「お〜！」

行く、というか、上ってるし。

なっくん家の方が斜面の高いところにあるから……。

「ここで天体観測とかしたいな！」

「すぐ飽きる癖に」

「うっ」

あれ、図星？

「初プールだー」

「そんなテンション低い声で言われても……」

「だーってさ、プールって着替え面倒じゃん？ 入ってる間はいいけど……」

オマケに、しーちゃんも桜も見学でしょ？

んでもってその理由は水着忘れでしょ？

うう……あたしも忘れてくれればよかったかも。でも成績下がったりなんかしたらやだしな。

「何でこんなに見学が多いのよっ！」

「玲奈さん、そこは怒っても仕方ありません。次からは忘れずに水着を忘れるようにしましょう」

「美香みかっ！」

「冗談です」

冗談の分かりにくい人だねっ！

隅の方で体育座りして、さらにこんなこと言うから何か怖い。

「玲奈、友達できたんだ」

「余計なお世話よっ！」

「お世話をする気はさらさらありません」

「誰よっ！」

さあ？

しいて言うならー 法師？

「玲奈さん、忍さん、皆さんすでにプールに入っています」

『えっ』

いつの間？

「冗談です」

『ややこしいわっ！』

「とというのが冗談です」

『ややこしいというに!』

ふふ、とか言って笑わないでほしい……。

「ほらーっ、そこ二人、早く入りなさい!」

ああもう、中森がなかもりややこしいことするからあゝ!

……………っつて、

『温っ』

まだ二時間目ですよー?

太陽さん、もーちよっと遠慮していーですよー。

遠慮されすぎたら寒くなるし、前言撤回。

「はい、じゃあウオーキングー。あっちまで。よーいどん!」
競争じゃないのに。

「あっちまで行ったらランニングで戻ってきてよ!」
水の中でどう走れと!?

「と、とりあえず行きより早く足を動かせばいいのかしら?」

「そっかー、じゃあそれでいいんじゃない?」

「……………適当に返してる?」

「うん」

ほらほら、怒らない怒らない。

「はい、じゃあ、水に慣れるために十回潜って! いーっち」
潜りました。

息を思いつきり吐いて、うっかり鼻から水を吸い込んでしまいました。

「げほげほげほげほげほげほっ」

「ちよっ、ちよっと!? 忍!?? 心配はしてないわよっ?」

じゃあ何で声かけてきたのかな!?

ふうー、落ち着いた。

「さーんっ」

うあ、二回目潜り損ねた。

『ぼこぼこ……っ、ここは何処でござるか……』

「ぶはっ」

さて、なあってまた一七法師がこんなところに？

「せ、先生！ 何か底に変な虫がいますう！」

「みずでちゃつちやつと追い出しといて」

一七法師、虫扱いされちゃったよ。

「沈んでるんです！ しかも底に埋まってるの！」

あれ、そーだっけ。

潜り。

探し。

見つけ？

………穴、開いてるんですけど。

水、抜けてるんですけど。

ってか、そもそも人間……いや小っこいけど。って、浮くよね！

? 重くても！

お相撲さんでも！

一七法師って………どーなってるんだろ。

「先生！ 三階の廊下の天井の穴から、水が……」

「はあっ!？」

「本当です！」

今年はプール授業、無しかもしれない。

………あ、九月もあるか………。

158 宿題が出来ませぬ

「純兄、大変な事に気付いてしまった」

「あ？」

「明日までの数学の宿題やってない！」

「……で？」

だから、やってないんだってば。

やんなきゃいけないんだってば。

だって、いつものB5プリントじゃなくて、今回はB4プリントなんだよ！？」

忍でーす。

ええと、さっきの続きだけど。

数学は明日一時間目なんだよ！

「朝休みだけじゃ終わりそうにないよ！ と言いたかったんだけど」

「あそ」

「あっさり流すなあ……」

「帰ってからやりやいいだろ」

「持って帰ってまた明日持ってくるのめんどくさあい」

あ、黙られた。

あ、あっさり教室から出てった。

「つてちよつとお！」

「学校でやりやいいだろ」

「そりやま、そうなんだけど」

「ん。じゃあ俺は帰る」

薄情だなあー、もう。

ちやつちやつとやって、帰る。雨降りそうだし。

傘は持つてるけど、折りたたみだから小っちゃいし。

「んーで、えーっと……うわ、こつ見ると問題数多く見える。折ろ」
折った所で何も変わらないけど。

『えー、誰か居るじゃん』

『先輩は？ 先輩呼んでこようよ……』

『ダメだよ、練習中だから怒られちゃうよ』

はて、なにやら廊下そとが騒がしいのですが。

「どつたのー。あ、ここ使う？」

銀色の楽器持ったのが二人と、黒い楽器持ったのが一人。

それぞれ手に持つてる楽譜は分かるけど、鉄の塊は何だろう。

「え、あつ、はい！」

ふむ、場所間違っただけ。

そっかー、吹奏楽部は教室使うのか。

「それフルート？」

「はい」

本物見たのは二回目だなー。一年で部活体験した時、見事に音が鳴らなかつた。

「そっちの黒いの何？ クラリネット？」

プリント片付けたはいいけど、どこでやるのかなあ。

「オーボエですっ！！」

うわう、何か、何か凄い大声で怒鳴られた。

「えと、何かごめん」

「あ、いえ、いいですよ」

上靴の色からして一年かな？ 凄いなー、楽器間違えられただけ

でこんなに怒るんだ。

「んじゃ、そゆ事で〜」

『どゆ事っ！？』

仲いいなあ。ツツコミが凄いピツタリ揃ってる。

「どゆ事が分かんないけどバイバイ、頑張ってるね」

何処でやる、宿題。

『な、何か良く分からないけどいい人？ だったね』

『良かったー、ここに居たのがあの人で』

『譜面台立てようよ、早く練習しよう？』

愛想は振りまいてて損はしない、等。

譜面台ってアレだよ、楽譜置くヤツだよ。

何処に持ってたの？ 四次元ポケット？ 建てようって事はあの鉄の塊かな？

「それより、机、机」

……うーん。

余使いたくないけど、最終手段。

あ、違う。最終手段は持って帰る。という訳で最終一歩手前手段。

「居るー？」

「わっ！ しののん！？ 自分から来てくれたの!？」

オカルト部部室。

またの名をA教室、若しくは三年五組？

一番最後は聞いた事ないけど。

「いや、机貸して……と、言うつもりだったんだけど……。何したの？」

教室中霊で溢れかえっておりますが。

「あ……、しののんさん、こんにちは」

「何してたかって言うよねー」一番の常識人に聞くよ！ えっちゃん、何したの、これ「ひどっ!？」

耳が痛い！ 叫ぶな！

「じ、実はですね……。とても言いにくいのですが……」
何？

「……何もしていません！」

「何処が言いにくいの!？」

もったいぶる必要無いよね!？ 皆無だよね!？

「あ、ども、来てたんっすか、しののんさん」

「タツノオトシゴ」

「……オレの名前、竜悟たつごですから。そこんとこよろしく」

マコちゃんと古賀は何処に居るのかな。

「無視されたあつ!」

んで、この大量の霊どうしよう。ぶつかるし、痛いし、邪魔……。

「それは何かの踊りか?」

「違うからっ! 霊がぶつかって来……あ」

『霊っ!?!』

しまった……。

とりあえず、ここは逃げる。

『待てっ!』

ああもう結局いつものパターン?

とりあえず、近くに死神居たりしないかな? あの霊たち払って欲しい。

「天、斬、剣! は、居ないか。ええと……妙羅! 未理阿! 霧

溜依!」

『呼んだ?』

「って本当に出たああああ!」

『みゅみゅっ、みゅーちゃんだけ呼ばれてないのでしゅよ!?!』

ごめんなさい。貴方の存在忘れてました。

「妹、私の名前を呼び捨てにするとは何事だ?」

「純兄は何でいいの!?!」

「純は……む、そう言えば年下の癖に生意気だな」

何か違う方向に話が進んでる気が。

「……しいねえ、何?」

「あ、それぞれ。あっちの教室に霊が大量に居るから成仏……って
うわ!?!」

何か、背中にのしかかられたような。

「しののん、誰と話してるの!?!」

「ちよつと超音波は黙ってて」

「し、しののんまでが超音波って!」

つい本音が。

「あれか。放つて置いて明日には成仏しているから気にするな」

「何で！？ 何で成仏するの！？」

「じゃじゃーん！ 幽霊ホイホイでした！」

……ええと、パクリだよな、それ？

「斬のクスリの有効活用ー」

今度はどんな毒作クスリったの……。

って、成仏が明日って事は？

最終手段、家でやるしかなくなったあつ！

外に出た。

雨が降ってた。

……うあー。

159 李も桃も桃のうち

『すももももももものうち』

「……んで？」

すもも美味しいなーって言いたかったんだけど。

「美味しいね〜、お姉ちゃん〜」

「うん」

光は分かっている！

「んー……。わっかんねーなー。すももって皮と種の周り酸っぱくね？」

『それも含めて美味しいんじゃないか』

「ハモって言われても……」

狙ったわけじゃないもん。

「なー、にーちゃんどー思……って、いねーし！」

「純兄なら妙羅に拉致られたよ」

「拉致！？ 何で!？」

年下のくせに呼び捨てにするのは生意気だーとか、何とかかんとか？

確かそんな理由。

……妙羅って何歳なんだろ。三十路超えたおっさんだったりして。

「岳お兄ちゃんは何ですもも嫌いなのです？」

「んあ？ だつて酸っぱいし。小っちゃいし。オレは断然桃派だ！」

桃も美味しいよね。

「すももももももものうちだよ〜」

「もが一つ多かったぞ!？」

「違うよ〜。二つだよ〜」

「分かかってやったのかよ!！」

何故に。

「……そーいやねーちゃん、それ、今取ったヤツ。何個目？」

そんなに食べてないよ？

んーつと……

「十個目くらいかなっ」

「二けたあ！？」

美味しいんだもん。

「お姉ちゃんずるい〜！ 私まだ九子だよ〜！？」

「何がまだだっ！？」

「大じよーぶ、まだあるよ」

「もう食わんでいいだろがっ！」

『え〜』

食べたりなあい。

「えーじゃなくて！」

「すももは別腹という言葉を知らんのか〜！」

「知るか！」

ええっ！？

「何で二人してんな驚いた顔になんだよ！？」

『なんとなく（〜）』

「リアクションまでなんとなくするなあ！」

喉潰れるよ？

「岳〜、外まで声響いてるわよ〜」

お帰りー。

「あ、母さん、ちよつとさー、ねーちゃんと光に何か言っっちゃってくれよ。もうすもも十九個……あっ、今に十個になった。が、食われちゃってんだぜ？」

「ええええええ〜っ！？」

岳の声よりおかーさんの声の方が大きい気がする。

「忍〜、光〜」

『……？』

「これから十日間すもも無し〜！」

『え〜っ！』

岳、『どーだ！』みたいな顔でこっち見ないの。

後でげんこつ十発ね

「せめて五日〜」

「だめ〜」

半分になってるし。

「六日！」

「だあめ〜」

「七日〜」

「だ・あ・め〜」

「八日！」

「め〜」

「九日〜」

「ふ〜ん〜」

「十日！ つて最初に戻ってんじゃんか！」

むう……これなら。

「あ〜、盗み食いしたら倍々に増やしていくよ〜？」

『あうっ！〜？』

「つて考えてたのかよ！」

当たり前でしょうが！

あう〜、すもも〜。

160 身長身長！ 後一応着衣水泳

「暑い！」

「……………」

「暑い！」

「……………」

「暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い……修也デメエいきなり何すんだ
！」

「五月蠅えから叩いた。で？」

いや、で？ とか言われても困るからな！？

岳だ！。

時は五時間目、場所はプール！

着てるものとは言うとは……。

冬物長袖トレーナー！。

冬物長ズボン、の、下に水着。

どー考えても暑くなるだろこりゃ！

着衣水泳何て考えたのは誰だ！

いや、なんですんのかは分かってつけどな？ プール入るまでが

無駄に暑いだろ！？

「とにかく、オレも暑いつて言いたかったんだよ！」

「言つてたじゃねえか」

「足りん！」

「……先生、このうっせえ馬鹿突き落としていい？」

「許可「すんな！」当たり前だ」

ややこしい事言うな！

いや、オレが遮ったんだけど。

「そーそー、せんせー」

「ん？」

「オレさー、ちよっと不満な事あんだよね」

「……………」

「……おーい、ほっとく気かー。どこへ行くー。」

生徒の話を親身になって聞くのがせんせの役割じゃねーのか！
別に大したことじゃなかったけどさあ。

「不満なら俺にもある」

「ほー。んじゃせーのって言ってみるか？」

「ああ。せーの」

『何でオレ（俺）がお前と背が同じなんだよっ！？』

おお、ぴったり一致。

「何かばっかみてーな事言ってるなー」

『やかましい！』

何で翔はオレ等より背え高えんだよ！

大体四月の身体測定ん時何センチだったって！？ 158！？

「テムエ小六男子の平均身長知ってるのか！？ 145だぜ！ 1

45・05！ なのにテムーなにあっさり中一男子の平均身長まで

抜いてんだよ！？」

ちなみに中一男子の平均は153だったはず。

「何でそんなに詳しいんだよ……………」

「そこは突っ込むところじゃない！」

「いやどう考えても突っ込むところだろ？」

「知るかっ！」

「ちよつとちよつと、二人とも、そんなこと……………」

「しかも女子にまで身長負けてね？」

「……………今の時期は女子の方が身長は高いものだと保険で習った
だろ」

「そりゃー習ったけどさ。」

「何かさ、ちよつと悔しくね？」

「大丈夫だよ！ 中学生になったら大っきくなるよ！」

「慰められてるし……………」。

「修也！」

「オレは抜きか!？」

「うんっ! 修也抜かしちゃだめ!」

「いやいやいやいやおかしいだろ!？」

「そもそもスタートライン同じだから!」

「……うん。身長伸ばさないで!」

「無茶言っなあああああ!」

あれ、そーいやずつと言いつつけど、いつプール入んの?

「そこ四人ー! 早く入れー!」

あ、オレ等が遅れてるだけね。

ジャッポーン! ……つて、行きたかったのに。

「何お前等オレの服掴んでんの?」

『危ないし』

「何だ!？ お前等真面目ちゃんか!？ 真面目ちゃんなのか!？」

『お前が不真面目すぎるんだ!』

うあ、先生込みで怒鳴られた。

「ちーがーうー！ やからな！ ここがこーなってあーなってこーうなんねん！」

「こーなってあーなってどうなるんだよ！？」

「逆切れすなや！ ええか！ もっかいやんで！」

……桜が、壊れた。

「……桜って、関西出身なのか？」

「んー、あ、そう言えば保育園の時に引越して来たんだよ！ 最初はモロ関西弁だったんだ」

「シジミと保育園同じなんだ」

「うんっ……って、僕はシジミじゃなあい！」
忍でーす。

ある日、ある時、ある学校で。桜が清を教育し始めました。
数学の、一年の所からやらせてたりしちゃってる。

「一次方程式位解きいな！」

「無茶言っいな！」

「言っくらんわアホ！」

……………。

『やっぱ、壊れてるよなあ』
うんうん。

「あ、あれは素なのかしら？」

「極度に興奮したらこうなるとか？」

「おー、漫画か何かのキャラに居そう。」

「しののん！ じゅんじゅん！ お仕事の時間でえいす！」
知らんがな。

「ってか、部長！ そこ出入り禁止のベランダ！」

「忍、逃げるぞ」

「アイアイサー」

ダツシユ

「行けっ！ ハルちゃん！」

「俺はポ モンか！」

とか言っつてしつかりドアから入ってくるくせにい！

は、挟み撃ち……。

「よし、強行突破の方向で」

「アイアイサー」

と、言う訳でマコちゃんちよつと蹴るよー。

「……運動神経悪いとか思ってる？」

「うん」

見た目と性格からなんとなく。

「情報収集力、零」

何課の試験ですか、先生。

とか思ってる間に……足払われて押し倒されちゃった。

「ごめーん純兄、捕まった」

「俺に被害が及ばないなら何も問題ねえから心配するな」

兄として酷いとおもいまーす。

「変態眼鏡、忍から離れなさい！」

「……へ？ あ」

よし、脱出。玲奈ナイスだ！

「もあーっ！」

あ、桜……怒ってる？

「五月蠅いで！ 清が集中でけへんやんか！」

こっちに！？

「いやー、オレが集中できねーのは部活行ってねーからうああああ
あ大会近いのに休むからせめて後輩に殺されるううううう！ と
いう恐怖のせ……あ、いえ、嘘です。ごめんなさい桜様」

な、情けない……。

「えっ、ええと……な、何かごめんねっ！ オカルト部隊、今日は
引き上げます！」

ちょっと待ってよ。二音くらいおかしなモノがくつついてたよう
な気が？

部隊？ あれ？ 部じゃなくて？ 前に自称がつくけど部じゃな
いの？

「清、ウチかて大会近いねん、分かったらさっさとやるっ！」

「なら夏休みでもいいじゃねーかよー！」

「甘いッ！ アンタが夏休みだけでこーんなたぶたぶ溜まつとる苦
手潰せるわけないやんか！ せやから今……」

こ、今度は説教始まった……。

「ねえ、忍。皆何部入ってるの？ き、気になってるわけじゃない
わよ！ なんとなく……」

気になってるんじゃないか。

「んーっとね、確か清はサッカー部でー……しーちゃんはテニス、
なつくんとついでに美咲ちゃんがバスケ」

「美咲ちゃんって、まだ続いでるのね……」

一度ついたあだ名はそう簡単に変わるものではない。

「んで、桜がー……卓球」

「嘘っ！？ あ、あんなにのほほんとしてぽよよーんとし「分か
つたらさっさとやるっ！」……い、今はともかく……試合とかで
きるの？」

「前に見たけど、もうこれでもかって位速い球打ってたよ」

「えええええっ！ 凄いのねえ。別に凄いとかは思っついてないわよ？
どっちさ。」

「後で聞いたけど、普通のスピードらしい」

「凄くないじゃないのっ！」

卓球って絶対動体視力と反発力と、ええと、とにかくなんかそん
なの必要だよな。

「ああもっ！ 何でそれがそないなんねん！」

「えっ！？ 違うのか！？」

「全然ちゃうわ！」

……桜を一言で表すと
怖い。

162 蜂の巣除去は誰が？

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん〜！」

「うつせえな」

「酷〜い〜！」

「光です〜！」

「それよりね〜！ それよりそれより〜！ 蜂の巣〜！」

「ちよつと外見てみたら中くらいのがあつたんだよ〜！」

「鉢？ どこに」

「勝手口の所〜」

「ん、あれか」

「あれかじゃないよ〜！」

「というか知ってたの〜！？」

「ひーちゃーん！ やっほ」

「はーちゃん〜！ どうしよう〜。蜂の巣〜！」

「えっ！？ 蜂の巣！？」

「そっだよ〜。蜂の巣だよ〜。」

「どう見ても阪を応援してるようにしか見えないあの虫だよ〜！」

「純くん純くん、どうしようっ〜！」

「ほっときゃいいだろ」

『無理ッ！』

「怖くて怖くて出られないよ〜！」

「……勝手口なんて使わないけど〜。」

「あ〜、でも冬には使うもん〜！ みかんとかりんごとか置いてとく

のに使うもん〜。」

「夏ー、忍ー」

『今手が離せないっ！』

「……何やってんだ、あいつ等」

「んとなー、何か和室で組み合ってるの。十秒間床に押さえてた方

が勝ちだとさ」

人間指相撲、とか言ってたよ。

「……………親父は？」

「川へ野草を摘みに」

今度は虫よけ作るんだって。

今更な気がするんだけどね。もう蚊いっぱい居るし。

「……………ほっときゃいいだろ、鉢くらい」

『駄目っ！』

だんだん沈黙が長くなっただと思っただら！

押し付ける相手探してたんでしょ。

「ん……………仕方ない。最終手段」

やってくれるのかな。

……………そんな訳ないよね。

「お袋か秋さんは？」

「頼りねーな、にーちゃんっ！」

もっと言っちゃえ！

「ん、あ、岳が居たな。悪い。じゃあテメエに任せた」

「任せるなあああああああつ！」

鉢が居なくなるならどっちでもいいよ？

「冬さんとか？」

「ひーちゃんのお父さんと一緒に行っちゃったよ」

さ、残りは岳お兄ちゃんと純お兄ちゃんだけだぞ。

「そついう訳だ。任せた岳」

「ヤだっ！」

「鉢の子が食えるかもいらねーよっ！」蜂蜜「無理だから！」じ

やあ何ならいい？」

そついう問題なのかな。

「……………んと、あ、にーちゃんのゲームソフト一本で……………」

凄い不平等条約。

「よし、行って来い」

「うお、いゝのか!?! マジで賣つぜ!?!」

「ん、行け」

「ぜってゝだぞ!」

「わあっ たつて」

「よっしや!」

おおゝ。あつさりゝ?!

「純くん、ソフトどこにも無いよ?」

どこに置いて……しゝってなにゝ?

「ソフトなら大分前に売った」

『ええゝつ!』

「しゝ、岳に気付かれるだろ?」

純お兄ちゃんずつこゝいゝ。

163 指相撲するのです

「なつくん負けてよ」

「絶対やだね」

むう。

忍です。

なつくんと指相撲してます。

理由？ 暇だったから以外に何があると！

「とりゃ」

「あつ！ ずつこいぞお前！」

両手を使っただけじゃないか。

「勝ったー」

「嘘つけ」

「ずつこい勝ち方したもーん。だから勝ち」

「……ええと、そうあっさり認められても困るんだけど……」

「何で？」

どして？

「ええつと……と、とにかくもつかい！」

「負けず嫌いだなあ」

「お前が言うなよ」

え？ あたしそんなに負けず嫌いかな。

「ねーちゃん！ にーちゃんが酷いつ！」

『ずっと前からじゃん』

「……いや、そうだけど……あのな！ 昨日ちゃんと蜂の巣撤去し

たのにゲームソフトくれねーんだぜー」

蜂の巣撤去でゲームソフト？

「純に貰うって約束してたのか」

「うん。なのに無いとか言ってくる！」

大分前に売ってたしなあ。

「なつくん、指相撲の続き！」
「よし。次は両手無しだからな」
「分かってるって」
「分かって無かったから言ってるんだろっが！」
「つて、あれ、オレは！？ 無視！？」
「え、だって続けてもどうしようもなさそうだったし。」
「あーっ！ なつくんズルい！ 何で親指で抑えるの！？」
「こっとう遊びだろうが！」
「ちよっと言ってみただけ。」
「うー光ー、にーちゃんとねーちゃんとなつくんがひでえ」
「ただいま留守にしております」
「居るだろがっ！」
「あぁっ、負けた！」
「何でなつくん勝つの！？」
「勝っちゃいかんのか！？」
「いや、言ってみただけ。」
「岳ー、おいでおいで」
「あ、聞いてくれんの？」
「うんにゃ」
「ふーんだ」
「あ、ふてくされた。」
「指相撲であたしに勝ったら聞いてあげる事も考えてあげるから」
「どーせ考えるだけだろそれ！」
「いや、考えもしないよ」
「ふーんだ！」
「あ、さらにふてくされた。」
「分かった分かった。聞いてあげるから」
「絶対だぞ」
「ほいほい」
指相撲って始めるときなんていうの？

「よーいどん？」

レディーファイト？

「てい、とっ、たっ」

「んっ、えい、てい」

むう。捕まえられん。

「指相撲なのに何で全身使ってるの？」

え、だって、何か、勝手に、動かない？

「とりゃっ」

「ってねーちゃん、なんで投げんの！？ ずっとこいぞ負けそうだったからって！」

「よし、まだ投げられる」

「そーじゃなくてえ！」

え？

「え？ な顔じゃなくてっ」

「んーと」

「んーとでもなくて！」

……………んと。

「ちよつといちいち五月蠅いなあ」

「ごめんなさい殴らないで」

よし、許してあげよう。

……………何を。

「んで、何か話したいとか言ってたんじゃ無かった？」

「それぞれ！ ………………」

『……………』

「何て言おうとしたのか忘れた」

……………よし。

「なっくん続き！」

「また負かしてやるよ」

「えー」

「えーじゃなくてっ！」

164 当たった……けど

「岳！」

「何？」

「見る！」

「……んど。」

顔はおっさん、体は女。頭に触覚で背中にはカブトムシみてーな羽。

ある意味不気味だっ！

岳だ。

「父さん、これ何？」

「男女虫パペットだ！」

「……………ああっ！ 懸賞の！」

「そうそう」

「むっだなモン当たったなあっ！」

しかも何？ 三体も当たってね？

「でもなんか嬉しくない？」

「全っ然全く欠片も嬉しくねーよ！」

送ったのオレじゃねーし。

「似たような言葉合わせるなあ」

「それだけ嬉しくなかったから」

「あはは、はは、はあ……………」

うあ、落ち込んだ。

あああああカビが生えるうっ！

というのはまあ置いて。

「どーすんのこれ」

「どーしようこれ」

「いらんモン応募すんなよ！」

「以後気を付けます」

「これ二度目なんだからーが！」

「三度目は気を付けます」

「二度あることは三度あるって！」

「じゃあ二度目も応募「せんでいいー！」」
全く。

どーすんだよ、これ。

「ところでさー、オレの応募した3 Sは？」

「無いよ」

「えー」

「いやえーじゃなくて」

んじゃどう言えと？

「アッチ向いてホイ」

「あつ、負けたああああああっていきなりなんだよー!？」

「いや、なんとなく」

突然すぎだろ……。

「そんな事より岳」

「話を逸らしたのは父さんだろがっ!」

「そんな事より、これを見る!」

ばばーん!

男女虫パペット。

「いやこれさつき見たから」

「よく見て」

よく？

ぶ、ぶぶ、ぶぶぶぶぶぶぶぶ……

うお、羽動いた!

「飛ぶのかこれ!？」

「いんや」

「んじゃ何で羽動いてんだよ!」

「飛ぶようにしたかったけど飛ばなかったらしい」
「で、羽が動くだけ？」

「ほら、忍が何年前前にドラ もんの人形？ 貰ってたる。あれの頭についてたタケ プターが動いたのに飛ばなかったのと同じだ！」
「あれ、扇風機だったし」

意外と風来た。

手のひらサイズだったのに。

「全然同じじゃねーじゃんか！」

「こ、これだつて涼しいぞ？」

ぶぶぶぶぶぶ、ぶ、ぶ、ぶ……

「……止まったけど」

「電池切れた」

「早っ！？」

最初だからか？ 試し用の電池だからか？

「んーと、あれ、電池交換するところ無いんだけど」

「はあ！？」

「ま、いつか。電池の無駄だし！」

最初っから貰うなよって気になんだけど。

「あ、忍ー、いる？」

「いらん」

「……岳、何か忍がそっけない」

知るか！

「ほんとーにいらねーだけじゃねーの？ ってか、絶対そーだろ」

「あ、光ー、いる？」

「いらな〜い〜」

「……岳、なんか光もそっけない」

いつもどーりだったと思うけど？

「あ、じゅ「いらん」せめて最後まで言わせろっ！」

「はっ」

「わ、笑われた……すっごい馬鹿にしたみたいに笑われた……」

馬鹿にしてたんだろ？

165 妙羅の頼みごと

「純、ちよつと手伝え」

「第一声がそれかよ」

「何か問題があるか？」

「親しき仲にも礼儀ありとか言っじゃん」

「知らん」

知つとごうよ。

忍でーす。

なんかもう、扉のとの字すら知らないよーとでも言っつかのようじ、
まあこれがいつも通りだけど。妙羅が入って来ました。

「何の手伝いだ？」

「来てから説明する」

急ぐの？

「いや、ここでしろ」

「来てからだ」

「ここでだ」

「来てから」

「ここ」

「来てから」

「ここ」

「来てから……っつて、話が進まんだろっつが」
気付くの遅っ。

「ん、ならあきらめてここで説明しろ」

「したら絶対に手伝えよ」

「聞いてから決める」

「なら来てから説明」しても結局手伝わせるんだろ？」当然だ」
当然なんだ。

「……よし、忍行つて来い」

『何でそうなる(の!?)』

おかしーよー、なんであたしに振るの!?

「私は純に來いと言った」

「……なら、聞いて忍でも出來そうなら忍にやらせる」

「妹はあてにならん」

「今さらつと酷いこと言われたよ!？」

ろくに話したこともないのに!

「ああもう、いいからさっさと言え」

聞かないんじゃ無かったの?

「俺は早く数独の続きがした……チッ」

「……妹、何故純は今舌打ちをした？」

え、こっちに振るの。

「んつとー、あ、きつとタイマー止め忘れたんだ。パズルする時

つつも計ってるから」

「そうだ。テメエが突然入って來るから止め忘れた」

最速記録が出そうだったのにね。

「私のせいかな？」

「そうだ」

「はっ」

あ、何か純兄の心の声が聞こえる気がする。

「(こいつ、殴りてええええええええええっ!)」

前言撤回。叫びでした。

「で、結局何なの？」

「最近入って來た部下の取り扱いが難しくてな」

「帰れ」

うあ、バツサリ。

「部下の管理が出來ないとか俺に言ってもしょうがねえだろ」

「そいつらの名前は斬、天、劍というのだが？」

……そりゃー取り扱いにも苦勞するでしょうね。

「そいつらがお前の部下？ 四月に入学したところだろ？」

「実力があれば飛び級だろうがなんだろうがするからな」
流石と言うか何と言うか。

つまりあの三人、実力があつたって事？
ある意味あるけど。

「まあガンバレ」

「何のために来たと思ってる」

「さあな。数独の邪魔をしにか？」

根に持つてる……根に持つてるよつ。

「いや。取り扱い方を聞きに来た」

「説明書があるとでも思ってたんのか？」

「無いのか！？」

驚くところ！？

「あるのか？」

妙羅が懐から取り出しましたるは。

『部下の取り扱い説明書 第一巻』

……あるんだ。

何巻まであるのこれ。

「こんなもある」

『後輩の取り扱い説明書 番外』

番外って！？

「欲しいか？」

「生憎後輩がない」

「そうか。まあ必要になつたら言え」

別にいらなと思うんだけど。

「分かった。じゃあもう帰れ」

「何をしに来たと思ってる」

「数独の邪魔」

確定？

「で、取り扱い方……口頭でもいい」

「光ーっ！ 居るか？」

「純お兄ちゃん〜！ 食べて食べて〜。あ、妙羅さんこんばんは〜」
「妙羅さまだ」

「は〜い〜」

あっさり受け入れるな！

「……下の妹はいい子だな」

「手え出すなよ、ロリコン」

この人ロリコンなの！？

「一辺冥界あいちに逝くか？ シスコン」

シスコンじゃないと思うけど。

「光、手に持ったそれ、妙羅に食わせてやれ。喜ぶぞ」

「了解〜。はいどうぞ〜」

光、何作ったの？ クッキー？ ゼリー？ とにかく不気味な物
体。

「……今の人間界にはこんな食べ物があるのか？」

この人、何歳？

あ、凄い、食べた！

「うっ……」

「ドクダミ入れたの〜。これで妙羅さまも健康に〜」

『なるかつ！？』

むしろ毒だよねっ！？ 体に悪いよね！？

「……斬に解毒薬でも貰おう」

「悪化させられないようにね〜」

「……………」

あ、黙って出てった。

死神撃退！

あれ、何かこれって罰当たり？

166 成績表の恐怖（前書き）

読んでくださっている方々、いつもありがとうございます！
最近いつも投稿が20時過ぎてからになってしまってますので……。
もういつそ、書いてすぐに投稿してしまおう！ となりました。
あしからず……。

166 成績表の恐怖

「あい、通知表渡すよー」

『いらない!』

「いやいらないじゃなく『いらん!』言い直さんでいい!」

注文が多いなあ。

「ああもう、はい、秋村ーっ」

あ、全部無視した。

「成績表怖え」

「怖い」

「怖〜い」

「怖……くなんてないわよっ」

『どうでもいい』

『そのノー天気分ける』

純兄、なっくん、ノー天気ってどうやって分けるの？

忍でーす。

「海中!」

「ほーい。んじゃちよっ行って来る」

「生きて帰ってこい!」

「分かった、必ず生きて帰って」さっさと来ーい」……んと
珍しく真剣な顔だったのに。

……こんなことで真剣な顔になってもなあ。

「夏、どーだった?」

「上がった上がった」

おー、よかったね。

「上がったけど5が減った」

「5がある時点で凄いと思うよ?」

だってだって。あたし中学なってから5取った事なんて無いし。
なぜか4止まりなんだなあ。

「わあああああつ！」

あ、シジミの悲鳴。

「……どうしたの」

「やったっ！ やったよ！ 1も2も無い！」

「……」

「亮君その反応はないと思うんだっ！」

「いいなー、1無いって」

清、2は？ 2はどうなの？

「鈴木！」

行ってらっしゃい、玲奈。

「どうだった？」^{どう}「十川！」

「上がったわよ。別に、これくらいじゃ嬉しくっ……無いけどね」

なら、口元が緩んでるのは何故？

「高崎！」

「せんせーそれ燃しといて」

「馬鹿なこと言っていないで来い」

「ふえーい」

「生きて帰ってこい！」

なっくん、清に言われたことまんま復唱。

「だ、駄目だ……オレはいいからお前は「さっさと来ーい」最後まで言わせて。逃げる！」

何から？

「ぐぼあつ」

あ、清……血でも吐きそうな声したよ？

「大丈夫「高山忍！」んじゃ、そゆことで」

「最後まで言ってくれても……」

ええーっ。と、気分で言ってみたりもしたりする。

「高山……お前職員室でも話題になって「私は何も悪いこととしてないわよ！？」……誰」

さあ？ 玲奈かな。

「うん、まあとにかく。二年に比べて大分伸びた」

「おお、5がある。」

「あ、いつも通り保体は3なのね。」

「いつもこここなんだよね。安全に関してのうんたらかんたら
ってトコで。」

「高山純！」

「生きて帰ってこい！」

「ごん」

「純くんの手刀が清くんのこめかみにっ！」

「桜の実況って久しぶりに聞いたような？」

「つつか、痛ええええええいつも以上に痛ええええええっ！」

「忍、見せて」

「ほいな」

「オレは無視かよ！」

「いつものことじゃん？」

「思わず殴りたくなるような成績だな」

「とか言いながら拳こっちに向けるのやめ……って、ホントに殴っ
てきたあつ！」

「下段払いつ。」

「むう」

「今の絶対本気だったでしょ！」

「当然」

「当然って。」

「純、オール5？」

「いや」

「何かいつも成績表帰ってきたときその質問されてるよね、純兄。」

「え、純、お前成績下がった？」

「喧しい」

「下がったんだ。」

「見せて見せて」

あ、4と5がいつぱい。

かと思いきや意外と少ない？

「3多し！」

「返せ」

はあい。

「中谷」

あら、先生力尽きてきた？

「は、初めて5があつた！」

しーちゃんのテンションが上がってる。

「そかそかー、よかつたな、篠」

「うむっ」

何かしーちゃんが珍しくガキつぱい。

「私名簿順だといつも最後なんだよ？ どう思う？」

このクラス、山中さんと山本さんとかいないもんね。

だから山内の桜が一番最後になっちゃうんだねー。

「山内」

「遅いよ！」

「え、あ、ええとー、ごめん？」

謝るんだ。

「あわわわわ」

あ、桜が何か慌てだした。

「あわあわあわあわ」

ダッシュで戻ってきた。

んで、筆箱から鋏を出して成績表を切ろうと……って

『待てっ！』

「あうあうあうあうあう」

桜をなだめるのに、三十分くらいかかりましたとさ。

167 バナナとクスリ

「はぁーるがきいーたあ、はぁーるがきいーたあ、どおーこおーにいーきたあー」

「剣の頭」

「やかーしい」

天だ。

「今、夏」

「細かいことは気にしねー方向で」

「夏でもバナナは旨いからな」

「あ、オレにも一本」

うむ。しつかり味わえ。

「そーらちゃんつ。今日もしつかりバナナ味わってるかしら？」

「あ、蓮菜^{れんな}さんっ！ もちろん！」

私にバナナの旨さを教えてくれた蓮菜さん！

バナナ嫌いの子が何とかしてバナナが好きになるように日々奮闘

する凄い人だ！

「……って、天？ オレは旨い飯屋に連れてってくれるって聞いた

んだけつども？」

「何を言う。今日は蓮菜さんがバナナ料理をごちそうして下さいさるのだ」

「……バナナ？」

バナナだ。何かおかしいか？ 斬。

「……全部？」

「もちろん全部よ。いろいろなバナナ料理があるわよ」

流石蓮菜さん！

「……………俺、まだ作りかけのクスリが。剣。実験台」

「テーマの実験台にされるよりバナナフルコースの方がずっとええわっ！」

「うむ、よく分かってるな、剣。

「ほらほら。早くおいで」

「……む。とにかく俺は作りかけ「だーめっ」……こうなったら」

「こらっ！ クスリを取り出すな！

「ざあん！ これってあれだろ！？ 相手溶かす奴だろ！？ これを今どうしようとした！？」

「これからかけようと『やめんかつ！』じゃあ……」

別のクスリを出そうとするなっ！

バナナの前で何をする！

「……あん？ こりゃ見たことねーな。何コレ」

いつもの毒々しい色でなくて、虹色に輝いているぞ？

……ある意味毒々しいかも。

「……好きなモノへ、姿、変えられる……」

「バナナになれるの！？」

えっ！？

「……本当にそれ、好きなら」

「頂戴っ！」

「ちよつと待て！ 斬！ 解毒薬は」

「無い」

即答っ。

「蓮菜さん、もし失敗作だったら……」

「バナナへ近づくためにはどんな危険にも立ち向かうのよっ！ 天にはその覚悟がないの！？」

そ、そうか……。私はもしかして覚悟が足りないのか！？

「斬！ それ、私にもくれ！」

「アホかああああああ！？」

私は、バナナへと近づくためにならどんな危険も恐れない！

「天ちゃん、さあ飲みましょう」

「ああっ」

「こいつ等絶対頭おかしい！ おい！ 正気に戻れ！ 大体斬のク

「斬っ」

「ききっ、成功」

眩しいほどの笑顔だ。いつものクスリが完成した時の笑顔だ。邪気たっぷり、悪戯っ子、悪魔、まあとにかくそんな類のモノを混ぜ合わせたような笑顔だ。

「解毒」無いつて言ったじゃん？ ききっ」くそ。作れ！ そして完全にバナナになれるクスリも作れ！」

「ききっ。解毒剤は拷問に必要ないね」

私と蓮奈さんを拷問する気か！？」

「天ちゃん……この子、こんなに明る……ええと、とにかく喋る？ 子なの？」

「クスリが完成した時と拷問中は……」

親の顔が見てみたいっ。

168 ある意味謎の高山家

ぴーんぽーん

……………あら？

変ね。返事がないわ。

家の中から声聞こえてるのに。

玲奈よっ。

忍と桜、篠と遊ぶ約束してたんだけど…………。

『はい』

「ええっ！？ 高山！？ 何で居るの！？」

『…………鈴木か。表札を見る、馬鹿』

あ、高山…………。うっかり忍と高山が兄妹だったこと忘れてたわ。

「べ、別に忘れてたわけじゃないわよっ」

『はいはい。忘れてたんだな』

「忘れてないわよっ」

『…………インターフォン越しでいつまで話し続ければ気が済む？』

『あ、悪い。とりあえず、忍出る』

え？ もう一人男の人の声がしたけど…………誰？

「やほー、玲奈。おいでおいで」

「あたしは子どもじゃないわよっ！」

「成人してなかったら子どもだもーん」

「言い方が悪かったかしら。あたしは幼児じゃないわよっ！」

「まーいいからおいでっ」

「お、おじゃましますっ」

「これ、言わないとなんだか落ち着かないわよね。

「あゝ、新しい人だ〜！ 食べる〜？」

「妹ちゃん？」

「ええと、手に持った黒いモノは何かしら？」

「光、毒しまいなさい。食べさせるのなら純兄に」

ど、毒！？ 高山にならいいの！？

「了解」

了解するの！？

「ねーちゃん！ なつくんが……なつくんが死んでるっ！」

な、なつくんが死んでる！？

なつくんって海中の事よね！？

……弟くん達とも仲いいのねえ。

「勝手に殺すな！」

「お、復活？」

「お兄ちゃーんっ！ 岳くん！」

「……も一個味見」

ええと……海中の妹？

手に持った奴って、さっきのあの毒みたい……。

『勘弁してくれええええええええっ！』

あら、海中って家の中じゃいじめられる方なの？

「ちなみに。元気な方がなつくんの妹ではーちゃんこと春、おとな

し……そうなのは美咲ちゃんの妹にしてはーちゃんと光……ってさ

っきの妹ね。の友達」

妹持つてる人多いわねっ！？

「村田に妹っていたのね」

「全然似てないよね」

あ、桜。

「なかなか来ないから降りてきちゃった」

「ごめん。玲奈が「あたしのせいじゃないわよっ！」まだ何も言っ

てなあい」

玲奈がって言いかけたじゃないのっ！

「ああもう、とつとと帰れ！」

「……篠と高山、けんかでもしてるの？」

妹と弟は一人ずつとしか聞いてないし……。なら、上には篠と高

山しか居ないわよね？

あ、さっきのインターフォンの途中で入ってきた人と？

「ううん。純くんだったら、何も無い所とけんかしてるんだよ」

「……高山って、頭大丈夫？」

「だいじょぶだいじょぶ。ところで玲奈。あたしも高山」

どうしろって言うのよ。

「と言う訳で純兄のことは純でよろしく」

え。

「無理よっ!」

「何で!？」

そんなに力一杯聞くこと!？」

「だ、だって……向こうだってあたしのこと鈴木だし……。いきなり名前で読んだら引かれるでしょ?」

「そーかな?」

「そっよっ」

多分っ。

「じゃあ純兄にも言っとくね。玲奈のこと鈴木じゃなくて玲奈って呼んでって」

そ、そっという問題じゃなくて……。

「会談で話すのって首疲れるから、さっさと行こ」

無視? 無視なの?

「篠。純くんどんな感じ?」

ちよっと……ドアの隙間から何覗き見してるのよっ。

「とてつもなく高度なパントマイムしてるぞ」

き、気になるわねっ。

「あ、投げられた」

『ホント!?!』

あ……、別に気になったわけじゃないわよ!

「じゅーんにー。妙羅ー、見られてるの気付いてる?」

『気付いてるからちよっと黙ってる!』

あら、変ね。今高山……じゅ、純の声ともう一つ声が聞こえたよ

うな……。

「純くんが怒鳴るところなんて初めて聞いたよ〜！」

「あたしも」

当然、あたしも

「妙羅って？」

「今純兄と喧嘩してる人」

『え？』

だ、誰もいないわよ……？

まさか幽霊とか言わないわよねっ！？

「妙羅、純兄が変人みたいになってるからさー。姿とか出せない？」

「……………」

「あそ。んじゃあ純兄、変人続けて」

え？

「殴られてえか？」

い、今の声本気だったわよ……？ イラついてるのかしら。

「誰？ 妙羅って」

「だから、今純兄とけんか「そうじゃくてー！」えー、幽霊ダメな人

「」

「はい」

あ、桜って幽霊ダメなの？

あたしは別に大丈夫よ！？

「幽霊ではないのでご安心下さいー」

「よかった〜」

本当に幽霊だったらどうもしないけどどうしようかと思ったわ。

「妙羅は死神だからっ」

『帰るっ！』

何で死神が家にいるのよっ！

高山家って、何なの！？

169 ガールズトーク? どこが?

「集まったはいいけど暇だよね」

「そもそも何して遊ぼうとしたのよ」

「さあ?」

もう会話でいいんじゃないかな。

忍です。

遊ぶために集まって、その遊びが会話。

……あ、なんかちよつとおばさん見たいって思っちゃった。

「忍、ちよつと通るっ!」

「ねーちゃん! こいつ等何とかして!」

「待ちなさい!」

『……………』

どうすればいいかな、この場合。

何とかしてって言われても行っちゃったらどうもできないんだだけ
じ。

「ほっと」

「ほっとくべきだね」

「…………絶対海中って忍のこと女の子として見てないわよね」

ん? 今更そういう方が無理じゃない?

「そもそも忍の服って男物っぽいよね」

純兄のお下がりで。

とくに不満はありません。

「実際男物。しーちゃんもそんな感じじゃない?」

「そうなの? 服はよく見ないで買うから…………」

「見なさいよ!」

え、見るべきなの?

「玲奈は女っぽいよね。服も髪型も」

「あ、当たり前でしょ!? 服に気を使うものじゃない、女の子っ

て

「そうなの!？」

「そんなに驚いた顔で見ないでくれる!？」

「ごめんなさい。」

「桜は普通に女の子の服よね」

「ママが買ってくるんだよ」

「……自分で選ぶんじゃないよ?」

「面倒だから何でもいいな」と思って」

「そんなに大きなため息つかなくても。」

「そもそも服が話題に上ったこと自体初めてだよね」

「そっぴやそっぴだな」

「あ、あなた達……女子力無いでしょ!？ 絶対」

女子力?

「学力じゃなくて?」

「全然違うわよっ!」

「あ、ところで」

「話変わるの!？ ここで!？」

玲奈、喉潰さないでね。

「さつき死神とかなんとか言ってたけど、あれって嘘だよね!？」

あ……。

「でもそうじゃなきゃ純は何と話してたんだ」

「やだよだ! 信じたくないよ」

玲奈が頷き人形と化しました。

「あ……どうしよ。本人に聞く?」

「よし行こう!」 『やだよ!』

一対二

行かない方向?

「忍、ここ冷房ついてる?」

噂をすれば何とやら。

「純くん! 死神なんていないよね! ね!？」

「居る何て言ったら殴るわよ!？」
「いるよなっ」

「おお、扉を開けた瞬間から一気に女子に囲まれる純兄。
音を消せばもて男に見えなくもないかもしれない。」

「……あ、冷房はついてるな」

『無視するなあっ!』

「ついてないよ。現実逃避？」

「北側だからどちらにしても涼しいと思ったのに……暑い」

「そりゃー、これでもかかってくらいに桜たちが近づいているからね。」

「純く〜ん?」「高山?」「純」

「女が怖えってやつのが持ちは分からなくも無くなってきた」

「あはは。あたしは純兄の方が怖いっ!」

「純も大変だな」

「なら変われ」

「やだね。俺は一步下がったとこで笑つとく」

「最低だな、テメエ」

「あははははははは!」

「本当に笑ってるし。」

「で、居るの居ないの!？」

「海中! あんたなら何か知ってるでしょ!？」

「純に聞けよ」

「と言っ訳で純。さっさと答える!」

「何か純兄が弱い立場になってる。」

「めずらしー……あ、妙羅とじゃ結構弱い方が。」

「ええー……何て言ってほしい?」

「居る!」「居ない!」

「どっしると!」

「あ、暑さのせいで切れるラインが低くなってる?」

「ど、怒鳴られた……。あう、ごめんね純くん」

「あ、桜が引いた。」

「純、仕事だ。ちょっと来い」

あ、妙羅。いつから純兄に仕事をプレゼントするようになった？

「あああああもっ！ ちょっとお前等一步下がれ」

『……？』

一步下がる。

二人まとめて足払いっ。

「よし。俺はちょっと出かける」

「いてらー」「行ってらっしゅい」

『答え聞いてない！』

不満ですか、お二人さん

「ねえ、やっぱり居るの？」

「居たらどする？」

「か、帰る！」

怖がりだなあ玲奈。

「居ないから安心してよー」

「なら最初からそう言いなさいよっ」

「あんまり怖がるから楽しくて」

「馬鹿にしてるの！？」

「してないよー」

ほんとのこと言ったら失神しちゃったりするのかな。

170 夏休みの宿題は

「……………うー」

「にーちやんどした？」

「暑^{あち}い」

「オレだって暑いよ！」

へえ。

純だ。

「んで」

「あ、まだあんの？」

「社会の宿題がめんどい」

「オレだって宿題めんどいよ！」

社会の宿題に『考察』の欄があるからめんどくせえんだよ。

「夏休み入ったばっかりなのにほとんど宿題終わってるとこが純兄
だよ」

「ん、数学の宿題は分けてやることをお勧めする」

入試過去問両面刷り四枚を一気にやるのは流石にキツイ。

「言われなくてもそーやりますー」

「……………未来形？」

「数学は手付けてない」

あそ。

「ちなみに宿題に手は」

「んと、読書感想文と美術だけやった」

あ、どっちもやってねえ。

「社会後回しにして読書感想文やるかな……………」

「美術はー？」

「社会の後」

「後回しだね、よーするに」

あきらめが早いのが俺の長所だ。

もし遅刻確定の時刻に起きたとしてもサクッとあきらめるぞ？

……自慢になってねえし。

「純お兄ちゃん図工好き？」

「普通」

「どちらかと言えば？」

「どちらかと言えば？」

「どちらかと言えば普通」

「どちらかになって無い？」

「だって好きでも嫌いでもねえし。」

「ねーちゃんは？ 図工」

「普通のどちらかと言えば好き」

「……二人ともどうでもいいんだね？」

『どうでもいい』

「八モって言うところか！？」

「たまたまだ。」

「純兄、ところで相談なんだけど」

「ん？」

「あ、聞いてくれるんだ。てっきり『夏にしる』とか言うのかと思
った」

「その手があつたか。」

「夏にしる」

「聞いてよ」

「だったら話を逸らすな。」

「社会やったとこまででいいから写さ」却下「チエッ」

「元から期待してなかったようにしか見えねえ。」

「ね、ところで体力作りって何したらいいの？」

「あ、光もあんのか？ それ」

「うん、ね、何したらいい？」

「体力づくり？」

「ランニング？」「縄跳びかな」「適当に遊べば勝手につく」

「凄く投げやりな意見があったような気がするんだけど」
「気のせいだ」
「気のせいか」
「納得するのか。」
「やっぱり家事でしょ。光手伝って」
「はい」
「……素直」。
「岳も体力づくりあるんだったわよね、手伝って」
「今算数やってんの！」
「じゃあ終わったらね」
手伝う事前提か。
「あー、そーいや自由研究とかあるよなー。どしよ」
「プランクトンの観察」
「えー、もちよつと簡単なの」
「簡単だろ？」
「卵の殻を溶かすヤツは」
「あ、それ楽しそう。それやる」
「……二年の時にやってなかったか？」
「純」。光いるか？
「なつくーんあたしは？」。「オレは？」
「代表して一番上の奴」
「代表とかヤだ」
「子どもかお前」
「何か悪いか？」
「光がどしたの？」
「春が暴走したから止めてもらおうと」
「それくらいやれよ。兄貴なんだし」
「うあ、お前に言われたくねえ」
「ん……じゃあどうしろと？」
「はーちゃんの暴走って？」

「家じゅうに自由研究とか言っただけ張り始めやがった」

自由研究は罨にかかった人間観察か。

それともどういふ風に張った罨が一番かかりやすいか……とか。

「じゃ、俺は春の方に着く」

「あ、やっぱお前も？」

テメエもかよ。

「じゃあ何しに来たんだよ!？」

「光にさらに煽ってもらおうと……」

なら最初から言え。

「夏？ 聞こえてるわよ」

「……………あーっと。あはははは……………。ごめん、やっぱ罨取り外させる方手伝って」

……………。

「んな不満そうな顔になるなよっ!？ 純まで!」

面白そうだったのに。

「夏。春はもう降参したわよ。さっさとあなたもこちらへいらっし
やい」

降参? ……………降参?

171 お父さんの扱い

「わわわわわっ！ やめてよー！」

「やだ」

「やだじゃなあい!？」

「そおくら、お髭じよりじより」

「いたあい!」

あはは、春ガンバレ。

夏だ。

「拷問ね……」

「んじゃお母さん、助けてやれば？」

「わざわざ助けるほどの事でも無いわ」

拷問つつたたくせに。

「もおおおおおお！ やめてよ!」

「何でえ。お母さんにやってあげたら喜ぶのに」

「イ・ヤ・よ!」

「あははははははははは!」

親父つてば、フリーズしてやんの。

「ちよつと夏、黙ろうか？」

……□つまんだ。

イコール？ 俺の笑を邪魔しやがった。

「ちよつと逝つて来いっ!」

「ぐはっ」

蹴つて、殴つてー、足払つてー!

体育の授業にある柔道つてこのためにあるのか。

「お兄ちゃんつて……笑つてるとこ止めると怖いよね」

「そうね」

いや、俺はお母さんの方が怖えと思う、

「ところでお母さん、お父さんつて何が苦手？」

「そうねえ……」

あ、お母さん協力すんの？

「パサパサしたかぼちゃの煮物が嫌いね」

「へえ」

それは俺も嫌いだな。

「後ね、猫が苦手」

「そなの？」

「秋い！」

あ、事実なんだ。

「じゃあここは忍ちゃんに手伝ってもらおう！」

あー、春も春で大概怖えかも。

何が怖いって、人に仕返しする計画立ててる時にすっげえ楽しそうになるのが怖え。

「ちよつ……と、夏。首、首……絞まってる」

「絞めてんだよ」

「止めなさい」

親父って何気に腕力強いから困る。

いや、別にそこまで困らねえけど。

「そりゃつ、お髭じよりじょ「来るなっ！」今のは酷くない？」

え、だって……。

「秋、前から気になってたんだけどこっち来るなり俺の扱い酷くなつて無い？」

つい純たちに影響されて？

「気のせいよ」

き、きつぱり……。

「んー、そう？」

「そうよ」

「ふーん、そうなのか……」

納得するのか！？

「な？」

あ。してなかった。

「ところで、夏休みの宿題は進んでるの？」

「ぜんぜん」

小学校の頃なんか、俺は宿題を期限直前になってもやらない派だったからな！

お母さんに滅茶苦茶怒られたけど。

「さつさとやりなさいよ」

まだ夏休み始まったばかりなのに……。あ、もうすぐ一週間経つ？

「ウチは今自由研究のネタを考えてるよ！ テーマは『お父さんに仕返すにはどんなのが一番効果的か！』」

研究でいい、のか？ ある意味研究だけど。

「やっぱり俺の扱い酷くなってる！」

「気にしないの。ね？」

「うう……これがひどい扱いしてる人の言葉じゃ無かったら嬉しいけど……」

顔はちよつとほころんでるくせに。

その頃、高山家。

「おとーさん、名前何だっけ？」

「酷っ！？」

「気にしないの。ね？」

「うう……じゃあ凜、俺の名前は？」

「……」

「……ひどい」

「ぎゃあああああつー！」

「うつせえ」

「いや……あのさあ、弟が悲鳴あげたんだからちよつと位心配してもよくな？」

「心配するような出来事があったのか？」

「いや、雪崩が起きただけ」

「それ位音聞きゃ分かる」

冷てー。

机の上のモンがどっさあああああつとな、行ったのにな、この反応。

岳だー。

「へえ、漢字テスト五十点？ きっかり半分。すげえ」

「だあつ！ 勝手に見んなよ！」

今までの最低点っ！

「テストから勝手にこつちに來たんだ」

「否定できねえええええええ！」

「事実だからな」

ふんだ。このがり勉にーちゃん！

多分にーちゃんは努力型。夏休みなのになあんで勉強してんの？

『みゆみゆっ！ 何かしゅごいことになってるでしゅよー！』

あ、何か久しぶりに見た気がする。耳で歩く妖怪。

「妙羅のペットか。帰れ」

『いきなり酷いでしゅっ！ でもってみゆーちゃんはペットじゃないでしゅよおっ！』

ある意味可愛い物体なんだけどな。コレ。

『ところでこの紙と本の海は何でしゅか？』

「ちよつと雪崩が起きただけー」

『みゆみゆっ、耳の踏み場もないでしゅよっ!』

……耳の踏み場? 足の踏み場か?

「すぐ片づけるってば」

「とか言ってまた机の上に乗っけるだけだろ」

びんぽおーん。大正解。

『みゆみゆっ! ちゃんと片付けないとメツでしゅよ!』

見た目4, 5歳に叱られる11歳の図?

あ、何か情けねー。

『第二のみよーらみたいでしゅ』

「ほお、妙羅は片付けが苦手なのか?」

『ほっといたら部屋はいつつも書類でぐちゃぐちゃでしゅ』

へえ、以外。

『だからみゆーちゃんがいつつもキレイキレイしてあげてるのでしゅよ!』

「ふうん」

『キレイキレイして、おかげでみよーらは仕事がぱっぱできるのでしゅー!』

しゅー!』

おー、胸張ってんのか? これ。

胸だけじゃなくて動体全部張ってるように見えっけど。

「じゃあこいつの片づけ手伝ってやれ」

『了解でしゅっ』

おー、すげーご機嫌。

「でももう終わったぜ?」

『何処がでしゅかつ! 机の上に置いただけじゃないでしゅかつ!』

いーのいーの。

『あーっでしゅー!』

叫び声にもでしゅ付けるのかよっ!

「って、あ、ぎゃあああああああ」

い、一日に二回も雪崩がっ!?

バランスゲームには自信あんのになー。

『やっぱりみゅーちゃんが片づけるのでしゅっ!』

「あー……、うん。よろしく」

「楽し、いつか。」

『開きましゅっ!』

………つて

「ちよおおおおおおおつと待ったあああああ!」

『みゅみゅ?』

みゅみゅ? じゃねーよ!

「何で床にこんな大穴開けてんだよ!?!」

『大丈夫でしゅ。閉じること可なのでしゅ』

「じゃなくてっ!

「何で雪崩をそん中に落っことそうとしてんのかな!?!」

『これでああなたの机もキレイキレイのさっぱりでしゅっ!』

えーと? つまり?

「あなたはこれを全部捨てるおつもりで?」

『みゅみゅっ! 違うのでしゅよ! みゅーちゃんが居ればいつで

も取り出し可能でしゅ!』

「お前が居なきや出せねーのかよ!」

「こいつに期待したオレが馬鹿だった!

『みゅーちゃんが居なくてもお兄ちゃまが取り出してくれるでしゅ

よっ!』

「お前のにーちゃんとか知らねーよ!」

『じゅんの事でしゅよっ!』

はい? にーちゃん?

『でしゅよねっ』

「テメエ帰れ」

『まだキレイキレイ終わってないのでしゅっ! びゅあー』

口で効果音出さんでも。

「にーちゃん、説明プリーズ」

「ヤ」

一音で返された……。

「んじゃあ耳妖怪のさ、開けたのと同じ穴開けるだけでいいからっ
！じゃねーとホントに出せんのか分かんなくてこいつ帰せねーし」
『ではではみゅーちゃんはこれにてっ！ なのでしゅー！』
あ。

あーっ！

「にーちゃんっ、今日やる分の宿題穴に入れられちまったから出し
てっー！」

「ヤ」

「ヤ、じゃなくてー！」

「やべーよ、やべーよ。宿題がもしこのまま帰ってこなかったら…
…。」

「って、まだ一か月くらいあんだし大丈夫かも知れねーけど。」

「頼むっ！ なっ、なっ」

「……よし、ミュウは今度会ったら半殺しにしよう」

「……にーちゃんの口からこんな言葉初めて聞いたけど。」

「殴るとかな、蹴るとかなら聞いたこと数百回あるけどなっ！？」

「半殺しは初めてだ！ 多分。」

「はあー。やんなきゃダメ？」

「ダメー」

「じゃねーと不安だしー。」

「はあ……。三歩下がれ。」

「はい？」

「あー、やっぱ五歩下がれ。テメエの机あたり。そう、そこ」
「何で？」

「開く」

「ぎゃあああああああああ！」
「教科書痛え！」

「何で俺の頭の上から振ってくるんだよっ！」

「あ、岳。もうすぐ辞書が「ぐあっ！？」あ……遅かったか」

もっと早く言えよっ！

あー……最初よりかなあり酷くなってる……。
うん。

皆さん。机の整理はきちんとしましょう。

173 かみとゴム

「あのさー、純兄」

「ん」

「何で勉強あたしの部屋でやってんの？」

「涼しいから」

「あっさりきっぱり答えたね。」

「忍でーす。」

「あのね、純兄」

「ん」

「前から思ってたんだけどね」

「ほんつと前から。」

「ん？」

「髪切ればもつと涼しくなると思うよ」

「少なくとも首のあたりはかなり。」

「ぎりぎり肩には付かないけど、それでも首の回り覆ってるんだもん。」

「短髪は落ち着かねえもん」

「もんつて。」

「じゃ、せめて髪くくれば？」

「ん……ゴムあつたかな」

「そつから始まるの？」

「多分洗面台の引き出しにあるんじゃないかなー」

「ふーん」

「いや、ふーんつて言つて何またワークに目え移してんの？」

「あー、やつぱ暑い」

「だから取つといでつて言つてるのに」

「んー」

「あ、絶対めんどくせえとか思つてる。」

「ちなみにあたしは行かないからね」
「んで、絶対あたしに頼むと思う。」

「えー」

ほら！ ほらね！ 絶対あたしに頼むつもりだったんだ！

「純ー、忍ー、ゴムって持ってる？」

『ゴム？』

「そうそう。美術のさ、紙くるめて止めとくヤツ。どっか行っちゃつて」

家には無いんか。

「なつくん美術やったの？ 屋外写生だよ、どこ描いたの？」

なつくんって絵、上手かったっけ？

「まだ描いてねえよ」

「じゃあなんでゴムを無くすんだよ」

「いや、何か画用紙ごとそのへんにほっといたらどっついう訳か……」

『どうやって無くすんだよ！？』

す、すごい。三か月半で消しゴム五個無くしたことより凄い！

全然褒めることじゃないけど。

「修也あああああ！」

「不気味だ」

「不気味くねえっ！ 喰らえ、ゴム鉄砲！」

廊下が何やら騒がしい。

「ゴムつつた？ よし、貰って来よ」

なつくん、ベランダの窓位閉めてってください。

「修也つてあれか？ んと……青」

「色で言われても分かんないよ。しかもそれって前着てた服の色で

しょ」

「名前を覚える気はさらさらねえ」

最悪だこの人。

「よし、ゴム調達。じゃな」

ホントにゴム取りに来ただけなんだ……。

「純兄も少し動いたら？ 肩こるよ、腰炒めるよ」

「……今発音がおかしくなかつたか」

「え、腰炒めるよって言っただけ」

「……腰炒められる前に動くよ」

おお、言葉からにじみ出てた？

腰を炒め物にしても絶対おいしくないよねー。

あれ、でも人肉ってホントにまずいのかな？

………危ない。一瞬食べてみたいと思う所だった。犯罪者にはなりたくありません。

「あ、そだ純にー純にー」

「あ？」

「ゴムとび用のゴム何処やったっけ？」

「知るか」

「知つといてよ」

「知つてもどうにもならん」

えー。そかな。

「んじゃ、あれは？ 縄跳び用のゴム」

「んな物あつたか？」

「無いと思う」

「何がしてえんだよ」

「暇つぶしを」

「勉強でもしてろ」

気分じゃないんだよ。

あ、でもやつぱしなきやダメ？

歴史の復讐で五十問中四十七問できなかつたんだからしないとま
ずい？

うー。昔の事知つて何になるんだ！ と怒鳴りたいけどね、あ
たしつてば。

「岳！」

「あん？ 何にーちゃん。がり勉モード解除？」

純兄はロボットか何かですか？

「ゴム落ちてた。ゴム鉄砲するのはいいけどちゃんと回収しろ」

「ほいなんて、何か髪絡まってる。だれの？」

分かるかつ！

「んー、誰の？ 結構長くてくせっ毛って？ んな人居た？」

分かるかつてのに。

174 突然の璃々なんだよっ！

「きゃーっ！ やだやだおぼるるよお！」

「み、みーちゃん！？ 落ち着いてえっ！」

「どうしたの〜！？」

びっくりびっくり！

ばばんっ！ 璃々だよんっ。里山なのだよんっ！

あれあれっ？ りりの事覚えてくれてる人居るのかなア！？

95話、103話参照だよーっ！ あれ、でも結局りり活躍してないんだけどな。

「やだあっ！ 水きらあい！ 私はお茶派！」

『何か違うよね（〜）っ！？』

あ、んとね、んとね。りり達つてば今日地区プールなのオ！

そこでね、高山くんの妹ちゃんと、一緒にいたこと、もう一人のお友達かなっ？ を見つけたの！

前にヨーカイ？ みゅーちゃんつてのが来た時に何もなしで見え

てたのがりりつてば気になるんだよねエ……。

なんだかうむやまになっちゃってるけど。あれ？ うむやま？

うやうや？ うむうむ？ とにかくそんななのオ！

高山くんに聞こうと思っただのに、いいつつも風上くと追っかけっこしてるしさー。

……むう。修也くんつて追っかけっこしか興味ないのかなア？

あわわっ、じゃなくて！

とにかく！ 何が言いたいのかと言うとっ！

りりも幽霊見たアい！！

と言う訳で見える人に突撃っ！

「いーやーだーっ！」

「授業の時はちゃんと入ってるじゃん!？」

「はーちゃん、みーちゃんはいっつも見学チームだよ」

「あ、そうだったっけ。と、とにかくみーちゃん! 何でプール入れないのに来たの!？」

「美代も泳いでみたいもん!」

ふむふむ。みーちゃんって、美代って言うんだね!

みーちゃんでもいいや。

『じゃあ入ろうよ(〜)！』

「ううーっ」

お手伝いしてあげよオ! ほら、信頼を得てどうやったら見えるのか教えてもらうの。

んとんと、借りた貸しは返しなさい! の巻!

あれあれ、りりってば腹黒だっけ?

そうそう、あのね! 前にぎゅうぎゅう、じゃなくて牛乳のポスターのキャッチコピー考える授業あったの!

りりのはね、

『腹黒い人でも白くなります』

どうどう!？」

あ、こんなことやってる場合じゃ無かったね!

「みーちゃんっ!」

「あれ、知り合い?」

「……………違う」

おおっとオ!？ 急に雰囲気変わったよみーちゃん!

どしたのどしたの!？」

「あの人じゃない? ほら、あの、忘れもしない」

おおおっ! 高山さんの妹ちゃん、略して高ちゃん覚えてくれてたんだねっ!

「誰だったっけ?」

だああっ! 覚えてないじゃん! しっかり忘れてるじゃん! 忘れもしないってなんだったの!？」

「お兄ちゃんのクラスメートだよオ！」

「中学生が何でこんなところに〜!?」

中学生っ!? あれあれ!? あ、高山くんってお兄ちゃん居たっけ?

「下の方のお兄ちゃんだよ！」

「あゝ、岳お兄ちゃんの〜」

「そっいえば居た……っけ？」

結局思い出してくれないんだねっ！ いいよもっつ！ ううう。

「で、里山さんどうしたの〜」

「覚えてるんじゃないかっ！」

「用事聞いているんだけど」

何々!? この子達冷たいっ！

まるでプールの水みたいだよ！ ……あ、でも今は温いなあ。

「みーちゃんをプールに入れよう大作戦！ 手伝いに来ましたアッ！」

「やだやだやだやだやだ！」

『入りたいんじゃないの(〜)？』

「うう」

強行突破、あれ、使い方あつてるのかな？ 行ってみよーっ！

みーちゃん小柄だしねっ！

「とりゃあーっ！」

「みゆあみやみやっ!?」

凄い悲鳴だねっ!?

ばっしやああああああああん

おおー、凄い水しぶきっ！

………

………あれ？

浮いてこないよオ？

「みーちゃん！ だいじょーぼ」

「みーちゃんぶく」

言い切ってから潜ることをお勧めするよ！

『プハーツ！』

早いねエ。

「……………」

「みーちゃん出ようとしな〜い〜」

「……………」

「あれっ、そう言えばりり、なんでこの子達とお近づきになっ
てんだっけ？」

「んーっと、えーっとオ……………あぁっ!？」

「高ちゃん、なんで幽霊見えるのっ!？」

「突然だね〜っ!」

175 見たいのーっ！

「凄いねっ！ 高山くん家って大っきいんだねっ！」

「いや、普通サイズですが。んな事よりオレは何で里山がここに
いるのか知りたい」

「右に同じ」

「前に同じ」

「しゅ、修也に同じ！」

「ただいま」

……急に騒がしくなった。

イコール、勉強に集中できん。

「んでんで、どうやったら幽霊見えるのオ？」

「純お兄ちゃんに聞いてみよ」

来るな。Uターンしろ。Jターンも可。とにかく来るな。

やかましそうだから。

「純お兄ちゃん」

「来るなって言ったのに」

「聞こえてないよ」

声には出してねえからな。

「と言う訳で、んと」

「りりだよっ！」

「そうそう、璃々さんよろしく」

「馬鹿待てこれを置いてくんなら」

「聞こえてないふりはやめろ。」

「純兄、誰か来てんの？ 未理阿だったらこっちへ寄せ」

「何があつた、忍。」

「あんにやるーあたしのすもも盗りやがって。絶対許さん」

「何て分かりやすい。」

「……よ、よく分かんないけど怖いなっ！？」

「なら帰ることを激しくお勧めする」

「ヤダッ！ 幽霊どうやって見えるか教えてもらうまで絶対帰らないっ！」

ガキがこら。

……あ、ガキか。

「忍」

「何っ！？ 未理阿来た！？」

違う。どんだけ根に持ってんだよ。

「呼ばれて飛び込んでじゃじゃじゃーん！ 未理阿ちゃんでした！」

……飛んで火にいる夏の虫。

「出たな未理阿！ ちょっとこっち来なさい！」

「へっ！？ 何々！？ 何か居るの！？」

「違うのでした忍さん！ あれはお母さんがどうしてもすももが食べたいって言うのにすももを買ってお金が無くてやむなく「嘘つきなさい！」今やってるでした！」

「ちがぁうー！」

うっせえにもほどがあるだろが。

近所迷惑、画面迷惑？ とにかく五月蠅い。

よし、逃げる。

「あーっ！ ちょっとちよっと！ まだりりってば幽霊見る方法教えてもらってないよオ！」

「ついてくんなー！」

「はうっ！？ ううっ……でもでも、りりの夢は幽霊を見ることなんだよっ！？」

どんな夢だよ、そりゃ。

幽霊が見える程迷惑な事ねえぞ？ 冷凍庫を開けるとする。

『ここは我々のテリトリーだぁあああああ！』

ほれ、氷漬けにされるのが好きなある意味マゾが三人くらい詰まってる。

斬でも紹介してやろうか？ 確か氷を操れたはず。

「何をつかんでるの？」

「氷」

「嘘だあ」

ある意味あつてるけど？ 冷たいって所は。

「ねえね、ねえね、どうやってたら幽霊見えるの！？」

話題変わるの早えなこいつ。

そろそろ面倒になってきたんだけど……何がってもちろんこいつの相手をする事。

……ろくに相手してない？ じゃあ近くにいるだけで疲れるこいつを引きはがしたいだけってことにしといてくれ。

……もういつそ幽霊見えるようにしちまおっかな。

「ちなみに、なんで幽霊が見たい？」

「えっ！？ だって幽霊だよ！？ 道の生物だよ！？」

未知な。明らかに発音違う。

「テメエが死んだら何になる？」

「骨と灰！」

……………。

「霊体の方、魂の方は」

「幽霊っ！ 人魂っ！」

え、別物って考えてるか？ あーでもめんどくせえしほっとこ。

「幽霊はどんな感じだと思う」

「人の形！」

「そう言う事を聞いてんじやねえよ。性格とか、その辺」

「んー、おとなしいのとドロドローンなのと、とにかくいろいろ！」

ん、そだな。ドロドローンの意味が分からんが。

まあ、なんとなく聞いてみただけだけ。

「そんなのを一言でまとめて言つと」

「面白い！」

馬鹿。

「鬱陶しい」

「えええええええっ!?!」

耳に響く……。超音波とどっちが上かな。さすがに超音波までは
いかねえか。

「と言っ訳で見ないでいられることに感謝しろ」

「ええーっ、何か納得できなアイ!」

幽霊同等に鬱陶しいなこいつ。

「……声だけ聞こえるようにしてやる。その上で見たかったらまた
言え」

「ええーっ、今すぐ見たいよオ!」

いや、絶対後悔するから。本当に。

「じゃあこれも無」これだけでいいです!」「ん」

扱い方が分かってきたかも。

んーと。……耳の中と脳の一部だけに靈力を移せと? うあ、普
通にやるより面倒。

「じゃ、ちよっといじくるぞ」

「へ? 何を?」

「説明面倒」

「新しい四字熟語でしょうか」

あー、それでいいや。

「ひゃわっ!?!」

「うっさい」

「ゆ、指が消えた!?! って言うか、りりの中に入ってる!?!」

「五月蠅いと言っに。っつか、どうやって見てる?」

「あそこの鍋に映ってるよ」

あ、そう言う事。……片づけるよ、鍋。

「ん、終わり」

「え、これだけ?」

「……これだけって言うけど。すっっげえめんどくせえ事してたか
ら。俺がパズル得意じゃ無かったら数時間かかってるから」

「うつそオ!?」

嘘をついて何になる。うぁ、疲れた。

「んじゃ帰れ。耳に響くつつか、もう頭にも響く」

「はあい」

今日の分、明日に伸ばそ……。予定伸ばすとか好きじゃないけど。

オマケ

やったやった！ りりつてば幽霊の声聞こえるようになった！

いろいろ聞こえるな〜っ

『ぎゃああああああ』

『おらおらおらあっ！ 水攻弾ッ！』

『ちゃんと心臓あたりを狙え。無駄打ちするな』

『いーだる別に。弾切れするわけじゃあるまいし』

『……クスリ、かける』

『やめええええい！ 振りまくなっ！』

『……じゃあ』

『よ、よし。氷の槍なら許可……』

す、すっごく怖いよオ……。

176 おかしなモンには手を出すな

「で、やっぱり怖いから見たくねーって？ あ、聞きたくねーか」
「うう……うん。なんなの水攻弾って！？ 心臓狙えって！？ クスリって!？」

死神トリオ……あ、死神はいつぱい出てきたから最凶トリオに改名。に会っちゃったのか。

「とうわけでやっぱり聞こえないようにお願いっ！」

「いや、オレに言われてもどうすりゃいいか知らねーしなー」

あたしの方見ても、あたしだって知らないから。
忍です。

「何でっ!?! 何で……えと、お兄さんは出来るのに高山くんできないのオ!?!」

純兄の名前知らなかったんだ。

「んーと、にーちゃんはほれ、異常なんだ」

岳、その言い方はどうかと。

「あ〜」

そのこのピンクも納得しない。

あ、ピンクって、着てた服がピンクだったらピンクって言いまして。
た。

頭の中ではありません。

「りりってばお兄さんに会いたいんだけど……何処に居るのオ？」

『寝てます』

「ええっ!?! 絶対早起きする人だと思ったのに!?!」

ぴーんぽーん、大正かーい。

いつも無駄に早起きしてます。稀に二度寝。

「え? でもまだ十一時だぜー? オレだったらまだ寝てたい時間

……あ、何か急に眠くなってきた。朝の変な味のお菓子のせいか？」

何変なものに手え出してんの。

「お休みー。でも寝るなら布団へゴー」
ほっとくけど。

「あーいあーいさー」

うあ、本当に眠そう。

「え、え、え、止めないのっ!?!」

「床で寝られるのも邪魔だし」

「……………不思議一家だね」

そうかな？

父：野草オタク&変な話を即興で作る

母：怖いと言えば怖いかもしれない

兄：よー分からんが色々な意味で異常

岳：元氣

光：料理異常

「そうだねー、まともなのあたし位じゃん」

「りりはお姉さんも含めていったんだけどねっ!」

え？ あたしも？ どこが？

「んでー、どするの、ピンク」

「りり!」

「どするの、りり」

「どするって?」

んー、だから。

「1.このまま諦めて帰る、2.午後に出直してくる、3.純兄を
たたき起こす」

「3で!」

よしよし、分かってるなこの子。

「起つきろーっ!」

「起つきてーっ!」

「やだ」

起きてるじゃん。

「あのあのっ！ これ、聞こえないように……」
いきなりいった。

「んあ？ あー、だからやめとけって言ったのにー」

純兄眠そー。岳は熟睡中。

「え、あのー、まさか戻せないとか……？」
不安そう。

何をしてた最凶トリオ。

「すうっげえ時間掛かる。戻すの」

「すうっげえ？ つて、どれ位？」

「んー、まあ、最長コレくらい」

「パー。……じゃないよね。」

「五分？」

「まさか」

「五十分？」

「舐めてんのか」

「ご、五時間……？」

「五日」

『ええええええっ！？』

「というわけでまあ、残念だったな。ちなみに俺はやる気なし」

いやいやいや。ほっとくなよ。無責任な。

あたしには関係ないけどさ。

元はと言えば、幽霊みたいとか言っ
て靈力に手を出したりりが悪
い。

「これでよし。」

「………いいのか？」

177 兄をシメよう

「にーちゃんが壊れた」

「変なのは前からじゃ無かったかな」

「光に言われたかねーと思うけどな」

一応常識人かも知れないかもしれない人だった気がしないでもないのになー。

あ、自分で言ってる意味分かんなくなった。

忍でーす。

最近純兄が人間離れしたことをするようになったのでちょっとした会議を開きました。

会場、あたしと光の部屋。

純兄は隣の純兄と岳の部屋で勉強中。純兄がよっぽど集中してなかったら聞こえるんじゃない？

その辺は一応考慮して小声だけど。

「壊れたトコその一。何か変な穴開けてた。おかげでオレの机はきれいになったけど」

何か必死に片づけてたもんね。何があった。

「壊れたトコその二。なんだか霊力操れるみたいだね」

りりは結局どうしたんだろうねー。

「壊れたトコその三」

「え、ほかにあったっけ？」

一応あるよ。

「がり勉」

「ああ」

おお、納得した。

前はテスト前しか勉強して無かったのに、夏休みに入った途端急にし出した。

「でもそれって受験生だからじゃ……」

はれ？

「なつくんもいつもよりやってるらしいよ〜？」

『おかしいのはねーちゃん（お姉ちゃん）の方じゃね（ない）？』
え。

あはは。

うん。

「それはまあ置いていて」

「置いとくべきなのか？」

「置いとくべきじゃない気がするね〜」

置いといて。ちゃんとやるから！ 歴史が嫌でほっぽってるんだ
けどもん！

……ダメじゃん。

「話戻すよ！ で、いったい純兄はどーしたのでしょーか」

『うーん……』

「あ、あれじゃね？ ほら、妙羅がにーちゃんに仕事手伝わさせる
とか言ってたじゃん」

『あ（〜）っ！』

それだ。絶対それだ。

そのついでに妙羅が何か変な事吹き込んだな！

「その仕事は全部放置してるけどな」

『ぎゃあっ！？』

「……………」

何か反応してよ。怖いよ？ 無言で部屋の入口に立たれても。ね

え？ 純兄。

「ん。そう言う事だ」

『どつ言う事！？』

説明足りん！

「何で小声で話してたのに聞こえたの！？ 壊れたトコに追加っ！」

地獄耳は元からだからー……………んと、超絶地獄耳！

「え、あれ小声だったのか？」

……あー、うん。普通に話してたね。

小声のこの字も無かったね。

「と、とにかく！ にーちゃん説明！ こないだはもやんされたからなー！」

もやんされたて何さ。

「えー」

『えーじゃない！』

「んー」

『んーでもない！』

あ、この辺も壊れてきたかも。隙なかったのに。見つけらんなかっただけな気もするけど。

「……ん。企業秘密」

『何の企業だよ！』

十五にして仕事人間とかよしてよ？

……うー、あたはまだ十四なのに何で純兄は十五なんだろう。

幼稚園の時の疑問がぶり返してきた。いや、分かってるけどねー、分かってるんだけどね。

「んー、死神のという事で」

「やっぱり人間離れしてる！ どうしよねーちゃん！」

「よ、よし。まずは妙羅をシメるところから始めよう！」

「無理だから」

やる前に諦めるのは……何だっけ。

「んじゃ説明寄せ〜！」

ビシッ……と決めてるのに口調でいまいち決まらない光ちゃんでした。

「え」

『えじゃなあああああい！』

もうこのループは面倒になってきたので純兄をシメる事にしました。

……あれ、何か無謀な事してる気がする。

「ん、ん、ん。よし」

おー、抑えられた。両手片足で抑えられた。

「岳、大丈夫？」

「鳩尾入った……」

ドンマイ。

「んで、誰をシメるって？」

『ごめんなさい』

「よし」

あっさり。

「つて、おーい。説明は」

「次回」

言っちゃいけない事をさらりと言ってた気がする。

178 壊れた原因

「と言う訳で説明してもらおうよ〜！」

と言う訳、が分からない方は前話へお戻りくださいませ。
忍でーす。

「んで？」

「いや、だから説明しろって！ にーちゃん何で故障したの？」

「人をロボットか何かみたいに言うな」

え、でも手が故障したとかって言うじゃない。

「口で説明しろと？ めんどくせえ」

『そこめんどくさがらない！』

「……よし、別の奴に聞いて来い」

『誰につ！？』

「開く」

おー、あたし達三人の真下に真っ黒な大穴が……え。

『何するかっ！』

壊れたところをさらに追加ーッ！

「行てら」

『行てらじゃなあああああい！』

と言う叫びもむなしく、あたし達は落ちていくのでした。

……………気分はお結びころりんのお結び。

「……あ、しーねえたーにいひーねえ。何、干されてる」

「干されてねーよー！」

気が付いたらでっかい木にぶら下がってました。気分は布団。

下では何やら斬が何か口に出したくない色々なものを広げています。頭の中の警戒警報が五月蠅い。

「とりあえず降りよ？」

この木、でかいくせに下までしっかり枝がある。変なの。

「……しーねえって、猿？」

『うん』

「こらそこ、失礼なこと言うな。

木登りに慣れてるだけだ！ ……あれ？ 猿って褒め言葉だった？

「岳と光も早く降りといでー。足場大量にあるでしょ」

「飛び降りてキャッチしてくれるって言うのは無し〜？」

「岳は百パー無理。光は………んー、やっぱり重そうだしやめて

「女の子に重いとか言っちゃいけないだよ〜」

「はいはい。あたしも女の子ですが？」

「……で、何しに来たの」

「にーちゃんが壊れた」

「じゅーにい？ 昨日も会った。壊れて無い」

昨日『も』？

「純お兄ちゃんが何かね〜、色々変な事できるようになっただから
〜」

「……変な事？」

「一、何か変な穴開けてた。物しまえるようなの。

二、霊力操った

三、オレ等を変な穴に落っことしてここに飛ばした……あれ、こ

こ何処？」

「森」

「いや、そりゃ見たら分かるよ。

「……世界の事？ なら、霊界」

『何処だよ！』

「……現実世界と幻想世界の間の現実的世界と幻想的世界の間の小
さい世界」

げんそうてきせかいとげんそうせかいのあいだのげんじつてきせ
かいとげんそうてきせかいのあいだ？

『ややこしいわっ！』

「現実世界と幻想世界のド真ん中」

「幻想世界ってどんなのだから。世界の位置について考えることは放棄しました。」

「霊界ってことは幽霊も居るの？」

「……幽霊は冥界行特急列車待ちのだけ。居るのは死神、神、死神か神候補生、妖怪、オバケ……その他諸々。」

「冥界行特急列車って。特急列車って。おい。」

「オバケと幽霊は違うの？」

「オバケは生まれた時からオバケ。幽霊は何か死んだモノほえ。」

「……あれ、何か本題がどっかに行っちゃってしまってるけど。」

「でっ！ にーちゃんは結局どーなったんだ？」

「あ、岳も思ってたんだね。」

「……何も変わってない」

「んじやさっきの壊れたとこ一、二、三！ は何なんだ？」

「壊れたとこ一、二、三！」？ 幼稚園児向けの歌の曲名みたい。

「二、三……死神なら誰でもできる」

「兄が死神になりました。……ごろ悪い。」

「何でにーちゃんが死神見なくなってるんだよ！」

「死神、感染する」

「病気か！？」

「感染症！？ 怖ッ！」

「ミイラ取りがミイラになるようなもの？ あれ、何か違う？」

「ミイラの奥さんがミイラになるようなもの？ 怖ッ。」

「……そのうちしーねえ達も死神に……」
「なりたか無いです。」

「んじや、にーちゃんは死神が感染して死神になったと」

「……うん」

「多分」じゃなくて「うん」なんだ。

「……ちなみに、いつからなってた？」

最近じゃないの？

「……………」
あれ、おい。この沈黙何！？

「……………最初から」

『はあっ！？』

御冗談を。

「本当。最初に会った時、死神だった」
「うっそだー。」

「斬くん。死神って、どれ位でうつるの？」

「半年から一年……………」

あ、原因絶対妙羅だ。

五年の時絡まれて困ってたのなんなのうんぬんって言ってた気がするし。

「あれ？ だったらあたし達もうとっくになってるんじゃない……………」

「じゅーにい、普段は人間。たまにしか死神しない」

へえ？

純兄も死神したら和服着るのかなー？

「……………そう言えば、四年くらい前にじゅーにいっぱいの見たって。未理阿が……………」

記憶力良いんだねー未理阿。あたしから盗んだものも覚えてるのかな？ ってか覚えとけ。

「あ、そだ。一つ質問」

「……………」

「壊れたところー、は？」

「……………ミュウの血でも飲『怖いこと言うなっ！』……………でないとしてうはなら……………あ」

あ？ どした？

「……………うん。妙羅が飲み物に混ぜて飲ませた」

あ、言い切りやがった。

「お姉ちゃん！ 純お兄ちゃんが吸血鬼になっちゃったー！」

「騙されただけっぽいから落ち着いて」

「……便利だから、いい」

そこ、開き直らない。

はい、調査結果。

純兄が壊れた原因「妙羅

死神感染させるわみゆうの……んと、うん。とにかく。元凶あいつだ。

「まあ、原因分かってよかった……のか？」

『……………』

「うおわっ!」「わっっ」「おあっ」

「ん。お帰り。分かったか？」

斬に送ってもらいました。出たところは純兄の真ん前でした。思い切り体打ちました。

もっと優しくやってくれ。

「色々な「ちゃんが大変だった事は分かったかも」

「ん。そか。……あ、そだ。これ付けとけ」

ミサンガ? あ、多分これ純兄お手製。

黒い紐で編まれてて、透明な石がついてて、その中で赤いのと黒いの露がぐるぐるしてる。

めーがーまーわーるー。

「何コレ。ミサンガについてる石高そう」

反応するのそこ?

「売るなよ? 死神感染予防のミサンガ。なりたかねえだろ」

何で分かった。エスパー?

「分かった。ちゃんと付けとく。でも何で今更?」

「なかなか石が手に入らなくて。見つけてもやたら高えし」

あ、やっぱり高いんだ。

「一応四年前から探してたけど」

……絶対それ無くすなよってアピールだね！？ そのこあい微笑み消して！

「ねー純兄。妙羅に何か変なの飲まされたって……」

「ミユウの血は別にまずくなかったけどな。人間と違って」

あー、発言もおかしくなってきた。

「……………お姉ちゃん〜！ 純お兄ちゃんが吸血鬼に〜！」

「ならねえよ」

「お兄さーっんこつちら、どつちら

何の歌だろう、これ。

忍でーす。

お風呂あがりです涼しいです。

「おにーさん居るー？」

「お前の『おにーさん』って誰を指すんだ？」

「あたしは純兄以外に兄さんいないよ」

「鬼じゃねえのか」

聞き間違い？

「忍あがった？ 純、次入る？」

「後でいい」

「じゃ次入る」

「おとーさん今日は早いね」

「うん」

道草食ってなかったんだねー。

家のおとーさんの場合本当に道端に生えてる草食ってんだから困る。

いくら野草美味しいからって……ねえ？

ちゃんと公園の水で洗ってるとか言ってるけど……そういう問題じゃないでしょ。

「ん、俺ちよつと行って来る」

「どこに？」

「どついう訳か死神どもに押し付けられた仕事」

純兄が仕事人間になつちやつたあつ！？

しかも何か妙羅に限定されていないのは何故っ！？

オマケに自分も死神だよねー。

「行ってらっしゅい。夜食作つとくから遅く帰ってきてね」

「違つだろ、それ」
「え、何でおかーさん普通にしてるの？」
「え、だって今まで何千回とあったことだし」
「何千とあってたまるか」
「冗談だよ。何百回とあったことだし」
「あれ、純兄が否定しない。」
「嘘」
「ホント」
「おとーさんは？」
「知らないよ」
「よく気づかれなかったね」
「ってか、よく気づかなかったね。あたし達も。」
「でも純も開き直ったね」
「昨日教えたし」
「あらら。そうなの」
「うん」
「行ってらっしゃい」
「ん」
「行ってきます位言おうよ。」
「行ってらっしゃい。」
「何で二階上がるの」
「人前で死神になるの嫌なんだって。可愛いね。家族なのに」
「可愛いか？」
「死神になる、の方は見てみたいけど。」
「忍も可愛いよ」
「突然そう言われても」
「あはは」
「困るだけだつて。」
「何作ろうかな」
「おにぎり希望」

「……食べる気満々ね」
「そりやもちろん。」

「あたしも手伝うからさ」
「ならよし」

「おかか食べたいな」。

「……あ、ところで。」

「そついえばさ」。死神って給料あるのかな」

「そりやあるわよ」

「ですよー」。

「じゃないと妙羅とかどうやって生活してるのさ。」

「この家の貯金一部は純のお給料だもの」

「嘘お。」

「危うくせつかくできたおにぎり落とすところだったよ。」

「死神のお金って円なんだ」

「宝石」

「……え。」

「質屋で売ったら凄いのよ」

「近所に質屋何てありましたでしょうか。」

「一回で諭吉さまが十人くらい」

「死神って給料いいんだねえ」

「霊界の質屋ってすごいのよ。円でもドルでもユーロでも何でも

「アリ」

「霊界に質屋があるんだ。」

「そりやたしかにすごいかも。」

「………どんな世界だよ霊界。」

180 頭が頭が

「明日は日曜日！」

「119番。救急車」

凜、いきなりその反応は何だ。

吾輩は父である。

名前はまだ無い。……酷くね？

「お袋、ボタン今間違えた。110番押しただろ」

「あは、間違えた」

「本気で通報するな！」

「冗談だよ」

冗談で通報しないでほしい。

「で、何があつた？」

「明日は日曜日！」

「お袋、やっぱ通報しよう」

「こら純！」

「ほいな」

ほいなじゃなあいつ！

「何でそんな反応ばかりする！？」

「明日は木曜日だし」

「日曜日はもうちょっと先だし」

日曜日であつてほしいから日曜日と叫んでみただけだろう。

「……………純、何をしている？」

「こつすれば頭も冷えるだろ」

「首に直接氷を当てる奴があるかっ！」

冷たいから気持ちいい。と言つ前に何だか痛い。

「保冷剤だよ。貴重な氷をわざわざ使うもんか」

皆が使うからすぐ減るもんない。氷。

「何か馬鹿にされた気が……………」

「気のせい気のせい」
「そうかなあ……。」

「お袋、冷却ジェルシートってあったっけ」
「絶対馬鹿にしてる！」

「残念ながら」
「残念じゃねえよ。」

「……あ、氷嚢ならあったんじゃないかな」
「本気で探しに行かない！」

「氷嚢何て家で見たことねえんだけど」

「うん。無いな。ところでいい加減保冷剤どけて」

「ヤ」

「ヤじゃなくて。」

「無かったよ」

『やっぱり』

「代わりに湯たんぽなら見つけたよ」

「温めてどうすんだよ」

「冷やしてどうすんだよ、と言いたいけどねお前の親父は」

「いい加減冷たさで頭が痛いんだけども？」

「で、頭覚めたか？ 明日は木曜日であって日曜日じゃねえの。おけ？」

「おけ？ って数年ぶりに純の口から聞いたなあ……。」

「日曜日であってほしいなと言う切ない願いにこんな突っ込みをしなくてもいいと思うんだけどね」

「まだ覚めてねえのかな。目に保冷剤突っ込んでやろうか」

「やめんか！」

「痛いから！」

「はふう。おはよ」

「忍、いきなり入ってきてトンデモナイ事言わないでくれ。」

「まだ日付も変わってねえから」

「おはよ。早く寝なさい」

「んー？ にいやんまだ起きてるの？」

「にいやん？ 初めて聞く言葉だ。」

「何の夢を見てたのか激しく気になるけどとっとと寝ろ」

「気になるんだ。うん。おとーさんも気になる。」

「んー、残念ながら目が覚めた。と言う訳で純兄何か相手して」

「数独するか。競争で」

「絶対負けるじゃん。あたし」

「困暮」

「ルール知らない」

「俺も知らん」

「なら言つなよ。」

「親父の頭の矯正」

「よしやるっ」

おいこら。矯正するようなとこなんか無いよ。

「で、どこがおかしくなったの？ どのネジが飛んだ？」

「ネジが飛んだとか言つな！」

「おとーさん。明日は何曜日？」

「日曜」純兄どうやって強制し「って言いたいけど！ 木曜日！」

「ところで忍。」

「どこから話聞いてた？」

181 プールでもやるよ

「修也！」

「……？」

「どっちが長く潜ってられるか競争な！」

「ガキ」

「あゝあゝ！？」

岳だ。ガキではない！

「何でいきなり潜り競争なんだよ」

「んじゃいつも通り追っかけっこで。よーいどん」

潜る。逃げる。

さーって。どこに逃げたら捕まりにくいかなーって。

やっぱり人の多い所だよな。

後はでっかいビート版の下に潜るとか。

お、でっかいビート版めっけ。上に一人のって、二人で引っ張っ

……って、あれ？

光たちじゃね？

「怖いよっ！ ひーちゃんはーちゃん戻してよう！」

美代が壊れてる……。

「ダメ〜！ 水になれないと〜」

「そうだよっ！ ほらほら、たのしーよー！」

こいつ等、鬼？

それとも思いやりのある優しい友人？

オレ的には前者に見える。

だって、二人とも無駄に笑ってるし。

「岳ッ！」

「修也あつー！？」

ヤベ。捕まるまでもう五メートルねーじゃん。

逃げないと。

翔、ナイスだ。教えてくれてどーもあんがと。

そーいや古閑いねーな。地区違うしなー。

さてさて。どう逃げよう。

「捕まえた……ッ！ お前、泳ぐのは遅いな」

修也が速いんじゃないの？

でもなんかム力つくから言い訳……。

「オレは武闘派なのっ！」

「……関係無くね？」

思いつきで言ったんだから関係なくてあたりめーだろ！

「何を威張ってるのか知らんが威張るな」

あた。ぶたれた。

「口には出してねーじゃん！」

「威張ってたのかよ！」

「知らずに殴ったのか!？」

「無論だ」

無論かよ！

「テメーこそ威張ってんじゃねえっ！」

喧嘩だ喧嘩！

流石に顔面殴ったら（だって水から顔と肩くらいしか出てないし）

まずいかなーと言う訳で、オレは必殺奥義。水鉄砲を使う！

……必殺奥義ってついた割にシヨボ。とか思った奴！

これだつて結構強えんだからな！

目なんかに入ったらしばらく反撃不能なんだからなっ！

そんな都合よく入るか？ オレを舐めんな。コントロールには自

信がある！

「とりゃ」

「フン」

ああっ!？ ずっこい！ 水ん中潜りやがった！

「こら修……ゴボッ」

足払いすんなあっ！

ああもう、プールとか海って嫌い！

自由に身動きとれねーもん。

人間は陸で生活する生き物だっ！

魚捕るときゃ釣竿使うの！

「プハッ！」

「ほんつとに水ん中だと遅いな」

「テメー水泳でもやってたんじゃねーの？」

「ちよつとしかしてねえよ」

してたんじゃねーか！

「キャッ！ 修也君カツ」

「何この漫画的展開」

「知らん」

「知つとけよ。自分の事くらい」

あれ、何かさっきの言った女子、隣の子に何か言われてる。

何々？

「あれのどこがいいんだか」

オレも思う。激しく。

182 プールで酔う

「わお、岳が逝っちゃってる」

「いつもからかってる子にからかわれた上に遊ばれて疲れたんだって」

倍返しされたんだね。

忍でーす。

明日はきつと雪なので石油ストーブでも用意してください。

なぜなら、あたしが今日は勉強しかしてないからだよ！

ちなみに石油ストーブなのは節電のため。料理もこの上でしてみたら？

「水はもう見たくもない」

「今君の髪から落ちたのは何かな？ 水滴じゃない？」

ちゃんと頭拭いた？

短髪でどうやって濡れたまま帰ってくるの。

「んじゃ、そう言う事で」

「どう言う事？」

何だろ。

岳が、酔った時の良雅くん父じょうがみたい。

良雅くんって、山口の幼馴染の一人ね。

良雅くん父凄いんだよ。酔ったらとことん変な事言い続けるんだから。

「あかさ、あかさ」

「どのさっ？」

「うー」

本格的に良雅くん父だあ。

「どした？」

「岳が良雅くん父化した」

「……酒でも飲んだか？」

「飲まねーよ！」

あ、普通に突っ込んだ。

「何処が良雅くん父？」

「さっきまでそうだったんだよ」

「ちゃーうもん、ちゃーうもん」

あ、またおかしくなった。

「良雅くん父ほどでは無いけど……変だな」

「ね？」

なつくんとはーちゃんにも見せたい。

「お帰り」

「あ、母さん居たの？」

「あはは。ぶっ飛ばすよ？」

怖い怖い怖い。

「ごめんなさい殴らないで」

ペコリ。

あら、治った？

「お詫びにふんどし奢るから」

治って無かった。

「いらねー」

「らね」

「ね」

ザ・木霊。

それはともかく。

「岳どうしたの？」

「プールで疲れたの」

「んで酔ったの」

岳、自分で認めた……。

「ベットへゴ」

「ゴゴゴ」

「早く行きなさい」

「アイアイサー」

「ごん

あ、壁に頭ぶつけた。

どたっ

あ、階段に躓いてこけた。

「なぜだー」

前をちゃんと見てないからだと思います。

「がん

「ぎゃあああああああつ！」

あ、足の指ぶつけた。

小指じゃなくても痛いよね。

「何かすうっげー階段に喧嘩売られてる気がするからもうここので寝る」

「邪魔だからやめろ」

「えー、じゃあにーちゃん運んで」

「絶対やだ」

絶対までつけなくても。

「んじゃねーちゃん」

「体格的に無理」

もう岳つてあたしと十センチも変わらないしー……。

何か行つてて腹立ってきた。

「と言っ訳で、てい」

「痛っ！？ 何で!？」

「イラッて来たから」

「なーんでなんで、なーんでなんで」

「もっかい蹴ったるか」

「ご勘弁を」

じゃあさっさと酔いから覚めなさい。

183 最初の話題なんて次第にどこかへ消えるもの

「しのぶちゃんひかりちゃんたけるちゃんじゅんちゃん、せみとりいこー!」

忍です。

菜美の発音が大分しっかりしてきました。

「何でお兄ちゃんたちが後なのかな? 菜美ちゃん」

「にゃんとなくっ」

「にゃんとなくこの子は強くなりそう。」

「神谷網持つてきたんだっ!」

「神谷、蝉は手で捕れるよ」

え? 捕らない?

「網使いたい」

その気持ちは分かる。振り回すの楽しいよね!

……あれ、違う?

「兄ちゃん達は?」

「岳お兄ちゃんはお友達と遊んでくるって。純お兄ちゃんは…」

…お姉ちゃん知らない?」

「台所に居たよ。アイス食べて……あつ、今の無し」

『食べよ〜!』

今の無しって言ったじゃん! いや、効果ないだろうな〜とは思ったけど。

次に冷凍庫開けたらアイスなくなってるかもしれない。

よし、食われる前に食うべし。どうかで聞いた誰かの教え。誰だつたかなあ。

「純兄ちゃん食べていい?」

「なみもなみも!」

「私も」

あ。食われる前に食うべしの前に食われたら意味がない。

自分で言つといてなんだけど意味分からん。今の言葉。

「あたしの分残しといてよーっ！」

『残念でした〜』

「はあっ!?!」

もう無いとでも!?

「大人気ブドウ味は売り切れで〜す〜」

「金取るの?」

「取らないよ〜。頭固いなあ〜。石頭だな〜。殴っても痛くない〜?」

何か酷い言葉の羅列が聞こえる気がする。

「つて痛い痛い痛い。こら光、叩かないの」

「だつてお姉ちゃん岳お兄ちゃんたまに殴つてるじゃん〜」

「それはともかく」

「話変えないですよ〜」

いやだつて。それよりアイス食べたいし。

……本当にブドウ味無くなってる。

でもっ。あたしは見た!

昨日、おかーさんが美味しそうなチョコアイスを冷凍庫の奥深くに隠すところを!

カップのと箱入りのコーンアイス。

カップはとつたのばれるからコーンアイスだね、やっぱり。

「じゅんちゃん、ちよーだい!」

「あ? 菜美も今食ってるだろ」

「じゅんちゃんのもたべたい! そっちのほうがおいしいでしょ!」
菜美……何で分かった。

純兄の食べてる、んでもってあたしも今食べようとしてるコーンアイスが数十円高いことを!

買ったのあたしじゃないから多分だけどね。

「何でそう思う?」

「いちごかにくはいってるもん! チョコレートだもんっ! ぱり

ぱりのチョコのなかにアイスクリームのチョコはいつてるもんっ！」
菜美、どうやって調べた。

純兄はお行儀の悪いことに立って食べてたからコーンの中見えな
いはずなのに……。

「えへへ、なみ、はないのー」

鼻がいいとかいう問題じゃないでしょ！

そういえば。蝉取りはどこ行った？

184 カナカナくん

「居たよー。そーっと、そーっと……」
しーっ。大っきい音立てないでね。
忍でーす。

蝉を取りに、雑草やら蜘蛛の巣やらのせいであまり散歩したくない散歩道にきています。
散歩道としてどうなのこれ。

「えいつ！」

「とれたとれたー！ カナカナくん」

カナカナくん？ カナカナ……と言えばヒグラシ？
んえと。

「菜美、これアブラゼミ」

「カナカナくんってなまえなの！」

「こじつけ！？ それとも捕る前に決めてたとか？」

「あっ！ あそこにも居るよカナカナくん！」

「アブラゼミ全部のあだ名ですか！？」

「うん」

そこであっさり頷かないでほしい。

「ちがうよ。せみぜんぶ」

さらに範囲広くなつたあっ！？

「それよりっ！ 早く捕らないと捕られちゃうよあのカナカナくん」

「どこ？」

「あそこ！ あの小っちゃい木！」

あ、あの大きい奴。

「捕られちゃうって？」

「カマキリ！」

あー、カマキリに食われちゃうって？

「ジジジジジッ！」

「あ、捕られちゃった」

あらら。

でもめったにカマキリのお食事シーンなんて見られないよね！。

「もういつそカマキリ捕まえりゃいいだろ」

「純兄暇そうだね」

「ん？ いや、カナカナくんなら五匹くらい捕った」

純兄までカナカナくんって……。

「その取ったカナカナくんは？」

「そこ」

ん？

「カナカナくんのびんづめー」

「響きが怖いからやめなさい。入れるなら虫取り籠へ」

「えー」

えーじゃなくてっ！

「だってだって、むしろごこんだよ？」

……忘れるのっさ。覚える事より難しいって誰かが言ってた。

でもあたしは今見たものを忘れたいんだけど。全っ力で！

「何で蝉でぎゅうぎゅうになってんの!？」

「いっぱいとれた!」

「そりゃ見たら分かるけどね！ 何匹か離そ!？ ね!？ なっち

ゃん……お母さんびっくりするよ!？」

「うー。わかったあ」

よしよし。

「お姉ちゃん。せっかく何匹入るか試してたのに」

「お前が原因かっ!」

「集めるの大変だったんだよ」

よくぞ集めたと褒めてあげたいけどさ。

「忍姉ちゃんっ！ あそこあそこ、捕って!」

「どそこどそこ」

「木の上！ 高い所。神谷登れないから、捕って!」

誰かがすでに上ってるけど。

「凄いなー、四階建ての建物くらいの高さあるのに。いや、あたしも登れるけど。」

「ジジッ」

「よしゃっ！ 修也捕ったぜ！」

「じゃ、頑張つて片手で降りて来い」

「っ、岳達じゃん。」

「ええーっ！？ 虫籠こつち投げろよ！ 蝉入れて落とすから！」

「だめっ！ 生き物は大切にするんだよ、高山！」

「あ、あの古閑つて子結構いい子だねー。」

「そして翔。空気化してるね。」

「岳お兄ちゃん、何してるの〜？」

「へ？ あ、居たの？ カナカナくん捕りだけど。自由研究の材料

調達とも言っ」

「カナカナくんって、流行ってるのかな……じゃなくて！

「自由研究に何をするつもりだ！？」

「違うよ、工作の材料調達でしょ」

「工作に何を作るつもりだあっ！」

「馬鹿。工作の見本調達だ」

「ああ、やっと安心できた。」

「何作るの？」

「カナカナくんの木」

「よかつたね、やっと喋れたね、翔。」

「カナカナくんのき？」

「……木にカナカナくんが生つてるところを想像してしまった。怖っ。」

185 困ったの

「お兄ちゃん」

「あ？」

「困ったの」

「へえ」

「困ったの」

「ふうん」

「困ったの」

「ん」

「困ったの」

「やかあしい。」

「純だ。」

突然光が入ってきたかと思ったら……いや、別に思ってたわけじゃねえけど。いきなり『困ったの』を連発してきやがった。

「困ったのお」

「そか」

「うん。困ったの」

「ん。忍にでも聞いてもらえ」

「忍お姉ちゃん裏山行ってるの」

「何故に。」

「食べられる木の実の話おじいちゃんから聞いてね。一人で探しに行ったみたい」

「暑さで脳が溶けたか？」

「……でも、食べる木の実見つけんならその気の場所教えてもらおう。俺も食ってみたい。」

「困ったの」

「そこに戻んのかよ」

「困ったの！」

「岳は？」

「カナカナくんの木作りに翔くん家に行ってるよ〜」
「何でこんな時に限って居ねえんだよ。」

「こ・ま・っ・た・の〜」

「妙羅」

「妙羅はダメ〜」

「ちえ。」

「未理阿」

「未理阿ちゃんもダメなの〜！」

「霧瑠依は？」

「死神軍団ダメ〜」

「む。」

「夏」

「なつくんもはーちゃんもお出かけ中〜」

「ほんとに、何でこんな時に限って居ねえんだよ。」

「おふく……あ、仕事か」

「そう〜。だからお兄ちゃんしか居ないの〜」

「ちえっ。」

「あのね〜」

「俺は聞くとは言ってるねえ」

「聞いてよ〜！」

「はいはい」

「あのね〜」

「聞くとは言ってる戻らないの〜！」

「わあっただよ。聞けばいいんだろ？」

「聞くだけだけだ。」

「で？」

「私のね〜」

「うん」

「大事なね〜」

「うん」

「宝石ちゃんがね〜」

「うん？」

「家出しちゃったの〜！」
「は？」

「宝石が家出？」

「そう〜」

「生物でないモノが家出したのどうここの前に宝石持ってたのか」
「持ってたよ〜。たまにお店とかに置いてある何の石が入ってるか
分からないドキドキな箱のやつ〜」

「ああ、あの数百円で売ってる、持ってるのと被ると何か落ち込む
やつ。」

「なんとなく金を捨ててるような気がするアレか」

「酷いな〜。そんな言い方ないでしょ〜」

「忍の持ってた、土を削ってパーツ取り出して組み立てる恐竜の化
石もどきは面白かったけど」

「話が全然違う方に曲がっちゃってるよ〜」

「人間の会話なんてそんなもんだ」

「そんなもんにしないでよ〜」

「ん。何の話をしてたっけ。」

「話戻すよ〜？ 宝石ちゃん探して〜！」

「ヤだ」

「即答〜!？」

「めんどくせえ」

「こんな時にめんどくせえ病なららないでしょ〜」
「ん？ これ病気なのか。へえ。」

「まあ頑張っつて探せ」

「え〜っ。手伝ってよ〜」

「夏じゃねえんだからプランターの中にあったりはしねえだろ」

「当たり前でしょ〜。なっくんは失くすところがおかしいんだよ〜」

失くしたはさみが木に突き刺さってた事もあったな……。

「私が三分探して見つからなかったら一緒に探してね〜」

「ん。……って短つ。せめて一時間は探せ」

「え〜っ!?! カップラーメンでできるの待つ三分は長いでしょ〜」

「全然違つだろ、そりゃ」

「間を取つて五分ね〜、絶対だよ〜」

「どこが間を取つて、だよ。」

「あつた〜!」

早つ。

「お兄ちゃん〜、プランターの中にあつたよ〜!」

何でんなトコにあんだよ!

三分後

「お兄ちゃん〜、あのね〜。また困つたの〜」

「自分で解決できねえ事か?」

186 猫がぼろん

「みにゃあ〜っ!」

「お姉ちゃん〜、猫ってあんな声もあげるんだね〜」

「うん、あたしも初めて聞いた」

「悲鳴つばいけど何だか語尾がほのんってしてたよね〜」

「光に言われたくないと思うなあ……………」

忍です。

北側にある和室でゴロゴロと日陰ぼっこ、何て響きからして不健康そうなことをしてたら悲鳴らしき猫の鳴き声が聞こえてきました。

「にゃーっ、にゃーっ!」

「お姉ちゃん〜、白猫ちゃんが来てるよ〜」

「んー? あ、クロだー。久しぶりに見たなあ」

訂正しとこう。久しぶりに会ったなあ。

『忍ちゃ、忍ちゃ! 早く来! 緊急事たっ!』

『クロ、その一番最後の音言わないの意味わかりにくいからやめよ?』

『むむ。そ? むむむ……………やっぱりこの口癖やあめたっ! ……………』

…って、そうじゃなああああ!』

口癖ってそんなにあっさり帰れるものじゃないと思うんだけど。

「お姉ちゃん〜、こんな叫び声も上げるんだね〜。ぎにゃああああ

ああって〜」

怖いな、この叫び声。

『ミルクが大変なんだっ! 穴にぼろん』

『何かその効果音違くない?』

んでもって地味に怖くない?

『そんなこと言ってんじゃなあいつ! いいから早く来るっ!』

「と言う訳で光、ちよっと思って行く」

「分からないよ〜。にゃ〜にゃ〜って二匹の世界に行かないでよ〜」

あたしも匹で数えてるっ!?

「何かミルクって猫が穴にぼろんしたらしいから、猫助けしてくる」

「穴にぼろん? 首でも落「言うなっ!」」

グロい!

「あはは、行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

裏山、しかしどこの裏なのかは分からない。別名謎の山。

その入口付近。獣道だけど。

「穴にぼろんって言うより穴にころん、だね。これ」

足を折りたたんで、あおむけに転がって……って。何で猫なのにそんな状態で落っこちてんの。

「忍ちゃんは聞き間違いが激しいな。ちゃんとミィはころんと言っただぞ」

そーだっけ?

「あ、忍さんこんにちは」

「こんにちは、ミルク。まだおはようの時間だという事は黙っとくね」

「黙ってないではないですか」

黙っとくと言ったら黙った事になるんだよ。って、誰かが言ってた。誰だろう。

「んで、大丈夫ー?」

「ひっくり返って落ちてる時点で大丈夫ではないですよ」

「そっかー。どっか折れてない?」

「大丈夫です」

よかったよかった。

さて、どうやって穴からだそう。

いや、あのね。ミルクの落ちた穴がね。やったらめったら深いのよ。

オマケに猫なら落ちれる、もとい入れるだろうけど人間じゃ無理だね。

「ややっ、これはこれは忍殿！」

「これまた久しぶりだね、一七法師。八つ橋買えた？」

「……………ッ！」

何、何？ 何か考え始めたと思ったら、思い出したような顔して。

「拙者は爺婆に頼まれて八つ橋を買ったために旅をしているのでござつた！」

「今まで忘れてたとか」

「いや、それが、道に迷ってしまつて」

まだ迷つてたの！？

「……………弟がね、修学旅行で京都行くんだつて。その時に勝つてきてもらおうか？」

「マジッ!？」

侍な恰好で『マジッ!？』つて……………似合わないね！。

「うん。だからさ、この穴の中に落つこちてる猫助けてくれる？」

「猫？」

ぴよこつと穴の中を覗く一七法師。

「こつ、これはっ!？ ミルク殿！」

『忍さん、この人だれですかあ？』

……………すっごく、一七法師がかわいそうに見えた。

187 誕生日と誕生日？

「菜美ー、お誕生日おめつと」

「おめつと？ おめん？」

「ごめんなさい、ちゃんと言います。おめでとう。」

忍でーす。

蜂蜜にレモン汁入れただけの蜂蜜レモンをプレゼントとして、ハッピーバースデー言いには仙波家へ突撃してみました。

「あつ！ 忍姉ちゃん！」

「あ、神谷もおめでとー」

「……神谷、誕生日明日なんだけど……」

「いや、いつぺんにやった方が豪華粗品貰えるでしょ？」

豪華な粗品。あれ？ 豪華でもないけど。

「とまあ、美味しいよー。水で溶いて飲んでもいいし、かけすぎるとぼたぼた落ちるけどパンにかけてもいいし」

「わあっ！ 嬉しい！」

と言ったのが二人の母親ことなっちゃんというのはどうなんだろう。

「丁度ジャム切らしてたの。ありがとう、忍」

一番喜んでるのがなっちゃんと言うね、なんだか達成感が無い気のある状態になってるけど。

まあ感謝されてるしいいや。

「しのぶちゃん、あそぼ！」

「うんうん、遊ぼっ！」

あれ、あたしはプレゼントじゃないですよー。

とか言いつつ遊ぶけど。いや、言ってないけどね。

「何しよっか」

「ぶんぶん！」

「羽音？」

「ぶんぶんってするやつ！ ほら、んと、ぶんぶん！」
考えたけど結局変わつとらんじゃないか。

「んー、とりあえずぶんぶんってすればいいよね？」

「うんっ！」

んー。とりあえず持ち上げて。うわ、軽っ。流石四歳なりたてホヤホヤ。

「行くよー」

「おー！」

とりやつ。

壁やら棚やらに当たらないように気を遣いながらも振り回してみる。

「きゃああっ！」

怖かった？ …… って顔笑ってるよこれ。

「神谷もっ！」

「はいはい。そんな訳で菜美、交代ねー」

「どんなわけー？」

どこで覚えたその返し。

あ、あたし等の会話か。

「こんな訳ね。はい神谷ー」

持ち上げて、うわっ、重っ。流石六歳一日手前の男の子。

「ほーいじゃ行くよ」

「おおーっ！」

うん、声もでかい。

とりやつ。

振り回すのは菜美ほど簡単じゃない。

ダイエットを考えている女性の皆様！ きつとこれ痩せますよー。

「子供達ー！ おやつだよー」

「ケーキ！？」

「ケーキは夜ね」

じゃああたしは食べられないのか。チエツ。

188 発散っ！ したい

「純兄、もうすぐお盆じゃん？」

「ん。嫌な時期だな」

「……幽霊いっぱい帰ってくるから？」

「稼ぎ時ではあるけど」

「仕事人間発言やめい」

いつの間にか仕事人間になった、俺は。

純だ。

「で、何が言いたかった。今のか？」

「うん。もうすぐ山口の方のおばあちゃん所行くじゃん」

「うん」

「前住んでたところじゃん」

「うん」

「皆に会えるじゃん」

「うん」

「楽しみでなんとなくどっかで発散させておかないと暴れちゃいそ
うで」

「裏山でも駆け回ってこい」

「冷たっ」

夏にはちようどいいだろ。

「ん……じゃあその楽しみは組織液にでも溶かしとけ」

「何故に組織液」

「今理科やってたから」

血液中の赤血球に含まれている、酸素と結びつく物質の名称を答
えなさい……。

へモグロビン、と。

「純兄って妙なところで単純だよな」

「そうか？」

「うん。どうでもいいところも言う」

「どうでもいい所ならいいじゃねえか。」

「で、発散できたか？」

「ううん。まだまだ」

「外走つてこい」

「疲れるからやだ」

「それでいいのか中学生。」

「……まあ、俺が言われたとしても同じように答えるけど。」

「と言う訳で、会話ダメなら発散できる何か教えて。疲れない奴」

「どういふ訳でそうなった」

「こつこつ訳」

「……絶対ここで聞き返したらループするな。」

「八朔でも食えば？」

「無いよ。旬でもないのに。いくら発散と八朔が似てるからって食べるだけで発散できるわけじゃないでしょ」

「楽しみを発散させたいとかなんとかいう割にドライだな。」

「八朔は昔は今くらいが旬だったらしいけど」

「過去形でしょ。全くもー、お兄ちゃんってば」

「突然呼ばれたことのない呼び方で呼ばれても引くだけだぞ」

「光には毎日呼ばれてるのに」

「光とテメエはまるで違うから」

「どういふ意味だろ」

「名前からして正反対。いや、忍は全然忍んでないけど。」

「光もある意味ズレてるような気がするけど。」

「ね、どこら辺がまるで違う？」

「全てにおいてって言うてもいいかもしれない」

「そこまでじゃないでしょ。例出してよ」

「例？ めんどくせえ。」

「あー、そだな。服の好みとか？」

「そっかー、光よくスカートはくもんね。服装とかどうでもいいっ

て思つて無いの、光とおかーさんだけじゃない？」
確かに。

「それテメエは仮にも女子としてどうなんだよ」

「仮にじゃないんですけど。本当に女子なんですけど」

「そこはまあ置いて」

「置いてかないでよっ！」

じゃあそこらへんに捨てて。

「他にはあれだな、料理がまともか変か」

「ホントに置かれた！？」

「いや、捨てた」

「捨てないでよ！」

そういえば最近光料理してねえな。平和でいい。

……嵐の前の静けさ、何て縁起でもないこと思い出した。

「ちよつとー？ 聞いているー？」

嵐なら今日の前に居るか。

「発散できたか？」

「忘れてた。ねえ、どうやったら発散できる？」

……聞くんじゃないかった。

『ああ〜っ!』

がっしやあああああん

「また光の負けー」

「むう〜」

岳だ!

押し入れに、ニンジンとサツマイモの甘煮が抱えるように入ってたジエングを発掘して遊んでみる。

もう、光の弱いなの。今までの最短記録、三ターン!

「光、時間かかっていいから慎重にやろっ」

「うん〜。ありがと〜、お姉ちゃん〜」

……何でこつち睨んでんのかな? 光さん?

「べ〜」

あっかんべーとかする奴すっげー久しぶりに見たなー。

「で、まだやんのか?」

『当然っ』

「そ」

なんだかんだでにーちゃんも楽しんでるし。

崩れる度に毎回毎回一人で黙々と組み立ててるけど。

「んじゃ、みんぎりまあわり」

あ、にーちゃん一人負けー。

こつという時さ、自分からできるのはいいけど負けてるからちよつと微妙な気分になるよな。

「ん」

「次私だね〜。岳お兄ちゃん〜、今度は絶対負けないんだからね〜」
笑ってるくせに目が笑ってねーとこあいよ。

あ、ちなみににーちゃん、光、ねーちゃん、オレの順……って今更だけどオレ最後じゃん。

「行くよ〜」

ぐらっ

「はう〜っ!?!?」

二回目何だから流石に崩れやしねーだろ。

「うう〜」

「ほら光、ゆっくりゆっくり」

「うん〜」

そおおおおと

がっしやあああああん

『早あ!?!?』

最短記録! 一ターン!

「うう〜。私見学にする〜」

「えー、やろつよ、光も」

「見学なの〜」

ねーちゃん、光が居たら絶対負けねーからってのが理由じゃねーだろーな。

「で、やんのか? まだ」

『もちろん!』

「そ」

だんだん組み立てるスピードが上がってきてるなー、にーちゃん。

「みんぎりまあわありっ」

よっしや、オレー人勝ちーっ!

こついつ時はかなり嬉しいよなっ!

「よし、あえて一番下の端っこ取るう」

「え。更なる最短記録を作ろうとでも?」

「ちげーよ!」

さつきから普通の所ばっかり取って面白くなかったからな。

たまには。ていつ!

「よっしや! 目標達成! 後は野となれ山となれ!」

「山にしかならなさそ〜」

そんなこたねーだろ。

「低い目標だな」

に「ちちゃん、そりゃねーだろ……って、

「んな事言いながらに「ちちゃんもうかたっぽの端っこ取るうとしてんじちゃん」

「ん。何か問題でも？」

いや、ねーけどさー。

「大ありだよ！あたしの時難しくなるじゃん」

「よし、やっぱり……」

「別のところしてくれるの？」

「このまま取るう」

「って言うと思ったよー！」

思ってたんなら期待すんなよ。

「ん。まあ頑張れ忍。口先だけで応援してやるから」

「どうせなら心から応援してください」

『え』

「何で岳まで！」

いや、なんとなくノリで。

「頑張れ〜、お姉ちゃん〜」

「うん。ありがと光。……ところで男子群」

まとめる必要がどこに。

「何でそんなにあたしの顔じいーつと見てるのかな？」

『やっぱ一番下を取るべきだろうというのを空気で表現してみよう』

表現になってるのかはともかく。

「よくそんな長い言葉をきっちりぴったり合わせられるね！」

ザ・兄弟の神秘。……いやいや、ないっしょ。

「えーっと、この最後に残った一番下のど真ん中をシュパツと取れとっ。」

誰もシュパツと取れとは言ってねーじゃん。

「ゆっくりでいいよ」
に「ちゃん、微笑わらっていう所じゃないと思う
「んな事したら絶対崩れるでしょうが！」
「そのために下を取ったんだから、な？」
「な？ じゃなあああああい！」
とか言いながら結局そこに手え伸ばしてんじゃんか。
「一気に行くからね、倒れても大丈夫なように避けといてよ」
「手で払うよ」
動くのがめんどくさいと？
「オレは逃げる」
三步下がって一步前へ。意味は別にねーよ？
「とっ！」
「……お？ ……おお？」
「やったッ！」
がっしやああああああん
』………』
何か、虚し。

190 お盆のおもちや

『今年もお盆が来ましたね』

『そおねえ、ニンジンとサツマイモの甘煮。ところでいい加減この長ったらしい名前は何かならないの？ めんどくさいんですけどお。あたしみたいたなかつわいくて短くてかつわいい名前にしなさいよお』

あなたは名前の大切さが分かっていないのですね、ラビットさん。そして何気に『かつわいい』が二つは言っているのは何故ですか ニンジンとサツマイモの甘煮と言う名の巨大なめっこぬいぐるみです。

なめっこと言うのはキャラクター名ですが、皆さん覚えていましたか？

『お盆つつつてもさー、オレ等おもちやには関係なくね？』

『思いつきり関係ないですね』

『んじゃ何でそんなしみじみと』

『今まで私は押し入れの中にしかいなかったのですよ！？ しみじみと季節の移ろいを感じていたのです！』

『ちよいちよい、ウサギ人形『ラビット！』へいへい……ラビット 耳をつかめばいいのに……あ、ラジコンカーさんには手がありま せんでしたね。』

『なあにい？』

『お盆つてさ、季節か？』

『……………』
すみませんねっ！

はっ！ 何で私が謝っているのですか！

『勝手に謝ったんじゃねーか、ニンサツが』

『ニンサツ！？ 忍者のお札みたいに言わないでくださいよ！』

自分で言ってて何ですけどこの忍者のお札ってなんでしょう？

『知るかよ』

『はあ……やっぱり光ちゃん居ないのは寂しいわねえ』
『突然何を』

光さん含め、このお家の方はお母様の実家に帰るとかでおやつ
後に出発しました。

もっと早く出ればゆっくりできるのに、と思ったのは私だけでは
ない筈です。

『そう言えば、ルービックキューブさんがさっきからずっと純さん
の机の中で暴れていますね』

『出たいんじゃない？ 出してあげなさいよ、ニンサツ』

……一瞬、ニンサツでもういいじゃないかと思ってしまった自分
が情けないです。

『動きますかね、この体』

『しばらく帰ってこないんだから、目いっぱい暴れましょっ！ 動
く動かないは問題じゃないのよ！』

十分問題ではないですか。動けなかつたら暴れられません。

『ほらあ、さっさと立つのよ！』

『ガンバだぜ。ニンサツ』

うつ……立つのです、ニンサ……ッ!? ニンジンとサツマ
イモの甘煮！

よいつ、しよ……っと。

『立てるじゃない。まっ、あたしほどきれいに立ててはいないけ
どねえ』

『ラビットさん、そろそろウサギ人形さんになりましょっか』

『嫌よッ！ あたしのこのきれいな耳に何をするつもり!?』

つかむだけです何か。

『皺になつたらどうしてくれるのよっ！』

『アイロンでもかけましょっか』

『熱いじゃないっ！』

それはそれとして、ルービックキューブさんを出してあげましょ

うか。

『……………ルービック、生きてるの？』

引き出しを開けると、ただのおもちゃのように静かなルービック
キューブさんが出てきました。

……………あ、私もただのぬいぐるみでした。

191 お墓参りはお静かに

「おー、色々久しぶりだー」

「色々も何も墓しかねえぞ」

「いやほら、肝試しよくやってし」

お墓一周してくるの。結構広いからホントに出そうだったなあ。

いや、ホントに出てただけ。

「あまり感心出来ないがな」

「何故に妙羅さんがこんなところにいらっしやるのでしょうか」

「私の仕事エリアだからな。お盆は霊が多くて死神が一人一エリア任されるからサボれない」

真面目な顔して何を言うか。

普段サボってんのかアంత。

「あーっ！ 高山家！ 帰っちよったん？」

まとめたな、女の子……って。

「おおっ！ 皆の妹香ちゃん！」

「古」

につこりばっさり。

枝里香ちゃん、たまに不思議な行動をすることからあだ名は不思議ちゃん、とは誰も呼ばないけど。

えりかって読めるけど、そう言ったら怒るので要注意！

でもよかった、あたしの方がぎりぎり背、高い。なんとなく香ちゃんに身長では負けたかない。

「香ちゃんもお墓参り？」

「ううん。墓参りは昨日したけん、暇つぶしに来ただけ」

暇つぶしにお墓へ？ やっぱり不思議ちゃん。

「ここ、空開けるから好きなんよー」

入道雲がもくもく。あ、あの雲狸に似てる！

「でも、予定変更！ 皆に帰ってきたこと教えちよくけん、後で来

いよー！ んじゃっ」

おー、足速い。

……あれ。

「にーちゃん、今香ちゃんどこに行けばいいのか言っ
てなかったよな」

「そのうち気付くだろ」

おお、あっさり。

「三人ー、水！」

『はい』

おばーちゃん元気だなー。何歳だったかは忘れたけど。

「返事は短くしいよ！」

『ん』

「……………」

あれ、なんでおばーちゃん黙るの？

短くしたよ？ 一文字だよ？ 一音だよ？

「わっ！」

『わあっ！？』

「やっほー。元気が者ども！」

『……………』

心臓に悪いのでやめてください、……………えっと。

「誰だったっけ？」

「酷っ！？ 皐月せきづき！ 水無月みなづき皐月！」

「ああ、順番が逆な奴」

「あいつかわらず口悪いな、純ちゃん」

あいつかわらず突然出るね、皐月姉。今大学生のハズなのに。

……あれ、浪人生だったかな。

「おりよつ、この可愛えのはまさか光たん！？」

「そっだよ〜」

おお、可愛いのは否定しない。いや、あたしも否定しようとは思わ
ないけど。姉馬鹿？

「おつきくなつちよんなー。追い越されたらいかんな、牛乳調達させにゃ」

「いったい何に調達させる気で？」

「まずは牛じゃな」

「そつからか!?」

「ビバ 生乳！」

ダメだこの人。色々突っ込んじゃダメな気がする。

「と言う訳で、行きんさーい！ ゴー！」

今何に命令した、この人。

何か向こうの草むらでがさがさって音がしたけど。

「たけー！」

「おおおおおつ！ たく！ 誰が竹だつ！」

「誰が宅版だ！」

『誰もんなこた言つてねえっ！』

はいはい、息ぴつたりだね。

会ったびにこんなことしてて疲れないのかなー。

たくつて、七草卓也つて言うんだけど……何か岳と仲良かったん

だよ。同じ年だからかも。

……ところで、あたし等はわざわざ墓で何をやっとするんだ。

192 宴会だと思いたい

「かーんぱーいッ！」

大人たちのあれは本日何度目の乾杯だろう。十回目あたりから数えるのやめたんだけど、やめるんじゃないかなあ……。

酔った人たちってなんか、何でもやりそうだなね。

忍でーす。

おばーちゃん家の近所のオジサンの家で、宴会っぽいモノやっけます。

久しぶりっ！ みたいな感じで。

いろんな一家が勢ぞろい。

あたしん家でしょ、なつくん家でしょ、香ちゃん家とか皐月姉ん家とかその他諸々。

「純！？ お前純か！？ やべえ、オレ身長抜かれるかもしれん」

「良雅くん、何が入ってんだそのコップ」

良雅くん、そのセリフは何回目。

「酒以外に何があるんじゃない」

前にちよつと話に出した、酔ったらえんえんとおかしなことを言い続ける父を持つおにーちゃん。

父親に飲まされたのか単に不良なだけなのか。高校生のくせに酒飲んでる。百十番したるか。

「良雅くん、お酒は二十歳になってからって中学生の時は言っちゃったんに」

待て皐月姉、アンタが飲んでるそれはなんだ。どーみても酒じゃないか。

んでもってアンタは春に高校卒業したとこじゃなかったか。

だれか、百十番お願いします。

「じゅんじゅんが来ちようって!？」

あれ、何か玄関の方ででっかい女の子の声。

「おー、あれつてもしかしてたつちゃん？」

「そういやたつちゃん、空手でちよつと遅れて行くつて言つちよつた」

たつちゃんつて……たしか、辰巳たじみちゃん？

「純ちゃん、今年は負けちゃつてよ」

「何に？」

「たつちゃん」

「何が？」

「純ちゃん」

「へえ、理由は？」

「あたいが見たいから」

あれ、皇月姉の一人称つてあたいだつたかなあ？

去年来たときは俺だつたんだけど。

あれれ？ 一昨年は確かあたしだつたつて。

……もうどうでもいいや。

「お断りだ」

『ええーっ!?!』

「何故全員がそこでハモる！」

だつて純兄がたつちゃんに負けるところ見たいし。

たつちゃんつてね、毎年毎年、合つ度に純兄に勝負しかけるんだよ。

空手とか柔道とかの勝負じゃないよ？ 喧嘩。

たつちゃんが空手やつてるのはまるで関係ナシ。ほんつとに単なる喧嘩。

「じゅんじゅん覚悟おっ！」

「たつちゃん、落ち着け。先ずは家帰つて空手着替えて来い」

「ふふんつ、着替えならこの鞆に入つちよる」

そこは果たして胸を張るところなのでしょうか。誰か教えて。

「分かつた分かつた。んじゃ風呂借りて、シャワー浴びてから着替えて来い」

「手順が一つ増えちよらん!？」

「分かつたらさっさと行く」

「うーっ、自分が戻ったら勝負じゃよ?」

「ほいほい」

「おじちゃん! お風呂借りるけん!」

「はいはい」

タオルとかはどうするつもりなのかな、たっちゃん。

「にっしっし、純! よくやった!」

「あ?」

「お前、あれじゃろ? たっちゃんの風呂見とめてシャワーせえ言つたんじゃろ?」

もしもーし、たっちゃんは小学生ですよ、確かに六年生だし多少

……んと、まあええとー

「皐月姉、弟さん潰す。おけ?」

「許す!」

「許されなくてもやるけどな」

じゃあなんでわざわざ聞いたの、純兄。

「ちょおおおおお待てえっ! 姉貴! そこんとこ許すな! こいつの潰すつてどーゆー意味か分かつちよぐはあっ!？」

分かつちよぐはあ? 何か新たななる日本語を聞いた気分。……にはならんな。

「痛いわッ!」

「痛くしちよんじやる? 純くん、ウチもロリコン潰し参加しても

……」

「おけ」

「よしゃっ!」

あらら、香ちゃんまで参加してる。

「えーい!」

「あー、香ちゃんならいつか」

皐月姉の弟こと文月ふじきくん。

……んと、変態としか言いようが無いなこりゃ。

「純くん、ウチ、家からハンマーか何か取ってくる！」

「ってちよい待ち！ ハンマー！？ そんなんで殴られたら洒落に

……あ、行っちゃった……」

香ちゃん、まさか本気でハンマーで殴ったりしないよね……？

「純、アホか！ 潰すちゅったらやっぱ酒じゃろ！」

「テメエの将来はアル中だな」

「誰がアル中じゃ！」

間違いないでしょ。多分。

『ああああああつ！』

「何！？ どしたの！？」

『今日って花火しないといけないんじゃないの！？』

きれいに八モるね、小4組。約五名、光&はーちゃん含む。

「ほら、送り火！」

「ご先祖様帰ってくんでしょ！」

「花火花火！」

「打ち上げ花火万歳！」

「線香花火万歳！」

一番最後の、地味ッ！

あたしも線香花火好きだけどさ。でもやっぱりねずみ花火の方が
面白いなあ。

『何言つちよん。花火は明日じゃろ』

『そっだっけ』

『そっだよ』

ハモリとハモリの会話。すげー。

「じゅんじゅんやるぞ！」

あ、たっちゃん戻ってきた。

「文月くん、潰しちやるね」

あ、香ちゃんも戻ってきた。

すっげー可愛い笑顔浮かべて。ハンマー片手に持って。怖ッ。

……今思った。
まともな人、居なくね？

193 吹き出し花火とか線香花火とか

「夏だーっ!」

「花火だーっ!」

「送り火だーっ!」

何かがずれているような気がしなくてもないような気がしなくてもないような気がしないでもない。

自分で言っておきながら意味が分からん。

純だ。

「んじゃっいただきます!」

『なんでじゃ!?!』

花火食うのか。流石姉御……じゃ無かった、皐月姉。

「細かいことは気にするなと教えたたる野郎ども!」

『すいやせんでした! 姉御っ!』

何だよ、この小芝居みたいなモノ。

「分かればよろしい」

まあ、多分突っ込んだら負けだな。

「それじゃあこれよりー、花火大会を始めろっ!」

「あー、すいやせん姉御、とつくにみんな始めちまってます」

「ええっ!?! あたい置いてきぼり!?! 龍城^{たつき}、吹き出し花火は!

」?

誰だよ、龍城って。

「1m吹き出すのと2m吹き出すのと50m飛び出すの、どれかいっすか?」

急にとんだな。ってか、

「吹き出し花火だからってそんなに吹き出すわけ無かる!?!」

あ、皐月姉に先に言われた。

「あー、あれですね。花火作ってるトコが間違えてc入れ忘れたんすね。じゃあ、五十“c”mで」

そんなミスしていいのか？

「よしっ、点いたあっ！」

ぶっしゅわあああああああっ！！

どんな音が済んだよこの花火。

つか、ええと。

「本当にコレ五十m吹き出してませんか」

花火やってる空き地が広がってよかったーで済むような状態じゃ…

…

「ちよつと改良を加えて……」

「改良？ 悪くなつてんのにどこが改良ですか。これ」

「多少危険でも一応ほら、やっぱり書かれたとおりにおいてあげたほうがいいでしょう？」

「……」

龍城、怖えな。

「そもそも改良つてどうやって？」

「えー、そこをちよちよーっの、ほいーっ、の、パッ！ つすよ」

「分かるか！」

「短大でこーゆー事学んだんすよ」

「……」

どーゆー事教えてんだ、こいつの短大。

「それが今の警察の仕事にまるで役に立たなくて、ちよつとストレス発散？ まあそんな意味でちよつとやってみやした」

「ちよつとやってみやしたじゃないですよ！ ってか、は？ 警察

！？」

「！？」

「え、それが何か」

「こんなのが警察で大丈夫……突っ込むのやめた。めんどくせえ。も

う何か色々ぶっ飛んでる気がする。

「あれ、お前こんなとこで何しとつと？」

「しかも後ろから声聞こえてくるし、背後霊でもついているなら今す

ぐに叩き潰してえなー」

「おい純、何か危ない人に聞こえる」

誰が危ない人だ。

「誰すか、この人。お知り合いで？」

「龍城！ ちよっ、コレって……」

「あー、はいはい、今行きやす、姉御」

本とに、こんなのが警察で大丈夫か日本。……あ、突っ込むのやめたんだっとな。

「んで、もっかい聞くけどお前こんなトコで何しとっつ？」

「テメエこそなにしてんだよ、忍？」

あ、忍って妹の忍じゃねえぞ。その忍は向こうでねずみ花火を回りに投げ散らか いや、なんでもねえ。

「……あのさ、人の顔見てどっか見て、ほんでうんざりしたような顔になるのやめよ」

「その何処が出身かイマイチ分からん口調もやめろ」

「俺は福岡出身じゃよ？」

福岡の出身が何で山口弁を使うんだ。

「で、結局なんでここに居んだ。家は福岡……自称、だろ？」

「自称ちやうわ。本とに「ループするから突っ込むな」ずっこ！」
事実だろ？

コイツは、一応死神やってて知り合った俺みたいな状態のヤツ。

つまり人間か死神がよく分からんヤツ。

「友達ん家が山口にあんだよ。お前は？」

「婆さん家以下同文」

「……そこめんどくさがって何かいいことあると？」

時間の節約とか？

「んー……ま、いいや。それよりさ、せっかく現実世界で会ったんだし線香花火勝負でも」

「こっちは何でテメエが一人で空き地に居るのかを聞きたいけどな」

「散歩」

「あっそ」

「聞いたのそっちやる。もっと興味持たんか」

「ヤ」

「あっさり言うなあ……。まあええ。早くやる。ローソク何処にあると?」

「確かちようちんの中に」

「何で!？」

「さあ。」

「ああ、でも妹がライターやらマッチやら持つてるのを没収したから」

ライターにマッチなんか文房具じゃねえだろ。

「それこそ何でや!? テメーの妹はアレか、放火魔か!？」

「人の妹に向かって失礼な。常に文房具を持ち歩く便利な道具箱だ」

「人間じゃなくなってるんじゃないか! それこそ失礼やる! テメー妹を何やと思つと!？」

「多少変だけど人間……。つて、だからループするからやめい」

「ループの原因誰だよ……」

「テメエだろ?」

数分後

「やっと線香花火までたどり着いたな」

「長かった……」

「これと言つのもテメエが突っ込み続けるから」

「テメーがボケ続けるからじゃ!」

「落ちるぞ。勝負じゃなかったのか?」

「落ちんように左手はガツチリ固定しちよる」

左利きだったっけ。うん、まあそんな気もするな。

「ところでさー、お前兄弟何人居るん?」

「三人だけど。俺のぞいて」

「でもさー、あっきらかーに人数多くないか?」

軽く十人は超えてるからな。

「あつちで線香花火勝負してる男子共で、一人だけ中腰になつてんのが弟。向こうでねずみ花火に追いかけられてるのが妹一号」

あれ？ さつきはねずみ花火投げてる方じゃなかったか？

「んで、歩道のコンクリに花火で落書きしてる奴等を半歩後ろから眺めてるのが妹二号。他は全部知り合い」

「ほー。……あつ、純の落ちた！ 俺の勝ちやな」

「ガキかよ、こんくらいで」

とか言いつつ人の線香花火の先っぽを揺らしてみる。

「あーっ！ 落ちた！？ テメーの方がガキやないと！？」

「はは、俺は負けず嫌いなんだよ」

「へー、じゃあお盆の間にどっちが多く冥界みじに送る幽霊捕まえるか勝負しようや」

「負けず嫌いだけど面倒事の方が嫌いなんだよ」

「つごーのええ性格しちよんなこいつ！？」

だから何か？

193 吹き出し花火とか線香花火とか（後書き）

純くん、見た目年上の知らない人間には一応敬語を使います。

忍くん、名前が思いつかなくて百話で言った『名前が同じ男子』
を使ってみました。

龍城くん、気が付いたら居ました。怖。

194 皆大好き肝試し！ 始まりの巻

「よおし、皆居るかーっ！」

「イルカじゃないよ。人間だよ」

光、そこでボケたら話が進まない。

忍です。

毎年恒例の肝試しを……これからしようとしています。

去年は霊見えなかったからなあ。今年は大変そうだな。無視すればいいけど。

「はい、全員イルカ、もとい居るか確かめるためにせーのーでっ、で合わせて自分の名前を叫べ！」

果たしてそれに意味はあるのでしょうか、皐月姉。

「せーのーでっ、皐月！」

「忍」「光〜！」（中略）「卓也あつ！」「文づぐぎゃあつ!？」

「龍城、と。全員居ますぞ姉御。ええ、一匹害虫が居たので潰しておいたので丁度っす」

こら。人を害虫扱いするな。あたしの事じゃ無いけどさ。

「でかした！」

そこも褒めない！

「でも純ちゃんが居らん事に気づけばもうちょっと点が上がったのに！」

点？

「毎年居ないので排除しやした」

排除って何!？

「今年は来るよう言ったんじゃないけどなあ……」

って、毎年言ってるよね、皐月姉。

「いー加減夜の墓場に慣れんか純ちゃんは！ 肝試しもしないとか

ごんごんどうだ！」

「いらねっす。言語道断でしょ」

「ごんごんって貰えるものなの？」

「と言う訳で龍城、警察の権力目いっぱい使って連れて来い」

警察！？

「あいよ」

『あいよじゃなあい！』

「大丈夫ですよ、返事だけつすから」

何かよく分からん人だな。

「それじゃ、肝試し一足先に始めちよこか
やっとか……。」

「はい、じゃんけんで順番決めて！」

『じゃーんけーんほい、相子でしょ、あーいこでしょっ！ しょっ
！ しょっ！』

（ジャンケンがなっがああああいで中略）

「はい、んじゃ一番手、たく行って来ーい！」

「おうっ！」

行ってらっしやーい。

……、ええと、待ってる間に何しろと？

んとね、この肝試しはー。ま、普通にお墓一周してくるだけ。

ちなみに明かりはローソク一本。すぐ消えるから！

「ただーいまっ」

『早ッ！？』

「ふふん、五十m走七秒代じゃけんな！」

「七秒九九じゃんな！」

香ちゃん……。何で知ってるのって顔してるんだけど、たく。

「ただいまだぜーッ」

「はい次たっちゃんじゃね」

いつの間にか岳も行ってたし。

「じゅんじゅんは！？」

そっういえば喧嘩してなかったね、まだ。

「あーはいはい、じゅんじゅんならたっちゃんが戻ってくるころに

来るよー」

「……ホント？」

「ホントホント」

おお、あっさり行っちゃった。簡単だなあ。

「姉御、純、連れて来やした」

この人凄い。この龍城つて人凄い。

「臯月姉、こいつ何。警察つて答えが聞きたいんじゃないやねえよ？ 龍城つて答えも駄目」

純兄の手首に手形がくつきり。

握力何？あるんだろつ。

「便利な子」

「子つて年齢じゃないだろ」

同感。

「じゅうんじゅうん！！」

おー、戻つて来るなりとび蹴りですか？

「たっちゃん、テメエスカート穿いてる事覚えてるか？」

「あっ！？」

ストレートに言うねー。純兄も。

「次、はーちゃん……あれ？ おーい、はーちゃん」

「お兄ちゃん！ 肝試し怖いでしょ！？ ウチが一緒に行つてあげるから！ ほら！ 時間短縮のためにも！」

「怖くねえよ！ 怖いのはおめえだろ！？」

「こここ怖くないもん！」

どっからどー見ても怖がってます。

「行つてらっしや〜い〜」

コラ光、そんなにニコニコして手を振つてやるな。

「ひーちゃん！」

「はっ、はーちゃん！ 満みちると行こー！」

あれ、満ちゃんも怖がり……だからか。

「ええーい！ もう四人で行つて来おい！ はーちゃん、満、光、

夏、いいね!」

『何で俺(私)まで()!?』

「面倒だから!」

……純兄のめんどくせえ病って皐月姉からうつったのかなあ。

んと、えー……つつづく。

195 皆大好き？ 肝試し！ になってるか？ の巻

「怖いよー怖いよーひーちゃん怖いよー」

「ね〜、満ちゃん〜。それって私が怖いって事かな〜？」

「こんに……間違えた、こんばんは、忍です。」

「いったい何がどうしてこうなったのか、純兄と一緒に光、はーちゃん、満ちゃん、なつくんをビデオで撮影しています。」

「えー、もう一度言います。何がどうしてこうなったのでしょうか。臯月姉にやれって言われたからだけども。理由は分かっているんだけどね。」

「ひーちゃんは何でそんなに落ち着いてられるの！？ お墓だよ！？ 夜だよ！？ お化けとか幽霊とか妖怪とかあとえー……とにかくそんなのがぶらぶらほっつき歩いてんだよ！？」

「不良か、そいつら。」

「そんなところを土足で踏み荒らしちよんよ、満達」

「墓に土足で来るのは当たり前だろ」

「純兄、一応隠れてるんだから小声にしてよ。激しく同意するけども。」

「ねー純兄、なんであたし達二人でやんなきゃいけないの？ これ」

「臯月姉に聞け」

「臯月姉ー、なんでこれ二人でやるのー？」

「きゃあああああッ！」

「え？ 何？ 何かあったの？」

「はーちゃん〜、満ちゃん〜、どうしたの〜？」

「あれっ！」

「二人の指差した方を見ると……んと、

「ん、あんまんだな」

「どこが悲鳴あげるポイントなのあれ！？」

「ちっちゃな幽霊が出たあっ！ー！」

ちつちやすぎるだろ。

「大丈夫だよ、ほらほら、パクツ、もぐもぐ、ごっくん。ほらね。」

『ひーちゃんが呪われるうッ!』

「罰当たるぞ、ひーちゃん」

「なつくんも食べてるじゃん」

お供え物食うなッ! 罰当たる前に腹壊すわ!

「全く、問題児だらけだな。さつさと行くぞー」

お前も問題児の一人だろうが!

「わ、凄いやあそこのお墓。コーンスープがお供えしてある、どんな家だよ。会ってみたいな。」

「ひーちゃん、このスープ固えぞ? 茶わん蒸しじゃね? これ」

「スープ皿なんだけどな、これ」

しかも平たい。

「ますますその家の人に会ってみたい」

「おい忍、よく見る、墓の名前」

ん?

“枝里家”

「なるほど」

「な」

なんつかよく分からんけど納得してしまった。

「二人ともッ! 早く行こうよーッ!」

「ただでさえ怖いんじゃないやけえ、祟られるかもーッ! なんて余計に怖くせんといてよ!」

そもそも人ん家の墓に勝手に入るな。

「おー、はいはい」

「早く行こ」

早く行こ、って言われてたのはアンタだ、光。

「じゅうつうつん!」

「あ?」「ん?」

あれ？ 背後から何か声が。

背後から、すうつごい恨んでるようなこっわあい声が。

「てんめえ仕事サボるとはどういうこっちゃ！」

「何か訳の分からんことに引き込まれて」

龍城……さん？ どうやって引き込んだんだろつ。

「この真面目くんのくせして、サボるとはどう言う事だ！ 俺に仕事が回ってきたやんけ！」

関西の人？ にしちや標準語も混ぜてるなあ。

「にしても……純兄、仕事も真面目くんなの？」

「『も』って何だ、こら」

だってえ。夏休み入ってからほぼ毎日勉強してるし。

……あ、しなきゃいけないのか、受験生。えー。

「お前、家でも真面目くんなんか？」

あ、何かすつごい呆れたような顔してる、この人。

「だから、『も』ってなんだ、こら」

『だってえ』

「だってじゃなくて。何しに来た、忍」

「あたしいちやいけないの!？」

軽くシヨックだよ!？ しかも今来たわけでもないのに!

「……妹ちゃんも忍つていうと？」

あ、忍つてこの人の事か。

「ああ」

「ふーん、よろしく、忍ちゃん！」

ニパーとか言う効果音つきそうだなー、この笑顔。そして胡散臭いなー。

「え、あ、よろしくです」

で、この人は結局何しに来たんだよ。

「忍、結局テメエは何しに来たんだ」

「あ、そうそう。てんめえこの、真面目くんのくせに仕事サボるとはどう言う事じゃああああっ！」

楽しそうだね、怒鳴るの。

「ん。妙羅は何て？」

「部隊長なら座布団枕にして寝てる」

……何だろ、想像するのが難しい。

って言うか部隊長って何の部隊長？ それって偉いの？ いや偉

いだろうけど。妙羅の態度からして。

「流石置物。そのままゴミ捨て場にも捨ててやれ」

「おう。……って違う！ 早く来い！」

「んー。何処？」

あ、すっごいめんどくさそう。

「ずっと東の方じゃ、オラ行くで！」

あのさ、さつきから思ってたんだけど。この人どこ出身？

「……わあつたよ」

「えーっ、ちよつと、臯月姉達に何て説明しろと！？ 純兄行つち

やったら……」

最後まで言う前に行かれちゃったよ。

「お姉ちゃん〜！ ついて来てるんでしょ〜？ 早くおいでよ〜！」

うー……まあ、いつかあ。

196 皆大好き肝試し！ 最後なのに腹黒の巻

「上に一反木綿、前にのっぺらぼう。左右に子どもに、後ろに火の玉……ねえ」

龍城さん、冷静じゃけど……。

何じゃの？ このカオスな状況。

香じゃよー。

肝試しに、良雅くんの弟ちゃん妹ちゃん連れて回っちょんじゃけど……。

幽霊に遭遇。おまけに囲まれちゃった。

……どうしよう。このオバケ達で遊んでみたいんじゃけど。

「龍城さん、どうしよ」

「龍城でいいつすよ」

でも年上じゃもん。

「たつきいー、オバケって本とに居るんじゃねっ！」

「かおりいー、帰れるよねっ？」

帰れるよ。オバケに対してどんな想像抱いちよるん？ 聞いてみたいじゃないか。

「ところで香さん、やっぱり火の玉って熱いつすかね」

「そりゃ熱いじゃろー。仮にも火じゃけん。熱なかつたら似非火の玉じゃ」

オバケだから実態なくて熱さも感じませーんっ！ って言うんならちやうじゃろけど。

「たつきいー、熱くないねっ！」

「かおりいー、意外とこいつ固いんじゃねっ！」

似非火の玉じゃったんか。

「んっ」

しかも龍城さんの裏拳であっさり撃退されちゃうし。

「弱っ」

「笑顔で向こうにとつちやぐさりと来そうな事いいやすね
あは。」

「龍城さんも、触っただけじゃ自分に害が及ばんってわかった途端
思い切り殴つちよんね！」

「バック取られたら殴り倒したくなるんすよー」
わお。

「こつちからは殴るけど絶対殴られたかねんすよー」
腹黒なんかなー？

「前の上のも撃退出来る？」

「撃退はしねえつすよ。捕まえるだけで」

「あーっ！ 分かった、何か使えることに使う気じゃる？」

「御名答ー」

腹黒じゃねー。

「ゆーきいー、たつきもかおりもこわいものなしだねっ！」

「そうだねなつきいー、あこがれるねっ！」

こうして腹黒予備軍が出来ました。

うーん、火の玉はまあ、間違いなく明かりじゃる。熱くないんじ
やったらコンロの代わりには出来んし。

ー反木綿はー。うーん。後で考えよ。

のっぺらぼうは普通にお手伝いさん出来そうじゃよね、だって顔
がないだけで普通に動いちようもん。

「さて香さん。ー反木綿どうやって捕まえやしよう」

ありや、のっぺらぼうぐるぐる巻き。簀巻き。海苔巻。食べたい
なあ……。あ、のっぺらぼうをとちやうよー！

「ー反木綿ウチ任せ？」

「自分が頭使わなくていい時はお休みさせとく派っす」

「そしてごんごん馬鹿になっていくんじゃね」

「寝る子は育つって言うじゃないですか」

「たつきいー、たつきのあたまのなかでは、おやすみ＝ねるなんじ
やねっ！」

……あんな事言つちよるけど、人がどうやって捕まえるか見るつもりなんじゃろつなあ。

どうしよう。

「その前に龍城さん、一反木綿って何か利用価値ありますかね？」

「あの木綿の体で家じゅうの拭き掃除してもらう、とかどうつすか？ 他にも気に入らない奴の首絞めに行かせたり、あれに乗って空飛んだりとかもできるんじゃないっすか？」

「おおー、いいね、一反木綿。便利じゃね！」

「あつ」

「え？」

「たつきいー、いったんもめにげちゃったねっ！」

「かおりいー、ざんねんじゃったねっ！」

……うん、残念。

「ところで龍城さん、火の玉って譲ってもらえる？」

「一千万ほどでいかがでしょう」

高い。

「かおりいー、よくかんがえなきゃダメじゃねっ！」

「かおりいー、おかねはだいじじゃねっ！」

勇気くん、菜月ちゃん。ちよつとだまっちよつてもらえるかな？

197 いざ、勝負っ！

「じゅんじゅん！ 今日こそいざ勝負っ！」

あー、毎回毎回なんだかんだで流されてたもんなー。

今日こそ勝負したいと。

あれ、最終目的が変わってる気がすんだけど？

岳だーっ。

「たっちゃん、道着替えて来い」

「勝負するために着てきたの！ これが一番動きやすいけん」

えー？ そうか？

ちよつとだけ着てみたことあるけど、重いし帯ちよつと苦しいし、逆に動きにくかったぜ？

「ごわごわだし。くどい？」

「さあ観念するのだ純ちゃん！ 今日は逃げられんぞ！」

「誰だよ」

「臯月だよっ！」

それは分かっているとと思うけど？

「……………よしたけ」

「誰がよしたけだコラ！」

たく、いくらなんでも名前を思いっきり変えんのはやめい。

「違う！ よし、たけ。つつたんじゃ！」

何だ。面白くない。

「おいら達もやるぞ！」

「何を？」

「流れて分かれや！ 勝負っ！」

わー、いきなり殴りかかってきたあー。かーさん助けてー。とか思いつつ避けはするけど。

「避けんなポケコラア！」

「いや、避けんなって言われても……………なあ？」

「受けると言う選択肢があるじゃろ！」

「うーん。たっちゃんに空手の受け教えてもらおうか」

「素直に殴られるという選択肢があるじゃろ！」

避けれるパンチを何もしないでぼけーっと殴られる奴はマゾだと思っ。

違う？

「じゅんじゅん！ やるぞー！」

「やんなきゃダメ？」

「ダメ！」

「じゃあやだ」

「くおらあああああ！」

何でそこで起こるのが臯月姉ちゃんなんだよ。

あれ、なんでオレあんな変……じゃなくて個性的？ な人に姉ちゃんつけてんのかなあ。

「たけ！ ポーっとしてたら当たるぞー！」

「へっへっへー。たく！ 足元から空きだぜ！」

足払あい！

あれ、払ったはいいけど、こっからどうしよう。

まうんでんぽじしょん？ とかオレ知らねーんだけど。あれ、まうんとだっけ。

「じゅんじゅん！ もうじゅんじゅんが嫌でも行くから！」

……あのさー。たっちゃんって空手習ってる筈なんだよね。

なのにさー、今にーちゃん殴ろうとしてんの、まるで空手っぽくねーんだけど。

たっちゃんの中では、これ単なる喧嘩なんだな。

「とりやっ！」

「ぐほっ！？ ちよっ、たく！ いまの鳩尾入ったぞー！？」

「入れたんじゃよ！」

ちい、よそ見してたらたたくに鳩尾蹴られた……。

「たけるうー、ゆだんたいてきじゃねっ！」

「たくやあー、いけいけー！ ねっ！」

うあ、二歳に注意された。

「ってか勇氣。油断大敵ってどこで覚えた!？」

「にいたんのことわざ辞典ねっ！」

読めるんか!？」

あー、あれだ。こいつは将来、超難関大学とかに受かつちゃうんだな。きつと。

大げさか？

「へへっ、たけ！ こっちには菜月が味方に付いちよんじゃ。大人しく降参せい！」

あれ、喧嘩ってこんなだったっけ？

「たくやあー、なつきたん、どっちにもついちよらん、ねっ！」

「かんちがいやるー、ねっ！」

さいごの『ねっ!』って最初は可愛いとか思ったけど、何かこう毎回毎回つけられるとイラッと来るな。

「たけるうー、たくやちんぼつねっ！」

「たけるうー、かつたねっ！」

いや、多分勇氣、菜月ペアが勝ったんだと思う。

「ううっ！ 来年こそ勝つちやるんじゃけえ、覚悟しちよけよじゅんじゅん！」

「あー、ハイハイ。来年こそもう少し大人しくなるとけよ、たっちやん」

何か向こうで毎年恒例の言葉言い合ってたなあ……。

198 温泉だあつ！

「皆の者、温泉じゃ！」

「温泉だ〜！」

「温泉だあつ！」

「温泉じゃあ」

「温泉温泉！」

「温泉じゃね」

「おんせんー、ねっ！」

温泉温泉五月蠅いわ。

忍です。

言わなくても分かるでしょうが、温泉に來ています。

近所だけどね。徒歩三十秒だけどね。

うわ、改めて言ってみると近つ。

「さあ、準備はよいか皆の者！」

「お〜っ！」

「飛び込めーっ！」

「おお〜っ！」

さあ、誰が最初にあの、アツアツホカホカ気持ちいい大きなお風呂にダイブするのかーっ！ って、

「飛び込むな馬鹿がっ！」

「えー」

あ、そこはちゃんと止まってくれんだ。

「飛び込むのは体洗ってから！ おけ？」

「今日のお姉ちゃん純お兄ちゃんみたい〜」

純兄が飛び込むことを許可するようなこと言っかなあ？

いや、純兄はこう言う事痛い目見るまで言わないかな。

「しのぶうー、ポンポンきれいきれいしたらとびこむねっ！」
そうして下さい。

「菜月ちゃん、頭も洗わなきゃダメ」

小四組メンバーその四、麗美ちゃんことれーちゃん。お姉さんだ！
いや、何かよく分かんないけどこの中で一番お姉さんだと思う。

あれ、何か負けた気分。

「そうそう、頭の中身も洗わなきゃダメ」

何を言っとするんだこの小四組メンバーその五、愛弓ちゃんは。

「誰が早く体と頭洗えるか競争じゃよ！ よーいどん！」

よーい、の所で何の用意をすればよろしかったのでございませうか。

「いっちばん！」

「臯月姉、おっとなっげなーい！」

たっちゃんに大人げないとか言われてるぞ臯月姉。いいのか？

大学生として、浪人生かもしれないけどそれでいいのか！？ 別

にいいんだろうな、この人だから。

「ぼぶぼぶー」

「菜月ちゃん、動かんちよって」

「そうそう、カチコチになっって！」

菜月ちゃんは凍らされてるのか？

「はーちゃん、楽しそうだね、あの全身泡だらけ」

「そうだね、やったげる！」

「あ、満も手伝っつ！」

「コラそこっ！ 石鹸の無駄遣いをしない！」

ボディーソープのボトル、空にするつもりか！？

『はあ〜い』

うん、素直でよろしい。

「れいみいー、あいみいー、飛び込むねっ！」

「ダメ、静かに入るの」

「そうそう、どぼーんって行ったらごぼごぼってなって、チーンじ

「やよー！」

効果音ばかり。最後のチーンって、おい。

「ううー」

「菜月たん！ ほら！ あたいの胸に飛び込んで……目を逸らすな！ ちよつ、何でみんなして遠ざかってくん！？」

「いや、だつてえ。」

「ひかりいー、こつちろてんぶる？ ねっ」

無理やり『ねっ』てつける必要がどこに。

「そつだよ、行ってみようか」

「ひかりいー、こんよくつてかいてあるよねっ？」

『読めるの！？』

天才幼児だ。うん。間違いなく天才幼児だ。

「どうしよつか。混浴って書いてあるとちよつと……」

「そつそつ、でれーつな男どもが居たらちよつと……」

愛弓、ちよつと黙つとこ？

「れいみいー、なつきさきいくねっ！」

「そりや菜月たんなら問題欠片も無いわな」

「でも、こんな小つちやい子だけで行くのは危険じゃけん、ウチも行くー！」

れーちゃん菜月ちゃん行ってらっしやあい。

止めないよ？ 別に。

「えっ！？ 行くの！？」

「混浴の意味分かつてる！？」

「知つちよーよ、そんならいー！」

『言つてみ』

「大人と子供が一緒に入る！」

何でだよ！

『はいちよつと帰りなさい』

「え、でも菜月ちゃんが……」

もう行つちやってます。

「はい、それではれーちゃんに混浴の意味を教えます」
「うん」

「男女一緒のお風呂！ 分かる？」

「ふええええええええ！？ あうあうあう」

「うわ、れーちゃんテンパってる。」

「ほんとにわかって無かったんだね……。」

「あれ？ ところで香ちゃん知らない？ ねえ、忍ちゃん！」

「あれ？ 居ないの？ 香ちゃん。」

「知らないよ？」

「香ちゃんならさつき菜月ちゃんに付いて露天風呂に」

「愛弓ちゃん、何故止めなかった。」

「なら私も行くこと」

「ええええええ！？ ひ、ひーちゃんが行くならウチも！」

「じゃ、あたしも！」

「満も、行くのかな……。」

「あれ。残ったの、あたしとれーちゃんだけじゃん。」

「……れーちゃん、ほかのお客さんもいないことだし素潜り勝負で

「もしよっか」

「……うん」

「うー、もう帰っちゃうん?」

「もうも何も一週間以上居けど」

「いや純、そこはまだ一週間、じゃろ」

忍です。

帰ります。もう後は新幹線待つのみです、はい。

「じゅんじゅん! 来年こそ勝っちゃうるんじゃけえ、覚悟しちよけよ!」

「あー、ハイハイ。来年こそもう少し大人しくなっとけよ、たっちゃん」

あれ、このやり取り一昨日も見た気がする。

「はいこれ、途中でお菓子か何か買いね」

「わー、ありがとうお姉さん!」

「まーっ! 光ちゃん正直だからもうちよつとあげる」

良雅くんトコのおばさん単純だなあ。詐欺にあうなよ!。そして何か光が黒くなったなあ。

龍城さん、光に何か吹き込みましたー? いや、仕事だとかで来てないけど。

「じゃあねっ、ひーちゃん! はーちゃん!」

「またねー、ひーちゃんは一ちゃん」

「次はお土産もよろしく!」

愛弓ちゃん、もう少しいい事言えませんか。

「忍ちゃん、純くん、またね」

「うん、香ちゃんまたねー」

「俺は!? ねえ香ちゃん!? 俺は!?!」

なっくん、忘れ去られてたね。

「しのぶうー、しんかんせんきたねっ!」

「かおりいー、しんかんせんじゃねっ!」

『のりたいねえーっ!』

勇気くん、菜月ちゃん。そんなきらきらした目でこっちを見ないでください。

「純、次来たときは酒飲めよ!」

「俺まだ犯罪者にはなりたくない」

「ちっ、んじゃ夏!」

「そだな、親しだ「夏?」いややっぱね! 俺未成年で飲酒はよかねえと思うのよ!」

秋さん、すげえ。

「先ずは秋さんを超えて来「良雅?」ごめんなさい俺もう酒やめますから!」

秋さん、すっげえ。

「はっはー! 情けないな二人とも! それでも男か!」

「皐月、貴女が一番問題ね」

あ、皐月姉逃げた。逃げるが勝ちとか叫んでるけど。どう勝ったんだろう。

秋さん、すっげえ。

「早く乗らないと新幹線出ちゃうよ!」

あ、そうだね。

『またね〜! 満ちゃん、れーちゃん、愛弓ちゃん!』

『またね〜!』

「またな! たく! たっちゃん!」

『またな!』

たっちゃん、次会ったときに男勝りな口調になってたらどうしよう。どうもせんが。

『またね(な)、香ちゃん、良雅くん』

「またねー。純くんも」「またな。ほら純もじゃ!」

「ん。またな」

あー、新幹線のドア閉まる。ってか閉まった。

あれ、誰かにあいさつし忘れてるような。

「俺はっ!?!」

ああ、文月くんか。

『ならいいや』

ああ、全員思ってたんだ。

うん、新幹線に乗ってない人たちも言ってたよ。

「ゆうきいー、しんかんせん、すごいねっ!」

「なつきいー、あっちもみにこうねっ!」

このほやうとしたかわいらしい声が聞こえた瞬間。
血の気が引きました。ここにいた関係者、全員。

「純兄ずっこい！」「岳お兄ちゃんずるい！」

「ん、ずるい。だから何」「別にずるくねーよ！ 早い者勝ち！」
この辺が違うんだなあ。

忍でーす。

ちよつと光と買い物行って、帰ってきたらなんと六本入りアイス……でもそのうち四本は兄妹四人で食べたから残り二本。が、消えてなくなっていました。

そこら辺に居た子供の霊により、その犯人は純兄と岳という事が判明した！

ちなみにその子供の霊は純兄に見つかった瞬間成仏した。オーラ
か何か出てるのかうちの兄ちゃん。

「むうっつ、食べたかったあ〜！」

「もう残ってねーんだから諦めるよ！」

「やだっつ！ 岳お兄ちゃんと純お兄ちゃんだけ食べたのが許せない〜！」

あたしだつたら許してくれたのか？ まさかね。

「食〜べ〜た〜い〜！ 食〜べ〜た〜い〜っ！」

見た感じ、おもちゃ屋の前でダダこねる幼児。うん、まだ四年生
だしね。九歳だしね。一桁だしね。

「あー、聞こえない聞こえないーい」

「岳お兄ちゃんの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿〜っ！」

「何でオレだけ！？ て、ちよ、痛っ、おい」

連続パンチー。一発に大した威力なくても回数重ねると痛いよね。

「馬鹿あ〜っ！」

「泣くなよっ！」

「楽しみにしてたのに〜！ ふえ〜っ」

「ん、岳、泣かせたな」

「にーちゃんも共犯だっつの！」

光の大好きな小豆&抹茶バーだもんなあ。渋い。

「ところでさー」

「いや、なに何もなかったかのように話変えようとしてんだよって
うわ！ 光、ちよつ、痛い、頭突きしない！」

思いついたときに言わないと忘れるでしょ？

「こないださ、いや、一週間以上前だけど。あたしが楽しみにとつ
といたバナナチョコアイスが無くなってたんだよねー」

「……………」

あ、純兄だな。純兄に間違いない。

理由？ うん、ちよつと小指の先が動いたから。

「純にー。何でだろうねー」

「何でだろうな」

最初の小さなぴくっ以外にはまるで動じないんだから困る。

「食べたでしょ」

「うん」

「ってあっさり認めんの!？」

「悪いか？」

うーん…………。

「あたしのバナナチョコアイスを食べたのは悪い」

「そうか」

「うん」

「で？」

え？ 『で？』とか聞かれてもなあ…………。

「んー、だから買って」

「買って買って買って買って〜!」

「…………後ろの声と合わさると怖えな」

「じゃ買ってくれる？」

「いや、テメエ関係ねえだろ」

ばれたか。

「買ってくれるのくれないの!？」

「……よし」

「おーっ、買ってくれるの？」

「……と、思ったら。」

「純兄が行ったのは冷凍庫。中から出てきたのは……」

「パピコチョココーヒー味!」

「一本やる」

「やったやった! こっちの方が好きなんだよね、あたし。」

「うー、美味し。つべた。ね、純兄」

「ん」

「あゝっ! いいな!」

「うん、で、次は『頂戴』でしょ。」

「ほい」

「何も言っていないのにくれた!？」

「文句あるならやらんぞ。いや、純兄に買ったやつだけど。」

「食べさしだけど、いいよね別に。兄妹だし。」

「あむ〜。おいし〜。純お兄ちゃんのも〜」

「オレもオレも!」

「……」

「純兄」

「あ?」

「何かいっぱい残ってるじゃん。頂戴」

「あつ。何でいきなり食いつくんだよ! まだあんじゃねえか」

「あむ〜」

「ちゅー」

「あゝっ」

「こうして、パピコチョココーヒー味をめぐる争いが始まった。」

「一分で終わったけど。」

201 泥棒を見つけました

暇だ。

忍でーす。

大事な事なのでもう一度言います。暇だ。

おとーさんは仕事、おかーさんも仕事、岳と光は子ども会の料理教室、純兄は朝起きた時にはもう居なかった。

と言う訳で、あたしは一人でお留守番。

うーん……。

やることやっちゃったしなあ。

パソコンちよつといじって、広辞苑ばらばらして、おかーさんの隠したお菓子探し&つまみ食いに、読みかけの本読破、メインが納豆ごはんのお昼ご飯。

やることやっちゃったなあ。

一人寂しく勉強しようかな？ 何で受験生のくせしてさっきの

やることの中に勉強がなかったの、とか突っ込まないで。

気分じゃないなあ。

なつくん家にも遊びに行こうかな？

がたたっ

……二階から音が。

はてさて、なつくんか泥棒か。それとも純兄帰ってきたとかかな？

わお。泥棒発見。すげえ。

何がすごいつて、家の中に誰もいないのかよく確かめずに、それも真昼間から入ってくるその度胸がすごい。

「うおおおおお！？ ほ、宝石発見！？」

しかも大声出してるし。珍種だな。写真撮りたい。

……の前に通報だよね。はい百十番。

「はい、御用の方は近所の交番までどうぞ」ガチャ
……え。

な、なんかCMの『今すぐ近くの　まで！』みたいに言われた
んだけど。

どうしよ、とりあえず再チャレンジ。

「御用の方は「泥棒が来ました」頑張ってください」ガチャ
いやいやいやいや。何のための警察だよ！

「な、なんか声が……」

あ、泥棒に聞こえてたっぽい。一階で電話してたのに。時刻耳だ
な泥棒。

あたしもか。

「確かめてみるかっ」と

相手がナイフか何か持ってたら、あたしピンチだよねえ。

「よっこらせ」

泥棒に入った家で座ってたのか？　しかもおっさんくさっ。

「……え？」

うん？

「ぎゃああああああっ！」

えっ？

「で、出たっ、出たあっ！」

何が出た？

気になる。行っちゃえ。

「ひいひいひいひい」

みつともなく腰を抜かすおっさん泥棒の側で。

霊体の純兄が、ルービックキューブ、ビーズのねずみくん、紐で
できたボールでお手玉してた。

……純兄お手玉三個で出来るんだ！。

「お帰り」

「ん」「ひいつ!?!」

「泥棒はおいでませ」

震えてる震えてる。

「こ、この家の……?!」

「長女です」

「い、いつから居たっ!?!」

「始めから」

青ざめてる青ざめてる。

「ねえ、何かこの人可哀そうになってきたんだけど」

「だ、誰に言っ……」

「軍服純にー」

「制服なんだよッ!」

あ、照れてる。

死神の制服って軍服なの? いや、漫画で見たそれに似てるな
っただけなんだけど。

何と言うかね……んと、学ランのボタン全部取って、代わりにチ
ヤイナ服の前止めてる奴みたいなの紐がついてて、あ、学ランって言
うにはちよつと長いかな。全部真っ黒。

死神のイメージが若干崩壊中。

あれ? 確か妙羅と最凶トリオは和服だったし、盗人姉弟は口
ブだったような……。死神って、決まり緩いのかな。

「ぐんぶくじゅんにー……? この部屋には誰も……」

「居るよ、そこに。ほら、アンタの隣でお手玉……あ、もうやめん
の?」

あ、落ちたビーズのねずみくんが泥棒に直撃。

「痛っ。ま、まさかさつきから色んなものが勝手に動いたのは……」
色んなもの? 純兄何動かしてたの。

「うちの兄さんの仕業ー」

「にいさんって、まさか……」

「幽霊じゃないよ」

「ほ……」

「死神」

「ぎゃあああああああつ！ お化け屋敷！」

人聞きの悪い。こら、逃げるな。

「捕まえるよ」

「純兄が行つたんだもん。だから行かなかつたんだもん」

「ぎゃあああああつ！ 襟首を死神に掴まれたあつ！？ 死にたく

ない！ 俺には娘が……」

「こら、人を殺人鬼みたいに言うな」

「ひいっ！？」

泥棒さん、後ろ見ようよ。

あんたをつかんでるのは人間の純兄だよ？ 軍服も実体化。おお、

意外と手触りいいなコレ。

「んで、忍、警察は？」

「呼ぼうとしたけど切られちゃって。日本大丈夫か」

「んじゃ、とりあえず紐。ロープ希望」

無いわい、んなもん。

「……と思ったら何か目の前に転がってたりね。何故に」

「知るか。よこせ」

「ほいさ」

何か……。

泥棒縛る動作が馴れてるように見える。死神ってなんだっけ？

「よし。交番にでも届けてくるか？ 落し物つつつて」

「ちょ、待て！ 俺には娘があつ！ 命だけはっ！」

「テメエは俺を何だと思ってるんだ」

「へ？ 死神って……さっき……」

「分かった。死神を何だと思ってるやがる」

「人を殺す神様」

様つけるんだ。へえ。

「人を人殺しみたいにするなコレ」

「だってえっ！」

うるんだ瞳で行っても可愛くないよ、いい年したおっさんなんだから。

「ねえね、なんで家来たの？ それもこんな真昼間に。馬鹿じゃない？」

「本能には従う主義なん」

あ、蹴られた。思っ切り蹴られた。

「単なるアホだろ」

「金が欲しかったから……」

あれ、純兄が何か考えてる。

あ、考えるのやめた。

「今回特別。次はねえぞ」

「見逃してくれるんですか！？」

敬語になった！？

「これやる」

純兄が渡したのは……ほーせき？

「い、いいんですか兄貴！？」

「ん、誰が兄貴だ」

「じゃあ親父！」

「ぶっ飛ばすぞテメエ」

手がボキボキ言ってるよー。

そりゃあね、何が悲しゅうておっさんに親父呼ばわりされにゃならんのだと思っつわな。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

ほんとに本能に従う主義なんだね。多分生存本能使ったよね今。

その泥棒。

連絡先だけ聞き出して帰してあげた。

純兄曰く、連絡先を聞いたのはいつか利用できるかもしれないと

かなんとかかんとか。

「ところで純兄、さっきの宝石。お給料じゃないの？」

「んにゃ、あつちはプラスチック。せつかく苦労して手に入れたものをそうそう他人ひとに渡すか」

「……詐欺師だ。詐欺師がここに居る」

純兄の新たな一面を発見。

セコい。

202 誰でもピンチの時は心が通じ合うもの

「ああああああっ！」

……………五月蠅い。隣の家なのに響いてくる。どんだけ大声出してんだ。

「なあにーちゃん、今のなつくんの悲鳴」

「ほっとけ」

多分、明日提出の宿題が何か失くしたただけだろ。

「なあにーちゃん」

「ん？」

「夏休みがなんで八月中に終わんだよ」

「教育委員会にでも聞いて来い」

「そんな度胸ねーもん」

さらっと言ったな。

「やっぱさ、中学生はともかく小学生くらいは八月いっぱい休みでもよくな？」

「俺が小学のときはそうだった」

「ずっこいー！」

「あぁずっこいよ？ 何か悪い？」

弟や妹、その他誰かに『ずるい』と言われた時の対処の仕方。

否定したら『ずるい』『ずるくない』のループになるぞ。

「開き直んなよ」

「おい純っ！」

夏、たまには玄関から入ってきたらどうだ。

「探し物なら手伝わねえよ？」

「問答無用！ 来い！」

やだ。と言う前に襟首掴まれたら答えられん。

「……で、何を探せって？」

「英語のワーク。あとはまあ、俺の鉛筆が二、三本」

「ん、まあ頑張れ」

「んー、まいつか。ワークの方はお前のなんだけど」

今、何か聞き捨てならないようなことを言わなかったか？

「誰のだって？」

「んだから、お前の」

「首絞められるのと鳩尾蹴られるのとどっちがいい？」

「あはは、らんぼー」

うあ、ムカつく。

妙羅の相手してる時以上にムカつく。

「ん」

そういう訳で鳩尾蹴ってやった。

「あのさあ、鳩尾って痛いんだよ？」

「これでもかと言うほど知ってる」

小さいとき、同じ布団で寝てた忍に何度もかかと落としされたからな

岳にやられたこともあった。

「お前さ」

「ん？」

「今俺の笑い止めたよな」

額らへんに『怒』って文字が見える。

「俺を屍にしようとも？」

「そう」

「やってみやがれ」

「やってやるよ。今すぐ」

……ん？

俺は何しに夏ん家来たんだっただっけ。

確か探し物手伝って事で来たはず。

それが何で喧嘩になってる？ 取っ組み合い……っつか、殴り合

いの。

「そう言えば」

「あん？」

「何でテメエが俺のワーク持ってんだ」

「ああ、答え写そうと思って」

……夏休みの宿題を今日やろうとしたな。

「答えの本があるだろ」

「それも失くした」

「……テメエ、アホだろ」

「いや、成績オール三を守ってるぜ」

危な、鳩尾に拳入るところだった。

「お前さあ。オール三はアホだとか思ってたね？」

「せめて四が一つくらいあっても」

「一般人ナメんな！」

威張るところか？

「世の中にはなっ、オール三を目標にしてる奴だっているんだ！」

「……清か？」

「良雅くん」

あれ、小学の時成績よかったのにな。

「赤点の嵐ナメんなだつてさ」

……良雅くん、何があった。ああ、酒始めたのか。

「あーっ、お兄ちゃん何やってるの！？」

「俺の笑いを遮った奴の始末」

「もう！ ほらストップストップ！」

春に入ってこられると止めるんだな……。いざと言つときのために覚えておこう。あるのかどうかはともかく。

「あーあー、引っかけてたハンガー落ちちゃったよ。直しとくんだよっ。」

『へいへい』

「返事は一回！」

「母さんかよ」

「へへ、言ってみたかったんだー。あ、そうだ！いまひーちゃん
とみーちゃんと一緒にゼリー作ってるからね、後で持ってくるね！」
最近やって無いなーと思ってたんだ。

同時に、そろそろやるんじゃないかねーとも思ってたんだ。

「純」

「分かってる」

一瞬でハンガーを直して、すぐさま逃げる。

とりあえずゼリーが出来て、それを他の奴等が食べ終わるまでは
裏山にでも行っておこう。

203 お土産騒動

「はい、お土産」

「おーっ、サンキュー」

「わ、ありがとう」

「え、私にもっ!？」

「あ、ども」

「凄いな、誰一人として同じ反応をしない。

「忍でーす。」

「開けていい?」

「いいよいいよ」

「何かなー。何か丸っこくて硬いモノが入ってたけど。」

「あら、小瓶? ……の、中身は何? 何かの歯?」

「サメの歯だよ、魔よけのお守り」

「へえ、ありがとう。お、お返ししないけど……」

「いいよいいよ」

「あれ?」

「あたしのはペンダントだ」

「縦に伸びた丸いガラスの中に埋め込んである。」

「あ、それ俺も」

「俺も」

「忍と純くんはそっちの方が好きかな」と思っ

「よく分かってる。」

「なっくんは……小瓶じゃ、失くしちゃうでしょ? ペンダントも

付けてなかったらそうなりそうだけど」

「よく分かってる。」

「……もう俺、これずっと付けとくよ……失くしたらもったいねえし、悪いし」

「わゝ、嬉し」

ピキッ

あれ、何か変な音が。

「ちよつと海中、割ったんじゃないでしょうね？」

「いや、俺じゃねえよ」

「純のだ」

見てみたら。

純兄の手の上でガラス球が真つ二つ。

「純、お前何か憑いてるんじゃないか？」

「篠、それはないっしょ」

憑かれてるといえば憑かれてるけど、死神に。

おお、ここだけ何も知らない人が読めばかなり怖い。

「た、高山そのものが魔なんじゃない！」

「ええっ！？ 玲奈ってば酷い！？」

「貴方には言つてないのよ！」

だってあたしも高山だし。

「歯が出てきた」

「おー、貸して貸して」

見たい見たい！

「痛ッ」

「純兄大丈夫？ 血い出てるよ？」

「この歯、俺に喧嘩売ってんのか？」

刺さったのかな、引つかいたのかな？

ところでなつくん、今は放課後だけど、いつもなら笑い声のせい

でクラス中の人に見られてる事分かってる？

「……さっきの、冗談のつもりだったけど、そうでも無さそうね」

「純兄、あたし以外誰も心配してないよー？ かーなし」

「別に悲しかねえよ」

「見ててかーなし」

痛い痛い、鳩尾に手、突っ込まないで。

殴られるより衝撃は無いけどめり込むのも痛いから。

「あ、あたし絆創膏持ってるぞ」
「お、さーすが篠」
「いや、いい。多分絆創膏じゃおさまんねえから」
『どんだけ深いんだよ!?!』
「んー、カッターで切った時以上、彫刻刀で掘った時以下」
「あいまいだなあ。」
「保健室、行って来たら？ 別にあなたの心配してるわけじゃないけど」
「へいへい」
「忍の心配だからね！ あなたが死んだら忍が悲しむでしょっ！」
「そうだよー、兄ちゃん、忍、泣いちゃうよ？」
「ちよつとノって見た」
「俺の傷はどんだけ深いんだよ」
「指の先っぽだけだけ」
「あああもうっ！ さっさと行きなさいっ！」
「ゆでダコだ」
「りんごって言ってあげようよ」
「五月蠅いわね！」
「まっかつか。」
「……ところで鈴木」
「なによ！」
「シャツ掴まれてたら、進めねえ事くらい、分かるよな？」
「ぼんっ しゅー」
「あはは」
「なっくん、笑ってばっかかりないですよ。」
「玲奈が煙を上げて倒れたっ！」
「ナイスキャッチ、篠。」
「オーバーヒート」
「ロボットじゃあるめーし」
「保健室行きが一人増えた。」

「どーやって持ってこよう」

「よし、岬！ お姫さん抱っこだ！」

「はひ！？ 何で俺！？」

居たの！？ 全然気づかなかった。案外影薄いね、この人。

「ほら、俺の爆笑のためにやれよ」

「やらん！」

そりゃあそんな事言われたら誰だってやりたくなくなるわな。

「ほい、これでいいだろ」

「純くん、女の子を担ぐってどうかと思うよ？」

「桜、こいつはデリカシー欠けてるんだ。仕方がない」

「……忍、負ぶってやれ」

結局あたしに回すんですかお兄さん。

っていうか、よく指怪我してるのに担ごうとか思ったね。

いや、怪我してるのと反対の指だったけど。

保健室。

「先生、お土産です」

そう言っつて玲奈を渡したら。

保健室の先生（男）は妙に慌ててた。

……あたし、何か悪いことした？

204 はぐれて見つけて金魚すくい

「はぐれた……」

こんばんは。はぐれました。

忍です。

今日はお祭りなのです。

一緒に来たはずの純兄となっくんが迷子になりました。え？ 迷子になったのはあたしの方？ そうとも言っ

あ、綿菓子発見。食べよう。こんなのは探すだけ無駄。適当にぶらついてたらそのうち見つかるよ。

「というわけで、いただきます」

綿菓子っておいしいよねー。

「あ、忍」

「来てたのか」

「おー、しーちゃんに桜。二人一緒に来るとあたしだけ仲間はずれにされてたような気分になるのですが」

泣きそうです、友達に仲間はずれにされました。

「ほら、小学校の校区違うから待ち合わせしにくいでしょ。忍は忍で来ると思ってたの」

あたしの行動は想定済みですか、そうですか。

「ところで、清見なかったか？」

「迷子の迷子の清くんなの」

「見てないよ。あ、それより焼きそば食べない？」

『食い意地はってるな（はってるね）』

ほっとけ。今日の晩ご飯なんだよ。

綿菓子は食事の前なのデザート。

「あれ？」

ん？ どした桜。

「清くん見つけた」

あつさりだなあ。

「桜、他人のふりだ」

清、たこ焼きは口いっぱい詰め込むものじゃないよー。

「むー！ ひふへはー！」

「み、見つかったーっ！ 逃げるよあつ！」

「んぐ、んぐ……こらっ、逃げんなー！」

逃げたのは桜だけです。

「あれ、篠は？」

篠もだった！

「あ、ねえ、純兄となつくん見なかった？」

「あん？ 見てねーよ。ああ、でもお前の妹なら……」

光？ はーちゃんと美代と一緒に来てた筈。三人揃って浴衣着て。

「金魚すくい女王の座に君臨してたぞ。ほら、あつち」

何やってんだ光！ 金魚すくい女王って何！？

ちよつと覗きに行こう。

「ほらほらー！ 早く取らないとなくなっちゃうよー」

「いけいけひーちゃん！」

「……いけいけー」

おお、あつさり見つかった。

金魚すくい女王とその側近。どうでもいいけど金魚すくい女王って語呂悪いな。

「じよおーさま！ たくみのもとって！」

「ゆーちゃんのもー！」

「ぼくもー！」

おお、自分で取れないちびっ子たちに大人気。

誰だ、『じよおーさま』とか言った奴。

「じよ、讓ちゃん、頼むから全部は盗らないでくれ」

金魚すくいのおじさん、字が違うんじゃない？

「どうせ三匹しか持って帰っちゃダメなんだから、な？」

『えっっ』

「えっじゃねえよこら」

あ、純兄めつけた。

「あゝ、純お兄ちゃん〜」

「見てみて！ ひーちゃんがこんなに取ったんだよ！」

「……百円で取りほーだい」

「違うからね!?!」

あ、純兄が登場してから金魚すくいのおじさんがちょっと安心してたような顔してる。

「テメエら、どうせ取るなら家にいねえ出目金にしろ」

『了解!』

ああ、金魚すくいのおじさんが『ガガン!』って顔してる。どんな顔かは皆様の想像にお任せします。ヒントは酷い顔。

「ああ……この兄にしてこの妹なのか」

「おっさん、被害が出目金だけでよかったじゃん？」

なっくん、慰めになってるのかそれ。笑いながら言うからほら、

おじさん泣いちゃったよ。

「美代！ こら！ 家に水槽無いの忘れたか？」

「兄上。ほら、金魚」

「可愛えー」

……村田、頬が緩んでる……。

ほんとに元いじめっ子がこの人。

それはともかく。

お祭りはまだまだ始まったばかり。

205 お祭り大好き？

「あれ？ 美香？」

「……は、はぐれたわ……」。

もうっ、いつつもふらふらしてるんだから美香はっ！

どうせ適当にぶらぶらしてるでしょうっから……」。

「こっちから探さないと……」

「おー、玲奈だー」

「あら？ 忍じゃない。一人？ 高山は？」

「あのね、玲奈」

「な、何よっ？」

急に真剣な顔してっ！ らしくない！ …… 今のは失礼かしら？

「あたしも高山って名字なの、覚えてる？」

「お、覚えてるわよそれくらい！」

「ちょっと忘れかけてたわ……」。

「それでね」

「まだ何かあるの？」

「夏休みの始めに純兄の事、純って呼んでって言ったの忘れた？」

「そ、そういえばそんなことも……」。

「でもっ、そっちこそ、高山に玲奈って呼ぶように言っとか言っ
たじゃないっ！」

「こんな言葉があるんだ、玲奈」

何よ。

「それはそれ、これはこれ」

「殴るわよっ！？」

「やばーん」

「失礼ねっ！」

「あはは」

もうっ。

「ところでさ、篠と桜、見なかった？」

「見てないわよ。あなたもはぐれたの？」

「ん？ 玲奈もはぐれたの？ …… ああ、中森？」

「別にはぐれたんじゃないわよっ」

「いや、ここで隠すことにどんなメリットが？」

「知らないわよ。自分で行つといてなんだけど。」

「じゃあ一緒に回るっか。見つかるかもしれないし」

「そ、そうね」

能天気な考え方……。

「あら？ あれって、高山じゃない？」

「玲奈……じゅ・ん！」

「ああもう！ 分かったわよ！ あれ、じゅ、じゅ……じゅん、じゃない！？」

「何か……玲奈って可愛いんだね。うん、顔は可愛いというより美人なのに」

「五月蠅いわね黙りなさいよ怒るわよ！？」

「怒ってるじゃん」

それはそれ、これはこれ！

「あめちゃん食べる？」

「子どもじゃないのよ！ しかも綿菓子じゃない！」

「綿あめとも言う」

ああ言えばこう言う！

「あ、玲奈さん」

あ、美香……って、

「何よそのかつこう！？」

「お祭りは楽しまなければ意味がありません」

だからって……、頭にお面、首にはぴかぴか光るおもちゃ、手首足首には光る輪っか、右手に綿あめと風船のヨーヨー、左手にチョコバナナ。

オマケに元から着てた赤い浴衣でもう、これ以上ないほどお祭り

！　　ってオーラが……。

「中森って、意外と……恐ろしい人だね」

「高山さんもいかがですか？　チョコバナナ」

「いただきます」

食べるのね……。

「あ、そうそう、玲奈さんにも一つ」

何よ？

「はい」

……ぴかぴか光る、ゴムの指輪……。

「こんなので喜ぶ人がどこにいるのよっ!？」

「……」

美香、喜ぶの……？

「ほら、よく言うじゃないですか。プレゼントするなら自分がもらって嬉しいモノをって」

言う、けど……。

「自分がずれてるとかは考えないのね」

「え？　ずれてるのですか？」

本気で不思議そうな顔をしないでくれる!？

206 お祭りの四人組

「修也あ、なんでおめー、かき氷みぞれなの？」

「悪いか」

「悪い」

舌の色が変わったのを見せ合いつこすんのがかき氷の楽しみだろ！
違う？ 違うのか？

岳だつ！

歩きながら食べるかき氷ってうめえよな！ ちなみにオレのはブ

ルーハワイ。

ブルーハワイって、どーゆー意味なのかね。単純に青いハワイか？

「修也、このイチゴ味、美味しいよっ！」

「古閑あ、かき氷の味ってどれも同じじゃない？」

あ、言おうとしたこと翔に言われた。

「微妙に違うの。多分！」

多分にそんな力入れて言うなよ。

「む」

「どーした修也」

砂の上で元気に跳ねる金魚でも見つけたか？

「金魚の群れだ」

修也かき氷を突いてたストローの先を見ると……。

砂の上で元気に跳ねる金魚の群れがあった。

怖えよ！

「ど、どうしよ、水に戻してあげないと……。何処から来たのよこ
んなの！」

古閑、すぐそこにひっくり返ったタライがあることに何故気付か
ない。

「ああごめんね、すぐに戻すから……」

お、金魚すくいのおいちゃん。

この人の手が金魚に近づくと、一段と跳ね方、つつか暴れ方がひどくなるように見えるんだけど、これはオレの目がおかしいのか？

「よかつたですね！ 元気な金魚で！」

「じゃないと今頃チーン、だもんなー」

「高山！」

「ごめんなさいもう冗談で死に関係すること言いませんから。古閑の怒った顔って意外に怖いです、はい。何処からどう見ても鬼です。ツノ見える。冷や汗半端ない。」

浴衣着てる女の子は誰だろうと可愛いモンだとか言ってた文月くん、怒らせたらそーでもねーぞ。

さっきまでは確かに可愛かったけど。

「……ちよつと、君顔見せて？」

何ですか金魚のおっちゃん。略してお茶。あれ、何か全然違うものになった。

「うわあゝ、やっぱり金魚すくい女王に似てるゝ」

誰だよそいつ。

「ごめん、もう来ないでね」

「いきなり何だよ！？」

酷くね？ いくらなんでもこれは酷くね？

「奈那子、ヨーヨー釣りがあるぞ」

「わあっ！ やろつやろつ！」

「おれ等は？ 邪魔？ やっぱお邪魔虫は居ない方…… ってえっ！？」

あ、翔がいらんこと言うから殴られた。

あ、お茶がどっかに消えた。

「ああ、ごめん。つい岳にやるような感覚でやっちゃった」

「やっちゃまった じゃねーよ！ お前が『』とか使つと怖えん

だよ！ つつかどんだけハイレベルな喧嘩してんだよアンタ等！？」

前半は修也も明るくなった、つつー事でいんじゃないやね？

で、後半は……。

『この場合は翔のレベルが低すぎるだけ』

「ハモっていうんじゃないなあああああい!?!」
いや、だって。

脚は速えーけど、こういうのの反応鈍いし。少なくともそこら辺のクラスの奴よりは。

「いいから、早くヨーヨー釣り行こうよ!」

「そうだな」

「ほいさっ」

「え、今の話題これで終わり!?!」

翔、違う。もとの話題に戻したただけだ。

数分後。

『岳ってこういうの下手なんだな』

「ほっとけ!」

そこに突っ込んだじゃだめだ!

『さあ、次はプラスバンド、ザ・プラスバンドです！』
まんまじゃねえか。

夏だ。

純が何処行つたか知ってる奴居るか？ 忍でも可。

「あ、なつくんめつけた」

「めつけたはこっちのセリフだと思うぞ？ 忍」

ところで、右隣に居る鈴木はわかるけど、そのさらに右隣でクレ
ープ食ってる浴衣娘は誰？

あ、いや、何かお面だとかヨーヨーだとか持ってるし、どっちか
と言つとお祭り娘？

「あのねなつくん。人数の少ない方が迷子って呼ばれるの」

「あんな忍。屁理屈っていうの、それ」

「屁理屈上等！」

喧嘩上等みたいに言うなよ。

「たか……じゅん、は？」

「純？ 今探してるとこ。……あれ、鈴木ってそんな風に呼んでた
っけ」

「ほつときなさいよっ！」

分かった、ほつと……けるかこんな笑いの種になりそうなもん。

「何でだ何でだ？ ほれ、言ってみ。吐いて楽になっちまいな」

「訳分かんないわよっ！ 刑事ドラマじゃないのよ！」

どっかで聞いたのをまとめたんだけど。そうか、刑事ドラマだっ
たのか。

「あたしが頼んだの。だつて、あたしも高山だし」

何だ、つまらん。……いや。

「気の強い玲奈ちゃんが無理に従ったのかあ、その心は」

「謎かけじゃないのよっ！ 従うとか言うんじゃないの！ わ、私

は友達をお願い聞いてあげただけなんだからねっ!」

「リングみてえ」

「何で顔色見えるのよっ!」

ああ、ほんとに赤くなってたのか。周り暗くて見えなかったんだけど。

「あつ、純兄めつけたあつ!」

忍、俺を見つけた時と純を見つけた時のテンションの差は何。

地味に哀しいじゃないか。

「純に、玲奈のこと、玲奈って呼ぶんだよ?」

「はあ? 何を突然」

「別にいいでしょ。桜も篠も名前なんだし」

「いいけど、別に」

ああ、何か暗くても分かるくらい鈴木顔が赤くなった。頼むからは爆発だけはしてくれるなよ。

……熱が伝わってくるんだけど。風邪ひいてるんじゃない?

「あゝつ、居た居た、忍ご一行」

「桜、やっぱまとめるんならこれだろ。しじなれみ」

「そんなまとめ方をするのは清だけだ」

篠、俺もそう思うよ。

「あ、清! それはもしや……」

「あん? 綿菓子かどした?」

「いただきます」

「あああああつ!?!」

忍……今、半分も盗ったな、一口で。

「どんな口してんだよお前は!?!」

「ほふなくふい」

こんな口、か。なるほど、綿菓子だらけの口か。

……あれ?

「おーい、美咲ちゃん」

あ、シカトされた。ちゃんと言わなきゃダメ?

「おい、岬！ 村田岬！」

「あはー、やっぱり俺の事がよぶっ飛ばすぞメエ覚悟はいいなコラ」
美咲ちゃんって呼び方気に入っててつい。

「一人でお祭りとか岬も寂しい奴だなー」

「妹も来てるけどよ……」

「うちと、純とこの妹にとられたんだろ。やっぱり兄貴より友達だよなー」

忍は例外かと思ったら案外そうでもないし。

「ほら、何かいいことあるよ美咲ちゃんにも」

「うん、俺は男」

「そこには突っ込んだめだ」

「何で!?!」

俺が楽しくないからだ。

208 夏祭りの終わりに

『さて、今年の夏祭りもあとわずかとなりまちっ……た!』

「噛んだね」

「噛んだね〜」

「噛んだ」

光、春、美代。三連続で言ってるな。

何か司会の人可哀そうじゃなか。すぐそこにいるんだから。忍でーす。

夏祭りが間もなく終わるらしいです。でも毎年の恒例のステージ……と言っているのか微妙なものがあるのです。

『さて、最後はやっぱりこれ! ええー、え? 何? は? 適切に題名つける? 無茶だろ、これって元から決まってるもんじゃなかったのか!?』

おーい、全部マイク通ってるよ。司会者ことサンゴの兄ちゃん! よくバイトしてるねこの人。これもバイトでしょ?

『ええ、失礼しました。それではーっ、レッツ、ダンスしたい人だけ前へどうぞー』

なんて適当な。

んーと、まあ大体言っちゃってるけどこれが毎年恒例、自由参加の適当ダンス。

ランダムで流された音楽に合わせて、どうぞご自由に踊ってくださいこっちは音楽しか用意しませんから。みたいな……なんだろうね? ステージとも言い難いし。

参加する人がいるっていうのが凄いなと思うよ。ノリいいなあ、皆ちなみに、「手抜きじゃね?」とか言ったKYは速攻つまみ出されます。誰にかは知らんけど。怖っ。

「修也行けよ」

「絶対やだ。岳が行けばいいだろ」

「絶対やだ」

まあ、こーゆーノリでされる会話も大量発生するけど。つて、岳達いつから居たの。

「よしゃっ、行ってやらあっ！」

こんな奴も大量発生するけど。行ってらっしゃいお祭りに来てた誰かさん。

『よし』

ん？ 岳と修也が突然頷いた。

『翔、お前行け』

どういふ流れでそうなったんだ。

「了解！」

『了解すんの！？』

「よしっ！ あたしも行ってやるっ！」

……えと、古閑だったかな？ この子ノリいいんだねえ。

「純行って来「ヤ」」

純兄、いくらなんでも返事早すぎやしないか。

「何でだよ。行って来いよ！ 俺の爆笑のために」

「だから嫌つつつたんだよ。テメエが行け」

「いや、俺は常に笑う側に居なきゃなんねえの」

不思議お菓子持ったはーちゃん相手だと、あたしや純兄に笑われる側になるじゃんか。

この時はもう、ここまで笑わなくてもいいんだけどつてくらい笑つてやるよ。日頃の恨みを晴らすために。

日頃の行いは大切だねえ。

「あれ？ そこに居た妹ちゃん三人組はどうしたの〜？ 居ないよ？」

「桜、あっこ」

しーちゃんの指すところを見てみれば……。

妹三人組が踊ってました。三人そろって、ソーン節を。

流れてるのはラテン音楽なのですが。ええと。まあいいや。地味

にリズムあつてるし。どうやって合わせてるんだ。

『はいっ、突然ですが、終了です!』

「ほんつと突然だな。曲途中だぞ。毎年こんななの?」

ああ、なつくんは初めてか、このお祭り。

「噂によれば……、祭りが始まった時からこんなだったらしいです」

「へえ〜、つて」

『どひゃあい!』

びっくりした、びっくりしすぎて思わず皆で意味不明な叫び声上げてしまった。

「オカルトオタクのマコちゃん!?!」

「しののん……、マコちゃんと呼ばないでください……」

じゃあそっちこそしののんとか呼ぶな。シナモンみたいじゃないか。シとンしか合ってないけど! 発音がシナモンみたいなんだよ

! 四文字だし!

「あとオカルトオタクではありません」

嘘つけ。オカルト部って、オカルトオタクの集まりじゃんか。

暇人の集まりのような気もするけど。

『それでは! 花火によって今年の夏祭りを締めくりたいと思います!』

あ、何かマコちゃんが去っていく。……何しに来たんだあの子。

「へー、花火? ……つて、あれ?」

あれです。

ステージの天井を支えてる棒に渡された紐についてる細いモノ。

あれ、よく売られてる手に持って遊ぶ花火です。

んで、その一、二mくらい離れたところにポーンと置かれてる短い筒は、上に吹き出す、でもやっぱりあっちこっちで売られてる花火です。

「相変わらずシヨボッ」

岬、謎の誰かさんXにつまみ出されるよ。言っちゃだめだ。

「あれ線香花火だったりしないかな〜」

光、

「……だったら、ソッコー終わる……」

ああ、美代に先言われた。

「あ、火が点けられるわよっ!」

玲奈さん、凄く嬉しそうですね。言わないでおいてあげるけど、なつくん笑いかけてるよ。どうはまったんだ。

「しゅぱー」

中森、花火の音を口で言ったのは何故。

まずは上に吹き出す花火。うん、五個ならんで吹き出してたら綺麗。

点け方も両端からだからね、真中が残るし。

手に持つ細い花火も点けられると、これはこれでずら〜っと並んで綺麗。

結構高い位置に吊るされてるから、火花が雨みたいに見えるんだよ。

「花だ」

うん、隣に来た人が言ったみたいに、花が降ってるみたいだよ。

火の花、椿みたいな形したそれが、落っこちて、消える。

「見る度に思っけど、馬鹿に出来ないな。こんな細かい奴も」

……ところでね。花だって詩的な事言った人。あたし知ってるんだ。

「ハルヤン、だっけー」

「しののん、ちょっと来てくれるか?」

きゃー、さーらーわーれーるー!。

「純も」

「忍」

逃げるんだね。

「がってんだ!」

ダーツシュ!

……何で夏祭りの終わりに追いかけられなきゃなんのだ。

「でもでも。ううっ……やっぱ、言わなきゃダメかなア？」

「里山の頭のネジが飛んだか」

「修也、何気に酷いぞその言い方」

何気にどころかモロ酷えよ、翔。

岳だっ。

オレは見た。里山が俯いたまま背後にいる幽霊と話しているのを。つてか、皆見てる。そりゃそうだ。里山声でけえし。

「よ、よしっ！ 行ってやるんだよっ！ りりは悩まない子だっ！」

『滅茶苦茶悩んでたじゃん』

あ、クラス全員の突っ込みに幽霊も参加。

……とここでこの幽霊、顔が白くない以外は凄く舞妓さんみたいななんだけど、

髪型とか、着ものとか。修学旅行の楽しみが減るからそんなカツ

コしないでくれ。

「今日の給食、プリンを付けて貰えるように頼んで来よオっ！」

『んな事で悩んでたのか！？』

クラス突っ込みが再び炸裂！ まとまってるよなあ、このクラス。

「と言う訳で先生っ！ 行ってきます！」

「いってらっしゅい」

「いいのか？」

修也の呟きは聞こえてたようで、せんせはこう言った。

「善は急げ」

『善なのか！？』

プリン付けて貰えるように頼むことが！？

「先生プリン好きなの」

せんせが好きなのはお菓子全般だろが。

「何としても付けて貰うからねっ！ 誰か一緒に行こうよ！」

「んじゃオレ行こーっと」

夏休み初め、あんなに幽霊の声怖がってた里山が仲良ししてる幽霊と話してみたいし。

プリンはい……半分ついで、半分本気。オレもプリン好き。

「じゃっ、あたしも行くよ！ 璃々」

古閑もなんだかんだでノリいいな。

「じゃーおれもー」

翔はい、どうでもいいや。

「こつ来たらやっぱ、お前も来なきゃダメだろ、修也？」

「元から行く気だ」

あれ？

「プリンが付けられることは阻止しないと……」

あ、確か卵アレルギーで食えないのか……。

周りが食ってんのに自分だけ食えないとか悲しいもんない。

「代わりにヨーグルト」

そこはどうでもいいから。

『ヨーグルトはやメテ』

「何だよ幽霊。お前食わねえだろ」

『臭い嫌なの！』

幽霊が何で臭い分かるんだよ。

「大丈夫だよミナコ！ ヨーグルトじゃなくて、プリンだから！」

『うん、うん。絶対だね？ リリ』

「もちのろん！」

盛り上がつてるところ悪いけど。

「里山、ミナコとやらはお前の向いてる方と逆に居るぜー」

「ありやりや？ そーなの？」

幽霊の方から動けよ、とか思ったのはオレだけじゃない等。

「しゅ、修也あ……何か、居るのかな……？」

「そこは岳にしか分からねえっばいけど……大丈夫」

修也、何が大丈夫なのか三十秒以内で説明よろしく。

「古閑さあん！ 修也様から離れなさい！」

何だよ、今出てきた眼鏡っ子。

「しゅーやさまあ？」

あ、翔の目が点になってる。文字通り点に。どうやってるんだそれ。

「修也、あれ何？」

「ファンクラブ」

どこの漫画だよ。

「修也あつ！ 死にさらせ！」

「コラ翔！ そんな言葉を使うんじゃない！ ちよつと来なさい」

せんせが怒ったあ！？

「ねえねえ！ そんな事より早く給食室行こうよオ！」

『私も首をながあくして待ってるんだからあ』

おお、ホントに首がながくく……あれ？

「里山」

「うん？」

「そのお前が仲良くしてる奴さ」

「ミナコがどうしたの？」

「幽霊じゃなくて……ろくろ首って言わね？」

「……え？」

いやだつて！ 首が余裕で結べそうなくらい伸びてるぜ！？

『バレタカ』

「バレるも何も自分からばらしてんじゃねえか！」

『チツ……仕方無い。今日ノ所ハコレデ……』

「見つけたあああああつ！」

うわあつ！？

な、何か凄い顔した天が飛んできた！？

……窓ぶち破つて。

『キヤアアアアアアア！』

女子の悲鳴ってどうしてここまで高いのか。どっから出してるん

だその声。

「このオバケめ！ 私のバナナを返せ！」

猿かお前は！

つて、ちよつと待て！ 鎌を振り回すな！

「天ちよつと待て、落ち着け」

『そーなのでしゅ！ バナナは後でも取り戻せるでしゅ！』

「学舎バラバラになったら、直すの大変だねー」

「霧瑠依は何落ち着いてるでした！ 妙羅先輩も！」

「と、とにかく天！ オバケは殺すな！」

「クスリ、使う？」

『何煽つてんだよ！』

おー……、何だ、死神様ご一行？

……お化けも流石に引くよなあ。

つつか、何？ このカオスな状況。プリンどこ行った？

「コーヒーだ」

「コーヒーだね」

「……コーヒーがどうしたの？」

「コーヒーがあつたんだよ。」

「紙パックのやつ。『微糖』とか書かれてるの。」

「春だよ。」

「ひーちゃん家でね、コーヒーを見つけたの。それだけ。」

「どうしようか」

『何を？』

「このコーヒー」

「どうかするの!？」

「家にコーヒーの紙パックがあるのは珍しいの」

「ウチン家には常にあるけどなあ。お兄ちゃんとお父さんが飲んで

るよ」

「わっかんないなあ、なんであんな苦いのが飲めるんだろ。」

「……ぶらつく？」

「うん、そのまんま」

「すごい！ なっくんて実は大人だったんだね」

「ブラックのコーヒーが飲める」大人

「これって、間違いじゃないよ！ ウチ達からしたら。」

「純くん飲んでそうじゃん」

「まずコーヒー飲んだるところ見たことないよ」

「……お兄さん、紅茶派？」

「紅茶は嫌いって言ってた。臭いがキツイって」

「美味しいのに！ ウチ、ミルクティー大好きだよ！

「あ、そうだ」

「……？」

「お兄ちゃん達に飲ませてみよう」

「実験？」

「ピンポン」

どうなるのかな、どうなるのかな？

「純お兄ちゃん。岳お兄ちゃんも。コーヒー飲んで」

『何を突然』

ビバ突然！……なんとなく言ってみただけだよ。

コーヒーのコップを渡してみると……。

「これ、何か手加えた？」

岳くんは、すごく怖がってるような顔で言われちゃった。

何か、失礼じゃない！？

「なにもしてないよ！」

「うん……まんま」

「あ、んじゃ貰っとく。サンキューな。ちょーどのど乾いてたんだ、オレ」

岳くんはあっさり飲み干した！ 意外！ だってゴーヤ嫌いなんだもん、岳くん。

関係ないか。

「何で純お兄ちゃんまであっさり飲むの？」

「何か悪いか？」

『悪い』

面白い反応を期待してたんだよウチ達は！

「何してんの？」

忍ちゃん、ドアの隙間から出した顔が生首みたいで怖いよ！

「お姉さん、飲んで」

「コーヒー？……この中に火薬が入って飲んで瞬間ドカーンなんてことは」

『あるわけないでしょ』

さすがにそこまではしないよ！

「大丈夫だよ、何もしてないから」

「じゃあいただきます」

あっさり信じるんだな。岳くんたちもそうだったけど。

「うえ、やっぱり苦い。牛乳足そ」

あれ？

「忍ちゃんはコーヒー飲めないんだ」

「……でも、面白くなかった」

それは確かに。

……というか、コーヒーだけで面白い反応する人って居るのかな？

211 眠った人での遊び方

「純兄、寝れん」

「そうか。俺は寝る」

「寝れんって言ってるの」

「お休み」

「寝れないんだってば」

「……すー」

「だから相手してよ」

寝たふりはいいから。あたしが眠くなるまででいいから。忍でーす。

純兄が相手にしてくれませんか。暇です。

「純兄、妙羅呼ぶよ？」

「止める」

あ、起きた。

「んだよ、もう十二時過ぎてんじゃないかねえか……」

眠そー。半眼になってる。

「その眠気あたしによこしなさい」

「妹にそのような言葉を使われる筋合いはねえ……」

「ごめんなさい。その眠気あたしにも分けてください」

「できねえもん……だから寝る。おけ？」

「ぜんぜん『おけ』じゃない。」

「つまりは寝れるまで相手してってことなんだけど」

「布団に入って目え瞑ってたらそのうち寝れる……」

「無理」

「即答するな」

十一時から一時間それやって無理だったんだもん。

「しりとりしよー？」

「キリン。ああ残念、終わったな。お休み」

腹の上でジャンプしたるか。

「マジカルバナナしよー」

「嫌」

「とりあえず何か相手してよ」

「妙羅達の相手で疲れた」

えー。

「何してきたの」

「タイの尾頭」

えーと、

「タイの尾頭付き食べてきたの？」

「いや、タイの尾頭」

結局何してきたの!?

「すー」

いやこんな気になる事言い残して寝ないですよ。

「ねーってば、純兄」

「薬草採りの手伝いなら今日は無理……」

誰が薬草採りの手伝いなんか頼んどるか。斬じゃあるまいし。

「おーい」

「書類ならそこにおいてあります置物……」

誰が置物だ。妙羅じゃあるまいし。何で敬語？

「もしもーし」

「ここはラーメン屋じゃないですよ……」

電話の相手誰だよ。

……何この純兄。面白い。寝てたらこんな事なるんだ。寝てなか

つたら言わなさそうなことばかり。そりゃそうか。

「なっくん呼ぼうかな」

「たいした度胸だ……」

何でっ!?

「ぶくぶくぶくぶく」

「ぶくぶく? うん、毒あるぞ」

「いやいや、聞き間違えてるよ。」

「うぼうぼっ」

「水の中でよくこんなに生きてられるな……」

「どんな場面!? 何が起きてるの!？」

「深爪、深爪え」

「大変ですね……」

「誰相手に話してるの？」

「それより、何で嫌な夢見そうな事ばかり言ってるのに全部かわすの!？」

「ってか、どうしてかわせるの!？」

「よし、次の手！」

「滝だー、目の前に滝がある。落ちる」

「跳べる事を忘れましたか？」

「だから誰相手に話してるんだよ。」

「うーん、他には……」。

「このKYめ！」

「んぐっ……」

「あ、効果あつた！ 何か嬉しい。」

「空気読めない奴」

「んっ……すみませんね……」

「謝ったあ!？」

「ちよつと拗ねてるような声だけどっ！」

「うーん、他に何か無いかな？」

「あ……真面目くんとか？」

「真面目……? そうでしょうか……」

「さつきからずっと敬語だね。何で？」

「聞いてみよう。」

「何で敬語？」

「頭カラッポそうでも上の人ですから……」

「皮肉を混ぜるなよ。上の人相手に。」

「大きなカブー」

何か突然思いついた。

「おばあさんは孫をどんぶらこ……」

話変わってるよ!?!? そして何か怖くない!?!?

「怖い、怖い怖い怖い怖い」

「玲奈、手、痛い……」

玲奈が登場? しかもなにやら? まれてる? いい雰囲気?

「玲奈、玲奈、玲奈、玲奈」

「俺にサメの歯を向けっぱなしにしているのはどついつ意味があるか言ってみろ……」

悪霊退散! かな?

なんでそうなるの!?!?

……あ、何かちよっと眠くなってきたな……。

「眠い眠い眠い眠い」

「とつとと寝ろや……」

そうします。

212 お化け屋敷の意味

「ねえ純兄、行こうよあれ」
「ん？」

「忍の指す看板に書かれてるのは『お化け屋敷』
純だ。」

「電車で三十分位の所にある、白銀しろがね高校とか言うところの文化祭に来てる。」

「何か、忍が前に説明会来て、面白そうだったんだと。」

「んで、一人で行ったら寂しい子みたいだから一緒に来いだと。」

「ね、行こうよ。お化け屋敷」

「ん、別にいいけど」

「お化け屋敷って……小六の水小祭り以来だな。遊園地とかも行か
ねえし。」

「はい、それでは彼女さん、しっかり彼氏さんに捕まってく
さいねっ」

「誰が彼女（彼氏）ですか」

「ち、違ったの!？」

『兄妹です』

「はわはわ、これはごめんなさい! ……いいなあ、文化祭付いて
来てくれるようなお兄ちゃん居て」

「俺は単純に好奇心から来たただけなんだけど。」

「純兄、小つちゃい時のノリのままだから勘違いされるのかな？」

「知らん」

「うわ、中真っ暗だ。」

「……迷子になるに一票」

「迷路じゃあるまいし。」

「純兄どこ？」

「目の前に居るだろうが」

「暗くて見えないんだよ」

「慣れるよ。」

「おら、さっさと行くぞ」

「見えないって言ってるのに！」

「服掴むな。首が絞まる。」

「あ、純兄がここに居たからー。あ、手ここだ。よしー！
よしじゃねえよ。」

「何で手え掴んでくるんだよ」

「はぐれそうじゃん？」

「納得」

「だって忍の方見ねえし。」

「こおおおおんのリア充がああああああ！」

「んっ」「とっ」

あ。

しまった。

「ぎゃああああああああつ！」

二人そろって蹴つちまった。

ほら、暗い所から突然叫びながら出て来るから……。

「どーしよ兄ちゃん。つい誰がリア充だーと言う否定のつもりで」

「……まあ、いいや」

「向こう気絶してる……。一分もすれば起きるだろうっ！」

『ごめんなさい』

謝るだけ謝って、次。

「んっ、ここ曲がればいいのか」

「ねえ、やっぱりまだぼんやりとしか見えないよ。痛っ
よかつたな、壁が段ボールで。」

「とーおりゃんせー、とーりゃんせー」

……とおりゃんせの歌が聞こえてきた……。

上手いな、歌ってる人。

「こーこはどーこの細道じゃー」

今のは忍だな。

「きゃあああああ！ 他の声が聞こえるうううううう！」

……………えっと。

「勝った！」

「勝ったじゃねえよ」

何の勝負だ。

「あーした天気になあーあれっ」

下駄飛んできた！？

「……………ん、明日は雪らしいですよ」

「それ僕が言うはずだったのにいいいいいい！？」

あれ、着物の男の子が泣きながら走ってた。

……………何かまずいことしたか？

「純兄、勝ったね」

だから何の勝負だよ。

「ねえ……………遊ぼうよ」

今度は着物の女の子かよ。

「ほら、おいだよ」

「純兄、この人、力強い……………」

あ？ 忍は手え引つ張られてたのか。

「よし、そのまま手綱引きしろよ。はないちもんめの時みたいだ」

「了解っ！」

足を合わせて、お互いの手を引っ張る奴。

俺は見てよう。

「むあっ……………」

「むうっ」

飽きた。

「ようっし！ 勝った！」

お化け屋敷ってお化けと勝負する屋敷だっけ？

誰か辞書を貸してくれ。

「一まああああああい、二いまああああああい」

「お菊さんが居る」

「ああ、似てねえな」

「つて、実在するの!？」

ん、あの人の料理旨えぞ。

『一枚、二枚……九枚……はあ……一枚、足りない……』 つてのが口癖だな。

誰かがあんまり可哀そうだからって皿買おうとしてた。わざわざ貯金までして。

「一枚、足りなああああああい!」

「キヤアアアアアアア!」

「キヤアアアアアアア!」

うおわ。

「し、忍?」

捕まれた腕が痛え。耳も痛え。

高っかい悲鳴二つも同時に聞いた……。

「びつくりしたあ……突然出て来るもんだから」

「びつくりした、びつくりしたあ……怖かった……」

「くくつあははっ」

「純兄! 何で笑うの!？」

お化け屋敷のオバケ役の方がビビってんじゃねえか。

「オマケに、忍がお化け屋敷程度で悲鳴あげやがったつ、あはははは!」

「純兄、ぶん殴るっ!」

「ははっ。やって見やがれ」

あー、久しぶりに思いつきり笑った。

「もおー。突然出てきたのにびつくりしただけでしょ! 虫が出てきたのおんなじこと!」

「私は虫か!？」

夏の気持ちがよく分かった。面白いときには笑った方がもっとおもしろいな。

「あはは」

「お菊さんごめんなさい。純兄は後で肉まん奢って絶対ヤだ。」

213 溜息の原因はケンカ売ってるのか？

「はぁー」

「ため息を吐くな夏。幸せが逃げる。ついでに言つとお前の陰気がうつる」

「……篠さん、陰気ってうつるモノでしたっけ？」

夏だ。

下校中、今になって思い出したことがあってすっげえ落ち込んでるト」。

「何かあったのか？」

ちなみに、一緒に居るメンバーは篠、清、俺。

忍は何か超音波みたいな声出す奴に拉致られて、純はそれから逃げるべく……どこに行つたかは知らんがどっかに行つて……と言つても、普段から学校に残ってるが。

「おーい、人の幸せ逃がしといて何も言わずに済むと思うなよ？」

「……清、ため息吐いて幸せが逃げるのに他の人関係あったか？」

「溜息の原因は何か聞いてんだよ！」

最初からそう言つてくれよ！。分かつてたつちゃ分かつてたけど。

「お前等知らねえだろーけどさ」

「うん、知らないな」

篠さん、話の腰をいきなり折らないでください。

「夏、続き続き。篠はちよっと黙ってるよ」

「ケンカ売ってるのか？」

「何でそうなるんだよ!？」

息が苦しい。なぜなら笑ってるから。大爆笑中につきしばらくお待ち ぶはっははは！

『夏、お前ケンカ売ってるのか?』

「やるか? あはははは」

これでも純やら忍やらたつちゃんやらの相手してきたから、多少

はできるぜ？

……ああうん、純とやったら白星より黒星の方が多くことは認める。

でも、俺の笑いをとぎらせたそこからへんの奴屍にするくらいなら楽勝だ！

「って、だから！ 何でお前の溜息の原因聞くだけなのに喧嘩になつてんだよ！」

「そつだそつだー」

「喧嘩の原因がそつだそつだ言うな！」

「清、お前ケンカ売って「だから！」」

「このループいつまで続くんだ？」

「もう夏！ スパツといけ！ 遠慮なく！」

「遠慮した覚えは「スパツと行けと言っただろうがあああああ！」

「

清、それだけ大きな声出るなら応援団でもやりゃよかったのに。そしてきつと近所迷惑だ。

「んだから、お前等知らねえだろーけどさ」

「んむ、んむうむむ」

「……篠さん。あなたは口にガムテはるのが趣味ですか？」

「んーむー」「いや、また話の腰折られたら面倒だからオレがはつた」

結果、またも話の腰は折られたと。

「意味ねえじゃん」

「やっぱ甘かったか……」

やっぱて。そしてさらに出したガムテをどうするつもりだ。

……ってか、持ち歩いてんのか？ それ。

「……………う……………む」

何かもごもご言ってるけど聞こえないな。

「ほら、今度こそすぱつと行け！」

「いや……………十日前、俺誕生日だったのに誰も何も言ってくれなかつ

「たなーって……これだけ」

「十日前が誕生日だったのに今更気付いた俺も俺だけど。」

「……そーだったの？」

「うん、そーだったの」

「おめでと」

「ありがと」

「……何かスッキリした。」

「ぷはぁっ!!」

「あ、篠。口のガムテ取るの早かったな。ぐるぐる巻きだったのに。」

「おめでと」

「あ、ありがと」

「幼馴染にさえ誕生日を忘れられた可哀そうな奴」

「ケンカ売ってんのか。」

213 溜息の原因はケンカ売ってるのか？（後書き）

……我ながら不思議なサブタイ。

夏の誕生日が夏にあることを忘れてて書いたわけじゃないですよ！
嘘です、忘れてました（汗）

214 花子さんと悪の強盗

「はーなーこさーん」

「はーなこさん〜」

岳だ。

久々に三階の美術室の前にある使われてない女子トイレことトイレの花子さん達の住処に来てみた。

そしたら、

『こないで下さい！ ここは私達の家です！』

『あたしの家はあたしの家。あんた等の家もあたしの家なんだよ』

『なんだよーっ！』

何か修羅場っぽい。

一番お姉さんの花子さんと、サングラスの女の霊が向かい合っている。

オレが一番気になるのは、サングラスの女の後ろで『なんだよーっ！』とか言ったサングラスのお団子女だけだな。

「光、どーする？」

「見てよ〜」

鬼かお前。

まあ、イマイチ状況分かんねーしな。見てよ。

『純さん！ 何とか言ってく下さい！』

どーやら見させてはくれないらしい……っつて、

「オレはにーちゃんじゃねーっ！」

『姉さま、こいつは、こそあど言葉よ！』

「それもちげーっ！ 岳だよ！ 岳！」

何でこそあど言葉！？

『む？ 何だお前』

『何だー！？』

『この生徒か、なら当然先輩のあたしの言う事を聞くんだな？』

『聞くんだなーっ!?!』

『お前ちよつと黙れ』

『黙れーっ! 痛っ!?! 何すんだよ姉御ーっ!』

お団子女が殴られた。でも多分、オレも同じ事するな。

「先輩? オバサンこの卒業生なの?」

『だ、あ、あ、れ、が、オバサンだつてえ?』

『だつてえーっ!?! よく分かったな!』

事実なのか。

『だからお前黙れ』

『黙れーっ! 痛っ!?! 何すんだよ姉御ーっ!』

さつきと台詞まるで同じだな。

『ふんっ、あたしはまだ三十だ!』

「わお、オバサン」

『黙りな!』

サングラスで睨まれるって怖え。

「それで、お亡くなりになったのは」

『二十年ま あ、いや、ついさつき!』

「おばあさんだ」

『五月蠅い!』

『五月蠅い!』

あ、お団子女復活。

「んで、花子さん、何争つてんの?」

『無視するな!』

『なーっ!』

一文字!?!

『皆でお茶してたらですね……』

……まさか、洗剤茶? 飲んでたの?

『そこのおばあさま達が突然、ここを家にするとか仰いまして』

『こら、誰がおばあさまだ?』

『だーっ!?! 大正解!』

『いい加減お前黙れ』

『黙れーっ！ 痛っ！？ 何すんだよ姉御ーっ！』

お団子女、ちよっとうっさいな。……ちよっと？

『ええい、全く七面倒くさい！ とっくと出て行け！ おかっぱども！』

『お前が出てけーっ！』

『お、ば、あ、さ、まっ』

……あれ、華子？ 何トイレの隅でじめじめしてんの？

『私が言おうとしたのに……はなこと八ナコに言われたわ……ふふ、そうよね、私なんか失敗した折り紙よ……ぐしゃぐしゃになつて捨てられるのよ……ふっ、あははははは』

怖っ。

『……お前達……あたしの恐ろしさを知らないからそんなことを言えるんだ。あたしが誰か知らないんだろ？ あたしは、生きてる時に銀行強盗から宝石強盗まで悪の限りを尽くした大強盗レーナ様だぞ！』

強盗しかしてねえじゃん。

『不覚にもイカを喉に詰まらせてこんな事になっちまったけど……』
大盗賊の死因イカかよ。

『大丈夫だ姉御！ 僕ちゃんも同じイカを喉に詰ませた！』

お団子女もかよ！

『今日もお茶が美味しいですね』

『そっだね、ねえたま』

……いやあの、何くつろいでんのトイレの花子さん四姉妹。

何で洗剤茶でくつろげるの。

『無視するなあああああ！』

『なーっ！』

「あ、やっと思つけた。多田冷奈ただれいなじゃな？」

お、死神の誰かさん。

『ひっ！？ し、死神だよ姉御！』

『慌てるんじゃないよ！ 逃げ道を探せ！』

いや、あんた等壁抜けられるだろ。

んでもって、便器に向かって叫んでるあんたが一番慌てるよ、婆さん。

「いやー、やあっと捕まえた！ よくもまあ、二十年も逃げよう思たな？」

『いつ死神に捕まるか分からないスリルが楽しくて。強盗してた時みたいで』

「あ、そうそう、生前何か悪いことして、反省する事無く死んだ奴には地獄めぐりが待つちようよ」

響きは楽しそうだな。

「どんなの？ 楽しい？」

「まっさかー！ 俺の後輩が一遍行っただけど、引っ張り出さんと戻って来んかったわ」

『うそん』 『うっそおーっ！？』

「知らんかったと？」

『知らんわ！』

「ははっ！」

何かこの死神、悪モンに見える。

『ありがとうございます、何とお礼を申してよいか……』

「いや、仕事ですんで、それではー」

……あれ？ あの死神、婆さん達置いて行きやがった。

『姉御！ あーゆーのを生粋の馬鹿って言うんだな！』

『ああ。混じりけの無い、とにかく馬鹿だな』

何かこの二人は呆然としたまま

華子にトイレに流されていった。

オマケ

「お兄ちゃん、地獄ってどんなところ？」

「地獄？ ……健康ランド」

「地獄じゃないじゃん」

「いや、痛い思いして健康になるよつなと」

「お灸とか？」

「そう」

「……地獄って言うか？ そんな下」。

215 好き嫌いのお話

「うちそうさま」

「光ー、トマト残ってんぞ」

「トマト〜？ 見えないなあ〜。あはは〜」

「嘘つけ！ じゃあお前が今流しに置こうとしてる皿の上でころころ転がる赤くて小っちゃいそれはなんだ！」
忍でーす。

おとーさんはまだ仕事、おかーさんは小学校のPTAの懇談会で居ないため、兄妹四人での今日の晩御飯は皆大好きハンバーグです。副菜はプチトマトと百切りキャベツです。

百ぎりキャベツってのは……んと、とりあえず千切りより太く切ったキャベツだよ。

「ほら！ トマト食べ！ この赤くてつやつやなうまそーなトマトを食い！」

「毒もってそうな色だよね〜！」

「んなこたー聞いてねえ！」

昔は毒もってるって考えられたらしいねー。トマトって。

「うめえじゃん、トマト！」

「変な感触だよ〜」

「なあ姉ちゃん！」 「ねえ純お兄ちゃん」

『そうだね（な）』

……逆のことをそれぞれ聞かれて、全く同じ答えを返す。

つまり、あたしと岳はトマト好きだけど、純兄と光はトマト嫌いなんだよね。

「でもにーちゃんトマト食ってんじゃん」

「だって食いねえ訳じゃねえし」

若干顔しかめてるもんね。

「ほら光！ 食いねえー訳じゃねーんだから、食い！」

「純お兄ちゃんの裏切り者〜!」

「……忍、俺が今言ったのって、裏切ったようなことだったか?」
ある意味。

「んー……」

あ、純兄が何か考えてる。岳、何が起こるか分からないけど気を付けておいた方がいいよ。

「よし、岳。ナス食べ」

「何でっ!?! 何で突然ナス!? おかしーだろ、何で今ナスが出てくんだよ!?!」

岳、ナス嫌いだもんねー。

「確か冷蔵庫にナスの漬物あったから食べよ」

質問の答えになって無いよ。ってか、答えようとさえしてないよ。

「それはご飯のおマケだろ! 食わなくてもいいだろ別に!」

「じゃ、母さんに言っただけで明日の味噌汁にナスを「止めるっ!」」

岳……滅茶苦茶必死じゃん。

「いやもうホント、嫌いなモン無理やり食べさそうとしないで!?!」

「岳が今やってただろ?」

「あう……こ、これはおかずだし!」

「無理やりは駄目だろ」

「んじゃどーしろと!?!」

ほんとだ。どーしろと?

「光」

「は〜い〜?」

光……怖がつてるよ? 半歩引いてるよ?

「ちよつと来い」

「っ〜……」

「来い」

あ。来た。何て素直な。

「光、トマトの嫌いなトコは?」

「ぶしゅってなるでしょ〜、びちゃってなるでしょ〜、汁不味い〜、

種変な感じする〜」

それがいいのに。汁だつて不味くないよ。

「んじゃ、汁抜いちまえ」

「いいの〜?」

「食わんよりマシだ」

「いいの?」

「お袋居ねえし」

待たんかい。

「んで、岳のナスが嫌いなのは」

「火い通したらグニつてなるじゃん！ 全体的に不味いし！」

「そりゃどうしようもねえな。ガンバレ」

扱いの差がひどい。

確かにどうしようもないけど。

216 ばたばたでない朝

「にーちゃん」

「眠い、怠い、日光消えてしまえ。何の用か知らんけど忍に言え」
うつわ、聞きました奥さん、あまりにも酷いと思いませんかこの
反応。

誰だよ、俺。あ、何か訳分からん文になった。

岳だ！

さっきのにーちゃん言葉に突っ込みたいことがも一つ！

「日光消えてしまえってなんだよ！？」

「岳の声消えてしまえ」

「人魚姫かよ！？」

「姫？ 岳が？ オカマは嫌いだ」

そうじゃねえっ！

「つつか、滅茶苦茶元気じゃんかよ！」

「元気じゃないもん」

子どもみたいな返し方すんなよ！

あれ？ 中学生って子供？ でも電車大人料金だし、未成年だし

……うーん。

何か。年上に子どもって言うって自分が赤んぼみたいな気がする。

これはヤだ。

「つつかー。何でいつつも無駄に早起きするくせに今日は寝てんの

！？」

「無駄には余計だ」

「質問に答えろよっ！」

つつか、枕に顔をずめてねーでこっち向けよ！ 誰かが言ったた

ぞ！

話をする時は相手の目を見なさいとか何とかかかんとか。

「あーもー、ガッコ遅れてもしーらね」

「そうしてくれると助かる」

「何でっ!？」

「……しまった……」

「しまった!？」 しまったって言ったよな今!？ 何がしまった!？

「じゅーんにー、学校遅れるよー」

「ん、今何時？」

えーっと、七時三十分。

……こんな時間から起きてどーやって遅刻するんだよねーちゃん
は!？

オレだつて起きてるけどさ。これはまあ、にーちゃんに起こされる
時間がいつもこんなもんだから起きちゃっただけであつてだな。

あれ？ オレがにーちゃん起こす側に居るつてことは……もしか
して立場逆転？ 何か知らんけどにーちゃんに9勝った？ 何でだ
よ。でもやつたー。

「ほらほら！ 起つきろー！」

「岳、今黙つてた間に何を考えてた？」

「何もあ？」

「嘘吐けや」

ちよつと怖かった、何だよ今の声。ちよつと笑含んだような声だ
つたんすけど。怖いです。おねーちゃん助けてー！

「お姉ちゃ〜ん〜！ ちよつと来て〜！ ピンチなの〜！」

朝っぱらから何のピンチに陥つてんだよ光は。

「宿題真っ白〜！ 算数〜！」

……確かにピンチだ。

「答えは教えないよー。ヒントなら出してあげるから自分でやりな
さい」

「あう〜。超特急でね〜」

ねーちゃん、教師かアンタは。

「んでにーちゃん、どーしたんだよ。らしくねーの」

「……………すー」

おとーとが折角兄の心配してんのにシカトかよコラ。

「おーい！」

揺さ振り！ でもにーちゃんこんくらいじゃ起きねーよな……。

「止める馬鹿！」

……あ、起きたわ。んでもって怒られたわ。

「んと、何かごめん？」

「……ん、凄く謝れ……」

日本語変じゃね？

「にーちゃん、何か声苦しそうなんだけど」

「ほっとけ。今は寝かせろ」

「うー……はあい」

あれ、時計見たら、そろそろにーちゃんたちは出ないと遅刻な時間だったんだけど？

217 クラスが一つになった件

「なあ、村田。紺と白のムカデが居たら怖えよな」

「何か意味分からんが馬鹿にされてるのは分かった。ぶっ飛ばすぞお前」

純兄がそう簡単にぶっ飛ばされるもんか。

忍でーす。

来週の体育大会に向けて、学級全員でのムカデ練習が始まりました。

上に来ている体操服はもちろん白で、下に来ているジャージは紺色で、ムカデ競争をする時は必ず履かないといけないから……上半分は白で、下半分は紺色のムカデが出来上がってるんですねー。

おおう、確かにこんなムカデが居たら怖い。

そして、村田が純兄にそれを言われて馬鹿にされたような気分になったのは……純兄が足怪我して参加してないからです。何処で怪我した。おい。紺と白のムカデより怖いよ。

足の怪我は軽くないみたいで、一本とはいえ松葉杖ついてるから……多分体育大会出れないなあ。

一組の切り札！……純兄より足速い人、何人かいるけどね。

朝起きなくて結局遅刻した純兄が、これが原因と言い張るのでクラス全員で突っ込んでやりました。

足怪我したのと朝起きる起きないは関係ないだろ！

笑ってごまかされました。普段笑わない奴が笑うとごまかせちゃうのがズルい。

「皆！ やるぞーっ！」

『……………』

あ、何か全体的にシーンってなった。

やるぞって言った人、はなづえ花上は……何でもバスケットをやった時に『やるーっ』って言い出した人。

「何でシケんの!?!」

たまにノリで発した言葉が滑る、なっくんの笑いの種によく
なる娘。

「と、とにかく! 早くやる! ね!?!」

『何を?!』

全員ボケ。始めてやったなあ。

「ムカデ! 皆で足に繋いでるこれは何!?! それはロープ!

ムカデ用のロープ!」

『……………』

「だからなんでシケるの!?!」

大丈夫、なっくんにはウケてるから。なっくんのツボって分
からん。

「はいはい、ほら、五秒前からカウントするから、走れよー」

柿の種、今までどこに居たの?

「高山 ああ、純の方だから、お前関係ないから」

何かちよつと傷つく言い方だったのですが、先生?

「何」

「あつちにベンチあるから座つとけ」

「いらん」

「いや、いらんじゃなくて……………まあいや、本人が言ってるんだし
まあいいんだ。

……………ところで、ウチの学校のグラウンドにベンチなんて無かつた
と思うんだけど。

そしてなんか、先生の言ったベンチって言うのがどー見ても手
作りなんだけど……………。突っ込んじゃダメかな?

「とりあえず、もうちよつと下がってて。突き飛ばされるぞ
ムカデに?」

「やれるもんならやって見やがれ!」

純兄にしては珍しく声を張り上げたと思ったら……………。

『やってやらあああああ!』

クラスメートの皆さんが反応した。

「そうじゃなくてね!？」

いいじゃん。士気が上がったよー。

「行くぞーッ!」

応援団長の迅谷しんたにの声に合わせてー。

『いつせーのーでっ! いっちにっ』

走りだ……あれ?

「ちよつと!?! コースあっち!」

「ん、来ると思った」

三年一組のムカデはスタートするなり方向を変えて、純兄の方へ突進!

それを純兄はピヨコピヨコ逃げてるんだけど……。

当然、まさか本当に追いかけるとは思ってたなかった人も大勢いる訳で。

『わあああああつ!』

こける人が大量発生する訳なんだよ。

「おいおい……いきなりこけんなよ」

無理だろ。

「ちよつ、お前等! とりあえず高山兄あにぶっ飛ばしに行くぞー!」

先頭の蔵元くらもと、どうやら純兄の挑発に思いつきり乗ったようです。

『お、おおー?』

「やる気が足りない!」

『お、おおー!』

「よっしや、逝くぞおおおおお!」

『逝きたくねえっ!』

ごもつとも。

「ほらほら、俺を突き飛ばすんだろ?」

『やったるぞこらああああ!』

……誰、今蔵元と一緒に叫んだ奴。

「清くん、耳が痛い」

「五月蠅い」

何だ、清か。

桜と篠と一緒に真中の方に居たんだね……。あ、ちなみにあたしが居るのは前の方。今更ながら。

「迅谷！」

「行くぞーッ！」

『いっせーのーでっ！ いっちにつ』

いっちにつ。あ、さっきみたいにこけない。

行先はつきりしてないのに。すげー。

「高山兄iiiiiiii！」

「顔怖えよ」

どんな顔してるの？ 見たい。

あ、純兄がこっち見た。何か言ってる。

『般若』

あたしの心の声が聞こえたのか！？

数分後

『はあ、はあ』

「おい、もう終わりか？」

『まだまだあっ！』

クラス心が、純兄を突き飛ばす基ぶつ飛ばすことに集中し始めた。

数十分後

『はあっ、はあっ』

「おーい、もう終わり……」

『まだ高山ぶつ飛ばしてない！ 柿ピーは黙ってる！』

余計なものが入った一組の担任はショックを受けて何も言わなく

なった。

さらに数十分後

『待ああああえてええええええ！』

「デメエ等はゾンビの集団か！？」

体力のない人もどういふ訳か気力で体力を補い……

「おらあつ！」

先頭の蔵元がついに純兄をぶつ飛ばした！

……え？ ぶつ飛ばした？

「純くんが三メートルくらい上に飛んでる〜」

「飛んでるな……」

「やった！ やつとぶつ飛ばした！ 言葉通り文字通り！」

どんな飛ばし方したんだよ蔵元。

「……純、大丈夫だと思うか？」

『……………』

純兄。ピーンチ。

あたし等もピーンチ？

「ちよつ！？ 助けに行かないと！？」

誰かが走り出そうとして……こけた。

さっきまで凄く息ぴったりだったのに！？

と、皆で仲良く盛大にこけたところで……。

純兄が持つた松葉杖を地面に立てる。

それを軸にしてロンドアート（側転の途中で体をひねって、両足で

後ろ向きに着地する奴）っぽいモノをする。

片足負傷中だもんね、片足で着地するよねそりゃ。

「ん。こんだけ息ぴったりならムカデ優勝できるな、うちのクラス」

でもって何事〜も無かったかのように言うので……。

皆、啞然とした。

兄さん、アンタはどんだけ人間離れしてるんだ。

「……こんにちは」

「ん、誰？」

「……………美代、です」

怒ったか？ 流石に『誰？』は無かったか。

美代、美代……………あ、

「村田の妹か」

「そう、です。ひー……………光ちゃん、居ますか？」

「昼寝中。起こすか？」

「純だ。」

何で俺が来客の相手してんだろうな。怪我人だぞ一応。

「いえ……………上がったも、いいですか？」

「ん、いいぞ」

村田の妹が来たって事は春も来るのか？ 遊ぶ時は三人一緒が基本だし。

「純くん！ ひーちゃん居るよねっ？」

「ん。ついでにみーちゃんとやらも居るぞ」

「確かこう呼んでた筈。」

「……………ついで？」

『ついで』は怒ったか？ やっぱり。

「ひーちゃん何処？」

「二階^{うっえ}で寝てる。起こすか？」

はつきり言おう。同じ事を二度も言って聞くのはとてつもなくめんどうかせえ。

「うっん。ひーちゃんて遊ぶよ！ ねっ、みーちゃん！」

光『で』遊ぶ？

「やっぱ寝た子相手には顔に落書きでしょ…！」

「……………うん」

「絵の具使うなら布団に落とすなよ」

『止めないんだ……』

楽しそうに俺がめんどくさくねえ事は認める主義なんだよ。

実際、幼稚園位の時に文月くんによつたら面白かった。つか、幼稚園児がやつたにしては何か芸術品が出来てた気がする。

臯月姉の『どこぞの民族の仮面風』には負けたけど。

「でも、絵の具は使わないよ」

「なんだよ、面白くない。」

「油性ペン使うから！」

「それはやられる方が余にも哀れだから止める」

コレも文月くんによつたら、滅茶苦茶怒られた。泣きながら。

正直に言つて、額に『肉』とか頬に『我こそは馬鹿である』とか書かれた奴が泣きながら怒るから、まるで怖くなかつたけど。

むしろ笑いこらえる方が大変だった。夏なんか笑い死に寸前だったと思う。

「……色鉛筆、は？」

「色つかねえよ」

どうせ使うなら紙粘土を顔に塗りたくつて乾かしてから……窒息死するかも。

「墨汁はどうかかな!？」

何で水性ペンスルーしたんだこいつ等。

「純くん、墨汁ある？」

「墨汁は十中八九布団につくからダメだ」

これは最近、死神仲間が『下剋上だよ!』とか馬鹿な事言つて妙羅にやつたけど……。

妙羅のお気に入り座布団もとい枕を汚したから、怒つた妙羅に頭から墨汁ぶっかけられて。

その被害がお気に入り枕にまで及んで、それは完全に真っ黒になった。……妙羅、馬鹿だな。

「あ、じゃあこれは? 鼻眼鏡!」

「かけてどうすんだよそんなもん」

「……どーしよ」

考えとけよ。

「あーもう、絵の具でいいや。ある？ 絵の具」

「……あります？」

春は家隣なんだからもって来いよ。俺一応怪我人だっつのに探させる気か？

「光達の部屋漁ったら出てくんじゃねえか？」

探す気は毛頭なし。

「……人の部屋漁るのは……」

「ちよつと……ねえ？」

『ねえ？』じゃねえよ。

「これから人の顔に落書きしようって奴が何を言っか」

『それもそうだね』

単純すぎるだろこいつ等。

「へー、私の顔に落書きするの〜」

「あ……ひーちゃん……」

「あわあわあわわっ!？」

おいこら。

何で二人して助けて欲しそうにこつちを見る。

こんにちは、お久しぶりですね。

忘れたとは言わせませんよ。ニンジンとサツマイモの甘煮です。

『何でここに居るんだ、デカブツ』

『ぶっ飛ばしますよルービツクキューブさん』

『今動いたら不味いだろうが』

そうですね、純さんが目の前で神、じゃなかった紙と格闘してますもんね。

隣では岳さんが『車が走った時間求める？ 走った後で求めてどーすんだよ』とか言いながら薄い冊子と格闘してますもんね。

「にーちゃん、あぢい」

「ん」

……クールですねえ、純さん。

「にーちゃん、何か食ってんだろ」

「あいふ」

……違いました。口にモノ入ってて喋れないだけでした。

ころころって、口の中で固いモノが転がる音が聞こえてきます。

「アイス!? アイスあんの!? 何味!?!」

「れいほーこみけこひよ」

「ほいさっ」

新たな暗号ですか？

れいほーこって、霊の宝庫でしょうか。みけこひよ……三毛猫こひよさんとか？

『誰だよ』

『突っ込まないでください。真剣なんですから』

『冷蔵庫見て来いよ、じゃねえか?』

ああ、なるほど。

……よく分かりましたね。やはりパズルは頭が良いのでしょうか。

『関係なくねえか？』

『響きが頭良さそうです』

『……分かん』

あら、何か勝った気分。

「にーちゃん！ 冷凍庫見たけどアイスなんかねーぞ！」

惜しい。冷蔵庫ではなくて冷凍庫でした。

ルービツクキューブさん、舌打ちしないでください。どうやってしてるんです？ 舌無いのに。

「んつく。年中あるだろ。白っぽい透明なのが」

あ、飲み込んだんですね。聞きやすくして何よりです。

「氷かあああああ！」

「棒がついてない時点で気付けよ」

「アイスの種かと思ってさ……」

何でしょう、アイスの種って。アイスって種があるモノなのでし
ようか。ううん……。

「なあにーちゃん」

「ひまひほがひひ」

「暇ならいーだろ」

……二個目の氷を口に含みましたね。

『ルービツクキューブさん、約をお願いします』

『今忙しい、だとももつ』

岳さん、まるつきり逆の方に捕らえましたね。

「あのさー、このワークになー」

ワーク？ ワーク……仕事って意味でしたっけ？

『あの冊子の事だろ。問題集に見えたけど』

何処で見てるんですか。目、無いのに。

私にはちゃんとありますよ。真っ黒なビーズが……

『体の割にずいぶん小さい目だな』

だまらっしやい。

「ひまひほがひーっへふあ」

「わかんねーってば」

岳さん、分かっているんじゃないですか？

「んだからな、このワークの問題だな」

「ん」

あ、あきらめましたね、純さん。流石めんどくせえ病。岳さんが前言ったことをまねてみました。

「時速七十？の馬が五十mを何秒で走るかってんだけど」

「んっく。偉く変わった問題だな。体力テストか、おい」

三箇目の氷に手を伸ばさないで下さい、聞き取りにくくなりますから。

そもそも何で氷がコップの中にスタンバイされてるんですか。溶けるでしょ。

「体力テストかってのはもう突っ込んだ。そうじゃなくてさ」

「ん」

「今時どこに馬に乗って五十mなんか計る奴がいるんだよって方なんだよ」

「昔も居なかったでしょ。そんなん」

「んーま、どちらにしてもどこに馬に乗って……って、ねーちゃんどこから出た!？」

最初からいましたよ。私の陰に。

「ニンサツの裏から出た」

ニンサツって言わないで！

何で忍さんがこの呼び名を知っているんですか！　と言うか、私は認めてないですよこの呼び名！

『じゃあデカブツで』

立方体の集合体はだまらっしやい！

219 アイスと馬と（後書き）

『忘れたとは言わせませんよ』

これの後に入れる『ニンジンとサツマイモの甘煮』という名前を、
書いた私自身が忘れてました（汗）

220 応援団のテンション

「高山兄！ 何っでお前はいつもいつも無駄に早く来てるのに今日は遅かったんだ！」

あたしも居たのに華麗にスルーされました。忍です。

朝学校に来て、教室に入ると。

普段は空っぽの教室に応援団の皆様がそろっていらっしやいました。

「……いや、テメエ等が早すぎるだけだな」

時計を確認。七時二十分。

おお、記録更新だ！。何処が遅いんだよ。今までで一番早いじゃんかよ。

どーりで朝、なつくんに『行こー』って言っても『寝てるー』って返事が返ってきた訳だ。

「何か用か？ しんたに？ だっけ。団長」

純兄が人の名前覚えてないとか珍しい！。

「迅谷だ！ 濁点が足りない！ 点々が足りないんだよ！ 何で団長って部分だけは覚えてるんだよ！」

「ああ、悪かった。じんだに」

「誰がダニか!？」

……遊んでるだけか。

確かに濁点付けれるところに付けたらそうなるね！。

「ん、で、何か用か？」

「よくぞ聞いてくれました！」

応援団員A……用があるから来たんじゃないの、あんた等。

「高山兄！」

「ん？」

「先週、ムカデでぶっ飛ばされた時に「ぶっ飛ばし返してほしいと？」そうそ じゃねえよ！」

おお、応援団B、ノリ突っ込み。

「そうじゃなくて、吹っ飛ばされた後にやってたロンドンダート、怪我した状態でもできるならバク転もできるよねっ？ 応援の自由演技で取り入れるから、教えて！」

花上、応援団だったんだ！

……演技に取り入れる？ 今から？ 本番今週の土曜日なのに？

『……………』

「何でシケたの!？」

『何かシケなきゃいけないような気がして』

同じく。

「いらないから！ ほんとそんなのいらないからね!？」

「それで高山兄、返事は」

「無視するなあああああ！」

『……………』

「そしてシケるなああああああ！」

どうしろと。いや、どうしようもあるけど。

「……いや、なんでバク転できると決めつける？」

『何か高山兄なら何でもできる気がする？』

「アホか」

『どーせお前から見たらアホですよーだ』

「開き直るな」

そして何、その示し合わせたようなハモリ方。

「まーいーじゃん。純兄できるでしょ？ 練習してたし。近所の空き地で」

「言っちなボケ」

だって事実だもん。

「んでこけて一時腕に包帯ぐるぐるなつてたよ」

「言っちなつて……何、テメエ等。馬鹿にしてんのかその目」

応援団の皆様、何やら珍しいモノを見るような目で純兄を見てお
ります。

「……いや、お前もそんな時期があつたんだなあ、うん。人間そう簡単になんでもできる訳無いもんなあ」

可愛いモノを見るような目に見えてきた。怖い。

「兄さん！ 教えていただけますか！？」

「まさかテメエそれが俺の名前とか思つてねえだろうな？」

「違うんですか！？」

「いや、そこ驚くところ？ ……上靴のゴムの色からして二年生か」。

「美月、バク転はやっぱりレベル高いよ。今から練習して本番でできる訳無いし……。ほら、兄さんもOKしてくれた訳じゃないし……」

「もう、二年生からは兄さんってしか呼ばれなさそうだな！」。

「やっぱ無理か……」

迅谷、こんな朝早くから来てたんならもうちょっと粘ろうよ。

「誰がいつ教えないと言つた」

「教えてくれるの！？」

「誰がいつ教えると言つた」

「はあ……」

このテンションの上がり下がり凄いな。

「ん、嘘。教えてやるよ」

『ホントツ！？』

うお、びっくりした。

「出来るようになるまでは本気で地獄だぜ？ いいのか？」

『もちろん！』

あーあー、言っちゃった。

「ん」

あ、何か純兄嬉しそー。応援団、覚悟しといてね？

純兄が何か教えるときはほんつと怖いから。厳しすぎるから。地獄どころの騒ぎじゃないから。前に前方倒立回転（バク転の逆の奴）なんか教えてもらった時にはもう……。

「んー、でも、俺この足じゃ無理だな。口でしか。んだから、手本は……」

あれ、なんで人差し指回してるの？ 何でこっち見てるの？ あたしの後ろだという事を願いたい。

「こいつのになるな」

ん？ 純兄の指した方は……あたしの後ろ？

振返ってみると……誰も居なあーい。

つ、ま、り？

「どこ見てんだよ。テメエだよ、忍」

「あたしできないからね！？ バク転とかできないからねっ！？」

逆しか！ 前向きなバク転しかできないからね！？」

自分で行ってて思った。前向きなバク転って何さ。ポジティブなバク転か？

「嘘つけ。教えただろ」

「教えてもらってないから！」

「……あれ？ 岳だったか？」

絶対そうだ。あたしはバク転をした記憶は無い。いや、何かかっこいいし、やって見たいけど。

「んじゃ、テメエも一緒に教えるか」

喜ぶべきか悲しむべきか？

「忍が出来るようになれば俺が楽になる」
利用される気分になるべきだった。

オマケ その日の放課後

「……忍」

「何、純兄。応援団とあたしにバク転教えてくれるんでしょ？」

「今日、十五夜だった」

「うん。それで？」

「光等が何もしないと思うか？」

月見団子!?

しかも去年と違って今年にはーちゃんと美代と言う二人が増えてる!?! さらに不味いと言うか変なモノに!?!

「去年の生魚入りみたいな月見団子だよ!?!」

「せめて刺身と言ってくれ。とにかく、今日は走って帰るぞ」

「そだねっ」

ほったらかされた応援団は。

「皆、各自家のパソコンでバク転の動画見てくること!」

大したダメージは負って無いようだった。

……便利な時代になったなあ。

爺さん臭い? ほっとけ。

221 主菜は揚げ物、デザートは卵

「あい、そういう訳で、修学旅行のお昼ご飯、の主菜を決めよー、の巻だよ」

『どついう訳だよ』

岳だつ！

どついう訳か知らんがそういう訳で修学旅行の昼飯決めよー、の巻だ！

巻つてなんだよ。何か巻いてんのか。チーズの海苔巻つて結構旨い。

「選択肢はー……白身魚のフライ、チキンカツ、エビフライ、天ぷら」

「天ぷらつて主菜か？」

「そこはまあ、あんまりカロリー捕りたくないダイエット中の女の子のためのね？」

『教師が生徒のダイエット気にするなよ』『ナイス先生！』

あれ、女子にはウケてる？ でもさ。

『何でその割には揚げ物ばかりなんだよ！？』

あ、翔とか修也とかとハモった。流石我が友。

「そこんところは二組の先生に聞いて」

あ、責任逃れしようとしてやがる！ 本とに責任ないのかもしれないけど！

「あ、後デザート選べるよ」

何でデザートまで選べるんだよ。

「プリン、ムース、トーストにメレンゲかけた奴、目玉焼き」

「待たんかコラ！」『何で目玉焼きが混ざつてんだよ！』

修也、協調性は大事なんだから一人違つ突つ込みをするな。

「目玉焼きについてはネタね」

「ネタ！？」

「修也はどーしたの」

「何で全部そろいもそろって卵入ってんだよ！」

卵アレルギーは辛いな。デザートなしか？ 可哀そ。

「あ、大分子供らしくなってきたね、修也も」

「今はんな事言ってるねえ！」

「いや、やつぱりほら、デザートにそんなに必死になるところが…
…岳のおかげだな」

オレ！？ オレは単純に修也と、つつか修也『で』？ 遊ぶのが
楽しかったからやってただけなんだけど。

「そこんとは今は流しといてやる。質問に答える！」

今は？ 今はつつつたか！？

「ごめんごめん、全部ネタ」

「歯あ喰いしばれ！」

『まあまあ』

暴力はよくないぞ修也くん？

「ホントはデザートなんて選べません」

『歯あ喰いしばれ！』

「まあまあ」

まあまあとか言いながら教卓に隠れるなよ！

「大丈夫、デザートはきつついてくる。だって小学生の修学旅行
だよ？」

せんせの頭の中はどんな風になってんだ。

「とにかく、主菜の方はこの時間内に決めておいてねー。決まった
ら言いにおいで」

えーっと、選択肢何だっけ？

白身魚のフライ、チキンカツ、エビフライ、天ぷらか。

うーん、まず、エビフライは十中五、六はほとんど衣でしたオチ
だろ？ オチってなんだ、自分で言っというだけけど。

天ぷらは、うん、主菜って言わねーよなコレ。はい駄目。

あとはチキンカツと白身魚のフライかー。うーん……。

「修也、修也は何にするの？」

「……エビフライかな。奈那子は？」

「あたしも！」

古閑、絶対今決めただろ。一緒だったら何なんだよおい。

「翔一、翔は何にすんだ？」

「断然チキンカツだね！」

「このチキン野郎！」

「何でっ!？」

何か言ってみたかったんだよ。

……あ、翔にチキン野郎何か言ったら、オレがそれ食べたら絶対
仕返しされんじゃん。

よし、白身魚のフライに決定！

……消去法やるとちよつとネガティブな気分になるのは何でだろ
！。

222 セコい奴等

「じゃじゃーん！ 未理阿ちゃんでした！」

「霧瑠依くんでしたー」

「帰れ」

「酷いでした！」 「なんでー？」

うるせえんだもん。

純だ。あ、またコケた。

ちようど校舎の陰になるところに置かれた、どこからどう見ても素人の手作り、ちよつと動くだけでガタガタ言うベンチに座って、ちよつと離れたところであちのクラスがムカデの練習をしているところを見て……あ、またコケた。

こないだはすげえ息ぴつたりだったのに。

「ねー、純セーンプーイ」

「ん、まだ帰って無かったのか」

「酷いことばかり言ってたら……お金盗るでした！」

……あ？

「既に盗つといて何を言うか。おら、返せ。七百五十リール」

「げげつでした！」 「ぎよぎよー」

バレてないとも思ったか。

リールつてのは霊界の金の単位で、日本円で……大体三千円くらいだったかな。

「警沢フルーツケーキは旨かったか？」

「何でそこまで知ってるでした!？」

俺は顔が広いんだよ。霊界に限るけど。

「ううー、返すよー。はい」

「霧瑠依くん！ 何するでした!」

「大丈夫だよー、ほかの人から盗ればー」

うん、見事な演技だけど……。

「ニセ札渡すなコラ。しかも何気にクオリティ高えなコレ」
ちなみに、リールは全部紙幣。一リールより細かいが、千リールより大きいのは貨幣になってる。

紙幣か貨幣にするかの違いがよく分からん

「何でバレたでした!?」「まさかのまさかりー」

「いいか、あのな。五十リール紙幣は縦八センチ、横七・五センチでちよつと縦長。裏に描かれてるのはテメエ等がサボってる学校の校長と、烏とコウモリ。あと表に描かれてる鳩と鹿。ここまでは合ってる。でも表に描かれてる人物は神校しんこう（神の学校の略）の校長で、死校しじょう（死神の以下略）の校長じゃねえんだ」

「……くわしー」

ちよつと知り合いに作った奴が……いや、なんでもねえ。

「でも、ホントの五十リール紙幣の表面にも、死校の校長が書かれてるでした!」

「似てるけど、ちよつと違うんだよ。死校の方は耳にピアスの跡があつてだな……」

「分かるかー!」「分かるわけ無いでしたっ! 汚れたと思つてたでした!」

霧溜依の叫ぶところなんか初めて見た気がする。

「俺も言われて初めて気が付いた」

「そもそも何で死校と新校の校長が似てるんでしたっ!」

「噂では双子らしいよー。新校の校長は見たことないから噂でしか知らないけどー」

あれ、俺は死校の校長は新校の校長の分身だとか聞いたけど。

まあ、噂だしな。

「今度校長の耳見てみよー」

「ピアスの跡がきつとあるでした!」

そのまま風のような勢いで去って行くこと……させるか。

「ぐえ」

こいつ等の着てるようなローブに限らずフードってつかみやすい

な。

「なにするでしたっ！ 首絞まったでした！」

「殺す気かー」

「七百五十リール、まだ返してもらってねえぞ」

「あうー」「気付かれたでしたっ！」

気付かれるも何も。

「今日のところは勘弁でしたっ！ お父さんが病気で……」

「最初は生まれたての妹、次は爺さん、その次はお袋でこんどは親父か。次はいつたい誰が病気になるんだ？」

「おー、のー」「くうっ、今日のところは素直に払うでしたっ！」

……よし、これでさっき、二セ札の中に混ざってた本物の百リール紙幣分設けた。

「わあーっ！」

あ、クラスの奴等、頭から砂かぶったみたいになってやがる。これで何回コケた？

223 素直な泥棒

「うあー、疲れたー」

「お姉ちゃん〜、大丈夫〜？」

大丈夫かなあ。大丈夫なのかなああたし。とりあえず疲れすぎてよく分かんない。

「はい水〜」

「……変なの混ぜた？」

「酷いな〜、塩をちよっぴり混ぜただけだよ〜、しょっぱくないから安心して〜」

あ、ちよっどいいや。汗かいたし。ナイス光。

「ありがとう」

「うん〜。何してたらそんなに一瞬で水飲めるまで疲れるの〜？」

えー、何って……。

「バク転、純兄の指導の下……」

「それだけ〜？」

純兄のスパルタ指導を舐めるな！

鬼どころの話じゃないからね、ホントに。

出来ても何か小っちゃいことにケチ付けるんだよ。

純兄曰く『演技でやるんだから綺麗に出来なきゃ意味ねえだろ』
だつて。あたしはやらないのに！

「純お兄ちゃん〜。あれ〜？ 純お兄ちゃんは〜？」

「うー？ 部屋じゃない？」

「行く〜」

「何であたしも？」

「もうちよつと緩くしてもらおうよ〜」

「んじゃ行く」

じゃないとあたしの身が持たない。

「……あれ、いつかの泥棒のおっさん」

「あ、どうも、ごぶさたしてます」

「あ、ご丁寧にどうも」

「……じゃなくてっ！」

「何で居んの!? ねえ、純兄!？」

「ちよつと呼んだ」

「どうやってっ?」

「泥棒ーって」

なんつー原始的な呼び方だ。何のために連絡先聞いたの、あの時。つてか、それで来るおっさんもおっさんだ。

「で、なんで呼んだの?」

「本買いに行きたかったけどめんどくさくて」

このめんどくせえ病! 確かに足怪我してりゃめんどくささも倍増かもしれないけどさ!

「で、行ってきてもらった」

「行った後!？」

「いいんですか、五十円もいただいて」

そしておっさんも小学生並のお小遣いでパシられんな。

金銭感覚どうなってるのこの人。

……あ、でも一回手伝いしたら二十円の身としては高く感じる。

うーん……。

「おじさん、仕事何してるの?」

「泥棒です」

「ひゃくとっば〜ん〜!」

「ああああそれは止めて!」

じゃあ素直に泥棒とか言っなよ。

「にーちゃん、台所のテーブルに置いてたオレのダーツの矢が無いっ!」

何でそんなものテーブルに置いてるの。

「うお、何このおっさん」

……何か、うちの兄弟ってあたしも含めて失礼だよなあ。

「おっさん、ダーツの矢盗ったか？」

「はい」

素直だなこの人！

「よし、百十番」

「やめてええええええええ！」

耳が痛い。

「返せよ、おっさん」

「はい」

あ、返すんだ。

……何で盗ったの？

「それでは私はこれで」

「ばいばい泥棒さん」

「じゃーな、どござのおっさん」

……ほんっと、あの人の行動訳分からん。

224 体育大会、の直前エピソード

エピソードの前に、純だ。

体育大会、色分け。ちなみに色決めるのははくじ引きな。

白組、一組連合軍

黄組、二組連合軍

青組、三組連合軍

赤組、四組連合軍

おけ？

えびそーど？ ハリケーン

「いいかー！ ハリケーンのコツ教えるから覚えるよ！」

『はい』

白組担当！ 一応私は女教師だ！

これ読んでる奴、いつやるかはともかくハリケーンのコツ覚える

よ！

「一つ！ 棒の端っこに詰める！」

『一つ！ 棒の端っこに詰める！』

何で復唱？ まあ、やる気があるってことでいっか。

「二つ！ 前後の間を極力詰める！」

『二つ！ 前後の間をできるだけ詰める！』

……復唱してるのに揃いも揃って違うけど、意味同じだからいか！

「三つ！ 足の下に棒を通すときはくるぶしより上げるな！」

『三つ！ 棒の下に足を通すときはくるぶしより下げるな！』

出来ねえよ、つつこみやせんが。

「四つ！ 棒が通った後はすぐにしゃがめ！」

『了解！』

お前等復唱する気無いだろ。

「五つ！」

『押忍！』

「まだ何も言っていない！」

『あい』

「アンカーが頭の上に棒を通した後はしゃがんだまま！」

『はいはい』

やる気あんのかお前等。

えびそーど？ 綱引き

えー、綱引きは、えー、ハリケーンに出ない生徒、まあつまり、色の二分の一ごと対抗になっています。

どうも、黄組担当の魚有といいます……はい。

四月、合って間もない生徒に鮪と呼ばれたのはきつとずうっと動いているせいでしょう。

「行くぞおらああああ！」

はい、私の担当する黄組はやる気満々です。本番で、疲れてしまっていないことを願います。

「負けるかおらああああ！」

ああ、白組さんのやる気も相当なものですね。

分かっていますか、これは練習ですよー？ いえ、つねに全力なのはいいと思いますけどね。

「始めっ！」

始めの合図のパン！ って音、どうも苦手です。いえ、私が撃った訳ではないのですけどね。

……あら、うちの色の強いこと。

そして白の弱いこと。

このまま本番でも上手く行ってほしいですね。

えびそーど？ 応援

「青組いーっ！ おーえーん！ 始めます！」

ドン、ドン

いいねえ。体育祭って感じで。

青組担当、見た目はヤツちゃん、中身は美術教師の川岸だ！

「青組のーっ！ ゆーしょー願ってーっ！ エールをー！ 送ります！」

ドン、ドン

太鼓つていいなあ。やっぱり応援にはこれが無いと。ぐっじよぶ水中。何故か前の学校には無かったぞ。

「フレッツ！」

団長木村、なかなかいい声してる。

『フレッツ！ あーおーぐーみっ！』

うんうん、この大声があつてこそ応援団は成り立つ！

『そおーれ』

「ちよつと待てえい！」

何だ今の声は！ 何だ今の団席の声は！

「団席！ もつと声出るだろ！ ほらも一回！」

『そおーれ』

多少大きくなった、かな？ まだまだ！

「もう一回！」

『そおーれ！』

「そう！ もう一回！ できると思っているーm上を行け！」

何か微妙とか思ったか？ ーmを舐めるな！

『そおーれっ！』

「そう！」

『フレッツ、フレッツ、青組！』

「そう！」

よし、今度は出来ると思っているーm上を行け！

えびそーど？ ムカデ競争

『せーのーでっ！ いっちについっちについっちについっちについ』

最速記録は三十二秒、なかなか速いじゃないか。

赤組担当、池中だ。

一年、二年、三年と三つのムカデを見ているが、ここ三日でけたのは三回のみ。よしよし、本番もこの調子で行ってくれ。

……ほかの色はどれくらいの速さなのかは忘れたが。

つと、丁度いいところに高山妹が。

「おい、高山妹」

「今純兄居ないので妹はいらなと思うのですがー」

そこはまあ、いつもの癖という事で。一年の時は担任してたんだから。

「白の最速タイムは何秒だ？」

「えーつとあー。一、二年は分からないけど、一番速いのは二十五秒かな」

「んなアホなっ！？」

二十五秒！？ どれだけレベル高いんだ白組！

「純兄をぶつとばせー！ って事で、すっごい土気上がってたんですよ。そりゃもう、般若の面をかぶったような顔になって……ま、今はそんなことしてないから、コレを覗けば三十七かな？」

高山兄、クラスの奴等に恨まれてるのかお前は。

と、とにかくそれを除けば三十七？ よし、コレならいける。

「ま、うる覚えだから怪しいですけどね。詳しい事は純兄にー。タイム計ってるの純兄なんで」

練習中、タイムは担任が計るものだろう？ 何をやっているんだ、

柿のた……もとい、牡蠣野先生。

……つと、丁度いいところに高山兄が。

「おい、高山兄」

「今忍妹いないので兄はいらなと思うのですが」
まるで同じ事言うな。

「白の最速タイムは何秒だ？」

「えー……二年の三十一秒ですね」

二年に負けてるのか三年。

「さ、三年は？」

「最初は良かったんですけどね。最近はこのけてばかりで……やっとこけなかったと思ったたら三十七秒ですよ」
もしかして……楽勝か？

えびそーど？ 学級対抗全員リレー

忍です。

ちよびつと緊張してたりします。

練習だけど、本番通りだもん。

全員リレーは、素走り、二人三脚、おんぶ、騎馬、が全員に振り分けられてそれでリレーするわけです。

そしてあたしはトップバッターだったりします。

ほら、普通緊張するでしょ？

「高山さん！ 一位で戻ってきてよ！」

「努力しまーす」

うん、トラック半周ずつでホント良かった。じゃなきゃあたしの体力持たないよ。長距離苦手。

「位置についてー」

ついてます。

「よーい」

スタンディングスタートって、位置について、と用意の違いが分かりにくいのはあたしだけ？

「どん！」

何で銃持ってたのに口でどん！ なの！？

ああ、突っ込んでる場合じゃなかった。ちゃんと走らないと。クラス全員にシメられるのはごめんです。純兄じゃあるまいし。

……よし、一位で戻ってきてやったぞー！

誰か褒めて。頑張ったよあたし。

「よし、忍。次はもう少し二位との差を開ける」

「あ、純兄居たの？」

「……よし、ついでにそこらで見てた奴の言葉をまんま伝えてやる
え、悪口なの？ 怒ったから悪口伝えるつもりなの？」

「『高山妹って意外と速えな』」

……褒められているのでしょうか、けなされているのでしょうか。

225 プログラムーばぁーん

白い鉢巻きぎゅーっと絞める！

「くぁー、いつちゃん最初から出なきゃなんないのか」

うん、そんな事で眠気が吹き飛ぶもんか。

「眠そうだね、忍」

「うん、桜って確か徒競走の補欠だったよね？ だから出て」

眠い。なぜなら今日は、起こされたわけでもないのにやたら早くに目が覚めたから。くぁー！

眠気全開ですいませんね、忍です。

今日は待ちに待っていたわけでもないけど、一応は待っていたかもしれない体育大会です。

立ったままうつらうつらしているうちに開会式が終わり、プログラム一番、徒競走が始まるうとしています。

……あ、あたしも並んどかないと怒られる。

「いってらっしゃーい」

「行って来まーす」

桜と手を振り合い、いざ出陣！ というような気力は残ってませーん。あしからず。

きつと脳がまだ寝てるんだ。うん。

ちなみに、個人競技は徒競走か障害物競走から選べます。選択競技です。

「あ、忍」

……今一番会いたくない奴に出会った。

ってか、一方的に向こうから来た。先生のサポート役でもしてるのかなお兄さん？

「純兄、四位ヒジでも怒らないですよ？」

「いや、一位にならなかつたら怒る。だって一緒に走るの、テメエより遅い奴ばっかだろ？」

脳！ 今すぐ起きて！ お願いだから！ 純兄に怒られるのはごめんなんだよ！ 耳に目覚ましつっこんだるか！ とか思ったけどそんなことしたらダメージ受けるのあたしだよなって脳もあたしの一部ですよなんで体起きてるのに寝てるのおーい！

……とかね、考えられるんだから脳は起きてるよね。

「んと、努力しまあーす？」

「ん」

おー、怖。

「忍」

「あ、しーちゃん。あたしの前だったんだ」

「どうしよう」

うん？ しーちゃんの口からそんな言葉が出てくると不安になるんだけど。

「あたしと走るの、何か速い奴が居るんだけど」

……五十mのタイム遅い順で並んでるのに？

「気のせいだよ、気のせい。うん」

「いや、学級対抗リレーに出るような奴が、補欠で……」

おー、クラスで二、三番目に速いような奴が？

あ、学級対抗全員リレーとは違うのでそこんどこよろしく。

「……あれ？ 学級対抗リレーに出る奴って全体的に補欠できないんじゃないかってっけ」

前に柿ピーがそんな事言ってたような……。

「そうなのか？ あ、おい、じゅーん」

「ん？ どした」

「学級対抗リレーに出る奴って補欠できないのか？」

「そりゃな、補欠にそんな奴が入ったらあっさり勝負決まるし。色別対抗の選手も無理だ」

色別対抗リレーは学級ごとに男女それぞれ一番速い奴が走るもんね。そんなのが補欠に入ったら面白くない。

「そこに学級対抗リレーの選手が入ってるんだけど、補欠で」

「あ、あれ？ あたしの事？」

今さら気付きましたか、あおやま青山。

「黄組か。もう一人補欠がエントリーされてるはずだろ？」

「え、でもあの、あやか綾香得点係の仕事行つてて……」

綾香つて誰。

「ん、呼び戻せ」

「今から！？ え、ちよつ、もう二年女子終わりかけて……」

一年男子、女子、二年男子、女子、三年男子、女子の順番で走っています。

感想を一言。青組、強つ。

そして何気にスタートの合図する先生が赤組のフライング見逃してるぞ、おい。一秒にも満たないようなフライングだけどさ。フライングはフライングだぞ！

「三年男子がやってる間に行けるだろ？」

「ええーっ、あたし徒競走したい！」

「知るかよ」

……純兄、そんな態度とってるから『高山兄ぶつ飛ばすぞー！』
つて言葉で皆の士気が上がったりするんだよ。

あたしも今のはおんなじ事言いそうだけどさ。

「呼んで来なかつたら赤組は不戦敗だぞ？」

「何でっ!？」

「いやだから、学級対抗リレーに出る奴は補欠で走ったらダメなんだって」

「どんどん純兄が機嫌悪そうな顔になってくる……」。

「あ、三年始まったぞ、忍」

「えー、どれどれ？」

見てるのは怖いので視線を逸らそう。

お、白組速いじゃん。いけいけーっ！

……あ、コケた。誰だアイツ。紫波か！ シジミか！ あーあ、ビリになっちゃった。ドンマイ。

「しーちゃん、今さらだけどさ、三年ってクラウドチングスタートなの？」

「本とに今さらだな。三年だけじゃなくて二年もそうだったでしょ。」

「……はあ、苦手なのに……」

あたしだって苦手だよ。何でわざわざ手え付くの？ 走るときには付かないじゃん！

ぎ、屁理屈。

言った所でどうにもならない。

「あ、しーちゃん、次、清だよ」

「うー？ 余裕で勝つよ。清は速いから」

相手を見もせず言い切ったね。ところで何、足元の砂である意味芸術とも言えるような物体を作り出してるの君。

あ、ちよつと目を逸らしてる隙に清がゴールイン！ 本とに余裕で一位だ！

「ところで、青山どこ行った？」

あれ、居ないの？ 綾香とかいう子を呼びに行ったのかな。

「出たいのにー、出たかっただけなのにー」

違った。そこでしゃがみこんで駄々こねてるだけだった。しかも何かこつちも砂で、ある意味芸術作品を生み出しているのですがいかがいたしましょう。

「高山さーん、おーい」

「はい？」

「足、押さえててくれるかな、クラウドチングスタートだから……」

あ、ごめんなさい黄組の知らない子。

……って、もうあたしの前！？ さっき最初の子が走ってった所だよー！？ さくさく行きすぎじゃない！？

「はあ、はあー、間に合った？」

お、綾香ちゃんらしき人の到着。凄く息切らしてます、これで走つたらまず間違いなくビリでしょう。

「ん、行ってらっしゃい」

「鬼かアンタ!？」

あ、突っ込んだ。

「ほら、もう始まってるぞ。今から行っても四位にはなれる。頑張れ」

「それビリよねえ!？」

「大丈夫、ビリでも一点もらえる。行かないよりマシだろ?」

「位置についてー」

あ、残念。今行ってももう得点もらえないよ。

「よーい」

はい、用意しましたつと。

「忍、一位な」パァン!

何か最後に凄いプレッシャーかけられたんですけど。

226 プログラム二番、三番！

忍です。今ちよつとブルーです。

徒競走でスタート失敗して、もう少しのところまで二位になってしまったのです。誰だクラウチングスタートなんか考えた奴。おかげで純兄に一瞬睨まれたじゃないか。それだけだったけど。

……はい！ 切り替えよう！ 眠気も飛んだことだし、今はプログラム二番、綱引きの応援をしよう！

がーんばれ、がーんばれ。……練習ではダントツで弱かったけど。まああれだ、奇跡よ起これ！

あ、負けた。奇跡、起こらず！ 次は赤組と三位決定戦かー。ここでは勝ってほしいな……。

綱引きって配点高いも……あ、負けた。一瞬にして負けた。どんだけ弱いんだよ白組！

「ちよつ、嘘でしょ！？ 皆！ 次のハリケーンは一位とるよ！」
『おおおおおおー！』

花上、切り替え早いな。そして皆テンション高いな。

ハリケーンは綱引きと同じ配点だもんね。綱引きで四位とっちゃったんだから、こっちは一位とらないと。

「行ってらっしゃーい」
「行ってきまーす。って、なっくんどうしたの、その怪我」
「綱にめっちゃ引きずられた」

あ、よく見たらそんな感じの人が結構多い。

「そっか。ちゃんと手当てしてもらってくるんだよー」
きつと保健室の先生と救護係の子大変だろうなあ。

「忍、どうしよう」
「今度は桜？ どしたの」

「わたしね、まっすぐにしか走れないの」
イノシシかアンタは。

「棒にしっかりしがみついたら？」

「練習の時にやったら怒られた〜。忍に」
「だって重かったんだもん。」

「あ、忍、跳んで！」

人間は飛べないよ。あ、違う？ 跳べ？ 何？ もう競技始まつたの！？」

「ほいっと」

「ほら、跳んだらすぐしゃがむんだよ！ 先生が言ったはったやん！ ハリケーンのコツ五つ！」

桜、関西弁になつてるよ。

……つて、うわっ、危なっ。もう少しで頭にハリケーンの棒がぶつかる所だった。

「……あれ？」

「どうしたの〜？」

「あたしんどこ白組、四位じゃない？」

「そうだね〜」

やばいよやばいよ、二つのドカンと得点入る競技で両方ピリとかかなりやばいよ？

「よし、俺等は逆転するんだな。逆転劇だ」

「よしよしよし、やる気出てきた！」

……あ。

「いつか村田と一緒に水谷いじめてた奴等だ。ついでに村田も」

「またんかコラ！ 俺はついでか！？」

だからそう言ったじゃん。

「いじめてたとか、人聞きの悪いことを言うな！」
「事実じゃん。ちゃんと謝った？」

「あ、跳んで！」

うえ？ あ、危な〜。

「……なあ岬、何か、すでに二位まで順位上がってんぞ」
「逆転しても大した事じゃ無さそう」

「やる気なくなるからそう言う事言うな！」

やる気なくさないでよ。一位とりたいんだから。

「あたし達が安心して行けるように一位まで上げてよ？ 順位」

『つたり前だ！』

さつきと言っていることが違うような気がします。

今更ながら、あたし達……桜、花上、愛華さんあしか（って名前だったはず）とあたしはアンカーです。責任重大です。そうか？

「あい、行ってらっしゃい美咲ちゃん」

「美咲ちゃんとか言うな！ 何か懐かしいじゃんかよおい！」

懐かしいの？

「頑張つてね、村田くん」「いつけえー！」「フレ、フレ」

愛華さん、何か器用に指でエールを送っています。はたから見たらいじいじしてるようにしか見えないよ。

「よし、いいね皆。岬達から棒もらったらダッシュよ、ダッシュ！

一位とるぞー！」

『はい、姐さん』

「誰が!？」

何か言ってみたかった。まさか八モるとは思わなかったけど。

あ、村田達けっこう速い。一位の黄組追い詰めた！……って所で戻ってきたよ。はい、ジャンプ！ で、しゃがめー！

「よし、行けっ！」

そして棒が渡されたー、一人で持ったら結構重いけど、四人で持ったら大したことない。

順位は一位！ おお、ビリからトップまで上ったよ。凄い。奇跡だ。

……とかおもったけど、練習の時も一位だったなああたし達。全く同じ展開で。

「忍！ もつと詰めて！」

あい。

一つ目のコーンを時計回りに、二つ目のコーンを反時計回りに回

って、三つ目のコーンを時計回りで半分回ってUターン。そこからまた、行きと同じように回って……。

「いいぞ！ 一位だ！」

端っこのあたしと花上で皆の足元を通す。うぁー、何回やってもこれ、体制キツイ……。

で、通し終わったら頭の上をまた通して……あ、手が滑った。

「いっつったあ!？」

「ごめん、二年男子Aくん。」

とつとと拾って、一番前へ。

「棒立てて！ 棒！」

分かってますって。

ほい、終わり！

……疲れたあっ！

「み、皆！ 一位だーっ！ 拍手！」

ぱちぱちぱちぱち……あれ、何か形的に花上に送られてるみたいだぞこの拍手。

で、花上がパッパッパッと手を振ると拍手が止まった。

「ふう。これがやりたかった！」

……さいですか。

227 プログラム裏側

「悪いねえー、高山くん。手伝わせちゃって」

「まるで悪いと思っていないような口調ですね」

「ええっ、そんな事ないよ？」

わたわたあたあたしなくていいから、ちゃんと手当てしなさいよっ！ 保健室の先生！

玲奈よ。

ただでさえ綱引きで怪我した人が沢山居たのに、その手当が全部終わらない内にさつき終わったPTA競技、玉入れで怪我した大人達が何人も……。

どんなやり方したのよ！？ 玉入れでしょ！？ どうやって怪我するのよ！

玉入れの前のハリケーンで怪我した人が居なかっただけ、まだいいわよね……。

でも、当番でもないのに、保健環境委員の全員が呼び出されるし

……じゅ、純まで何か手伝わされてる状態ってどうなのよ！？

本当に中学校の体育大会？ これ。

「いやー、でも高山くん、怪我の手当て慣れてるみたいだねえー。

早いー！」

確かに、そうね。いつ慣れる程怪我の手当てしたのが気になるけど……。

「口より手を動かさせて言うのが口癖の先生居ましたよね、呼んできましようか」

淡々と無表情で、手当てしてる人の腕から目を離さずにそんな事言われたら怖いわよ、べ、別に怖くは無いわよっ！？ あたしは！

「勘弁して！ あの人は僕苦手なんだ！」

「なら早く手当て続けてください。おいこらテメエ、傷口位洗ってこいちゃ」

せ、先生と生徒で口調が全然違うわね……。

「あと玲奈、テメエもちゃんと手え動かせ」

「あつ、べ、別に忘れてたわけじゃ……」

無いわよっ！

「はいはい。分かったから早く続き。後二、三人だから」

……よく見たら、保健環境委員の人あたししかいないじゃないっ！

「皆どこに行ったの!？」

「障害物競走に」

皆!？ 全員!？ そろいもそろって障害物競走に!？

嘘でしょ……。何より、今まで気付かなかったあたしに嘘でしょ

……だわ。

「高山くん!」

「はい」

あれ……得点係（図書委員）の先生じゃない。

「ちよつと手貸して!」

「一つ切つて渡せばいいですか」

「グロいからやめて!」「グロいわよっ!」

こ、怖いわけじゃないわよ!

「得点の計算ですか？ 図書委員だけでできるでしょ」

「めんどくさいって言って、今当番の二年生がサボってるのよ!

さっきの障害物競走だって、走り終わった人に得点のカード渡して

くれたのは生徒会の人たちなのよ!」

ふ、不良ねー、二年生の図書委員。

そして生徒会、雑用係になってるわね……。

「名前、何て言うんですかサボってる奴等」

「え?」

「後でめんどくせえのが俺に回ってきたという事でシメに行くので」

「それはやめなさい! いえ、本当は行け行けーっ! って言いた

いけど立場的に言ったらまずいからやめなさいと言っておくのよ!」

……言っちゃってるわよね。言いたい事。

「ん、で。どれですか。あ、玲奈。次学級対抗リレーだから応援席あっちで見てくださいば?」

あ……そうね。あっちの方が見やすいわよねっ。手当ても全部終わっしたし!

「じゅ、純もそれ終わったら来なさいよ!」

「ん」

とりあえず、走り始める前に応援席まで行かないとっ!

228 プログラムお昼休み

「水谷くんお疲れ〜！」

「い、意外と速かったのねっ！」

「……二位だった……」

落ち込まないですよ。二位だよ？ 四クラス中二位だよ？

忍でーす。

学級対抗リレーが終わり、お昼休みです。

学級対抗リレーでは、何とアンカーの水谷が三位から二位まで駆け上がりました！ 差はそんなになかったけどー、とか言ったら雰囲気ぶち壊しになるので思うだけにしておきます。

「亮っ、亮っ！ お弁当だよ！ 早く食べようよっ！」

「うん……」

紫波元気だねー。

「水谷いー、テンション下げんなよ。次応援合戦だぜ？」

「そーそ。得点はこっから巻き替えしやいーんだよ！」

「応援は応援で表彰されんだからさっ！ 声出せよおー？」

おー、水谷いじめのメンバーが一緒にご飯食べてる。なにがあったんだらう、とは突っ込まないけどさ。

「柿ピー」

「……あのね、先生の名前はね、牡蠣野胤って言うんだよ？ ピーナッツ関係ないよ？」

純兄……わざと？ わざと柿ピーって言った？

「牡蠣野先生」

「何？」

あら、さっきまで落ち込んでたくせに一瞬で復活した。

「先生、午前中まるで働いてませんでしたよね」

「うっ……柿ピーがショックで、さあ……？」

『うわー、サイテーだこの教師』……って視線が教室の各所から送

られています。

「その分、俺があつちこつち手伝わされたの知ってます?」

「え、そ、そうだったの!？」

『うわー、サイテーだこの教師』

あ、今度は声が出た。先生撃沈。

「つて訳で、この豚カツ貰います」

「そんなっ!？」

復活早いなあ。

「おーい、豚カツ欲しい奴何人居る?」

『くれっ!』

手を挙げた奴が……十人くらい。

「……そう言う訳で、も一個貰います」

「勘弁して! ちよっ、先生のお昼のメインがなくなったよ!？」

豚カツ二つも入ってたの?

「いいだろー、別にー」

「そーそー! 高山兄働かしてたんでしょ?」

「サボり野郎に食べさせる豚カツはありません!」

誰だ最後のセリフ言ったの。

「そんなあー!」

サボってる方が悪いって事でいいんじゃない?

あ、この豚カツ美味しい。先生って結構いいお弁当貰ってるんだな。

「ねえ、純兄」

「あ?」

「午前中何してたの?」

「柿ピーの代わりと、救護係の手伝いと、得点係の手伝い、かな」

何でも屋みたいだなー。万事屋? さすがに万は無理か。

「じゅんきち! 居るーっ!？」

「誰が純吉だこら」

ぶ、部長……オカルトオタクの部長!?

「純吉居るか？」

「純吉先輩、居ます？」

「純吉……居る筈」

「純吉センパイッ！」

さらにハルヤン、えっちゃん、マコちゃん、タツノオトシゴまで

……。

「よし忍」

「逃がさないですよっ！」

えっちゃん……最初は大人しい子だと思ったのに……。

なんつで突然拳構えて走ってくるのかな！？

「えっちゃん先輩っ！ 援護します！」

せんでいい！

「いつけええええええ！」

『黙れ超音波！』

クラス全員に超音波と言われた部長はどうなんだろう。

「つーかよ、よくもまあお前等敵陣に乗り込んで来れたなあ！」

いや村田、昼休みなんだからいいでしょ別に……。

「私白組ですっ！ 二年一組ですっ！」

あ、そうなの？

「あ、おい！ 柿ピーのおかずシリーズ第二弾！ 漬物欲しい奴

！」

すばこーん

ハルヤンのハリセンが叫んだなつくんに直撃。

「てんめえ、何しやがる」

「俺にもよこせ」

『そっちけー！？』

先生をかばった、とか、シリーズってなんだよ！ とか突っ込み

じゃないの！？ じゃあ何でハリセン出したんだ！

「そのハリセン、何処から出たの！？」

「え……ポケットから」

『ゴム風船か！』

突っ込む側の箸のハルヤんが思い切り突っ込まれてる……。こんな感じで、騒がしくてある意味カオスなお昼休みでした。誰かが言ってた。『午後からの応援頑張るぞーっ！』

あ、食べたなら眠く……。。

229 プログラム七番です

「白組いーっ！ おーえーん！ 始めます！」
ドン、ドン

さあ、始まりました、応援合戦。

演技、声の大きさ、タイミング、完成度、等が審査されます。
ちなみに審査員は各学級の学級委員長です。

私ですか？ 美香と申します。

応援団です。きちんとエールをする位置にスタンバっています。
何事も楽しまなければ意味がないのです。体育大会で一番楽しそうな役割と言ったら、やはり応援団でしょう。

「白組のーっ！ ゆーしょー願ってーっ！ エールをー！ 送ります！」

ドン、ドン

本当は団長の座を狙っていたのですがね。悲しいかな、女子は団長にはなれないのです。

男女差別だー、と叫びたいところですがバランスを考えれば仕方がないことです。

ですので、確実に優勝できるような声を出すように、団長の迅谷さんを脅しておきました。ぬかりはありません。

優勝は白組のモノです。

「フレッツ」

っと、私も声を出す時が来ましたね。

『フレッツ！ しーろーぐーみっ！』

『そおーれっ！』

団席の声、期待以上に大きいです。特に……何と言つのか忘れましたが、一年生の男の子の声がとてもよく聞こえてきますね。

「三っ、三っ、七びよおーしっ！」
ドンッ

っと、いつの間にかエールが終わってました。

体が勝手に動くので意識がどこかへ飛んでいました。今なら寝ても演技できるような気がします。流石にしませんか。

ドン、ドン、ドン

『はっ』

ドン、ドン、ドン

『はっ』

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン

腕を前後左右、動かします。たまに肩からポキッと聞こえてくるのは気にしない方向で。

手に持ったポンポンがくすぐったいのです。ちょっと裂きすぎましたかね。ビニールテープが髪の毛のように細いです。よく丸坊主にせずに出来ましたね私。

『はああ〜っ』

ドドドドドドドドドド……

ドンッ、ドンッ、ドンッ

『はっ！』

ポンポンを持った手を思い切り上に突き出して、シメッ！

私的には少し納得のいかない終わり方です。

最後に組体操の一つや二つ入れてもいいのではないのでしょうか。

三三七拍子なんだから。

意味が分からない方は勝手にストーリーが何か作ってください。

私も意味わかりませんから。

さて、次は自由演技ですね。

私もバク転マスターしましたよ。高山兄さん、厳しいですが意外と教えるのは上手いですね。

体中あざだらけになりましたけど。正直言うと今も痛いです。

「頑張ろう、日本！」

『おおっ！』

自由演技の掛け声に何でこれを入れたのでしょうか。

提案したのは私ですけどね。

頑張り日本、頑張り東北。

ちなみに太鼓のリズムは、童謡『小さい秋見つけた』を少しアレンジしたものです。

案外応援っぽくなりました。ずっと同じ音程だと。

太鼓団が『意外と難っ!？』とか言っていました。そこは無視です。

さて、まずは前から順々に女子は側転です。男子はその間、空手の型を組み入れたような踊りをしています。

地面に置いておいたポンポンが若干風で吹き飛ばされてしまいましたが、とりあえずは成功です。今度は側転した先に置いてあるポンポンを手に持ち、中央に集合します。男子は変わらず、空手の以下略。

縦一列に並んだら、ポンポンを上に掲げ、後ろから順に散らしていきます。おろすんじゃないですよ。パツと放り投げるんです。退場の時行方不明になるかもしれませんが、そこは気にしては負けです。

ちなみに、応援席は応援席で簡単に手を躍らせたり、たまに何かセリフを叫んでいます。

さて、ここからが本番です。

まず、女子がロンダートやバク転、倒立……何と言うか忘れましたが、バク転の逆の奴で端へ寄ります。

そこへ一年男子がヘッドダイビングッ！ ってダイビングしてどうするんですか埋まるんですかあなた。

失礼しました、ヘッドスライディングしま……何か技しようとしてしくじりましたねこの子！

その上を飛び越えるように二年男子がバク転の逆の奴を……あ、手をつくところ为抓手かり一年男子の背中ですね……。ぐっじよぶです。

さらに、三年男子二人がまるで交差するようにロンダート バク

転を決め、ポーズ！

これにて演技終了です。

「白組いっ！ おーえーん！ 終わりますっ！」

ドン、ドン

ふう、達成感いっぱいです。やはり楽しまなければ意味がありませんね、こう言う事は。

『白組の演技に、問題点がありました』

それを放送で言いますか普通。

何ですか、問題点って。

『自由演技では、応援団による危険な技は禁止されています』

……ぱーどうん？

230 プログラム八番

「あーい空ー、しろーい体操服ー、まっしろーい旗ー」
白が二つ入ってるんだけど。

「シジミ、何でもいいからその耳に悪そうな歌をやめてくれ」

「高山くん酷くない!？」

酷くない。だって本当に耳に悪そうだったから。
純だ。

午前の部の得点は高い順に、青342点、白311点、赤298
点、黄296点だ。

これからムカデ競争だけど……こけなきゃよし、って感じだしな
あ……。大丈夫か？

ちなみにコースは、まっすぐ走って途中でおいであるコーンを回
り、戻って来るって感じ。体育の教師が言った。『カーブを制す
る者はムカデを制す!』確かにそうだがこけたら終わりだな。

「いやったあああああ! 一位!」

ん、一年が戻って来たな。次は二年か。

「……白組三年! 円陣組も! 絶対勝つぞー、おー! ね!」

花上の言葉で思ったんだけど。全校生徒で円陣組ならどれくら
いの大きさになるんだろう。

いや、ほんとどうでもいいけど。

「おい高山兄い! 杖置いてテメーも入んだよ!」

「何で?」

参加できないのに。

「えー……て、手当て係!」

「怪我人出る事前提かよ」

「いーから来い!」

はいはい。

「いいぞー、花上」

「いくよ？ 絶対つ勝つぞーっ！」

『おおおおおお！』

痛っ。何踏み込んでんだ俺。怪我したこと忘れたか？ 周りの霧
団気に流された……。

「純って意外と馬鹿ねっ！」

「うっせ。とつと足の紐つけやがれ、玲奈」

「わ、わかってるわよっ！」

あ、こら、適当なのつけるな馬鹿が。順番狂う。

「あーっ！」

こっちは何だ。

「二年全クラスこげやがった」

怪我人は出してくれるなよ？

「純に、純に」

「んだよ忍」

「純兄が先導したら確実に一位とれると思うんだけど」

「餌か俺は。反則だろうが」

「やっぱり？」

やっぱりとか思ってたなら言っな。

「あ、二年は二位みたい」

「ちよっ、これであたし等四位だったらダサいじゃん！」

さっき絶対勝つぞの円陣やろうと言い出したのはお前だろうが。

何で今更マイナス思考になってんだよ。

『スタート一分前』

『きゃあああああ！』

「なんでデメエ等叫んでんだ？」

『何か緊張して』

緊張したら叫ぶのか、端迷惑な奴らだなおい。

『三十秒前』

『ぎゃーっ！』

やかましな。

『十秒前、九、八……』

「ちよつ高山兄、助けて!？」

「何から」

「緊張から!」

無茶言うな。

『五、四、三』

『ぎゃつせーのーで!』

ちゃんと走れんのかこいつ等。今更ながら。

『いっちにつ!』

あ、ちゃんと走れてる。ダントツで。

ダントツでドベだけど。

奇跡が起ころん限り勝つのは無理だな……。

『わああーっ!』

お、赤組がこけた。やつぱカーブは難しいもんな。

黄組はまあ足取りが危なくなっかしくなってきたからいいとして…

…あ、こけた。

問題は青組だな。いちいち強い。総合得点もダントツでトップだ

し……。

つと、やつと白組もカーブ終わったか。

……あれ。

何か、妙に速くなりだした?

ゴール地点に居る、俺に向かって、クラス全員が、全速力で向か

つて来……。

「い、い、い、いやつつたああああああ!」

「一位!? 一位なのあたし達!？」

「見たか! 俺のゴールする時の滑り込み!」

ああ、蔵元の奴ヘッドダイビングするのかと思った。つまり潜る

気かと思った。額から血い出てるぞおい、気付いてるか。

……ところで。青組、抜いたのか?

四分の一位差つけた相手を?

すげえ……とか思いきや、な。ゴール直前でぎりぎりゴールしきれずにこけてる青組が目に入ったりしてな……俺の褒め言葉を返せ。運の強さは褒めるけど。

「奇跡だ……。奇跡が起こった……」

「うんうん！ 亮、やったねっ！」

「忍っっ！ やったね！」

「うんうん！ やったやった！」

「みんなあーっ！ 円陣組むぞあーっ！」

またか、とは思っけど……まあ、悪くないか。

「ムカデ優勝ーっ！」

『やったあああああっっ！』

よく見たら、泣いてる奴も居た。

テンシヨンに任せて、何か背負い投げとかやってる奴が居た。余計に怪我人を増やすな。

……これ見ると、ちよつと、ムカデに参加できなかったのは寂しかった、かな。

「おい！ 高山兄い！」

「蔵元、血だらけの顔を近づけるな」

包帯残ってたっけ……。あ、テープの方が残り少なかったかな。

「いや、あの。まあとりあえずだな！」

とりあえずだな、じゃなくて傷口洗ってこい。

「一人でシケた顔してんじゃねえぞって事だ！」

「……そんな顔してたか？」

「少なくとも俺にはそう見えた」

「あたしにもー」「私もっ」「おれも」「僕もーっ」

あー……ん、よし。

「じゃあそれはいつまでたっても怪我した奴等が傷口を洗わんせいだな。俺は手当て係なんだろ？」

『えっっ』

ちよつとまでやこら。今『えっっ』つつつた奴全員が怪我してん

のか？ ほぼ全員じゃね？

……今年の体育大会は怪我人祭りか。

「傷口洗ってきたらお前が全員の手当てするんだな！」

『行こーっ』

え、ちよつと待て、俺一人で？ 全員？

「よかつたねえ、純兄」

「何がだよ……」

「ちゃんと参加できてるじゃん」

「……ま、な」

……今はめんどくせえの方が上回ってるけど。

「じゃああたしも傷口洗いに行つてきまーす」

大事な事だからもう一度言わせてくれ。

今年の体育大会は怪我人祭りか。

231 プログラム最後だよ

「ほんつとにどうなつてんだよ今年の体育大会！」

「きゃく、純くんが機嫌悪くい」

半端なく怪我人だらけなんだもんねえ。

体育大会前の純兄を始め、三年一組は全員怪我したし、すれ違ふ別のクラスの人もほとんどが包帯とか伴奏とかつけてるし……。忍でーす。

色対抗リレーが終わり、最後の競技、三年の色対抗全員リレーが始まるうとしています。

何でこれが最後？ 普通色対抗リレーを最後にしない？ 一番盛り上がるんだから。

「テメエ等、今度は怪我すんなよ。んで、俺にすうっげえめんどくせえ事させたんだから一位とれ」

なんちゅー理由だ。

『アイアイサー！』

そしてどこの軍隊だここは。

『じゃあ任せた高山妹！』

「任された」

……けど、じゃあつて何!?

「はい、トップバッタージャンケンしてー！」

最初の位置を決める大事なジャンケン。ぶつちやけ最終的には全員内側に入るから順番関係あるのかかと思うけど。

「さーいしよーはグー、じゃーんけーんぼん！」

……あ。負けた。一人負け。

「……ねえー」

「大丈夫！ 君はやれる！」

あたしが何を言おうとしたと思っただらう。この人。

「そうだ！ 一番外側だからってなんだ！」

「高山さんは速いよ！ 自信持って！」

「いつけえ！ 高山妹！」

「あの高山兄の妹なんだから行ける！」

……何か泣きそう。何でクラスの皆に励まされてるのあたし。

言おうとしたこと忘れたじゃんか。

「位置についてー、よーい」

パンッ

よし、何か知らんが励まされたんだし、頑張ろう。

「行っけー！」

「ゴーゴーシノブ！」

誰、今外国人みたいな言い方したの。

「あい、頑張れシジミ」

って言うってバトンを渡すと、

「紫波だよっ」

って笑って返された。

お、紫波……遅い！

騎馬かおんぶの上へのつときゃ良かったのに……。

「紫波いいいい！」

「がんばれーっ！」

「シジミって呼ぶぞ！」

脅し？

「そう言えばシジミの名字って何？ 清かなつくん、知ってる？」

「汽水きすいだったと思うぜ？」

何だ、シジミでいいじゃん。むしろあってんじゃん。

「ありがと清。二人三脚がんばれー」

えーっと、順位は……あら、三位。

「頑張れよ、二人とも？」

『びやいつ』

何か笑顔の純兄に話しかけられた途端、二人とも気をつけしたんだけど。……怖いもんねえ。

「あと忍はちゃんと列に並べ」

「はい」

あ、清となつくんにバトンが渡った。

……速い。

何か、めっさ速い。

二人三脚なのに、二人とも全力疾走してる。

純にーばわー？

「海中くんすごーい！」

騎馬に乗るっぽいポニーテールの子、清は？

……おお、なつくん達の次の二人三脚も速い！

もしかして、一位まで上れるんじゃない？

「よっし！ 青組抜いたあああああ！」

「赤も抜かせ！ いけいけいけいけいーっ！」

む、後ろから黄組が追い上げてきた。

次はおんぶだね。何でおんぶや騎馬があるのか不思議だけど、そ

こは突っ込んだじゃダメなとこだよね。

大熊おおくま小熊おぐまコンビこと、大熊おおくまと小熊おぐま。

体格は名前（つてか名字）と同じなんだけど……大熊が何で小熊

の上に乗るの！？

逆でしょ体格的に！

「が、頑張れ小熊！」

「大丈夫、落着いて！」

小熊は落着いてるけどね。

あ、バトンが渡った。

瞬間、小熊がトンデモな勢いで走り出した。

あれ、小熊こんなに足速かったの！？ とか、どーなってんのこ

れ、とか、色々渦巻いてるのかちよつとの間静かになって……。

「いーぞー！ 小熊ー！」

「すっごーい！」

「つてか大熊でけーくせに目立たねー」

とか、いろんな声が飛び交う頃には次の子にバトンが渡ってる。しかもさりげなく赤組抜いて一位になってるし。いーじゃん。

「篠ーっ！ ガンバレー！」

ん？ あ、本とだ。清の声聞いて気付いたけど、しーちゃんだ。下の子。

で、上には玲奈。

「純兄、小さい子が大きい子を負ぶうのが普通なの？」

「だったら光は潰れてる」

あー、光、おんぶ好きだったもんねー。

何で逆の事してるんだウチのクラスの人たちは。しかも何気に皆速いし。

……あー、流石に騎馬では小さい子が上に乗るか。

騎馬、第一号が発車いたしました。……発馬かな？

んー、流石におんぶの時よりスピード下がるかー。

……とかのんきに思ってたらね、黄組がでつかい子乗っけて少し速かったりね。

何？ 大きい子を上に乗せると走るのが速くなるの？ 確かに速く降ろしたい一心で速くなるかもしれないけど！

ま、まあ、二人三脚とおんぶとで結構速かったからまだ差はあるけど……。

……お？ 次アンカーか、うちのクラス。

「海中くん、見ててね！」

もしもし、貴女が見ているのは白組の旗であってなっくんではありません。

「ポニ子おっ！ 後は頼んだっ！」

「うんっ、走るの私じゃないけどねっ！」

騎馬だもんね。

……ポニ子って言うのあの子。

「いついかなる時もポニテだからだと。本名馬子^{ウマコ}。おもしれーなあ」

なっくん、いつ来たの。

「……アンカーが騎馬の中で一番遅い」
誰かが言った、この言葉。

これでちよつとひゅうつと冷たい風が吹き……

「何か黄組、大分追い上げてきてる」

さらに誰かが言った、この言葉で……

白組の列が、凍る。

「だぁぁぁぁぁ！ 白ぉぉぉおっ！ がんばれえっ！」
事は無かった。

「ポニ子！ もう少し体重軽くしろ！」

「無茶言っなよおい」

あ、黄組がもう真後ろに……でも、

「ゴールまでもう少しだ！ 持てっ！」

「黄の邪魔しろ！ 邪魔！」

選手宣誓で『正々堂々と』って言った人が言っなよ。

パンッ！

勝った！

『セエエエエエツフ！』

一瞬の間があつて、

『いよっしやぁぁぁぁぁ！』

何か皆が皆に色々もみくちやにされた。

正直に言おう。痛い。楽しいけど。

「やったな！」

「あー、なんかもう、何か、ほら、こっつ、こっつだ！」

「何かわかんねーけど分かるー」

で、そろそろと応援席に戻ろうとして。

「おいコラ、退場してねえぞテメエ等。勝手に戻るな」

応援席から現実に引き戻された。

232 天体観測の恐怖

あのね、確かにね、体育大会の応援と総合両方優勝したのはあ
しだつて嬉しいんだ。

んでね、じゃあせつかくだし皆でなんかするかー、見たいな流れ
も分からない訳ではないんだよ？

でもね、

何でその内容が天体観測なのかなっ！？

忍です。

どっかキャラが変わった気がするのは気のせいです。

最初に言ったとおり、優勝記念に、裏山へ天体観測に来ています。
何で！？

ああいや、皆一回家には帰ったよ？ 晩ご飯も食べてきたよ？

どうでもいい事な気がするけど私服だよ。

「やー、雲も無いね。天体観測日和だ」

「月も出てないしねー。あ、金星！」

「あ、夏の大三角！」

皆最初は何で！？ って突っ込んでたのに……普通に楽しんでま
す。まあいいや。あたしも混ざる。

「桜ー、しーちゃん」

「あ、忍、太陽系の惑星って何だっけ。水金地火木……？」

土天海冥ね。あ、冥王星は違うんだつた。すらつと言っちゃうけ
ど。

なんか、海で終わると物足りないんだよね。

「どうだ皆！ オレ、天体望遠鏡持って来たぜ！」

『早く出せよ！』

清がぱぱぱぱぱーとだした望遠鏡、突っ込まれながらも大人
気。

順番はジャンケンで決めようね。

「天体観測といえばもつとしつとりしたイメージがあっただが」
「しーちゃん、それ言っちゃダメ」

「ちゃんと虫の声が聞こえてるんだからそれでいいじゃないか。
早く変われ！」

「やあーっ！ もーちよつとーっ！」

「……いや、周りの声で余聞こえないか。」

「そして何望遠鏡取り合ってるの。小学生かあんた等。」

「じゅ、純っ、北極星ってどれなの！？ べ、別に分からない訳じゃないわよっ！？」

「分かるんなら普通聞かないでしょ。」

「はいはい。あれだろ」

「……なんか純兄、玲奈の取扱い慣れてるなあ。でもって北極星見つけるの早っ。」

「玲奈って何座？」

「え？ 何よ突然っ」

「探すものがなくなってちよつと暇になった」

「見るだけじゃダメなの純兄！」

「ぺ、ペガサス座よっ」

「んな星座ねえだろ？ いやあるけど、誕生日の奴にはねえだろ？」

「あ」

「玲奈、君は何がしたかったの。」

「べ、別に忘れたから適当に言っただけじゃないんだからねっ！」

「理由を綺麗に言ってくれてるなあ。誕生日は？」

「し、四月二十二日……」

「あれ？ 純兄と同じなんだ。」

「よし、後で玲奈姉って言うてからかってみよう。」

「んだよ、同じか。おうし座はさっき見つけたから……よし、今度はいっそペガサス座探すか」

「結局そうなるの？」

「み、見れるの！？」

「星さえ出てりゃ、多分」

「ど、どれ？」

純兄つて星好きだったっけ？

「……ああいうのをいい雰囲気って言うんだねえ」

「どわっ！ 桜、何で地面にしゃがんで膝なんか抱えてるの!？」

「しーっ、気付かれるでしょ!」

気付かれるも何も最初からここに居るんだから……。

つて、何か後ろに変な光景が見えた気がする。

恐る恐る振り向いてみると……。

「どぴゃあ!」

全員が桜と同じ格好してた!

『しー、気付かれるだろ!』

この声とこの変な行動で気付かれると思います。

「あ、あれだ、ペガサス座」

「え、どこ？ 見えないわよっ？ べ、別に見えないわけじゃない

わよっ!？」

「どっちだよ」

見えないって言ったじゃん。

「高山兄の野郎、俺、鈴木的事密かに狙ってたのに……」

何か少し殺気を感じました。返り討ちにされるから手は出しちゃ

ダメだよ？

「……小熊座つてどれ？ わ、わからないわけじゃないわよっ!

確認よ確認!

「北極星の隣の星と……後、その更に隣の四つの星が小熊座。あれ」

「あ、あれねっ! ……や、やっぱりあれだったのねっ」

間があつたよ、不自然だったよ流星に。

「あ、ところで玲奈。ちよっと聞きてえんだけど」

「な、何よっ？」

「あ、このパターンは……ちよっとあたしは……」

「な、何かな何かなっ」

「きゃーっ」

女の子がそわそわし始めた。何で？

「俺の……」

『きゃーっ』『あんにやる……（もてない男子、恨みの声）』

「あ、俺等の……」

『何々？』『……うん？』

「後ろで体育座りしてる奴等、どう思う？」

「えっ？」「げっ」

ほらねっ！ やっぱりね！ こう来ると思ったよあたしは！

逃げといて良かった！ 木の上に！

何かなつくんも一緒だけど。

「俺は皆を地面に寝かせて星を見させてやるのが一番だと思うんだ
けど」

「そうねっ！ やっちやえっ！」

何か今回だけは素直だな玲奈！

「……誰から寝る？」

『ごめんなさああああ！』

「遅えな」

あーあ、片っ端からこかしてってるし。本とにねっころがしてる
だけじゃん。

ってか器用だな、杖と足と片手でやってるよこの人。

「なつくーん。おーい」

「も、やべ、あは、腹筋、マジ、やべえ。あは、あはは、壊れる、
腹筋壊れるっ！ あははははっ！」

くれぐれも木から落ちないようにしてください。

あたしの危機感地能力が三メートル位のところまで登っちゃった
んだから。

「忍ー、夏ー、おーりとーいでー」

「純兄怖い！ ハンパなく怖いよその言い方！」

「ん？ 何か言ったか？」

……なんか、登ってきた。一瞬で。両手と片足だけで。三メートルの高さまで

さあ、なっくん。一緒に？

『ぎゃあああああっ！』

233 あるものに乗って夜の住宅地を走り回るあるもの

「夜に自転車で走り回りたくないな」

「突然何言いだすんだよ。ドラキュラがお前」

「……………」

岳だ。

しくった！

突っ込みしくった！

何だよ、ドラキュラかって！ ドラキュラがチャリ乗って夜の住宅地走り回んのか！？

もしくはドラキュラは何か突然言い出すのか！？

「…………お兄ちゃん、ドラキュラってどういうものだと思ってるの？」

えー？ ドラキュラだろ？

「何か黒い角があつてー、んで紫のマント着てて、牙が生えてて、で髪が黒くてちよつと逆立ってるかオールバックで、マントの中にはタキシードだな」

「ぐ、具体的……………」

何か悪いか？ ドラキュラってこんなんじゃないか。たっけ。

「でも…………。ドラキュラのマントって黒じゃないかな。裏面は赤」

そーか？ 翔に借りたマンガじゃ紫だっただけだ。

「あのマントリバーシブルなのかな？」

「知らねーよ！」

「そっだ、外行こ？」

「ぜんっぜん話繋がってねーよ！？」

しかも今夜だし…………よく見てみりゃ時計二十一時代ってなってるし。

「ね、行こうよ」

「いや、行こうよ〜じゃなくてだな……」

「夜に外出てみたくないの〜?」

……出てみてーけどさ。

「母さんとかにーちゃんとかがダメっつーんじゃ……」

「こっそり行けばいいよ〜」

「母さんとはもかくにーちゃんにこっそりが通用するか?」

「頑張る〜!」

結局行くのかよ!

「岳〜、光〜、外行くなら上着の一枚は着なさいよ〜。結構冷えるから〜」

行く前に気づかれた!?

「……なんだかんだで何も言われなかったね〜」

「にーちゃん仕事だっつってたしな〜。まあいーじゃん、外出れたし〜」

にーちゃん、まだ怪我してんのに何の仕事すんだろ。死神に書類仕事とかあんの?

それにしても、意外と冷えてんな。上着着ててよかった。半袖一枚じゃ確かに寒いわ、こりゃ。

上着っつってもパーカーだけどさ。

「静かだね〜」

「え、そーか? 虫鳴いてんじゃん」

「それ含めて静かだね〜」

……あ、静かじゃねーや。

向こうからめっちゃ喧しい声と共に何か来る。

「なー光」

「うん〜、ムードぶち壊し野郎を殴ろつか〜」

関節ポキポキ鳴らすなよおい。笑ったままそれすんな。

「ぶっっちゃけ賛成だけど」

あ、でも殴つたら怒られるかな。一応相手大人だろうし返り討ち
つてことも……。

「オラア！ オラオラオラオラオラアッ！」

「光」

「うん、やっぱり逃げようか」

声的にあれだよな、暴走族か何かだよな？

にしちゃバイクの音しねーけど。まさか自転車？

あ、街灯で姿が見、え……。

「光」

「本当に居たね」

チャリに乗つて夜の住宅地を走り回るドラキュラ。

が、こつちに向かつて来る。

怖っ！？

「光、逃げんぞ！」

「あ、あのドラキュラさんのマント黒と赤だよ。私の勝ち」。

「百円ちょうだい」

いつ賭けになったんだよ！？

とりあえず今は逃げる方が先だよな、つつつてもチャリ乗った奴

からどうやって逃げんだよ。

木い登んのか？ ねーちゃんじゃあるめーし。

「あ、お兄ちゃん、こつちに細い道がある」

「お、んじゃそつちに逃げるぞ！」

「了解」

……ふう。

「……いきなり逃げるなんてどお、ゆうつもりなんですかねえ？」

『きゃあああああっ！』

「いきなり叫ぶなんてどお、ゆうつもりなんですかねえ？」

怖えよ！ 何無理矢理この細い道に自転車ごと入ろうとしてんだ

よ！ 降りろ！

つて、そーゆー問題じゃねーか。

「ちょ、光！ もっと奥行け！ 反対側から逃げんぞ！」

「お、お兄ちゃん〜、こつち……行き止まりだよお〜」

「嘘っ!?!」

「ふふふ、いきなり袋のねずみなんですよねえ？」

その喋り方ヤメロ、怖えから！ しかも何？ 何か目の周りに紫の線とか書いてるぞこいつ。

あれか？ コスプレイヤーってやつなのか！？ でもドラキュラのコスプレならハロウィンにしるよ！

「さあ〜、楽しい夜の始まりですよねえ？」

『おーまわーりさーん（〜）！』

つつか、この行き止まりの家の奴も気付けよ！ オレ等ずっと大声で話してんだぜ？ 何で気付かぬーの？

「ふう……光、とりあえず落ち着こつ」

「何で〜？」

落ち着くの早えな、さつきまで『このへんに隠し扉とかないかないかな〜？』とか言ってたくせに。

「いーか、光。こういう時にーちゃんやねーちゃんならどうするか考えんだ！ んでそれをやる！」

「そんな無茶な〜！」

光の中にーちゃんとねーちゃんはどーなってるんだ。

オレン中？ えー……にーちゃんはあれだ、めんどくさがり屋の残念なオールマイティ。ねーちゃんは……掴めん。

あ、何かオレも無茶だろって気がしてきた。

「ま、まず楽そー方から考えるぞ。ねーちゃんならどうする？」

「相手で遊ぶ〜」

「ああ、そっか」

……………。

それをして何になんだよ!?!

「ちょ、もーちょい真面目なのねーのかな……………」

「この壁を腕と脚つつぱって登って〜。塀を歩いて逃げる〜」

あ、それいーじゃん。

「んじゃちよつと登ってみっか」

「頑張れ」

何でおめーは見てんだよ。

ま、いか。

えーつと、手足つっぱって登るんだよな。家の壁でやったことあるから楽勝だぜ。

「あゝ、お兄ちゃん上」！

上？

ゴンツ

「痛っ！」

何だよ！ 何で上に板なんかのつかってんだよ！

「ふふふ、これがホントの袋のねずみですかねえ？」

オレ等はねずみじゃねえし、ここは袋じゃねえっ！

えーい、こうなったら……。

「にーちゃんならどうする？」

「純お兄ちゃんなら……まずこんな事態に陥らない」

「それ言ったら何も話が進まねーじゃんかよ！」

「……言葉で相手をどかさ」？

にーちゃんがそんなめんどくせーことするか？

「つつか、オレ等そんなことできねーじゃん」

「じゃあゝ、変人変体ドラキュラさんをぶっ飛ばす」！

よし、んじゃあそれで行こう。

「何をするつもりなんですかねえ？」

行ける、行ける、オレだつてにーちゃんの弟なんだ！ アイツぶ

っ飛ばすくらい余裕だつつの！

「オラアツ！」

「いっふっ！？」

あら？ けっこうあっさり。漫画みてーに蹴り決まったなあ！
わき腹だからけっこー痛いんじゃねーの？ つつかいい加減チャ

リ降りるよ。

「とっつ！」

んあ？

「ぎゃふっ」

あ、光がトドメにドロップキックした。

いやいやいや、顔面にそんなもんすんなよ。スカートめくれてんぞお前。ってかジャンプ力すげえ。

あーあー、気絶しちゃった。やっと自転車から降りたな。いや、落ちただけだ。

「あ、めつけた。純兄、居たよー！」

「ねーちゃん！」「お姉ちゃん」

何で居んだ？

「……どーしよっかな、これ。やっぱ交番？ お巡りさん？」

「お姉ちゃん」。何でここに？」

「チャリ乗って夜の街を走り回るドラキュラが居ます。それに興味を持たない奴が何処に居る！」

そっち！？

234 教師がおかしくなった件

変なのが居る。……変なのが居る。

大事な事なので二度言いました。

忍でーす。

朝、学校に来たら変なのが居ました。

んーっと、頭には『肅正』って書かれた鉢巻、手には竹刀、ジャージに何故か下駄。

……と言う姿の柿の種もとい牡蠣野胤（先生）！

何があつた！？

「純兄、あれどう思う？」

「壊れたんだと思う」

「純兄以上の壊れ方だねー」

「いや、あれはまだ人間だから俺以下だ」

どーゆー基準なのそれ。そしてなんか張り合ってない？

……よく見てみたら、何かあれだね。今の牡蠣野、よく漫画で見

かけてる生活態度の強面先生だね。筋肉ついてないのが残念。

「ねえ、純兄」

「門を通らずに学校に入る方法なら五通りはあるぞ？」

「ちよつと待て。何で門を通つたらまずいかのような言い方なの？」

「ってか五通りって？ そんなにあるの？ それでいいの学校として。」

「あ、ちよつどいいのが来た。ちよつと柿の種の方見ててみる」

ん？ あ、学校一の真面目ちゃんと噂の……四組の誰かさん。

普通に挨拶して門通ろうとしたら、あれ？ 何か呼び止められた。手首掴まれた。

スカートは別に短くないし、カバンに何かちゃらちゃらがちやがちやついてるわけでもないのに……むしろ、これ以上真面目な格好できないような姿なのに、何で？

「永田^{ながた}、これは何だ！」

「……？ あ、永田って言うんだあの人。じゃなくて、これって何？」

「え？ 髪留め用のゴムですけど……体育の時要るので」

「今、体育マツト運動だもんね！」

「そんなモノ鞆に入れておけばいいだろう！」

「ええ！？ それだけ！？」

「ええ！？ だ、駄目なんですか！？」

「当然だ」

もつとちらちらしてる子いっぱい居るじゃん。今はまだ時間早いから来てないけど……。

「……そ、そうですか」

永田、ちゃんと言われた通りにするとところが真面目だね。

「な？ 通ったら絶対何か言われるだろ？」

「え？ 別にあたし、変なモノ付けてないけど」

「……あれ、何か純兄がじと目でこっち見てる。」

手首？ あ。

「しまった……ずっとつけてたから忘れてた。ミサंगाの存在」

いつか純兄に『死神予防』とかでもらった、不思議な石のついたミサंगा。……どーしょ。これ取れないんだよ。直接手首に結んだから。

「やっと気付いたか。それ、絶対引つかかるだろ？」

「あれ？ 純兄は引つかからないんじゃない……っと、何か首に付いてんだった。取れないの？」

今まで純兄の一部としてスルーしてたけど、純兄の首にも石が編み込まれた……ミサंगाでいいのかな。首に巻いてるけど。

「一応取れるけど、取ったら俺霊体化する」

「嘘っ！？」

「いや、ホント。だから取れない」

へー。へー。ちよっと取って見たい。

「取ったら怒るよ？」

「ごめんなさい」

エスパー？ エスパーなのこの人。

「おーい！ じゅし！」

『誰が樹脂じゃ』

「おは、忍と救護係」

「おはよー、しーちゃん」「誰が救護係だ」

「だって体育大会ずっと救護係だったから」

救護係でもいいじゃん。

「何やってんだ？ おめーら」

「柿の種がおつまみの分際で生活態度の教師気取ってんだ」

酷い言われようだな、ホントに教師なのに。

「小っさい事にもいちいちケチ付けてくるっばいし……どうやって

入るかな。隣の保育園から入るのは最後の手段にしてえんだけど」

そらそつだ。

「おいこら高山あ！ いつまでそこに居るつもりだ！」

あ、気付かれた。

「行ってらっしゃい、純兄」

「何で俺だけなんだよ。明らかにテメエもだろうが、今は」

やっぱり？

「いつまでそこで話しているつもりだと言っている！ ちょっと」

つち来い！」

どーしょ。

『いつてらっしゃーい』

清としーちゃんは何で見捨てる気満々なの！？ 何でこつ丁寧に手

まで振ってくれちゃってんの！？

「よしテメエ等、覚悟しとけよ？」

『い、いつてらっしゃーい………』

冷や汗かきながら頑張るねえ。

「おい高山妹、手首のこれはなんだ！」

「ミサンガですが。見て分かんない？」

「何で学校にこんなものを付けてくる！」

「だって取れないんだもん」

「切れ！」

「願い事叶わなくなっちゃうじゃ〜ん」

「何を願ったんだ！」

え？ えーっと……。

「霊にとりつかれませんように」

「切るぞ」

「駄目！」

何真面目にはさみ出してるの！？ 何で持つてるの！？ 光じゃ

あるまいし！

あ、純兄、先生の手首掴んで……捻る。痛いよ、これ。

「あいたっ」

「駄目つつつてんでしょうが。耳聞こえねんすか？」

あ、純兄の敬語にあらが。そもそも純兄って柿の種に敬語使った
っけ。

「あつ、高山兄！ 首のこれはなんだ！ 今まで気付かなかった！
シャツに隠れてるもんねえ。そりゃ見えんわ。」

「お守りですが何か？」

「何かじゃない！ 取れ！」

あの、手首が変な方向に曲がり始めてるけど、大丈夫？

「これは無理」

「今までつけてなかっただろう！」

「アンタが気付かなかっただけだろ？」

あ、敬語使うのやめた。

「いけいけー！ 誰かは知らないけど怪我の手当てしてくれた先輩
！」

「頑張れセンパイ」

「いいぞ高山兄！」

何か、純兄応援されてるし。

何の応援？ このままもつしばらく門の方がお留守になるように
って意味？

大分いろんな人來てるもんねえー。野次馬だらけだもんねえー。

「いけいけ救護係！」

「救護係は定着してるのか？」
多分。

「高山兄……お前のせいで俺はピーナッツなんか混ぜられたんだぞ
！ 誰が柿ピーだちくしょー！」

酔ってるの？ ショックでおかしくなったの？ 何か今更感しか
しない。

「大丈夫だよ先生！ 僕がピーナッツ食べてあげる！」

『そーゆー問題じゃないだろ』

「てへっ」

誰？

「教頭先生、なんでそこで見てるんですか？」

「何か、見てたくて」

だからって何野次馬に混ざってるの教頭！

「純兄ー、もう柿の種こかせば？ 天体観測の時みたいに」

「ん」

あ、今顔色が変わった人、三年一組だ。

どたん！

あ、ホントにこかした。……あれ？

………柿の種の手に、純兄が付けてたミサンガが。

「あ、やべっ」

「霊体化しちゃった。」

『消えたっ！？』

あー、純兄ピンチ？

「おはよー。……あれ、純は？」

「あ、おはよなつくん。純兄ならこー」

「……居ねえじゃん」

「見えないだけだよ。ちゃんと居るよ！

忍です。」

純兄が霊体化してしまいましたどうしよう。

とりあえず鞆は持ってきてあげたけど……だってほら、純兄が見たら他の人にはカバンが浮いてるように見えちゃうでしょ？

ちよつと気付いたこと言っている？ 服は霊体化するんだね！

何このご都合主義。

「ちよつと忍！ ふざけないですよ！？ どこに純が居るのよっ！」

おー、玲奈。ようやく純兄の名前をするっと言えるようになったかー。

「だから、ちゃんと自分の席に座ってるよ」

「居ないじゃないっ！」

「そこで編みかけミサンガが浮いてるでしょ？ しかも現在進行形で編まれていつてるでしょ？」

柿の種がはさみで切っちゃったっばい。いつの間に。

「……きやあっ！」

「気付いてなかったんかアンタ。」

「これやってるのが純兄だよ」

『きやああっ！』

「あら？ 別にホラーじゃないでしょ？ 知り合いでしょ？」

「この反応を見てどう思います、純兄」

「え？」

「いやえ？ じゃなくて」

「後もう少しでできるから話しかけないでくれるか？」

早っ。

「編むスピードが半端ねえな……。鬼早い」
鬼？ 純兄は鬼じゃないよ。

「高山さん、高山兄って何モン？」

「高山家の長男」

「いやそうじゃなくて」

「言っ方がいいのかな、駄目なのかな。」

「よし、できた」

もう！？

早すぎでしょ。

「人間、やればできるもんだな」

あ、そのミサンガ端っこに留め金ついてるんだ！。

「純兄人間じゃないでしょ？」

「今人間に戻った。だから人間でいんだよ」

『高山兄っ！？』

おー、ミサンガ付けた途端皆に見えるようになった。

「高山くん、あなた何者！？ 幽霊！？ 悪霊！？ 悪魔！？ 大

魔王！？」

「何でどんどん悪くなっていくんだよ」

『いいから答える！』

ちよっとみなさんいいですか？

もう朝のSHRはじまってます。担任来てないけど。

「死神だよ」

っておーい！

「純兄！？ 何あっさり言っちゃってるの！？ 隠してたくせに！」

「いや、なんかもう、霊体化するところ見られたしいっかって」

開き直るな！

なんであたしははぐらかしたんだよさっき！

「ほら、先輩も言っただから。』どーせそのうちバレんだから、あんまりピリピリしない方がいいよ』って」

知らんがな。

『うえええええええ！？』

あ、何かクラスの皆さんが叫んだ。静かだとおもったら驚きのあまり沈黙してたのか。

「純、頭大丈夫か！？ 病院行けビュイン！」

ビュイン？

「脳の精密検査受けておいで！ ほら早く！」

「頭大丈夫だし行かねえよ」

『頭大丈夫な人間が死神宣言なんかするかあああああっ！』

クラスの皆は正論を放った！

「じゃあ別に信じなくていいよ」

『へ？』

「いやだから、信じなくていいってば」

『あ………そう』

何かさっきまでの騒がしさが嘘みたいに静かになったな！。
ざわざわとはしてるけど。

「おい純」

「ん？ 夏か」

「何で今まで言わなかった？」

あ、清まで。

「そっだよー！」

「しかも一度はぐらかしたな？」

桜としーちゃんも。

さあどうする純兄。半眼になって……。

「言っって信じたか？」

『いや』

即答！？

236 ある平和な日の事

「……いいなー、三人ともお兄ちゃん居て」

「そうかな?」「……そう?」「無い物ねだりしてるの?」

光です。

突然佐紀ちゃんが目の前で溜息を吐きました。

お兄ちゃんがどうしたの?」

「はぁー、あたしもカツコよくて優しくてカツコいいお兄ちゃんが欲しいなー」

「別にお兄ちゃんカツコよくないよ? 純くんじゃないし」

「……美代の兄上、ヘタレ……だよ?」

「私のお兄ちゃんは、純お兄ちゃんはカツコいいけど岳お兄ちゃんはたまにしかカツコよくないよ?」

『カツコいいんじゃない?』

えへ。

プラス思考で考えるんだよ。

「なつくんは、……あれ、褒めるところより恨むところの方が多いなあ」

「でしょ?」

「はーちゃん、あっさりうなずいたらなつくんの立場無いんじゃないの?」

私が言ったことが最初だけだね。

「みーちゃんのお兄ちゃんは、……知らないな。ちらっとしか見たことないし」

「……ヘタレ。言うほどカツコよくない……。投げられる」
「投げられる?」

「遊ぶとき……、投げてるの」

「楽しそうでいいじゃん。ウチのお兄ちゃん、色んな物失くすし、何かと言うと笑っただよ?」

十分楽しそうじゃん。主になつくんが。

「もおつ！ 人がお兄ちゃん欲しいなーって言ってる側でお兄ちゃん自慢しないでよー！」

「はーい、ぶつちゃけけなしてる方だと思いまーす」

「あたしにとつてはお兄ちゃんの話は全部自慢なのーっ！」
面倒な人だなあ。

「従兄弟の中でもあたし一番上なのにー……お兄ちゃんちようだい！」

「うーん……」「取り敢えず五百円で……貸す」「駄目」

みーちゃん、レンタル料取るの？

「うー、ピカちゃん、上のお兄ちゃんちようだい」

「純お兄ちゃんは一審駄目。何で純お兄ちゃんなの？」
そもそも何処で会ったの？

「体育大会の時にピカちゃんと話してるの見て一目ぼれ」
そういう意味のちようだいだったの？！

「……面食い」

「面食い佐紀ちゃんだ！ 純くんカツコいーもんねー。断じて好青年、好少年？ 風じゃないけど！」

メンクイって何？ 麵食べるの？ 今の話にどんな関係が？

「びーっだ。どーせ面食いだもんね！ ねえねえピカちゃん、純くん彼女居ないの？」

「きつと居ないよ」

「ホントにホント！？ あ、あの、体育大会の時に一緒に居た女の子は！？」

一緒に居た女の子？ あ、

「それお姉ちゃんだよ」

「よかつたー！」

あ……でも、そういえば。

玲奈さんって人……よくお姉ちゃんから話聞くんだけど、どうなのかな？

どうせなら不安煽ってあげよう。

「ライバルはいるかもしれないけどね」

「嘘」

バツサリ嘘って断言されちゃったよ〜!?

「はーちゃん〜、みーちゃん〜、私って嘘吐き〜?」

「ウチ等以外には割とそーじゃないかな?」

「……まあ、ある意味そうだと」

酷い〜! そんなに嘘ついてないよ〜!?

いつも嘘っぽく事実を言うてるだけだもん〜。

……あ〜、これのせい〜?

237 久し振りの……

「にーちゃん」

「ん？」

「最近さ、トリオ見ねーよな。斬天剣」

「夏休みにも帰って来やしねーしさあー」

「ああ、あいつ等なら今、牢の中で暴れてるぞ」

「はあっ!？」

「いまにーちゃん何て!? 牢とか言っただか!？」

「岳だっ!」

「修学旅行のしおり読んで、何か思い出したから聞いてみたんだけど……。何したあいつ等。」

「今月初めに、無駄に暴れまくって村一つ潰しやがって……」

「何やってんだあいつ等!？」

「確かに、その村の側にある森は火事になってたし、暴れんならその火を消して来いって言われてたのも知ってる。でもだからって村一つ水没させることはねえよなあ」

「水没!? 村が!？」

「そこ住んでる人、大丈夫だったのか……?」

「死ぬ気で助けた」

「あり、にーちゃんが?」

「煽ったの俺だったし……煽ってから不味いと思って行ってみたら案の定大変なことなってるし」

「何やってんだよにーちゃんまで。」

「なんとか減給は免れたから良かったけど」

「そっちが大事なのか!？」

「……あれ?」

「ん?」

「何で死神が消火活動なんかしてんだよ」

「いやだから、霊界であんまり暴れるから、どーせ暴れんならーってことだ」

その霊界で暴れまわってたって所にはどんなのが入るんだろうな

。建物の一つや二つぶっ飛んでんじゃねーの？

「まあ森が消滅するくらいは予想してたけど」

「んじゃ煽るなよっ！」

自然破壊反対っ！

「たーけーるーにいーっ！」

「ぐはあっ」

は、腹が……腹があっ!？

誰だよいきなり頭突きなんかしてくる奴は!？

「あ、たけにいだ」

「……たーにい、大つきい」

そりやーオレだつて成長期だから。背くれー伸びるっての。

修也にや負けん! あ、これは関係ない？

「こらテメエ等。まだ牢に入ってなきゃ駄目だろうが」

「だあつて、暇だし！」

「バナナないし」

「子どもは遊ぶのが仕事だし……」

マトモな事を言ってるような言ってる無いような。

「明日で一ヶ月だろ。明後日になったら出してもらえるんだから、今日明日くらい大人しく入ってる」

あのさ、てかさ、

「牢って抜かれるモンなの？」

「……今まで抜けられた事なんか無いはずだけど」
だよなあ。

「オレの水と斬の氷と、天のバナナよこせパワーでどっかーんだぜい! すげーだろ！」

分かんねーよ。確かになんか凄そうだけど。バナナよこせパワー

つてなんだよ。

「再現するとだな『しなくていい!』ちえ」

この部屋、つてかこの家? を破壊する気がっ!

「みい〜つう〜けたあ〜っ」

『ひっ』

お、いつかの生粋の馬鹿死神。

「斬天剣! もあ〜お逃がさへんよ」

あれ、コイツ関西弁しゃべったっけ?

「純、ちよい手伝つてな。こいつ等俺一人じゃ捕まえられん」

「天はバナナで釣れる。斬は新種の薬草に食いつくし、剣はとりあえず食い物で……」

このトリオ、なんだかんだで単純だよな!。

「なるほど。よし、天!」

「私は戻らないぞ!」

「大人しく牢に戻つたらバナナ十本おごっちゃる!」

「本とですか先輩!」

天がオチた。にしてもバナナ十本もって、

「太っ腹あー」

「一桁じゃつたら文句言いよおけん……」

経験者? じゃあ何でにーちゃんに手伝えとか言つたんだ、バナナで釣れるの分かつてんのに。

あ、この人は捕まえに来た人ほっぽって帰るような生粋の馬鹿だった。

「剣」

お、今度はにーちゃんか。

「オレあ天みてーにはいかねーぜ!」

「今度知り合いが幻想世界の珍料理をご馳走してくれるらしいけど、どこだよ幻想世界つて。」

「一緒に行く!」

「じゃあもう少しだけ牢に入って大人しくしてろ」

「はいッ！」

おもいつきし天みてーにいつてんじゃんかよ。

「よし、残るは斬！」

「……………」

無言。

「ヤマクイ草の根っこ、調達しておいてやるぞ！」

何だよそれ。…………漢字に直したとき、山喰い草、なんてこたーねーよな？

「それ、もう試した…………あまり使えない」

おっと、斬が一番厄介そうじゃん。一番年下の癖に。

「えー…………じゃあ、ソウコク草でどうだっ！」

「試した」

「嘘っ！？ あの超レア草を！？」

なんだよ、超レア草って。

「忍、話それてる」

あり？ その人ねーちゃんとおんなし名前なの？

「ああー、うん、じゃあそうだな…………ラフレシア！」

「臭い。…………そもそも薬草じゃない」

うん、何でラフレシアなんか出してきたんだろーな。

「純！ 俺には手におえない！」

「薬草の知識少なさ」

「ほっとけ！」

「…………実験台、なるなら戻る」

殺す気が。

あ、忍くん動き止った。

「アノ、ボクハネ、エトネ、ジュンクン、ミガワリニナツテクレタ
マエ」

うちの兄貴を殺す気が。

「斬は忍にって言ってる」

「…………別に、どっちでもいい」

たら〜り。

冷や汗が流れると共に一瞬の沈黙。

「純！ ここはやっぱり交流の深いお前が行け！」

「絶対ヤだ。交流を深めるためにテメエが行け」

「くそつ！ そもそも何で俺たちがこんなことを！」

「もういつそ妙羅にやらせりゃよくねえか？」

また沈黙。

パチンツと忍くんが指を鳴らして……。

「その手があったか！」

「いい考えだろ？」

さつきまで争ってたくせに。

協力しようとしたり喧嘩したり仲直りしたり忙しいな。

「ほう」

あ、妙羅。

「部隊長、丁度いいところへ！」

何か偉そ〜な名前だなそれ。

「斬、思い切り人体実験して来い」

「りよ〜かい」

あ、飛び出して行った。

「よし、これで全員戻せるな。サンキュー純！」

「どういたしまして」

ちよつと聞きたいけど、にーちゃんってそこまでしたっけ？

「今日はこつち来いやー。何かおごつちやるけん」

何かおごつてもらうほど何かしたっけ。

「じゃ、行く」

「はぁーい、待ってんで」

あー、行っちゃった。

「よし、何おごつてくれるかは知らんが儲けた」

にーちゃんせこつ。

238 テストは敵

「純、忍！」

あり、清？

「ん」「何？」

「今切羽詰まってるんだ！」

そうか。

『まあガンバレ』

「助けてくれて言ってんだよ！」

言っていないじゃん。

忍です。

間もなく中間テストです。きっと清が助けてほしいのはそこでしょう。

「数学？ 二次方程式位解けなきゃー」

「ん、二次関数位簡単だろ？」

「おめー等ぶっ飛ばすぞコラアッ！」

それ頼む奴の態度じゃなーい。

「忍〜！ お願〜い、理科教えて！」

桜まで。

「あー、イオンややすいよねー。あ、酸とアルカリも入ってたっけ。アルカリは人間溶かすんだってー」

「タンパク質だろ」

あれ？ 実験の時に理科の先生が『溶けないように気を付けて扱ってねっ』とか言うから人間溶かすのかと思ってたよ。

「しいいのおおぶうう！」

「ぎゃあっ！ しーちゃん！ 怖い！」

いきなり突進なんかしてくるなっ！

「英語教える！」

命令形！？

「純兄に言った方がいいんじゃないの？」

「純は間違いないけど清だけで手一杯だ。アレの数学の苦手さを侮つてはいけない！」

別に侮つてはないけどさあ……一応二年半は一緒に居るんだし。

「てか清、こんだけきっぱりと言いつけられとて何も言わないの？」

「いやー、だつてほら、事実じゃん？」

うわー、認めてるー。

「でもさ、数学できねーと受験ヤバいじゃん？」

「何でそれを一年前に気づかなかつた」

そだよ、純兄の言う通りだ。

「オレは今しか見ねーんだよ！」

『開き直るな』

「と、とにかっ！ さっき受験つて言つてたから未来見てるよね」

「あ」

ざ・矛盾。

「と、とにかっ！ 教えろっ！ つつかテメーの脳味噌寄こせ、

純！」

怖いこと言わないで。

「俺の脳味噌やつたらテメエが俺になるぞ？ つまりテメエの存在

がなくな「やつぱいいっ！」

そんな慌てて取り消さなくても。本当にやるわけじゃあるまいし。

「ちなみに清、意味わかつてる？」

「分かんねーけど何かぞつとした」

生存本能とか言うやつか。

「と、とにかく！ 数学教えてくれ！ ついでに他のもよろしく！」

「他のやつてる暇があんのか？」

「そこには突つ込むな！」

無いんだ。

「何処が分かんないんだよ。数学なんか覚える事少しだろ？」

「計算が無理！ 暗算とか超遅い！」

「帰れ」

「今まだ昼休みだぞ!？」

大丈夫だよ。五時間目家庭科で、六時間目総合なんだから。何がどう大丈夫かは知らんけど。

「んだからさー、二兎法律なんかどうやって解くんだよ!」

「何だよ二兎法律って。二兎の法律か？」

「どんな法律、それ。」

「忍、イオンって何？」

「桜!？ 何、そこから!？」

「まさか」。数学中の清くんじゃあるまいし」

「良かった!」。

「で、イオンって何？」

「分かってないんじゃないか! 電気を帯びた原子だよ!」

+ の電気を帯びたのが陽イオン、- の電気帯びたのが陰イオン!

「あゝ、あの、先生が丸かいてその周りにさらにぐるぐる書いてたあれか」

……原子核と周りの電子の事かな?

「忍、これ何語？」

あたし等の生活の中で、しかも授業で配られた宿題に書かれてるのは日本語か英語のどっちかでしょうが。

『I know how to play the piano.』

私はピアノの弾き方を知っている、か。

「んと、英語だけどこが分からない？」

「全部!」

「いい、これが?で、私は、私がって意味」

「それは分かってる!」

だって全部分からないって言ったじゃん。

「knowは分かるよね」

「知っている」

「そ。んで、how to」

「何語？」

英語だつてば。

「の仕方、でしょ。こないだやった。ね、忍、物体を上を持ち上げる仕事をした時、持ち上げる力と同じ大きさの、下向きに働く力って何？」

重力でしょ？

「ってか、いつイオンから仕事に変えたの。」

「桜、なんで今地球に立つてられる？」

「立ってちゃいけないの！？」

「そうじゃなくて！」

「地球でき、ジャンプしてもすぐ落ちるでしょ？ 何が働いてるから？」

「えーと」

「ほら、なんで筆箱は下に落ちるの？」

「重力だ！」

「そゆこと」

「お〜」

「ところで桜、何やってるの？ ワーク？」

「このワーク、わたしまだ二十ページもあるんだよ！ テスト終わった後に提出とか酷いね〜」

「ソナナノ、アッタツケ」

「何だ忍、忘れてたのか？」

ピンチ。

239 ある八つ時の蛍光灯

忍です。

今日は珍しく兄妹そろって仲良くお八つ食べています。

せんべいと牛乳。だれだこんな妙な組み合わせにしたの。

「……………あ」

「ぺか〜っ……………ぺかぺか〜っ」

「見てて哀しくなるモノの一つだよねー」

「そうか？」

さあ、何を見て会話してるでしょう。先に断わっておくとお八つではありません。

答えは台所の切れかかった蛍光灯です。

ほら、みてて哀しくならない？ 一つだけ光っては消え光っては消えしてるヤツ。

ちなみに他の見てて悲しくなるモノは、んーと、たとえば電池が切れかかって途中から上に行けなくなってる時計とかかな。

「これって替えあつたっけ」

「無いよ〜。こないだうつかり折っちゃった〜」

『何やつた!?!』

どうやったたら『うつかり』蛍光灯なんか折るの!?!

「ん〜とね〜、はーちゃんがばしゅーんで〜、さっちゃんがどどーんで〜、みーちゃんがみよお〜んで〜、私がほりらんだよ〜」

何と不思議な効果音でしょう。

「春がばしゅーんはなんとなく分かった。さっちゃんと美代がどうしたって？ つつかさっちゃんて誰だ。バナナが大好きな童謡の子か？」

バナナが大好き、ってところで天を頭に浮かべてしまった。サッちゃんだったね、はい。

「さっちゃんね〜、同じクラスの子で〜、変なあだ名付けるのが

趣味の女の子だよ」

「ん、そか」

「好きなタイプはね」

「誰もそこまで聞いてねえよ」

「純お兄ちゃんだって」

接点あるの？ ってか意外にモテるのねこの兄。

ぶっちゃけ小四にそんなこと言われても困るだけだと思うけど。

「ん、光、そのさっちゃんとかやらに謝っとけ」

「え、可哀そう、さっちゃん。人生できっかり五十回目の一目惚れなのに。記念すべきなのに」

さっちゃん、あんたはどんだけ惚れっばいんだ。惚れすぎだろ明らか。

「で、話戻すぜ？ 何があっただよここで」

「だ、か、ら、はーちゃんがばしゅーんで、さっちゃんがどどーんで、みーちゃんがみよおーんで、私がほらりらんだよ」
「ふむ、はーちゃんがばしゅーんでさっちゃんがどーんでみーちゃんがみよんで光がぬらりひょん？ 何か違う。」

「分かるかあっ！」

「春が猛スピードで何か繰り出して、さっちゃんが四股ふんで、美代が跳んで、光がそれを楽しんで見てた、とか？」

『兄ちゃんすげえ』

どうやったら分かるの！？

なんつか違う気がするけど。特にさっちゃんが四股ふむとこ。

「ちつつち、違うなあ。はーちゃんはね、凄いスピードで一直線上に跳び回って暴れてたんだよ」

イノシシを連想した。

「さっちゃんは椅子の上に立ってえへんってしてて」

『女王様とお呼び！』って感じなセリフを思い出した。

「みーちゃんが中腰でちよろちよろしながら椅子の下から顔だししたりしてて」

プレーリードッグが頭の中に登場した。

「私は色んなことをほやくとやってたんだよ〜」

プレーリードッグがほやくとお茶を飲んでる映像がめっちゃ鮮明に頭の中に展開した。

えーっと、何の話してたんだっけ。

「それでどーやって蛍光灯折ったんだよ!？」

ああ、それだそれだ。

「はーちゃんがばしゅーんで補完してた地下倉庫開けちゃって〜」

……ん？ はーちゃんなら閉めるでしょ、うっかり開けたところ以外。

「どうやって開けたんだ？ 跳び回るだけで」

「私が引つかかるように取っ手立てといたの〜」

ほらりらんが最初に来るのか。どこがどうほらりらんなんか分からんけど。

「で〜、みーちゃんがうつかりその中に落ちちゃって〜」

そんなにスカスカだったっけ。

「そしたら蛍光灯見つけてさっちゃんに献上したら〜」
献上で。

「さっちゃんが受け取り損ねて落としちゃって〜」
椅子から降りるよ。

「で〜、それを取ろうとして椅子から降りたらうつかり蛍光灯の上に降りちゃって〜。ポキッ」

やっぱ降りるな。もう遅いか。

「そか」

「どーするよ、この蛍光灯」

「ほっといても害はねえだろ。あ、親父がこっそり買ったと思われ
る豚まん発見」

『グッジョブ!』

冷蔵庫にドンと入れてる時点でこっそりじゃないけどねー。

あー、せんべいと牛乳意外と会うかも。

240 お兄ちゃんと似てるト」

「っもう！ 何なのよ放射線って！」

「ある一点を中心に放射状に広がってる線のことだろ」

「違うわよっ！」

「ん？ 放射性物質から放出されるアルファ線、ベータ線、ガンマ線の総称の方が」

「違うって言うてんのよ！ というか、何で知ってるのよ！ 習ってないでしょう!？」

おー、扉閉めてる筈なのにめっさ声聞こえてくる。玲奈って喉強
いよね。

忍でーす。

今必死になって理科のワークやってます。くそ、まさか理科に宿題があったとは……。テストの日に提出だっつてさ。

しかも今になって数学にもワークがあることが判明。頑張らないと絶対提出できません。

純兄は自分の部屋で、玲奈と、声は聞こえてないけど清に数学を教えています。放射線関係ありません。

多分放物線の事だね。二次関数も範囲入ってるし。

「純、ちよっと思っただけだよー。ぶっっちゃけ数学ってどこで使うんだよ」

「そのうち分かるからさっさと問九やれ」

そのうちっていつ。

えーと、アルカリの水溶液に必ず入っているイオンは 水酸化物イオンと。

「お菓子持ってきたよ」

「おー、サンキュー光ちゃん、兄貴には似んなよ!」

「あはは、清くん、無駄な足掻き頑張ってるね。玲奈お姉さんはテスト頑張ってるね」

「何で毒突く!？」「あ、ありがとつ、光ちゃん」

玲奈お姉さん？ 桜は桜ちゃんだったと思うんだけど。それにしてもお菓子かー、大丈夫なのかなあ。

「ね〜、お姉ちゃん〜」

「どわっ！ いつの間に背後に……」

「人を幽霊みたいに言わないですよ〜」

大丈夫、幽霊なら蹴りかかるから。あたしは。

「ね〜、お姉ちゃん〜。私って純お兄ちゃんに似てない〜？」
え？

「清くんにね〜、兄貴に似るなよ〜って言われたから〜」

あー、似てたらそんなこと言われないつて？

んー。

「怒らせたら怖い所は似てる」

「……お兄ちゃんほどじゃないよ〜」

うん。なつちゃだめだよ？

「お姉ちゃんは本気で怒ったらお兄ちゃんにそっくりなのにな〜」
嘘だ。絶対嘘だ。あそこまではなれんて。

「ね〜ね〜、他は〜？」

「えー？ うーん……。若干くせつけなととこか」

「そう言うのじゃなくて〜。性格みたいなところ〜！」

難しい質問を。

「んじゃ、ハマったことはずっとやり続けるところとかかな」

「……よく分かんない〜」

「純兄はパズル、光は（変なモノ入れた）料理。何だかんだですー
つとやってるでしょ？」

「料理の前が聞こえなかつたな〜」

聞こえなくていいよ。聞かなくていいよ。

そういえば純兄はいつからパズルハマってたかなあ。

光が変なモノ料理に入れ始めたのは確か三歳くらいの時だったけ
ど。

「ぶはっ、げほっ、がほっ」

「ちよ、ちよつと!？ 大丈夫!？ べ、別に心配なんかしてないんだからねっ!」

……あの。

「光さん、さつき出したお菓子に何入れました?」

「クッキーにね、小麦粉を包んだの」

「何やってんだホントに。意味あるのかそれ。」

「清、粉をまき散らすな。掃除がめんどくせえだろうが」

「げほっ、こんなことする方がめんどくさくね!？」

「ごもつとも。あ、

「楽しそうな事だったらめんどくさがらないのも似てるかな」

後、ちゃんと毎日家でも勉強するところとか。

偉いなあ、宿題家でするなんて。あたしなんか全部学校でやってたのに。

「そっか。ちゃんと似てるもんね、私」

「うん、似てる似てる」

えーと、アルカリの性質を持つ水溶液にーってこれはさっきやった問題じゃん。

「ななな、純、コレどーやって解くんだ?」

「先ずそれぞれの縦、横、まとまりに入っている数字見て」

「は?」

数独でしょ、それ。

人に教えながら自分はパズルしてんのか、おい。

「ん、どれだ?」

「問十一!」

おお、問九と十は自力で解けたんだ!

「わ、私にも教えなさいよ問十一っ! わ、分からないわけじゃないんだからねっ!」

分かってたら聞かないでしょ。

「ね、お姉ちゃん。ベッドの上側の壁に穴開いてるよ?」

「嘘？」

「ホントだよ。何か小人さんなら通れそうなくらいの小っちゃい穴」

小っちゃくねえよ。壁の穴にしちゃ十分でけえよ。

妙に純兄達の部屋の声聞こえると思ったら……。

「おや、忍殿」

「ごめん、一七法師。床に穴が開かないうちに外行つてくれる？」

「いきなりそれでござるか!？」

「その穴何？ 八つ橋あげないよ？」

「はっはっは、それはもういいのでござる。爺婆の事はもう忘れたのでござる」

忘れんなよ。

「ではさらばでござるっ！」

しゅばつとか音立ててどこ消えた!？

忍者かお前!

……あれ？ 何かお隣のベランダに見覚えのない穴が。忍者にはなれんな。

「ちゃんと修理代払いなさ〜い」
にこっつ。

「わ、わ、分かったでござるうっ！」

……笑顔が怖い所も似てるな。

241 給食中の四人組

いただきます。

「むむむ……」

「どうした岳、毒キノコでも食ったような顔しやがって」

「真剣な顔してんだよ馬鹿っ！」

「真剣な顔が珍しすぎて、つい。」

修也だよ。

かったりい午前の授業が終わって、給食の時間。

いつもみたいに突っかかってこないと思ったら……あん？ いつも追いかけてるのは俺だって？ そうなるようにけしかけてくるのは岳だから。

今はまだ給食の時間だからだって？ いつもはこの時間に挑発してくるんだよ。で、給食終わりのチャイムと同時に追いかけてこが始まるんだ。

「ねえねえ、修也。岳くん、おかしいよ」

「おかしいのはいつものこったる」

「真剣すぎておかしいよ！」

「激しく同意」

さすが奈那子。

「なー、修也、翔、奈那子さん」

「岳くん、なんであたしにさん付けなの？」

此間、奈那子を名前で呼ぶようになってから気になってたんだ、俺も。

そして今は何でにやにやしてるのかが気になってるんだ。

「いやー、ほらさ？ 彼氏以外に呼び捨てされたくねーかなーつと、オレなりの配慮な訳よ。んだから、大人しくさん付けされといて。そっちだっくん付けな訳だし」

余計な配慮だ！ いらん！ 全く持っていらん！ イランは関係

ないぞ。

「おーい、岳何言おうとしてたんだ？」

「あ、そうそう。それぞれ。あのさ、オレ等さ、小六じゃん？」

うん、そうだな。

「んでさ、今、もう十月じゃん？」

ああ、うん、そういえば。

「後何気に小学校生活半年しか残ってねーじゃん！ って思った訳
よ」

うわ、本当だ。六年もあるのに。

「んでさ、おめー等、中学行ったら何部入んの？」

『今までの話関係なくね！？』

「どうやったたら『小学校生活残り半年しかねえじゃん！』から『中
学で何部入んの？』になるんだ！？」

「だって気になったから」

『……………』

岳の思考って分かりにくい。

「翔は？」

「おれは野球部かな」

「あんなん投げて打って走るだけじゃね？」

「はあ！？ 聞いたいてなんだよそれ！」

「奈那子さんは？」

「スルーか！？」

そして翔の扱いが最近酷え。

「うーん、あたしは……………」

何でこっち見るんだよ。

俺は別に入りたいのなんか……………あ、いや、んえと。

「す、吹奏楽……………かな？ 決めた訳じゃないんだけど……………っ。しゅ、
修也は？」

「俺も同じ」

「ほんとうっ？」

「ほんと」

……おい岳。何で半眼になってんだ？

おい翔、何で牛乳でむせてんだ？

「ちよつと、お二人さん、ラブラブなのは結構ですがね、もうちよつとそのピンクオーラをね、抑えて、ね？」

「何言つてやがんだお前！」

別にそんなんじゃ……。

「げほつ、げほつ！ あのげほごほつ、しゅがほつ、あのなつ、おれ言いたい事あんだけど、言っつていい？」

「何だよ」

「リア充爆発しろ！」

はぁ？

「リアルに充実してる奴、略してリア充だよ！」

聞いてねえよ。何だそれとは思っただけど。

「たたた、岳くんはっ？」

よし、ナイスだ奈那子。よく分からない、でもってからかわれそうな話はさっさと終わらせよう。

「ん？ オレ？ 参考に聞いたんだよ。兄ちゃんも姉ちゃんも部活やってねーから、中学のはよく分かんなくってさー」

兄さん姉さんから以外にも情報は手に入るんじゃ……。

「岳つて何部入つてた？」

「一応バスケ部だぜー。でもオレ、球技はそんな得意じゃねーんだよな。野球とかやったことねーし」

『マジで！？』

野球やったことない奴なんて居たのか！？

と言うかそれ以前に、岳に苦手なものがあつたのか……。あ、いや、兄さんも苦手なんだっけ。自分にプレッシャーかけるのに使っくらいだし。

ええつとー、純さんだっけ？

「んじゃーさ、一緒に野球部入ろうぜ！ そしたら球技得意になる

「かもしんねーじゃん」

「うん、考えとく」

「考えるだけか、おい。」

「それにしても、岳くんがスポーツで苦手なモノなんてあったんだね！」

「ん？ 球技はうちの家系全体的に得意じゃねーんだよな。兄ちゃんも姉ちゃんも妹も」

「嘘！？」

「以外だ……」

「岳の姉さん、三年の時に見たことがあるんだけど……ゴキブリにテニスボール投げつけて潰してたぞ？ なのに球技得意じゃない？」

「ありえねえ。」

「お手玉はできるんだけどな」

「それはあまり関係ない」

「あ、やつぱし？ まあうん、オレン家は武闘派なんだな、きつとそれはまあ、五百%認めるが。きつとなんかじゃねえぞそれ。」

「水中って格闘技の部活ないんだよな」

「そういえば。」

「つてか、あつたら兄ちゃんも姉ちゃんも入ってんだろな」

「勧誘されまくってそうだな。」

「あ、そーそー、そういえばな。兄ちゃんと姉ちゃんが迷惑してるつていうオカルト部つてのがあるらしいぜ」

「オカルト？ ……オカルト、部？」

「ま、自称部活のオタク集団らしいけど」

「ああ、なんだ。本当にそんな部活があるのかと思った。」

「勧誘には気を付けるだつてさー」

「そんなんされるのはお前だけだろ」

「見えるんだろ？ 奈那子が怖がるから口には出さないけど。」

「あ、奈那子さんの右隣に……」

「がたんっ！」

痛い痛い、しがみ付くところ間違えてるぞおい。

「なな、何！？ あたしの右隣が、何なの！？」

「空気がある」

「起こるよ！？」

「おー、んじゃ、今日は修也じゃなくて奈那子さんと追っかけっ
するか」

……ちょうどチャイムも鳴ったし、ってか？

「ちこそうなままでした。」

242 誰だって喧嘩はする

「忍」

「……ん？ 桜」

「どうしたの？」

「何が」

「テンション低いんだもん」

高山妹のテンションなんていっつも違うじゃねえかよ。
岬だ。

断じて美咲ではない。だんっじて！

朝のSHRが終わって、一時間目までの小休憩。

高山妹は何かぼーっとしてるし、高山兄はSHR終わった瞬間どっか消えるし。ああいや、本とにパツと消えたわけじゃないぞ？

「忍」？ 何か暗いよ？」

「んー、そうか？」

口調が変。まるで高山兄だ。なんっか違うけど。

「何かあったの？」

「……別に」

どうしよう、急に怖くなって来た。

だって名に高山妹が暗すぎるから。

なあ、何で無表情崩さねえの？ 高山兄のまねでもしてるのか？
だとしたら結構似てるからもう止める！

あんなのは二人もいらん。

「あつれー？ 岬、純知らねーか？」

あん？ 高崎か。

「どっか行っただけど」

「う、嘘だろ……数学の宿題写させてもらおうと思ったのに！？」

自分でやれよそんなん。俺も基本誰かの写しだけ。あ、今回は自分でやったからな！？

「あ、戻って来た。おーい純！」

キーン コーン カーン コーン

あ。

「嘘だろ……」

大丈夫、数学は五時間目だから。

「じゃあね〜、忍」

じゃあねって、お前の席高山妹の後ろだろ。

何でわざわざ前に行ったんだ、山内。

「ん」

「あれ、純くん。何処行つてたの？」

「一階」

なんてアバウトな。

「ね〜村田くん。どうしたのかな、忍」

「いや、俺に聞くなよ」

「だって隣に居るんだもん」

確かに俺の席は通路挟んで隣だけど……。

「本人に聞けよ」

「別について言うんだもん〜」

「高山兄は」

「同じ答えするんだもん〜」

いつ聞いた!?

「あーい、あーい、授業始めるぞー……」

先生の顔が強張っていく、ついでにクラスの全員の顔は既に強張った後。

だって、な？

夏休み終わった直後にくじで決めた今の席、高山兄妹は横に並んでいて、そこはクラスの丁度中心。

で、何故か今、そこから『ざ・険悪』って感じのオーラが出てたら……なあ？ 顔の一つや二つ、強張るだろ？

いや、一人一つしかねえけどよ。

「ええーつと、授業、始めて、いいのかな？」
戸惑うなよ。

「あ、あの、高山？」

『どっち』

「いや、両方……どうしたの？」

『別に』

「いや別にじゃなくてね……。聞かせてくれないかな」

『こいつに聞け』

怖い、一々怖い。

何でわざっわざハモる訳！？ で、何かいつもより声のトーン低いぞー！？

仕草までシンメトリーで同じだし……。そっぽ向いたり、相手指したり。

何か、本当に兄妹なんだなって改めて思うな。……いや、険悪すぎて思えねえ。前言撤回。

「じゃ、じゃあ高山さん、何があったの？」

「このクソ兄貴に聞け」

高山妹、マジで何があった。

「高山くん……」

「このクソ妹に聞け」

腕組みしてそっぽ向く。うわー、きつちりシンメトリー！。

身長差が結構あるのがちょっと残念。……いや、そんなのんきな事考えてられねえや。

「ええつとー」

「せんせー、この二人、ただの兄妹喧嘩ね。いい？」

海中……ただのだった？

『ただの兄妹喧嘩でここまで周りを巻き込むかあああああつ！』
「巻き込んでるつもりは無いと思うけど……。なあ？」

さすが幼馴染。

「忍、ほれ、何があった？」

「ん……純兄の留守中にさ、D○のパズルゲーム見つけてやってみたんだ」

ああ、いつも通りに戻った。

「で、余に難しすぎて凄くムカついて……ゲーム機叩き割っちゃって」

そら高山兄も怒るわ。

「そこまでならいいんだけど」

よくねえよ!? どころもよくねえよ!?

「壊した衝撃が何か分からないんだけど、データ全部消えちゃってそりゃあ怒るだろうな……」。

「で、ちゃんと謝ったのに怒られてさらにムカついて殴る蹴るアリの喧嘩になって」

……………

「で、純兄に負けてさらにさらにムカついて今に至る」
勝てたらすげえよ。

「ふんふん、純?」

「あのゲーム最初は簡単すぎて面白くねえんだよ。せつかくいいところまで行ったのに」

なんか……高山兄も所詮中学生なんだなーとか思ってしまった。

「そか。んじゃそのゲーム俺に貸して? やってみたい」

『どうやったたらそんな流れになるんだよ!?!?』

「ここをこー、こーやったら」

身振り手振りでこー、こーやったら、と表現してくれてるけど、分からん。

「ま、そゆことで、先生どーぞ授業始めちゃって」

「え? あ、ああ、うん」

……………どうせならこのまま授業潰れた方が良かった。

オマケ

「純デメエ、これの何処が簡単だよ！？ めちゃくちゃ難しいじゃねえか！」

「だからなっくん、言ったじゃん。ムカつくほど難しいって。あたしやったの、新しいデータだよ？」

「聞いてねえっ！」

……前言撤回。やっぱり高山兄って中学生じゃない気がする。

243 黒いX

「……十円の飴と二十円の飴、どう違うんだよ」
なあ、どー違うんだよ。

岳だ。

明日から修学旅行！ つー訳で近所の駄菓子屋におやつ買いに来てんだ。

ん？ 修也達なら居ねーぞ。だってさ、やっぱりおやつ交換の時に楽しみは取っとくもんじゃない。

ちなみに、バナナはおやつに入るらしい。

「もっついっそバナナばかり持ってってやるーかな」

「だめ！ それは絶対だめよ岳ちゃん！」

「んあ？ あ、飴ちゃん姉ちゃん」

語呂悪いかな。

店の奥から出てきた女子大生、本名は忘れたけど、店の名前が『ミタチ』だからミタチって名字なんじゃねーのかな。

「いつも飴食ってっから、飴ちゃん姉ちゃん。」

「なんでバナナ駄目なんだよ？」

「だってバナナはうちに置いてないんだもの！」

なんちゅー理由。

「ほら、修学旅行のおやつなんでしょ？ だったらこの棒付き飴がおススメよ！」

「棒付き禁止なんだってさ」

しおりに書かれてたおやつのは飴はぺろぺろキャンディだったんだけどな。

「ふーん、じゃあこっちの新発売！ 黒い物体X飴は！？」

「何だよ黒い物体Xって！？」

正直すぎだろ商品名！

「Xは分からないモノを現すの」

「わけわからんモン進めんなよ！」

実験台かオレは！

「ちよつと怖くて食べられなくって……」

ほんとに実験台かよ！

「飴なら何でも食らいつくすって言ってたじゃんか！」

「二年前の話でしょ！？ 記憶力良いね岳ちゃん！」

何か印象的だったから。

「と、とにかくほら、コレのお金はいらないから……ね？ 食べてみてよ」

「ね？ じゃねーよ！ そんな怖ーモン食えるかよ！ 腹壊したら

洒落になんねーぞ！ せつかくの修学旅行なのに！」

「お腹壊したらお薬サービスするから！」

「んなサービスいらねーよ！？ ってか置いてんのか！？」

駄菓子屋に！？

「ううん、お姉さん家の」

なんだ……びっくりした。

「ところで岳ちゃん」

「あん？」

「これ食べて お姉さんのサービス」

何だよこの飴。黒っ。

「コーラ味か？ ……にしちゃ黒すぎるし……」。

「飴ちゃん姉ちゃん、これ、黒い物体×飴じゃ……」

「ううん！ 違っよ、これは新発売のブラックキャンディ」

「どっちにしる黒じゃねーか！」

うわー、何か、鏡並に光ってて不気味なんだけど。顔映ってるし。

「ほら、噛んだら黒くなるガムあるでしょ。あれの飴ちゃん版よ」

あやしー。

「まあ食べてみてよって」

口ん中突っ込まれた！ あぐ。

「あ、へっほーんめえ」

「ほんと!?!」

おいこら。

「へー。美味しいんだ。この黒い物体X飴」

「やっぱりひか!?!」

んー、でもうめーし、いいや。

……うめーけど、何味だこれ。

何か、例えようの無い味だ、とだけ言っとくけど……。

「飴ちゃん姉ちゃん、これの包み紙見せてくれよ」

……あれ?

「何で口抑えて蹲ってた?」

「まままま」

まままま? えー、と。

「魔神!」

「しりとりじゃなっ……うぶ」

あん?

「どーしたんだよ」

「まままま」

「ままままじゃわかんねーよ」

「不味いつ!」

はあ? めっちゃうめーじゃん

「何コレ! よく食べられるねこんなの!?!」

「はあ?」

あ、それっぽい包み紙めつけた。

えーと、原材料は……書いてない!? なんで!?

本来なら原材料が書かれてるところには……。

「味の感じ方には個人差があります」

いや、薬の効き方じゃねーんだぞ?

「次作をお楽しみに」

どーゆーこつちやい。

「あ、そうそう、分量適当なので毎回味が違うかもっ」

かもつ じゃねーよ！ 適当にすんな！ 機械で作ってんじゃねーのかよ！

『でも一回目で旨いと思った君なら大丈夫！』

何で励まされてんだ！？

『ではは^^』

何で途中から話し言葉になっただよ！

「…… 飴ちゃん姉ちゃん、大丈夫か？」

「うん。うん、おさまった……」

旨いんだけどなあ。これじゃあんまり交換できねーよな……。

うーん、でもやつぱ持つてきたいし……。

「飴ちゃん姉ちゃん、黒い物体×飴とポッキーくれ」

うん、我慢できん。

「はい。あ、笛ラムネどう？」

「あ、欲しい」

「はいはい、全部で二百円ね」

お、ぴったり。二百円以内なんだから二百円もいんだよな。

にしても…… 黒い物体×飴、略してエク飴、五円なのか？ 安っ。

「岳ちゃん……」

「あん？」

「お腹壊す前に食べるのやめた方がいいよ！？」

進めたの誰だよ、エク飴。

244 バス内の四人組

「ひゃっほー」

「暗い声でそんなこと言われたら戸惑っただけだぜ？　おい、岳、聞いてんのか」

「昨日ちよつとはしやぎすぎて」

「ガキか」

「オレ等ガキじゃん」

「認めなくもない」

「認めたくもない？」

奈那子だよつ。一文字違っただけで大分違っただねって今ちよつと実感したよ！

それはともかく、今日はやつと！　修学旅行なんだ！　バスに揺られてどんぶらこ〜ってこれは桃だね。

もうそろそろお菓子食べていい時間だね？　ね？　聞いても分からないか。

んとねー、あたしと、修也と、岳くと翔くんは一番後ろの横並び！　くじで決めたのに凄くない？　むかって右から、翔くん、あたし、修也、岳くん！　……と、眼鏡で超大人しい、クラス一頭い子、雄川^{おがわ}くん。ここだけの話、雄川くんは運動音痴だよ。

「なあなあ、飴食う？」

「貰……何だよ黒い物体×飴って！？」

「うめーぞ、エク飴」

「エクレアみたいに言うな！」

普通に怖いんだけど、その飴。何この黒さ、まるで弾丸。弾丸って黒いのかどうかは知らないけど。

あれ、前にアニメで見たのは金色だったなあ。

「奈那子さんいる？」

「居るよ！　何でそんな事聞かれなきゃいけないの！？」

そんなに影薄い!?

「そんなこた誰も言うちよらん。エク飴いるかって聞いてんだ」

「あ、それなら欲しい……何処の人？」

「およ、知らなかったか？ オレってば山口に住んでたんだぜー。
二年始まるまで」

……あつ、そういえばそうだった！ 山口からくとは聞いてないけどね。

それはそうとエク飴、意外と美味しいんだなー。

「修也、美味しいね、これ」

「うん」

「へへ、だろー？ 毎回ちよっぴり味違うんだぜ、コレ」

へえ、どうやって作ってるんだろ。機械で作ったら同じ味になりそうなのに。

「……うぷっ」

「ちょ、ちよつと翔くん大丈夫!? バス酔い？」

「エチケット袋なら目の前席の網にあるぞ」

あ、ホントだ。ありがと修也っ！ ってあたしじゃないのよ！

「何この飴……、まっずっ」

『嘘っ!?!』

こんなに美味しいのに!?

「うえ……っ」

雄川くん!? 不味いの!? って言う前に食べてたの!?

「雄川もか？ ほれ、エチケット袋。吐くか頑張っつて押し込むかど
つちだ!? ああっ!?!」

「何の脅迫してんだよ、岳」

「やって見たくて」

やって見たくて……。

「あふ、ふ、ふう……ありがと奈那子さん、もう大丈夫……の筈、
おれ寝るわ……」

「そ、そう。お休みなさい?」

「うー、お休み」

「気持ち悪う」って呟いてから寝るんだ。わざわざ。

「ちよつと岳くん、この飴どうなってるの？」

「ほれ、見るかー？ 袋」

あ、おつきいパツク……ちゃんと二百円に収まってるの？ えーと、確かこの白い表に名称とか賞味期限とか原材料名とか書かれてるんだよね！

『名称：黒い飴』

何て！？ 黒い飴！？ 『黒い』はいらないでしょ明らかに！

『原材料名・自分の舌で当ててみな』

「無理よっ！」

「どうした奈那子」

あ、声に出た……。

「この飴の、原材料名」

見せてみたら、何かイラっとしたような顔になって……何で岳くんを殴ったんだらう。

「おおい、危ねーなー。仮にもバスン中だぞ！」

本当にバスなただけ。危ないとか言いながらもちゃんと受けてたよね？ そしてノリでバスの中で追いかけてこしようとしかけたよね！？

「もー」

でも見てて楽しいし、強大な敵（岳くん）に立ち向かう勇者（修也）がカッコいいから『やれやれー』って言いそうになったのは内緒。

んと、何か続きがあるな……。

『味の感じ方には個人差があります。次作をお楽しみに。』

あ、そうそう、分量適当なので毎回味が違うかもっ でも一回

目で旨いと思っただ君なら大丈夫！

ではでは^^^』

何処から突っ込めばいいの!?

もう順番に箇条書きで行くよっ！

・個人差って何！？

・アニメの次回予告じゃないのよ！

・分量適当で飴って出来るものなの！？

・何がどう大丈夫なの！？

・誰に向かって話してるのよ！

こんなところかな。

えーと、次の項目は……。

『賞味期限・あはっ』

怖っ！？ 何で笑ってるの！？ ねえ何で！？ 何で！？ 修也

あっ！

「岳くん嫌い！」

「何でっ！？」

これでも喰らえーっ！ 飴入り袋アタック！ 顔面に綺麗に決まりました！ はい良かったねうん良かったよ、これで強大な敵は倒せたよ何処が強大だったのそれはともかくよかったね私の勇者様その名も修也あ！

「……いろいろな意味で奈那子が暴走してる」

「修也、飴って結構痛えんだな」

あはっ。

245 いん・きょうと だぜっ！

「うおーっ！ すげー！ なんてーか、とにかくすげーっ！」

「すげえーっ！」

「すっごーい！」

「お前等おんなじこと連呼するの好きだな！？ すげー」

修也だつてノッてんじゃんか。

岳だ！

清水の舞台から景色眺めてんだ。うん、目に良さそー、緑がいっぱい。

「あ、そーいや岳、今日誕生日じゃなかったっけ」

「んあ？ おー、うん、そだった。修也覚えてくれてたんだな！」

ちよつと感動。

十月六日な、ちなみに。

「十二になった記念に飛び降りてみるよ」

オレの感動を返せ！

「冗談じゃねーよ！ いきなり死ねと！？」

「大丈夫、生存率は結構高いから」

「そー言う問題じゃねーんだよ！」

「ほらほら」

ほらほらじゃねーよ！？ 何落とそーとしてんだよ teme me !

「飛び降り禁止令つて出てんだぞ！ 知ってんのか！？」

「そりゃま、事前学習で調べたし」

「じゃあ落とそーとしてんじゃねーよ！」

「ばーか、マジで落とす訳ねえだろ」

落とされてたまるか！

「捕まるの嫌だし」

「 teme me の問題か！？」

修也つて意外と思つた事口に出すよな……。

「あ、でも生き残ったら願いがかなうって。ちょっと飛び降りてみるよ」

「結局落とす気が!? 自分が行けよ!」

「嫌だ。いくらここから飛び降りて死んでも成仏できるからって自殺したら成仏できるわけが……あれ、どっちなんだろうな、これって」

「こんにやろ。勝手に話変えてんじゃねーよ。」

「修也ー! 音羽の灌行こう?」

「奈那子さあん、モロに話変えんなよ。」

「なあ翔」

「何?」

「ちよつとお前こつから飛び降りて」

「何で!?!」

「よし、オレも音羽の灌行こつと。」

「なあ翔」

「うー、何?」

「音羽の灌って何だっけ」

「確か三つあってー?」

「ほら、あれでしょ。三つの筋から流れてて、健康、美容、出世の御利益があるんだよ。……健康、学業、縁結びって書いてある資料もあつたけどさ……」

「よっしゃ、行くぞ!」

「……あれ? 確か、三つ全部飲んだらご利益って無くなるんじゃないなかつたっけ。」

「先に思い出してよかったあー!」

「柄え長っ」

「汲み過ぎたら柄杓落したりして。てこの原理で。」

「出世が左端だったよな」

何で出世すんのか知らねーけど。

「で、右端が健康だっけ」

もつとつくに健康だけど。

……あ、この水うめえ。

「修也、何の水飲んだ？」

「学業」

「……修也頭いいじゃんかあ」

「岳に一回も百ます計算で勝てねえから……」

それって学業関係あんのか？

「しょーおー。お前何飲んだ？」

「縁結びを腹いっぱい」

「何で!？」

学業飲んだ方が良くね？ あ、この部分だけ読んだら何かすげえ。

「なんとなくカップルが身近にいと嫉妬心が」

「お前奈那子さん好きなのか？」

「別に。友達としてなら好きだけどさ」

結局何がしたかったんだよ。

「次どこ行こっか」

「そうだなー、あ、確かここに来るまでの途中の坂道」

偽物っぽい舞妓さんと結構すれ違ったな。

じゃなくて、

「いっぱい八つ橋試食出来たよな！」

「じゃ、もっかい行こっか！」

『行こっか!』

「……ちゃんと買えよ？ 失礼だし」

あい。

246 仲良し八人部屋

「修学旅行だ！ 枕だ！ 枕投げだ！」

『語呂悪っ！』

とつさに言っただもんよ、そんなもん気にしてるわけねーじゃん。

岳だあっ！

修学旅行といやー、やっぱコレやんなきゃダメだよな、枕投げ！

三つに分かれてるうちの、一番でけー部屋だから八人居るし！

これはやれっつてことだよな！？

意味わからん？ オレ様勝手論理何だから分かんなくていんだよ。

「行くぞおらあああああっ！」

「わあーっ！」

「そーそー負けるかあああああっ！」

うん、枕投げじゃなくて枕合戦だな、こりゃ。

「おらあっ！」

うおつとお、枕飛んできた。

これ位余裕で避けれるけどな。あ、やっぱ取る。武器増えるし。

あい、一個げつとお。……あれ？

「痛っ」

何で四方八方から……いや、オレ除けば七人しか居ねーから八方はぜってーねーけどさ。とにかく、何であつちこつちから枕飛んでくるんだよ！？

「岳対他の奴か。面白えじゃん」

「修也あ！ どっこも面白くねえよ！？ はつきり言っつていじめだ

かなコレ！」

「弱い者いじめじゃねえからいいんだよ」

「何その屁理屈！」

せーんせー！ ここにいじめられてる子が居まーす。先生なら助

けるおっ！

……せんせが居ねーけど。

「仲良きことは美しきかな」

『居たあっ！？』

何部屋の隅でお茶啜ってくつろいでんだよ！？ せんせって確か二十代だったはずだけど！？ その年にして爺か！？

「と、とにかくだ、先生公認だから、やっちまえー！」

『翔……やっちまえ？』

「う、あの、その。えーと、そりゃっ！」

枕ありがとう。

「お前等ー、一般の方も居るんだから五月蠅く暴れるなよ」

『先生はどつちなんだよ！？』

「静かに暴れる」

んな無茶な。

「しつれーしまーっす」

『失礼されまーす』

「ええ！？」

ごめん、写真屋のおっちゃん。ついいつものノリで。

「写真撮るよ、並んでー」

『はい』

適当にごさつと集まって……何でオレを踏み潰そうとするんだテ
メー等。

「前に四人、座つて。で、後ろで四人立ってー」

あ、先生居ないことになってる。

……違った、ホントにいつの間にか居なくなってたんだ。

「はい、1+1は？」

『田んぼの田！』

パシヤ

「えええええええ！？ 何で君等そついう事言つの！？」

Aはこう語る。

「ちょっとやって見たくて」

Bはこう語る

「おじさん困らせたくて」

Cはこう語る……最低だなB!?

「どんな反応するか見たくて」

Dはこう語る

「これが答えだと思ってた」

マジで!?! Eはこう語る。

「皆こういうと思ったから」

すげーなE。翔はこう語る。

「やっぱりこう言う事はふざけないと」

修也はこう語る。かぶせてオレも語る。

『ノリで!』

『だよな』

仲いいよな、オレ等。

「……もう寝る時間だからね、ちゃんとね、寝るんだよ?」

『えー』

「仲いいな君等!」

いや……だって、な? せつかくの修学旅行だし。仲良きこと

は美しきかなだしー。

「カメラのおっちゃん何か怖い話してくれたら寝る」

「あ、それいいな。おっちゃん、何か話して」

「ホントに寝るんだね?」

あ、疑ってる。そら疑うか。

『多分! きつと! おそらく!』

「話してあげるから寝なさい!」

秋ちゃんみてーだな。ほら、なっくんはーちゃん母の。おっさん

声だけだ。

「じゃあ話すよ? 布団に入って」

『アイアイサー!』

どこの軍だよこは。あ、『ぐん』は『ぐん』でもこつちの群か。あい、布団に入って電気消して、ぶつちやけ言つちまうと季節外れの怪談の始まり始まり！。

「十年くらい前の話な。ある真つ暗な山道の中、右手側には切り立った崖がある所を、男乗つけたバイクが走ってたんだ。男には彼女が居て「そいつぶつ飛ばす」「いやあの」

「翔、余計な口出しすんなよ」

「ごめん。つい」

「つい！？」

「ええと、で、その彼女を送った帰りに、その山道を走ってた。しばらく行くと、何やら道路に細長い、横たわった影が見える。バイクを止めてそれに近づいてみると……」

みると？

「何と、その彼女さんが血まみれになつて倒れていたんだ！」

「何だよ、普通の怪談か」

何を期待してたんだ、今喋った奴。

「バイクの男は、がくがく震えてその彼女の体を抱き上げた」
「勇気あるな。」

「するとその、これ以上死ねないような死につぶりの彼女さんがニコツと笑って、それで男はそのまま怖いのと悲しいのとで走り出して、崖から落ちてしまった。その崖は今、この下になつてるんだけど……どうも、出るらしいよ」

そりゃ、その話が本当なら出るんだろうな。成仏してなければの話だけだ。

「なあ」

「どうした？ 早く寝なさい」

お父さんが、おっちゃんは。確かにどうした？ だけど、修也。

「それ……誰が見てたんだ？」

「えっ！？」

そっぴやそっぴや……ニコツと笑ったただの影が見えたのだ。

『絶対嘘だあーっ!』

「ええええええ!?! つてか、ほんつと仲いいな君等!」

『俺等の団結力を舐めるな!』

「はい」

『よし』

何か話変わってね?

オマケ

次の日。

「……修也」

「あん?」

「マジで出やがった。昨日の話の奴」

「はあっ!?!」

『あの話、ほとんど嘘だったわよねえ。ね、ダ〜リン』

『そうだねえ、僕らは一緒にバイクで落っこちたんだもんねえ、ハ

ニ〜

怖えよ。幽霊とかとは別の意味で怖えよ。さぶい

「テムエ等成仏しろ! マジで! 一足先に冬が来てんぞ! おも

にオレに!」

『ああ、ああ、何か昨日の死神君にそおっくり、ね、ダ〜リン』

『また襲ってきてても、僕が守るよハニ〜』

んだからさぶいって。

「岳、協力感謝。成仏しやがれ、見てる方が寒いんだよ」

あ、兄ちゃん。

『きゃああああ! 昨日の死神君!?!』

『も、もう一人いる筈……きゃああああ!』

「よし」

おー、幽霊消えた。何をどうしたのかよく分からんまま消えた。何か寒さはしっかり置いていきやがった。秋だから寒いだけか?

「よしじゃないよ、純ってば。勝手に一人で行かないの」

誰だコイツ。金髪青目？ 外国人か？

「リオが遅えんだよ」

「人のせいにしないの」

「事実だからしゃあねえだろ？」

あ、何か説明も無しにどっか行きやがった！

「おーい」

「岳ー」

「頭大丈夫か？」

……これ言う仲良さはいらねえっ！

247 魅惑の八つ橋

「八つ橋美味しいね」

「あたしは焼き八つ橋が一番好きだな」

「生八つ橋も美味しいわよ？」

「やっぱり断然チヨコ八つ橋だよ」

「だよなーっ！」

もぐもぐ、ごくん。

忍でーす。

岳のお土産、八つ橋をおかーさん、秋ちゃん、はーちゃん、光、あたしで食べてます。

持って帰ってきた本人はベッドにダウンしています。ちなみになつくんはもう夜なのに塾だそうです。純兄は例によって例のごとく……そうでもない？ お仕事です。怪我治ってからはほぼ毎日。

「にしても岳、よくこんなにたくさん買ってきたよね」

「試食ばかりしてたら修也くんに怒られたんですって」。それで、お小遣い全部これにつかったそうよ」

何やってんの岳。グッジョブだけど。

「抹茶美味しいわね」

「チヨコバナナってある！」

「チヨコの方が美味しかったや」

いや、やっぱり焼き八つ橋だってば。人の好みなんて人それぞれだけど。

「うわー、いいなー。食べたいなー」

あ、剣。……いつの間に。

「なあなあ忍ねえ！ 食っていい！？」

どうぞご自由にーと、言いたいところだけど。はーちゃんと秋ちゃんも居るからなあ。

「あい」

「サンキューッ！」

ま、いいや、隠れてるなら。

「おお！ もしやこれはっ……………」

あ、一七法師……………」。

「や！ つ！ は！ し！ 拙者のごぞるか！？」

「一昨日来やがれっ」

「ぐはっ」

あ、打ちひしがれて帰って行った。

……………ちよつと。床に穴開けないでよ？

「ね、ねえ、今声聞こえなかった！？ ねえ！？」

「そうねえ……………」

聞こえてるのか、一七法師の声。そう言えば一七法師って何なん
だろ。霊体じゃないし。

『気のせいだよ』

ニパッ

やっぱり似てるなこの母娘。あたしだっておかーさんの娘なのに。

「そっか……………なあ？ ねえ、お母さん」

「気のせいかしら、ねえ？」

首ひねりながら八つ橋に手を伸ばし、それと一緒に疑問を飲み込
む。

……………何かそれっぽくない？

『忍ちゃん』

「あ、クロ」

白猫クロ。久しぶりに会ったな！。

『クロ、不法侵入って知ってる？』

『久しぶりに会った猫に言う言葉がそれかにや！？』

あ、今度は『にや』が口癖になったの？

『ミイもそれ、食べたいにい』

口癖固まってないの？

『猫が食べたならお腹壊すよ？』

『じゃあいらないに。じゃーにゃ!』

早っ。もういいの!?

「……あ、八つ橋」

「お帰り〜、純お兄ちゃん〜」

『お帰りなさい!』

「八つ橋食べる?」

もう誰が買ってきたとか関係ナシだね、八つ橋。

「えらく多いな、八つ橋」

「持ってたお小遣い全部使ったんだって」

「何やってんだよアイツ……」

やっぱりそう思うよね!。

「ん、焼き八つ橋ってうめえな」

「だよね! やっぱ焼き八つ橋だよね!」

「何興奮してんだ」

周りにいた人に焼き八つ橋派が居なかったもので。つい。

『ねえ……桃も食べたいなっ!』

誰この子。桃の花の着物って季節外れだな!。

『ねえね、ちようだい! ちようだい!』

あい、どうぞ!。

『あのね、あのね、お化けてね、こんなものなっかなか食べられないんだよ!』

あーお化けなんだこの子。

『あーっ! 何このお菓子! 美味しそう!』

『華子、はしたないですよ。すみません、少しいただけますか?』

『きゅーっ! 抹茶味!』

『きゅーっ! チョコレート味!』

トイレの花子さん四姉妹まで……。

どんっだけ魅力的なんだよ、八つ橋。

248 とある中学生の一日

よおつす、元気がーっ？ ラジコンカーだぜっ！

今日はなー、オレの持ち主っ、忍の一日を見てみようと思っつ！

『ストーリーカーじゃなあい？ へえんたあーい』

ラビット、違っ！ これはストーリーカーじゃない！ ストーカーは人間を指すものだ。

『ラジコンカーストーリーカーですね』

ニンサツ、それも違っ！ てか語呂悪っ。

と、とにかく、行くぞ！

6:00 起床

「うー、あー。カーテン閉め忘れてる。誰だ開けたの」
閉め忘れたって言ったじゃねーか。自分だる。

しっかし、起きるの早いなー。いつもは起こされるまで起きないくせに。

「今何時ー。六時ー。そら眠いわー。お休みー」

あいお休み。……寝るのかよっ！？

「……寝れん。誰だ起きたの」

自分だる。何言ってんだ。そして眠いんじゃねーのかよ。

6:30 本当に起床

「うわ、三連休今日で終わりじゃん。どーしよ。どうもしないけど」
じゃあ何で『うわ』って言ったんだよ。

「お姉ちゃん〜、おはよ〜。みみちゃん知らない〜？」

あん？ ラビットならさっきあっちに居たけど……。

「階段の手すりの上に居るよー」

「あ〜！ も〜、勝手に出てっちやダメだよ〜？」

『だあってえ、あたしだっつて遊びたいしい？』

ラビット、お前一回耳つかまれる。んでウサギに戻れ。

「光、おもちゃは勝手に動かないの」

「分からないよ〜？　もしかしたら夜中に遊んでるかも〜」

鋭い。正解だ！

「そんなことあったら怖いよ」

持ち主に怖いって言われた!?

8:00 朝食

なぜこの日の朝飯が遅いかというと、休みの日はとーちゃんかーちゃんが起きるの遅いからだ！

「なんか日曜の気分」

「あ、オレもオレも」

「岳お兄ちゃん〜、目玉焼き貰うね〜」

「ダメだっ!」

目玉焼き……あつ！　おもちゃ屋に置かれてた時に見かけた、ままとセットの中にあつたあれか！

黄色くてぐるぐる巻きのあれか！　……違う？

「もう少し静かに食べねえのかよ」

ひいっ！　ごめんなさい！　何でオレが謝ってたんだよ！

「おとーさん、目玉焼きのベーコンちょうだい」

「駄目」

目玉焼きのベーコン……？　ぐるぐるの中に巻き込んであるのか？　うーん……。

9:00 勉強？

「うーん」

ペン回し、クルリ。お見事！

クルクルリ。おお、すげえ！

何だ持ち主、分かんないのか？　いや、オレも絶対分からんけど。

まず文字読めねー。

「めんどくさい」

そっちかよ！

「何で勉強すんのかなー。別に勉強しなくても高校位受かるって」

おお、余裕の態度！　そして全国の受験生を敵に回すような発言！

「馬鹿校なら」

「どこが余裕だっ!？」

「うー、でもやっぱり馬鹿校じゃ詰まんないかなー。やっぱりやっ
こ」

結局やんのか。

しっかしシャーペンの動き方がさっきまでとまるで違うぞ。

……いや、単純に本来の使い方をし始めたただけなだけど。

13:00 昼食

今日の昼飯はー？ 芋のつるスパゲティー。へるしー……らしい。
理由は？

「ちよつとめんどくさくて」

という事らしい。

「あんまりお腹空いてないからこれでいいよ」

……岳が居ないな？

「母さん！ 昼飯できてる!？」

おお……ただいまくらい言えよ。あと外から帰ってきたら手洗
うがい! ……って、ニンサツが言ってた気がする。外行かねーの
に。

「お帰り〜、岳〜。出来てるわよ〜」

「よかった。十分後に修也達と待ち合わせしてた。いそがねーと
遊んで食ってまた遊ぶか。おー、健康的。」

「五分で食い終わる癖に。ちゃんと噛めよ?」

「んぐ、ぐん」

答えられてねー。

「……………」

そして持ち主無言ー。

「あ、そうそうおとーさんこっそり買ってきた肉まんがあるんだけ
ど」

言ってる時点でこっそりじゃねー。

『食べるー!』

「内緒だよ？」

誰に！？

14:30 勉強飽きた

「ねえ純兄ー」

純と岳の部屋を見るが……居ない。何で！？ 純、この部屋に入ったの見たぞ！？ 出てねーぞ！？

「何だ、居ないのか」

何で流す持ち主よ！

「おっじゃましまーす！」

「……します」

「あ、はーちゃんと美代来たんだ。光昼寝してるんだけどなー。起こすか」

光、よく寝るな。夜もすっかり寝れるんだから凄い。ほっといたら何時間でも寝れるんじゃないの？

「光ー、はーちゃんみーちゃん来たよ」

「後五分」

「いや、学校遅れるから起きなさいって言ってるんじゃないかってね」

「後ご飯」

「ご飯食べ残したの？」

「後五輪」

「五輪咲くまで待てばいいの？」

……持ち主、どうやったらそんな風にはいはい返せるんだ。

17:00 お八つ

「純兄、大変」

ちよつと待て、そこには誰もいねーんだけど。

「いや『ん』で終わらせないですよ。大変なんだから。お八つ食べそこねた」

こっちからしたら持ち主が独り言を空中に向かって話し始めたのが大変なだけ！？

「あ、じゃあお八つ一緒に食べよ」

何だ、純は何を言ってるんだ！？ 居るのかどうかはともかく、持ち主の頭の中はどうなってるんだ！

「八つ橋まだ残ってたよな」

『ぎゃあああああつ！ 出たあつ！』

ふう。本気で叫んじまってぜい。

だって何も無い所から突然純が出たんだから。

「焼き八つ橋旨いよねー」

「ん」

食ってみたい……食ってみたいけど……口がねえっ！

19:00 夕食

「でな、翔の奴、自分で掘ったくせにその穴に落っこちやがってな……」

岳、どうやってたら食べながらそんなにペラペラ話せるんだ。

何やら、山で遊んでて、落とし穴を作ってたら翔がハマったらしい。

「……………」

持ち主、なんで食べてる時は無言なんだ。

「忍、どこ受けるんだっけ？ 勉強どう？」

「さー、第二水高でも受けるんじゃない？ 勉強？ 飽きた」

どこだ、第二水高って。

そして勉強って飽きていいのか！？

「白銀高校見てたじゃない。あそこは？」

「一応考えとくー」

一応て。めんどくさそつ。

「純は？」

「さあな」

何に関しての『さあ』だ。受けるか受けないかの所だったりしてな。

「岳お兄ちゃん。から揚げ一つちょうだい」

「絶対駄目！」

「お姉ちゃん……もう無い〜!？」

「盗られない一番の方法でしょ」

「ごもつとも。でも早すぎる。」

「純お兄ちゃん」

「ん。一個な」

「わ〜い〜。優し〜」

優しつ。珍しつ。怖いだけじゃねーんだつ。

「……小っちゃい〜」

でも地味にセコイ。

「純兄、あたしにもー」

「テメエは元々一個多かつただろ？」

「何で知ってるの!？」

数えたのか……？ わざわざ。

21:00 お風呂

流石に付いて行けん。だって濡れたらオレ壊れるじゃん。

22:00 就寝

「寝れない」

カーテン閉め忘れてるぞー。そこは関係ない？

「うーん。ゲームしよ」

どういう流れでそうなった!？

「……駄目だ。持ってる奴全部全クリしたから面白くない。光の借りよ」

棚の隅にさ、勉強のソフトがあるのがちらつと見えたんだ。

そいつらがさ、『僕らまだ全クリされてないよー!』とか言ってたんだ。

「……駄目だ。女の子のはよく分からん。あれ？何か自分で言つてて哀しい気が」

知らんて。

「純兄どっか行ってるしー。岳のソフトは遊びつくしたしー」

純のソフトは？ あ、こないだ遊んでみてゲーム機壊してたな。

ちよつと待て、じゃあ今持ち主が持つてるゲーム機は誰のだ。

「……純兄のゲーム機、直るかなー？」

ああ、壊れたのは純のか。

「ま、いか。もう寝よ」

いいのか!?

『ラジコンカーストーカーさん』

『名前なげーよ』

『今日一日、忍さんをストーカーしてどう思いました?』

え? どうって……。うーん。

『運動してねーよなって思った』

「……何だこりゃ」

「何だろうね」

「変なのっ!」

光です。

朝学校に行こうとしたら、何やら交差点にペンキで落書きがされてました。

四つの方向へ伸びている道の一つに、通せんぼみたいに横線が引かれてて、その下に『トマレ』って書いてあります。

……何で？

「何がしたかったんだ、これ書いた奴」

「交通ルール守りましょーっ! って事じゃ無いの? 岳くん」

「何でもいから道路に落書きしたかったんだと思うな」

ストレスたまってるのかな? チョークで何か付け足したいけど……そのチョークを持ってないな。

むう、歩く文房具箱一生の不覚。帰ったら買って来よう。

「光、はーちゃん、お巡りさんに言うかこのままほっとくかどっちがいいと思う?」

『このままほっとく()!』

「だよなっ! んじゃガッコ行くか」

行こ行こ。

あ、でもお巡りさんに言ったらどうなったのかな?

次の日

「あつ、増えてるよ!」

今度は昨日書かれてた隣の道に全く同じことが書かれていました。

黄色ペンキだから目立つね。

「コレの落書きしてる人に何かメッセージ送ろ」

「メッセージ？ どーやつ……あ、チヨークか。それで何か書いとこーぜってか」
その通り〜。

何か書こつかな〜。今日書かれたさらに隣の道に〜……

『ストレスたまってるなら思いつきりやつちゃえ！』

これがはーちゃんです〜。

『行け行けゴーゴー！』

これが私です〜。

……意味わからない〜？ もっとやれ〜って言ってるんだよ〜。

『サツに見つかんなよ！』

これがお兄ちゃん〜。お札に見つかったら何か不味いの〜？ お

札じゃない〜？

「よし！ あ、早く行かねーと朝休み終わんぞ！」

「わっ、早く行かないと！」

「待ってよ〜！」

さらに次の日

『おお〜』

昨日チヨークでメッセージ書いたところに〜、何か凄い達筆で『停まれ』って書いてありました〜。

やつぱり黄色ペンキです〜。

「すっげー。これ何で書いたんだ？ やっぱ筆か？ 絵筆じゃなく

て、あの、習字とかの」

「かあっこいー！」

……あれ〜？

「見て見て〜、返事が書いてあるよ〜」

この隅の方〜。こっちはチヨークです〜。

「お、本とだ。えーつと……」

『ストレスたまってるなら思いつきりやつちゃえ！』には『やつちやつた』それで達筆〜？

『行け行けゴーゴー！』には『イエーイ！』……イエーイ〜？

『サツに見つかんなよ!』には『イエッサー!』何で軍隊?」

「ちょ、光、チヨーク」

「は〜い〜」

何書くの?」

『もっとおもしろーの希望!』

……どうするのかな〜、落書き犯。

さらにさらに次の日

最後の一本の場所にどど〜んと。

『トマト』と書かれていました。

……何でトマト? 確かに『トマレ』とは似てるけど〜!

「あ、小っちゃく』どう?』って書いてあるよ!〜!」

「うーん、九十五点!」

判断基準は何?」

さらにさらにさらに次の日

全部消されていました。

……うっ〜。

249 とまれの交差点（後書き）

実話率75%です。

ある日、家の近くのかなり人通りが少ない交差点の、家側に『トマレ』と書かれていました。

次の日、同じ交差点の、家から見て左側と奥川に『トマレ』と書かれていました。

さらに次の日、右側に『キケン』と『トマト』と書かれていました。

そして今日、消されていきました。警察の方がやったそうです。

『トマレ』に混ざって『トマト』って書かれてても気付かないものですね！ 小学生の見送りに出た母に言われるまで気付きませんでしたよ！

250 私に食べただけで相手の言葉が分かるコンニャクを下さい

「……………」

何語だろう。聞き取れん。

せいぜい最後の音を伸ばしてる事しか分かんない。

あ、もう一個あった。分かること。どっさりキムチ乗つけたご飯食べてるんだ、この人。

忍でーす。

学校から帰ってきたら、椅子に座ってぱくぱくもりもりキムチご飯を食べている変な奴が居ました。

背中をこっち向けてるから顔は見えないけど……金髪。外国人？いやでも、今時金髪の日本人なんかいっぱい居るしー。

会った事はないけど。

「……………」

この人どうしょ。えーと、えーと……。

「ハロー？」

英語じゃなさそうだけど、とりあえず……。

「Hello」

何か笑顔で返してくれた。

あ、綺麗な青目ー。

見かけで人を判断するものじゃないけど、大人しそうです、この人。

「……………ここ日本だね。なんで英語？」

「日本語喋れるのかアンタ！」

「……………ごめん、早口は聞き取れないんだ」

日本語ペラペラなのに？ いや、ちょっときこちないんだけど。

「誰？」

「俺に言ってる？」

「うん」

アンタ以外に誰が居ると。

「俺はリオン・カラスって名前だよ」

「誰」

「リ・オ・ン」

いや、それは聞こえたんだけどね……。

「純の妹？」

「あ、純兄の知り合い？」

「うん。……じゅんにい？ って？」

「いや、えー……純兄ちゃんの略ね」

「……日本語って難しいねー」

……… いったいいつどこでどーやってこの人に会ったんだ、家の兄
貴は。

「純、どこかな」

「えーつと、学校かな？ ……あ、違う。今帰ってきたよ」

玄関開く音したし。

「お帰りー」

「お帰り」

「………リオ………」

「………」

おーい、あたしを置いていかないでー。

純兄までいったい何語を話してるの！？ リオしか聞き取れない
よ！？

「ほら、純、妹ちゃんが困ってるよ？ ここは日本だから日本語で
話そうよ」

「………テメエは日本語研修にでも来たのか？」

「違うよー。キムチを食べに来たんだ」

何で！？ わざわざキムチ食べに！？ 韓国行けよ！

「美味しいねー、これ」

またキムチご飯をパクパク。

「純兄、誰、この人」

「胸焼けする……。気持ち悪い。だってよ。俺は単純すぎだろって言った」

「通訳ありがと、純兄。いつどこでその言語覚えたの」

「小学ん時に妙羅に叩き込まれた」

「………。そか。………。そっかー。」

「また原因妙羅かよ！」

「何処の言葉？」

「靈界、だと思っ」

「思っって。」

「……ー、……。………。」

「……。もう帰る、だって。ちなみに後のは覚えとけよって言われたからヤだって返した」

「ふんふん。」

「翻訳コン ヤクが欲しい。ドラ もーん！」

251 文化祭ではこれをします？

「……お、やっと来たかー。おっせーぞお前。今何時間目だと思っ
てやがる」

「昼休み」

そら分かるわな。みんな弁当食ってっし。

清だぜ！

何でだろうな、最近、純の奴遅刻ばかりしてきやがるんだ。

忍に聞いたたら『仕事じゃなーい？』だってよ。中学生の仕事は遊
びだろ！

……勉強？ やっぱ勉強なのか？

あ、そーそー。オレな！ オレな！ どどーんとテストの点数あ
がったんだぜ！

三十点以上上がったて、数学は五十点だ！ ……………何で純の奴、
目の前で百点なんか取るんだろうな。そのせいで喜べねー。

「純ー、ノート見せてやるっか？」

「いや、帰ってから忍に借りる」

あんだよ、人の親切をー。

「あたし、ノートなんか持って帰らないよ？」

「ん、清、やっぱ貸して」

あいあい。切り替え早えー。一瞬で切り替えやがったぞこいつ。
電気のスイッチみてーにカチツと切り替えやがったぞ。

「……………やっぱいい。忍、貸して」

「ほーい」

オイコラ待てや。

何でオレのノートの中を見てすぐ返す！？

「まるでオレのノートが汚いみてーじゃねーか！」

「そつは言ってねえぞ」

「何も言ってねーもんな！ やっぱいいとしか言ってねーもんな！

態度で言ってるぞおい！」

「ばらばら、やっぱいい。だぞ!？」

「見にくかったただけだ」

「イコオオオオル！ オレのノートの取り方が汚えつつってんじゃねーかよ!？」

「あ、数学と社会だけでいい。ノート提出あるのこれだけだろ？」

「うん。あ、理科にはプリントついて来てたよ」

「ん。分かった」

無視か!？」

「何人の事無視してんだよ！」

「ん？ 一時間目に総合あったのか。何やった？」

「……なんだこいつ、まるで反応しねえ。スルー力天下一品だなおい。」

「文化祭のことやったよ」

「文化祭か。今年は何やるんだ？」

「今年はなー！ 文化祭の日がハロウィンと重なってる……っつか、絶対重ねたんだと思うけどな……それはともかくしてだな、だから学校総出でハロウィンっぽいことするらしいぜ！」

別に、突然騒いだのは無視されて寂しかったからじゃねーぞお。

「らしいぜって……決まってねえのかよ？」

「いんや。他のクラスも学年も、ハロウィンネタって言っただけ」

うちのクラスはだなー。

「オバケ喫茶だ！」

「……喫茶？ 中学の文化祭でか？」

いんや。

「オバケ喫茶と言う名の展示だ」

「何すんだよ、それ」

「えーつとなー。単純に、オバケの格好してきやいきやいわいわいやってる中をお客に通ってもらうって感じかな、はっきりとはしてねーけど」

決まったばかりだしな。

決まったばかりでなんで『オバケ喫茶』何て名前が付いてるのかと言うと……。何か、オレが言ってみたら『それでいーじゃん』的なノリになって……。決まった。

ま、変更されるかもしんねーけどな。

「ねー純兄。お化けの知り合い居るでしょ？ 来てもらったら？ とこれの華子さんとか」

いや、トイレの花子さんは学校の怪談だろ。ハロウィンに出てこねーだろ。

……って、ちょっと待てよ！？ 今聞き捨てならない言葉が聞こえなかったか！？

「オバケの知り合いがなんだって！？」

「影が薄い奴を忘れるくらいには居るぞ」

「ハア！？」

『マジで！？』

おおう。クラスの奴等が食いついた……。

「じゃあ、その人たちに手伝ってもらったらリアルじゃない？」

「……ゾンビなんかは、テメエ等が見るにはキツイと思うぞ。なあ」

「ごめん。ゾンビさん。ホントごめん。でもグロイモンはグロイです」

お、おい忍、どうした？ 口抑えて……。

「ちょおおおとっといーかなーっ！？」

『黙れ超音波！』

「酷いよー！」

あまりに高いキンキン声だから、つい。

「ゾンビが居るといふ報告をうけてまいりました！」
誰だ報告した奴。

『……………』

何か、声が……あれ？ 何か、純の後ろに……。

皮膚が解けて、目玉が落ちて神経で眼の奥つながってぶら下がっている状態になって……とにかく、言葉で表せないほどグロイのが、居る？

『ぎいいいいいやああああああっ！』

「だから言ったのに。……」

「純兄、昨日も聞いたけど何語それ」

「昨日言ったとおり。霊界の言語」

「なんだよそれ！？ そんなのがあるのか！？」

……あ、グロイの消えた……。

高山兄妹以外、教室の隅に固まって震えておりまーす。先生込み。それだけ怖かったんだよ！ 夜中にトイレ行こうとしてあんなのに会ったら漏つちまうぞ！？ その前に気絶だ！

「や、やっぱり、自分たちでやろう……？」

誰かが呟いたその言葉に。

オレ等は赤べこのごとく首を振り続けた。……高速で。

252 理科の先生を怒らせるべからず？

「細胞分裂は前の時間にやりましたね。じゃあ今回はこれです」
「細胞破壊！」

何その恐ろしそうな言葉。

「高崎君、黙りなさい」

「すみませんでした……」

理科の先生相手だと弱いなー。

忍でーす。

理科の時間、細胞分裂は昨日やったので、今日は染色体だそうです。

……遅くない？ 何か、ほかの学校に比べて、遅くない！？

「はい、これで一本の染色体です」

H型、かと思ったらこれでXの形なんだねー。

「これの中に、親の情報が詰まっていて、子どもに伝えられます」

「たとえば？」

「眼の色とか、髪の色とかね」

耳たぶがくつつついてるか離れてるかーとかもでしょ。

「生物の形を作るための設計図とも言えますね。」

あ、そうそう。兄弟、姉妹は、情報の50%位が一致しているらしいけど……」

……あの。

何で皆こっち見るの？

「あら、ちょうどいい所に兄妹が。観察してみましようか」

『観察言っつな』

あたし等は植物か。はたまた金魚か、メダカか、カエルか。

「似てるんだけどな……何っか違うんだよなあ」

本気で観察するな、清。

「髪の色じゃない？」

『ああ！』

ああ！ じゃないよ。

「それだ！ 二人とも基本は黒なんだけど、忍は茶色っぽくて、純はそうじゃなくて……うーん、とにかく真っ黒いんだ。あ。烏の羽に似てるな！ むしろまんま！ 烏羽色か！」

しーちゃん、何興奮してるの。いくら理科好きだからって……。

「篠、普通それって女の人の髪に使う言葉だよ？」

「似てるんだから仕方がない」

……はつきり言うな！

「目の色も違うよな。髪と同じ色だし」

「弟妹居るんだったよな、そいつ等は何色？」

岳と光？

そんなに注意深く見ないからな！

「忍と同じだ」

「純だけ違うのか。誰譲り？」

「爺さん」

へー。それは初耳。

……いや、多分聞いてたとしても忘れてるな。

「他は別に違うとこねーよな」

「そうだよね、顔立ちも似てるし」

そーかな？

「でも表情がなー。純は殆ど無表情なのに、忍こころ変わりすぎるんだよ」

何か悪いか。やろうと思えばできるよ？ 無表情。

「ちよつと二人、立ってみて」

『ヤだ』

「おお！ 今の表情そっくりだったぞ！」

何で興奮するの。クラスメイトA

「なあ！ 似てたよな！」

「似てた似てた！」

盛り上がるな！

「でも、身長も違うよな」。立ってみろってば

「やだ」「何で？」

おい、何で『あっちゃあ〜』とか言っつて額押さえるの。

「そこは八モれよ。！」

「知るか」「えー」

「八モれってば！」

無茶言うな。

いや、何かよく八モることはあるけどさ。

「なんかな」。純は高いのに、忍小つちえよな

「悪かったね！」

まだ成長期なんだもん、これから伸びるんだもん！……多分。

「小学ん時は俺の方が小さかったんだけどな」

『嘘お！？』

あ、あたしまで一緒に叫んじやった。

「そーだったっけ？」

「記憶力悪いな、おい」

「悪かったね」

悪いとは微塵も思ってないけど。

「あ！二人の似てるところ思い出したよ〜」

桜、もうこれ以上この話題広げないで欲しいんだけど。

『何！？』

「喧嘩強い」

「あたしは喧嘩した事無いんだけど」

適当な事を言わんで下さい。

「じゃあやってみて〜、今」

「今！？」

「相手どうしようかな〜」

どうしようかな〜じゃなくて！曲がりなりにも今は授業中！

「純くんがいいよね」

「よくない！」『おっけー！』『い、いいの？』
誰も止めはしないのか！

「レディー、ファイっ」

「ファイじゃなあああい！ ちょ、先生！ この人等止めて！」
もう絶対遺伝も何も関係なくなってるよ！？」

「はい、染色体は並んで、分かれて、増えるんですよー」

一人授業してる！？

黒板には細胞やら染色体やらの図と共に『お前等受験生だろ
の文字が！？』

「わあっ！ 先生すみません！」

「調子乗りましたあっ！」

「お前等、受験生だろ」

何か、先生が、ドスのきいた低い声で言った。

253 スイートポテトを作ろう

「今日はスイートポテト作るよ!」

「材料は〜!」

「……さつまいも、キュウリ、トマト……」

「キュウリは駄目っ!」「トマトは駄目〜!」

も〜、変なもの入れちゃダメでしょ〜!

お前が言うな〜? 私のおいしくしようとして入れてるからいいんだも〜ん〜。

それが不味かったとしても〜、失敗は成功の元だからいいんだも〜ん〜。

光です〜。

今日ははーちゃんの家でスイートポテトを作るのです〜。

「材料は、さつまいも、バター、砂糖、生クリーム、卵、チョコ、スイカ……」

「スイカあるの〜?」

「季節、はずれ……」

「だってあつたんだもん」

お〜、私の家の冷蔵庫みたいだね〜。

「後ね〜……まあ、後は作りながらでいつか!」

「そうだね〜」「……うん」

は〜い〜、まずは〜、さつまいもに竹串を刺しま〜す〜。

コンロの火を点けます〜。

炙ります〜。

「……それ、焼き芋」

「冗談だよ〜」

本当は〜、ラップに巻いて〜、電子レンジで加熱〜。

「醤油入れてみようか〜」

「……わさび」

「コーヒー豆とかは？」

夢は膨らむばかりだね。

……何か違う。

「あ、できたよ、さつまいも！」

「……竹串、刺すよ……」

さ〜どろぞ〜！

……

何の音もなく刺さったね。

「そこ、さつきひーちゃん刺したとこだよ。みーちゃん」

「あ……んっ」

もう1か所プスツ

「やらかい」

「じゃあ潰すよ〜！」

皮剥いて〜、潰して〜、砂糖にバター入れて〜。

「……さあ、形無い物入れるならここだね」

「先に卵入れない〜？」

「……レシピ、卵黄って……」

「じゃあオリジナル第一弾が卵白だね。入れるね〜」

コツコツ、パカツ。まぜまぜ。

「生クリームも入れちゃおっか」

「……じゃー」

効果音違う気がするな。

「……びちよびちよじゃない〜？」

「堅くするには〜、粉入れればいいんだよ！」

粉か〜。小麦粉とか〜？

「ホットケーキの粉、あった」

「よーし、ちよつとずつ入れて」

とん、とん

「おっけ〜」

混ぜ混ぜ。

「あ、そうだ、オーブン予熱しとかないとねっ!」

お〜、そうだった〜。よくはーちゃん思い出しました〜!

「何入れよっか……」

「スイカの汁混ぜ込んで見よ〜」

『おー!』

……。

「このスイカ〜、黒いよね〜」

「黒いスイカって珍しいよねっ!」

「……腐って無い?」

『……』

やっぱり〜?

「流石にこれはまずいよね……」

う〜ん、流石にこれは〜……。

「山に埋めておこっ〜」

「何で山?」

ほら〜、刑事ドラマとかにあるでしょ〜。犯人が何か山に埋めて

隠すぞ〜って〜。

「……土にかえって、いい……と、思う」

後で埋めに行こうね〜。

「やっぱりベタに青汁でも混ぜとこ〜」

「何処がどうベタなのっ!?! 青汁混ぜるの初めてだよ!」

「青汁の粉見つけたの〜」

人の家勝手に漁っちゃってごめんね〜。

「……つっこめー」

え〜い〜。

「んー、他は……埋め込むタイプでいつか!」

いいや〜。

絞り袋に入れて〜。

「何にしようか〜、最初〜」

「……ん」

お〜、みーちゃんす〜い〜！

ピーナッツピラミッド〜！

「埋め込み〜」

遠慮なくどば〜。ピーナッツスイートポテト〜。

「これはどう〜？」

熟柿ど〜ん〜！ 皮つきでど〜ん〜！

埋めちゃえ〜。

「じゃあ私はココアの粉を埋め込み〜」

粉っぽそ〜。

他にもいっぱい作って〜。

予熱完了のオーブンへほ〜い〜。

「出来た〜！」

「食べよ！ 確かこれ、あたしのだよね！」

「これ、美代のピラミッド」

凄い偉い人みたいだね〜。ピラミッド持ってるみたい〜。

『いただきま〜す〜！』

……粉っぽい〜。

むう〜、生地はおいしいのにな〜。

254 結構だらだらな死神共(前書き)

一応250と251で、純、リオン、ゾンビが使ってた言葉で話しています。

流石に・・・で書いて訳していると鬱陶しいので、はじめっから日本語に訳します。

254 結構だらだらな死神共

霊界、死神第十三部隊の部隊部屋。

……とりあえず、早い話が霊界にある沢山の建物の一つの部屋だ。部隊とか気にしなくていいぞ。

大きさは……二十畳位？ 日本の単位になおせばこんなところだろう。

そこに、死神が四人。私とリオン、忍、純だ。

「もうほんつと何なん！？ 何で音楽にペーパーテストがあんだよ

！ いらんわ！」

「丸暗記すれば点取れるだろ」

「役立たん情報なんか詰め込めるか！」

……五月蠅い。

妙羅だ。

とりあえず、どこか静かな場所を教える。

いや、五月蠅いのは忍だけだから純か誰かに忍を放り出させればいいのか。

「まあまあ、二人とも、落着いて？」

「リオ、騒いでるのは忍だけだ」

ああ、リオンの言葉で忍が落着いた……やっと寝れる。

いや……忍や純が来るまで寝てたのだが。いつだったか、多分最近、墨で汚されてしまったために真っ黒になってしまった座布団を枕にして。

「忍、どうしたって？ 音楽にペーパーテスト？ 何の問題が出るの？」

「授業で習った曲の作曲者名とかー。作詞者名とかー。歌詞とかー」

「じゃあ堂々と零点取っちゃえば？ 仕事には使わないんだし」

リオン、助言になっていない。

「いや、内申に関わるから受験生としてそれはちょっと」

変なところだけ真面目だな。普段仕事サボったり、仕事先でナンパしたりしている割には。

「まあ、ぶっちゃけこっちに仕事があるから高校行く必要無いんじゃないけどー……いっぺん死んでる訳やし？　なあ純」

「……え？　悪い、栗剥くののに夢中で聞いてなかった」

栗？　何故に栗？　と言うか、あるのか。

「私にもよこせ」

「栗嫌いじゃありませんでした？」

別に嫌いではない。好きだとは言わないが。

「とりあえず口に何か入れたかったのだ」

「……そうですか」

死神の純はちゃんと目上の者には敬語使う。何で人間の時にはしないのかと聞いたたら、死神になる前そうだったから、だとか。どう関係があるというのだ？

「なあ純、お前さー、高校受けると？」

おい忍、私の食べようとした栗を横から取るな。

「ん、一応」

「行くと？」

「うん」

「何で？」

「……さあ」

「ふーん」

この栗、旨いな。

純、食べてないな。私と忍二人で食べてるから……そろそろ怒るか？

「なあ純」

「今度は何」

……あ、よく見たら純の奴、自分の分は口の中で剥いている……器用だな。

「お前さ、好きな子とか居らんと？」

「痛」

「何してんの、純」

……おいりオン。貴様はいつから栗を食べていた。

「栗の皮で指刺したただけだ」

「動揺と受け取ってええか？」

「良くねえよ」

「動揺したんか」

「別に」

純、動揺したら小指の先が少し動くの、治した方がいいぞ。それ以外変わらないのはりっぱだが、隠せてない事に変わりはない。

「純ちゃん、好きな子居るの!？」

「エイラさん、埃が落ちるので天井裏から入ってこないでください」

私の座布団まくらを墨まみれにした上に、埃だらけにしたりなんかしたら、私だつて怒るぞ。

言ったのは純だが。

「純ちゃん。好きな子居るの?」

「居ません」

おいエイラ、何故来てすぐに栗に手を伸ばす。

挨拶の一つくらいしろ。主に私に。

「あつそー。純ちゃんがそう言い張るなら、エイラちゃん勝手に調べちゃうからね!」

「貴女日本語できましたっけ」

「えー……忍!」

出来ないのか、出来ないんだな。言語苦手だったな、貴様。

「はい! 純の好きな子、見つけましょう!」

「さつすがエイラちゃんの相棒! 分かってるう!」

ペチ、パス、スカツ

……三回連続のハイタッチ。まるで合っていないがな。

「みよーらーでしゅ! またお仕事はいつたでしゅ!」

ミュウか。未理アアンド霧瑠依のところに行つてたんじゃなかつ

たのか？

「えっとえっとでしゅね。現実世界の、チェコでしゅ」

「エイラ、忍、行って来い」

『りよーかーい！』

…… 帰りに日本に行くつもりだな、こいつ等。

「逃げるように行きやがった……」

人が珍しく許してやろうとしていたのに。

「ねえ純、好きな子って、居るの？」

「ん、居るっちゃ居る」

素直だな、妙に素直だな。疑うぞ。

「桃とか、お菊さんとか、ジャックランタンとか……」

「皆お化けじゃん」

「だってお化けの皆は色々くれるから……。この栗も貰いもんだし誘拐されるなよ？ 今時の子供は『飴ちゃんあげるから付いておいで〜』って言っても付いてこないぞ。」

「特に口裂け女はべっこう飴くれるから好きだ」

辛党じゃ無かったか、お前。……これはリオンだったか。

「恋愛対象の意味の好きでは？」

「無い」

美人ではあるんだがな、口裂け女。

「じゃあなんでさっき動揺したの？」

「今日学校で同じこと聞かれて。クラスの女子に」

ふうん？ 何度か話に出てきた玲奈とか言う奴か？ そうい話

を持ち出しそうなのはそいつくらいしか知らん。

「で、普通そういうの気にすんのかなってさっきので思っただけで」

「ふうーん。純もそう言う事思うんだ」

じゃあさっきのは……それだけ、か。

「恋とか全然分かんねえ」

「あはは、まだ子供だもんね」

「うん、リオはおっさんだな」

「何だとー？」

六つ違いだろ？ ……そこそこ離れてると言えば離れてるか。

「あ、この栗、少し栗ご飯にしようか」

「お願いしますリオ母さん」

「勝手に人の性別を変えないで」

料理が上手い、と褒めているんじゃないのか？

「し、忍っ」

「あーい？」

眠いー。眠いー。誰か眠気をもっとちょうだい、寝るから。

忍でーす。

放課後、いつもなら帰るか校舎内うろついているかしている時間ですが、今はそういう訳にはいかないのです。

もうすぐ文化祭だから。……もうすぐって感じはあんまりしないんだけどさ。

衣装係なので、チクチク縫い縫いやってます。今作ってるのは足無いオバケの白頭巾。

手のところがだら〜っとなるように袖も付けたよ。頭巾じゃなくなった。……足まですっぱり覆える時点で頭巾じゃないか。

「忍！ 聞いているの？ あ、ちょっと、袖付けるところ間違ってるわよ！」

「あい？ あ……しまった」

背中部分に縫い付けちゃった。これじゃ天使の羽だ。

「よかった、気付くの早くて。ありがとー、玲奈」

「どういたしましてっ！ 話聞いてくれる？」

「あいあい、何の話でござんしょう」

「誰よ」

「さあ？」

「あ、そうじゃなくて！ 聞くわよ？」
はいどうぞ。

「し、忍って……好きな人、居る？」

「そりゃ居るよ」

「嘘っ！？」

嘘って何さ。あたしそんなに嘘吐きじゃないよ。

「誰!？」

えーっとねー。

「純兄でしょー、岳でしょー、光でしょー、玲奈でしょ、桜にしーちゃん、なつくんとー」

「ちよ、ちよっと待って！ ストップストップ！ え、そういう意味の好き!？」

「え、違うの?」

あっ、針落とした。危ない。

「……そっちの意味だとしても言えるのは凄いけど……恋愛的な意味だよ!」

「おお、大胆にも純兄に直接聞いてた方の意味か」

「傷に塩を塗らないでよっ!」
いや、なんとなく。

昨日、直接玲奈が純兄に『好きな子、居るっ?』って聞いてたのがあまりにも印象的で。赤ペンキ顔に塗ったのかと思うほど赤かったけど。

「で、居るっ?」

純兄に岳は論外でしょ。知り合いの男の子と言えば……

なつくん、清、村田、水谷、シジミもとい紫波、クラスの野郎共、山口の人達……最近見ないサンゴの兄ちゃん。

「居ないな、うん。玲奈は?」

「ええっ!？ え、えっと、あの、い、居ないわよっ!」

「……それ、信じると?」

「そっよっ!」

いやいや無理だろ。

「にしても、純兄どこ行ったのかなー。衣装の小物ほったらかして
「そ、そっねっ!」

おお、急に玲奈の手が速く動き出した。縫い目ガツタガタなんだけど。

「玲奈、隠さなくてもいいじゃん、水臭いなー」

水臭いって言葉初めて使った！……気がする。
水臭いっていえば、死神の事ずーっと隠してた純兄の方が水臭い
よね。

「ううーっ、し、忍っ。あたし、忍のお姉ちゃんになれるかしらっ
？」

「色々と話が跳びまくったような気がするのとはあただけか!？」

「きゃあああああっ！ い、言わないでよねっ！」
だってえ。

「忍っ、純、あたしの事、どう思ってるかしら……べ、別に気にな
ってるわけじゃないわよっ！」

「はいはい、分かった分かった」

「多分ねー。純兄はー……」

「分かりやすい奴だと思ってると思っよ」

「そう言うのじゃなくてっ！」

「ええ？ うーん……」

「可愛いとか」

「ぼんっしゅ」

「ぼんっしゅって何？ それは玲奈の頭がオーバーヒートした音で
す。口で言うか？」

「……おい忍。玲奈、どうした？」

「あ、お帰り純兄。どこ行ってたの？」

「ちよっと口裂け女のとこに」

「何しに!？」

「べっこっ喰貰ったぞ」

「おー！ くれるの!？」

「ん」

「ありがとー。帰ったら食べよ。」

「あ、あのさ、純兄。玲奈、どう思ってる？」

「カチコチだから、今は聞こえてないでしょ。」

「ん？ 玲奈？」

カチコチなのに手はロボットみたいに動いて縫物を続ける玲奈を見て……一言。

「変人」

あの、玲奈の目に涙があっ！

「折角美人なのにな」

玲奈がどんな反応をすればいいのか混乱しております、って聞こえてるじゃん！

「キユウ」

あ、玲奈がもぬけの殻に。でもまだ縫い続ける。怖いよそれ！

あ、純兄に敵意の目が。主にモテない男子から……これじゃ全員だから、恋愛ごとに興味あるのに彼女が居ない男子から。

「……やっぱり難しいな。妙羅が何か読んでるから借りてみたら……」

そう言いながら取り出した本は！

『クラスの女子の取り扱い説明書』

おいこら。

256 お菊さんとパイだよ、四人組

「ただいまー！」

『お邪魔しまーす』

お邪魔されますっとな。

岳だぜーっ！

学校帰り、直接オレン家に来た、不良な奴等は……ま、いつものメンバーで、修也、翔、奈那子さんだ。

「お帰り〜」「……お帰り、なさい」「お帰りーっ！」

……甘い臭いがする。ちょっと焦げたような香ばしい臭いもする。

「何か、作ってんのか？」

『ぴーんぽーん』

よっしゃ逃げよ。

「あ、お邪魔してます、岳くん」

「……どちらさん？」

「お菊と申します。どうぞよろしく」

黄色い着物の美人さん。なんか古そうだけど。

「オリジナル料理を作るコツを教えて、との事で……私がやってい
いものか分からないけど……」

「お願いしますお菊さん！ これ以上不味いの食べたくねーし、本
気でたのんます！」

「は、はい」

肩つかんで揺すつたら、頭がくがくしながらうなずいてくれた。

マジで頼むぞ、お菊さん！

……あれ、どっかで聞いた名前だなー。

「んじやま、オレン部屋行くか」

「ごめん、岳。勝手に行こうとしてた」

翔、親しき仲にも礼儀ありっつー諺知ってっか？

「修也と奈那子さんは既に部屋の中に」

……ま、慣れてるもんな。そこそこ来るっちゃ来るし。

「さーって、今日は何するかな」

「百マス計算？ それともパズルのほう？」

「いや、それは今やるのがねーんだ。昨日、見つけた時に印刷しときゃよかった」

すうっげえめんどくさそうな百マス計算。姉ちゃんなら、絶対やる前にさじ、ってかペン、放り投げちまうようなの。

「さーって、何すっかなーっと。……何しとんお前等」

何でオレの部屋で修也と奈々子さんが重なりあって倒れとるん？

「岳……お、ま、え、なあっ！ 何でこんなに紙散らばってんだよ！」

「滑っちゃうじゃんかあっ！」

何だ、コケたのか。

「あー、この紙はだなあ、あれだ。ファイルが落っこって、中に入ってたのが散らばっただけだ」

『はさんどけよ！』

穴開けるのがめんどくさくて。

あい、とつとと集めて机にポイ。よし。

「何しよつか。あ、エケ飴食う？」

この変な味にハマった。

『ちようだい』『結構です』

んだよ、奈那子さんの奴。怖かったんじゃねーのかよー。ま、あげるけど。

翔はトラウマか。

あ、今修也が何か言おうとして諦めた。気になるじゃん、言えよ。

「岳くん、忍さんは？」

「まだガツコ。もうすぐ文化祭なんだってよ」

オバケ喫茶という名のただの展示物やるとか言ってたなー。オレも行きたい。何で平日にあんだよっ！

『……………』

沈黙。何しよう。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん達〜！」

「生麦生米生卵〜っ！」

「……食べてっ！」

おおっ、何かバタバタ聞こえるな〜っと思ったら。

お、うまそ〜なパンプキンパイ。………いや、騙されるなオレ。綺麗な花には棘があるもんだぞ？ 流石にこのパイに棘が入ってるこたね〜だろ〜が、不味くなるようなモノの一つや二つや九つは入っってもおかしくね〜よ。

「どうしよう、すっごく美味しくできちゃった！」

「びっくりだよ〜」

「お菊姉さま、感謝感激雨霰……っくらい」

……何か、いまいち信用できね〜のは今まで散々酷いもん食わされたからだろ〜な〜。

「岳くん、本当においしいのよ。食べてみて？」

何か、みーちゃんがお菊姉さまとか呼んでたのがちょっとわかった気がする。

「こっちは修也くん達のね〜。はい〜」

「はいっ！ 奈那子ちゃん！」

「どうぞ……翔さん」

ええい、ここは一か八かつ！ あむっ。

「うめえじゃん」

「ホント！ どうやって作ったの？」

……身構えて損した。

「どうやって作ったんだっけ〜」

「忘れたっ〜！」

「同じく……」

何で!?

「オリジナルなの、いちいちメモなんてしてなかったから」

「お菊さん、アンタ心読めんのか、読心術使えんのか」

「だって全部顔に出てるじゃない」

マジで!?

ああそこで頷くなお菊さん!

「純より分かりやすいわ」

「そりゃそーだろーよ!」

兄ちゃんのポーカーフェイス舐めんなよ!? そりゃ多少表情は変わるけども!

「忍ちゃんよりずっと分かりやすいわ」

「それもそーだろーよ!」

姉ちゃんなんか何考えてるか表情見ても分かんねーもんな! ころころ変わる癖に!

こないだ、真剣な表情してるなーと思ってみたら、独り言が『テーブル、彫刻刀で掘ったらどんな感触するんだろっ』だぜ!?

おかしいよな!?

ってか、掘るなよ!?

「おっと」

「翔、皿落とすなよ」

「大丈夫、かろうじて落とすのは阻止したよ」

……お菊さんが。

「お皿は割ったら二度と戻らないのよ!」

ボンドでくつつけりゃもどりそうだけどな。

257 もちろん参加するよ！

「やつほ、しののん、純吉！」

「よし、忍」

「あいよ」

何でいきなり逃げられないといけないんですかっ！

あ、枝奈です。二年一組、オカルト部所属です。しののん先輩が言うようなオカルトオタクではありません。

「待てーっ！」

『叫ぶな超音波！』

日に日に部長の超音波が大きくなってきているのは何故でしょう。今では聞こえた人、学年関係なく怒るような超音波っぷりです。

……超音波っぷりってなんだろう……。

「いつけーっ！ タツノオトシゴ！」

「オスッ」

タツノオトシゴ、うちの部活では唯一の武闘派なんです。

え？ ハルやん先輩ですか？ あれは曲がりなりにも突っ込みです。ダメージ与えられないです。

「話くらい聞いてくれてもいいじゃないですか……」

マコちゃんの言うとおりです！ 最近、純吉先輩がしょっちゅう遅刻や早退をするからなっかなか話しかけられなかつたんですよ？

毎日三年一組の教室を見張ってたのに……。今、無駄な苦労とか思ったの誰ですか、ちよっと手を挙げてください。

しののん先輩は捕まえてもすぐ逃げちゃうし……。最近では文化差の取り組みで見張りに行くのも難しいし……。

でも、今日！ やつと追いかけるところまで行ったんです！ 何がどうあっても捕まえて見せます！

……あれ？ 最終目的が変わっているような……。気のせいですよ
ねっ。

「オラアッ！」

タツノオトシゴ、掛け声が不良みたいです。とび蹴り、行っきまーすよー！

「ん」

「なんで防ぐの！」 「なんで防ぐんですかつ！」 「何故防ぐ」 「ちつ」 「防がないください……」

とび蹴りですよ！ そう簡単に防げませんよ！？ 多分。とにかく私なら防げません。

「純兄、それ、避けなきゃいけなかつたんだよ」

「そうじゃない！」

ハルヤン先輩のハリセンが直撃！ なんてそれが出来るのに捕まえられないんですか！

「ええーい！ 行くよ皆！ 質より量！ どどーん！」

どどーん！ で、皆で二人の先輩にとびかかります。周りの人に引かれました。そりやそうでしょう。

先輩たちには避けられました。

オカルトクラブ、仲良く床とハグします。痛い。

「……あのさ、チリがたくさん集まっただけで、掃除機に勝てると思っつ？」

「思っつ」

何でしののん先輩の質問に純吉先輩が答えるんですか。

「チリがよっぽど多かつたら掃除機は壊れるんじゃねえか？」

「んー、そつか。じゃあ、八工が五匹集まって、八工叩き持った人間二人に勝てると思っつ？」

「思いません。」

「おいしののん。他人を八工に例えるな」

「ごめんなさい」

……しののん先輩、変なところで素直ですね。

「頼みだけ聞いて！ 一生のお願い！」

部長の一生のお願いを聞いたのは二回目です。

一回目は、去年、今の高一の先輩二人が卒業する時に、行かないでください、でした。当然無理でしたけど……。たまに、顔見せてくださいますよ、その先輩達。

『……ま、聞くだけなら』

「あ」

ちよつと、部長。

何聞くことだけをお願いしてるんですか。

「文化祭、あるじゃん」

あきらめて話し始めましたね。

「ん？ 文化祭？ いつもの幽霊みせるーとかじゃねえのか」

あはは……

「文化祭でね、劇、やれるでしょ？ やりたい人で」

「ああ、はいはい、それに出たいの？ どうぞ」

「二人も出てほしいって事なの！ 足りないんだよ！ 人が！」

ほんとに足りないんですよ！ だから他の人に頼みまくってんです！

「……何の劇さ」

しののん先輩！ やってくれるんですか！？

「トリック・オア・トリート！」

「まだ早いよ」

「劇の題名だよ！」

ハロウィン、お菓子貰えるかなあ……。って、そうじゃなかった。

「手伝ってくれる？」

「どんな内容かによるー」

『やったあああああっ！』

手伝ってくれるって！ 手伝ってくれるんですって！

「ちよ、まだ手伝うとは言っていない……」

「忍、そこは内容聞いてから言い直せ。一応会話をテープにとっておいたから」

都合のいい所しか聞かない主義です！

「なんで腹巻が必要なんだろう」
「忍です。」

なんでか知らないけど、うちの展示『オバケ喫茶』の衣装の腹巻を編んでいます。これくらい誰か持ってこれるだろう。なんで一から編まなきゃいけないんだ。

「とゆーか、なんであたしが家に帰ってまで文化祭の取組みしてるんだろ」

編み編み。

えっと、これでいいんだったかな。編んでたらなんか訳わかんなくなってくる。何も考えずにやってたせいで。

編み方説明書……しまった。学校においてきた。

「おかーさん」

あ、毛糸球。持ってかないと。

「は〜い〜？」

「これ、どーなってんの？」

「忍が聞きに来るなんて珍し〜！」

そんなことで感動しないでよ。

「どーなってんの？」

「え〜っと〜。これがこうなって〜？ ああ〜、はいはい〜。こうね〜」

これとかこうとか、言葉だけじゃ絶対理解できない。手元の毛糸の塊、もとい網掛け毛糸の腹巻（ちよっとこんがらかってたりする）をちよいちよいやりながら言われると何となくわかる。

「はい〜」

「あんがと」

「はいはい〜」

「……今日の晩ご飯、魚？」

においがする。

「楽しみにしててね〜」

魚は骨刺さると痛いから好きじゃないんだけど。

それさえなければいくらでも食べるよ。イクラは苦手だけど。

プチプチが！ あのプチプチが！ あと中の汁が嫌い！ 全体的に魚の卵は無理だ！。

岳も光も好きなのに。純兄は好きでも嫌いでもない、らしい。

「お姉ちゃん何してるの〜？」

「腹巻編んでるの」

「アンデル〜？」

「デンマークの童話作家じゃないの」

「それはアンデルセン〜」

突っ込みに突っ込まれるとはこれいかに。

「うーん、暇だ」

「編み物してるじゃん〜」

「手と目以外が暇」

「器用だね〜」

褒め言葉だよな？

「リンゴ食べたいな〜」

「今日の朝食べつくしちゃったよ〜」

むう。明日買ってこよう。

「私は焼き芋食べたいな〜」

「石や〜き芋〜」

「あんまり見かけないよね〜」

ほくほくおいしいよね！。

うーん、焼き芋も食べたくなってきた。あと干し芋も。

「芋も桃も桃のうち」

「訳わかんないよ〜」

芋は桃のうちじゃないしね。

「何となく頭んなかに浮かんできて」

「どんな頭してるの〜?」

「こんな頭」

ですけど何か?

「そうじゃなくて〜」

「ミディアムヘアといいます」

ショートというほど短くもないし、ロングというほど長くも無い。

うん、ミディアムってここだよな?

「そうでもなくて〜」

じゃあ何ぞ。

あ、腹巻編みあがったはいいけど終わり方がわかんない。

……おかーさんに聞きに行ってもいいけどー。

めんどくさいから、明日学校に行ってからやるっ。

259 わが布団にお化けがやってきた

「ね〜んね〜ん〜、ころ〜り〜よ〜、おこ〜ろ〜り〜よ〜」

「……あの」

「なあに？」

わあ、なんて素敵な笑顔だろー、ってそうじゃなくて！

「なんで会ったことも無い人に子守唄歌われてんだあたしは！」

忍です！

寝ようとして布団に潜ったら……黄色い着物着た美人さんが壁通り抜けて入ってきて、子守唄歌いでした。

「ご丁寧にとーん、とーん、って叩いてくれたりもして。

……壁通り抜けてって事は人間じゃないよなあ。

「さあさ、もう遅いのだから寝ないとダメよ」

「……眠気ならアンタが入ってきた瞬間吹っ飛んだけど」

「あらあら、私はお菊よ」

お菊姉さん？ お菊姉さん、ねえ……。

「お菊さんか！」

「そうだって言ったじゃない」

ああ、ごめん。

「あの、お皿数えてるお菊さん？」

「……いっつも一枚足りないの。十枚一組のお皿なのに、九枚しかないの……」

おおう、リアルで見ると怖いわ、これ。

「さ、忍ちゃん。早くおねんねしなさい」

「いやあの、子供じゃないんだから……」

「中学生はりっぱな子供です」

そうかなあ？ ファミレスとかでお子様ランチ出してもらえないよ？ 電車とかは大人料金よ？

……あれ、ちよつと待てよ？

「なんであたしの名前知ってるの？」

「純から聞いたの」

「納得」

そういえば知り合いつて前言ってたね。

「お菊さんつて、お化けだよな？」

「ええ」

「お化けつて、普段何してるの？」

「好きな事してるわよ」

好きな事かー。好きな事……。

「例えば？」

「私は、お皿を数えてるわ」

「……なんで？」

「だって、怪談ではそうなってるでしょう？」

言っちゃっていいのか、お化けのほうがあわせてるつて。

「他には？」

「機織、お料理、お裁縫……お手伝いに行く事もあるわね」

そっか、怪談のお菊さんは奉公に出てたんだけ。

「じゃあそれが仕事かー」

「仕事？ ううん、好きな事してるだけ」

……ふーん。お給料無しつて事かな？

「お化けつてさ、着替えたり物食べたりするの？」

「そりゃするわよ。湯浴みだつてするもの」

湯浴み？ あ、お風呂入る事か。

「へー、お化けつて、ヒューどろどろのイメージしかなかった

や

「ヒューどろどろどろ？」

突っ込まないで。

「ねえ、足の無いお化けつているの？ あの、先っぽがシュツて細

くなつてて、白い奴」

「居るよ」

おお、本とに居るんだ。

「あれってどうやって移動してるの？」

「さあ……重心を傾けてるとかな？」

重力無視して浮いてんのに、重心とか関係あるの？

「あっ」

え？ 何？

「何か思い出したの？」

「忍ちゃん、もう寝る時間よ」

そこに戻るか！？

「ねんねん、ころりよ、おーるーじよ」

いや、歌わなくていいから……。

260 友を訪ねてぐるぐるん

「あー、あつたけえ」

昼寝日和だなー。光も寝てたし。……いや、光が寝てんのはいつもの事か。

岳だ。

ちよつと寒いけど、そこんこは日光がカバーして、すっげー眠くなる……。

つて、ここで寝たら変な奴だな。散歩中だし。

姉ちゃんでも誘おうと思ったのに、なんか勉強してたし。……あれ、ちよつと待てよ？ 勉強してた？ 姉ちゃんが？ 誘おうにも誘えないくらい集中して？

……そつかー、一応受験生なんだもんな。勉強くらいすつか。

「翔ん家行つてみつか」

暇なら誘お。

えーつと、翔ん家はー。

家出たすぐの道を左にまっすぐ行つたのがこの公園だから……すぐその角を右か。

はい、曲がりましたー、交番見えまーす。お巡りさん寝てマース、おい。

ここからまたまっすぐ行つて……あれ、駐車場にシヨベルカーがカーが付いてるからつてそこに止めちゃダメだろー。

右手に見えますは、空き地でございまーす。猫が会議中でーす。でも『立ち入り禁止』の札が立ってるから入りはしねーよ。

はい、そんなこんなで翔ん家……アパート《梅干しおにぎり》の三三五に着いた。

あれ？ ピンポンに紙がくつついてる。

『ピンポン壊れてます。ドア叩いてください』

玄関チャイムって言えよ。もしくはインターホン。いや、オレも

ピンポンつつつたけどよ。

ゴンゴン

鉄製の扉だからこんな音がする。

ゴンゴンッ

あれ、居ねーのかな。

『はい！』

あ、おばちゃんが生きた。

「ああ、岳くん」

「ちわー。翔居る？」

「ごめんね、修也の家行っちゃって、さっき出てっちゃった」

あちゃー。

ま、いっか。どうせ修也も誘うつもりだったし。

「んじゃ、オレも修也ん家行っちゃきまーすっ」

「はいはい、行ってらっしゃーい」

うわっ、蜘蛛が上からぶら下がってきた……。もうちょっと驚かせないようにぶら下がれよ。おっきくなってゆっくりぶら下がるとかさ。……余計びっくりするわ。やっぱやめろ。

あ、ヤモリも居た。？まえて飼おっかな。でも絶対最終的に母さんに任せるしなー。やっぱいいや。

えっと、修也ん家はどこだったかなって。

……どこだっけ。

えーっと、確かー。《梅干しおにぎり》……何回も思ったけど、もっかい思うわ。このアパートの名前、何だよ。なんで梅干しおにぎりなんだよ。普通ねーよなこんな名前のアパート！

すっきりしたあー。

で、えっと修也ん家は《梅干しおにぎり》でてから左に曲がって、元来た道に戻って……交番の前の交差点では曲がらない。

とにかくまっすぐ真っ直ぐ生き続けて……もとい、行き続けて。そうしたら団地があるからー。

……あ、確かこの団地のどっかの棟だ。思い出した！

何棟だったつけ？

思い出せてねーじゃん、オレ。

数字棟は1から4と13除いて17棟まであるはずだからー。抜く必要あんのか？ 4棟と13棟。確かに不吉な数字だけでも。

修也ん家はあああああつ！ 3か15だ！ どっちだよ！

よーつく考えよー。お金は大事……ってこれじゃなくて。

うーん……前に修也ん家行ったとき……確か、でつけーイチヨウの木があつたはず。そんなんがあるのは……3棟だけだ！

よっしゃ、見つけたぜ！ 修也ん家……何号室だよ！

ううー……ポスト見ていくしかねーかあ。

えっと、風上、風上……あつた！ 四 一号室！ 四階かあ。二段飛ばしで行こ。

ポーンピーン

……変な音だなー。

「あらつ、岳くんじゃない。修也が行かなかつた？」

「え、じゃ、修也……」

「岳くんの家に行くって言うってたけど……」
うそお。

「じゃ、翔もそつち？」

「翔くん？ ああ、走って追いかけてたわね」

「あちゃー。何処ですれ違つたんだ？」

「ま、車もそこそこ通るような道だし、しょうがねーか。」

「あんがと、おぼつ……おねーさん！ んじゃ」

「はあ〜い」

前におばさんって呼んだらこめかみグリグリされたんだつた。意外と痛かつた。

本人曰く三十前半らしいしなあ……。母さんに比べりゃ大分若い。でもやつぱおばさんって言うていい年齢だよな？

「あ〜、岳くんだ」

「あ、桜ちゃん」

「久しぶりだね」

「うん、そーいやそだな」

夏祭りで会ったのが最後だし。

「忍、何してる？」

「勉強してるぜ。飽きてなきや」

「お、最近真面目だね」

最近？ ……うーん、文化祭の衣装づくりとか、家でやってたあたりそーかもな。その衣装が腹巻きじゃなきやもつと真面目に見えるたのに。

「がんばれ〜って伝えといて〜」

「あーい」

……桜ちゃんが持つてるマイバック。リンゴの赤とか、ホットケーキミックスって書かれた袋とかが透けて見えただけ。

「にゃー」

「ごめん白猫クロ。オレ、お前の言葉は分からん」

……あれ？ シロだっけ？ いやでもギャグで付けたんなら……。ああもうめんどくせえなあ。どーでもいんだけど。

「ただいまっ！」

ふいー、疲れた。

「おかえり」

「あれ？ ねーちゃん、修也と翔来なかったか？」

「ああ、翔ん家行ったって言っつといた。どうせ散歩の途中に行くんじゃないかと思って……」

また翔ん家行けと！？

260 友を訪ねてぐるぐるん(後書き)

《梅干しおにぎり》の名前の由来、今日の私の軽食です(笑)

261 勉強してる人を邪魔するには

「……お姉ちゃんが壊れちゃったよ、お兄ちゃん」

「曲がりなりにも受験生じゃん？ 今まで勉強して無かった方がおかしんだよ。……多分」

「受験つてそんなに大変なの」

「ちゃんと習った事覚えていれば、まず？ 類には受かる」

「……つて聞いた。教師から。」

「じゃあお姉ちゃんは？」

「社会はほとんど覚えてない。理科も一年の方はちょっとあやふや……とか言ってたな」

純だ。

忍が昨日から一日の殆どを勉強して過ごしてるもんだから、光が騒ぎ出した。

「……別に、壊れちゃいないんだけどな。ちゃんと無駄に寝てるし。食ってるし。」

「何で今更勉強し始めたんだろ」

今更とか言うな。まだ間に合う時期なんだから……どっかの塾の宣伝広告曰く。それは即紙飛行機になったけど。

「白銀に本気で行きたくなくなったと」

「なんで？」

「俺が知ってると思うか？」

「思う。だって純お兄ちゃんだもん」

光の中で俺は何者になってんだ。

「知らねえよ」

「岳お兄ちゃんは？」

「知らねーよ」

突然勉強しだしたんだから……なんか不気味だな。人の事言えねえけど。

「気になんなら聞いてみりゃいいじゃねえか」
「怖くて聞けな〜い〜。純お兄ちゃんみたいにな〜……」
俺みたいにな、何だよ。
「話しかけちゃいけない気がする〜」
「俺がいつ『話しかけちゃいけないような気がする』状態になった」
「いつも〜」
今話しかけてんじゃねえか。
「パズルしてる時の兄ちゃんだよな!」
「そうそう〜!」
盛り上がるな。確かにその時話しかけられたくねえけど……。
「で、姉ちゃんどうしょ」
「お姉ちゃんだから〜、飽きたらやめるよ〜」
「だろうな。……止めちゃ駄目だろ、勉強。」
「……あれ? お袋が冷蔵庫から、丸い入れ物取り出してる……」
「レアチーズケーキ作ったけど食べる〜?」
「もちろん!」
あ、二階で物音が。
なんかすごい勢いで階段下りてくる足音が。
「レアチーズケーキあんの!?!」
忍の奴、飽きる前に勉強止めやがった。
「作ったの〜」
「おー、おかーさんの手作り」
「……なんでもう忍と光の手にフォークが握られてんだ?」
「早く食おーぜ!」
「岳、ナイフを振り回すな」
「あい」
「分かればよし。」
「ね〜、お姉ちゃん〜」
「んー?」
「何してたの〜?」

「べんきょー」

「なんでー？」

「あたしが勉強しなきゃいけないの！？」

「だれもそうは言ってるねえし。」

「だって急に始めるからびっくりしちゃうんだもん〜」

「酷いなー。あたしだってやるよ、勉強くらい」

「めんどくさがってやってなかったくせに。」

「……白銀行きたいし」

へえ。

「なんて〜？」「姉ちゃん、今なんだった？」

「スルーよろしくー。いただきます」

いただきます。

「召し上がれ〜」

「ね〜、お姉ちゃんなんて言ったの〜？」

「なーなー、聞こえなかったって。もっかい！ ワンモアチャンス

！」

何か違うぞ、岳。

「ごちそさま」

『食うの早っ！？』

いつの間に……。

「あ、忍」

「んー？ 何、純兄」

「暗記モノは寝る直前にやった方がいいぞ」

「あーい。分かった」

……昼寝するつもりじゃねえよな？

262 ちょっとずつこい衣装係

「すっげーな。もうこんなに衣装できてんのか」

「おー、清。手伝いに来たの？」

「いんや。ちよつと見に来ただけ」

見に来る暇あんなら手伝えや。

つと、つい本音が。

忍でーす。

「衣装係つて、おめーと、純と、鈴木と中森しかいねーんじやなかつたっけか？」

「そうだけど」

純兄は衣装の小物担当だけどね。

「何着作るつってたっけ」

「んと、十着くらい？」

「多っ!？」

え、少なくない？ うちのクラスは三十五人だよ？

「何の服だよ？」

えーつと……。

「ミイラの服でしょ」

「ミイラの服ってなんだよ」

一着目から何で突っ込むかな。

「体に包帯まくのは時間がかかるから、包帯まきつけた様に見える服作るんだよ」

「ああ、はいはい。んで？ 他は？」

「ガイコツ服でしょ」

黒地に骨の絵。はつきり言ってガイコツには見えない。

「魔女の服と帽子に……」

竹ぼうきは学校にあったからそれつかうつもり。ぶっちゃけ邪魔なだけなきがするけど。

「フランケンシュタインのネジとか服とか」

「どんな服だよ」

「肌色に傷だらけ」

「……………どやって?」

「Tシャツに傷のお絵かき。あ、絶対フランケンには見えないな。」

「ゾンビのぼる服とかもあったな。あと、ドラキュラとか白頭巾とか」

白頭巾は、あれね。よくある足が無くてふよふよ〜って出て来るやつ。

「へえ。何着位出来てんだ?」

「八着はできてんじゃないかな」

「早あ!?!」

ちよつと部外者にも手伝ってもらってるからね…………。

「…………なあ純、なんで俺がこんなことせないかんと?」

「忍に頼まれて即OKしたからじゃねえか」

「いや、だって…………なあ? 忍ちゃん美人やしー、まず女の子に頼まれたら断れんじやろ?」

純だ。

死神の方の忍の言う事はいまいち分かんねえ。

「でもねー、純? 他人に仕事押し付けるのはどうかと思うよ?」

………… 人聞きの悪い。いや、そんなん気にしたりしねえけど。

「リオ、激辛キムチご飯五杯」

「喜んでやらせていただきます」

ほら、自分からやってんじゃないやねえか。俺は押し付けたんじゃないやねえ。

戻って、忍です。

死神さんたちやってくれるからとっても楽なんだよね。

皆何気に器用だし。滅茶苦茶縫い目綺麗。ぶっちゃけ言つと全部任せちゃいたい。

「忍、純は？」

「ちよつと霊界に」

「……ちよつと？」

いいじゃん。ほいつと行ってほいつと帰ってきてるんだから。ちよつとで。

「……あのさ、純ってマジで死神なのか？」

「さーね」

なんて答えたほうがいい？

『忍ちゃん』

「あ、お菊さん」

今日の着物は何気に黄色が薄い。

『はい、頼まれてた服。出来たよ』

「ホント何着もありがとうございます。お菊姉さん」

『やあね、気にしないで。好きでやってるのよ』

あー、いい人だ。

「忍、お前何と話してるんだ？」

「お菊さん。何とか言わないで。立派なお化けだよ」

「……マジで居んの？」

マジで居ますよ。ほら、清の後ろ。たった今実体化したよ。

「清！」

あ、しーちゃんの声でびっくりしたのか霊体化した。

「清！勝手にサボるな！」

「……清、アンタサボって来てたの？」

わー、サイテー。

「え、さつき休憩つつたじゃねーか！」

「一分はとつくに過ぎてる。早く来い！」

……え？ 休憩、一分？

263 強風ってすごいね

「風、強いね」

「びゅ〜んびよ〜！ だね〜」

「……それ、風？」

風だよ〜。

光ですよ〜。

風が強くて〜、曇ってて〜、つまり外は結構寒いわけ〜。

なので今日は学校から帰った後家の中で遊んでます〜。

ついでに〜、家の前の道路が見える一階の大きな窓から外見てます〜。

……あれ〜？ 今一反木綿みたいなモノが飛ばされていったよう
な〜……。気のせいかな〜。

「あ、見てみて！ タオルが飛ばされてる！」

ほんとに飛んでた〜！

「……おばさん、追いかけてる」

わ〜、タオルを追いかける裸足の主婦だ〜。

どこぞのお魚一家の長女を思い出しちゃうんだけど〜……。

「あ〜っ、誰かの黄帽が飛んでってる〜」

小学校登校する時とか〜、校外学習とかの時にかぶる、あの黄色い帽子ね〜。

「すっごーい！ 男の子用のも飛ぶんだ！」

「ちゃんと回ってる……」

フリスビーみたい〜。

帽子をフリスビーみたいに飛ばすのは何回もやったことあるよ〜。
一回学校のプールに落ちちゃったことあるな〜。

「あ、追いかけてる追いかけてる！ ……って、あれ、岳くん？」

「……ほんとだ」

え〜？ あ〜、ホントだ〜。

岳お兄ちゃんが帽子追いかけて家の前素通りしちゃった。ちやんと一回帰ってきてね。

「あ、女の子用の黄帽もだ」

「……奈那子ちゃんだ。修也くんも一緒……」

「ここ帰り道だもんね。」

「あーっ！ 翔くん、近く歩いてるおねーさんのパンチラ気にしてる！」

「あれはパンチラって言わないよ。」

「思いつきりめくれ上がってるもん。あれだけ堂々と丸出しにしてたら誰だって気にするくらいには。」

「……と言うかお姉さん、よく気づかないね。」

「あ、お爺さんに教えてもらったみたいだよ。」

「何か話しかけられてる。」

「……そう、かな」

「お爺さんがビンタ喰らっただけなんだけど……」
「違ったのか。」

「お爺さん何言ったの？」

「あ、今度はカッターナイフが飛んで……ええ!？」

「……どやって……？」

「世の中不思議がいっぱいだね。」

「あーれー、お代官様」

何か帯がなっがい着物の女の人飛ばされていった。多分幽霊。

「よいではないかー、よいではないかー」

何か変な男の人の幽霊も飛ばされていった。何してるの。

「って言うか幽霊って風の影響受けないよね？ 本当に何がしたいの？」

「ふいー、ただいまっ」

「お帰りー！」

「帽子捕まっただね。」

「帽子無事だった？ 岳くん！」

「木に引っ掛かったから、石で叩き落とした以外には無事だぜ」
背伸びして取れなかったの？」

そもそも気に引っ掛かった帽子って石叩きつけて取れるものなの
？

「あゝ、お姉ちゃんと純お兄ちゃんだ〜」

今日は早いな〜。いつもは岳お兄ちゃんが帰ってきててもなかなか
帰ってこないのに〜。

時計『17:42』……岳お兄ちゃんが遅いだけでした。

「あつ、忍ちゃんの鞆が飛ばされたっ！」

『どござって!?!?』

264 食欲の秋

「うまー」

「忍、顔とろけてるぞ」

「いーの。柿美味しいから」

とろけてるのは柿の方だし。

忍でーす。

学校から帰ってから、じゅっくじゅっくの熟柿食べてます。熟しすぎでどろどろになったアレ。甘いよねー。

種周りのちゆるちゆるしたところが一番好き。

「あゝっ！ お姉ちゃんズルいゝ！」

「ズルくないもーん。こーゆーのは早い者勝ちだもんね」

「そんなルール無いもんゝ」

あるもん。あたしの中では。

「ちよつとちようだいゝ」

「ほい」

……あれ、なんかすごい勢いで柿が減っていく。

「こら、全部食べようとするな！」

「えへへゝ」

「光、口周りに柿の汁付いてんぞ」

ほんとだ。どんだけ急いで食べたの。

「分かってるよゝ。洗って来るねゝ」

ほーい。

「あれ、純兄何食べてんの？」

「みかん」

みかんかー。

「酸っぱくない？」

あたしが食べるとき、たいていみかん酸っぱいんだけど。

「かなり甘い」

「いいな」。

「一個ちようだい」

「カゴン中から取れよ」

「いや、それじゃなくて……」。

「んと、薄皮に包まれてる一個ね」

「一房、だろ？」

「あ、そんな数え方なんだ。」

「じゃ、一房ちようだい」

「ん」

「……ちよつと酸っぱい。」

「純兄の嘔吐き」

「熟柿食つてたからじゃねえのか」

「あ。」

「しまった……」。

「お兄ちゃん、私にもちようだい」

洗面所からお帰り、光。

「ん」

「ただいまっ！」

「あ、岳帰つて来た。」

「お帰り〜！」

「お帰り。どこ行つてたの？」

「修也ん家」

「ああ。あの子か。」

「あれ、姉ちゃん、熟柿食つてんの？」

「うん、食べる？」

「あ〜ん」

「光はさつき食べたでしょ。」

「口開けてスタンバイしない。鳥のヒナかアンタは。」

「オレはいらね」

「こんなおいしいのに」

特に種周りのちゆるちゆる。あ、なんか昔の人の名前みたい。

「やっぱり柿は硬いのだろ！　じゅくじゅくとか、甘すぎるじゃん？」

「いや、確かにそっちも美味しいけどさー。柿はじゅくじゅくの方が旨いよ。ね、光」

「どっちも美味しいよ」

両方かい！

「歯ごたえある方がいいって！　なあ、兄ちゃん」

「俺はじゅくじゅくと硬いのの間がベストだと思う」

純兄はどっちでも無かった！

「あ、そういえば裏山の柿、どうだろ」

「姉ちゃん。急に話変えんなよ」

だって気になったから。

裏山に、そこそこ大きな柿の木あるんだよね。渋柿だけど。

干柿にしたら美味しいから……種めっちゃでかいけど。そのせいで

実はあんまり無いけど、生った年は取ってきて干してるんだよ。

今年、確か生ってたはず。

「あー、なんか、裏山の柿の事考えてたら、急に干柿食べたくなくな

ってきた」

「あ、オレもオレも」

「私も」

干柿は皆好きなんだよね。

「早くオレンジ色にならないかな」

「あ、まだ緑色なの？」

「先っぽの方はオレンジなんだけどね」

うー、そっか。

「気長に待とつか」

『駄目！』

うお。なんで急に怒鳴るのさ。

「気長に待ってたら」

「他の動物ライバルに採られるだろっ！」

そ、そっか。

「だから今から採りに行くと
それは早すぎる。」

265 お父さんと虹色のクスリ

「ねえ斬くん。そのおかしな色の物体が何かおにーさん知りたいな
……………」

「……………ほんと?」

「やっぱり嘘です知りたくないよ」

「じゃあ、聞かないの」

「はい……………」

うわあ、四歳にたしなめられる二十一歳の図? 我ながら情けな
い……………。

リオンです。純からはリオって呼ばれてます。

部隊長、妙羅さんは昼寝中……………あれ、もう夕方なんだけど。忍と
純は現実世界で学校。エイラさんは恐らく天ちゃんに振り回されて
いるのでしよう。

「りおにい」

ああ、手元の虹色の固体が無ければ凄くいい笑顔なのに。

「実験体、よろしく」

「丁重にお断り申上げさせていただきます。はい」

剣くんが悲惨な事になってる所は何回も見ただからね……………。いま思
えばよく生きてるなあ、あの子も。

「えー」

「えーじゃないの。大体何のクスリなの?」

「美少年になるクスリ」

「今さらつとすごい事言わなかった!?!」

どんなクスリだよ。あ、虹色のクスリか。

「欲しい?」

そりゃまあ、欲しいつちや欲しいけど……………。でもねえ。

飲んだ瞬間、逆のことが起こる可能性だっただけだし。むしろ、そっちの方が確立高そう。

「いらないよ」

「チツ」

チツ!? いま舌打ちしなかった!?

「こら、舌打ちなんかしないの」

「チツ、チツ、チツ」

鳥でも呼んでるの?

「誰か、飲ませてくる」

「待ちなさい」

他人に迷惑掛けないの。

……あれ、今誰かがノックする音が聞こえた。

「はい?」

「ライオン羅恩です」

ああ、ライオン、もとい羅恩先輩。

「開いてますよーってこら、斬くん!」

ゴム鉄砲スタンバイしない!

パチンッ

あーあー、跳ね返って自分の手に当たっちゃった。

「……これ、あまり痛くない」

所詮ゴムだからね。

「生きてたか、ライオン」

「生きてないですよ、死神だから」

「分かった。体壊さなかったか」

「今のところは」

多分、これからも大丈夫……か、な?

「で、どうしました?」

「いや……こいつ等の事で」

凶悪トリオね……。羅恩先輩の教え子だったっけ、曲がりなりに
も。

曲がりまくりにも。

「皆無事か?」

「楽が出来るって一部喜んでます」

トリオに関わってない人たちが。全く、この子達の恐ろしさを分かかっていない！

「……………そ、か」

羅恩先輩、足凍ってる。凍ってるといえば……………。

「斬くん！ 部屋の中で氷使っちゃだめでしょ！」

「え」

「えじゃないの！ ちょっとそこに座りなさい」

てとてとと走ってきて、指された場所にちよこんと座る。

うーん、和む。

じゃ、なくて！ 今日こそはちゃんと叱つとかないと。

子育ての本に書いてあったし。間違った事は間違っているとかやんと言いなさいって。

「あれ、羅恩先輩、どうしました？」

「……………お父さんが、お前は」

半笑いの視線を向けないでください。

全く、純といい羅恩先輩といい、他の人たちといい……………なんで俺の事お母さんだの、お父さんだの言うかなあ？

「こんばんは、羅恩先輩」

あ、純来た。

「おう、純か。久し振りだな」

「昨日会ったと思うんですけど。ボケました？ 年ですか？」

いつもの事ながらキツいな。

「……………純、ちょっとそこに座れ」

「はい」

素直に座る純。

「……………えつと」

どうしようか困る羅恩先輩。考えてなかったんだ。

こっち見られても困りますよー。

「りおにい。いつまで座ってたらいい？」

「あ、ごめん。斬くんのこと忘れてた」

「ひでえって、こういうとき使う？」

うん、そうだけど、何処でそんな言葉覚えたの。

……あれ？

「純、今、何か弾かなかった？」

「ぐうっ」

「羅恩先輩！？」

……あの、まさか。

「さっきの、クスリ？」

「解毒剤あるって言うからには大丈夫だろ」

「お前も結構緩いよね！」

制服きっちり着てる割には……純、今のはけなしたんだからね？

「ふうっ」

「あ、羅恩先輩、大丈夫、です」

か……？

顔が別人に！？

「なんか、フェ〇ゼンを思い出すな」

誰！？

「成功」

いや確かに美少年……ってか、美男子になってるけど……。

現実世界の、昔の、少女漫画みたいなの……。二次元な顔が目の前
にあるんだけど。

「怖いわ！」

「流石に同感」

「じゃあ、豚になるクスリどう？」

じゃあの意味がわかんないよ！

「お姉ちゃん。見てみて」
「んー？」

忍です。

冷蔵庫を開けて、中におかーさんの物だと思われるビターチョコ
レートを発見し、ほくほく顔で食べようとしたところに光が走っ
てきました。

チョココマ。

光は手に、白くてテカってる板とペンを持っています。

「どしたの、それ」

「てってりー！ ホーワイートボード」

いや、それが何かを聞いたんじゃなくてね。

「これに、この黒い水性ペンで落書きしても」

何描いてるの？ 竜巻？

黒い竜巻、なんかリアル。

「簡単に消えるんだよ！ 凄いでしょ」

「そう？」

「まるで学校のホワイトボードだよ」

「いやだから、ホワイトボードなんでしょ」

「そうだった！」

今気付いたんか！？

「で、どしたの、それ」

「迷子になってたの」

「迷子のホワイトボードがそんなに綺麗なわけではないでしょ」

どっからどう見ても新品だよ。

「も。ノリが悪いなあ」

やれやれって仕草されても……。どうノれと？

「お父さんが買ってきてくれたんだよ」

「おとーさん？ 帰ってたの？」

全然気づかなかった。

「ただいま」

「お帰りー」

今分かった。

「ど？」

「何が？」

「ホワイトボード。気に入った？」

気に入った？ って言われても……まだ使ってないし。

「お姉ちゃんも何か書く？」

「うん」

うーん、と。よし。

『ビタチヨコ万歳』

「ビタチヨコってそんなに長生きなの？」

万歳の読み方違うから。

「ばんざいだよ」

「なんだ。万才かと思ったよ」

そんなんだつたらたしかに長生きだけど。

「あ、お姉ちゃんこんどは何描いてるの？」

「今時ワン ースの中でしか食べてないような肉」

「なんで？」

食べてみたいじゃん。ほら、骨持って、がぶつと。

あ、ト とジエ ーでも食べてるな、この肉。

「気に入った？」

「なんとなく」

さらさらと描けるから楽しいやこれ。感触とかが。

「おとーさんにも貸して」

「ほい。何描くの？」

黙々黙々……。

「よし、できた」

「絵上手〜！ 昔のギャグ漫画みたい〜」

それ、褒めてるの？ 古いつてけなしてるの？

「パイはパイでもパイ投げのパイ」

「どう違うの？」

同じじゃないの？

「パイ皿にクリーム盛っただけ」

それパイじゃないじゃん。

「これもパイなの。パイ投げ用のパイはこんななの。……たしか覚えてないの？」

「あれ、何だそれ」

「あ〜、岳お兄ちゃん〜。何かかく〜？」

「え？ あ、ホワイトボード……どうしたんだよ、これ」

「おとーさんが買ってきた」

「納得」

早い。文句はないけど。

「何かくかな〜。あ、よし」

ん？ 何かくの？

「マツチヨ！」

くるつとひっくり返して見えるようにしたホワイトボードには……

…。

ハゲの、むつきむきの男の人が描かれてた。何気に上手い。

「なぜにそれ？」

「パツと思い浮かんだのがこれだったから」

何でマツチヨがパツと思いつぶの！？

「なんか、ねーちゃんだけには言われたくないこと思われてる気がする」

岳、アンタはエスパーか。

267 ハロウィンパーティーをしよう 夢の中

「ねえねえ、はっちゃん!」

「それ、ウチの事?」

「そうだと思うよ。佐紀ちゃん、思いっきりはーちゃんの方見て言ってるもの。」

「……美代です。」

「初めに言っておきます。心の中では結構普通にしゃべります。口に出してないけど……。」

「えっと、それはともかく、放課後です。今から帰ろうとランドセルを背負ったところです。」

「ひーちゃんは眠気マックス、ぽやっとしててなんだか可愛い。」

「それともかく、佐紀ちゃん……何の用だろ?」

「明後日、ハロウィンパーティーしよ!」

「もうすぐだものね!。何かおかし作るのかな?」

「ハロウィン? ハロウィンは明後日の次の日だよ!」

「明々後日って言うんだよ、はーちゃん。忘れちゃったの?」

「ヤダな、明後日の次の日は学校があるから、日曜日の明々後日にするんじゃないか」

「だから、明々後日だってば。……あ、声に出してないんだから、聞こえてないのか。」

「ああ、そか。ひーちゃん、みーちゃん、どうする?」

「……賛成」

「うー、なんでもっとはっきり言えないかなあ、美代。家族にもこんななんだよ……。」

「みーちゃんは賛成か。はーちゃん、どうする?」

「ゆめうらら?」

「疑問形なのは何故? ひーちゃんってたまに不思議。」

「ハロウィンパーティー! 起きて!」

今の寝言なんだ。というか、立ったまま寝てるんだ。

「……………お腹いっぱい〜」

「そんなベタな寝言言ってるんで起きてってば!」
本気寝なの? これ。

あ、呼吸ゆっくりだから、本気寝?

「す……………」

立ったまま熟睡してるよ、ひーちゃん! ……凄いなー。どうして倒れないんだろう?

「ひiiiiiiiiいちゃあああああん!」

「……………五月蠅い」

「ミックスちゃん、そりゃ言いすぎじゃ……………」

ミックスちゃん? 美代の事? 佐紀ちゃん、前は美代の事みよよんって言ってたのに。

それに『み』しか合ってるないよ。

「う〜、家着いた〜」

「ワープでも使ってたの!？」

「夢の中でね〜、ユーフォー見つけてね〜、それに乗ってね〜、地球一周しよ〜って事になったんだけど途中で飽きてね〜」

飽きたの!? 地球一周する途中で!? そもそもユーフォー乗ったの!? いいな、いいな! 美代も乗せて!

「それでね〜、家に帰るためにワープ使ったの〜。そしたら『ひいひいひいひいちゃああああ……………』って音と共に隕石が落ちてきてね〜」

不思議な音立てる隕石だね……………突っ込んだじゃ駄目だよ、夢なんだから。

「で〜、起きたの〜」

「なんで隕石が落ちてきたところで起きたのに『家着いた〜?』なの!？」

「佐紀ちゃん〜、そんなところに突っ込んだじゃ駄目だよ〜」

「ええ!？」

こんなところで駄目出しー。

「で、何の話してたの？」

あ、ハロウィンパーティーの話してたんだったよね。

「ハロウィンパーティーやるって話だよ！」

「やるー！」

「……即答」

気持ちいいくらいに即答だったよ。

「明後日なんだけど。ピカちゃん空いてる？」

「午後ならね」

ひーちゃんは確か、日曜の午前中にピアノやってるんだよね。

「じゃあ、決まり！ どこでやる？」

「佐紀ちゃん家でやる」

ひーちゃん、ノリノリだね。やる気満々だね。さっきまで寝てたのが嘘みたいだよ。

「あたしの家は駄目！ 狭いもん」

「じゃあみーちゃん家は？」

「父上……多分、嫌がる」

お祭り騒ぎ嫌いなんだもの。楽しいのにー。

「ひーちゃん家は？」

「お姉ちゃんが勉強頑張ってるから控えてって言われるよ」

……忍さんが？ 勉強？ 頑張ってる？ ……会って半年くらい

とはいえ、想像できないなあー。

「じゃ、消去法ではつちゃん家は？」

「大丈夫だよ！ お兄ちゃんがもし勉強するなら、ひーちゃん家に行ってもらえばいいんだし！」

便利だね、お隣さんって。しかも家族ぐるみのお付き合いしてるような家って。

「決まり！ じゃあ、明日……何時にしょ」

「ご飯食べ終わった人からはーちゃん家に電話して、それから行ったら？」

「オツケー!」「りよーかーい!」「それでいい……よ
ちゃんと電話するの、忘れないようにしないと。」

「……………うにゆ?」

「あ、起きた?」

「うー……………、揺れるうー。」

「どこ?」

「兄上様の腕の中」

「あい? あ、そう言えば足が床に付いてない…………。」

「ゆーうーかーいーさーれーるー」

「人が運んでやってるってのに何ちゅー事言うんだよ」

「つい、言ってみたくて。ごめんね兄上。」

「おらあつ!」

「ぴゃああつ!」

「酷いよ! どうして投げるの!? 布団の上だからいいけど…………」

「あふ、お布団きもちい!」

「それにしても、妙にはつきりした夢だったなあ…………。昨日の放課後、そのまんまだったよ。」

「美代、お前な、寝るのはいいけど居間で寝るのは止めるよな」

「あう?」

「あうじゃなくて、運ぶの俺なんだから、居間で寝るのは止めるよなうって」

「……………はい」

「あ、また眠くなってきた!」

「兄上、今、何時?」

「十二時」

「眠いわけだよ!」

「……………兄上、お風呂入ってない?」

「普段着姿、パジャマじゃないし…………。あ、兄上のパジャマってジ

ヤージだった。

「勉強してたから」

ほえー。

「……受験？」

「うん、まあ……」

今までずっと部活部活でやって無かった分のツケが溜まってたんだね。もしかすると。

「……兄上、ハロウィン……しないの？」

「それは毎年やってねえし」

そういえばそうだった。

「はーちゃんとね、ひーちゃんとね、佐紀ちゃんと一緒にね、ハロウィンパーティーする」

「……自慢け？」

ううん。

「兄上も、行く。言っとくから」

「や、俺は流石にその中には入れねえだろ……むしろ入っちゃダメな気が」

なんで？

「いいの。純さんも、なつくんさんも居るんだよ？」
隣の家に。

「……いやいやいやいや。やっぱ行かね」

「うー」

なんでー。

「早く寝ろよー」

「……兄上もね」

頭の整理するのに睡眠大事って、ひーちゃんが言ってたもの。……寝まくってる口実に。

あ、そうだ。兄上は、こっそり伝えて無理矢理連れて行こつと。

「あーうー。楽しみ……」

明日の、あ、今日になっちゃってる。ハロウィンパーティーー。

268 ハロウィンパーティーをしよう 大人数で

「串刺しても何もついてこないよ！」

「パンプキンパイ完成だね〜」

「……いい匂い」

「ねえ、カボチャの皮つて入れる必用あったの？」

「彩も大事だよ！ お菊姉さんの受け売りだけど。」

「春だよーっ！」

今日はハロウィンパーティー！ ハロウィンは明日だけど、明日は学校があるからゆっくりできないもん。だから今日！

「……何故俺はここに居るんだろっ……」

「みつくん！ なんでそんなに暗いの！？」

みつくんって、岬くんだよ。お兄ちゃん達のクラスメートの。

みーちゃんが引きずってきたんだ！ ……意外と強いね。

「ハッピーハロウィン〜！」

クラッカーがパーン！

いつ買ったのかすらわからないクラッカー、昨日押し入れて見つけたんだけど……多分お兄ちゃんが失くしたモノ……ちゃんと鳴って良かった！

「ちょっと、何俺抜きで面白そうな事始めてんのよ？」

「お兄ちゃんは勉強しなきゃなんでしょ？」

「忍ちゃんはやってるよ！」

「息抜きは必要！」

「って言って昨日も遊んでたくせに！」

「はーちゃん」

「あ、純くん！」

……普段春なのに、なんで今日ははーちゃんなんだろう。

ま、細かいことは気にしない！

「……出来たの？ アレ……」

みーちゃんが言うアレとは……。

「ん」

『きゃあああああ！ すっごーい！』

本物のジャック・オ・ランタン！ ジャックランタンでも可！
ちゃんと黄色いし、目も鼻も口も穴開いてる！ かわいいっ！

「純くん！ コレ、あたしにちょうだい！」

ねえ、なんで純くんは普通に呼ぶの？

「えーっ、佐紀ちゃんズルい！ ウチも欲しい！」

「……美代も」

「私も〜！」

純くん、後三個作って！

「……カビるし、腐るぞ？ それ」

『……え？』

なんて？

「だから、そのカボチャ生だから、そのうちカビるか腐るかするぞ
っつて」

『……ええ〜っ!?!』

やだよ、そんなの！

「そんな事になったらただの巨大生ごみじゃんか〜」

「ピカちゃん、それはハッキリ言いすぎじゃ……」

事実だけどね！

「山に捨てとけば動物の餌になんじゃねえの？」

「そっか！ お兄ちゃん珍しく賢い！」

「……珍しくって言われた」

だって本当に珍しいんだもん。

「……あ、ジャックランタンが居る」

ある、だと思っよ、忍ちゃん。

……忍ちゃん!?!

「あれ〜？ お姉ちゃんいつ来たの〜？」

「たった今。んっつと、これ、欲しい人〜」

忍ちゃんが掲げたモノは！

ビーズでできた、ジャック・オ・ランタンやゴーストのキーホルダー！

『かわいいっ！ 欲しい！』

「あい、どーぞ」

キヤー、この白いゴースト可愛い！ つぶらな黒い瞳が何とも言えない……って、小学生っぽくないかな？

「しののんちゃん！ これどうしたの！？」

「そのあだ名どこで！？」

「え？」

どう言う事だろ？ 佐紀ちゃんのおだ名は完全オリジナル作品なのに。……作品じゃない？

「あ、気にしないで。それ？ 作った」

「ホントに！？ すっごーい！」

忍ちゃん、ビーズで色々作るの得意だもん！ 佐紀ちゃんは知らないんだっけ。

「あれ、なんで村田が居るの？」

「美代に引きずられてきたんだよ」

あ、岬くんの事きれいさっぱり忘れてた。

「……人聞きの悪い」

みーちゃんに謝れえー！ 本当にそうなのかもしれないけど。

「アンタそれでも……いや、ええと、アンタ、ほんとに兄？」

「なんちゅー事言ってくれるんだよ！？」

しかもわざわざ言い直したよ、忍ちゃん。

……あれ？ なんでお兄ちゃん、笑いかけてんの？

「忍……やっぱり休憩じゃなくなっくんじゃん」

「……あつ。そうだった！ これ、休憩のつもりで作ってたんだ」

休憩のつもりで、四つも？

あーっ！ お兄ちゃんこらえられなくなって大笑いし始めた！

忍ちゃんはウチ等のために作ってくれてたのにー！

ほら！ あんまり派手に笑うから、耐性の無い佐紀ちゃん引いてるよ！

「よ、陽気な人だねっ！」

佐紀ちゃん、無理して褒めなくていいんだよ？

「パンプキンパイ、あるだろっ！」

あれ？ 岳くん……と、翔くんと修也くと奈那子ちゃん！？

団体様のおな〜り〜。

「匂いするって言ったって、外まで届くわけが……って、ほんとにあるし！？ 岳くんだけ鼻いいの！？」

「へへん」

外でパイの臭い嗅ぎつけたの！？ 奈那子ちゃんの言うとおり、凄い嗅覚だね！

「犬並みだな……」「……犬」

「修也はともかく……美代さん、それはちょっと略しすぎだろ！？」
それじゃ罵倒になっちゃうよ！

「まあそれはともかく〜」

「ともかくしてくれるなよ！」

「じゃあもつと続ける〜？」

「いや、それはいい」

いらないつて意味のいいだね。

「じゃあなんで『ともかくしてくれるなよ！』とか言ったの？」

「早く食べよ〜！ 冷めないうちに〜」

「もうある程度冷めてると思うぜ？」

岬くん、そう言う事言っちゃだめなの！

えーっと、ウチと、みーちゃんにひーちゃん。佐紀ちゃんと岬くんに忍ちゃんと純くん、お兄ちゃんと岳くん、翔くん、修也くん、奈那子ちゃん……十二人かあ。多っ！

「良かったね〜、十二人で〜」

「どうして？ 一人分少なくなるよ？」

意外とケチだね、佐紀ちゃん。

「切りやすいもん〜」

半分に切って、そこからさらに半分にしたのを三等分すればいいんだよね！

……ウチからすればその三等分が難しそう。

「さあ、やってきました文化祭！」

『トリック！ オア！ トリートオ！』

ハロウィンの方で盛り上がっております。

忍です。

文化祭です。ちなみに、二日あるうちの一日目です。

飾り付けOKの三年一組の教室は、朝のSHRがものつ淒いやりに
にくいです。

だつてあつちこつちに黒い布が垂れ下がつててさー、通路程度の
隙間しか空いてないしさー。まあ、いいけど。

「先生、お菓子くれないんですか？」

しーちゃん、誰もが言いたそうにしていた事を見事言ってくれま
した。

「あの、ここ学校なんだけど……」

「展示物の名前は『オバケ喫茶』だからお菓子があつても問題ない
んです」

誰だ、今の屁理屈。

「いや、あのねえ……」

「くれねえんだと。フルボッコでいいか？」

いや、あのね、純兄……。

『やつちまえー！』

悪乗りするなよ、クラスの奴等も。

開会式が終わり……ん？ 突然飛んだ？ 気にしない。

柿の種ならオバケ役にピッタリな腫れあがった顔に……は、なつ
て無いけど、クラス中の罵声を浴びて心がフルボッコになっていま
す。

「ちゃんとやってよ、二人とも」

「ねえ、桜……空気読んで前から言わなかったんだけどさ……暗い中をオバケの格好してわいわいきゃいきゃやるのってさ、展示に入るの？」

「詩と同じだよ、やる人が展示だつて言ったら展示なの」

何その一瞬納得してしまいそうでできない理由。

「オバケ屋敷とどう違うんだよ？」

「全然違うないよ」

あつさり認めやがった、この人。

「うわ、似合いますぎだろおめー等」

うん？ あ、村田。

「ドラキュラか？ それ」

「うん、一応ねー」

学ランのズボンに、普通のカッターシャツ着て、上からマントを羽織るだけ。純兄も同じ。ちなみにズボンはジジミ……もとい、紫波から借りました。

……紫波、小っちゃい方なのに……結局ぶかぶかなんだけど。

「うん、似合ってるぜ」

「改めて言い直さなくていいんだけど」

ドラキュラの衣装似合うって、褒められてるのかけなされてるのかよく分かんないね。

「……あの、桜さん？ さっきからあたしの背後で何してるの？」

「髪くくってるの。純くんもくくってね。そっちの方がそれっぽいから」

あ、そうですか……。

「うっわー、やっぱりお前等兄妹だよな。同じ服来て同じ髪型したらめっちゃ似てるじゃん」

身長を除いて、とか言つて笑いやがった。殴っていいい？

なっくんはフランケン役？ 肌色Tシャツに傷の落書きしたの来てるけど……

「思った通り全然フランケンシュタインには見えない」

「じゃあこんな風に作るなよ!？」

「だって」。

「めんどくさかったんだもん」

「だもん　とか言うな!　ちょっと可愛いじゃんかよ」

「そりゃどうも。」

「あ、夏」

「あん？」

「小物忘れてんぞ」

小物？

「ネジカチューシャ」

「……………あの、確かに頭にネジが付いてた方がいいとは思って…

…何でカチューシャなわけ？」

その方が頭に付けやすいからに決まってるでしょうが。他に付けやすい方法があるなら言ってみなさい。

「瞬間接着剤で直接頭に付けるか？」

「ああ、そっちの方が付けやすい。」

「すみませんでしたあつ!」

「なっくん逃げちゃった。」

「忍、まだ来ないか？」

「しーちゃんは白頭巾のゴーストかぁ。……………似合う。めっちゃ似合う。作って良かった。」

「もう来るよ。ほら、展示見に回っていいですよーの放送今鳴ったし」

後半の担当の人が喜び勇んで出て言ったよ。

「なんか『トリック・オア・トリート!』とか叫びながら。何故？」

「あ、背後で扉が開く音が。」

「トリック・オア・トリート!」

『うわっ!?!』

いきなり引かれました。ちょっと傷つく。

二年生の女の子三人組だね。えーっと、なんか直前になってやれ
って言われた台詞台詞……。

「いらっしやいませ。このオバケ喫茶には、スペースの事考えずに
作った馬鹿共曰く、悪戯トリックの部屋とおもてなしトリートの部屋があります」

純兄。敬語になるとトンデモナイ毒舌になるのはなんで？

あ、トリートって、おもてなしって意味なんだって。この間初め
て知った。

「悪戯トリックの部屋は、その名の通り、数々の悪戯が待ち構えております
……あ、純兄の目が『始め言ってやったんだから続き言え』って
言ってる。

「えっと、おもてなしトールの部屋は『おもてなしして!』という視線が
鬱陶しいほどにあちこちから飛んできます」

ぶっちゃんけ鬱陶しいだけです。とは言わないでおいてあげよう。

……あ、鬱陶しいって言っちゃったか。

『どちらがいいですか?』

「ごによごによと相談し始める少女たち……おいおい、トリートは
鬱陶しいって言ったのに。」

「トリックがいいです!」

まあ普通そうだろうね。

「右のカーテンをくぐって、そのまま進んでください」

『はい』

今更ながら思うだけ。この役要るのかな？

あ、悲鳴が聞こえてきた。悪戯って何やってるんだろ。うーん、
あたしも行きたい。

「ねえ純兄」

「いらっしやいませ、悪戯とおもてなし、どちらがいいですか?」

うあ、二組目からいきなり略し始めたよこの人。

「おもてなし!」

え、そっち選ぶ? 男子二人組。

普通悪戯かおもてなしかって言われたら悪戯選びたくならない?

『きゃあああああつ!?!?』

ほんとに何やってるんだろう、悪戯の部屋。

ああ、また来た。

「トリック・オア・トリート! どっちがイーですか?」

『トリック!』

即答したよ、この一年二人組。

「Hello!」

あれ? 外国人さん? あ、そうか。保護者なら入れるのか……
つて、誰の保護者だこの人。めっちゃ気になる。

「トリック・オア・トリート!」

とりあえず他の人と同じ事は言っておこう。これ、英語だし!

「Happy Halloween!」

……………。

「純兄、お菓子貰えた」

本物のチョコレート。一人二粒ずつ。用意良いなあ、この人。

「ありがたく貰つとけ。Thank you」

ああ、お礼は言わないといけないよね!

「サンキュー!」

「You're welcome」

どういたしまして、だったよね。

「Which do you like better, trick

or treat?」

……………。絶対、柿の種よりも発
音きれいだよ。

「Well……trick!」

「I see that. This way, please」

……………あたしの知識では分かりません。

多分、こちらへどうぞとか言ってるんじゃない?

「高山兄妹ー、次入れるよー」

「あ、はいはい」

……あれ？ 見覚えのある人たちが。五人組。

「来たよ！ しののん！」

「田中、この人たち飛ばしてよいいよ」

クラスメイト、今回の案内係。田中の説明、コレくらいでいいよね？

「しののん先輩！ いきなり追い出されるのは納得いきません！」

「……差別」

日ごろの行いが悪いからだよ、オカルトオタク共。

「もー、んつとね、悪戯トリックの部屋とおもてなしの部屋トリートがあります。どつちに行きたいですか？」

「適当つすねー」

日ごろの行いが……以下略。

「で、どつち？」

「そりゃーもちろん……」

『トリック！』『トリート！』

はいはい、分かりました。

「じゃあ部長はこつち、ほかの方はこつちの奥へどうぞー！」

「何でみんなそつち選ぶの！？」

オカルト部の部長つて事になつてるのに、おもてなしトリートの部屋を選んだアンタに、あたしたちが『何で』だよ。

はい、さつさと行つてらっしやい！

「あ、純兄お帰り」

「ん」

どこまで行つてきたんだらう。

「悪戯トリックの部屋つて、どんなだった？」

「ん……ジャックランタンが足元に並んで、色んなオバケが襲い掛かつてきてたな」

もう完全にオバケ屋敷じゃんか。ハロウィンバージョンの。

「スライム投げつけたり、足元に紐貼つてあつたり……」

「ちよつとやりすぎじゃない!？」

「受付で念の為に雨合羽欲しい人には渡してるってさ」

「……やるからにはとことんやりたいからって事かな？」

「腹巻巻いたゾンビの衣装、あつたたる？」

「ああ、あれね」

「あたしがわざつわざ編んだ腹巻。何でゾンビが腹巻してるんだ。」

「あの外国人さんのツボにはまったらしいぞ」

「どつという風に!？」

「腹巻が気に入ったらしい」

「……そりゃどうも？」

「英語で色々話しかけられて困ってたのをほっぽって来たんだけど
どつなつたかな」

鬼かアンタ。

270 探している、と言うのは口だけで

忍です。死神の方の忍です。

幼稚園の先生の気持ちがよく分りました。

……だから、ね？

「おめー等もうチヨイ大人しくできんか？」

『無理』

なんと言っ事でしょう。たった二文字で返されました。

俺は今、凶悪トリオこと天斬剣を連れて水ヶ岡中学校に来ています。ちなみに学校サボりました、俺。純の文化祭にトリオが乗り込んでしまったので、わざわざ迎えに来てあげたんです。

ほっといたらマジで何するか分かんないから。

「しーねえ、会ったら帰る」

忍ちゃんか？ 純の妹の？

「それなら自分のクラスに居るんちゃうか」

たしか、三のーのはず……。

「つて、あれ、居らんこなっちよお！？」

……あ、今見えたで、階段登ってんの。

「待たんかあっ！」

追いついた頃には、既に三人は人の列をすっ飛ばして教室の中に入ろうとしてた。人に見えないのをいい事に……。

「忍にい！ あれ、なんて読むんだ？」

おー、喫茶店か何かみたいな看板がかかつちよる。なにになに？

『オバケ喫茶』

マジで喫茶かよ。あの衣装はこれのためか……。

「何が書いてあるかって聞いたんだ。早く答える」

おめー等、日本語喋れるのに読めんのか。

「オバケ喫茶って書いてあるんだよ」

『喫茶？』

「えー……茶ー飲むこと、だったと思う」

……中でお化けが茶飲んでんのか？

「早く入ろうぜ！」

『おー』

ぜんっぜん盛り上がったちよらんちゃん。

お、ちようど誰か入る所みたい……あ、この子可愛え。くっ、霊体じゃ無きゃ話しかけたのに！ 今実体化したら、絶対ビビられるしな……はあ。

まあええわ。一緒に行動しよ。この中入ってる間だけは。……ス
トーカーとちやうよ？

黒いカーテンをめくると……

「トリック・オア・トリート」

「い、いらっしやいませっ！」

ドラキュラっぽいかつこうした女の子とついでに男子が出迎えてくれた。お、女の子めっさ美人じゃん。

「鈴木ちゃん、緊張しすぎだぜ」

鈴木ちゃんっていうのかー。名字だよな、コレ。名前で呼べよ！

「う、五月蠅いわねっ！ 別に緊張なんかしてないんだからっ！」

ああ、分かった。純の言っつた玲奈ちゃんか。なんとまあ分かりやすい。まさにツンデレ。

「まあ、気楽にやるーぜ」

そついうのって普通裏でやるもんやないと？

「え、えつと、この先は二つの部屋がありまして、悪戯トリックの部屋とおもてなしの部屋がありますっ！」

「好きな方を選べってこつた」

「村田！ 気楽すぎよっ！」

あー、こいつが村田か。これも純から聞いている。いじめっ子が。

「え、えー……つと、じゃあ、トリートで」

客に引かれちよらんちゃん、ドラキュラコンビ。ええんか、コレ。

しかも何？ その「いいの？」みたいな顔。

「行こーぜ行こーぜ！」

天斬剣は選ぶ前に勝手に進んでやがんな。

またカーテンをくぐると……

「……居心地が悪いんだけど、なんでだ？　しのにい」

足元にはジャックランタンがずらつと並び、壁には頭蓋骨がぶら下がっている。ところどころに蹲っている白頭巾やらミイラ男やら……あれはフランケンシュタインか？　が、じいーつとこつち、つまり入口の方を見つめている。

何と言うか……物欲しそうな瞳で。

こつちは『おもてなしの部屋』だった気がするから……まさかおもてなしって、『おもてなししろ』とでも？

天が居心地の悪さを感じたのは多分、奴らの『おもてなししろ』オーラのせいじゃろ。

……俺等の姿、見えてねえ筈なのに。

「……反対側がいい」

「私も」

「オレも」

と言う訳で、しきりのカーテンをくぐり……もとい、すり抜けて、反対側へ。

『ぎゃあああああつ！？』

あれ、こいつ等は確か……さっきおもてなしを選んだ子の後ろに居た三人組だな。

「お菓子い！」

「えいつ！」

「覚悟おっ！」

……そんな言葉と共に、がばあつと覆いかぶさるように襲い掛かったり、スライム投げたり、猫じゃらしで首筋くすぐったり……なんか、色々やってる。

『楽しそうっ！』

「お前等は参加するな！」

死人までには行かなくとも怪我人が出る！

「……………だめ？」

可愛く首を傾げてもいけんよ、斬。

「でも、もうやった」

早っ。

「きゅ、急に寒くなったな……………」

「小浜もか？」

「藤原もか……………うわ、スライム凍った!？」

……………。

「斬、怒るよ」

「はい」

よし、元の室温に戻ったらしいな。

「うわっ!？ 床水浸しだぞ!？」

「今度は剣か!？」

「斬やってたからいいのかと思って」

床が腐るから水回収させて、

「もう出るぞ!」

『ええっ!？』

「忍ちゃんおらんじゃったろ!」

『そっついえば』

わすれてたのか？ 来た目的。

「……………つたく、こうなったらその辺の子に聞くか」

実体化ミサंगा（商品名）どこやったっけ。あ、あった。ポケット

トに入ってた。

これを他人に見えないところで首に付けて、実体化完了！ 何度

も思ったけど、なんてお手軽なんだ実体化。

「忍ちゃんつてどこに居るか知ってるか？」

近くの白頭巾女の子に声をかけてみる。

「忍？ 前半だったから、今は他のクラスの展示回ってるんじゃないか？」

「い」

「そっか、さんきゅ」

「やー、うちの学校の制服が学ランで良かった。そして今、その制服を着てた俺にグツジヨブ。」

「じゃあ忍ねえ探すついでにほかの展示見ようぜ！」

『おー』

えっ！？

271 居なくなつては探し

「忍にいい！ 小つちやい建物が建物の中にあるぞー！」
それは校舎の模型。

「し、しのにい！ バナナの形がおかしい！」
幼稚園児の作品って書いたるしな。

「……しーにい、この水の中あわあわいっばい」
プールの模型な、水はジェルなんやないと？
忍です、死神の。

忍ちゃんに会いたいっ！ とかダダこねた凶悪トリオ天斬剣と
一緒に、水ヶ岡中学校文化祭に来ちゃいますが、肝心の忍ちゃんに
会えません。

あつちこつち回つてみているにも関わらず。

……ところで、このトリオは、ほんつとーに忍ちゃんに会いた
いのでしょうか。さつきから展示物見て楽しんでんねんけど。

「亮、亮、見てよこの絵！ すっごく上手！ 写真みたい！」

「……シジミ」

「紫波だよー！」

「……それは写真」

「え」

「それ……写真」

「……」

あ、シジミ野郎が蹲つて『の』の字書き始めよつた。
写真を絵と見間違えるって、どんな写真だよ……。

「次行くぞー！」

『おー』

こら！ 勝手に行動すな！

「おまーらな、ここに何しに来たと、ホンマに」

『……えっと』

くおら。リオン呼んで叱ってもらおか。

「……しーねえに会いに来た」

「せやる？ だのに何でさっきから展示ばっか見とんじゃ」

『珍しくて』

ああリオン、こういう時俺は何て言い返せばいいんだ。

こいつら言ってることは事実だし……、何気にまだ幼児なんじゃよなあ。普段忘れとーけど。

「居たいた、トリオ+忍」

「リオン！ 俺をオマケみたいに言っな！」

「ごめん、まとめたらくこうなっちゃって」

じゃあまとめようとせんというて。

「リオンは何しに？」

「時間が空いたから、来てみようと思ってる……忍ちゃんには会えた？」

『うっん』

三人そろって首をふるふる。綺麗にそろってる……

と、言う事はなくばらっぱらじゃ。

「そっかー、何処に居るのかな」

「リオンも会わんかったんか」

もうその辺に居る人片っ端から聞いてったろかな。

「……あれ？ トリオはどこ行ったの？」

「え？ 居ない!？」

忍ちゃん一人も探せんのに、あいつ等はああああっ！

「こうなったらダッシュで色々すり抜けて隅から隅まで探してっちやるー!」

「忍ちゃん探すときもそうやれば早かったんじゃ……」

あーあー、聞こえない。

えー、この一般からの作品が展示されてる多目的教室は一階じゃけえ……上に探してくか。

シュバツと音……は、実際せんけれど、走って……職員室だの購

買だの体育館だのすり抜ける。

居らんかった。

しかも何？ 多目的教室しか展示やってねえじゃん、一階。

次二階！

三年生の展示物ざつと見て……居ない！ 三組は劇をやるんだそうで、ただの教室やった。それだけ。

あ、音楽室がある……中はギターが置いてあること以外特筆することは無し！

次三階！

二年生は三クラスが劇？ 一クラス寂しく……実際には結構人来てて寂しくも何も無かったけど……展示してた一組は、控えめつぱいのに、突っ込みどころあつたら何故か全部突っ込む可愛こちゃん
が居た。

次四か……あ、居たあつ！

「忍ちゃん！」

「誰？」

……誰か、俺を慰めて。

「忍、忍だ」

「……あ、衣装手伝ってくれた人か」

その言葉はわざとではなく本気で忘れていたという意味じゃよな
！？

「……天斬剣に会わんかったか？」

「知らないよ？ ねえ。純兄」

「ん、知らねえな」

あいつらああああつ！ ホンツトにどこ行きやがった！ 四階に
いることを願う！

……ちよつと気になつたんやけど、周りの奴等、なんで純と忍が
二人して何も無い所と話してたのにスルーしちよんじやる。よくあ
ることみたいな認識されてんのか？ そうなのか！？

「天斬剣いー！」

『お腹一杯』

何でこんな返事が返ってくる?!?!

272 さあどこまでが台本通りか当ててみる！

ふわあ〜……ふう。

ねむねむ……。

桜です〜。いきなりごめんなさ〜い。

文化祭二日目、今日は主に演劇です〜。暇。……あ、言っちゃった。

でも、でもね！ 暇なものは暇なんだもの、仕方ないでしょ。

劇は三年三組と二年生三クラス、先生たちのと、後はやりたい人が集まってやれ〜って言うのが一組の筈……。

ざっと紹介していくね〜。

二年二組『白雪姫 in ジャパン！』

完全ギャグ展開の、日本版白雪姫でした〜。

王子様のキスで白雪姫が目覚めるところが、お坊さんのお経で目覚めたのは何故？

二年三組『暇！』

言っちゃ悪いけど、見てるこっちが暇でした。

二年四組『永久に』

……ごめんなさい寝てました。

でもでも、周りの人がすっごく感動してたよ〜、人によっては指笛鳴らしてた……気がする。

先生方『桃太郎』

いくら桃太郎役だからって、年甲斐もなく『おぎゃーっ！』って泣き叫んで、どっちらけた後に大笑い、さらに馬鹿にされた牡蠣野先生に励ましのお便りを。

三年三組『夏のバレンタイン』

夏でなければ、バレンタインまでまだまだ時間があります。ちなみにラブコメ。現在進行形で演ったはります

……たった今、こんなセリフが聞こえてきたよ。

「あぁっ！ チョコが溶けちゃうっ！」

夏だもんね、設定上……。

「ありがとうございます！」

……え？

『ありがとうございますましたあー！』

……ええ！？ 終わったの！？

「あ、山内さん起きた？」

「山本さん、わたし寝てた？」

「ぐっすりと。『チョコが溶けちゃう』の所から」

お……全然気づかなかつたな。

「そう言えば、さっきから高山兄妹さん居ないんだけど、何か聞いてない？」

忍と純くん？

「な～んにも？」

「ふう～ん、そっかあ」

どこ行っちゃったのかな。

……あ、そういえば前に何か言ってたな。えっと……

『ホントオカルト部何なんだよ！』

関係ないか。

っていうか、オカルト部なんてあった……あ、そういえばたまに五人組が騒いでるね。あれかな？

『プログラム六番、有志者……』

「オカルト部だよっ！」

……耳に悪そうな声でしたよ？ 超音波みたいな……。

『ええと、プログラム六番、オカルト部、』さあどこまでが台本通りか当ててみる！』です』

『さあどこまでが台本通りか当ててみる！』？ 挑戦的なネーミングだね。

あ、綴帳が上がって……中の幕は閉まってるね。そして誰も居ない。ただのステージとも言います。

誰か出てきた。制服姿の……

「あれ？ 高山さん、オカルト部だっけ？」

「まさかー。しょっちゅう逃げ回ってるよ？」

「高山兄と一緒にね」

「……やらされてるとか？」

「かも、ね」

ざわざわしてる中の一部をご紹介しました。

「シャラップ！」

上から声が？ 超音波ちゃん、もとい夏江なつえちゃんの声……照明かな。

シーンと、静まり返った体育館に、再び超音波が響きます！

「さあ、いいよ！ しののん！」

「この空気はどう始めると！？」

忍はすっごく気まずそう……。

「て言うかね、ちょっと手伝ってーって言うから照明か音響か、そのあたりだと思ったのね！？ 何でキャストなわけ！？ おかしくない！？ 何で手伝ってーって言う方が裏方に回ってるの！？」

手伝つてるところがちよっとじゃないよね、それって。

「手伝つてもらうからには華持たせるべきじゃないっすかー！ だから、しののんセンパイと純吉センパイにはそっち回ってもらいます」

もう一人の照明、上靴見えないし、名札もしてないから何年生か分からないけど一年生か二年生なんだね。先輩って事は。

「こつちとしてはいい迷惑だよそれ！」

本当にね。

「し、しののん先輩、台詞忘れたなら台本貸しますよ？」

「いらんわ！ せめてえっちゃんこつちおいで！」

怒鳴ってる顔の向きからして音響の方に叫んでるのかな？

「わ、私無理ですっ！ ほ、ほら、音響がありますから……」

「音入れるところなんかないでしょ！？」

「じゃあなんで音響の役あるの？」

「わ、分かりましたっ！ じゃあ……」

「うん、早くおいで」

「何か適当に音入れます！」

「なんでそうなるの!？」

「……わ、本当にどこまでが台本通りか分からない。

全部アドリブなんじゃないの？」

「……純吉は何処に行った!？」

「あ、やつともう一人舞台に出てきた。

なぜか手にはハリセン。それで忍の頭を……はたきましたあつ！

ナレーションじゃないよ？ 多分。

「何であたしがはたかれなきゃなんないのさ……」

「純吉は何処だ？」

「スパーン！ ガタンガタン、パリーン！

……あれ？ 何か余計な効果音入らなかった？

「枝奈、何してるんだ？」

「何か適当な音入れるって言ったじゃないですか、古賀先輩」

「ならいい」

「いいんだ」。

「で、純吉は何処だ？」

「純兄、出て来いってさー」

「ちっ」

「舌打ちがここまで聞こえてるよ」。

「どんどんどんどんどん！」

「何の効果音!？」

「えっと、太鼓? って書いてあります」

「確かに太鼓の音だったけど……」。

「あ、救護係の先輩！」

「あの時はありがとうございました！」

「俺にはそれしかねえのかおい」

だって純くんって表に出る事無いじゃない。

去年やった劇だってあっちこっちのヘルプしてただけだったし…

…。だからそれしかないんだよ、きつと。

「よし、じゃあ俺は戻る」

『何処に』

「小道具」

「何も作ってねえだろうが」「何も作ってなんか無かったでしょ！」

古賀くん……ハリセン持ってた割には突っ込まれてばかりだね。

「……………」

スパパコーン！

ハリセンが華麗に高山兄妹に直撃しました！

「俺にも突っ込ませろ！」

『じゃあボケンな！』

「ごもつとも」。

『……………後、一分』

何か放送で聞こえてきたよ？

「ええ！？ それホント？ マコちゃん！」

夏江ちゃん、声ホント響くよね。

「叫ぶな超音波」

純くん、それはあまりにストレートに言いすぎじゃ……………。

「どーしますー？ 終わらせましょっか」

「マコちゃん！ 緞帳閉めていいよ！」

『はい』

あ、緞帳閉まり始めた……………え、終わりなの！？

「終わるの！？ ホント何だったのこの劇！」

舞台の上に居る人がそう言う事言っちゃっていいのかな？

「誰だ律儀にも手え叩いてる奴」

「どうもありがとう」

啞然とする忍に、呆れた顔している純くん、頭下げる古賀くと

……………よく分からない状態だねえ。

『え……と、ありがとございまして。もう一度拍手をお願いしま
す』

何でちゃんと拍手してるんだろっわたし達。

「ねえ忍〜」

「あい？ 何桜」

「あれって結局どこまでが台本通りだったの？」

「全部」

……あれで？

273 のんびり帰り道

「……あれ？」

あれ？ ここ何処？ 教室？

忍でーす。

あ、紙切れみつけた。純兄の字で何か書いてある。

『起こすの悪い気がしたから先帰る 純』

「起こしてよ！」

つてか、起こすの悪い気がしたからつて、どんだけ熟睡してたのあたし！

あーあー、なんか暗いよ？ 外ちょっと暗くなってきたよ？

いや、文化祭前に残つて、帰るようなときに比べたら相当明るいけど。

部活も終わっちゃってるみたいで、校門前には色んな服の人がいっぱい。

あつこに溜まられると校門の外出にくいんだけどなー。

「あら、私以外にも残ってる子居んだ」

「うん？」

一組の後ろの扉のところに、鞆持って帰り支度した女の子が。

えーと、ちょっと待ってね。思い出すから。

スカート短くて、黒いセーター着てる、黒髪ストレートな女の子

……あ。

「ゆうちゃんだ！」

本名風上夕菜ちゃん、だったかな？

「えーっと……ちょっと待って。今思い出すから」

忘れられてるし。あたし、忘れられてるし。

しかもこの人、あたしが心の中で言ったこととおんなじこと言ってるし。

「あ、もしかして、忍？」

「そっだよー」

「彼氏は元気？」

「そんなの居ません」

「ついでに言うといりません。」

「純って彼氏じゃないの？」

「ちよつと待って、このやり取り小学校の時にもまんましたんだけど!?」

「ふふっ」

「あ、分かっててやったな！ 確信犯か！」

「ゆうちゃんは、小学校の時の友達……まあ、元々べったりしてなかったし、中学なってからクラスはなれて、全然話してなかったんだけど……。」

「ゆうちゃんって何組だったっけ？」

「四組。『起こしてよ!』って声が聞こえてきて、何となく見に来ただけど、まさか忍だとは思わなかったわ」

「どんっだけ響いてんですかあたしの声は。扉閉まっていたのに。」

「ゆうちゃんって耳いいよね」

「私たち以外、誰も居ないこの階で叫んだ人の声が聞こえないわけ……」

「あるとおもいます。流石に。」

「ゆうちゃん、何してたの？」

「勉強」

「ほー。」

「あたしなんか熟睡してたよ」

「『起こしてよ!』で分かるわよ」

「……あの、そんなに何回も言わなくても」

「『起こしてよ!』」

「しつこいわー!」

「ふふっ」

「もー。」

「あ、さっさと帰んなきゃいけないんじゃないかなかったっけ」

「完全下校はとっくに過ぎてるけどね」

「嘘ッ!？」

チャイムにも気づかなかったのか、あたしは……。

「一緒に帰る？ ゆうちゃん」

「そうね。たまには誰かと帰ろうかな」

よし、そうと決まればぱと筆箱だけ鞆に入れて……教科書類
? 置き勉です。

「行こっ」

「うん」

廊下の途中で教師に見つかって軽く怒られましたとき。

で、校門を出て……溜まってた人たちはいつの間にか帰ってた。

で、ゆうちゃんが鞆を「ごそごそ」やって取り出したのは……銀紙で巻かれて、さらに青い紙が巻かれた、板ガム?

「食べゆ?」

何かもう、学校の前にもかかわらず口に入れちゃってるけど。

「貰うー」

貰えるものは何でも貰う。それがあたしですから。……意地汚い

? ほっとけ。

「不良だねえ」

ん、ミントガムか。

「不良小っちゃー」

そう言っって笑うゆうちゃんと一緒に、ちよつとのんびりな帰り道
でした。

帰るの遅いって、あたしの事放って帰った人に軽く叱られました
とわ。

273 のんびり帰り道（後書き）

『青空の帰り道』って短編を登校しました。

ゆうちゃんはそれに出てくる主人公、という設定です。一応。

少女とか、彼女としか書いてないですけども。

だらだら〜と書いた話ですが、よろしければそちらもお願いします。

274 初めまして捨て猫です

昔々、ではなくて現在。

とある公園の前に、段ボール箱が置いてあった。

中には、緑色のつぶらな瞳をした子猫が一匹。

「にゃあ〜」

この破壊力抜群の可愛いヤツに出くわした彼らはどんな反応をするのか……。

始まり始まり。

一人目 朝

じーっと、誰かに見つめられているような気がする。

じーっと、じいじいじいじいじいじい。ちよっとしつこいくらいに。

「なんてね」

若干癖のある、茶色がかった黒いミディアムヘアの少女。長袖Tシャツにジーンズ、パーカーという出で立ちで、公園前に歩いてきた。

そのまま、公園の中に入ろうと……

「あり、本当に何か居た。にゃあ」

する前に、何やら子猫に話しかけ始めた。

子猫は戸惑いつつ、

「にゃあ〜」

と答える。

「にゃ、なあ〜ん」

「にー、にー」

「にゃ？ みゃあ〜」

何やら盛り上がっているようだが、旗から見れば完全に痛い子である。

「うーん、猫も見かけによらないなあ」
彼女らが何の話をしていたのか、それは誰にも分からない。多分。

二、三、四人目 午前中

「わっつ、かわい〜！」

「猫だ！ 猫！」

「……いい子」

痛い少女によく似た、しかし彼女よりも少しのほほんとしたムードを感じる少女、大きな目が印象的な元氣いっぱい少女、そして大人しげな低い二つ結びを肩にたらし少女の三人の視線が、一匹の子猫に集中する。

「怖くないよ〜」

のほほん少女が子猫を抱き上げた。

「あーっ！ ひーちゃんズルい！ ウチも抱っこしたい！」

「……美代も」

「順番じゅんばん〜ん〜」

子猫は一瞬にして人気者になった。

「……捨て猫、かな？」

もふもふの子猫の毛皮に顔をうずめながら、大人し少女が呟いた。

「本当に居るんだね〜。段ボール箱に猫入れて捨てる人〜」

「酷いよねー！ 家で飼っちゃおうかな？」

「ダメ〜！ 私の家で飼うの〜！」

「……聞きに行こ」

十分後

「ごめんね〜、駄目だつて〜」

のほほん少女が、子猫を段ボール箱に戻しながら言う。

「なんで凜ちゃんもお母さんも揃って猫アレルギーなの!？」

「……それはどうしようもない」

元氣少女は憤慨し、大人し少女はそれを宥めていた。呆れている

ともいうかもしれない。

「でも……名前だけは付けておいてあげるからね。」

何故名前だけは付けていくのか、彼女達はこう語る

『付けてみたかったんだもん』

もう少し和める、もしくは可愛い動機はなかったのだろうか。

五人目、六人目 午後

「翔、こんなところに猫が居るぜ！」

「捨てられたのかー、可哀そう」

またしても痛い少女に似た、短髪の少年と、ちよつとたれがちの目をした細身の少年が段ボール箱を覗き込んだ。

二人の手にはボール、何故か短髪少年は、着ているパーカーの中にもボールが入っている。

それはさておき。

「あ、何か書いてあるよ、岳」

段ボールの蓋の下、たれ目少年の指したところには、黒い油性ペンで、小学生の字が書かれている。

『この子猫ちゃんの名前はにゃんにゃんです！ 変えちゃダメ！』

「もーちよいマシな名前は無かったのかよ!？」

突っ込む短髪少年に、たれ目少年は、ならお前はどんな名前をつけたのかと尋ねると……

「そりゃー、お前、エク飴だろ。いるか？」

「もつとマシな名前あるだろ……ポチとかさ。エク飴は遠慮しときます」

「それ、犬の名前じゃんかよ」

折角ポケットから出したのに、いらなと言われてた可哀そうな『黒い物体×飴』と、段ボールの中で大人しくお座りしている猫を見比べ、短髪少年は

「これ、お前にやるよ。結構うめーぞ。名前の割にや」

そう言つて、箱の中に入れておいた。
後ろでたれ目少年が『嘘つけ!』とか叫んでいるのは無視。

七人目、八人目 夜。

「くぁーっ、頭がパンクするわ」

「いつそしちまえ」

「あぁん? 俺に喧嘩売つてんのか、美咲ちゃんよ」

「……いや、その言葉が喧嘩売つてんじゃ……っつて、他人の性別を勝手に変えるな! 夏!」

夜道を、塾帰りらしい二人の少年が歩いてた。

一人は元気少女に似ていて、背が高い。もう一人は大人し少女に少しだけ似ているが、気の強そうなのはむしろ逆だ。

「にゃあ〜」

「あれ、猫だ」

「猫? うわ、かわえー」

しゃがみこんで猫の頭を撫で始める釣り目少年を、背高少年は一瞬ぼかん、とした顔で見つめ、次の瞬間には大笑いし始める。

「岬、顔溶けてんぞ! どろっどろ! あっははははは!」

「いいだろ別に! あと溶けてねえ! ついでに効果音間違ってる!」

「わあつたよ、とろとろ程度にしてやるよ。くくく」

「俺はとろろごはんか!」

「例え分かりにくいなおい」

猫を前に喧嘩を始める彼らは、気付いているのだろうか。

猫がぶつぶつにゃあにゃあ『五月蠅い』と言っていることに。

まあ、始めの痛い子では無いのだから、分からないだろうが。

「……あー、笑つた笑つた」

「つたく、一々よくそんだけ笑えるな」

「面白いことは無駄に笑つといたほうがいいんだよ。ほら『笑う門

には福来る』ってな」

そう言いながら、何故か彼はコンビニで買ったしゃけおにぎりを段ボール箱の中においておく。

「ちゃんと食つとけよー」

子猫は困った。

ビニール袋が開けられない。

九人目 またまた夜

「あら、猫」

黒くて長い髪を夜風になびかせ、手ぶらの少女はなんとなく、

「ガム食べる？ ミントだけど」

そう言っつてポケットから板ガムをとりだし、段ボール箱の中へ放りこんだ。

猫は銀紙が月の光できらきら光るのを楽しんだ。何か違う気がしたが。

十人目 真夜中

「……この猫は仏か何かか？」

黒髪の、鋭い物の整った顔立ちをした少年が、お供え物（飯）の飴、おにぎり、ガムを見つめながら呟いていた。

275 おじいんの聞こ

「お兄ちゃん〜、お姉ちゃん〜」

『あん?』『あい?』

「宿題手伝つて〜」

『断る』

三人そるって酷いな〜。

光です〜。

お昼御飯中〜。今日のお昼ご飯はおうどんです〜。

東京のおうどんは汁が飲めないほどに味が濃いつて本当ですか〜?

私はお母さんのおうどんしか食べた事無いの〜。外食の時におうどん頼むこと無いからね〜。

「何の宿題なの〜?」

「えつとね〜、俺俺詐欺とか〜、とにかく電話の詐欺があったらどうするか、家族に聞いて来いって〜。お母さんはどうするの〜?」

「う〜ん……かかってきたこと無いからな〜……」

かかってきたときの対処法なだけ〜。経験関係ないよ〜。多分。

「お父さんはどうするの〜?」

お母さん〜。考えるのやめないでよ〜。

「たとえば、どんな風な電話?」

「どんな風〜? え〜つとね〜……」。

「息子さんが自転車で妊婦さんにぶつかってその人が生死の境をさまよふな大変なことなっちゃってますよ〜って警察とニセお兄ちゃんと妊婦さんの夫役の人からかかってくるようなの〜」

「設定細かつ」

「考えやすいでしょ〜?」

「つてか、オレかよ!?! 兄ちゃん自転車乗らねえし!」

「よく分かったね〜、岳お兄ちゃん〜」

「認めんのかよ！」
「駄目なの？」
「そつだなー、息子って奴に名前聞くな」
「それで？」
「終わり」
「それだけ？」
「多分相手は困るはず」
「名前知ってたらどうするの？」
「じゃあ岳お兄ちゃん、お兄ちゃんが事故起こして大変だ〜って電話どうする？」
「うちの兄ちゃんは事故起こすような乗り物乗んねえよって返すな」
「言い返しようがないね。」
「お姉ちゃんは？」
「んむ？」
「うどんがなくなってる〜!？」
「早いよ〜！ 食べるの早すぎるよ〜！
まだ私半分しか食べてないのに〜。」
「んつとねー。そつかー、大変だねーって返すかな」
「怒られるよ〜？ ニセ純お兄ちゃんに〜」
「純兄つてそんなに短い短かったっけ？ って返す」
「何か言われるよ〜」
「この電話はただいま出ることが出来ません」
「今まで話してたじゃん〜」
「そつか〜」
「一方的に切っちゃうんだね。」
「で、着信拒否に設定しとく」
「普通非通知じゃない〜？」
「じゃあ電話線抜く」
「忍、本当にはしないだね」

「しないよ、多分」

多分はよけいじゃないかな。

「じゃあ純お兄ちゃんは？ えっと……お父さんが……」
るるるる……るるるる……

電話の話してたら電話がかかってきた。

「純、出て」

「ん」

ちなみに電話は純お兄ちゃんのすぐそばにあります。

「はい……あ？」

なんだかすごく切羽詰ったような声が聞こえてくるな。

「純兄、スピーカー、スピーカー」

「ん」

『ど、どーしよ……まじでやべえよ』

「落ち着いてもう一度説明しろ」

『お、落ち着けるかよ！ だからよお、俺、俺、大通りで事故起こ
しまったんだよっ！ 相手の人、すっげー血い出ててさ、救急車
で運ばれていったんだけど……俺、どうしよ……』

お、まさに俺俺詐欺。

「馬鹿兄、一辺刑務所入ったらー？」

お姉ちゃん……。

『はあっ！？ おまつ、妹のくせに何言うんだよ！？』

「テメエこそ、弟のくせに何泣きついて来てんだよ？」

純お兄ちゃん……。

『兄貴は頼りになるからっ！ だから、俺っ……俺！』

この人もいちいち反応してくれるんだね。

「廉兄ちゃん、だっせー」

『何て事言うんだよ！？』

「岳お兄ちゃんまで参加？ しかも相手に命名？ じゃあ私も
何か……。」

「家族の縁切っちゃお」

『なんでそこまでされなきゃいけないんだよ！』

『自業自得』

『な、なんて兄弟だ……酷すぎだろ』

私もそう思うよ。

『ってか、この廉って奴もどんだけ兄弟に馬鹿にされてるんだよ…』

…』

實在しないけどね。

「あ、電話切れた」

「参考になった？ 光」

「相手を思いつきり馬鹿にすればいいんだね」

……違っ？

276 ほづき片手に中間休み

「しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、修也くんっ!」

「……何だよ?」

「あの、……放課後、体育館裏に来てくれないかな……?」

あのさー。

これってほとんど告ってんのと同じじゃね?

岳だ!

二時間目の後の中間休み、教室のど真ん中で理絵りえって奴が修也にそんな事言っただけど……。

「今日用事あるから」

「そ、そっか!」

あーあーあー。冷たい顔してそんな事言っなよ、ちよつと泣きそうじゃんか。ただでさえ泣き虫なのに、理絵。

なんで知ってるか? 転校してきたときからずっと同じクラスなんだよ。

「容赦ねーな、修也ちゃんよ」

「用事あんのは事実なんだけど」

「へえ? 何の? 奈那子さんがらみけ?」

「……あ、あぁ」

「当たりかよ!」

「分かかって言っただんじゃねえのかよ!」

オレはエスパーなんか使えねーし。

適当に言っただけなんだけど?

「奈那子さん、今日休みだもんね」

おお、翔。

その漢字ドリル、今日提出の宿題じゃなかったっけか? さては忘れてやらされてるな?

「ああ、風邪流行ってるから……」

「じゃ、修也の用事って、奈那子さんの見舞いか？」
「くり。」

何で顔赤らめるかなあ。

「風邪うつつたら嫌だから来るなって言われんじゃねえの？」

「電話で言われた」

「言われた後かよ！」

んじゃ行くなよ！

「でもやっぱり……うん」

「分かんねーよ」

うんってなんだよ、やっぱりってなんだよ。順不同。

「別に分かんなくていいし」

「んだあ？ その言いよう。やんのかコラ」

「岳、不良みたいだよそれ」『またかー』「仲良きことは美しきかな」

いつもの光景ってか。

……あれ？ オレ、別にこんなこと普段言ってるぞ？ 不良み

たいなの。

不良って見た事ねーけどさ。

「よし、修也」

「……？」

「武器を取れい！」

「ほづきでいいか？」

緊張感ねえー。ただの小学生の喧嘩じゃねーかよ。

いや、本当にただの小学生の喧嘩なんだけど。

「よし、んじゃ……掃除すっか」

『なんでだよ！？』

たまには皆に『またかー』って言われるようなこと以外の事もやってみようかと思って。

で、手にほづき持ってたから。

「ほい、翔也」

やってから言うのもなんだけど、ほうきって投げて渡しちゃ危ないよな。あ、あっさり受け取りやがった。

「なんでおれも!?!」

「高山グループの一員だからな!」

「何のグループそれ!」

「オレのグループ。今作った」

できたてはやはや。買うなら今だよ! どの店だコレ。

「ほーれほーれ、下になんか落とすた奴! 今すぐ拾わねーと捨てられんぞ!」

って言いながら掃いただけで、なんで皆慌ててかがむんだよ。どんだけ落し物あるんだ。

「なあ、修也ー?」

「何だよ」

「奈那子さんの見舞い、オレも行っていいーか?」

「なんでお前まで……」

「奈那子さんも高山グループに入れたからだ!」

「だから何のグループだよそれ!?!」

「んだから、オレのグループだってば。」

277 モニター越しでの四人組

ぴーんぽーん

「……うむにやあ〜？」

ちやいむかあ〜。

奈那子だよ……。

風邪引いちゃって、朝から寝込んでたんだ……頭がまだ寝て……。

ぴーんぽーん

うう〜、うゆしゃい。

ママもパパも仕事だからあたしが出なきゃなんないのおかあ〜。

無視でいいや。

修也には来ないでって言ったもんね、風邪うつしたくないし……。

うう、寂しい。

ぴーんぽーん

しつこいなあ……。

誰かだけ見ておこ。

「さぶ」

ああ、あつたいお布団、すぐに戻るから待っててね。

モニターのボタンをポチ、というよりも力チツ。

『やっぱり寝てるんじゃない？』

……あれ？

岳くんが映ってる。今は翔くんの声だったし……。後ろには修

也！？

「な、なんで!？」

『あ、なあんだ、起きてんじゃない！ さっさと出るよな』

チャイムで起きたんだけどね！

『風邪、大丈夫か？』

「修也……大丈夫だよ。だいぶ楽になったもん！」

ずっと寝てたから体が痛いかも？

『そっか……良かった』

「こほっ、こほっ」

『何処が大丈夫だよ!? まだせき出んのかよ』

「きゃうっ!?!」

修也に起こられたあ……。

「ちよつとだけだよ、だから大丈夫」

『ところで奈那子さん、いつまでモニター越しで話しゃいーんだ、オレ等は』

「だって、風邪うつしたくないし……」

『喉飴とかエク飴とか持って来たんだよ。これくらい渡すくらいなら、大丈夫だろ?』

喉飴と……エク飴! 嬉しい!

エク飴食べたかったんだあ!。修也が来てくれた事の方が嬉しいけど!!

「ありがとう!」

『飴ばっかだけど……』

「そんな、いいんだよ! 嬉しいんだから!」

あ、修也つてば赤くなっちゃって可愛い。

『渡しに行つていい?』

あ、翔くん……声はするのにモニターには映つてこないんだなあ

……。

「うーん……ポストに入れてもらえるかな、玄関扉の……」

『ここけ?』

あ、玄関でがさがさって音がする、様な気がする。

「うん、そこそこー。ありがとう! 大事に食べるよ」

『賞味期限切れちゃうよ』

『飴の賞味期限がそう簡単に切れてたまるか』

『でもエク飴の賞味期限『あはっ』って書いてあつたじゃん?』

『……』

だ、大丈夫だよ! エク飴だもんっ!

『……さて、じゃあ帰りますか』

『そうだね、無理させちゃ悪いし』

『……ああ』

えー、帰っちゃうの？ そりゃあモニター越しでそんなに長々と話すような事も無いけど……。

『じゃなー、お大事に』

『お大事にー』

『……お大事に』

「うん、ありがとう」

ああー、行っちゃった。

エケ飴、あと喉飴。取りに行こつ。

ポストの中身引っ張り出して……なんで茶封筒!?

あー、今日のプリント類も一緒に届けてくれたんだ。皆、家反対方向なのに……。

「あれ？」

ちっちゃい紙が入ってる。

『エケ飴舐めて早く治せよ！ 岳』

エケ飴って薬にもなるの？

あ、もう一枚。

『エケ飴舐めて吐いたりしないように気をつけて 翔』

吐かないよ！ こんなおいしいもの食べて。

あ、もう一枚！

『早く治して学校来いよ！ 修也』

えへ、岳くんと翔くんには悪いけど、やっぱり修也のが一番嬉し
いっ！

278 カビパン ピザパン 蜂蜜パン

「あ〜っ！」

「どうしたの〜？」

「パンにカビが〜！」

「えっ！？ あたし、明日の朝ごはんパン食べるつもりで胃袋準備してたのに〜！」

胃袋がどんな準備をすんだよ。

純だ。

俺はまだ飯食ってんのに、なんで目の前でカビ付きパンを取り出すかな、うちのお袋は。いや、そんなつもりは無かったんだろ〜うけど。

でもってカビ付きパン見たくらいで食欲なくなることはまずねえけど。

「お〜、カビだ〜」

「……あたしの朝ごはん〜」

食うなよ？

「これは大分前のよ〜。明日のパンはあるから大丈夫〜」

「んじやいいや」

あっさりだな、おい。

さっきまでカビ睨みつけてたくせに。見えにくくて目を細めてるようにも見えたけど。

「これ、いつのパンだよ。母さん」

「ホームベーカリーで作った奴だから分かんないの〜」
まず残ったのを放っとくなよ。

「カビを顕微鏡で見てもよう〜！」
なんでそうなった。

「純か忍か岳〜、顕微鏡持ってきて〜」

……進 ゼミのふろくな。同じのが三つある。

見やすいし、使いやすいからいいんだけど。それなりに気に入ってるし。

使いどころが少ねえのが残念だな。

「ほい、顕微鏡」

プラスチックのプレパラートにちよつとカビを乗せて……。

「わゝ、菌糸だゝ」

「そりゃ、カビだもんねー。あたしにも見せて」

なんでカビの観察が始まってんだ？

「なんかオレ、パン見てたらなんかパン食いたくなつた」

パン見てたらつて、カビパンだろ？ 普通逆じゃねえか？

「母さん、パン食っていい？」

「いいわよゝ」

「よしや！ ピザパンしよっ！」

……ケチャップとチーズしか乗ってねえのはピザパンと呼んでいいのか？ 野菜が何か乗せるよ。

「私もパン食べたいゝ！」

「光は晩御飯食べちゃいなさいゝ。そしたらいいからゝ」

「……はゝいゝ」

よかつたな、光。今日はトマトが無くて。

「ねえ、カビつてどんな味がするのかな」

「忍、食うな」

「食べてないよ！ どんな味がするのになつて言っただけで！」

食いそうじゃん、発言が。

「ね、どんな味するの？」

「食べば？ 少しなら腹壊す程度で済むはず」

「じゃ、食べよう」

「本気で食つな」

「食えつて言っただの誰だよ！」

食えとは言つてない。ちよつと進めただけで。『食べば？』って。言い合いになるのめんどくせえから言わねえけど。

「お母さん〜！ 全部食べたからパン食べていい〜？」

「いいわよ〜。この最後に一粒だけ残ってる可哀そうなお米ちゃん
食べたらね〜」

光からはちょうど死角だし、見えなかったんだな。

「えへへ〜、蜂蜜〜」

「わ、光、蜂蜜かけすぎじゃない？」

「お砂糖欠けるよりいいでしょ〜」

「太るぞ？」

蜂蜜のカロリーは牛乳の約6倍なんだとか。

「今は縦に伸びるんだもん〜」

「いや、だからって……食パンの反対側から滴るほどかけんなよ。
第一にもつたいない。」

279 たまにはこの子たちも

「たけにゃんが最近僕の事ほったらかすんだ」

「ああ、竹の癖に俺らのこともほったらかすんだ」

「むっ、たけにゃんは竹じゃない！」

「わかつとーわ、そんならい」

モデルガンだ。

隣で転がってる黒い鉄砲はBB弾、話してるのはダーツだぜ。

「はあくっ、いいなあ、ウサギ人形ちゃんは」

「俺としてはラビットのの方が好みだな」

「ええっ！？ モデルガンっては何言っちゃってんの！？」

モデルガンってモデルガンの「ル」しか略せて無いよな、とは言わないで置こう。

「おもちやの声は心の声なんだからまる聞こえだよ！」

「わざとだ」

「そなの？」

この俺が、ニン婆のような過ちを犯すわけがないだろう。買われてからまだ三年だぞ俺は。

「モデルガンさん、ニン婆とはまさか私のことではありませんよね？」

ニン婆の名前はニンジンとさつま芋の甘煮だ。

「私ですかっ！」

他に「ニン」がつくのは精々ままごとセットの中のにんじんくらいだ。でも、あれはニン爺だな。

「くあー、ねむー……あん？ こんなとこにダーツ置いてたっけか？」

「ギクッ」

自分で来たもんな、ダーツ。わざわざ階段登って。

人間だったら多分いき切らしてたな。だって、階段ってダーツか

ら見たらかなりの大きさになるぞ？ おはじきから見た方が大きい
だろうがな。

『そりゃあもう！ 大きいなんの！ まっ、跳ねて登るけどねん』
……片付けられてる袋から出られないのか？ いつも出てくる破
れ目がつくろってあるし……。

『正解っ！ 光ちゃんがつくろつちやつたんだよねーっ。良かれと
思ってたことがおもちゃにとっては障害にーっ！ ああ、何と
いうことでしょーっ！』

やかましい。

声も充分やかましいが、何より袋の中でじゃらじゃら暴れてるの
がやかましい。

「んだあ？ 歩ルターガイスト現象って奴か？ ってか、おはじき
オレのじゃねーんだけど」

『しまった！ 岳が居る事忘れてたよっ！』

記憶力悪いな、ダーツ。 頭がぺらぺらだから仕方ないのか。

『アホだな、テメエ等』

何純の机の上から見下ろしてんだよ、ルービックキューブ。てめ
えは威張ってんのか？

『じゃあねえだろ、ここに置かれてるんだから』

『じゃあ落ちて来い』

『普通下りろって言わねえか？』

じゃあ下りろ。

『俺がこの机の真ん中から急に机の端まで行って下りたら明らかに
不自然だろうが』

じゃあ下りろって言えとか言うんじゃねえよ。

『ちよつと間違いを正しただけだろ』

落ちろ、は間違いじゃないと思うんだがなあ。

『ぶつちやけ間違つては無い。何かそういわれるのがイヤだっただ
けだ。俺が』

結構自己中だなルービックキューブ。わざわざ『俺が』って付け

足すか、普通。

『……ねー、僕が『いいなー、ウサギ人形ちゃんは』って言った理由はまだ聞かれて無いよ?』

『聞いて欲しいなら聞いて欲しいと言え』

『そんなの言えるわけ無いじゃん! 恥ずかしい!』

堂々と恥ずかしいって言えるなら言えるだろ。

『なぜなんですか?』

『ああ、ニンジンとさつま芋の甘煮さん、今まで陰でおばーちゃんとか言っでごめんなさい』

『言っただんですか!?!』

気付いてなかったのか、ニン婆。

たまに陰でなくても言っただぞ?

『もう聞きません!』

『ああああああ! ごめんなさい!』

『いいですよ』

許すの早っ!?!?

『せっかく謝ってくださったのです、ここで許さなくてどうするのですか。話がめんどくさくなるだけです。で、なぜウサギ人形さんが羨ましいのですか?』

『うん、あのね、ウサギ人形ちゃん、いつも光ちゃんに構ってもらえるでしょ?』

『ええ』

『だから、羨ましいなーって! 僕もたけにゃんと寝てみたい!』

無理だろ。

『何で!』

『だって、お前、ダーツだぞ?』

『そうだよ!』

『太っとい針付いてるんだぞ?』

『そうだよ! 僕は磁石とは違うのさっ!』

『寝てるうちに刺さりそうで怖いから絶対俺が持ち主なら一緒に寝

ないな』

『うわぁぁぁん！』

おい。強引に布団に潜り込むな。危ないから。

「あ、一が六つ並んでる」

「賞味期限今日なんだ。早く食べよ」

二十一年十一月十一日

うわ分かりにくつ。数字で書くよ？ こゆこと。

2011年11月11日

今日は、ポッ〇ーの日だよ！

忍でーす。

1111年11月11日を過ごした人はちょっと感動しただろうな、と思っただけど、その頃の日本は天永二年、平安時代。カレンダーなんて広まってなかったよねー、きつと。気付いたかな、その日に生きてた人。

「ポッ〇ーおいし〜」

「あつ、あたしが食べようとしてたのに！」

「はい、二本」

何で二本？ これだけだよって言う意味？ もうあげないよ、二本もあげたでしよって言うの？

まあいいや、いざとなったらもう一箱開けよう。何でこんなにポッ〇ーあるの、うち。

「……ところでなつくん、君はさっきから何をしてるの？」

すつごくね、真剣な顔してるの。ちよつとかつこいいくらいに真剣な顔してるの。

で、凄く慎重に、慎重に……

「見りや分かるよな？」

鉛筆立ててるの。ずらありと。うちのテーブルのと真ん中に一列。なんか、なつくんが居るのと反対側では岳が同じ事同じくらい慎重にやってたりね。

純兄は自分の椅子に胡坐かいて座って、呆れた目でそれを見る。

……終いにはテーブル叩いて全部倒すんじゃない？

いや、テーブルの下でござござやってるはーちゃんが倒すかな？

「なつくんの慎重な顔、こんなときしか見ないなあ」

「そりゃあ、俺の席は教室の一番後ろなんだから、授業中は顔合わせねえもんな」

「その言い方、なつくんが授業中マジメな顔してるみたい」

「してるよ。俺、授業中は凄くまじめな顔してるぜ」

『嘘だ』

「皆でハモんなっ！」

あ。一本倒れた。

「なつくん！ 頑張つて百一本立てるんじゃないかよーの！」

そんな目標立ててたの！？

「あ、悪い！」

「アホだろ、テメエ等」

「現実逃避くらいさせる」

現実逃避？ 現実逃避つて言った今！？

「もーな、円周角とか嫌い！ 漢文とか知るか！ 天王星はぼった

り倒れてて同じ所ばかり太陽の光当たるとか俺にや関係ねえよ！」

「最後のは本当に関係ないね」

天王星の自転軸が公転面に対してほぼ水平に傾いてるって言うの
でしょ？

四十二年間、かたっぱだけずっと日の光が当たってるんだって。い
やだな、それ。日が当たつてるところに住んでたら眠れ無さそう。

「漢文面白くねえか？」

「何処が！？ 意味不明なだけだろあんなん！」

「それこそ何処が？」

「あーあー、もういい。もーいい。俺あこつちに集中する」

岳は黙々と鉛筆を立てている。端から見ればただの暇人。

あ、本当に暇人か。そうでなきゃこんなことしない。多分。

「純お兄ちゃん、かんぶんって何？ カン・ブンさん？」

「名前じゃねえよ。中国の文」

「そんなのやるの〜!? なんで〜?」

「知らん。義務教育だから?」

「やだなそんな理由。」

「ひーちゃん、忍ちゃん、見てみて!」

おお、はーちゃん。さっきから何やってたの? テーブルの下で。

覗いてみると……うわおう。

ロープがいつぱい。

「お兄ちゃんがとりあえずどっかのロープに引っかかれば、他のが一気に絡みつくように作ったの!」

ある意味才能だよ、これ。どうやったらそうなるの。

「うおっと。誰だよ、こんなとこにロープ張ったの!」

あ、岳が先だった。

「うわあっ!?!」

おお、一気にロープが岳に絡みついた! これはもう、綱って言った方が正しいかもしれない。

なっくんはなっくんで大爆笑してるし。

『あ』

鉛筆は全部倒れたけど。

286 2011・11・11・細長いのがいっぱい(後書き)

11時11分に投稿しようとして、23時と表示される事に気付いた時のこの虚しさ。

281 月といっぱい

こんばんは。

月です。

……ええ、地球の周りをまわってるあの月です。

英語でムーン、ラテン語でルーナ、サンスクリット語ではチャンドラと呼ばれるあの月です。くどい？

今日は、月の一日をご紹介します。

地球の周りをまわります。ぐるぐる。

えと、……月の内側をご紹介します。

月の内側にはですねえ、地球人が私の、暗くて平坦に見えるところ……海って言われるらしいです。を見て、想像したものが住んできます。

ほら、月の模様見て、日本って国では餅をつくウサギを想像しているんでしょう？ そんなのが住んでいるのです。

「アッサラーム アライクム！」

アラビア語のこんにちは、ですね。

吠えながら言われるとちょっと怖いです。

アラビアでは吠えるライオンに見えるらしいです。現れたときはそりゃーもう、私がびっくらこきましたよ。だっていきなり吠えるんだもん。

寝るときは静かなのにねえ。

「ブオン ジョルノ」

こちらは南ヨーロッパで生まれた、はさみの大きなカニ。今日はイタリア語のようです。気分によって南ヨーロッパの言語を使い分ける、面倒な子です。

はさみの、右と左のバランスが滅茶苦茶悪いです。左大きすぎます。

それはともかく、歌上手ですよ、特にイタリア民謡。

サンタルチアとか、帰れソレントへ、とか。

どこから月中に響く歌声を出しているのかは不明です。

「ラバ ディアナ」

リトアニア語であいさつしていただきました、東ヨーロッパの、横を向いた女性です。愁いを帯びた表情が何とも言えません。

はつきり言いましょう。とても美人です。声もきれいです。

どこから見ても横顔なのがとても怖いのですが。

「……………」

シカトされました。

北ヨーロッパの、本を読むおばあさんに完全にシカトされました。

彼女は今持つている本に夢中のようにです。作者は……ルソー？

はい、誰かは分かりません。

いえ、本当は、さっきまであいさつされていたのが不思議だったのです。だって私、月ですから。彼らの立っているところは、私の内側ですから。見えますが生きているとは思っていないでしょう。

「グーテン ターク」

ドイツの、薪を担ぐ男です。彼が薪を下したところを私は見たことがありません。

彼曰く、『薪を下ろしたらただの男だ！』だそうです。

ちなみに、彼があいさつしたのは……。

薪です。

「……………」

あ、向こうからやってくるのは、スカンディナヴィア半島の、水がかつぐ男女ですね。

何か民謡を歌っています。

足取り軽く、スキップをしながらやってきま……あれ？

足取り、かなり重いです。スキップどころじゃありません。

水が重いらしいです。

休憩という事で、水を置きました。薪を担ぐ男のように、『水を下ろしたらただの男女だ！』と言う気は無いようです。

「こんにちは、お餅はいかが？」

すぐそばで餅つきウサギが餅をついていたようです！

出来立てほやほやのお餅を、月の内面にへたり込んでいる二人に差し出します。

苦労して作ったお餅を、惜しげもなく人に上げるとは、何て優しいんでしょう。

『ヴァ サードウ？（何て言ったの？）』

言葉は通じなかったようですが。

282 みかん風呂の被害者二名 犯人は反省の色なし

「おとーさん、何やってんの？」

「みかん風呂の準備」

「……出汁パックで？」

「出汁パックを舐めるな」

舐めないよそんなもの。みかんの味がするわけじゃあるまいし。忍でーす。

おとーさんが、また何かやっています。

みかんの皮、食ったら干しとけーって言われてただけで、このためだったんだね……。

「よし、風呂ん中に放り込んでこよう」

「お風呂、今光が入ってるよ」

「そなの？ じゃあ感想聞いとこ」

あたしも行こつと。さつき晩ご飯食べたからお腹いっぱい、勉強する気になんないもん。

「光」

『お父さん？ 何？』

「みかんの入浴剤があるんだけど、入れる？」

『ちようだい』

欲しいんだ。

ドアの隙間をちょっと開けて、手渡し。

「はい」

「寒いから早くドア閉めて」

ドアの隙間から入ってくる外の空気の方が、ドアを全開にして入ってくる空気よりも冷たく感じたりするのは何でだろう。

「どう？ みかん風呂」

「まだ入れたばっかりだよ。効果出るわけ無いじゃん」
「ごもつとも。おとーさん急ぎすぎ。」
「あがつたらどうだったか教えてね」
「はい」
「ついてきた意味なかった。」

それからみかんの頭……：てっぺんの事よ？ から少しを切り落として、フォークでほじくりながら食べてた頃、光があかつてきた。
……あたしがこんなめんどくさい食べ方してた理由？ こうやって食べる時間掛かるから沢山食べた気分になれるんだよ。
慣れてコツがつかめると全然そうは感じないけど。

「どうだった？ みかん風呂」

「チクチクする〜！ 痒い〜」

「え」

そのお風呂、あたしも入るんだけど。

「シャワー浴びて出たから今はそうでもないけど〜……」

「うーん。なんでかな」

「暖かくはなつたけど、あれはちょっといやだな〜」

あ、プラスの面もあったんだ。

「ちゃんと乾かした？」

「はず」

「……乾いてなかったんじゃない？ からっからになるまでやった方がいいんだよ」
多分。

「じゃあ次はそうしよう」

……：やっぱり乾いてなかったんだ。

「試す時は皆があがつてからにしてよ〜？」

「はあい。次はセイタカアワダチソウでやるつもりなんだ」

セイタカアワダチソウって……。

あの、背の高くて、黄色いちっちゃな花がいっぱいついてる奴？
雑草？

「ほら、採って来たの」

でっかい袋に四分の一くらい。

「おとーさん、ドジョウ捕りに行くって言ってなかった？」

「うん、酒かすに魚のエサとか色々混ぜて罟に入れておいたら、ド
ンコみたいなのと海老とモロコが捕れた」

何混ぜたんだろ。

「水槽に入れといたよ」

よし、後で見に行こう。……光はもう走ってってるし。

「ちよつと疑問が浮かんだんだよね」

「何？」

「罟はつてる川、ドジョウいるのかな」

知らん。

「父さん！」

あれ？ 岳。

「なんか風呂入ったらチクチクしたんだけど！ なんかしただろっ
！」

あ、みかん風呂被害者二人目。

282 みかん風呂の被害者二名 犯人は反省の色なし（後書き）

ちゃんと乾かせばみかんはお風呂に入れても大丈夫らしいです。

私の入ったお風呂に浮かんでいたみかんの皮は乾いていなかったの
でしょう（苦笑）

283 二度めまして 捨て猫です

今。

とある住宅街に、ダンボ ル箱が置いてあった。

中には、緑色のつぶらな瞳をした子猫が一匹。なんかどっかで見
たことがある。

しかし、今回はまだ猫が居る。

赤い目をした、緑色の目の猫よりも二回りほど小さな子猫も一匹。
さらに、黄色い目の、緑目の猫とほぼ同じ大きさの子猫も一匹。
さらにさらに、青い目をした、黄色い目の猫と同じ大きさの子猫
も一匹。

彼らの目的は、いったい何だ！

「きゃあつ！ かーわいー！」

学校帰りなのであるう、真つ赤なランドセルを背負った女の子が、
猫を抱き上げた。

一気に四匹。

「あつ！」

一匹や二匹落ちてもなんら不思議ではない。

女の子の腕から落ちた赤目と黄色目は、ちよつと不機嫌そうに毛
を逆立てた。

「ごめんねっ！ あ、すぐ戻って来るから動いちゃだめだよ！」

そう言つて、女の子はすぐ目の前の『古閑』と表札に書かれた家
へ駆け込んでいく。

どうやら、そこが彼女の家らしい。

「ただいまーっ！」

玄関は開けっ放し、靴をそろえることなくバタバタと家の奥へ走
つていく女の子の背を見て、猫達は……

『にゃむ』

何もしなかった。

そんな事より、今は目の前に、どこかの親切な主婦がお供え、もとい恵んでくれた鮭があるのだ。

お昼ご飯に出したそれを息子が食べてくれなかったから捨てようとしたところに、猫が段ボール箱に入っているのを見つけ、ちょうどいいと思って残飯係を任せたわけではない。多分！

「じゃ」

緑目は言った。

これは自分に供えられた鮭だから譲らない。

緑目は、前にもいろいろ供えられたことがあるのだ。

揃いも揃って、食べ方が分からなかったり、そもそも食べ物だという事すら分からないものもあったが。

だから今回も、これは自分に供えられたものだと主張している。

『じゃあ』

赤青黄目は言った。

どうぞ。

そういう訳で、緑目は遠慮なくピンク色の鮭をいただいた。

「猫ちゃんっ！ いいって！ いいって！ あたしの家で、君たち飼ってもいいんだって！」

赤青黄目の目が光ったのは気のせいだろうか？

駆け戻ってきた女の子は、段ボールごと四匹を抱え上げて、よろめきながら家へ戻った。

緑目は酔った。

青目も酔った。

黄目は少し酔った。

赤目は酔う前に寝た。

「うーん、何か名前付けないと」

リビングに段ボール箱を下した女の子は、猫を見つめて呟いた。

猫たちはみんな揃いも揃って真っ黒な色をしていて、違いは目の色、赤目だけは少し小さい、という程度だ。

「まず、この子はチビだよね」

将来大きくなったらどうしよう、という悩みは、その時になった
らデカって名前にしようという事で自己完結した。

チビと名付けられた赤目は寝ている。

女の子の体温が気持ちいいらしい。

「うーん、この三匹はパツと見全部同じだからなあー。ねえ、こっ
ち向いてー!」

宵から復活し、残った鮭を再び食べ始めた緑目を除いた二匹が振
返った。

「よーし! この子はムシ!」

無視したからムシ。

この女の子の頭はとても簡単な作りになっているらしい。

「問題はこの二匹か……」

少し考えた後、女の子は片手を差し出し、言った。

「お手!」

黄目は反応してあげた。

「じゃあ君、オツテね! 最後の子は七海ちゃん!」

なぜ青目だけ普通の名前で、なぜ青目だけちゃん付けなのか。

そこに突っ込む猫はいなかった。

だって、僕らオスだもん。ちゃんづけヤダもん。

というのが、緑、青、寝ているがついでに赤目の主張だった。

真夜中

「よお、天斬剣。もうかるか?」

以前、緑目が色々供えられているのを見て、仏か何かかと首を傾
げていた少年が現れた。

すると、緑目以外の猫がとんぼ返りをして、なんと、幼児の姿に
なった。

「捨て猫ってあんまもつかないや」

「うん、だるうな」

「オレ、捨て猫止めた！」

「私も」

「……俺も」

そして、次の日の朝から、女の子は自分を裏切らずに段ボールに残ってくれた緑目に七海と名付けて可愛がった。

284 占い代金はお弁とおかず

「忍、純くん」

「あーい?」「あん?」

「おいでおいで」

いや、おいでも何も、あたし等の席は桜のまん前だから、これ以上行きようがないんだけど。

忍です。

昼休み、弁当を取り出したところで桜においでおいでされました。僕あ一体どうすればいいのでしょうか。

「どうしたの?」

「お弁当忘れちゃった」

「購買行つといで」

「お金持ってないよっ」

その可愛い笑顔は、あたし等に『よこせ』と?

「ちようだしい?」

素直に言いやがりましたこの娘。

「トマトならやる」

「わっつ、ありがとう、純くん!」

嫌いな押付けたね?

嫌いじゃないけど食べなくて済むなら絶対食べないもの押付けたね!?

「あたしもきんぴらあげる」

「わっい。ありがとう、忍!」

やった、きんぴらごぼう食べなくていい!

「占いつて意外と当るよね。もぐもぐ」

「占い? どころ飛び出たの、その話題」

床下あたりから突然飛び出たような木がするよ? 我ながらなんて分かりにくいたとえ。

「さっきね、今日のわたしのお昼ご飯がどうなるか占ったの」
「さっきって……社会の時間？ 授業中？」

「そしたら、友達が譲ってくれるでしょうって出たの」

「当るねえ、その占い。でもそれって占い？」

「予言の類に入りそう。正確だし。細かいし。はっきりしてるし。当るし。」

「忍、占ってあげようか？」

「うん。お願いします先生」

「ちよつと興味はある。」

「おかずもう一品ね」

「あたしのおかずがなくなるだろうが。全部で三品+トマトなのに。」

「チーズの海苔巻き一つでどう？」

「おっけ」

「いいんだ。」

「……ああ、チーズの海苔巻き好きなおかずの一つなのに。」

「んつとね……忍は」

「あれ？ 何か道具使うんじゃないの？ いきなり語りだしたよ？」

「今頑張ればちゃんといい結果がでるよ。でも頑張らなかつたらそこで終わり。取り返しつかないから気をつけて」

「……あの、真剣な顔で言われると怖いんだけど。もうちよつと気楽に聞きたかった。」

「あたしの何を占ったの？」

「あはは。頑張れば分かるんじゃない？」

「何で引つ張るの？ ねえ、何で引つ張るの！？ すっごい気になるじゃん！」

「純くんには教えておいてあげるね」

「よし、桜の小声は意外と大きいから聞ける！」

「……と、思ったのに何で机に、しかもあたしから見えないようにわざわざ手で覆って書くの？」

「純兄にだけ見せたりして、すぐに消すって酷いよ。」

「あたしのチーズの海苔巻き返せー」
「ちゃんと占ってあげたでしょ〜？」
「うー、頑張れって事しか分かんない……。」
「チーズの海苔巻きくらいやるから、すねんな」
「わー、純兄ありがと。何企んでんの？」
「無償でやつちゃダメなのか？」
「何が起るかわかんないからダメ。」
「でもくれるものは貰うのがあたしだから貰う」
「あーおいし。チーズの海苔巻き、オススメよ？ スライスチーズを海苔で巻くだけだし。おいしいし。」
「純くんも占ってあげようか〜」
「いい」
「わたしが気になるから占っていい〜？」
「占えねえと思うけど？」
「やってみなきゃ分かんないでしょ〜」
「あたしは桜がどうやって占っているのかが分かんない。」
「……う〜ん、何かぼんやりしてる」
「だから言っただろ」
「いつ占ったの？」
「あ、あ、でもね！ 危ないことはやめたほうがいいよ？」
「俺にとつては危なくねえよ」
「何？ 危ないのって」
「忍は知らなくていい事」
「死神関係か。」
「桜、危ないことって？」
「ノー勉で期末テストに望む事〜」
「あれ！？ 違った！？」
「そっちか？」
「純兄も分かってなかった！」
「やめたほうがいいよ〜、危ないよ」

「授業時間あるし」

「よく居なくなってるじゃん」

リオって人とか、忍くんとか、妙羅とかに呼び出されて。連れ去られて。

「ノート見れば大体分かるからいんだよ」

「いいの？ 最近数学難しいのに。」

「むう、天才を見せ付けられていやな気分になったからもう一品
ちようださい」

「もうねえよ」

「がーん」

……くうって、お腹がなる音が聞こえた。

285 自由人コンビ、やってきます

「暇だなあ……」

「龍城、バイクを運転するときは常に周りに注意を配らにやならんのに、暇とはなんじゃ」

姉御にんなこと言われる日があるたあ思ってもみなかった。

龍城つす。

姉御を後ろに乗せて、山口からオートバイで東へ、東へ。

ここどこか、誰か教えてくれやせんかね。

地図？ あつたらここがどこかどつくに分かつてる。

携帯ナビ？ あ、その手があった。でも今出しても今更感しかないんで、結構つす。

「……前方約二十メートルに見覚えのある二人組を発見。どうしやす、姉御」

「突撃！」

「はねればいっすか？」

「捕まるのは龍城じゃけ、おっけ」

んじゃあ、はねますか。

「おら」

おお、きれいに放物線を描いて飛んで行った……。純つて言っ
たっけ。

「てえ、おおおおおい！ ホンマにはねんな！」

「許可したのは姉御なんで」

「ホンマにはねる奴があるかああああつ！」

余裕ねえつすねえ、姉御のくせに。臯月姉のくせに。

「純兄！？」

お、起き上がった。純つて何なんじゃろうなあ。肝試しの時、お化けになって飛んでいくのが見えたけど、目の錯覚じゃあなかったんすねえ。

「おい、龍城さん、今の俺じゃ無かったら普通に死んでましたよ」
「純じゃ無かったらはねてなかったんで」

「……………」
「ああ、警戒してる。」

「ねえ、なんで皐月姉と龍城さんがこんなところに居るの？」

「ぶらり旅？ うーん、何て言うか、旅じゃ！ 旅！ 男のロマン！」

姉御が男だったたあ知らなかった。

「あたいのロマン！」

変えやがった。

「……………あそ。龍城さん、仕事は？ 警察なんでしょ？」

「クビになって、今は暴力団にお世話になってやす」

「……………何があったの、龍城さん」

特に何も？

交番に届けられたお金をちよるまかしてたら、センパイに気づかれて。その他諸々危ない立場に居たもんだからバツサリクビ。

前に裏路地で暴れてたのを見逃してやった暴力団に誘われて……

辞させて正解じゃったなあ、警察も。

本当には多分存在しない筈だからご安心を。

「暴力団って言っても、麻薬はやってないんでご安心を」

「なんかそれだけじゃ安心できないがするけど……………まあいいや」

「そうそう、まあいいんすよー。」

「純ちゃん、忍ちゃん、学校帰り？」

「見て分かんねえか？」

純は学ラン、忍はブレザー。二人の肩にはカバンがかかってて、どっからどう見ても学校帰りっすね。

「龍城ー、忍ー、純ちゃんが冷たい」

「前からじゃん」「純の言う通りじゃないっすか？」

「忍だけだよ、あたいの味方は！」

しばらく動かなさそうじゃけエンジン切っとこ。

「純、純」

「何ですか？」

皇月の姉御は忍となんかやっちょうし（忍に絡んでるともいう）
こっちは純と。

「なんで、はねられてそんなにピンピンしてるんすか？」

「なんで人をはねる気になんかあったんすか？」

「姉御の許可が下りたんで。それよりこっちの質問に答えてくれやせんかね」

肝試しん時から、香ちゃん共々気になってるんすよ、こっちは。

香ちゃんは、ちよつと話したら興味津々で聞いて来るもんだから困った困った。

「ん、運が良かったんだろ」

簡単に返しやがりますな。

「まあ、あとでじっくり聞きますなあ」

「……あとで？」

ほら、姉御が言ってるの、聞こえるじゃる？

「今晚泊めてくれない？」

そう言う事っす。

何しろ今まで野宿だったもんで。

「だ、か、ら！ 七海が居なくなったの！」

「だ、か、ら！ 七海って誰だよ！」

「猫だつてば！ 黒猫！ 昨日の朝起きたら居なくなつてたの！」
耳が痛いからもうちょっと静かに喧嘩してくれないかな……。近
所迷惑だし。

修也だよ。

奈那子の飼つてる猫、七海が居なくなつたんだつてさ。

探すの手伝つてつて言われて、近所探してるんだけど……。岳は今
まで何探してるのか分かつてなかつたみたいだけど……。分かつてる
のは、オスの黒猫つて事だけ。

首輪すら付けてないんだつて。

「猫お？ どんな？」

「オスの黒猫だつてばあ！ 本当、何聞いてたの？」

「虫の声」

鳴いてねえよ、虫なんか。

「猫探してるんだつたらさー、うちの姉ちゃんに頼んだ方が、猫使
つて探せるから楽だぜ？」

猫操れるのか？ 岳の姉さんならやりかねない。あれ、岳の姉さ
ん何者？

「姉ちゃん猫の知り合いめっちゃ居るし。猫と話せるし」

本とに何者。

「行こ！ 今すぐ行こ！」

「中学生つてもう帰つてるの？ ねえ岳」

「翔、今隣を中学生が通つただけけど気付かなかつたのか？」

「きゃいきゃいしながら、女子中学生ご一行が通つたな、確かに。」

「姉ちゃん、最近学校に残る事多いからなあ。帰つてねーかも」

「でも、行つてみる価値はあるでしょ！ 行こう！」

……奈那子ん家の近所だから、岳ん家に行くとなると学校挟んで反対側……。自転車で来てよかった。
「オレン家まで、誰が早いか競争な！」
「ダメだよ、岳。自転車は車の一種なんだから、事故起こすかもしれないでしょ」
翔……車道に飛び出したりしたら危ない、とかじゃなくてそつちが先に出てくるんだな。

「忍？ 帰ってねっすよ」

誰この人。

髪ちよつと茶色い。絶対染めてる、この人。

「えー、マジで？」

「マジっす。お友達で？」

『こ、こんにちはー』

「岳、この人誰？」

翔、普通そういうことは本人の居ない所で聞かないか？

「龍城さん。元警察で、現在暴力団の一人らしーぜ」

何があつたんだらうこの人。

そして何でこの人小学生相手に敬語……。かどつかはともかく、そんな言葉使ってるんだらう。

「龍城さん、猫知らねーか？ オスの黒猫なんだけど」

「ああ、三匹くらい目の前を通り過ぎやしたね」

呪われてるのが、この人。

ほら、黒猫が目の前を通り過ぎると不吉だとか言うじゃん。

「カラスが頭の上に止まるわ、目の前でおっさんのはいてた下駄の鼻緒が切れるわ。んなこたともかく、黒猫がどうかしたんですかい？ 魚でもとられやしたか」

この人、これからどんな不幸に見舞われるんだ。

「違うよ！ あたしが飼ってたんだけど、居なくなっちゃったの！」

「飼った猫ですかい？ それとも、拾ったか、貰ったかしゃしたか？」

「拾ったの。段ボール箱に入れられて放置されたから……」
最初に聞いた時、本当に段ボール箱に猫入れて捨てる奴居るんだな！ってちよつと感動した。

「ふんふん、ちよつと来てくたせえ」

それだけで分かったのか！？

……来てくたせえって言って、何で龍城さんバイクに乗んの？
何で普通にそのまま走り出してんの？

ついて行けるかあっ！

「あ、すいやせん」

気付くの早くて助かった……。

「コイツじゃないっすか？」

連れてこられたのは、第二水ヶ丘高校の正門前。

段ボール箱に入った黒猫が、帰るために出てきた高校生にチヤホヤされていた。

「にゃあ」

『かーわーいーいー！』

「ほら、鮭の皮食べる！？」

「はい、ミルク！」

「チヨコレートどっ？」

猫にチヨコレート食べさせちゃダメだろ。

「七海ちゃん！」

「にゃっ」

あ、七海、高校生の間に逃げた。

「……七海って、奈々子さんから逃げたんじゃ」
言っつてやるな、岳。

287 靈界にも色んなのが居る

「じゅん、リオン知らないでしゅか？」

「リオが何処にいるかよりも、ミュウがなんでここに居るのか知りてえんだけどな、俺は」

「リオン知らないでしゅか？」

スルーか、おい。

純だ。

最近、用も無いのに靈界に来ることが増えた気がする。実際増えたんだけどな。今、学校は二時間目当たりかな……。

「リオン知らないでしゅか？」

三度目。ほっといたら何回言うんだろ。

「答えないと実体化できないようにしましゅよ？」

ん、それは少し困る。

リオが行きそうな所……

「リオの故郷は？」

「行ったでしゅ」

「飯屋」

「行ったでしゅ」

「カジノ」

「行ってないでしゅ！　ありがとでしゅ！」

すっ飛んでった。

……居るって保証はねえんだけどなあ。まあいいや。

「おおっ！　純！」

俺が今居るのは、靈界の中でも大きい商店街。

売ってる物はどれも激安。たまに例外でやたら高いものがあるけど、基本激安。真ん中は無し。極端な商店街。

名前が『極端商店街』だからか？　素直すぎやしねえか。

えっと、今こっちに走って来てるのは……。

「橋本さん？」

「誰が橋本さんだつて？ 私はハシモンって名前だぞ」
ちっ、惜しい。

「何か御用ですか？」

「冷たいな、死神学校の同期卒業生じゃないか」

「周りが年上ばっかりだったからなあ……同期って言われてもピンと来ねえ。でも多分、俺のことだから敬語使ってただろうな。」

「ハシモンさん、いい年したおっさんだし。少なくとも見かけは。」

「まあ、今日は久しぶり……一年半前後か？ に会ったんだし、飲もうじゃないか」

「……朝からですか？」

「しかも俺未成年。死神だから法律関係ないけど、未成年は未成年。大丈夫！ この時間からやってる店知ってるんだ」

「すみません、俺、ちよつと用あるんで。少なくとも今日は空きそつに無いです」

「そつか……じゃあ、またの機会に」

「次この人見かけたら逃げよう。」

「おつ、純じゃねえか！ トマトはもう食えるかー？」

「おかげさんで」

「八百屋のおっさん。本名知らん。」

「なんて言うお化けかも知らん。」

「そつかそつか！ まあ、この季節、トマトは無いが、かぼちゃとか、山芋ならあるぞ！」

「今は足りてるよ。買う前に家にあるのさつさと食わねえと」

「そつかそつか！ 無駄買いはいかなからな！ じゃあさつさと帰つて食いな！」

「今？」

「で、ウチの買いな！ 安くしとくから！」

「ただでさえ激安なのに、これ以上安くするって言ったら……日本円でも一桁になるんじゃない。」

よし、絶対来よう。

「ん。無くなつたらまた来るわ。んじゃ……」

「そうかそうか！ また来いよー！」

行くつて言つたとこじゃねえか。

おっさん、人はいいけどたまに人の話し聞かねえんだよなあ。

「あら、純。今日はリオと一緒にじゃないんだ」

「リオはカジノかどつかで遊んでんだよ。多分。いつも一緒に居るわけじゃねえし」

仕事ん時は一緒だけど。

花屋の姉さん。子供の頃に、どこぞの小学校の七不思議のひとつになつた事が自慢らしい。

ちなみに、ハロウィンに、ジャックランタン作つたかぼちゃはこの人に貰つた。

「リオンがカジノ……？ あんまり想像できないな」

「いつも負けて戻ってくるぜ」

「ああ、よく分からないけどちょっと安心」

本当によく分かんねえな。安心要素が何処にあつたんだ？ 心配要素もねえけど。

「ああ、純ちゃんじゃない」

あ、口裂け女。……じゃなくて、名前なんだっけ。

「茜さん？」

「そうよお、ちゃんと覚えてたからべっこう飴あげる」

何で名前覚えてただけで飴くれるんだ、このお化け。

「あ、そうそう、お菊ちゃんに会ったら、菊の花ありがとつて伝えておいて。何処にいるか分からなくてえ」

何処かの家のお手伝いさんやつてると思つぞ。

お菊さんだから、皿の扱いにはめちゃくちや気を使つてる。そつちに気を使いすぎて、他がおろそかになる事がたまにあるらしいけど。

「純」

「あ、リオ。何処行つてたんだ？」

「見てこれ！」

……チラシ？

『新発売！ キムチと唐辛子、激辛バター蛇（食用の蛇、異世界の産物）の激辛パフェ！』

「おいしいと思う？」

辛いと思う。

「くぁぁー」

疲れた。疲れたから勉強止めた。うん、もう今日はいっばいやったじゃん。止めてもいいよね。

自分に甘い？ いーの、それで。某可愛い豆のキャラクターが出て来るCMでも言ってるよ。
忍です。

椅子の上で伸びをするのは危険です。なぜか？ 後ろに倒れそうになるからです。

さて、何しようかなぁー。

リンゴ食べたいなぁ。でもなぁ、リンゴ食べ過ぎると怒られるからなぁ。

散歩しようかな。あ、雨降ってる。やめとこつ。

さてさて、ホントに何しよう。

「純にー、居る？」

隣の部屋を覗いてみても、誰も居ない。

岳は確か、翔ん家行くて言ってたしなー。

光は何か必死にお菓子のレシピ漁ってるから、多分相手してくれないでしょ。

おかーさんは買い出しで、おとーさんはドジョウ捕りの罠作ってるから……無理だな。

「暇そうっすね」

「暇そうじゃね」

あて、皇月姉と龍城さんって名前の自由人が二人。

「ねえー、旅してたんじゃないの？ 一昨日『ばいばーい』って送り出したような気がするんだけど」

何故か夕方近くなって。あたしが帰って来るの待ってたんだってー。

「今帰り。忍ちゃん達ん家に寄り道しちよん」

「ああ。晩御飯たかりに？」

「人聞き悪いっすねえ。晩飯を頂戴しに来たんすよ」
「変わってないし。てんで変わってないし。」

「龍城、晩御飯をいただきに来た、じゃろ！」

「へい、姉御」

意味同じだからね？ 結局何も変わってないからね？

「代わりにお土産買ってきたけん。皆で食べよ。東京バナニヤニヤ」

あ、やた。あたしこれ好き。

「おかーさんに電話しとくね。また来たよーって」

「おお！ さすが忍ちゃん！ わあっちよる！」

肩叩かれるのは別にいいんだけどね、臯月姉の場合ちよつと痛いんだよね。手加減してください。

「ところでさ、臯月姉たち隣になつくんとこ住んでんの分かつてる？」

いや、二回も家で食べるっていうからちよつと疑問に思っ

「……！？」

分かつて無かつたんだ。分かつて無かつたんだなこの人達。

「しらんじやった！ おい龍城！ 知つちよつたか？」

「全然」

「じゃんなあー」

なにが『うんうん』なの。

「なつくん達どこに住んでると思っってたの？」

「茨木」

それ前住んでたところじゃん。

「そっかあー。引っ越しちよつたんか」

「姉御がちゃんと覚えてりゃあ、あんな事にならんで済んだんすよ」
またんかい。

「あんな事って何さ」

「いやね、てつきりまだ茨木の家に住んでると思っってたもんすから

……『動くな!』って強盗つぼく押し入ってみたんすよ」
何やってんのあんた等。

「そしたら別な人が住んじよって、まあーびつくりしたあな、あり
やあ」

その『住んじよった別な人』の方がびつくりしたに一票。

「警察には追っかけられつし。つたく、俺が何したってんでえ」
強盗つぼく押し入ったんでしょ。

「で、その後どうしたの?」

「取り敢えず追ってきた警察を縛り上げて放置してきやした」
お前等一回捕まって来い。

「いやあ、でもまあ、楽しかったよ! スリルあって!」

「そつすね。姉御」

楽しかったですますなあ!

289 皆様の誕生日

「はーちゃんお誕生日おめでと〜！」

「おめでとー」

「ありがとあ！」

「……リビングで何か始まりました。

そうかー、今日はーちゃん誕生日だったっけ。きれいさっぱり忘れてた。

光、はーちゃん、美代が囲んでるミニテーブルの真ん中には、光&美代作の、秋の果物ケーキが。

昨日、光が色んなレシピ漁ってたのはこのためなんだね。今までレシピなんかちゃんと見た事無いくせに。

忍です。

妹三人組がケーキを美味しくそうに食べてるのを見ながら、あたしは台所でリンゴ丸かじりしています。

何かよく分からないけど何かの差を感じる。リンゴ美味しいからいいんだけどね。決して負け惜しみじゃない。だって負けてないもん。

「はあー、いいなあ、春は」

「おわあ。なつくん、いつから居たの？」

突然隣に現れましたが。あれ？ 今日塾ないの？

「今来たんだよ」

「へえ。で、なんで『いいなあ、春は』なの？」

「だってさあ……当日に友達に祝ってもらえるじゃん？」

「……あたし等が誕生日忘れてたの根に持つてるんだ。

まあああだ根に持つてるんだ。三か月前の事。

そりゃあね、あたしも純兄も、なつくんの誕生日忘れてたのは悪いと思ってるよ。いくら8月26日なんて覚えにくい誕生日だからって、忘れてたのは悪いと思ってるよ。

でもせめて、25日だったら覚えられてたと思うよ。きりいいから。多分。

5つてきりのいい数字に入るのかな？　どうなのかな。あたしはきりいいと思うけど。

そんなことより。

「なつくんさ、あたしとか純兄とかの誕生日って覚えてんの？」

「そりゃあ……俺はお前等みたいな薄情なんとは違うからな」
む。

「じゃあ、あたしの誕生日は？」

「3月21日。覚えやすいことこの上ないや」

321だもんねー。そりゃ覚えやすいわ。

「純兄は？」

「4月22日。忍の一月と一日後」

む、4月21日って言うかと思ったのに。

たつまあーに、あたしのきっかり一月後が純兄の誕生日だって間違える人が居るんだ。

「岳は？」

「10月6日」

おお凄い。あたしでもたまに忘れるのに。

「光は？」

「1月23日」

覚えやすいよねー、123。12月3日でも123だけど。

「どうだ！」

「まだ続くよ。うちのおかーさん」

「ええ！？　凜ちゃん？　……1月4日！」

正解。凄いなこの人。

「秋ちゃん！」

「母さん？　今日だよ」

へえー、そうなんだあ。

「冬くん」

「今度は父さんかよ。2月3日」

節分……。

あー、そういえば、小つちゃい時に、冬くんが『毎年毎年、誕生日プレゼントは鬼の役なんだ……』って、おとーさんに言ってるのを聞いた事ある。

そうそう、それでちょっとかわいそうになつたから、次の年から豆投げつけるのはおとーさんだけにしてたんだよね。

「うちのおとーさんは？」

「6月6日」

今年は誕生日プレゼントに修学旅行のお土産をあげました。

お土産とプレゼント一緒にされてほんの少し微妙な顔してた。

「それにしても、よく覚えてるね、なつくん」

「まあな」

「物はすぐ失くすくせに」

「余計なお世話だ！」

全然余計じゃないよ。だって、貸したものの帰ってこない可能性があるもん。

「なつくんが失くさなかつた、他人からもらつたものってさ、そのサメの歯のペンダント位なもんじゃない？」

桜からもらつたお土産の。純兄が被害にあつた、あのペンダント。

「そりゃあ……首にかけてるもんそうそう失くさねえよ」

「それを失くすのがなつくんでしょ」

「俺はいつたい何モンだよ」

え？

物を失くす天才以外の何なの？

290 この時の空は赤かった

「ねー、ゆうちゃん」

「何ー？」

「寒い」

「うん、私も」

忍でーす。

くつちゃくつちゃ、ゆうちゃんに貰ったガムを噛みながら、ゆうちゃんと一緒の帰り道です。

完全下校過ぎるまで、ゆうちゃんと一緒に学校残って勉強してました。

ゆうちゃんと一緒だったら、勉強がはかどるの何の。

想像してみ？

あたしとゆうちゃん以外誰も居ない教室で、シーンとした中、シヤーペンの音だけ響いてるんだよ？

集中するより他ないでしょ？ こんなの。

教室に入ろうとしてドア開けた人も、ちよっと入るの戸惑ってたよ。

「ねー、ゆうちゃん」

「何ー」

「七つの子歌って」

かーらあすー、何故無くのーって奴。

「えー」

「じゃあ何でもいいから童謡歌ってー」

ゆうちゃん、歌上手いんだよ。

そりゃーもう、某子供番組の歌のお姉さんやれるくらい。

……や、ゆうちゃんが一番上手いのはしつとり系だから違うかな。

「じゃあねー……とーりゃんせー、とーりゃんせー」

何であえてとおりゃんせ？

何でわざわざ怖い奴？ 好きだからいいけど。

「こーこはどーこの細道じゃー」

あたしがつい最近見つけた近道になる細道です。

この道を抜けたらあら不思議、水ヶ丘小学校の前に出ています。
家はすぐそこ。

「怖いながらもとーおーりゃんせーとーりゃんせー」

「ぱちぱちぱちぱちー」

「何よ、そのわざとらしい拍手の音」

手え叩いてないから拍手じゃないと思うけどね。

「んとね、わざとらしい拍手の音」

「なるほど」

ゆうちゃん納得したー。

「ゆうちゃん、ガムの味って何で帰り着く前に無くなっちゃうかな」

「それはね、ガムの味が無くなったらすぐ次の欲しくなっちゃう
ような人が、すぐに食べつくしてまた買いにくるようにお菓子メー
カーがしくんでるからよ」

聞いた事無いよそんな話。

「このお話はフィクションです、実際の人物、団体、事件とは何の
関係もありません」

「分かってるよー」

「忍だからちよつと不安になって」

ゆうちゃんはあたしを何だと思っとなるんだ。流石に分かるよ。

「……あれ？」

「どしたの？」

「修くん」

修くん？

ゆうちゃんが見てる方は……あたしん家だ。

岳が、帰るらしい友達三人組を送り出してるトコだけど……あ。

「修也のこと？」

「ええ。修くんー!」

「あれ？ 夕菜ちゃん」

あ、そっかー、修也もゆうちゃんも、名字風上だもんね。

「親戚か何か？」

『は？』

……ゆうちゃんと修也に八モって言われました。

「だって、二人とも名字同じだったから……」

「違うよ、忍さん。俺は風上^{かざがみ}」

分かってるよ。岳から聞いたから。

「忍、私は風見^{かざみ}よ？」

……………え。

「うそん？」

「って、今まで分かってなかったって事の方に、私が『うそん？』

」よ

うーん』か『一つの違いか……』。

「何でそんなややこしい名前してんのさ」

「文句言ってもどうしようもないでしょうに」

分かってて言ってるの。

「親戚じゃないんだったら、何で知り合いなの？」

「なんでって」

いや、ちよつとした好奇心。

「家が隣なの。団地の三棟の、四〇一と四〇二で」

ふーん。

「だああああつ、何でグーなんか出すんだよ、翔！」

「ジャンケンには運が全てだぞ、岳！」

「うわあ、お前に運で負けたくねえー」

「酷いなおい！」

さつきからこの二人何してるんだろつ。

ジャンケンは癖が全てでしょ！

……………違う？

291 これもある種の集団行動

「……はあ」

「玲奈さん、溜息ばかり吐いていると幸せが逃げますよ」

「美香っ！ あたしがいつ溜息ばかり吐いたのよっ！」

「今日だけで二十四回ほど」

中森、数えてたんだ……。

忍です。

食べると眠くなるよね。

そういうわけで、お弁当を食べ終わったあたしは机に突っ伏して寝ようとして、でも寝付く事が出来なくて目を閉じてるだけの状態です。

……こんな状態だと午後の授業が辛いんだよなあ。でも起きたくないなあ。

「てい」

痛い。

「桜ー、実況してー」

「篠の、むぐむぐ、チョップがあむ、忍の背中に落っこちんぐっ」

ごめん、口に何か入ってたんだね。

うん、まだご飯中の人何人か居るもんね。

「しーちゃん、何でチョップしたの」

「理由は無い」

酷い。

理由無いのにチョップされたんだって、あたし。

「し……忍っ！」

「はい？」

今度は玲奈かぁー。純兄関係だな。

……たまにさあ、玲奈が純兄のこと口にすると、嫉妬してるような目線が来ることがあるんだ。何でだろう。

「もう、思い切って聞くわよっ！」
はい、どうぞ。

「えと……あの……その……じゅ、純の、あの、うん」
全っ然思い切って無いじゃん。

「し、忍の好きなタイプってどんな人っ!？」

ああ、純兄の好きなタイプ聞きたかったんだね。

いきなり聞くのは気が引けたから、あたしのところをスタート地点にしたんだね。

「玲奈さん、昼休み中に本題までたどり着けますか？」

「っ……着けるわよっ! べ、別にそんなに恥ずかしい事じゃないしっ!」

本人がここに居たらけっこう恥ずかしいと思うけど。純兄居なくて良かったね。何処行ってんだ、この不良兄貴。

「で、忍のタイプって、どんな人!」

何か問い詰められてる状態になっています。

「何であたし?」

分かってて聞くあたしってやな奴? いやいや、これですんなり本題に入ってくれるかもしれないじゃんか。

「純と好み被ってるかもしれないからよっ! 別に、気になってなんか無いんだからねっ!」

そっという割にや、すっごい身乗り出してるけど。

「純兄のタイプ言えばいい?」

「ウエルカムよ!」

素直だな……。

やー、でも良かった、好きなタイプって言われてもあたし答えられないからね。分かんないから。

「んつとねー、純兄の好きなタイプは……」

好きなタイプ……好きなタイプ……? 純兄の?
知らんわ。

「ごめん、あたしも知らなかった」

「何でよっ！ 兄妹でしょ!？」

「兄妹だつて知らんもんは知らんのじゃ!」
怒鳴られたので怒鳴り返してみました。

「うっ……う、海中!」

「ああああああ! ラスク失くしたあああああつ! まだ食つてなかつたのに」

ラスク? 購買の? 失くしたつて……。

「海中! ラスクはどうでもいいから、純の好きなタイプ教えなさいっ!」

あれ? 恥ずかしがつてたのがウソのよう……と思つたら。

「はい?」

「……あ」

顔赤くして走り去つてしまいましたとき。何やつてんの。

「玲奈さん!」

あ、中森が追いかけてつた。あたしも行く。

「あたしも行く」

しーちゃんがついてきた。

「じゃあわたしも行く」

桜がついてきた。

「何か知らんが俺も行く」

なっくんがついてきた。

「じゃあ俺も」「私も」「え? 何?」「次移動教室だっけ?」

何かいっぱいついてきた。

……皆、暇なんだね。

「何あれ。おまんの学校、変な奴多いんじゃないな。一人の女の子がラスク全員で追つかえるなんざ、聞いたこと無いで」

「安心しろ。俺も始めてみた」

「……どっか安心するところあると? それ」

純だ。

目の前を玲奈が走って行ったかと思うと、忍含めクラスの奴等が追いかけてきた。

「あれ、元凶純兄」

「何が起こってるかもわからんのに元凶にされてたまるか」

「安心せえ、お前は全ての凶事の元凶じゃ」

俺、大物だな。

「純兄、一個聞かせて。それでこの集団止まるから。回答によっちゃ暴走するかもしれないけど」

はあ……。

「何だよ？」

「純兄の好きなタイプってどんな子？」

そんなことで走り回ってんのかこいつ等。

「はーやく答える！」

「一緒に居て落ち着く人でいいや」

「『でいいや』？ ……玲奈は入る？」

「いや」

あれは『変わった娘』だな。

「即答か！」

「そもそも好きなタイプっていわれてもピンと来るわけねえだろ」

「うん、すっげー分かる」

「そうか。じゃ、関係ねえけどこの集団止めて来い」

「努力しまーす」

努力するだけか？

聞く前に行きやがった、忍の奴。

「なあ純、玲奈ちゃんに会ったりよ？」

「何で？」

「……よお分からんけど、あの娘応援したなっただけえ」

「よく』どころかサツパリ分からんけど。」

「ほら、今すぐ実体化して」

「今日は霊体の気分なんだよ」

「何それ？ そんな気分あんのけ？」
俺はある。

……ほら、人間の誰かに見つかったらめんどくさい事になりそう
な日。それが霊体の気分の日だ。

292 子どものご飯中は静かか騒がしいかの二択

『……ミルク、何してるの』

『雨宿りですう』

『子猫連れて?』

『私の子供たちですう』

ミルクに子供が居たとは知らなかった。

忍でーす。

外では雨が降ってます。

家の中、あたしの部屋では白猫と白い子猫一匹とコーヒー牛乳みたいな色の子猫が三匹丸まっています。

……ここにいるのは、後でちゃんと掃除しておくからいいとして。

『どっから入って来たの?』

『窓からですよ。大丈夫ですう、ちゃんと閉めておきましたからあ。』

どうやって開けたの? 普通の窓ガラスよ? 鍵……は、絞めて

なかったかもしれないな。

『パパー、この人だーれ?』

『忍さんですよ。ご挨拶して』

『こんにちはー』

『こんにちは』

可愛い。かわいすぎる。凄く和む。あの、目え細めてる子とかが

……猫っていいなあ。

おかーさんが猫アレルギーじゃ無かったら絶対飼ってた。

でも、その前に気になることが。

『ミルク、パパなの?』

『そうですよ。それがどうかしましたかあ?』

『ミルク、オスだったの?』

『知らなかったんですかあー!?!?』

……いや、ほら、勝手に言葉分かる相手の性器確認するのめんど
かと思つたからさあ……。

『パパー、この人、ばかー？』

『雨ん中にほおり出すぞこの野郎』

『あたりメスだもーん。やるーじゃないもーん』

『パパー、この人、こわいー？』

前言撤回。この子猫共全然和めない。

『ミルク、この子等のおかーさんは？』

『今光さんに猫まんま貰つてますっ。ごちになりまっすっ』

光がどんどんいろんな料理を覚えていく。いい事だけど。わざ
と以外で不味い物作らなくなったし。

『パパ、おなかちゅいた』

『すぐにマミー戻ってきますからねえ』

何でミルクはパパなのにおかーさんはマミーなの？

『ねえ、おかーさんて、誰？』

『ロールちゃんですよ』

ええー……ロールと言うと……

『あ、あのお嬢様な口調の子か』

『そうですっすっすっす』

『ただいま戻りましたわ』

そうそう、この子この子。第93話参照。

『マミーー！』

『ごはん！』

誰だ、今ロイルの事『ごはん』って呼んだ奴。

『はいはい、ちょっと落ち着いてくださいな』

戦争だよな。こういつのつて。

あ、唯一白い子猫が踏んづけられてる。

『お姉ちゃん、この子達どこから入って来たの？』

『窓からだっつて』

『開けられたんだ』

「らしいよ」

「あ、雨やんでる〜」

ああ！ 窓開けないで！ 寒いから！

『じゃあご飯が終わったら帰りましようかあ〜』

『そうですわね』

ご飯の時ってホント静かだよね〜。あたしもただごと。

293 直前まで気付かなくても思い出しただけいいと思う

「……ゆうちゃん」

「何？」

「大変な事に気付いてしまった」

「何よ」

「明日から期末テストだ！」

「そうだった！」

今まで何の勉強してたんだこいつ等。

純だ。

三年四組の教室。こいつ等が異常なほどに集中して勉強するから、書類仕事する分にはちょうどいいと思っ、俺も使ってるんだけど……今日から。

何で死神に書類仕事があるかな。色々たまってたんだよ……報告書とか報告書とか報告書とか。溜めるもんじゃねえな。うん。めんどくせえ。短期間に色々やりすぎた。

「ゆうちゃん、落ち着こう。落ち着いて過去に戻るにはどうすればいいか考えよう」

「あなた全然落ち着いてないじゃない」

「うん、わざと」

「……余裕あんじゃないの」

二年の時なんかテスト勉強やって無かったからな、完全に。

「ほら、明日テストでしょ。明後日明々後日は休みだから、二日目と三日目の勉強は休みの日にできるじゃん」

「……明日、何のテストだったかしら」

「……じゅーんにー」

覚えてねえのか。おい。

「理科、保健体育」

「あ、じゃあ大丈夫かなー」

「と、社会」

「ピンチ！」

変わるの早え。

「社会なんか覚えるだけでしょ？ それより問題は保健体育よ！」
それこそ覚えるだけじゃねえかよ。

「そうね、問題は理科よ」

こっちも変わるの早え。

「理科も大概覚えりゃ済むだろ」

「なんでそうなるのか理由を聞く問題があるじゃないの。ああいうのは理解しないと覚えられないわよ」

もつともな事を。

「純兄ー、社会のワークか何か持ってない？」

「テメエはノート読み返すところから始めような」

「あいあいさー」

素直だな。

「純、これ教えて」

ワークシート……なんでしつかり持ってるんだ、ゆうちゃん。本名聞いてねえ。忘れてるだけかも知らんが。

「……細胞分裂の何が分からんのか分からん」

「だから、どうして細胞分裂はこの順番で怒るのが分からないって言ってるでしょ」

一回も言ってるねえよ。

「核の中に細胞質が出来て、それが一列に並んでから二つに分かれて、壁が出来て核が出来て終わりだろ」

「なんで？」

そこで『なんで？』とか言うな。

「生物学者にでも聞いて来い」

「分かった」

……分かった？ 生物学者に知り合いでも居んのか。

「じゃあ、黒点はどうして黒く見えるの？」

「太陽の周りのよりも温度が低いからだよ」

「なんで？」

「太陽にでも聞いて来い」

「分かった」

分かるなよ。

「太陽の所へ行くにはどうしたらいい？」

「童話にでもありそうな質問だな。んじゃ、」

「ペガサスにでも乗ってけ」

「落っこちる自信があるわ」

いらねえよそんな自信。

「なんでオリオン座は冬の星座なの？」

ただ覚えるだけじゃ駄目なのか、それ。

「巨人オリオンはさそりに刺されて死んだから、さそり座が出て来る夏の間はビビって空に居られねえんだよ」

「なんでそこに神話を持ち出すのよ」

一番手っ取り早いかと思っ

「大体、巨人オリオンを倒したさそりが、調子に乗って暴れ出したらどうするのよ」

そこか？

どこに巨人倒して調子に乗るさそりが居るんだよ。……居そうだな。そんなさそり。

「さそり座が暴れ出したら、隣にいるいて座が射殺すんだよ」

「あら、そこまで考えてあるの」

考えるとか言っ

「じゃあ、しし座とペガサス座は、なんで春と秋の星座なの？」

「その季節に一番明るいからだよ。オリオン座とさそり座も同じ理由」

「……面白くないわ」

面白くする必要ねえだよ。

「純兄、1999年に改正されたのって、何法!？」

「……多分、地方自治法って答えてほしいんだろっけど？」
でもそれ『問題です、何でしょっ？』って言ってるよっなモンだ
ぞ。

294 麻婆豆腐にさらに辛味をつける人のお話

はぐはぐはぐはぐ、はぐはぐはぐはぐ

「・・・」

うん、大体分かったぜ。『うめー』か『うまー』だ。

「おいしーよ、おばさん」

「どっさり唐辛子やらからしやらかけて食べる人に言われてもね〜」

「元がおいしくないと、調味料かけてもまずい。だからおいしーよ」

「ふふ〜、ありがと〜」

岳だ！

兄ちゃんの友達？ の、リオンさんが、何でウチで飯食ってたんだ。

『麻婆豆腐って言ったたら何か来た』ってにーちゃん言ってたけど…

…。

「なあ、姉ちゃん」

「ん？」

「リオンさん、髪長いじゃん」

「うん」

「くくってんじゃん」

「うん。そう見える」

「なのになんで、左右に動きっぱなしなんだ？」

「知らんがな」

尻尾みたいに見えるんだけど……。

ほら、犬とかがさ、嬉しい時に尻尾振るじゃん。

象とかもよく尻尾振ってんじゃん。

あれのごとく、後ろで一まとめにされた金髪が右へフリリ、左へフリリ……。どうなってんだ。

暖房はつけてるけど、エアコンじゃねーぞ。灯油のヒーターだぞ。

「ねえ〜、その髪どうなってんの〜？」

「どっつ〜？」

「何でそんなに動くの〜?」

よし、ナイス光。よく聞いてくれた。

「動いちゃいけない?」

「どうして動くの〜? って意味〜。それ自分の意思で動くの〜?」

「うん。自分で動かす。手みたいに。ほら」

ちよろつと肩から先つぽが出て来て、ペコリ。

「コンニチハ」

『こ、こんにちはー』

今のは腹話術だな。もろ自分の口で話してたし。うん。

「リオ、日本語では今の時間、こんばんはと言っ」

「分かった。コンバンハ」

『こんばんはー』

何で律儀にやり直すんだこの人。

「それ、何なの? しつぽ?」

「えーっと……純、約してくれない? ……って言うんだけど」

「くつひ頭尾でいいんじゃないの」

投げやりだな兄ちゃん。

「とーびつて頭に尻尾の尾〜?」

「ん。多分そんなん」

多分つて。

「リオンくんは何処で日本語覚えたの〜?」

なあ母さん、何麻婆豆腐に蜂蜜入れようとしてんだ。合うのか?

何か色的に合いそうな気がしないでも無い事無いけど、辛いのに

甘いの入れてどーすんだ。

「日本語は純から教わったよ」

「大変だったでしょ、純兄が先生じゃ」

「うん」

素直にうなずくなよ、おい。

「なんで日本語覚えようと思ったの〜?」

「純が、学生時代に「今も学生だぜ」……死神学校生徒の時に」

言い直した。

「学校で、日本語の何かを書いている事があつたんだ。その文字見た時に、日本の文字って綺麗な形してるなって思ったから」

動機結構単純なんだな……。

「日本語も話してもらつたら、そっちにも引かれた。それで教えてもらつて……で、飽きることなく」

今に至つてます、と。

「先生に日本語教える死神も居たのにな」

「分かりにくかつたから」

先生としてだめだろ、それ。

「純兄は何を書いたの？」

「今読み返しても分からんもの」

「どゆこと？」

「字が汚すぎて全く読めねえ」

「え、あの文字、汚かつたの？」

あー、あれだ。

見る人が違えば同じモンでも全然違う風に見られるんだな。

「あぁっ!?!」

「どしたの、忍」

「熟柿だと思つて開いたら……ちよつとしか熟してなかった」

「ドジだな。つて、なんで分かんなかった？ 突いたら分かるでしょ?」

「いや、完璧に熟してるのが無かったから、一番軟らかい奴を取つたら……」

まるでじゅくじゅくの熟柿つてわけじゃありませんでした、という訳です。

こつこつというのは皮にこびりついたのが取りにくいからもつたいないことになつちやうんだよね……。

忍です。

おとーさんはみかん、あたしはちよつとじゅくつてなつた柿を食べています。

光と岳は小学生駅伝見に行っています。修也が出るんだって。

光は……なんか、はーちゃんに誘われて。

「おとーさん」

「はーい?」

「みかん、何個食べた?」

「さあー。初めて食べたのは何歳だったかなあ」

誰が今までの人生で何個食べたかを聞いた。

「今日、何個食べた?」

「数えてない」

「教えてあげよつか、九個だよ?」

「知ってるなら聞くなよ」

……食べ過ぎつて言ってるんだけど。効いてないし。

「そつじゃなくてね」

「まだまだこれからだな」

「何個食べる気!?!」

なにが『これから』だよ!

これ以上食べたらなくなっちゃうじゃん。

「うーん、食欲の秋には抗えない」

年中食べるときには食べるじゃんか。

「もうすぐ冬なんだけど」

「あつ」

え、今更?

「クリスマスツリー出さない」と

「話全然つながってない!」

って言うか、聞く気無い……?」

「んー、出しといて。クリスマスツリー」

「なんでそうなったの!?!」

「クローゼットの一番上に挟まってる筈だから」

挟まってる!?! 挟まってるって何!?!

いっつもそういう所から引っ張り出すのおとーさんだからなあ…

…。見てなかった。

「純にでも出してもらって」

「え」

「純、居たの!?!」

「今来た。……なあ、えらくみかん減ってねえか?」

「犯人はコイツです。警部」

びしつとおとーさんを指差してみる。

「こら、父親に向かってコイツとはなんだ」「俺はいつ警部になっ

たんだ」

「ごめんなさい、と、なんとなく。」

「みかん買い足しとくから、親父、金」

「え」

「えじゃねえよ。ほとんど親父が食ってんじゃねえか」

「ごめんなさい」

分かればよろしー。

「純、言葉遣いには気を付けよう」

「大丈夫。他人と話す時は敬語になるから」

うん、毒舌になるけどね。

「そうそう、純、クリスマスツリー出しといて」

「めんどくせえ」

「大丈夫。クローゼットから出した後は、岳とか光とか……忍もやる？ がやってくれるから」

枝開いて、飾るだけだもんねー。

『だけ』って言ったけど、一番時間かかるよね。コレ。

「ん。気が向いたらその内」

「早めに頼むよー」

あら、純兄承諾してるし。

「ああ、釣りに行きたい」

「どっから飛び出たのその話題」

漬物石割って飛び出したような気がするよ？ 何この例え。

「別に、突然飛び出したってわけじゃないよ。クリスマス釣りーから」

「……………親父、寒い」

「やっぱり？」

やっぱりって思ったんならやらなきゃいいのに。

「外でやらないでよー」

「大丈夫。突っ込んでくれる人が居ない限りやらないから」

つまり、突っ込んでくれる人が居たらやるんだね。

「ふー、お腹いっぱい」

みかんの食べすぎでしょ。

「親父、腹いっぱいなんじゃねえのかよ」

何で十個目のみかんに手え伸ばしてるの。

「純に」

「あ？」

「こけた」

「あそ」

……奥さん、どう思いますこのバツサリした対応。

いや、心配されても困るんですけどさ。

忍でーす。

本屋に立ち読みしに行ったら、帰りに自転車でこけました。手のひら痛い。血は出てないけど皮むけた。

……受け身って確か、手のひら出すんじゃないかって腕出すんだよね。

いや、腕って言っても、手首から肘の部分。前腕とか、下膊かほくとか、前膊ぜんぱくって言うんだって。これから先使うのかどうかは知らないけど。

「……忍」

「あーい？」

「血い出てる」

「え」

「どこ？」

手のひらと膝しか打ってないよ。膝も別に痛くないし……。

「気付いてねえのか？ 膝。ズボン破れてる」

あら。ホントだ。

……おかーさん、ズボンと皮膚と血管破けたー。

意外と気づかないもんだねえ。手のひらはすっごい痛いのに。膝よりダメージ受けてないくせに。

「純兄、絆創膏あつたっけ」

「ん、絆創膏探すよりも先に傷口洗う事をお勧めする」

「大丈夫。舐めるから」

えーっと、確か階段下の物入れに入ってたはず、救急箱。

「獣かテメエは」

「自然回復万歳だよ」

「絆創膏付けようとしてる時点で自然回復じゃねえ
しまった。」

「じゃあ使うのやめた」

「何でこだわる必要があるんだ？」

「さあ？ 傷口舐めよ。」

あ。ズボンに血い付いてる。そろそうか。血い出っばなしのま
ま自転車こいでたんだし。

……………洗つとかなないと取れにくくなるよねー、コレ。

もういいや。ズボンだけ着替えよ。

「お姉ちゃん、なんでかたつぽだけズボンのすそまくってるの
？」

「傷口が速く乾くように」

「こけたの？」

「何でわかつたの」

「本当にこけたんだー！」

おい、分かって聞いてたんかお前は。

「何してたの？ 一輪車？」

あー、そういえば一輪車でこけてズボン、皮膚、血管破ったこと
もあつたなー。

「惜しい、タイヤが一個足りない」

「自転車で？ 何したの？」

「つまずいたの、歩道に。横から」

「つまずくって言うの？」

「知らん。」

たまに歩道って、低くなってるのに結構分厚かったりするよね。
で、そこに横から乗り上げようとすると、タイヤが上手く乗り上

げずに傾いて、勢いでそのままころんじゃうよね。……………ね？

……………ジーンズ洗って来よ。

「そのジーンズも破けたの〜。お姉ちゃんは大ダメージジーンズ量産機〜？」

量産はしてない。『機』が付くほど作っても無い。……………少なくとも中学になつてからは。

って言ったら『中学生になる前はそうだったこと認めるんだね〜』って言われた。別に認めた訳じゃないよ？

それにしても……………、手荒いってめんどくさいよね。洗濯機考えた人凄い。

血の汚れ取れないけど。

297 暗い所にご用心

暗い所にご用心。

清のように、

ピシヤッ

「うわっ!？」

水溜りにハマる可能性があります。

視線を低くして見ると、水溜りは周りの光で光って見えます。何処にあるか確認しながら歩くこと。

暗い所にご用心。

桜のように、

「うう〜……なにも、居ないよ、何も居ないよ〜……」
なんかわかんないけど何か居そうで、てか出そうで怖いことがあります。

怖がりな治しようが無いからしよーがない。

怖がりでなくてもちと怖い？

とにかくどうしようもない。知り合いと一緒に居ること。

暗い所にご用心。

かくれんぼ中の光のように、

ゴンッ

「いっ……っ〜」

狭い所だと、十中八九頭をぶつけます。

普通押入れのかになんか入らんが。

「ひーちゃんめっけ!」

ついでに、頭ぶつけたせいで見つかったりする可能性があります。

隠れた所から出るときにも気をつけましょう。

ガン

「っ…………」

痛いです。

そのまま立ち上がるうとしないこと。

暗い所にご用心。

「くすくす…………くすくす…………」

妖怪や、お化けが狙っている可能性があります。

あと犯罪者とか。

自分の身を守るように頑張りましょう。

防犯ブザー持つとか。

暗い所にご用心。

春のように、

「きゃああああ何か動いたあっ！」

「おーい、俺なんだけど…………」

「お、お兄ちゃん？」

「そうそう」

見知ったものでもシルエットしか、場合によっちゃ音でしかわからなくて動く怖いです。

突然動かれるとびっくりします。

+夏のように、

「びっくりしたじゃんかあああっ！」

「痛い痛い。何、地味に痛えぞそれ」

ちよつと動いただけなのにポカポカ殴られるかもしれません。

寝ても無いのに暗い所に居ないこと。

暗い所にご用心。

美代のように、

「……ぐー」

うつかり寝てしまう可能性があります。

暗い所で横にならないこと。

大人ならたたき起こされます。

子供なら……

「岬、運んであげなさい」

「またかよ!？」

起こすわけにも行かなくて運んであげなきゃいけない人の身にもなっ
てあげてください。

暗い所にご用心。

篠のように、

「痛っ。何だこれ、コマ?」

硬いものを踏んでしまう可能性があります。

「こら、誰だ、散らかしたの!」

「わーっ、姉ちゃんごめんなさい!」

物を散らかさないこと。特に硬いものや、とがったもの。

暗い所にご用心。

にゃんにゃんとか、七海とか、名前の多い子猫のように、

「にゃー」

夜目がきくのなら別ですが。

暗い所にご用心。

純のように、

「ん

「……………た」

座ったまま寝てると転んで頭打つ可能性があります。若しくは机に頭打つ以下略。

座ったまま寝ない事。

……………明るい所でもなるじゃないか、って？

目を瞑っている本人からしたら暗いから暗い所でいいんです。

暗い所にご用心。

忍のように、

「うあっと」

うっかり、あるはずも無い、もう一段の怪談を登ろうとしてこける可能性や、

「せーふ……………!?!?」

何とか手すりにしがみついてこけなかったとしても、うっかり手の傷に触ってすごい痛い思いする可能性や、

「っ!?!?」

体制を立て直そうとした時に柱に足の小指打ちつける可能性や、

「いつつつ……………のあっ!?!?」

片足立ちして、その足を押さえようとした時にバランスを崩す可能性や、

「え、兄ちゃんなんて?」「あ」

手を着こうとした扉が、弟により突然開けられる可能性や、

「どわあい!」「わっ」

その弟がこけるのを止めてくれるかと思いきや、思い切りかわされて、転んでしまう可能性や、

「ん

「いったあ……………」

その先の壁に頭をぶつけてしまっ可能性や、

「……………ん、だから危ないっつたのに、なあ？」

「聞こえるかっ！」

兄に、冷笑を浮かべられてめっさム力つく可能性があります。

……………これは無いな。

「純兄ー、何してんの」

廊下で胡坐かいたりして。

頬杖ついて、水槽なんか眺めたりして。

忍でーす。

おとーさんが水槽を家の中に入れてから、金魚が見やすくなりました。
した。

水槽の下には発泡スチロールの板が置いてあるから、いくら大き
いからって、床に傷がつく心配はありません。

「忍、重い。首折れる」

「頭にちよつと上半身の体重がかつたくらいで折れる首なら折れた
ほうがいいよ」

「分かった、折り返してやるから覚悟しとけ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。首つかまないで。まだ
折ってないよ？」

「折れないから折り返さねえけど」

うん、折れられても困る。

「で、何でまた金魚なんか見てんの」

「暇だから」

「受験生の言葉じゃねーぞー」

「いんだよ。テスト終わったところだし。仕事も久し振りに休みだ
し」

「久し振り？」

「文化祭以来の休み」

うわお。毎日あったの？

一週間に最低一日は休み無いといけないんだぞー。死神に人間の
法律関係ないってか。

「休んで暇だから金魚見てたの」

「ん」

「ほんつとーに暇なんだね」

「だからそう言ったじゃねえか」

うん、言ってたね。……あれ。

「パズルは？」

「気分じゃねえ」

さいですか。

あー、金魚、泳いでる。

何かすっごい口パクパクしてる。

めっちゃ集まって、こっちガン見してる。

「忍」

「あーい？」

「うちの金魚ってがめついよなー」

「うん」

誰かが通るとするでしょ？

そしたら『エサくれー！』とでも言うかのようについて来るんだよ。もちろん水槽内だけで。

ちよつとでも立ち止まったら、口パクパクしてガン見して来るんだから……つまり今の状態。

怖いわ。

「エサやるか」

エサの袋が入ったトレー、黒いから蓋の一部に見えたりする。

うわ、トレー取ったとたん、急に金魚が浮いてきた。水跳ねてる、跳ねてる。つべたいからやめい。

「純兄、何でそんな少ししかあげないの！？」

一つまみじゃ全然足りないよ！うちの金魚の数と食欲舐めるな！数？十八匹。食欲？穴の開いたポケット。いや、流石に底なして訳じゃ無いだろうけどさ。

とにかく、足りないよってば！

「戦争起こるよ、水槽の中で！」

「それが見たくてやってんだ」

「鬼か！」

「死神だ」

訂正されてしまった。

「死神がわざわざ戦争起こしてどーすんの。仕事増えるよー」

「いや、戦争起こすのも仕事」

訳がわからない。

「人口調整も仕事の一つ。戦争は一気に人口減らすのに丁度いいんだ」

怖いわ、この人。じゃない、死神。

「ん、今の忘れといてー」

「純兄、エサやりすぎじゃない？ 手に持ってる奴、全部入れるの？」

片手にいっぱい持ってるけど。

「ゴキ食ったこいつらの胃袋舐めんな」

「何で知ってるの!？」

あの時は天斬剣と、あたしとクロしか居なかったはず……。

「斬に聞いた」

あ、そう。

「なあ忍」

「あーい？」

「この水槽、前にめだか居なかったか？」

……聞いちゃダメな事もあるんだよ、純兄。

「じゃん、けん、ほい」

「だあつ！ また負けた！」

ふふん、清なんか弱い弱い。

忍です。

昼休み、何がどうしてこうなったのか、じゃんけん大会があたり達の中で開催されています。

……いや、ほんと、なんでじゃんけん大会なんか始まったんだろ
う。

「忍強いね。負けなしじゃない？」

「やだな、桜。じゃんけんでは負けなしだったら、ほかの所に運が回らないかもしれないじゃん」

「これ嫌だな」。

「忍、次俺と」

「あーい、なつくんには負ける気しないよ」

だって、負けた事ほとんどないもん。何故か。

「じゃんけんほい」

「早えよ」

「じゃん、けん、ほい」

はい、勝った。

「……………はあ」

「なんでそんなに落ち込むんだ。それでも男か！」

「関係あんのか!？」

しーちゃん……………。

や、じゃんけんだけで落ち込むなつくんもなつくんだしな。

「高山妹」

「あーい」

「じゃん、けん、ぼん」

あい、村田にも勝った。

「強つ。女神？」

「女神小っちゃ」

おいこらなつくん、その小っちゃいってどういう意味の小っちゃい？ 身長か？

「ここで運使っちゃって、忍、HR大丈夫？」

「何かあったつけ？」

「席替え。今回はくじだと言ってたぞ」

……あ、チャイム鳴った。先生来た。

「座れー。席替えするよ」

『イエーツ！』

テンション高つ。

「という訳で、学級委員ー」

「くじなら休み時間の間に作ったよ！」

仕事が速い。影は薄い。学級委員長ナナシちゃん。

いや、名無しってわけじゃないだろうけど。覚えてないから、あたしが。

「今回はねー、くじ引きでやるけど、何処に座るかはシャッフルするよー！」

どういう意味？

「前に、座席表を描くでしょー」

はいはい、描いてらっしゃいますね。

「で、くじで引いた番号、つまり座る番号のところを、私と蔵元くんで適当に書きます！ 引いた番号がどこにあるか、探さなきゃいけないけど……」『うわっ、一番かよ……』なんてことにはならないよー！

くじ引きで元々シャッフルされてるものをさらにシャッフルするの？ 二段構え？ 意味あるのかそれ。

悪い席ってすぐには気付かないから、落ち込むまで時間があるけど……。

「女子席は蔵元くん書いて。私、男子席書く」

「よし」

何の迷いもなくぱっぱと入れて行ってるよ、この二人。確かに迷ってもしょうがないけど。

「さーって、休み居たっけ？ 田中さんだけ？」

「高山くんが居ませ〜ん」

最近しょっちゅう居なくなってるけどね。

「また早退か？ まったく、成績落ちるぞ
そうかなー」

提出物ちゃんとやってるし、今日帰って来たテスト、全部95点
以上だったよ。家庭科以外。

「田中さんと高山くんのは先に取っておくね」

田中さん、4番……窓側真中の席。純兄は13番で、今の真後ろ
の席。

「はい、じゃあ男子から！ シジミくんと」

「し、な、み！」

「小浜くん、じゃんけんしてー」

あらら、紫波、完全にスルーされた。

『さいっしょはグー！』

待て。何で二人とも、最初はグーでパー出してるんだ。

「ちゃんとやれや！」

あ、蔵元に怒られた。

「最初はグー、じゃんけんポン」

「はい、じゃあ後ろからー」。

という訳で、席替えが終わって。

「また前後だね〜、忍」

桜があたしの後ろに。

「授業中に本が読みにくくなった」

しーちゃんがあたしの前、つまり真中の列一番前に。

「うーわ、早弁どうやる」

しーちゃんの隣に清。

「忍、もっかいじゃんけんしろ」

あたしの隣になつくん。

「……………ぐー」

桜の隣に村田、となりました。

前の方に来るとは。本当に運、じゃんけんで使いすぎたか。

……………運って使うものか？

300 ツリーかざる

「ん。後はどうぞご自由に」

『ありがとう！』

忍です。

箱入りクリスマスツリーを純兄が出してくれました。

箱入り。飾るところか組み立てさえしていません。そこまでやってくれてもいいのー。

誰がやる事になると思ってたの。

「お姉ちゃん〜組み立てて〜」

ほら来た。

「上はめ込むのはやったげるから、枝広げるのは三人でやってよ」

『はい！』

よし、いい子いい子。はーちゃん、美代、光、妹トリオ。

上下二つに分かれてるクリスマスツリーって、下半分に上半分差し込まなきゃいけないけど、これ難しい。

入った！……と思ったら、横に抜けてるだけだったり。あれ、

あたしがヘタなだけ？

よし、今度こそ入った。

「はい、枝広げてー」

「行くくよー！」

はーちゃん、一体あなたはどこへ行くつもりですか。

何で三人とも、枝広げるのにこんなに必死なんたる。

「何本広げたく？」

「十本！」

「九」

「私も九本〜。はーちゃんの勝ちだ〜」

何本枝を広げるか勝負してたのか……。

「じゃあいよいよ……？」

『飾りつけー!』

クリスマスツリーって、これが一番楽しいよね。……見るよりも

「何やるのかな〜」

「星!」

おいおい、ツリートップはやっぱり一番最後でしょー。

「星は最後だよ。その方が完成〜! って感じがするでしょ〜」

「最初、モール。……後からやりにくいし……」

あたしだったら最初に電飾飾るけど。

「とりあえず巻くもの巻いちやお!」

はーちゃん、全部まとめたね。確かに巻くものって言うのが一番早いけども。

「見てるだけでいいのか?」

「んー、今年は見てる気分なの。純兄は?」

「いつも俺はやってねえだろ」

うん。転がってきたクリスマスボール引っ掛けるくらいだよな。

……何でクリスマスボールなんか転がっていくんだろ。

「ひーちゃん家のクリスマスツリー、こんなに大きかったっけ?」

「去年お父さんが買ったの〜」
通販だね。

天井がまず高くないけど、星つけたら天井まであと数センチって
くらいの大きさ。

ある意味夢のクリスマスツリーだったけど。

前のクリスマスツリー、幼稚園とか、小学校低学年の頃は大きく
見えたのに、小学校中学年位になったら小っちゃく見えてくるから、
毎年毎年『こんなだったっけ?』ってなってたんだよね。

成長期ってすごーい。

「……この小っちゃいプレゼントボックス、何入ってるの?」

金色の紙で包まれて、さらに金色の紐がかけられた飾り。あたし
も美代みたいに気になって、一回開けた事あるんだ。

中に入ってるのがただの立方体の発泡スチロールで、すうっごく

がっかりした。

プレゼントみたいなの、四角い立体に四方から、一本の紐をかける方法は分かったけど。って言うか、何回も絞めたり開いたりして、分かるまでやってたんだけどね。

……あと、ついでに小つちゃい石埋め込んだ気がする。

「あゝ、ボール待てゝ！」

何でクリスマスボールが逃げるの？ ただのボールよりも転がらないよね。出っ張りあるし。

「ん」

「ありがとゝ。拾ってくれたのはいいけどなんで投げるのゝ？」

「なんとなく」

「納得ゝ」

するんだ。

投げたボール、ツリーの奥深くに入って行っちゃったよ。

「よーし、全部飾ったからー、星ッ！」

「私やりたいゝ！」

「……美代も」

「ウチだって！」

あ、けんが始まった。

『じゃーんけーんポンッ！』

終わった。

じゃんけんって便利よなあ。

『あーいこーでしよっ！』

またあいこ。

『あい、こで、しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！』

何回あいこが続くんた。

「勝ったー！」

「あゝ」「む」

四回か。

はーちゃんが勝ったけど……

「……届かない」

だよねえ。

飾りも、上のほうあんまりついてないしね。

「台ないかな」

「お兄ちゃ〜ん〜」

「俺は台か」

台探してて、純兄を呼ぶって事は……そうなんじゃない？

「はーちゃん、こっち」

「何？」

「後ろ向いて」

「はい」

後ろから持ち上げて……はい、肩車。かたっぽだけの肩に担ぐのも肩車だよな？ やっぱ純兄台だ。

「ありがと！ 純くん！」

「ん、早くやって。意外と重かったから」

重いとか言っただげないの。

『かんせー！』

301 相変わらずの六年二組

「しゅーうやー、ちょ、聞いてくれよお」

「何だよ、机旨い？」

いくら机とおでこがハグしてても、机なんか食わねーよ。

「で、何だ？」

「あんな、昨日な、四人で遊んでたじゃん」

「うん」

「帰ったらな、帰ったらな……」

「溜める必要あんのか？」

「ええい、突っ込むんじゃねーよ。」

「クリスマスツリーが完成してたんだよッ！」

「……………え？」

「だ、か、ら！ 帰ったらクリスマスツリーが完成してたんだよ！

飾り付けまで完璧に！」

オレもやりたかった！ 特にてっぺんの星！

台ねーと届かねーけどさ。ついでにそんな丁度いい台ねーけどさ。岳だ。

昼休み、今日の給食はから揚げだった。ジャンケンに勝って、他の人より一個多く食べる事が出来ただけに、いつもよりもっと旨かった。

……………でも、昨日のこと、って言うかクリスマスツリーのこと突然思い出して、旨かったの忘れちゃったよォー。

「そんだけか？」

「そんだけって言うな！」

「いや、だって……………なあ、奈那子」

「え……………あたしはツリー飾りたいな」

さっすが奈々子さん、分かってる！

「……………まあいいか。うん、で？」

「え？」

「続きは」

無い。

つつつたら、話途切れてシーンってなっちまうからあ……。

「クリスマスツリー飾りたかったあ！」

「駄々っ子か」

「それさっきも言ったじゃんかあー」

「うわ、さっきから野菜炒めと格闘してた翔まで『うんうん』とか言ってるし。」

翔……いつまで食ってたよ、いくら野菜炒め嫌いだからって。

「あーあ、何かなー。なんだろなー」

「岳てめえ、何ぐだーっとしながら人のリコーダー盗ろうとしてんだ」

「ちい、ばれたか。いや、ばれるも何も堂々と盗ろうとしてたんだけど。」

「こつなったら、シュパツ！ と素早く盗って、シュパツ！ と素早く逃げるのが普通だよな。」

「逃ーげるー！」

「……うん、続いてんだ、この、毎日恒例おっかけっこ。よく飽きねーなオレ。」

「おーにさーんこつちら、手ーのなーるほーおへ」

「ぶっ飛ばすぞお前！」

「やれるもんならやってみやがれ！」

「……あれ、何か『空気を読んだらしいクラスメイト』が机退かし始めてるんだけど。」

「赤コーナー、高山岳！」

「はい？」

「何言ってるの、こいつ。こいつイコール翔。」

「青コーナー、風上修也！」

「は？」

「レディー、ファイツ！」

『ファイツじゃねーよ！』

何本当に始めてんだよ！ 何で試合形式？

「え、だってぶっ飛ばすだのやってみやがれだの言ってたから、これは周りが準備……」

「しなくていい！」

『えー』

何でクラスの奴全員からそんな声上がるんだ！？

「仲良き事は美しきかな」

せんせ、絶対違う。

302 洗濯物を畳みながらしりとりと連想ゲームをやる話

「リス」

「生き物」

「海苔」

「海！」

「みじん切り」

「刃物」

「カッター」

「アシカ！」

さて、あたし達四人はいつたい何をしているのでしょうか？
忍でーす。

兄妹皆で洗濯物を畳みながら、あたし、純兄、光、岳の順……洗濯物を困んで輪になった状態で、右回りに、よく分かんないものをやっています。

最初はしりとりだった気がする。それにいつの間にか連想ゲームが混ざって……こうなりました。

いったいどうやったらしりとりと連想ゲームが混ざるんだろう。
我ながら……我々ながら？ 不思議だね。

さーて、アシカ、アシカ……

「漢字分かんない」

「文も可と言うこのフリーダムさ。」

「海に驢馬ロバの、ろ」

なんか会話になってるし。答えちゃいるけど、ロバを感じてどう書くか分かんないし。

「ロイター版」

「ビート版！」

どう連想してるんだろ、ロイター版からビート版って。

確かにどっちも板が付くし、どっちも体育で使う道具だけどさ。

えー、次何だ、ビート版？ しりとり無理じゃん。

「水泳」

「水」

「味しな〜い〜」

「そうでもないよ。」

「くずきり！」

「味しなかなあ？ 鍋の時とか、ポン酢に付けて食べてるから分かんないけど。」

「葛」

葛の根っこからとれるデンプン作られてたよね、くずきりって。

今はジャガイモから作られてるみたいだけど。

今日、おかーさんが買ってきた、くずきりの原材料の所に『馬鈴薯』って書かれてたし。

「図解」

「純兄、なんでそんな妙なモノ出すの？」

「イリュージョン〜」

「幻影！」

「いつてらっしやい」

「なんでパツとこれが浮かんだんだろう、あたし。人の事言えないな。」

「日本語」

「もうパツと思いついた事言ってるだけになってきてる気がする。」

「言葉〜」

「バイオリン！」

「ヴィオラ」

「なんで楽器じゃなくてヴィオラなんか出てきたんだろう。しょうがない、思いついたんだから。」

「ヴィオラだけ写った写真見せられても、絶対ヴァイオリンって答えるもん。」

「アルト」

「鳥」

「焼き鳥！」

「食べたい」

正直な感想。あー、焼き鳥食べたいー。急に食べたくなくなった。

「石」

「岩」

「ワニ」

「高級」

あ、ちよつと飛んだ。

高いのはワニ皮だ。

まあいいや。分かってくれるでしょ。そうでなくても、ワニ飼ったら高そうだし。

「エスカルゴ」

「カタツムリ」

「でんでん虫！」

全部同じものじゃん。

エスカルゴはちよつと違う？ 料理された後だし。

「白黒」

「パンダ」

「可愛い」

「イルカ！」

「カメレオン」

「爬虫類」

「イメージトレーニング」

「イメージ」

これ反則かなあ。いや、同じものじゃないからいいでしょ。

「自転」

「地球」

「青！」

「折り紙」

「一枚」

「二枚」

「三枚！」

「四枚」

「って、なんで数数えるの!？」

「五枚」

「もういいでしょ」

『始めた奴が言うなよ』

「突っ込み」

「みかん！」

「オレンジ」

「ずっと畳んでるのに終わらない…………洗濯物多いな。てか溜めすぎだな。」

303 老けた二十歳の幽霊

「ね〜、おじちゃん〜」

『なんだい、お嬢ちゃん？ ……俺はまだおじちゃんって呼ばれる年齢じゃないぞ』

「おじちゃん〜って言ったのに反応したからおじちゃんだよ〜」

『あ』

「馬鹿だな〜、も〜」

言ってること 逆じゃ〜ん〜。

『……で、なんだい？』

「おじちゃんは どうして死んじゃったの〜？」
光で〜す〜。

お昼寝しようと思つて〜、日当たりのいいベランダに面した和室に來たら〜……先客が居ました〜。

日本の狩人さんみたいになかつこつしたおじちゃんの幽霊〜。ちやんと背中に鉄砲持ってます〜。

よくうちのベランダに幽霊居るな〜。

お姉ちゃんも岳お兄ちゃんもここで幽霊に絡まれたことあるって 言つてたし〜。

『おにいちゃんはねー、むかああし昔、ここがまだ山だったころに』

「こつて昔山だったんだ〜」

『……いや、今も山じゃないか？ 斜面いっぱいあるだろつ？』

「うん〜、ここに木がいつぱい生えてた頃にどうしたの〜？」

『足滑らせて崖の下に落つこちちゃったんだ』

「ドジ〜」

『……ドジで悪かつたな』

いいのいいの〜。

あれ〜？ 何か私エラそう〜？

「崖の下に落ちた後どうしたの〜?」

『熊に食われた』

「昔々で始まったんだから〜、そこは熊に助けられたって言わないとダメでしょ〜」

『いや……そう言われても、そこで助けられたら俺、ここに居ないのだが』

それもそうか〜。

ええと〜、慰めてあげないといけないのかな〜。

「よかつたね〜! 熊さんの役に立って〜」

『え、ええ? よかつたの、か?』

「知らな〜い」

『ええ!?!?』

折角慰めてあげてるのに質問なんかしてくるからだよ〜。

「おいちゃん、どうしておいちゃん、成仏しない?」

『……俺ってそんなに老けて見えるかなあ、まだ二十歳なんだけどなあ』

びつくり〜! どう見ても三十路超えてるよ〜?

『なんで二人して驚くんじゃあつ!』

二人〜……そういえばさっきの『おいちゃん』って私が言ったんじゃなかった〜。

「誰〜?」

「久しぶり、ひーねえ」

斬くん〜?

「びつくり〜。大きくなってる〜」

「せーちよーき」

成長期なのか〜。表情もなんだかすごく明るく豊かになってる気がするよ〜。

「なんでこんなところに〜?」

「仕事に付いてきた」

「そっか〜。……何の〜?」

誰の？の方があつてるかな？

「おじさん、何の未練があつて五十年も無駄にぶらぶらしてるんですか」

「ねえ、そんなに老けて見える!？」

「あれ？……純お兄ちゃん……」

「大丈夫大丈夫、三十くらいには見えますよ」

「俺は二十歳だああああつ！」

「ええ？」

「何びつくりしてんだ！」

「お兄ちゃんが何か上着から出した。紙？」

「あ、ホントだ。斬、おいちゃんとかおっさんだとか言ってるなよ」

「お前もな！」

「あの紙、何書いてあるんだろ。」

「大丈夫です、俺は二十一の奴何回かおっさん呼ばわりしたことがありますから」

「だから何!？」

「ほんと。だから何？何が大丈夫？」

「じゅーにい、何て読んだらいい？この名無しの権兵衛」

「酷い言われようだね。名無しの権兵衛さん。」

「ごんにいとも呼んでやれば？」

「名無しのが名字か。」

「確かに名前は権兵衛だが、俺の名字は『名無しの』じゃなくて七ちや夜だだ！」

「はいはい、分かっています。で、七夜さん、五十年もこの世さまよつて何したいんですか」

「お兄ちゃん……投げやりだね。」

「む……俺の未練か？」

「そう」

「未練は……あつたような気がするのにいつの間にか忘れて思い出

せない未練を思い出すこと』

………そんなのが未練なの？

「ごんにい、未練忘れたの？」

『ああ………何だったのかな』

「だいじょーぶ、未練、普通は死んだら忘れる」

『え？　そういうものなの？』

「純お兄ちゃん、そういうものなの？」

何で手招き？

耳かせて？

「そういうものだけど、たまに覚えてる奴もいる。でも、今はあの
おっさんにそう言うもんだって思わせてえから、言うなよ」

はいはい、了か。純お兄ちゃんは酷い人なんだね。

『じゃあ………もう、いつか。いまいちすつきりしないが』

「成仏する？」

『ああ』

「自分で行きますか？　俺等で送りましょうか？」

『お願いできるか？』

『普通そこ遠慮しねえ（ない）？』

………と、私と純お兄ちゃんは心の中で思いました。

「斬、やりてえか？」

「一応、俺見学しる言われてるから」

その割には後ろに氷の刃が………。

「………そっかー、じゃあ俺やんよ」

あ、お兄ちゃん分かってて言うてる。

斬くんすつごくやりたがってるの分かっててやってる。

『え、何？』

「大丈夫大丈夫。プロだから。光はあっち行ってるよ？」

大丈夫じゃないように聞こえるよ、それ。

純お兄ちゃんの言う『あっち』に行って見てよ。

「冥界でどうぞごゆっくり」

斬くん、冥界ってどんなところなの？

あ、斬くんに気を取られて、純お兄ちゃんが何してるのを見てなかった。

おじさん消えちゃってるよ……

あ、あの人の事おじさんって言っちゃいけないんだ。二十歳だもんね？

304 こんな訳があったんです

「忍さん、そんなところで何をしていらっしやるのですか」

「中森さん、あなたは何故いつも敬語なのですか」

「同い年、もしくは年下だと思った人が、先輩だったり教師だったりしても感づかれないようにです」

「……そんな理由があったのか」。

忍です。

放課後、四時間目の途中で消えた……と言っか出かけたと言っか

……まあ、とにかく純兄を待っています。教室で。

「で、何をしていらっしやるのですか」

「けなげに兄を待っているのです」

「ブラコンが居ます。どうしましょう」

「違うよー。純兄宛の手紙預かってんのー。学校で渡しとかなきゃいけないのー」

二年生の女の子から、可愛い花柄の便箋。

「忍さん、ごめんなさい。私が悪うございました。痛いのでやめてください」

拳骨腹に押し込んでたの忘れてた。

「家で渡せばいいのではないですか？ その手紙……」

「放課後音楽室で待っていますって書かれてたからさー。学校で渡さない」と

「……読んだんですか」

「っい。」

「……黙っててね」

「勿論です。純さんはいつ戻って来るのですか？」

勿論って言った。何でか知らないけど、勿論って言ったよ、この人。

「純兄ねー、うーん……日が落ちてから戻って来ること多いんだよ

な」。もー少しかな？」

「陽の光が苦手なのですか。まさか。ドラキュラじゃあるまいし」

「あり得るかもよー？ 純兄だし」

「何者ですか、純さんは」

死神。って言っちゃ引かれるからー。

「人外」

あ、引かれた。似たようなもんだったか。

「人外……まあ、そうですね。私に言わせれば二人ともそうですが」

「あら？ あたしまで？ 何で？」

「成績よすぎます」

知らんて。

「純兄はともかくあたしは違うよ。二年の時なんか3ばっかりだったんだから」

「良すぎます。今までのテストの最低点はいくつですか」

「え、20点」

「何点満点中？」

「40点」

「やっぱりいいじゃないですか」

ヤバい、この人切れかけてる。

「なんで？ 半分だよ！？」

「半分も取れてるじゃないですかあ……？」

漫画だったら確実に血管浮き出てるよ、十字型に。

「ちなみに、今までの最高得点は」

「40点」

「何点満点中」

「40点」

「ブツ飛ばしますよ」

「やってみろー」

って、本当に来た！？

いきなり正拳突きなんかしてきましたよ？ しかも何か慣れてる

風だったよ？

拳がいつぱい来たー。でもって脚も来たあ！？

「何、格闘技でも習ってんの？」

「ええ。六つの時から空手を」

誰か助けてー。

あたし、格闘技なんて臯月姉の滅茶無茶拳法と、文月くん習ったこれまた滅茶無茶剣法、後おとーさんになんとか教わったような教わってないような要は記憶に残ってない柔道しかやったことないよー。

あれ、結構やってるじゃん。

でもなー、滅茶無茶けん法はあたし初めの三か月でやめたからなー。三日坊主ならぬ三か月坊主。

同じ三でも、単位が違うとめっちゃ違う。

「あら、当たりませんか。忍さんも何か格闘技を？」

「臯月姉と文月くんの滅茶無茶けん法やってたよ」

「は？」

うん、そうなるよねー。そうなるわなー。

滅茶無茶けん法なんて聞かないもんねー。

でもね、稽古、最初やるーって言ってた幼馴染連中も、初めの一か月でやめたのがほとんどってくらいなんだよー。

三か月持ったのはあたしと純兄くらいだったし。

なっくんと香ちゃんは二か月頑張っただけどねー。

純兄は凄いよ。あたし等よりも先に初めて、引越すまでずーっとなやってたんだから。何年だろ、七年くらいか？ きゃー。

「よく分かりませんが……お手合わせ願います」

「あたしは願いたくありませんっ！」

結局は素人なんだから！

「寸止めですから」

「いやいやいやいや。そーゆー問題じゃあなくてね」

というか、人の話聞いてないね。きゃー、殴りかかってきたー。

「何してえの、テメエ等」

「あ、純兄」

「あー良かった、純兄が止めてくれてる。」

「いえ、何でもありません」

「顔色一つ変えずに嘘ついた、この人。中森怖い。」

「あー、純兄、二年の子が純兄へって」

「ふーん、何て？」

「放課後音楽室へ あ」

「言っちゃった。」

「ん、読んだなテメエ」

「悪気は無かったんですうー」

「あつそ。……さて、どうするかな。万が一まだ居たら可哀そうだし」

「純さん、男なら行くべきです」

「女だったら？」

「行くべきです」

「んじゃ男ならとか付けんなや」

「そうですね」

「さーて、純兄、どーするかな。」

305 めんどくせえと言って逃げるほどめんどくせえ事に

「どうするのー、ねえ、どうするのー」
うっせえな。

「純さん、ここで行かなきゃ男じゃないですよ」
それはさつきも聞いた。

純だ。

忍が持ってきた、と言うか持って待ってた花柄便箋の手紙。
清かそこらの悪戯かと思つたら、知つてる筆跡じゃねえし。

「放課後つて何時からだつた？」

「三時半くらいかな？」

今は……四時半か。一時間経つてんな。

「まだ居るかあ？」

「居るんじゃない？」

「居ますよ」

キツパリ言いやがったな、中森。

「……めんどくせえけど、見るだけ見とくか」

「行くでしょ」

「どっちでもいんだよ、そんなん」

さつさと霊界に戻りてえんだけどな……何で学校来たんだろ。

「んー、めんどくせえ」

「めんどくせえ病再発？」

「知らねえよそんな病気」

っつかねえよ。

この手紙の内容からしてめんどくせえんだよ。

『放課後、音楽室にて待つ 二年三組 ななぐみ 七草温海 あつみ より』

何処からどう見ても果たし状じゃねえか。

「やっぱほつとくか」

「ええ!?!? 何ですよ? 可哀想じゃん」

「ラブレターなんて貰っておいて、女の子待たせるなんて最低ですよ」

どう頑張っても果たし状だけだな、これ。

「もう音楽室行きかけてるのにー」

あ、こいつ等黙らせる方がめんどくせえ。行く。

『行つてらっしゃーい』

音楽室の前まで着いて来といて行つてらっしゃい？　じゃあ何でついてきたんだよ。

どうでもいいか。

「ハアツ！」

ん？

音楽室に入った途端、木刀降ってきた、もとい振ってきた。

「七草さんか」

二年で名札つけてる奴、始めてみた気がする。

「高山先輩ですね……お手合わせ願います」

それ見る、やっぱり果たし状だった。

「そう言う事はやる前に言おうな」

入ってきた途端木刀振る奴があるか。

そついえば忍も中森に殴られかかってたな……女子の喧嘩でも流行つてんのか？

「木刀がピアノの上に置いてあります。使ってください」

「普通音楽室でやるか？」

楽器に当たったらどうするつもりだよ。

……あんまり置いてねえけど。

「体育館は体育会系の部に使われていますので」

「だからってあえて音楽室を選択した理由がわかんねえよ」

とりあえず、使わせてくれるってなら使わせてもらうかな、木刀。
「不意打ちがしやすいかと」

「……もとから正面から向かってくる気無かつたんだな」

ほら、木刀取ろうと背中見せた途端、自分の木刀振り上げやがる。「正面から行っても、碎けるだけです。当って碎ける気はさらさらありません」

「ああ、正しいな。正面から突っ切って、気が付いたら手遅れかもしんねえもんな」

「……貴方に対しては、正面からだろうが後ろからだろうが関係ありませんでしたか」

木刀取ったから、それで防いだけなんだけど。

「あ」

「ん？」

「隙あり！」

「……アホかコイツ。」

「隙も何も、テメエ隙見抜けてねえじゃねえか」

「あは、素人でして」

急に性格が変わったな。ついでに表情も変わった。

効果音を付けるなら、キリっとしてたのがへニヤラってなった。

で、そのまま蹴ろうとして来る。

「嘘です」

「はいはい。嘘吐きは泥棒の始まりだぜ」

後、短いスカートで足を振り上げるな。

「ふん、そっちはフェイントです！」

って言いながら今度は左手で殴ろうとして、

「一々口に出すもんじゃねえぞ、フェイントのフェイントも見破られる」

殴ろうとしたのを止めたら木刀が蹴りか、どっちか繰り出される

……かも。

「ん、これは本命だったか」

「止められましたか……」

違う、払った。

「木刀使う気あんのか？」

「私の武器は口なので」

「あつそ。俺帰っていいか？」

いい加減めんどくせえ。

「逃げるんですか？ たかが二年の女子相手に？」

「たかが二年の女子相手だから余計戦闘意欲が失せるんだよ」

「言い訳ですか？」

「そう聞こえるか？」

「はい」

「なら一遍耳鼻科行って来いよ」

「春にイヤというほど通ってます。花粉症で」

鼻じゃなくて、耳の方診てもらって来いって意味なんだけど。

「ん、言い合いも面倒になってきた。本当に帰るわ」

「なら私も一緒に帰ります。帰り道も面倒にしてやります」

「妹も一緒だから、そっちに相手してもら……帰ってやがる」

……相手しろと？

「にゃあ〜」

「にゃー」

「にゃあ〜」

「はいはい、にゃー」

「みゃああ〜」

「にゃー……うん？」

夏だ。

猫の声がしたから、適当に返事したら……。すぐそばから聞こえてくることに気が付いた。

見てみたら、居た。茶色のトラ子猫。トラ子猫って言うのか？

どーでもいいが。

……どうしよう。家に猫が上がりこんでやがる。

「お邪魔します言ったか、お前？」

「……………」

シカトかよ。

「礼儀は大事だぞ。お邪魔します位言えよな」

あん？ 今、『お前が言うな』って声が聞こえたような聞こえなかったような……聞こえてない聞こえてない。

「にゃあ〜」

「んだあ？ メシ寄せさせてか？ ガリツガリだもんなお前」

……猫って何与えりゃいい？ 魚か？ 鰹節か？ どこにあったっけ。

あ、ちくわなら冷蔵庫に父さんが買って来た奴があつたな。

うん、あつたあつた。チルドルームに入ってた。開いてないが。

「ま、いつか。開けちまえ」

びりっ

「ほーれほーれ、ちくわだぞー」

「……………」
シカトされた。

しかも椅子の下に逃げられた。ええい、どないせえと。取り敢えずちくわは駄目みたいだな。いただきます。うん、旨い。ちくわの味。

……………さてどうしよう。

忍呼ぶか？ いや、まだ帰って無いな。猫じゃらしか何かねえかな。あ、春の、猫のぬいぐるみがあった。

「ほれ、母さんだぞー」

「ふしゅっ」

鼻で笑われた。……………くしゃみか？

猫のぬいぐるみの方は完全スルーされたな。結構リアルなんだが。ぬいぐるみの割に。

「大体どっから来たんだ？ 首輪もしてねえし」

「にゃあ〜」

「そーかそーか、分かる訳ねーだろこの野郎」

野郎かどうかはともかく。忍じゃねえんだから猫語は分かんねえよ。

「家は母さんが猫アレルギーだから飼えねえぞ？」

「ふしゅっ」

いや『ふしゅっ』じゃなくて。噴霧器かテメエは。

「気持ちいいー」

撫でてみたら予想以上のふかふか。なんかもう手放したくない。でも飼えねーし。

「そろそろ帰んな。母さん心配してんぞー」

「にゃあ〜」

……………可愛いつて卑怯だ。

思えば、忍ちゃん香ちゃんひーちゃん、ついでに春。皆皆卑怯だった気がしてきた。

いや、記憶いまいちはつきりしてないから、勝手に思ってるだけ

だな。

「……………これ、飛びつくかな」

今着てたトレーナーに付いてる紐。

フードの端っこに通してあったりするための奴。

「ほーれほれ」

「……………」

見てはいるけど。見てはいるけど……………飛びつかない。

「なつくーん、猫見てない？」

「目の前で見てるー」

って、あれ？ 忍？ 帰ってたのか。制服着たままって事は、今

帰ったとこか？ 0

「あー、多分この子だ」

「なんだ？」

「家の前にさー、ほら、こんな箱があったの」

ピンクのかわいらしい箱。何か紙がガムテープで貼ってあるな…

…。

『お願いします！ 猫アレルギーで飼えません！ 捨てないで！』

「捨てた奴が捨てないでとか書くなよ」

「捨てたけど飼えないってことかもしれないよ。アレルギーらしい

し」

だったら直接頼めよ。有無を言わずドーン！ じゃなくてよ。

「どうすんだ？ この猫」

「野良猫協会にでも預けますかー」

「何処だよ」

「野良猫が集まってできた協会としか言いようが無い」

さよけ。

「まあ、たまに拾ってもらえるから、それまで世話してもら……………え

るといいなあ」

おい。急に不安になったんだが。

307 最近の香ちゃん達

「つ、付き合っして下さい!」

「ええよー。コンビニ? 肉まん奢ってくれる?」

「も、もちろん! はあー、よかったあ、ありがとお……」

「いえいえ、こちらこそー」

御馳になりますうー!。

香じゃよ。

目の前に居る隣の隣の隣のクラスの人、晶あまひがコンビニの肉まん奢ってくれるそうなの。

百……何円じゃったつけ、とりあえずその分だけ得したわ。

「そうと決まれば、早よ行こう?」

晶の気が変わらんうちに。

「お、おうっ!」

晶の手え掴んで、ダッシュ……うーん、疲れるかな。早歩きにしよう。

「あ、ごめんね、急に掴んで」

「い、いやっ、むしろ掴んでほしいと言っか……痛かったけど」

「なんて?」

「いやっ、何でもないっ」

……ウチ、握力は強いからなー、痛いとか言われちよったんじやるか。

むむ、もつとそつとせんと。

コンビニ行ってる途中で、ふと思った。

「晶、お金持っちよるん?」

「そりゃ、俺は購買派じゃけえ」

ああ、それであー!。

「……ちゃんと栄養バランス取れるん?」

「心配してくれちよるん?」

いや、いつかウチがそうなった時のために情報収集をば。

「だーいじょうぶじゃて。多分」

こいつに聞くのが間違いじゃった。チツ。

そんなこんなでコンビニに入りまーす。

「お？ 香ちゃん」

「あ、良雅くん。何しちよん？」

「買い食いじゃ、買い食い」

まだ食べてないのに買い食いって言った。これからするんじゃね。

「あ、あの……香？ どちらさん？」

「あ、肉まん買ってくれたんじゃ！」

早ーい。

「そりゃ、頼まれたし……好きなん？」

「うん！」

わー、ほっかほか。

「お、香ちゃんにもついに彼氏が出来たか？」

「いや、そんな……。兄さん？」

「んーん、近所の兄ちゃん」

あ、結局兄ちゃんじゃ。あー、暖かい。

肉まんが熱い内は、カイロ代わりにするのが一番ええわあ。

「あ、そうじゃ、良雅くん、こっち晶ね」

「よ、よろしくお願いします」

「おお、よろしく？」

コンビニって、お客さんが入ってきたらすぐわかるよな、だって、
ぴぽぴぽーんとか音なるんじゃもん。

……今後ろで鳴ったから、言ってみた。

「ありゃ、良雅に香じゃねえですかい」

『あ、龍城さん』

「……知り合いなん？」

うん。大親友ー。何でだろ、なんだか一緒に居ると楽しいんじや
ー。

「そつちのは、香の知り合いかい？」

「うん、隣の隣のクラスの晶」

隣のって二回言わなきゃいけないの、たまに間違えちゃいそうじゃないね。

「そうかい、彼氏かと思っちまった」

「あつははー、まさかー」

「え!?!」

あれ? 何で晶がびっくりするん?

「コンビニに付き合っつて、ちゅうこつちやる? 肉まん御馳走様!」

「そ、そんな……」

「流石香ちゃんと言っべきかね、まさに魔性の女じゃな」

やだなー、そんなんちゃうよ? 付き合っつてって言われたからコンビニ行くのに付き合ったんじゃ。

「これで今学期五個目の肉まんかあ、モテるねい」

「告ってきた奴全員この道通ったんじゃな……頑張れよ、晶。そう落ち込むこた無い」

あ、涙目で去って行っっちゃった。

「で、良雅くん、何買ったん?」

「やらんよ」

『チッ』

308 今日の体育

「はい、聞いてー！」

わいわい、きゃいきゃい。

要は誰も聞いていない。

「ちよつとー、聞いてー！」

わい、きゃい。

半分くらい聞いた。

「聞・い・て！」

わ。

はい聞きました。

「はい、じゃあドッジボール始めるよー」

ステージ側コートが、1A対2A、遠い側が1B対2Bだよー。

1Aは一組の名簿前半、1Aはその後半、2A、2Bも二組の名簿前後半。

忍です。

今は体育の時間、本来ならペアスランニングだけど、雨でグラウンドがぐつちやくちやなので、女子はドッジボールになりました。

ちなみにあたしは1Bです。高山だから。

しーちゃんも桜も1B、玲奈は1Aだけど。中谷、山内、鈴木だから。

「はい、八分間！ よーい……スタート！」

ピーッ

笛ね、これ。

先生が笛使う所始めてみた気がする。

体育大会の時に、ハリケーンのコツ教えてた女の先生じゃないよ。その先生は妊娠して今休み。

代わりに赤土^{あかつち}先生って男の先生が入りました。

「守ってね、忍」

「いいですか桜さん、ドッジボールで当たらないコツは固まらない事ですよっ！」

ほら、ほら！ 固まってるもんだから、こっちに相手がボール投げてきたじゃんかあ！

あれ、しーちゃんが居ないな……早速当ってたりして。

「ねー、飛山とびやま、中谷知らない？」

しーちゃんを通じるのはいつも話してる人相手だけだからね、その辺に居るような人に聞くときは正しい名前じゃないと聞き返される。

「中谷なら外野よ」

「あ、そっち行つたんだ」

「違っわ、当つたのっ！」

おー、飛山、ナイスキャッチ。

外野に回して……あ、ほんとだ、しーちゃんが居る。ボール取つたのもしーちゃんだし。

取つてすぐ投げる！ ドッジボールのコツだよ。地味に難しいけど。

おー、当つた当つた。でもボールは敵の手に。

「ボールも一個入れるぞ！」

……ほわっつ？ ほわい？

二個も入れたら、ボール目で追うのが難しくなるじゃんか！

しかも、ボール持つてるほうの陣地に入れるってどうよ？

「せーの！」

同時に二つ飛んでくるし。あわあわあわ。

「きゃっ！」

あらら、桜に当っちゃった。

「も〜！ 何で忍よけるの？」

「そっいう……ものだから！」

遊びつて言いそっになつて、でもこれ一応授業だからつて言う理由でものと言いました。

競技って言い方があつただろ、あたしよ。

「まあ、わたし、一回出たらもう二度と入れないんだよ？」

キツパリ言い切ったね、桜も。

「まあ頑張れ。あたしだって似たようなもんだ」

投げるのはどうも苦手です。逃げるのは得意だけど。

というか、ドッジボールなんか逃げる競技ってなってるし。あた

しん中じゃ。

こんな人少くないはず。

「高山っ！」

はい、なんででしょう飛山さん。

「うわっ!？」

びっくりした、頭のすぐ脇をボールが通り抜けて行った……怖！。

「ウツソ!？」 絶対当たったと思ったのに」

いや、当たったとしても頭だったから無効だったよ。

もうちょっとあたしの背が高かったら、肩にあたってただろうけど。

小っちゃくて良かった。……普段あんまり思わないけど。そして

めったに役立たないけど。

『いただきまーす』

熱っ。汁かかった。

岳だ！

今日の晩飯、おでん！

いいよな、おでん。旨えし、楽しいし、温いし。

食べる時あつついけど。猫舌にこの熱さは辛いぜい。いや、生暖かいおでんつても嫌だけどさ。

「で、この家族だんらんの場になんで純は居ないんだ？」

「もうすぐ帰って来るわよ」。光、こんにやくあるわよ」

母さん、何を根拠に言ってるんだ？

あと、

「オレにもこんにやくよこせっ！」

「ダメダメ、これは私がもらったんだから」

「岳、こつちにもあるよ。あむ」

こつちにもあるよ、で指したおでんを自分が食ってるのは、オレに対しての嫌がらせか、姉ちゃんよお？

「……………あ、お帰り純兄」

え？ 姉ちゃん、そつちは廊下に行くドアはあっても、まだ兄ちゃん居ねーぞ。

あ。開いた。兄ちゃん入って来た。マジだった。

「なんで分かったんだよ、姉ちゃん」

「んー、音」

気付かねーよそんなん。

「ん、おでん？」

「大根は一切れよ」。買い忘れて六切れしか入ってないの」

「聞いてねえよ」

……………今、光が『え？』って言った。絶対コイツ、二切れ以上食っ

てやがる。

「純、どこ行ってた？」

「ちよつとその辺」

「どの辺？」

「この辺」

「この辺か」

父さん、なんで分かんた？

「後で聞く」

「げ」

分かって無かったのかよ！？ にーちゃんも『げ』ってなんだ！？

「骨多いなー、手羽先」

「食つちまえばいーじゃんかよ」

「後味よくないもん」

「そーか？」

いちいち出すのがめんどくせえから、オレはでっかい骨以外全部食ってんだけどな。

「ねー、餅巾着は？」

「こっちには入れてないわよ。後で追加するときに入れるからね」

「はーい」

入ってねーのかよ！？ 今までずっと必死に探してたのに！ 底の方。

あ、ジャガイモあった。食お。

「あれ、おかーさん、大根ないよ？ あたし食べてないのに」

「うそ！？ オレも食ってねーのに！」

「おとーさんも」

兄ちゃんも卵しか食ってねーし。

「あらー、私も一切れしか食べてないわよ？」

んじゃあ、犯人は一人だな。

『光』

「あはは〜。一切れずつだとは思わなくて〜」
「一切れずつって言われたの、食い始めてそんなに経ってねーじゃんか！」

「四切れも食べたのか!？」

「五切れだろ」

え？ あ、そか、光の分もか。

「明らか食いすぎだろ!」

「出して」

「胃液まみれだよ〜?」

「お食事中にそんな事言わないの〜」

「ごめんなさい〜、でもお姉ちゃんが〜」

「だって光が五切れも食べるんだもん!」

…… 普段からねーちゃん、大根そんなに食わねー癖に。

「あ、大根あつた! 一切れだけど」

『ホント!?!』

おお、間違いなく大根。おでんの大根。

「じゃやっぱ四切れじゃんか、光が食つたの」

「ん。らしいな。……どっちにしても食いすぎだろ」

「えへへ〜」

褒められてねーよ。照れんな

「四人で分ける?」

「俺はいいよ。三人で分けな」

おーっ! にーちゃん優しー!

「光、代わりに餅巾よこせよ」

「え〜っ!?!」

「餅巾は一人二つずつだから、な? 一個くらい」

…… 兄ちゃん、ずっこくね?

「こっちは一人一切れを食われたんだから」

「う〜」

「こ〜ら〜、純〜?」

あー、叱られてやんの。

肩竦めて終わりにするあたり賢いかもしんねーけどさ。

姉ちゃんとかオレだったらもつと粘って余計怒られんのがオチだし。下手すりゃチョップ食らうぜ。母さんの。意外と痛い、これ。

「ん、じゃ豆腐餅貰う」

……もしかして、餅なら何でもよかつたんじゃねえの？

「じゃあ、あたしも豆腐餅ー」

よしや、これで大根はオレの……じゃなかった、オレと父さんのもの！

つてえ、

「なんで父さん食ってんだよ！？ オレの分は！？」

「てつきり岳も豆腐餅に行くかと……え、大根が良かった？」

うん。

「あちゃー。じゃ、おとーさんの卵あげるから、な？」

許す！

310 慌てん坊のサンタクロースではないんだってさ

あーあ、座ってるだけなのに疲れた。

座って、シャーペンと頭動かしてるだけなのに疲れた。

糖分が欲しいよー。頭にいいんだよー、

はい、忍です。

勉強してました。疲れました。肩のあたりが。手首も。あと頭も。疲れまくりじゃん。

はい、頭が付かれた時は甘い物ー。昨日コンビニで買ってきたチョコスナックがあります。食べよう。

「はわわわわわ。あむ、はわわわわわわ」

……………あれ、食べようとして口元まで持ってきてたスナックが無い。

「くうー、やつぱチョコスナックいいねえー」

「おい、おっさん」

「うん？」

「あたしのスナック、食ったな？」

それもわざわざ口に入れかけてたものを。袋の中にまだまだたくさんあるけど…………。

「食べる直前の直前の直前の直前で盗られんのが一番気に食わねんだよ。出せやコラ」

キャラが違う？ 知るか。元々掴めんキャラだっただろうが。あれ、キャラって何？

「ひいつ、お、お助け！ 怪しい者ではございませんから！」
日本語おかしいよ。

後ね、

「白髭もっじやもじやのくせして頭はつるピカの見知らぬ中年オヤジのどこが怪しくないんだよ？」

しかも、他人ん家に土足で上がってるしね。

しかも、いい年してサンタの格好してるしね。

しかも、……あたしのチョコスナック盗ったしね。

知り合いならもうちよっと怒り小さいよ、でも、赤の他人に盗られるのは……ねえ？

「あ、ヤバい！」

コラ、机の下に潜りこむな。

「どこ行つた!？」

……あん？

「探せ！ まだ近くにいる筈だ！」

よく漫画とかでよく聞くよね、この台詞。

「……何、今の」

なんかね、お揃いの上着着てるくせに、他は全員バラバラの服着た霊がいっぱい……来て、去って行つた。

お揃いの上着はどっかで見たことある形してただけど、何処だつたかな？

「あ、妹ちゃん一号」

「ロボットみたいな言い方しないでよ、リオンさん」

そうだ、どこで見たのかと思つたら、リオンさんとか、純兄とか着てる死神の制服と同じなんだ。

「あは、ごめんごめん。ところでさ、この辺にこんな奴、居なかつたかな？」

どんな奴？ 今渡された、この紙に書かれてる人？

えーつと、特徴は……。

ハゲ

もじゃもじゃの白い髭

赤くて、襟と袖口に白いふわふわが付いたサンタ服。

「今机の下に潜つてまーす」

「はあい、ありがとう。ご協力感謝しまーす」

『ありがとう』は感謝の言葉だよ、リオンさん。

「出ておいでー、韓国キムチあげるよ」

そんなもんで出て来るのはアンタだけです。頭空なんですか、この人は。

「いやだあああつ！ わしや帰らん！ わしはここで子どもたちに夢を配るんだ！」

「夢配る前にあたしのチョコスナック返せよ」

「……シ、シラナイヨ。ソナモノ」

うっわ、コイツ最低。

「あのね、おじさん。夢がほいほい配れるなら、自分の故郷でやってよ」

「あのね、リオンさん、あたしはこのおっさんが何者なのかが知りたいな」

なんで死神がこんなさえないおっさん……あ、言っちゃった。取り敢えず、おっさん追いかけてるの？

「このおじさんはねー、ナハリ界って所から来たおじさんなんだよ」

「何処だよ」

「俺の出身地」

分かるか。

「えー……と、まあとにかく」

あ、説明止めたな？

「クローズさん、帰ろう？ ってか帰れ」

クローズって言うんだ、この人。なんか……色々閉じちやいそうな名前だね。

「クローズさん、何やったの？ あたしのチョコスナック食べた以外に何やったの？」

「わしはまだ、この世界に来ただけだ！ 何もしていない！」

あたしのチョコスナック食べたじゃないか。

「あのね、クローズさん。この世界に来たことが違反なの。生物が異世界渡り合っちゃいけないの。色々狂うんだから。その世界の生態系とか」

へー。

「お前等は！？ 異世界渡りまくってるじゃないか！」

「俺等はいいの。それ管理する側だから。そもそも生物じゃないしね」。ほら、早く帰る」

このおじさん、どうやって異世界になんか来たんだろ。

あたしにとつちや五個が現実世界だけど。

「ねー、どやって来たの？」

分からないことは聞くまでよ！ …… って、皐月姉が言った。

「タカイ岩って言うのがあるんだ」

おお、おじさん、もといクローズさん。どっちでもいいや。説明してくれるんだ。

「海に突っ立つてる、その名の通り天を貫くほど高い岩で、それのてっぺん近くにある穴をくぐると、異世界に行ける代物だ」

高い岩、他界岩……。

他界岩って言ったら、なんか死んじゃいそうなんだけど。

「実はこの世界にもあったりしてね」

「嘘！？」

「ほーんとほんと、でも、絶対使っちゃだめだよ、忍ちゃん？ 人間なら九割九分九厘、落つこちてご臨終がオチだから」

このおじさん、太つちよで小さい割に、実は身体能力凄いの？

「クローズさんみたいに、空を飛べるなら別だけどね」

なんだ。空飛べるのか、この人。

……あい？

「飛ぶの、これ」

「これって言うんじゃない！」

「空族って言うってね。空を飛ぶ種族なの」

異世界にや不思議がいっぱいだー。

こんなデブが飛ぶなんて。

311 ただの休み時間だよ

「玲奈ー、おーい玲奈ー」

「ぴえっ!?!」

おお、ぴえなんて悲鳴初めて聞いた。

忍です。

提出してて、さっき返された……と言うか、いつの間にかどーんって教卓の上に置かれてたノート配ってるんだけど、玲奈が受け取ってくれません。

いや、普通に机の上に置いときゃいいだけの話なんだけどね。

「な、何よ忍っ!?!」

「兄に好意を寄せる女の子に興味を持たない妹が……居そうだなあ」
どこに居るって言おうかと思っただけだ。

「べ、別にっ! 別に好きなんじゃないんだからねっ!」

「今更すぎない?」

「ほっといてよっ!」

あい分かった。

「忍……何で純は学校来ないのよ? 来てもすぐ帰っちゃっ……」
帰ってません。そのまま霊界へ行っちゃってます。逝っちゃってます?」

帰ってこないこともあるようになったっちゃって困ってるんだよー?
こっちだつて。

……あれ、あんまり困ってない気がする。居なくても大丈夫って事? あれ? 純兄って結局その程度って事? いやいや。……いやいやいやいや、きつとないよ。

「はあ、私、嫌われてるのかな……」

「なんでそうなるの? 嫌いな奴一人で純兄が不登校になるわけないでしょーに」

授業だけ受けて休み時間はどっかに消えるよ。その時は。

「ねえ、なんで来ないのよ？」

「色々忙しいんだよ」

多分、きつと、恐らく。

「……中学生が授業受けないで何するのよ」

……うん、思ったよ。あたしも思ったよ。言っただから。

それでもなあ、多分忙しいんだろうなあ。仕事無きや学校来るだろうし。

いや、たまに、仕事でもないのに霊体になっただことあるなあ。

なんでだろ。

「まあ、そのうち来るよ！」

「……何か隠してない？」

鋭い。そして、刺さるような半眼がなんか痛い。

「ねえ、何隠してるのよ？」

「シラナイヨ」

あ、しまった。これじゃわざとらしい。

「純兄に聞かないと……」

「その純は何処に居るのよ？」

「それこそ知らないよ！」

絶対あれだよ、異世界か何か行っちゃってるんだよー。だって、昨日も変なおっさん……もといクロースさん追っかけて死神やって来たんだから！ そういやあの中に純兄居なかったな。

あ！ しまった！ チョコスナック返してもらってない！

もういいんだけどさ、昨日の事だし。たった一つだったし。

「何やってんだー、お前等」

「なつくーん、純兄知らなーい？」

巻き込む作戦。やったからと言って何も解決しない。

「知らねえよ、学校来てなかったんだから。それより、俺の消しゴム知らねえか？」

もつと知らないよ。

「海中、あんたって純の幼馴染よね」

「あん？ ああ、まあ……」

生まれた時からお隣さんだったもん。

はいはいしながらケンカしたことあるらしい。純兄の全勝、あたしとは引き分けらしい。おかーさん達曰く。覚えてるわけなからーが。

「純が授業サボってまで行きそうな場所とか、分からない？」

「はあ？ そんな急に言われても……あ、心当たりが」

あるんだ……。え、あんの！？

「臯月姉んトコじゃね？」

「ここ何処だと思ってた。臯月姉居ないよ。」

「誰よ？」

「近所の姉ちゃんだった人。あ、こりゃないな」

気付くのおそいよ。

「じゃ、あつこじゃね？ 屋上」

「生徒行けないわよ」

いや、純兄だったら普通に扉すり抜けられるけどね。

「じゃあ、屋上前の階段！」

「行ってくる！」

早いな。単純ともいう？

「ねー、なんでなつくん、純兄の行くような場所の心当たりあるの？」

「そりゃー……幼馴染だし？」

「理由になると思ってんのか」

あたしは分かんなかったんだよちくしょー。なんかヤダ。張り合
う必要まるでないけど。

312 物投げちゃいけません！

「奈那子さんの七海？ 七海さんの奈那子？」

「おい、何の夢見てるんだ？ お前」

「七海さんが奈那子探し？ あれ？ 奈那子さんが七海探し……」

「それ本とに寝言か？」

「ぐー」

あ、絶対嘘寝だ。だってわざとらしいもんこの寝息。修也だよ。

一応授業中。俺の後ろの席で岳が変な寝言言ってる。

「なんだよー、兄ちゃん、今日は土曜なんだから寝かせるよー」

「今日火曜！ でもってここは学校！」

しかも何で純さん？ 普通母さんじゃねえ？

「馬鹿修也、今日は水曜だぜー」

「馬鹿はお前だろ。今日は本当に火曜」

黒板にも火曜って書かれてるし。

「馬鹿修也、今日が水曜であって欲しいって気持ち察しろよー」

察せるもんか。そんな訳わかんない気持ち。

「水曜だったら何なんだよ？」

「水曜だったら五時間で学校終わるじゃん」

「うん」

「掃除も簡単清掃じゃん」

「うん」

「楽じゃん」

「うん」

「早く帰れるじゃん」

「うん」

「いっぱい遊べるじゃん」

「うん」

「あー、早く学校終わんねーかな」
「今まだ二時間目。」

「あ、でももうすぐ冬休みじゃん。やった」
「岳の思考回路ってどうなってるんだろう。」
「前の言葉と次の言葉に全然繋がりが無い。そんなもんか、人間って。」

「……特に、適当に喋ってる奴。」

「そこ二人、授業中に喋んな」

「休み時間、あんなに暴れても起こらないくせに、何で授業中の私語には怒るんだろう。」

「ほら修也、この問題、答えは？」

「……む、聞いてなかったと思ってる……。」

「きーてませんでしたー」

「……事実だから仕方ない。文章問題なんか、ぱつと見てすぐ答えられる訳ねえだろつ。」

「ちゃんと聞けって言っただろ。じゃ、岳」

「もっと無理だろ。」

「さっきまで寝てたんだから、俺よりも聞いてねえし。」

「4メートルです」

「……正解」

「何で!？」

「いつ聞いてたんだよ!？」

「何か、この顔がムカつく。」

「えらっそーなこの顔がムカつく。」

「へへーん、ただ寝てたわけじゃねーんだよ。聞きながら寝てたんだ!」

「それ結局寝てるじゃねえかよ。」

「で、やり方と言うか、やって欲しい事と言うか。まあそれは分かってたから? 修也が当てられて困ってる間にパパッと計算だけやっちまったって訳よ!」

俺は別に困ってない。だって、当てられてすぐ聞いて無かったって言ったから。正直に。困る前に。

……あ、チャイム鳴った。授業も終わり。

「きりーっ、れーい」

よし、岳殴りに行くぞ。

だって、何か知らんがちょっと利用されたみたいになってるし。

早い話が気に入らない。

あ、丁度いいところに岳の筆箱が放置されてる……あれ、岳は何処行った？

「修也あーこつちだぜえ」

窓際に居た！

えい。

「ええー、人の筆箱投げるかあ！？」

いいんだよ、岳のだから。

ああー、やつぱり避けられた。

そしてそのまま、岳の筆箱は、喚起のために開けてあつた窓から外へ……あ。

「あーっ！？ 修也テメ、何してくれるんだよ！」

「よかつた、中間休みあつて」

「そうじゃねえ！ いや、確かにそうだけど……ったく、何処行つたー？」

窓の外。そうじゃないか。

俺も岳みたい窓から下見てみよう。

「みーちゃん！ 大丈夫ー！？」

「もー、誰だよー、筆箱なんか落つことしてきたのー！
やつべ、人に当っちゃつてた……。」

「ひーちゃん！ 見つけて袋叩きにするよー！」

「みーちゃんの仇ー！」

敵討ち？ 敵討ちされるのか、俺？

313 怒らせちゃいけません

「どーこだあー！ 岳くーん！」

「お兄ちゃん！ 修也くん！ 隠れても無駄だよー！？」

あー怖。ひー怖。あー怖。

「つたく、修也が筆箱なんか投げなきゃこんな事にはなんなかったんだぜ？」

「……………だよ」

ああ？ なんて？ 声小っちゃくて聞こえねーぞー。

「岳がム力つく奴じゃ無かつたらこんな事にはなんなかったんだよ
ええ！？ なんだよそれ！？

岳だ！

校舎の曲がり角に隠れて何とか光たちはやり過ごせたな…………とり
あえず。

何で追っかけられてるのはか全話参照！

あの後、落っこちてきたのがオレの筆箱って事がバレて、オレの
筆箱投げるのは修也位だろうっつー、何ともばっちりあたりの推理
を展開されてだな…………とにかく、逃げるが勝ちっつーことで逃げた。

あ、でも家帰ったら絶対会っただ…………。

はー、なんで美代の奴あんなトコに居たんだよー。っと、これじ
や修也と同じじゃねーかよ。

「お前さ、さっきの授業ん時みたいに正直に言えねー訳？ 正直に
言って謝れねー訳？」

「お前の妹と友達は何するかわかんねえもん」

「なっさけねえー！」

「ならお前行けよ」

「無理。話聞いてくれなさそうだもん」

「なっさけねえー」

まんま返してくるんじゃないよ。

はー、二つ下相手に何やってんだろ。

あれだぞ？ 兄ちゃんだったら、流しつづ解決の方に向かうし、姉ちゃんだったら、ちゃんと謝って、その上で何かされたら逃げるぜ？

オレ等謝ってもねーよ。

「……………アイツ等落ち着くまで、保健室のカーテンに隠れてようぜ」

でも謝る勇氣持っていないのであった。ちゃんちゃん。

「うん」

修也も。

保健室。

被害者……………つまり美代が居た。

しまった！ そうか、美代の頭の上に筆箱落としたんだったあ！

「ひーちゃん！ はーちゃん！」

「村田さん、保健室で大声出しちゃダメでしょう」

「……………ごめん、なさい」

び、びっくりした。美代がこんな大声出すなんて……………。

ほら、修也もちよつと引いてんぞ。普段と違う事するだけで人の印象って全然違うのな。

「あ……………美代ちゃん、ごめん。岳の筆箱当てちゃって……………」

おい『岳の』って、いるか？ なんでわざわざ俺のって言った？

「……………いいよ。……………そこまで、痛くない」

おー、石頭だな。

よしよし、これで一件落着！

……………かと、思いきやあ！

「お兄ちゃん〜！」

「修也くん〜！」

『袋叩きの時間だよお〜？』

一番問題なのが残ってた！ 全然落着いてねえ！

「修也、逃げるぞ！ 今日だけは仲間だ！」

「……逃げるのに仲間要るか？」

おいおいおい、言っちゃダメだろそう言う事。

「バラバラに逃げるのが普通じゃ」

「あたりめーだろ、わざわざ一緒に逃げるわけねーじゃん」

「じゃあやつぱり仲間要らねえじゃん」

わあったよ。

「じゃあお前も敵だあっ！」

「極端すぎるだろ！」

仲間イコール味方。

味方の反対は敵だろ！

314 そついや居たなこんな奴

「……拙者、何故こんなところに居るのでござろう」
「にゃー」

「むむ。緑目殿、知るかと答えるのなら答えないでいただきたい」
緑の目をした子猫だから緑目殿なのでござる。聞いてない？ では聞いてください。

「……。聞きましたな？ 緑の目をした子猫だから緑目殿なのでござる。」
「……法師でござる。」

拙者、何故ここに居るのでござろう。
裏山なのでござるが……はてさて、何故ここまで来たのでござろう。

もうこうなったら、山伏にでもなってしまうか。……あれ？
どうなったら山伏になるのでござるか？

「にゃー」
「知るかと答えるなら初めから答えないで欲しいと言ったでござる」
「うっ」

「にゃー、にゃー」
「む？ 一人でぶつぶつとうつとうしいからつい答えてしまった……拙者、全部口に出していたでござるか!？」

「にゃ」
「しまった……もう口には出さぬ！ 拙者は誓うぞ！」
「なあー」

「緑目殿！ アホらし、とはどういう意味でござるか！」
そして何ゆえそのまま去って言うてしまうのでござるか！ はっ！
また思ったこと口に出していたあああっ！

「うわ、何だこれ!? 小人!? 袴はいた小人!？」
はて、誰でござろう……。いつか見かけたことがあるような気が

しないででもないでもないでござる。

忍殿が話していたことがあったようななかったような……。

あ、はんばーがーとやらを売っている店でバイトしているのを見たことがあるでござる！ 写真店とか、コンビニ、とやらでも！ 思い出したでござる！

「サンゴの兄ちゃんでござるな！」

「いやいや、誰から聞いたんだ、それ。……ウソ、喋った!? 動いてる!? 人形じゃねえのかこれ！」

人形とは失敬な。拙者はれっきとした、妖怪一々法師でござる！ 自分で妖怪つつつたよコイツ……。ええと、どうすればいい？ で、出たあー」

めっさ棒読みでござるな。何故逃げていかれるのでござるか。

……あれ？ ま、また心に思ったこと喋ってしまったでござるううう！

「みいつうけたああ！ 水攻弾！」

へ？

な、何でござるか!? 何でござるか!? いきなり水の塊が飛んで来たでござる！

「ええいつ！」

ぎゃああ！ こ、子供が……六つか七つくらいの女子がでっかい鎌を振り下ろして来たでござるうっ！

「成」

痛っ、め、目の前に見えない壁が……!?

「凍」

こ、氷付けにされたでござる……てえ、なんでござるかこの子供たちはああ！

「天！ 斬！ 剣！ めっ、でしゅ！ 妖怪違いでしゅよ！」

み、耳で歩く妖怪まで来たでござる……。

「えー、違うのかよー。似たようなもんじゃん！」

「全然似てないでしゅ！ みゅーちゃん達が探してるのは猫娘でし

ゆよー！」

そりゃ確かに全く違つてござる。

「でも、世界間を勝手に行き来するのは禁じられているんだから、どちらにしてもこのチビ妖怪、もと居た世界に戻さなきゃいけないだろっ？」

チビで悪かったでござるな。

「それもそうでしゅね！ 捕まえるでしゅー！」

「おー」

何か追ってきたでござる！ 訳分らないけど、？まるのはごめんてござる！

「山の奥に逃げた！」

「追っかけるぜー！」

「おー」

「いくでしゅー！」

だ、誰か……助けて……。

む？ 木の裏に人影が。手のひらを上に向けた手招きをしているでござる。

ええい、ままよ！

木の横にスライディングでござる！

どしゃ。

……お、落とし穴……？ しかもやたらめったら深いでござるっ
ううっ！

「あーれえー」

315 私は思った。やっちまった……

「……あら？　ここは何処でしょうか」

「……あれ？　貴女は誰ですか！？」
忍です。

リビングの中央に魔方陣みたいな模様が光ったと思ったら、女の人が現れました。

茶色くて、長いスカート……って言うか、ドレス。に、エプロンつけた、薄い茶色の髪をした人。

あたしより背え高いよーお。純兄くらいあるよーお。
えっと、それはともかく……。

「どちらさんで？」

「あ、失礼いたしました。私は、ブライアース家に仕えております、侍女のドロシー・アーネットと申します」

綺麗なお辞儀。まるでメイドさん。

……あれ？　今侍女って聞こえなかったっけ？　あれ？　本物？

「ごめんなさい、すうっごい聞きたいこといっぱいあるんですけど」
「私です。あの……ここは何処でしょうか。何故私はここに居るのでしょうか」

あたしが知ってる訳ないだが。

「ちよつといい？　質問するから、答えてください」

「え、あの、質問してたのは私……」

知らん。

「アメリカ知ってる？」

「お掃除の道具ですか？」

何故に？　そんな道具あるの！？　それとも適当に言っただけ？

「えーっと、じゃあ、あなたの生まれた国は？」

「オーソリスシュですわ」

「何処だよ……」

「え？ ですから、オーソリッシュですよ」

「いや、聞こえてたよ。聞こえてたけど……聞いたこと無いですそんな国」

ええってびっくりされても……こっちがびっくりだよ。どうやって来たの？

「ちよつと、純兄ー！ 純兄居ないのー!？」

「……んだよ、うるっせえな」

おお、本当に居た。しかもすぐそこに居た。ソファで寝てた！

「あ、えつと……。ブライアー家に仕えております、侍女の……ひっ!？」

ちよつとー、純兄、睨まないでよ、怖いから。思わず引くくらい怖い事になってるから。

「あつ、失礼しました。ええと？ 何処に仕えらっしやるって?」

あつさり態度変わるなあ。

「え、え？ ブライアー家ですけど……」

「……魔法が得意なお嬢様、居たりしませんよね?」

魔法つて。何処から来たの、この人。魔法あるところから来たの?

「レイチエル様のことでございますか?」

「畜生！ またか!」

あれ？ 怒った。

走って二階に行っちゃった。

「あの……何か、私悪い事言いました?」

「んーん、何も……多分」

あ、霊体化して、天井すり抜けて下りてきた。制服着てる。でも実体化しないとドロシーさんには見えない。で、実体化する。

「貴女まさか、レイチエルが魔法使ってるそばに居ませんでしたか?」

「ええ？ 居りましたけど……。複雑な魔方陣描いて、とても楽しそうにしてらっしやいましたわ」

「そおですかあ。今度から、あの女がその魔法使おうとした時止め

てくださいよ？」

「は、はい！ かしこまりました！」

かしこまるの？ お嬢様より他人のこと聞くの？

ってか、

「話勝手に進めないでくれる！？ 訳わかんない！」

「えっと……私にもよく分かりません。でも、お嬢様がよく、異世界渡りの魔法を研究し照らしたのは存じ上げておりますわ。きつと私、巻き込まれたのでしょうね」

異世界渡り？ さっきの魔方陣？ それ。

「純兄は？」

「世界と世界の間行ったり来たりするのは基本的にダメなんだよ。文化やら技術やら変えられる可能性があるから……で、それをわざわざ元の世界に送ってやるのも仕事のうちなんだけど」

ああ、リオンさんがやってたね。

「レイチエルって女が居て、そいつが異世界渡りの魔法なんか作って飛び回るから……困ってんだよ。その魔法発動するまでに時間は掛かるみたいだけど……結局は何回も出来るわけだから、きりがねえ」

「……申し訳ございません」

ドロシーさん、そこ謝っちゃダメでしょ。

「一緒に飛んできた侍女がここに居るってことは、レイチエルも近くに居るよな……今は。さっさと済ませ」

「あの、私はどうすれば……」

「……レイチエルと一緒に送るので、しばらくここに居てください。忍、頼んでいいか？」

いいよいいよー。異世界の事とか、聞いてみたい。

「あのアマ、今度やったら冥界に送ってやる……」

それは良くないよ！？

315 私は思った。やっちまった……（後書き）

突然出てきた人を突然出したので、やっちまった……なのです。
自分ワールド全開ですよ、どうしましょう。

……今更な気もします。

316 魔法を習おう

「ただいま」

……あれ？ 返事がないよ。お帰り〜って声がない。い。まあ、たまにあることだけだね。

光です。

みーちゃんとはーちゃんと遊んで帰って来たのに、お帰り〜って言ってもらえないのです。

かわいそうなひーちゃん。

「……ぜんっぜん発動しないんですけど」

「うーん、この世界にも多少魔力があるようなのですけれど……何がいけないんでしょう」

あれ〜？ この世界とか、魔力って声が聞こえたよ？ お姉ちゃんの声と、聞き覚えの無い声が聞こえてきたよ？

「何してるの〜？」

リビングの扉を開けると何とびっくり！ ……するほどのことは何もありませんでしたとさ。

見覚えの無い、長あいスカートの女の人が居るくらいかな。

「あ、お帰り、光」

「あら、妹様ですか？ お初にお目にかかります。私は……」

「ドロシー・アーネットさんだつて。異世界のどっかの貴族に仕える侍女さん」

「いえ、あの、ブライアース家ですわ、忍……」
そっか。よく分からないけど……

「私と同じ人だよ〜？」

「はい？」

「光、それは次女。ドロシーは侍女」

「どっちもジジョじゃ〜ん〜！」

「漢字が違うの」

音は同じだもん。音は同じだから同じ人なんだもん。

「で、何してたの？ 何これ」

机の上に、変な模様が描かれた紙が置いてあったの。

これは……文字かな？ こっちは星みたい。とげとげがいっぱいだけど。

「魔方陣だつて。魔法、使ってみたいじゃん？ 教えてもらったの」

へえ！ 私もやりたーい！

「あれ？ お姉ちゃん勉強してたんじゃないの？」

「んと。休憩だよ、休憩！」

絶対嘘だ。嘔吐きは泥棒の始まりだよ。泥棒になったら嫌になっちゃうよ？

「ねえ、光もやりたそうだから、一緒に教えてもらっていい？」

「もちろん！ 一緒にお教えいたしますわ、光様」

お姉ちゃん大好き！ ドロシーさんも好き！ でも、

「何でお姉ちゃんは呼び捨てなのに私は様が付くの？」

「忍にはそう呼んでくれと仰せ付かりましたので……」

「じゃあ私も光にして！」

「かしこまりました。光」

所謂笑顔が素敵な人だ！ ちょっと珍しい気がするのなんだろう。

「ドロシー先生ー、続きお願いしまーす」

「はい、はい。それでは、光のためにもう一度簡単に魔法の説明をしますね」

簡単になの？

「魔法というのは、目には見えずともこの空間に存在する、魔力を使って発動します。魔力は場所によって多かったり少なかったりしますけれど、このお部屋の中にある魔力なら、恐らく大丈夫でしょう」

さっきなぜか発動しないって言ってなかったっけ？

突っ込んだじゃダメなのかな？

「魔法の発動方法には、魔方陣を描いたり呪文を唱えたり、印を結んだり切ったりするものがあります……？」

あれ？ 何だか玄関の方から争う声が聞こえてくる。

「レイチエル様のお声ですわ！ お嬢様！」

あゝ！ ドロシーさん！ まだ途中だよ！？

あれ？ 声が聞こえなくなつた。行ってみよう。

「誰も居ない」

「……純兄が送ってっちゃったみたい」

そりゃねげ！ だよ！

317 作文を書こ、う？

「あ。やっべ。宿題やってねー」

「宿題は学校でやるもんだろ？」

あ、兄ちゃん、風呂からお帰りー。なんでカッターシャツに学ランのズボンなんだよ。

ところでだな、

「……兄ちゃん、宿題の意味分かってつか？」

「めんどくせえ」

初めて聞いたぜそんな意味。

岳だー！

晩飯食って、風呂入って、歯磨きして、さー寝よー……って、ところで、ランドセルからはみ出す原稿用紙に気づいた。

やあべえ、作文の宿題やって無かったあつ！

さて、そんな訳でオレにや三つの選択肢がある訳だ。

一、あきらめて寝る。

二、明日早起きしてやる。

三、今からやる。

……ま、そんなに眠くもねーし、やるかな。

えーっと、作文のお題は……連絡帳に書いてあるはず。

『そこらへんに転がっている石ころになったつもりで書きなさい』

「兄ちゃん、石ころの気持ちって分かる？」

「何かの嫌味か、それ」

何の嫌味にとつたんだよ、これ。

「そうじゃなくてさ。作文のお題なんだよ、コレ」

「そんな変なお題初めて……じゃ、ねえな。忍も同じ宿題出された気がする」

へー？ あ、そーいや、今の俺のせんせ、姉ちゃん達のクラスも担任やってたっけ。

「兄ちゃん、同じクラスだったんじゃ……」

「ん？ …… サボってたんだよ、学校」

「小学生で!？」

二年に一回しかクラス替え無いから、五、六年だろ？

あのせんせは週一回で変なお題の作文書いて来いって宿題出すから、それにも気付かなかったってかなりのもんじゃ……。

「死神にも学校があつてな。そっち優先してたから」

「兄ちゃん、優先させるもん間違っちゃダメだぜー？」

義務教育なんだからさー。なんで中学の授業ついていけるのか謎だぜ。

「大丈夫、間違つてねえから。ついでにその言葉そのまま返してくれる」

「あん？ なんでだよ」

「さつさと宿題やんねえと、寝る時間減るぜ？」

あ。やつべ。

「どうすつかなー。石ころ石ころ……拾われて、蹴られて、ドブに落ちて、ほつとかれる……ダメじゃん」

主人公ドブに落つこちで終わりはねーだろ。

じゃああれだ、朝が来て、昼が来て、車にひかれて、夜が来て、終わり……いやいや、ダメだろ。

車にひかれた以外なんもねーじゃん。リアルすぎだろ。

途中で割れるか？ いや、何か怖え。

「兄ちゃん、石にも命つてある？」

何か思つちまった。

「あつてたまるか」

だよなあー。つて、あれ？

「なんで兄ちゃん、そんな上着着てんだ？」

なんだろな、黒くて、チャイナボタンつて言つのは？ 長い紐で前止める奴が付いた上着。

「仕事」

ふうん。だから部屋着じゃなくて制服なんか着てたのか。

「か、遊んでくる」

「何処でだよ！」

「霊界。あー、朝までに帰れたらいいなー」

んじゃ遊ばず帰ってくりやいいじゃねーかよ。

「な、兄ちゃん、オレも霊界行きたい」

何か作文のいいネタ思いつくかも。どう考えても思いつきそうにねーけど。

「駄目」

「えー。何でだよ！」

「色々まずいから」

「何がだよ！」

「ナス口の中に入ったまられるぞ」

「何処にそんな脅しに引つ掛かる奴が居るか！」

んな訳ねーじゃん！

「お化け居るぞ？」

「あんなのどこが怖いんだよ！」

友達にでもなつてやんよ。

「化け物だらけだぞ？」

「兄ちゃん居るし」

「俺も化け物だったらどうするよ」

「兄ちゃんに襲われるこたねーだろ」

あ、兄ちゃん化け物つて認めちまった。

でも、なあ？ 皐月姉と文月くんの滅茶苦茶けん法習得してたし……。

俺、アレーか月くらいで折れたんだけど。

「ああもう、駄目なもんは駄目だ。おけ？」

「ええー。全然おつけーじゃねーよ。理由付けろよ！」

「めんどくせえから、ヤ」

あ、逃げやがった！ 霊体化して、壁すり抜けて外行っちゃった

…。
……………。

「岳、ちょっと来なさい」

「何だよせんせー」

「いや、作文の事なんだけど」

「んだよー。朝来て昼来て夜来て終わりだけどき、朝昼晩の景色もちゃんと書いたぜ？」

「朝、慌てて帰ろうとする化け物達（小石視点。なんかホツとしてる）」

「昼、ただの普通の町、ちょっとしたら、小学生が下校してく（小石視点。退屈そう）」

「晩、何処からともなく出てきた化け物達が遊ぶ（あくまで小石視点。ビビってる）」

「完璧じゃねーか！」

318 ペーラン好きって珍しくない？

「……………し〜の〜ぶう〜」

「桜ー？ 大丈夫ー？ 息できるー？」

「は〜、す〜、は〜、す〜、は〜、す〜」

うん、よかった。出来てるみたい。

忍です。

体育はペースランニング。走るの遅いのは前半、速いのが後半。

あたしはサボリ、もとい見学。ちなみに理由はお腹痛い。勿論仮病。

先生が言ってたからね。受験に必要な成績には入らないって！
心置きなくサボれるというもの。

「ごめんなさい、ちゃんと真面目にやってる人。」

「後半組ー！ アップしなさいー」

うん、前半組でなければ後半組でもないので関係なし。

ちなみに授業に出てたら前半組です。持久力無いから。20mシヤトルラン40数回だし。

「はあ〜、ふう〜」

「落ち着いた？」

「大分〜」

「そか。脈計った？」

「うん〜、15秒で37回〜」

ハイハイ、37かける4は……………7×4、28足す3×4、12の10倍で…………

「148回かー、いいんじゃないの？ あれ？ 先生が言っていたい脈拍ってこれ位だった気がするけど、違う気もしてきた」

まあ、どっちでもいいけど。

「忍、記録用紙書いてくれ」「忍、コレ、書いてくれない？ 別に書いてほしいんじゃないわよっ！」

了解ね、しーちゃん、玲奈は、どっち？ 書いてほしいのほしくないの。

「あ……し、篠の書くのなら、別にいいわよ……」

いや、玲奈、無理しないでよ？ 書いてくれる人居ないんでしょ？ 皆もうペア組んでるしね。

「貸して、玲奈のも。2人分くらい余裕だつて」

「あ、ありがとつ。別に、感謝なんかしてないんだからねっ！」

してください。書かないよ？ 書くこと放棄しちゃうよ？ いいのそれでも。

「忍さん。私のも」

中森も！？ ああ、そつかあ、中森が前半だったら玲奈はそつちに記録頼むよな。

「一体あたしは何人分のタイムを記録しなくちゃいけないんですか」

「わたしを入れて4人分」

……桜、君は気付いてないけどね。実は田中さんのもやってたんだよあたし。

5人分だあ。

「頼みましたよ」

勝手に頼まれましたよ。頑張ろう……。

「つてか、桜も手伝つてよ」

「ごめんね、わたし飛山とびやまさんの頼まれちゃった。ラップの計算よろしく」

いやいや、なんで手伝つてつて言ったのにあたしの仕事増やしてるのよ。ラップの計算くらい自分でやつてよ。

「よーい、スタート！」

なんかもう勝手に始めてるし。えーい、もう、やってやる！

……1周目。

2周目。

「忍、これ、ラップ何秒？」

「ちよつと待って。今しーちゃんと玲奈と中森が一気に来たから」

はい、1分の48、49、49秒つと。皆速えー。

「ん、どれ？」

えっと、1週目が49秒、2週目が1分37秒……速い。これ、最後まで走れるの？

「48だね」

「はいはい、48。忍は計算速くて頼りになるんだよね」
言っとくけど、ペーランのラップの計算だけだからね。

速い人のは、60から1周前の秒だけ引いて、それを次のタイムの秒に足せば出るし。

ほら、飛山さんの60引く1週目が11で、二週目の秒の部分は37だから、それを足して48。

とか言ってる間に3週目来たし。しかもちよつとばらけてきてる……当たり前かも知れないけどさ。

3人のラップ出してないよ。後で出しやいいか。

「忍、開いてる？」

「開いてない！」

だからちよつと待って！

「はあ、はあ……忍、大丈夫か？」

しーちゃん、息きれてるのはそっちなんだけどね。

「ハツ、ハツ、ハツ、ふう……あら、全部ラップ出してくれてる」

ええ、頑張りましたよあたしや。玲奈、褒めて？

「ありがとうございます、忍さん。やっぱり忍さんに頼んで正解でしたね」

中森や、そりゃあラップを自分で出す手間が省けるという事か？
頭が疲れたあ。

ペーラン、嫌い！

319 諦めるべき時は諦めよう

「おい、高山ー」

「はい」

「いや、お前じゃなくて。妹の方」

「寝てるヨー。眠いアルー。寝かせてヨー」

起きてるだろお前。何で中華風？

全く……兄の方がちゃんと授業に出てるかと思っただら、今度は妹か……。

柿の種、あ、間違えた。牡蠣野胤です。

柿の種じゃないから！ 言っとくけど！

「こらー、起きろ」

「安眠妨害って罪状で警察に送り届けてもいいアルか？」

だから何でアルがつくんだよ。寝ぼけてるのか？

「先生、忍のそれ、本気寝だと思いまゝす」

あのなあ、山内。何処の世界にこんなペラペラ寝言を言う奴が居るって言うんだ。

「呼吸がゆつくりです。寝てるときの呼吸と同じくらいだと思っ
よゝ」

いや、そりゃまあそうだけどね。……高山妹なら演技でもおかしくないかと。

「柿の種、授業は？ 無し？ 最近こんななのか？ 出て損した」

こらこらこらこら

「高山、何処いく気だ！」

急に立ち上がったたりして……。

「既に眠りの世界へ旅立ってんだろ」

「妹の方じゃなくて！」

だああもう、何で名字で呼んじゃうかなあ！

「純、だいじょぶだって、どうせ柿の、あつ。柿の種が折れて授業

始まるんだから」

おい海中？ 何で途中『あっ』って言うっておいて結局柿の種で通したんだ？ え？

「せつ、先生！ 先生がふがないから、純がどっか行っちゃうじやない！ べ、別に気にしてないんだからねっ、私は！ 忍のためよ！」

どう高山のためになってるのかイマイちわかんないんだがなあ。

……いやあ、でもすごいなあ、高山も。兄妹両方。

妹は、鈴木の大声がすぐそこでしてるのにピクリとも動かず寝てる、寝てるのか？ し。

兄はクラスのごくごく一部からの殺気をさらりと流してるし。

来年はこの二人の弟が入ってくるのかあ……どんな子だろ。

「玲奈さん、玲奈さん、少しよろしいですか？」

「何よ？」

「今の発言……と言うか、いつも言っている事の殆どが、もう純さんに好きだと告白しているようなものかと思うのですが」

中森、それはトドメと言わないか。高山（兄）にも丸聞こえだぞ、完全に。完璧に。

「中森い、それって今さらアルヨ」

高山、それは本当に寝言か？ いつまでその胡散臭い中国人みたいな話し方するんだ？

「純兄もう気付いてるネ。鈴木に好かれてることくらい」

……トドメはこっちだったか。

「ええ！？ マジで！？ なんだかんだで結局は鈍い奴なのかと……」

「あんな、夏。マジも何もねえだろ。あんなあからさまな奴俺だっ
て始めて見たわ。なあ高山兄？」

「ん」

顔色変えずに頷いたよ。肯定したな、高山……。

「ねえねえ、亮、これって、これって……授業中にカップル誕生！

？ 凄くない？」

「……………シジミ、小声の意味、知ってる？」

小声で喋ってるにも関わらず全部聞こえてくるな。

「玲奈ー、大丈夫？ 気絶してないか？」

中谷……………気遣いが出る奴がいてよかった。

「ただだ、ダイジョブ、ヨ」

高山妹の寝言がうつったか！？

「よかった〜、てっきりそのまま成仏しちゃうかと思った〜」

山内、勝手に人を殺さない。何で成仏なの。

「……………で？ 高山くん、どうする？ こんな可愛い子にクラス全員の面前で告白されちゃったよ？ ここで答えないわけには行かないでしょう」

良かった。飛山見たいな話を進めてくれる奴がいて。

「これ、告白か？」

高崎、それは先生も思ったが突っ込んじゃダメだ！

「……………久し振りにマトモに学校出れたと思ったたらこれかよ……………」

「大体お前は学校に来ないで何してる……………ごめんなさい」

こ、怖かった……………クラス全員ににらまれた……………。はあ。

「ほら！ 高山兄！ さつさと答えて！」

「ここで答えなきゃ男じゃないアル」

高山（妹）ほんつとおおおおに寝言か、それは。

「え、答えにや駄目か？」

当然、と頷く生徒達。ああー、あの、そろそろ時間が……………。

「ん、じゃ、悪い」

『えー！？』

振った。

皆の期待裏切ったぞこいつ。

「なんで!？」

「嫌いじゃねえけど、好きでもねえよ。精々ライクの一步手前か」

「ちよつと。高山兄。はつきり言いすぎじゃ……………」

それは先生でも思ったぞ。ちょっとそれは……。

「ちゃんと言う事言っとくべきかと思ったただけだ」

「あ、はは。あはははは」

あああああつ！ 鈴木が逃げてった……。。

ええいもう、俺は悟った！ もう今日、授業は無理だ！

「もういいから、全員で追っぞ！」

言っただは良いが。

もう誰も居なかった。

あ、はは。あはははは！

320 理科室で何やってんだこの人等

「やーやー、忍くん、どうしましょう。君は純が好きなのはあの子だつて言つてたのに、彼はあの子を振つちやいましたよ」

「うつせーな、リオン。大体なあ！ 俺等死神が人間に恋心抱いてええと思つとんか！」

「開き直つたね」

まあ、開き直りも大切かもしれないけどねえ。

リオンでーす。

完璧部隊、不吉部隊、問題部隊、化物部隊、色々なあだ名がつく第十三部隊に所属していまーす。

その色々なあだ名の中に、暇人部隊つてのもあるんだよね。あつはっは。

まあね、俺等は他の部隊で手に負えなくなったものを扱つてるから。たまに数不足で他の部隊に派遣されることもあるけど。

「あーあ、てつきり純ちゃんが好きなのはあの子だと思つてたのにー」

「もしかして、好きだからこそ振つたんじゃ……だつて、最終的には分かれにゃならんのじゃけ。初めっから振つといたほうがあの子のためにもなるじゃろ」

忍くん、結局君はどっち派なの？ 純はあの娘……玲奈ちゃん？ が、好きなのかそうでないのか。

「まあまあ、そのうち分かるでしょう。私たちはまったりと、温かく見守つてましょ。コーヒーでもいかが？」

『あ、どうも』

……うん、美味しい。この世界の食文化は進んでるねえ。

流石科学の最先界。魔法の最先界とどっちが旨いかな。

「ごちそうさん。ところで、なんでマリーさんがここに？」

クツカ・マリア・アハティラさん。名前長い。そして、なんで

この名前からマーリだけを抜き取って愛称にしたのかが分からない。
いや、呼びやすいからいいんだけどね。

「純ちゃんは大らかな後輩ですからね」

「あつははー、俺からしたら一応先輩なんだよな。年下に敬語が使えんてこんなじゃけど」

「ねえ、俺は？ 俺、純の同期なのに敬語使われてないよ」

「同い年だからつい。まあよかるに！」

ええー。ちよつとちよつと、まあいいでしょって、自分で言う？

「そもそも、忍ってほぼ誰に対してもため口じゃない？ ほらあ、エイラちゃんとか、部長とかにはちゃんと敬語で話すけどー」

それは、貴女が忍にため口で話しかけられたときに忍を冥界送り一歩手前にしたからではないでしょうか。

「エイラさん、例の女の子はどこ行きました？」

「丁度こつちに向かって来てるよあ……鍵開けておこうか。この部屋、内側から鍵開け閉めできるみたい」

へえ……。それにしても、なんだ、この部屋。

お腹がぶつくりした両生類が液体に満たされた入った瓶とか、円錐と細い円柱組み合わせたような形のガラスとか……何に使うのかさっぱり分からないものがいっぱいだね。

「あつ！ 純ちゃんだ！ 純ちゃんが入って来るよ！ 皆、天井裏に隠れよう！」

あわわわわ、あわわわわ。見つかったら何言われるか。

……いや、何も言わずに呆れた目で見つめられるだけかもしれない。

「どつちも嫌だなあ」

「何が？」

「何か言われるのと、黙って呆れた目で見つめられるの」

「ああ、どつちも嫌じゃの」

はあー、全体的にも死神最年少のくせに、口も頭も生意気度も全部上だよ。

俺が勝てるのは年齢、身長、体重、視力、後は魔法くらいだなあ。生気なのは最年少だからかな？ 大人たちに囲まれてるせいで擦れたかな……。

え？ 天斬剣？ いや……実は、あの子達は死校が手に負えなくなつて、こつちで教育してくれとのこととで預かつてるだけです……。本当は学校卒業してないんだよ。ってか、卒業出来るわけないですよあんな子達が！

「純ちゃんの様子はどうですか？ エイラちゃん」

「息整えてまーす。ずっと玲奈ちゃん追いかけさせられて走つてたもんだから」

「あらあら、あの子は持久力無いんだから」

ああ、もう一個勝てるどころあつたよ。持久力だ。

「もうマリーさん、お母さんの位置に居るな」

「ふふ。純ちゃんは確かに息子のように思ってますよ」

三十代中ごろだものね、見た目若いけど。

「あ、あ、玲奈ちゃん、もうここの前に来るよー！」

「お、純の奴、扉あけっぱにしちよーじゃん？ うまく行きや入つてくれるで！」

あ、入つて来た。少し遅れてきたクラスの皆さんは？ ……階段を上つて行つたね。

「はあーっ、はあーっ、はあーっ」

息切らしながらも、扉閉めて鍵閉めて、なんて出来るつてのは凄いや。よく考えましたー。

「ねえ、マリーさん、たばすこつて奴持つてません？」

「ありますよ」

あるんだ。

「貸してもらえます？」

「コーヒーに入れるのなら貸しませんよ」
バレたか。

「はー、はー、けほっ、こほっ」

「おいおい、大丈夫か？」

「大丈夫よつ。こほつ」

「無理して走るのはよくねえぞ」

「べ、別に無理なんかしてないんだからねっ…………て、なんでここに居るのよ!？」

玲奈ちゃんや、気付くのおそいよ…………。

「いや、やっぱりあの子はよくあるツンデレまんまじゃ」

「ええー？ ツインテールじゃないよ!？」

「…………ツインテールは必須条件じゃないんですからね？」

「え？ そなの？」

ちよつとちよつと！ さっきから皆小声で話してるんだから、もうちよつぴり音量下げて…………。俺だったら聞こえてないけど、純は耳いいんだから。地獄耳なんだから！

「玲奈あ」

「な、なに、よ？」

「よくも面倒事起こしてくれやがったな」

ぶつちやけ引き金引いたのはアンタじゃないか？

もしくは妹ちゃんか眼鏡の娘だね。

「……………何よ。あたしだってすつごく恥ずかしかったんだから！」

「うん、だろうな。よく倒れなかった。偉い偉い」

「おちよくってんの？」

「うん」

純…………君はいつも正直すぎる。

「やっぱり純は玲奈ちゃんの事好きじゃなかったよ」

「そうですねえ……………何だかんだで正直者ですもんね。そのせいで何人傷ついたか」

ああ、正直に言ったのが純の毒舌だもんね…………。多少嘘も交えることがあるけど。基本は事実だね。

おかげで言い返せなくて。いい年したおじさんが泣いてるんだよ。ま、純曰く『尊敬できると思った人には言いません』らしいけど。

あれ？ つて事は俺等、まるで尊敬されてない？ むしろ見下されてる？

「純……あの、ホントに、あたしの事……」

「何とも思ってたねえよ」

「そ、よね。あはは」

「俺を人間だと思わせてくれる奴ってくらいにしか」

純、そのままノリに任せて死神おれらの事話しちゃうんじゃない……。

「……何の話よ」

「こつちの話」

あ、ごまかした。

説明が面倒だったんだ！ あれ！

「座れば？ 立ってるより楽だろ」

「自分の家みたいに言うわね」

「ん？ そうか？」

『そうだよ』

皆で一緒に言ってしまった……。聴こえてない？ 聴こえてないよね？

「で、落ち着いたか？」

「おお、落ち着くわけじゃないじゃない！ 恥ずかしいのと緊張とで心臓爆発寸前なのよ！」

今まで落ち着いてたじゃない。

「そか。心臓爆発して死んだら、俺が冥界に送ってやるから安心しな」

安心できないよ。純のやり方は荒っぱすぎる。いきなり心臓突くんだもの。

未練があっても、即送るんだもん。未練解決してから気持ちよく送り出すのが俺のやり方なんだけどなあ。

「安心できるわけ無いでしょっ！」

うん、正しいよ、玲奈ちゃん。

「はあ……なんか、すっきりしないわ」

『それはねー、自分から告ったわけじゃないからだよー』
「え？」

ちよつとおエイラさあん！ 何やってんですかあ！

「大丈夫、霊術であの子にしか聞こえないようにしてるから！」
漏れてますよ！ 俺にも聞こえてます！

『自分の口から告白しなきゃー。今、二人つきりでしょー。行つちやえ行つちやえー』

聞こえてるってば！

「じゅ、純！」

あんたも素直に従うなあ！

「あの……好き、です」

駄目だこの子、素直すぎる。

「ああ……ん、さつきも言っただけど。悪いな」

「……………うん」

これでちよつとはすつきりしたの？

「純、好きな子、居る？」

あれ？ あきらめてない？

「……………居るよ」

『おおおおおお！？』

こら、忍！ エイラさん！ 騒がないで！

「何だ。あたし、初めから入る余地無かったのね」

「ま、そう言う事だな」

「……………普通肯定する？」

純は普通じゃないからねえ。何しろすでに死んでますから。死神は死ななきゃなれませんから。

死神はうつるって言うけど、あれ、死神に精気吸い取られてるって話なんだよねえ……………。

「ふう。ま、いいわ。分かった」

「良かった。粘ってきたらどうしようかと思ってた。ズタボロならずに済んだぜお前」

「もう十分ポロポロよ……」

「そうか。悪いな。もう俺に関わるのやめる？」

「関わるうと思わなくても、忍に関わってたら嫌でも関わるでしょ？」

「……そか、ま、今日の残り、忍はアンタに任せるわ」

「何？ また早退？ 何やってんのよ、いつも」

「ん？ 暴力。ほら、教室に帰った帰った」

「……………ヤバい。ヤバいよ。」

「エイラさん、明らかに俺等ばれてますよ」

「逃げよう！ マーリさんも早く……………て、居ない！？」

逃げ足早いなマーリさん！

「小声、全部聴こえてんだよ。逃げ切れると思うなよテムエ等あ！」

純と言う名の修羅が現れましたア！ 誰か、助けて！？ 冥界に

送られる！

321 小学校の階段大掃除

「さあ、大掃除だよ！」

「うん、大掃除だよ！」

「さあ、終業式だよ！」

「うん……、終業式、だよ」

「さあ、冬休みだよ！」

「いええっ！」

わあ、皆さんと一緒にいええっ！だよ。

光です。

これから大掃除。

それが終わったら終業式。

それが終わって学活したら冬休みなのです！いええ。

最近寒いと思ったら冬休みだよ。びっくりだね。

「さあ、気合入れてやろうな！年末大掃除だ！」

後十回寝たらお正月だよ。

紅白歌合戦を最後まで見て、除夜の鐘聞いてっってして起きた

ままお正月迎えるのなら後九回。

他にも徹夜なんかするなら……知るかなもん、だよ。ち

やんと寝なさ。

「私達は階段掃除だ」

「同じ班だもんねー！」

「……三人でやったら、あつという間」

いえ。

「……あの、俺等居るんだけど」

そうだった！

「ごめんね、忘れてたよ、八月十五日くん達」

「違う！八月十五日で、あきなかって読むんだよ！」

あはは、現実に居たら会ってみたい名字にランクイン。

……あゝ、目の前に居るんだった。

「さー、さつさとやつちやうよ！」

「六人寄れば……文殊二人の早さ？」

「その文殊の掃除の速さが分からないよ。」

文殊って知恵をつかさどる菩薩だもの。掃除はあんまり関係：

……あゝ、もしかしたら早く掃除を終わらせる方法とか考えるかも？

でもそれなら素直にやった方が早そうだよ。

「掃いて〜、掃いて〜」

「おええっ」

吐いてじゃないよ。桂くん^{かつら}

「でえいつ！」

はーちゃんの蹴りが桂くんのお尻に炸裂！

「ぎゃあああああつ！？」

階段から転がり落ちちゃった。

大丈夫だよ、転がり落ちるって言っても、終わりの二段だけだから。

「汚いギャグ、駄目」

さらにみーちゃんがほつきでこっん。これはあんまり痛くなさそう。

「痛た……何すんだよ！ 海中っ！」

「みーちゃんが言ったでしょ！ 汚いギャグは駄目！ オマケに寒かった！ 取り敢えず気持ちよおく新年を迎えるために排除したよ！」

「お前の頭と心掃除した方がいいって！」

む。はーちゃんを悪く言ったな。

はーちゃんは頭も心もきれいだもん。

「とあ〜！」

階段の半分よりちよつと上の方から大ジャンプ！

「ちよつ！？ 高山！ スカート捲れて……」

「はーちゃんを悪く言うな〜！ そして見たな〜？ え〜い〜！」

スコーン。

箒が桂くんの頭にくりていかるひつと。

そしてそのまま私は桂くんの上に着地〜！

小太りだからやわらかい〜。

「水城みずぎい！ 大丈夫！？」

水城つて桂くんの名前だね〜。

「大丈夫だよ〜」

「お前じゃないよ〜！」
む〜。

「さ〜、はーちゃんみーちゃん続きしよ〜。粗大ごみは片づけたも
んね〜」

「そうだね〜！」

「そうだね……………」

「水城、今度からアイツ等、小悪魔三人衆つて呼ばない？」

「……………俺の心配は？」

ドンマイ桂くん〜。

「小悪魔三人衆だつて〜」

「褒め言葉！ 褒め言葉！」

「……………美代、小悪魔つばいことやって無い……………」

「落ち込まないで〜！」

「これからやればいいんだよ〜！」

あれ〜？ いいのかな〜？

「あーいあーい、ちよつと通して……………つて、あれ？ 大丈夫か！？」

あ〜、岳お兄ちゃん〜。ゴミ箱持つてるつてことはゴミ捨て当番
だね〜？

「光、何があつたんだよ。こいつ、階段から落つこちでもしたのか
？」

「そつだよ〜。足滑らせちゃつて〜。だから休ませてあげてるの〜」

「そつか。酷いんなら保健室行けよ？」

「ち、違うよ……………俺は……………」

「分かってる、誰だって一回はやっちまうんだよ。あれ？やるか？」

全然わかってないよ、お兄ちゃん……。そしてやらないと思うな。

「さあさ、頑張る！あともうちよつと！」

「おー！」……「おー！」

階段はきれいになりました。

階段は、ね。

男の子たちがどうなったかはご想像にお任せを。

「大したことなくて無いじゃん。保健室行っちゃったんだから」

はーちゃん、言っちゃ駄目！

322 熱爛が浸かったやかんが乗ってる石油ストーブの周りでサンタの話

「コタツ欲しいなー」

「忍、コタツはあるよ。無いのはコタツ布団だけ」

「おとーさん……それってコタツ無いのと同じじゃん」

ああ、自分の家でコタツに入りたい。コタツムリになりたい。忍です。

石油ストーブにかじりついています。あつたかー。

ストーブの上にはやかんが置いてあります。ポットの中が空になっ
ちやっただからだって。

でも、何で中に熱爛が置かれてるの？ まあ、いいんだけどさ。

「忍、今年はサンタさんに何頼むの？」

やだなー、サンタなんて居るわけ無いでしょ。

とか思いつつ、信じていたらもらえるらしいので毎年考えてあります。

だって、サンタに頼ったら、あたしからすればタダでしょ？ それに、枕元においてあるの見つけたらちよつとテンション上がるし……何が入ってるか楽しみだし。

「んとねー、本」

「本？ 何の？」

「多田連夜^{ただれんや}って作家の狩人シリーズ」

多いし高いから、自分で買うのはちよつと。

あれ？ サンタさん、パシリ？ サンタさん、サイフ？ ……あつはつは。ごめんよサンタさん。おわびに今年はクリスマスケーキ多目に置いとくよー。

「ふーん」

あ、岳が遊びから帰ってきた。

「お帰りー」

「岳は何頼むの？ サンタさんに」

「あつたかあー」

「あー、いいねそれ。おとーさんも欲しい」

おとーさん、それ違う。岳が言ったのはこの部屋の事ですよ。外寒いし。

第一サンタさん困るよ。形が無いもの頼まれても。

「何の話だよ？」

ほら、岳全然分かってない。

「サンタさんに何頼むのーって話」

「ミンテンドー3D0」

「ああー、いくらするのそれ」

「知らねーけど絶対高い」

小学生のお小遣いでは手が届かないのは確か。

つて、ちよつと、岳、あたしの場所、つまりストーブのまん前取らないですよ。押ししてる押ししてる。

半分ずつでどう？

「ふあゝ、おはよゝ。あゝ、暖かいゝ」

光、今こんにちはからこんばんはに変わりかけてる時間だよ。

あ、もちろん朝からずつと寝てたわけじゃないからね？ お昼寝だからね？

「私も当たらせてよゝ」

「もうちよつと間開けよう、ほら、ちよつとストーブから離れてさ」

ちよつと寒くなるけど、三人とも当れる……。

「あたしもう充分あつたまったしいいよ」

あんまり当りすぎたら暑くなっちゃうから、ほどほどに。うん、離れてもそれほど寒くない。

「光は？ クリスマスプレゼント」

「サンタさんの服」

「脱げってか」

「暖かそうでしょゝ？」

絶対おもちや屋か何かでサンタ服買ってくるよ、サンタさん。

サンタがサンタ服買ってるってちょっとシユールだな。

「あゝ、でも役に立たないから」

ハッキリ役に立たないって言われたよ、サンタ服。

「スイカ〜!」

『この季節にか!?!』

「この季節に無いからだよ。冬にスイカ食べたい」

大変だなー、サンタさん。

でも、冬のスイカって旬じゃないし、おいしく無さそう。あれは夏に食べるからこそでしょ。

……あんまり好きじゃないけど。だって、種いっぱいだし。どんどん味薄くなるし。

「お、純。純は?」

「来てねえよ、前から」

話聞こえてたんだ……。さすが地獄耳。

「ね〜、お父さん〜。何で純お兄ちゃんにはサンタさん来ないの?」

「悪い子だからよ。ね〜」

「普通本人に振るか?」

ありゃ、おかーさんも入ってきた。

「おとーさん悪い子じゃないのにサンタさん来ないぞ」

「いい子じゃないからよ」

「ばっさり言っただな、おかーさん。」

たしかに、いい子では無いね。

「親父、熱爛沸騰してんぞ」

「ああっ!?! 純! 何でそれを早く言わない!」

おおー、酒がぶくぶく言ってる。水になっちゃう。あ、違う。米エキスカ。

「ん、アルコールは取りすぎると体に毒だからな」

「怒ればいいのか寝めればいいのか!」

まずは熱爛を引き上げるべきだと思います。

323 サンタも大変なんですよ

サンタ・クローズ323号でございます。

サンタは沢山いるので（じゃないと配り終わる前に朝来るでしょ）番号が付いています。

今日はクリスマスイヴ、クリスマスの朝が来る前に子供たちにプレゼントを配らねばなりません。

サンタは親だ！ って言うような子にはあげません。そう考えた時点で大人とみなします。

さてさて、まずは一人目……子供リストをペラリ。

名前：苑土宇溝次えんとつ うちつじ

欲しい物：自分を『サンゴの人』と呼ばない話し相手

……さあどうしましょ。一件目からトンデモナイの来ましたよ。

一体何歳……あれ？ 二十歳じゃないですか。

もうすぐ二十一だというのに信じてくれてるなんて……ちょっと感激。でも年齢的に子供じゃないので、ポイ。

はい二人目。

名前：佐々木ミルクとロールの子供達ささき ねろく

欲しい物：餌をちゃんと同じ時間に持ってきてくれる飼い主。

ちよつと待った、これって……

種類：雑種の猫

やっぱり。

猫だからって差別はしませんよ？ 一応。ええ。一応は。よくお見逃しますが。でもちよつとこれは無理。

この子たちの飼い主の佐々木さん、ちゃんと同じ時間に餌持って行ってあげてください。

三人目。

名前：緑目・七海・にゃんにゃん・ルル・クロ・子猫ちゃん・そ

の他諸々

種類：可愛い黒猫

欲しい物：自分の可愛らしさにコロツと騙されて高級キャットフードを置いて行ってくれる単純な人間をいっぱい

名前多いよ、欲しい物長えよ、いっぱいってなんだよいくつだよ。というかこいつ等、者じゃなくて物頼めえ！

……おっと、取り乱しました。

次、四人目。

名前：枝里香（えりかじゃないから。えださとかおりだから）

なんでわざわざ書いてあるんでしょう。間違えられるのそんなにいやですか。

種類：魔性の女とか言われるけどなんでかな？

サンタさんに聞かないでください。

欲しい物：アイツド。最新の奴。

魔性の女、欲しい物普通なんですけど。

うん、この子の所には後でちゃんと持って行きましょう。ここからはちよつと遠いですから。この子の家。

五人目は……

名前：針先夏江はりさき なつえ

種類：ボツケボケのオカルト部部长

欲しい物：高山さんと高山くんの協力

ええ……と、高山さんと高山くん？

まあ協力欲しいって言われてもサンタにはどうしようもないのですが、リストにあったような……ああ、これかな。

六人目

名前：高山光

欲しい物：サンタさんの着てる服

脱げっつか。いや、続きがあった。

と、スイカ

………と、じゃねえよ。

サンタさんの服とスイカってどんな組み合わせ？

しかも何でサンタさん『の着てる』服……サンタさんの服だった
らおもちゃ屋とかのサンタ服でごまかせたのに。

ええい、次！ 七人目！

名前：高山岳

欲しい物：ミンテンドー3D○

ああ、これなら財布がちょっとさみしくなるだけで用意できます。
よかったよかった、普通の子が居て。

おや、次も同じ家の子ですね。八人目です。

名前：高山忍

欲しい物：多田連夜の狩人シリーズ

……また多くて高い物を……三十冊近くあったような気がするん
ですけど。

このリストの人たちを考えればまだましな方ですがね。

さて、九人目は？

名前：松下勇氣・菜月まつした

種類：サンタあー、なんかしんどーっていわれるけど、なんでし
んどいのかわかんないよー、ねっ？

ねって言われても困ります。きつとしんどいじゃなくて神童かと

欲しい物：英検・漢検一級

自分で取ってちょうだい。

あれ？ この子達いくつですか？ ちらっと四歳って見えたよう
な。

……さて、これで全部ですね。

ごまかせるものはごまかして、どうしようもない物はほっぽと
きますか。

324 メリークリスマス、の朝

んー……寒い。しかも暗い。

今何時だ？ 時計時計。

五時七分……ああ、暗いわけだ。

と言つても、眠くもねえし、起きるかな。一階に下りてストーブ付けたほうが暖かそうだし。

純だ。

起きた。階段下りて、ストーブ点けた。

……そらすぐには点かんわな。石油ストーブだし。

さっさと顔洗つて着替えるか。

がた

ん、誰か起きたか？

ぱたぱた

足音からして光だな。あ、静かになった。

………

ぱたぱたぱた

また動き始めた。

光と忍が話してる……って、忍も起きてたのか。今日は早えな。

あ、さらに岳の声加わった……おいおい、皆起きてんのかよ。

クリスマスだからか？ プレゼント確認するためにわざわざ起きてんのか？

そついや、昨日はいつもより早く寝てたな、あいつ等。

「お兄ちゃ〜ん〜！ 純お兄ちゃ〜ん〜！」

ん、大分ストーブが暖かくなってきた。

「ん、メリークリスマス」

これは二十五日につかうのが正解。

「メリークリスマス〜ス〜！ 見てみて〜！ サンタさん来たよ〜！」

「そか、よかつたな。何が来た？ サンタが着てる服とスイカ頼ん

だんだろ」

まっかつかだな。

「どっちも来た〜！」

……マジで来たのか。

「ほら〜、スイカ〜！」

……よくあるスイカのビーチボール。

そうだな、本物のスイカなんて一言も言ってねえもんな……どちらにしても季節外れだけど。

あれ、でも今ならスイカって冬でも買う事は出来るんじゃないや。

楽に手に入って、しかも安い方を買ったな？

「で〜、ほら〜！ サンタさんが着てた服〜！ ぶかぶかだしきつと本物だよ〜！」

あ、きゆうにどっか行っただと思ったら、パジャマの上からサンタ服着てたのか。

「ああ、帰り、サンタ寒かっただろうな。ちょっと来な」

「え〜？ な〜に〜？」

「後ろ向け」

「はいはい〜」

よし、この襟にくっついてた『大人用サンタ服 L』って札の紐を指で引きちぎって、札ごと回収。

片手で襟を直すふりをしながら（でないと何してたか怪しまれるから。面倒な事に）もう片方の手と口で、厚紙でできた札を破いてすぐそこにあつたゴミ箱にポイ。

証拠隠滅。

「これでよし」

「ありがと〜。襟直してくれたの〜？ 言ってくれたら自分でやったのに〜」

自分でやられたらまずいから言わなかったんだよ。

「兄ちゃん兄ちゃん！ お早よー」

「ん、お早よ。忍も起きてたんじゃねえのか？」

さつきから全然音聞こえねえんだけど。

「ああ、姉ちゃんはサンタが持ってきた本読んでる」

……ああ、ちゃんと持ってきてもらえたんだな、狩人シリーズ。

「それよりさ、見てこれ」

ん？ つるつるの紙に黒い文字が書かれた細長い紙……

『毎度ありがとうございます』

12月1日トイニヤラス

メンテナンス3D 1点

ビーチボール スイカ 1点

大人用サンタ服 L 1点

合計 26365円

お預かり 30065円

おつり 3700円』

どこの世界にわざわざレシートを同封するサンタが居るかつ！

ああここに居た。

何だよこれ。 金払えつてか？

「凄くね？」

「……まあ、ある意味すげえよ」

「とつと」

「ちよい、岳」

「あん」

もうちよつとこつち来い。光がまだ居るから。

という意味で手招き。

なのに、

「……何で光も来るんだ？」

「内緒話なんて酷いよ〜」

「……………やっぱいい。悪いな、岳」

「や、別にいんだけど。あ、光光！ さつき見せ損ねただけだよ、

見るよこれ」

あーあー、もう俺知らね。一応ちゃんとフォローしようとはした

からな。

「サンタさんの馬鹿あ〜！」

元はと言えば、サンタが現在進行形で着てる服を貰おう、なんて考えた光が悪い。

……………っつーことにしてやるっ。

325 光ちゃんの手書き年賀状

「ねえ、純兄」

「あ？」

「昨日クリスマスだったよね」

「ん。それがどうした？」

「なのに今日年賀状書いてるって変な感じがする」

「知るか」

別に知らなくていいんだけどさ。

忍でーす。

リビングの座卓で年賀状書いています。パソコンで書いた奴に、ちよつと文字書き加えるだけの。

光も年賀状書いてます。でも、全部手書き。

岳は自分の部屋で冬休みの宿題やってます。投げ出してなければ、純兄はソファで胡坐かいて何か書いてます。そこ、机も何も無いし書きにくくない？

「お姉ちゃん、見てみて」

「ん？」

光に見せてもらった年賀状には。

自分の頭よりも大きな龍の頭を掲げる小さな女の子が、ちよつと上から見た感じで描かれています。

絵えうまつ。筆ペンで清書されてる分正月っぽい。女の子も花柄着物着てるし。

でも一番気になるのは、その女の子の周りに筆ペンで書かれた文字。

『みてみて すごい拾ったー』

すごすぎるよ。

ってか、そんなモンどこに落ちてないよ。

色ペンで書かれた文にも書いてあるし。

『今年もよろしくね（中略）ところで、竜の頭って落ちてるものだし、つげ？』

違います。落ちてるものじゃありません。そもそも竜の頭だけしかないって事もそうそうないような。

「ね〜、その首の後ろから血い垂れてたら面白くない〜？」

「怖いわ！ 年の初めっから不安になる物送っちゃ駄目でしょ」

「あはは〜。やっぱり〜？」

思ってたなら言うなよ。はい、返す。

「あとね〜、こんなもかいた〜」

ほいな。えーっと、これは……。

大きな龍の頭が、年賀葉書からはみ出すくらい大きく描かれてて、その鬣に女の子が二人埋まって……え？ 埋まってる！？

それぞれ一つずつ台詞が書かれてる。

『ふかふかあ〜』

『ここ暖かいよ〜』

これってふかふかしてるものなんだ。で、龍って暖かいんだ。いや、光が考えたのかもしれないけど。

龍の口元に三、四頭身くらいの男の子が二人立って、そっちにも台詞が。

『これどっからツッコみゃいいの？』

これはもう一人の方に向かって言ってるね。視線がそっち向いてる。その人の答えは！

『……………』

この人の気持ちが見えなくなる気がする。

鼻の上から全部、目が見えないくらい黒く塗りつぶされてる、漫画によくある唖然とした表情。もう何も言えないって感じの。

一人目の方もちょっと分かるかな。何で龍涙目になってんの？

なんで女の子たち普通に龍をベッド扱いしてる、出来るの？ とうかさそもそも、なんで龍が転がってるの？

「すごいでしょ〜？」

「うん。何か色々すごい」

「でしょ〜」

うん。

「まだあるよ〜。はい〜」

ほい。これは？

変な女の子が、振り向きながら上を見てる。箆笥か何かの上でしゃがんで、女の子を見下ろした感じに見えるな。

変な女の子って言うのはね……目の周りが毛深くて、角があつて耳の先がとがって……角と耳には見覚えがあるな。龍に描かれたのと同じだ。

で、髪型はなんだか鬘みたいの上に膨らんで、それが背中をつたい、さらにはふつとい尻尾の先まで続いている。

さらに全身に模様がある。トラみたいな縞模様。ふにゃふにゃつて細かく曲がつてるけど。これ、どう見ても裸だから自前だね。

あ、横に文字が書かれてる。

『試み』

この矢印の先に絵があります。

『(龍+女の子)÷2(+X?)』

ああ、龍を擬人化したのか。

(+X?)って何? Xって何? 謎の物体でも足したの?

まだ続きがある。

『ちよつとした冒険。』

鱗がトラの縞模様になつちよつた』

あ、これ鱗なのか。言われてみればそう見えなくもない。

『やんなきゃよかつたってちよつと思つた! あはは〜』

……………これ、誰に送るつもりだろう。

326 火の粉って恐ろしい

「うっわー、暇だ」

つつつても何にもなんねーんだけどさ。

でももっかい言お。

「うっわー、暇だ」

岳だ。

滅茶苦茶暇だ。

誰かに相手してもらおうにも、父さん母さん、多分兄ちゃんも仕事、姉ちゃんは受験勉強。光は絶賛昼寝中。誰が絶賛してんのかは知らん。

修也は電話したけど留守電になってたし、奈那子さんは別の奴と遊ぶ約束があるらしい。翔は習字とか言ってた。他の友達？ 居るけど、連絡網どこにしまっただけあるのか分かんなくて電話かけられなくてさ。家もうろ覚えだし。

ちなみに百ます計算は切れてる。貰ったばかりの3D 含めゲーム類は『一日一時間破ったから今日は駄目』って母さんに取り上げられた。

しかも兄ちゃんに預けられて取り返すのは不可能。だってどこにいるかも分かんねー。

なんでこんなとこ敵しいんだよっ！

ピンポーン

「んあ？」

何か来た。間違えた。誰か来た。

姉ちゃんも光も出ねーだろな。オレが行くか。……どーせ暇だし。

「はい」

「針先でーす！」

インターホンって便利だよなー。寒い中外行かなくても応対出来るんだぜ？ 楽でいいや。

きつとこれ考えた奴、めんどくさがり屋だ！

電話そっくりだから『はい、高山です』って言いそうになっけど。相手ここ誰ん家か分かってんのに。

……っーか、一回やった。すっげー恥ずかしくなった。で、姉ちゃんに代わってもらった。

「で、どちら様？」

『針先ですってばあ！』

うっわ、何だこのキンキン声。超音波？ 耳に受話器付けてたら鼓膜が疲れんぞ。

っー訳で、テレビ電話みたいに向き合って対応することにした。名前ばかり叫んでもしょうがないだろう！

向こうどう対応すればいいか分からなくなってるじゃないか！』

あ、スパーンツ！ って気持ちいい音と一緒に男の人の声も聞こえてきた。

『失礼しました。古賀です』

アンタも名前言っただけじゃねーか。どう対応すればいいのかわかんねーよ。

あ、いや。この名字は知ってるわ。コガさんだろ？ 奈那子さんの名字は古閑じゃん。

「奈那子さんのお兄さんか何かですか？」

『は？ ナナコ？ 兄？』

違った。うっわ、恥ずかしー。

『もう！ ハルやん先輩も結局駄目じゃないですか！ 私が行きます！』

何人居んだよ。今度は普通の女の子の声？

『水ヶ岡中学校オカルト部の者です。高山くんか高山さんはいらっしやいますか？』

うっさん臭い部活あるんだな、水中。

……あ、来年からオレもこの学校行くのか。

それよか、こっちに返事しねーと。

「うちは全員高山くん高山さんなんですけど」

『あうっ!? あ、えと、いえ、そうじゃなくてですね』

うっわ、ちよつと楽しい。何この子。すげえテンパってる。

……………あれ? オレってS?

『えっちゃん! 落ち着いて! 落ち着いて!』

『あうあう、あ、失礼しました! えと、あの、純くんか、忍さんいらっしやいますか?』

うん、分かったた。言い直さなくても分かってたぜ。えっちゃん先輩。

「兄は出かけてます。行先はちよつと分かんないですけど。姉は今呼ぶのでちよつと待ってください」

『はいっ、お、お願いします……………はう。緊張したあ』

インターホンで緊張してたのか、この人。

ま、とりあえずいったん受話器置いて。

「姉ちゃん! 何かうっさん臭い部活の人等が来てんぞー」

「追い返しといて!。今忙しい」

……………いや、追い返せはねーだろ。

「その人等はいったんあつたら滅茶苦茶しつこいからー! 失礼でもなんでもないからねー」

さよけ。

……………えーつと、オレあどうすりゃいいんだ? 正直に言われたこと言うか?

それはちよつと悪いことしてるような気が。

「あたしが言った事そのまま言っつて大丈夫だからねー。雑草みたいな人等だからー」

雑草で。

しゃーねーな、じゃ、それでいつか。

顔会わせるわけじゃねーし! インターホン万歳だぜ!

「んつとですね、今忙しいから無理だそうで」

『えーっ!? ちよつとだけ! ちよつとだけだよ!?!』

「いったん会ったら滅茶苦茶しつこいからー。だそーです」

『あゝ』

なんで納得してんだよ、超音波の人以外の二人。

『えええーっ!?!?』

『これ位じゃへこたれねえっすよっ! オレ等、雑草の精神の持ち主なんです! 踏まれても踏まれても伸び続けるんで、覚悟しといってください!』

自分で雑草つつったよこの……今まで出てきた誰でもない男の人の覚悟だよ。

『……弟君か』

「はい?」

今度は誰だ?

『君は来年入学してくるそうだな。必ずうちに入部させるから、覚悟しておくように。それでは』

『部長、行きますよ!』

『むうー』

………入学前、卒業前どころか、三学期始まる前からトンデモねー奴らに目え付けられたんだけど。

327 彼等を覚えていましたか？

「おもちー」

「うん、餅だね。おいし」

忍です。

今日はおとーさん以外の家族皆、おばーちゃん家でお昼ご飯食べてます。黄粉餅です。

なんか、餅ついたから食べるにいでーって。餅ついたって言うても、餅つき機でだけど。

で、従弟妹と叔母さん、神谷、菜美、なっちゃんと一緒に餅です。間違えた。餅食べてます。……って、最初に言ったか。

……従弟妹、とか叔母さん、とかってわざわざ言ったのは、覚えている方がどれだけいるのか不安だったからです、はい。

「……………」
「……」
しかし、何て静かなんでしょうこの居間。

大人組（純兄込）の方は色々話したりしてるのに、なんで子供組はこんなに静かなんだ！

理由は簡単、食べてるからです。もぐもぐ。食べ終わったら騒がしくなるよー。

「ふー」

「菜美ちゃん、黄粉ふくしちゃダメだよ」

「あーい」

黄粉散った後なんだけど。光、なんでもうちよい早く言ってくれなかつたかな……………」

「……………」
「……………」
で、また沈黙と。

「ごちそつさまー！」

「神谷もごちそさまー」

あ、岳と神谷が食べ終わった。

あたしも後二口くらい。ぱく、ぱく。

「ごちそうさまー」

「ごちそうさまー！」

「菜美はまだ残ってるじゃん」

餅、丸々一個。

「うー……おなかいっぱい」

お代わりしてたもんねー。入りきらなかったのか。

「なっちゃん〜ん〜。菜美ちゃんお腹いっぱいだった〜」

「どれくらい残ってるの？」

なっちゃん、口の端っこに黄粉ついてるよー。

「お餅一個〜」

「ああ、じゃあこっちに貸してー。私が食べるよ」

はいはい、あたしが食器下げるといって持って行きますよー。光
まだ食べてるでしょ。

「のこしてごめんなさい」

うん、それ言える子って少ないよ。いい子いい子。

なっちゃんに皿ごと残したの渡して、流し台に食器下げて、さあ
これから何しよう。

……と、考える間もなく。

「しのぶちゃん！ ボールなげて！ アタックするー！」

「あ、あ、神谷も！ レシーブ！」

うん、なんでバレーボール？

「光がまだ食べてるでしょ？ それ終わったらねー」

「えー」

光ー、さあ早く食べなさい。無理に詰め込まなくていいから。
のどに詰まらせなくていいから。

「たけるくん！ ボールなげて！」

またんかコラ。

「光がまだ食ってるだろー。って姉ちゃんが言ったろ」

あたしが言ったって事をわざわざ言う必要があるの？

「じゃあ、じゃあ、たかいたかいして！」

「はいはい」

「神谷もー」

あたし一人で二人を高い高い出来るわけがないでしょうに。

「じゃあ菜美、菜美は岳にやってもらって」

「たけるくん！ たかいたかいしてー！」

……素直でいいわあ。

「ほい、おいで神谷」

うわ、重。当然っちゃ当然だけど重い。

まあ、高い高い出来ないほどでもないか。

「ほい」

いっかい、にかーい、三かーいも投げたら流石にきついです。

「純兄ー」

「俺やったら他界他界になっから」

そりゃマズい。でも

「流石にそれはないでしょ」

「ん。正直に言う」

はい、正直にどうぞ。

「今餅と塩昆布に忙しい」

………まだご飯中だったのね。

「忍姉ちゃん、もっかい！」

あーいよ。

この『もっかい』これから何回続くのかなあ。

328 大掃除（主に掃除機）の恐怖

ガーツ

ああ、下で掃除機さんが騒いでいます……。もう少し静かに騒げませんかね。

『きゃあーっ！ きゃあーっ！ 吸ーいーこーまーれーるー！』

大丈夫ですよ、おはじきさん。あれの掃除機さんは二階に来ません。

だから私のすぐそばで暴れないでください。当たって痛いんです。パチパチ当たって痛いんですよ。地味に。

ニンジンとサツマイモの甘煮です。食べられませんよ。ご注意ください。

この間、本当にニンジンとサツマイモを甘く煮たニンジンとサツマイモの甘煮さんを見かけました。

おいしそうでした。私は食べられません。

ガーツ

ああ、今度はすぐそば……。この押し入れを出た先でしょうかね。

『キヤアアアッ！ 吸い込まれるうー！』

大丈夫ですよ、お手玉さん。

あなたを吸いこんだら掃除機さんがお腹を壊します。

「兄ちゃんの奴う……。なあってオレだけで部屋の大掃除しなきゃなんねーんだよ」

それは多分、貴方が普段お掃除をしないからですよ、岳さん。

純さんはこまめにやっていますからね。自分だけ使う家具の周りだけです。

『たけにゃんもちゃあんとやってるよおー！？』

あら、ダーツさん。

「あ、大掃除なんだし、こん中もやっとか」

……岳さんはいったんやり始めたらとことんやる方でしたね。

がらつと押し入れのふすまが開きました！

「きゃあーっ！ きゃあーっ！？ ちょーっ、マジで吸い込まれる
べーっ！」

おはじきさん、何ですかその口調。

そして大丈夫です、今掃除機さんはお休みしています。

「うわー、結構詰まってるじゃないか」

貴方よくここ開けてるじゃないですか。ダーツさんとか出すのに
今更ですよ。

「うっわ、布系もある。はたかなきゃなんないのか。先にこつち
やるべきだったなあー」

ほんと、やり始めたらとことんやりますね。

しかも結構テキパキやってますね。どンドン周りからおもちゃの
皆さんが出されていきます。

お手玉さんも、取り出されて、雲一つない……あ、言ったそばか
ら出てきた。まあとりあえず、空が見える窓の外でパンパンほこり
をはたかれています。

最後に私だけ残りました。

「……いやいや、オレ一人でこれは無理だろ」
でしようね。

「姉ちゃん！ ちょい手伝ってー！ ニンサツ出してはたいて放
りだすんだけど！」

どこで聞いたんですかニンサツっての！

「ニンサツ？ 何それー。忍者のお札ー？」

隣の部屋から忍さんの元気な声が。最近会ってませんが、安心し
ました。

受験勉強とかで、ほとんど部屋に居ましたからね。休憩も多かつ
たけど。

「ニンジンとサツマイモの甘煮！ 姉ちゃんが言い出したんじゃない
ーのかよー！」

てめーですか、ニンサツ広めてくれやがったのはあ。ずっと勉強

してる！ で、ノイローゼになれえ！

コホン、取り乱しました。のいろーぜってなんですか？

「あたし今こっちやつてるから無理ー！ 純兄居ないのー！？」

「昼飯前に出てったきりー！」

「ん、昼飯なんだった？」

「あ、お帰り兄ちゃん。姉ちゃん！ 今兄ちゃん帰って来たからやつばいいー！」

「あーい」

ちよつと待つてください。今、純さんが突然現れたように見えたのですが。

気のせいですよ。押し入れて見えないところから移動して、突然見えるようになっただけです。

瞬きしている間にでも。

……私、まぶた無いから瞬きできないんですけど。

「兄ちゃん昼飯食ってねーの？」

「いんや。妙羅のおごりで食ってきた。で、何か用か？」

「あの人おごりとかすんだな……じゃなくて、これ！」

これ！ って言われながら指差されるのはちよつと気分よくありません。

「ん。ニンジンとサツマイモの甘煮が。……言つのめんどくせえし、ニサ甘でいっか」

よくありませんよ！？ 何なんですか、にさあまって！ 訳分かりますせんよそれ！

「で、これが何？」

結局『これ』ですか！

「押し入れから引っ張り出して、外ではたきたいんだけどさ。重くてデカくて」

「それ以前に窓から出ねえよ。こんなの」

何ですか、こんなのって。

「……だよなあー」

「大体、なんでまた押し入れの中身なんか出してんだよ」

「大掃除。押し入れん中もやっこーって思っつて」

「……………押し入れん中までするか」

「いい心がけではないですか。私達も気分がいいですよ。」

「ん……………そうだな。まあ、これは押し入れの一部みてえなモンだし。出さなくてもいいんじゃないかねえの」

「ええー？」

「じゃ、掃除機だけかけとけよ」

え？ 私にですか！？

「分かった」

そこ『分かった』なんですか！？

え、ちよつと、え？ 掃除機さんがガーツとか言っつてこつちに…

…。

ブラシみたいな形になってますけど、それ、絶対痛…………。

『キヤアアアアア！』

329 ちと騒がしくなりますよー

「にゃーにゃ」

「それ、熊のぬいぐるみだぜ」

「わーわん」

「だから、それ熊だつて」

岳だー！

従弟の疾風はやてが来たんだけど……。覚えてる奴居るか？

ほら、さいつしよの最初、第4話から第8話で、カレー作ったことがあつただろ？

あの時カレーの中にぶち込んだ離乳食。あれを忘れて行ったのがこの疾風だ。ま、99%の奴は覚えてねーだろな。

一歳半、結構喋るんだなー。

「忍〜！ ごは〜ん！」

あー、姉ちゃんまだ勉強してたんだ。すげえ。

兄ちゃんはそのでルービックキューブやってるってのに。うわ、

もうほとんど揃ってる。これはこれですげ。

「純たけ光もご飯よ〜」

なんでオレだけ竹なんだよ！ なんで『る』が削られてるんだよ！

「疾風くん〜、ご飯だつて〜」

「はやくん、おいでー、マンマよ、マンマ」

梨加りかちゃん。母さんの弟、つまり叔父さんの奥さんで、疾風の母さん。

この人を一言で言うと、若い。まあ本当に若いんだけどさ、母さんに比べればの話。

「マンマア！」

おー、走つてった。あ、こけた。

「大丈夫〜？」

あ、自分で立って、光には目もくれず走つてった。

ドンマイ光。

「お母さ〜ん〜。私疾風くんの隣がいい〜」

「ん〜、じゃあお姉ちゃんの所に座る〜?」

「座る〜!」

姉ちゃん何処座るんだろ。どっかに出張?

ま、いいや。オレはオレん席に座ろ。

そついや兄ちゃんも何処座るんだろ。兄ちゃんの席に梨加ちゃん
& 疾風が居るんだけど。

「わー、おでんだー。あれ? テーブルの上に鍋が無いのは……あ、
疾風が居るからか」

疾風の手が届くところに置いてちゃあぶねーもんな。

「あたし何取るうかなー」

オレはじゃがとこんにやくと人参、あ、卵発掘、ゲット。こんな
でいっか。

どーせセルフサービスだし。また取りにくりやいっか。

「岳、貸して」

姉ちゃん、言われなくても貸すってお玉くらい。

おー、じゃがうめえ。ほくほく? うん、そんなんだ。

あれ、結局姉ちゃん何処座るんだろ……何の疑問も持たずにあつ
さり父さんの席……俺の斜め隣に座った。あつさりすぎだろ。

母さんも自分の席座ったから……後は光の席しか空いてねーな。

『かーんぱーい』

何か向こう……さつきまで疾風が遊んだりビングで、山口の婆
ちゃんと叔父さんの廉れんや也くんビール飲んでるし。

何気に兄ちゃん巻き込まれてるし。ルービックキューブは? あ、
完成して転がってやんの。

「純、飲むけ?」

「ん? 貰う?」

貰うなよ! 未成年だろ! ……って、夏に良雅くんに言ってた
じゃんかよ。あれ? これは姉ちゃんだ。兄ちゃんはなんも言っ

なかった。

「飲むな、中学生だろ」

あ、廉也くん、勧めたくせに兄ちゃんはたいた。

「んじゃ勧めんなよ」

「冗談に決まっとうろつが」

「絶対に決まってることは無いって言ったのは廉也くんだろ」

「いつの話!？」

「ん……十何年前。忍が、廉也くんが言ってたって香ちゃんが言
つてたって言った」

滅茶苦茶あやふやだなおい。なんでそんなの覚えてんだよ。

「まあま、純も十五じゃろ？ ちよつとくらい大丈夫じゃ」

「母さん、勧めんなよ」

婆ちゃん……。

「良雅も十五から飲み始めた」

そなの？ 知っててほつといたんか婆ちゃん！

「岳、岳！ おでんの中大変なことなってるよー」

「え？」

あ。

兄ちゃん等の方見てたから、卵の黄身が全部汁の中に溶けた……。

「姉ちゃん。黄身だけくれ」

「無理」

チツ。即答だぜ即答。

330 話は短く蕎麦は長く

「今年も終わりだー」

「まだあるよ。三時間三十数分」

「三時間三十数分!? 三時間半ちよつとしかねーじゃん!」

そんなことより、お腹すいた。ご飯まだー? 蕎麦まだー?

……あ、そんなことって言っちゃった。

いやいや、別にお腹を満たす事優先で言ってるわけじゃないからね。単にお腹がすいただけだからね。

「ねえ純お兄ちゃん、今年紅白どっちが勝つ?」

「さあな」

あ、流した。

「廉也くん」

「白だよきつと」

「ねえお姉ちゃん」

「紅じゃない?」

「ね」

……紅って言ってほしかったんだね。

「さ、お蕎麦!」

やったあ!

……なんかちよつと恥ずかしかった。忘れて?

頭の中まつさらで新年迎えましょう。さあ、一二の三四で忘れてください。

「おいし。……あれ? この人誰?」

知らない。まあしょうがないよ。普段からそんなにテレビ見ないし。

あれ、でもどっかで聞いたことのある曲。何処だろう。

「あちつ」

「熱つ。ちよつと岳、かかった!」

熱くてこぼすのは勝手だけど、巻き込まないでください。

あたし冷たい？

だって熱いんだもん。冷やすのが普通でしょ。意味が違う？ ほ
つとけ。

「ごめん姉ちゃん」

「許す」

謝られたら許さないとね。向こう困るよ。

「ねえ、純兄。年越し蕎麦の意味ってさ」

「細く長く生きれますように」

「そうだよねえ。でもあたし、太く短くの方がいいや」

「……その短くってどんくらいだよ」

言ったら、それ充分長えよって言われそうだから言わない。

「太く長く、ならうどんだよね」

いや、あたしうどんより蕎麦の方が好き。

「紅白って生で見てみてーな」

「これ生放送だけ」

「そうじゃなくて」

うん、分かかって言った。あたしも見たいけど、起きてられる自
信がない。

最後までは見れるんだよ？ でもその後、あつという間に眠りに
ストン。

で、元旦に純兄に文句言われる。『俺が運ばなきゃなんないの分
かっててやったろ』って。確かに分かかってるけどさ。でも最後まで
見たいしー。

うん、今年も純兄に運んでもらおう。やっぱり見てたい。

……蕎麦おいし。

んと、皆さん良いお年をー。

あたしは紅白と蕎麦に集中いたします。

330 話は短く蕎麦は長く(後書き)

そういつ訳です。良いお年を！

331 あけましておめでとうは神社にて

紅白は紅が勝ちましたねー！ 七年ぶりの紅組優勝だよ！
今朝は毎年いっもより光の機嫌が良かったよ。うんうん。
あけましておめでとうございます。

忍でーす。

新年明けて、おせち食べて、神社に初詣に来ています。

兄妹四人と廉也くん、疾風、おばーちゃんと一緒。他の人達は家に居るよ。おとーさんなんかまだ寝てた。

で、長い行列できてるので並んでいます。

「あゝ、焼き芋売ってる〜！」

「あー、去年も売ってたね」

「旨そー」

って言つて、純兄をじー。なぜなら財布を持つてるからです。

「買つといで。千円あげるから、買えるだけ」

「え、いいの？ 廉也くん」

「おう」

「テメエ等あ、俺には遠慮ねえくせに」

純兄は無視しよう。

『ありがと〜！』

さあ買おう！

七百グラム以上入って千円つて書いてある。おおー。

その『七百グラム以上』で、四本買えました。

「おいし〜っ」

「はい、廉也くん。疾風も食べれる？」

「ちよつとずつな」

「まー！」

まー？ マンマの略とか？ 残念ながらご飯じゃありません。

「母さん、焼き芋食べるか？」

「おお。旨そうじやな」

「旨いよー。金色だよ、この中身。」

「はい、光。半分」

「わ〜い〜。……岳お兄ちゃんの方が大きくない〜?」

光、隣の芝は青いとか言うのでしょ。そう見えるだけだよ。

「忍、俺のは?」

「えっ!?!」

「何驚いてんだよ。何自分だけ一本食えると思ってんだ」

「冗談だよー。はい半分。」

でもおばあちゃん、一人で一本食べてるよね? 一番大きいの人でペロリだよ?

あれ!?! もう食べ終わってる! 皮の一枚も残ってないよ……。

「この皮おいしいよ〜!」

「中身もらってやるーか?」

「それはダメ〜!」

もう茶色い皮部分は手に当る所以外全部食べられて、金色の中身が裸で立ってるんだけど。光の芋。

「甘いねえ、疾風」

「ま!」

「疾風くん〜、旨いって言うんだよ〜」

「んまんま、うま」

お、疾風が『旨い』を覚えた。

食べ終わる頃には拝殿が目の前に。結構お腹いっぱいになるよね、芋って。

お賽銭入れて、鈴鳴らして、二礼二拍手一礼。神社ですから。

「さ〜、おみくじだ〜!」

「いえー!」

ぶっっちゃけ初詣ってこっちの方がメインな気がする。あたしだけ?

「あ、忍と純くんだけ。あけましておめでと〜!」

「ん、おめでと」

「おめでとー、桜。来てたんだ」

「そりゃ来るよ〜。合格祈願、合格祈願！ 忍もそれお願いしたんでしょ〜？」

うん。白銀高校受かれーって。ついでに滑り止めの私立受かれーって。

「さ〜、質問です」

うん？

「年が明けて最初にしたことは？」

「寝た！」

『あけましておめでと〜』は言ってから寝ただけだね〜。

はてさて、いつの間に寝たんだろ。朝起きたらベッドの中にいたけど、あたしはそこまで言った記憶がない。

……って事は。

「純くんは？」

「リビングで寝やがった妹二人を運んだ」
睨まりました。

「岳はちゃんと起きてたのになあ、忍？」

「さ、桜、おみくじなんだった？」

「こついつときは話をかえるに限る。」

「これからだよ〜」

「じゃ、一緒に行こ」

「お〜」

……巫女さん忙しそうだ。

おみくじだけじゃなくて、お守りとかも同時並行で売ってるよー。

「純お兄ちゃん〜、百円〜」

「オレも」

「あたしも」

「わたしも〜」

「ん、光、岳、忍」

桜さん、何で貴方まで手を差し出してるんですか。

あれ？ ちょっと待って、差し出された手、六本もある。全部右手で六本あるよ？

「あれ？ オレ等にやくれねーのか？」

「あけましておめでとう、清、篠。お年玉くれんのか？」

ああ、清と篠か。

「お年玉は年上が年下にくれるものだぞ。というわけで、くれ」

純兄のほうが生生日早いから年上だと。あ、じゃああたしも貰わなきゃ。ナイス篠。

「違えな。大人が子供にくれるモンだ。残念ながら俺も中学生で子供だから無理」

「純は大人っぽいから大人でよくね？ くれ」

あ、清の手がはたかれた。

「いい音しました〜！ これは痛いでしょう！」

なんか桜の実況久し振りに聞いた気がする。

「お姉ちゃん〜、見てみて大吉〜！」

「おー、良かったねー」

あたし、一昨年一回引いたつきりなんだけど、大吉。

……………

ほら、今年も吉だった。

大でも小でも中ですらないなんて中途半端だよ！

ま、いいけどさ、普通に良いでしょ、吉って！ ね？

「わたしも大吉だよ〜。おそろいだね、光ちゃん」

「うん〜」

「あ、オレ中吉」

中吉と吉ってどっちのほうがいいの？

「あたしは末吉だ。……………チッ」

「篠のチヨップ〜！ 清くんの眉間に突き刺さりました〜！」

チヨップって刺さるものだった。

……………眉間を押さえて蹲ってる……………声にならないほど痛いんだね。

「岳ー？ あれ、岳何処行った……………うわっ」

「姉ちゃあん……凶だった」

ああ……そつか、それでそんなに暗くなっちゃってるのか。

「ま、良かったじゃん、大凶じゃなくて！」

「大凶だったんだよ！」

しまった。余にボソツと『大』を言っただから聞き取れなかったんだ。

慰めが慰めにならんかったと。ドンマイあたし！

「みーちゃんだ〜！ 私大吉だったよ〜！」

「美代、吉」

仲間だ！

「村田くんはなんだったの〜？ おみくじ」

「小吉」

「……あ〜。そうなんだ」

「何だよその反応！？」

かなり冷めた反応だったね……。

「純くんはなんだったの〜？ あれ？ 純くんは？」

え……あ、居た。テントのところで甘酒貰ってる。

で、岳に渡してる。岳はそれを飲んで……舌火傷したな、あの反応は。

あたし達もそっちに移動。

「純お兄ちゃん〜！ 私も飲んでみたい〜」

「ん」

あれ？ 甘酒渡してる男の人……サンゴの兄ちゃんじゃん。またバイトかな？

もうバイトの兄ちゃんてよくないかあの人。

「……何か変な味〜」

「そつか？ 旨えのに」

とか言いながらあんまり一気に飲めない純兄でした。あたし達兄妹皆猫舌だもんね！

「純兄、あたしもちようだい」

……飲んでみました。熱い、甘い、変な味。

「もういい」

「忍もか」

「純くんはおみくじなんだったの〜?」

「引いてない。金無駄」

……百円なのに。

「あ、居た居た」

廉也くんだ。

「おみくじなんだった?」

「凶」

ドンマイ!

「疾風くんは〜? 子供みくじ引いてたよね〜」

「大吉」

「だー!」

運吸い取られてたりして。

「……子供みくじって凶入って無さそうだよな!。ってか、大吉いっぱい入ってそうだよな!。よし、兄ちゃん百円くれ!」

「アホか」

ばっさり。

331 あけましておめでとは神社にて（後書き）

あけましておめでとはございます。

今年もどうぞよろしくお願いいたします！

332 ちゃんと仕事やってんです……か？ コレ

『指令先：第一部隊 班無所属 アラン・バブカ

氏名：ジジ・ベイカー

世界：ゲーム界

国：センター王国

職業：魔王を倒しに行く勇者一行の魔法使い』

職業名魔法使いでよくないか、と思ったのは俺だけじゃないはずだ。

死神になって多分七年くらい、第一部隊で『寿命なのに何故か死なない奴を死なせに行く』仕事をしているアラン・バブカだ。

読んでいたのは指令書……またこれから仕事だ。

目の前に座るは第一部隊をまとめる部隊長。彼が口を開く。

「今回の仕事は、いくらお前が優秀だと言っても一人では難しいと思われ。」

何しろ、前に四人が失敗した仕事だからな。お前が失敗すれば、

次は第十三部隊に回される」

『第十三部隊』……死神の中でも一番扱いが難しい連中の集まりだ。彼等は以前に何かしら問題、事件と言ってもいい。それも冥界に送られてもおかしくないような大事件を犯しているのだ。

しかし、能力だけでは抜けて素晴らしいので冥界送りは何とか免れている。

彼等に回される仕事は全て、死神の基礎五部隊で五度以上失敗した仕事……。

「すみません。アラン・バブカさんはいらっしゃいますか？」

突然戸が開き、死神の中でも、始めてみる程若い男 少年と言つてもいいだろう が言った。

「アランは俺だが。君は誰だ？」

「第十三部隊、高山純です。アランさんの仕事を手伝うよう指令が

回って来ましたので、参りました」

「……………高山純か。どこかで聞いた名前だな。」

「いや、そうではなくて、第十三部隊？」

「何かの間違いだろう」

「その指令書、ちゃんと読みましたか？」

最初の方しか読んでいないが……でもまさか、第十三部隊の少年が手伝うような事は……。

『その他：いくら貴殿が優秀だとは言え、恐らく一人では難しいと思われるので、第十三部隊に手助けを要請しておく』

書いてあった!？

「書いてあったみたいですね」

どうせ俺が失敗すれば、いや、絶対しないが万が一したときは、第十三部隊に回される仕事に何故第十三部隊から助っ人が来るんだ？ おかしいだろう、どう考えても。

「……………何をした？」

「ん？ 何やらかして第十三部隊に居るか、ですか？」

「そうだ」

「売られた喧嘩……………決闘って言うんですかね？ 片っ端から買って、決闘らしく相手全部冥界に送ってたら怒られまして。俺悪くないですよねえ？ 喧嘩売って来たの向こうなんですよ？」

俺に聞かれても困る……………。

「アラン、安心しろ。彼は第十三部隊でも七番目位には常識があるフオローになって無い気がするのですが？」

「一、二、三……………違います、九番目です」

「君も訂正しなくて良い!」

しかも余計に悪くなってるじゃないか!

「純です。それより、さっさと仕事行きましようよ。残り少ない生命保存期間を無駄にしたくないんで」

「……………生命保存期間中なのか？」

死神の過ち等で命を落とした場合、五年生き返ることができ…

…とは言っても、実体化するだけなのだがな。死神の中にも居るとは知らなかった。

「あと百日無いんですけどね。」

「まあ、そんなことは置いといて、早く行きましょう」

「ああ。そうだな」

俺もたらだと喋っているのは好きじゃない。

行先はゲーム界、センター王国だ。

ここでは、魔王が魔物を放ちまくって王国征服を企んでいるらしい……。小っちゃいな魔王。世界征服位言ってみろ。

それを阻止すべく、王が勇者を異世界から召喚、ちよつと待て、コイツも駄目だろう。元の世界に戻してやらねば……。文化の狂いが起こる。

そして、超絶美人の女剣士アイヤ、力自慢のマツチヨ……。あれ？コレ名前なのか？そして既に寿命を迎えているはずの魔法使い、ジジ。

彼等を仲間にした勇者タツキが魔王を倒すよう、王から命令を受けてまず五億六千万を前金として要求&ゲット、さらに仲間全員に十億の生命保険をかけた後出発……。何だコイツ!?

「凄いですね、アランさん。」

この勇者、立ち寄った村で不法侵入やら強盗やら滅茶苦茶やってますよ。見習お」

「見習うな!」

「本当にする訳ないじゃないですか」

馬鹿にしたように俺を見る、このナマガキを一度殴ってもいいだろうか？

いいな？ よし。

「フンッ」

不意打ちで、さらにこの速さの拳をかわせるか。

俺が得意なのは主に妖術だが、体術だって遅れはとらん。

「ん、残念でした」

……くそ、受けられたか。

「わざわざ掛け声かけてくれるなんて親切ですね」

「残念だったのはそっちだ」

このまま足払い！

……跳んで避けられた。

「わざわざ予告してくれるなんて親切ですね」

「チッ」

この馬鹿にしたように口角を上げる笑みが、嫌いだ！

「マンレイタイシュ・レンレ……」

妖術でその笑み、消してやる！

「ん、魔法ですか」

……逃げた！？

やたらと足速いなアイツ！ くそつ。間に合わん！

すぐそこは街、勇者たちもそこに居るだろう。

しかし……ジジとか言う魔法使いを消す前に、アイツを消さんと

俺の気がすまん！

333 ただいま作者が暴走中

……………あ。

しまったな。仕事放棄しちゃった。

アランなんちゃらの仕事を手伝えって事だったのに、逃げてどうする俺。

でもなあ、あの人いきなり魔法撃ってこようとするんだから、逃げてもいいだろ。ん。

……………でもなあ、仕事終わらせにや給料払ってもらえねえし。信用下がるし。怒られるし。めんどくせ。

純だ。

ここなんて世界だっけ？ ゲーム界？ 多分これゲームだよなきつと。勇者に魔王つて。

魔王を倒しに行く勇者の仲間の魔法使いジジを死なせんのが今回の仕事だった筈。

別にアラン……………さんと一緒に無きゃいけない訳じゃないだろうし、いつか。

とりあえず、逃げ込んだ街にあったベンチに座って、一休み。持久力ねえもん俺。

通りを挟んだ向かい側に、お守り売ってる店があった。……………何でこの国の言語日本語なんだ？

学業成就……………忍に買って行ってやるうかな。あ、異世界のモン持ってつちや駄目なんだった。

異世界に持ち込んでいいのは霊界産だけって決めたの誰だ。

制服はともかく、得物やら小物まで霊界産じゃなきゃ駄目なんだもんな……………。おかげで仕事中はコンタクト付けられねえ。眼鏡は霊

界産あるけど、邪魔だし。

……………お前コンタクトだったのか、て？ 言ってなかったっけ。

忍も眼鏡持ってるぜ。授業中とか、パソコン使うときとか位しか

使わねえけど。あ、後トランプゲームのスピードする時もかけてるな。

岳も眼鏡欲しいとか言ってたし。皆目え悪いんだな、遺伝？　じやあ光もヤバいのか。

……て、そうじゃなくて。仕事。

取り敢えずそこら辺の奴に勇者一行知らねえか聞いてみるか。：

…実体化、実体化。

黒づくめの制服のせいで周りから浮くな。その辺の家からローブ盗むか。大丈夫、ちゃんと返すから。

「すみません。ちょっといいですか？」

ん？　こつちから声かける手間が省けたな。相手は……普通の基準はよく分からんけど、普通の街娘としか言いようが無い。

「貴方、もしかして勇者様？」

「違います。どつちかかって言うつと魔物に近いです」

勇者の仲間殺そうとしてる訳だし。

「キヤアアアツ！？　魔物よー！　魔物が出たわー！」

……きつとあの娘の名前は街娘Aだ。それにしても、わざわざ確認してくれるとは。

「キヤーツ！　勇者様あ！　勇者様！？」

「勇者あ！　今まで散々金巻き上げて言ったんだから、ちゃんと働けコラア！」

勇者来てくれんのか？　楽でいいな。ちゃんと仲間連れて来いよつて伝えてくれ、その街の人B。

突っ込むべきところが他にあった気がするけど、まいっか。

「おーうおうおう、勇者の居る街をお天道様が照らす中、堂々と姿を現すたあ、いい度胸じゃねえか」

……曇ってるけど。

「気に入ったあ！　相手してやろうじゃあねーか！」

声の威勢はいいけど、剣持つ手が震えてるぜ勇者様。

王に異世界から召喚されたとか書いてあったな、そう言えば。

大抵こういので召喚されるのはリア界……日本のある世界なんだよな。魔法の耐性ほぼゼロだから。科学は一番進んでるんだけどな。

日本語ペラペラだし、あの人日本人だろうな、多分。髪茶色いけど。

「あれ？」

ん？ ……あれ？

「龍城さん？ 何やってんですかこんなトコで」

あ、召喚されて勇者やってんのか。

「その言葉そのまま純に返してやらあ。何やってんでい、そんな服着て」

『そんな服』は人の事言えんだろうが。典型的な、ゲームにありそうな勇者の服着てるし。

「いつちよ前に刀まで差しやがって」

文月くんから教わった滅茶苦茶剣法、木刀で習ったから。真剣の切り合いの場合の事まで教えてくれたし。折角霊界産の刀見つけて手に入れられたんだから使わにやもつたないだろ？

「それはともかく」

「ともかくしてんじゃねーよ」

「させてください。魔法使いのジジってのが居る筈でしょ？ 何処ですか？」

「……………あれ。どこ行きやがったんでえ、あの爺。アイヤ、知ってるか？」

『超絶美人の女剣士』とか書かれてた奴？ あ、本当に見た事無いくらい美人だ。モデル並にスタイルもいい。

……………めちゃくちゃでけえけど。

絶対コイツ身長三メートル越してるぜ。どうやって建物入るんだろつ。

「いいえ、存じません」

声もいいんだけどなあ。やっぱでけえ。

「そうか、マツチヨ」

え、マジであるの『力自慢』の名前マツチヨなのか？

「ウホッ」

……………ゴリラにしか見えねえけど。というかこの世界、ゴリラ居るのか。

たしかにゴリラの力は凄いだろうけど、コレはねえだろ。

「分からないらしいヨ」

この子供誰？ ゴリラの飼い主か何か？

「あー、きつと置いてきちまつたんだ。足おつそいから」

年寄いたわれテメエ等。…………俺が他人の事言えるのか？ 言えね

えよ。棚上げだ。

『ぎゃああああっ！』

…………悲鳴聞こえたけど。

流れ弾っぽい球状の雷が飛んできたけど。あ、今度は火の玉。

「タツキ様。ジジが居ました。コイツと似たような服を着た男と魔法を撃ちあっています。ジジが優勢みたいです。でもほぼ互角、やられたとしても別段不思議ではありません」

ん。アランさんか？ 手伝いに行かねえと。

「フンッ、なかなかやるな若いの！」

なあジジ、アンタも目え悪いのか？

アランさんって、少なくとも四十は超えた顔してるけど。五十歳一歩手前くらい。

どう頑張っても若いとは言えねえだろ。

「君こそ…………妖術の、そのように素早い発動、並の者には出来ん
それ妖術じゃなくて魔法。どっちでもいいか。

「アランさん、援護しま……………」

「いらん！ 子供は黙つてろ！」

「分かりました」

黙ってジジに殴りかかるor蹴りかかるor斬りかかるのどれか
しますよ。

そもそも援護は魔法の役割、俺は魔法使えねえから援護も無理なんだよ。

……ついでに言うと、ノーコンだから飛び道具も使えない。自分で言うの嫌だけど。

岳はすげえよ。ダーツさせたらたいい狙ったところに行くんだから。

忍も、ゴミ投げたらほぼ百分百ゴミ箱に入るし。光はまずダーツもゴミ投げもやんねえな。

で、そんなこと考えながらジジの後ろに回ったけど。

……何て無防備なんだろ。背中から空きですよジジ爺さん。

でも得体の知れんモノ……他人をそんな風に言っちゃダメだとか母さんに言われそうだな。でもとにかく、そんなのに触れるなって臯月姉から教わってるから、斬りかかる、だな。

……ジジがこっちを向いた？ 気付かれたかな。

「ハクシユン！」

……ああそう、くしゃみをするためにアランさんから顔をそむけたのか。

そうだな、確かに人に向かってくしゃみするのはよくねえよ。でも戦闘中に敵から目を逸らすか普通。って、よく言われてた。俺が。それはともかく、斬ってみよう。一発でご臨終してくれると助かるんだけどな。

「ぐあっ」

……何の仕掛けも無かったよ。

今まで四人くらい返り討ちにしてたジジがあっさり十五のガキにやられやがった。

「アランさん、終わりました」

「……邪魔を、するなあッ！」

「残念、もうした後なのでどうしようもありません」

「クソッ、何なんだこの少年。」

彼は今まで四人もの死神を返り討ちにした男だ。それを一人であ

っさり片づけしてしまうとは……。

しかしやはり、この人を馬鹿にしたような口調、たまに浮かべる人を蔑むような笑み……気に入らん。消してやる、そうだ、消してやる！

だが今は報告書の作成が先決だろう。彼は今まで申し込まれた決闘を全て受け、一人残らず相手を冥界に送っているほどの実力者。この俺が負けるわけがないだろうが、油断は禁物だ」

……もう最初にあつた時から思ってたんだ。

この人がぶつぶつぶつぶ言ってる、他人に説明でもしてるかのような言葉。本人は口から出てることに気づいてるのか？

気付いてなかったら教えるべきかもしれねえけど、ちよつと気が引ける……。

だって、気付いてなかったらアランさん凄く恥ずかしいだろ？

まあいいか。俺には関係ない。

「アランさん、口から全部出てるの気付いてます？」

「……え？」

「全部口から出てます、聞こえてます」

あ……顔真っ赤にして逃げ帰って行った。気付いてなかったんだな。悪いことした。

「酷いことするじゃねえかい。気が合いそうじゃ」

「龍城さん、それなら香ちゃんの方がきつと気が合いますよ」

「既に親友でい」

「やっぱりか。」

「……で、ここはいつたいたどこでえ。七日くらい魔王探してんだが、野郎どこにも居やがらねえ」

「王から金巻き上げただの、立ち寄った村や町やで金を強奪してるだの聞きましたが」

「どう家に帰りゃいいのかわかんねえから不安で不安でつい」

『つい』じゃねえだろ。

「元の世界に連れて行きますから。来てくださいよ」

「よしや、帰れる！　じゃあ、アイヤ、マツチヨ、今までありがとう」

……あの二人、何談笑してるんだ。完全に無視されてるぞ龍城さん。

333 ただいま作者が暴走中（後書き）

なんかごめんなさい。

332話と333話ごめんなさい。なんか。

『まあ呪理阿だし』^{コソッ}くらいで流していただけるとありがたいです。

334 提出日はいつデスカ？

「お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん大変だよ〜！」

「……………なに」

「書初めの宿題忘れてた〜！」

「あぁっ〜！」

忍です。

四行前は機嫌悪かったです。勉強に集中してたの邪魔されたから。でも今は焦って……………無いな別に。でも、あたしも書初め忘れてた。

「オレも！」

あ、岳。

「やる〜っ〜！」

おー、準備早いね、光。

もう習字道具と半紙がセッティングされてるよ。

えーっと、あたしの半紙……………確か学校で貰って、折りたたんでファイルに挟んで、机に突っ込んだ筈。あれ？

「やば、半紙学校に忘れてきた」

『どうやって!?!』

岳はともかく、光にまで突っ込まれたよ。

「起き勉強してるから。半紙まで一緒に置いてきちゃった」

「え〜、普通忘れる〜？」

ぐ……………普通ってなんだよ！普通の基準が分かんないよ！光も普通から外れまくってるくせに！だから普通の基準ってなんだ！失礼しました。

「どっしよっかな〜。桜に電話して提出日聞くか」

「提出日？ 聞いてどーすんだよ」

「始業式の日なら学校に取りに行く。最初の授業の日なら、始業式の日を持って帰って三連休でやる」

始業式は六日だからね。何で金曜だけ学校あるんだよ。どうせな

ら休みにしようよ。

「おう、あつたまい〜」

ふぶん。……あたしじゃなくてもやりそうだけど。

「おー、ずつるー。真面目にやってる人に謝れー」

やかましい。

電話電話。

『はい、山内です』

「あ、高山ですけど、桜さんいらっしやいますか？」

『ああ、忍ちゃん？ 今桜出かけてるけど〜。後でかけなおさせようか？』

「ん〜……いや、いいです。ありがとうございます」

篠とか清とか玲奈とかゆうちゃんとか、アテはまだある。

『もしもし、中谷でございます』

あ、しーちゃんだ。

「高山ですけど、篠さんいらっしやいますか？」

……しーちゃんだとは思いつけど、違ったら滅茶苦茶恥ずいので確認します。

『篠さんでございます』

あ、合ってた。

「書初めの提出日っていつか分かる？」

『書初め？ うーん……清、分かるか？』

あれ？ そこに清居るの？

『最初の授業日だそうだ。多分、きっと、恐らく。他の人にもう一度確認することをお勧めする』

「凄く不安だな！」

『だから、ほかの人にもう一度確認することをお勧めすると言ったそうでした。』

「できた〜！ これ提出用にしよう」と

「……光、言うのちよっと気が引けるけど言っわ。それ、名前ねえ上に書けそうな場所もねーぞ」

「……………なんでもっと早く言ってくれなかったの〜!?!」

「今気付いたから」

「ああー。光ちよっぴり涙目だよ。せつかく上手く行ったのになー。

さて、次玲奈に電話。

『もしもし』

「あ、高山ですけど。鈴木さんのお宅ですか?」

『……………忍?』

玲奈だった。やったー。手間が省けたー。

「うん、忍。残念だったね純じゃなくて」

『切るわよ』

「ああーっ! ちょっと待って! 待って! 謝るから!」

『何よ?』

「ごめんなさい」

『はいはい、許すわよ。じゃあね』

ツーツ ツーツ ツーツ

何で切られたの!? 謝るから待ってって言ったのに!

……………もしかして、謝ったら終わりだと思ったのかな。

えーい、もつかい!

『もしもし。忍?』

「なんで切ったの!?!」

『……………つい』

ついつてなんだよ、ついつて。

『何の用だったのよ』

「書初めあるでしょ、国語の宿題。あれの提出っていつだったっけ」

『さあ……………べ、別に分からないわけじゃないわよっ!』

「じゃあ教えてよ」

『……………』

ツーツ ツーツ ツーツ

「おい! 分かんないんじゃないかあ!

「お兄ちゃんの難しいね〜」

「だろー？　なんで『伝統を守る』なんだよ」

「ねー。なんで五文字なんだろうねー」

「なあーっ」

仲良しだねー。一緒に頷き合ってる。

よし、次は最後の頼みの綱……ではないけど、電話の電話帳機能に入ってる最後の同い年、ゆうちゃん！

……あ、出たかな？

「もしもし？」

『かーめよ、かーめさーんよー』

絶対ゆうちゃんだコレ。

「高山ですけどー」

『ただいま留守にしております』

「嘘吐け！」

いったん喋った後で留守電になるわけがないでしょうが！

『ピーツとなりましたら』

「しつこいよ、ゆうちゃん」

『ふふっ、似てたでしょ？　よくある電話の音声に』

いや、似てたけど。似てたけども確かに。

「似てたのは認めますよ。うん」

『でしょう？　じゃあね』

「切るな！」

あ、ごめん岳、光。びっくりしたみたい。

『あら、用あったの？』

「無かったら電話しないよ」

『酷い！　ただ君の声が聴きたかったんだって言ってほしかった！』

「誰？」

『知らないわよ。今日の前で電話している女の人が言った言葉だもの』

そんな人居るんですか。そしてどこにいるんですかアンタ。確かにコレ携帯番号だったけどさ。

『で、結局何の用？ さつさとしてくれない？』

「話の腰折つといてよく言っよ」

『話の腰つてどこにあるの？』

え。

『話に腰があるのなら、話も腰が痛くなったり、マッサージされると気持ち良かったりするのかしら』

いやあの。ええっと……。そんな訳ないでしょ、と。

「また脱線してるよー」

『貴方から脱線したわよね、今回は』

「はいはい。そうでした。で、用なんだけど」

『早く話してよ。さっきから待つてるんだから』

絶対楽しんでたでしょ。

「書初めなんだけど、あれの提出日っていつだったけ？」

『書初め？ ああ、……。え？ ああ。冬休みだから出てるのかしら出てるのかしらじゃないよ。ゆうちゃんに聞いたあたしが馬鹿だった。』

『書初め、って言うけど、最初も何もあれ以外に習字なんかしないわよね』

「ああー、そうだね。そう言えば」

春にやるのが夏にやるのが秋にやるのがクリスマスにやるのが書初めだね。

「忍々？ 電話使ってる？ 私使いたいんだけど」

あ、おかーさん。……。携帯持つてるじゃんおかーさん。

「ごめんゆうちゃん、おかーさんが電話使っつて」

『はいはい、分かったわ。じゃあね。良いお年を』

「もう年開けて四日目だよー！」

『はいはい、分かったわよ。じゃあ、あけましておめでとう』

「おめでと。今年もよろしく」

『こちらこそ。じゃあね』

プッ

「はい、おかーさん」

「ありがとう」

……結局いつ提出なんだよ！

もういい。純兄が帰ってきたら純兄に聞く！

「もしもし、純？ あっ！ ありがとう！」

……純兄どこに居るの？ 携帯持っていない筈なんだけど。……あと、おかーさんは何に喜んでるの？

「仕事終わった？ うん……じゃあちよつと聞いてくれる？」

「霊界と電話つながるの！？ 一般家庭にあるような電話で！？

「今日私の誕生日なのに純以外誰も祝ってくれないの！」

「ああっ！ しまった、忘れてた！」

「おかーさん誕生日おめでとう！」

「純兄は覚えてたんだ……。」

「か、母さん！ 誕生日おめでとう！」

「おめでと〜！」

「ありがとう。ん？ うん、満足。じゃあ……あ、忍が変わってほしいみたい」

「おお、視線だけで分かってくれた！ 目は口ほどにものを言つと
か言つもんね。」

「もしもし」

「ん。書初めなら最初の授業日。おけ？」

「うん！」

「さっすがー。分かってる。」

「あ、俺の鞆の中に半紙入ってるから。使いな」

「……なんであたしが半紙忘れた事まで知ってるんだろう。」

335 ダウト

「8」

『ダウト』

「あう」

やっぱり。4じゃん。

「9」

「ダウト」！

「残念」

本当に9だった。

「うう」

岳だーっ！

言わんでも分かるだろうけど、ダウトやってる。

兄ちゃんとおれと光とで。姉ちゃん勉強してる。今話しかけたらやべーぞ。すっげー怒るぞ。兄ちゃん波に怖えーんだぜ。姉ちゃんキレたら。マジ切れは兄ちゃんを超すかも……。

それはともかく、今、光の手札が持ちきれねーような事になったとこだ。溜まってたんじゃなくて、さっきから嘔吐きまくって『ダウト』言われまくってたから。

「10」！

本当だぜ？ マジだぜ？

兄ちゃんか光、ダウトつて言え！ 1枚だけど、増やせるんならそれでいい。特に兄ちゃん！

『……………』

なんで何も言わねーの！？

「11」

3枚かー。

……でも、これが嘘つてこたねーだろ。どっぶり持ってんだから。11の3枚くらい持ってもおかしかねーよ。おれ持ってねーし。

「ダウト」

「純お兄ちゃん酷いっ！　なんで分かるのっ！？　なんで手加減しないのっ！？」

「ん、油断大敵ってな」

兄ちゃんが油断してるとこ見た事ねーよ。それにどっちかってーと容赦ないっ！っーんだよこれは。

「ああ、減らないっ！」

光も光だよ。何でわざわざわざ嘘吐くんだよ？

3枚中2枚本物だったじゃねーかよ。

「12」

『ダウト！』

「ん」

よし、9だった！　兄ちゃんの手札は減らなかったぜ！

でも……溜まんねえな。

「13！」

マジだぞー、まだ手札はあるぜ。

「1」

「ダウト」

……兄ちゃん、光の番はいつも『ダウト』言っただけ？　表情だのなんだの難しいの見て言っただけじゃなくて、光だから言ってるんじゃないの？

「ふふ、今度は本当だもんねー！」

「ん。よかったな、学習能力があつて」

「どっぴり意味？」

そっぴり意味だろ。

七回くらい連続で『ダウト』言われ続けて、全部嘘だったんだから。

兄ちゃんの手札が増えた。

よし、これで今ん所オレ一番！　でも油断大敵！　兄ちゃん言うてし。

「2」

次は3だな……やべ、無えじゃん。

6で代用！

「3！」

『ダウト』

なんでハモる！？ すっげー綺麗にハモってたぜ今！

チクショー。でもよかった、2枚で。ホント溜まらねえなおい。

……しかも兄ちゃん、2つつて出したの9じゃねーか。あのポ
ーカーフェイスは見破れねーからなあ。言っのちよつと躊躇っちま
うよ。

「4」

「……ダウト」

あ、兄ちゃんちよつと躊躇ったよな。

「少しは溜めようよお〜！」

光い！ なんでわざわざ嘔吐くんだお前は！？ 明らかにAから
Kまで全部持つてるのに嘘ついて、何のメリットがあるんだ！？
今で兄ちゃんの手札増やせたかもしれねーのに！ 1枚だけど。

「5」

『ダウト！』

「ん……溜めようつつたぐせに」

よし、兄ちゃんの手札は減らなかつた……何でまた9なんだよ。

兄ちゃんの手札9多っ！ 三枚目じゃねーか！

次6だな。6ならあるぜ！ さっき2の代用に出した奴が！

……いや、ちつと待てよ。6があるってあの二人は知ってたんだ。
んじゃ、今回はぜってーオレが6を出すと思ってるだろ？

そんならそれを逆手にとつて、4！

「ん？ ダウト」

「エスパー！？」

「さっき、2の代わりに出した6にはペンのインクついてたから」
……トランプの裏が全部同じ柄なのはなんでだと思ってたであつ

!

336 皆さん、ボケてますね

其の一 一月四日、夜の台所にて

「由紀ちゃんからね」

由紀ちゃん、凜が大学生だったころの友達の一人

「え〜っど〜……」

『誕生日おめでとう！』

四十歳？ 二倍したら八十歳、びっくり」

意味も無く年を二倍にされた上、同じ年にもかかわらず一年を間違われている事にびっくりした凜であった。

上に間違ったか、下に間違ったか。そこはご想像にお任せを。

其の二 元旦、神社にて

「そう言えば村田って、なっくんと同じ塾行ってるんだよね」

「それが何だよ」

「塾って遠いの？ いつつも帰って来るの遅いつてはーちゃんが言ってた」

と言いながら、一度『変な味』と言って飲むの止めたくせにもう一度甘酒に挑戦しようとする忍。

飲んだ。やっぱり変な味で顔をしかめる。結局その甘酒はまた純行き。

「はーちゃん？ …… ああ、夏の妹。そっぴや夏居ねえな」

「冬くん……おとーさんの実家行ってんの。それより、塾って遠いの？」

「うーん……歩いて二十分くらいじゃね？」

「えっ、遠っ！ それって何分かかるの!？」

「………高山妹、俺の話ちゃんと聞いてたか？」

高山忍、2012年初ボケ。

其三 元旦、山口にて

「よ、香ちゃん」

「あ、良雅くん。あけました」

「新年の挨拶くらいちゃんとしよ。あけましておめでとう、じゃろ？」

『香いー、あけおめねっ！』

「勇気！ 菜月！」

ちゃんとしようと言ったそばから、弟妹はちゃんとしませんでしたとさ。

「あけおめねっ！」

「香ちゃんも乗らんでいい！」

この日も香ちゃんの笑顔は絶好調。

其の四 多分今日当たり、日本のどこかにて

「姉御、これあ一体何処に向かってるんですかい」

「え？ 行き先龍城が決めたんじゃ……」

「え。そうでしたっけ」

皇月を後ろに乗せ、龍城が運転するオートバイは夜の道を明らかにスピード違反の速さで走っていた。

「ま、いつか。ゼツタイここに行く！ なんての、決めた事無いけん何とかなるわ」

「アバウトっすねー」

「ここに行く！ 位でいいんよ。ゼツタイなんかゼツタイ無いんじや！」

「姉御、矛盾してます」

関係ないけど、香とも旅してみたいなと何となく龍城は思っていた。

ゼツタイ無いというゼツタイここに行く！ ってどこに行つてや
らあ。

あれ、訳わかんなくなってきた。

其の五 こないだ、辰巳ことたつちゃん家

「もしもし！ 海斗^{かいと}？」

海斗、たつちゃんの空手友達である。

「初稽古は土曜日じゃんな。何時からじゃっけ？」

『ちよい待つて、連絡の紙探すけん』

「頼むー」

ちなみにたつちゃんの『初稽古の連絡の紙』は、どっかにやつち
やったらしい。

『もしもし』

「もしもし！」

『……我慢してたけど言う。五月蠅い』

「……ごめん？」

『はい。いいよ。初稽古の時間じゃんな、十二時半から』

「午前？」

『………何が悲しくて冬の真夜中に稽古せにやらんのじゃ
しかも小学生が。』

其の六 日本時間で六日 とある世界のトアル街

「リオ、ここ何処？」

「純、今君地図持つてるでしょ、見てるでしょ？」

「ここが何処か分かんなきや使いようがねえだろ」

「トアルって街だよ。向こうの看板に書いてあるでしょ？」

『向こうの看板』まで軽く五十メートルは離れていた。

純にそれが見えるはずも無く、と言うか彼は見ようとせせず地

図を広げている。

「で、行き先はルアト……ここか」

「あ、あんまり離れてないね……って、これが地図だから？ どれ位の距離あるの？」

地図上の距離は目測二センチメートル、縮尺は二万分の一だから……純は質問から三秒経たないうちに答えた。

「四万センチ」

「わかんねーよ」

リオに乱暴な言葉遣いって似合わねーとか考えてた純でした。

337 七草粥食べて、笑いましょ。これで無病息災！

「光、春の七草言ってみよう」

「芹セリ薺ナスナ、御形ゴキョウ繁縷ハコベラ仏の座スススシロ、スススシロ 菘スススシロ蘿蔔スススシロこれぞ七草〜！」

さあ、これを今の名称で言ってみよう。

セリ、ナスナ、ハハコグサ、ハコベ、コオニタビラコ、カブ、ダイコン

言いにくい。

忍でーす。

今日の朝ごはんは七草粥、ぶつちやけ葉っぱの味よく分かりませ
ん。

ちよつとだけど、鰹節とか醤油とかかけてるしね。

「はい、今光の言った七種類の草がこの中に入っています」

「菘と蘿蔔は根っこも入っています〜」

あ、ダイコンの根っこ発掘。……………ダイコンだね？ きっと。

「母さん、おかわりってあるよな？」

「足りなかった〜？ 鍋に入ってるわよ〜」

岳、食べ終わるの早いな！。

「よし光、次は秋の七草言ってみよう」

おとーさん、何がしたいのかよく分からないよ。

「萩はなススキはな、桔梗ききょう撫子なでしこ女郎花おんななえし、葛藤袴くまづしはかまこれも七草〜」

食べた事無いけど。

って言うか、元々秋の七草は眺めて楽しむモンだったさ。

……………眺めもしないや。

「じゃあ光、昔の七草は？」

「お母さん〜、お粥おいしいね〜」

「おーい」

誤魔化したな。

…………あたしも知らないけど。昔の七草。そんなのあったの？

「米、粟、キビ、ヒエ、ゴマ、小豆、蕨米」

「そうそう、純お兄ちゃんが言った奴」

光、素直に知らなかったって言いなさい。

「へえ、そうなんだ」

「おとーさんも知らなかったの!？」

何で知ってるみたいな顔して光に問題出したの!

「へ? 知らないから聞いたんだ」

「……さいですか。」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って言うでしょ」

いや、昔の七草知らないからって恥かくことは無いと思うなあ。

そもそも昔の七草の存在自体知らなかったし、あたし。

「兄ちゃん、そんなの何処で知ったんだよ?」

「お菊さんに教えてもらった」

「……ああ。何か納得。」

「誰?」

「お化け。怪談でよく皿数えてる奴」

「ああ」

おとーさん、意外と簡単に納得するんだね……。

そりゃそうか、純兄が霊的なモノ見えることくらい知ってるし。

あたし等が見えるようになったのも知ってるのかな。

「ちなみに今食べてる七草、お菊さんにいただきました」

「そーなの!？」

「ん、採り過ぎたからおすそ分けだと」

お菊さん、七草粥の野草自分で採ってるんだ……。

そついやおとーさん、野草にはまっていたのに何でこれは採りに行

かないんだろ。

「いいなあ、純も凜も、お化けが見えて」

「父さーん、オレ等も見えるぜ! 大分前から」

去年の……三月くらいから。わあ、意外と前だ!

「ウソ!？」

「ホントだも〜ん〜！ 今もほら〜、お父さんの後ろにガリガリのお爺さん……が……お母さ〜ん〜！」

怖！？ ちよつ、顔が怖い！

「何だよあれ！？ 骸骨！？」

おお、その表現ピツタリだよ。骸骨に皮貼り付けたような顔、もう一回言つよ。怖い！

「へ？」

おとーさんいいなあ！ 見えてなくて！ 純兄助けろーっ！

「ちよつと……そんなに怖がらないで」

「ん、怖がるなつて言つなら、まずは何でも良いから食つて太れ。

ところで忍、太つたか？ なんか重い」

正月は皆多少は太るモンなの。

しばらくしたらまた元に戻るよ。毎年そうだもん。

……でも太つたか？ とか言われるのちよつと傷つく。ペーランサボらずちゃんとやろう。

「何？ おとーさんの後ろになにが居るんだ？」

「ああ、心配しなくて大丈夫。貧乏神だから」

『心配するわっ！』

するべきだっ！

「貧乏神が居たら、何とか少ない金で生活しようとするだろ？」

「貧乏神がどっか行つてもその癖が抜けなけりゃ、金が溜まる」

『……………』

いいのかそれ。それでいいのか。

少ない金で生活する癖がつくまで貧乏神居たら大変だよ。

「たまに餓死する奴が出てくるけど」

ダメじゃん！

「貧さん出てってくれ！」

「あの、ワシこつち！ しかも貧は名字じゃない！」

おとーさん……気持ち分らないけどさ……。

「父さん！ 貧は名字じゃねーって！ きつと『貧ぼ』が名字だ！」

それはもつと無いでしょうが！ 何で名字の最後の『ぼ』と名前の最初の『う』が一つの漢字『乏』に同居してるの！？

「ぴんぼん！」

なんで合ってるの！？

なんか骸骨みたいにやせこけたお爺さんが、腕と人差し指突き出して笑ってる図って怖いね！

「いやー、楽しいなここ」

「居座るのはお断りだからな」

「いやいや、君は知らないかもしれないが、断ってどうにかなるものじゃ無いからねえ」

え。

「ふうん？ 貧乏神の弱点ってなんだったっけ」

「え？ 幸せな笑いとか、強運とか、死神とか、神とか、無邪気なお化けとか、囲炉裏の火に、健康な働きの者」

弱点意外に多いね。そしてきつと、弱点ぺらぺら喋っちゃう事も弱点だよな。

「あはははは〜！」

「光、わざと笑うのは違うだろー」

ちよつぴり引いたけど、貧乏神。

「岳、意外と効いてるみたい」

「マジで！？ あっははははは、貧乏神意外と弱えー！」

ちよつと無理してるっぽいけどね。岳も。

あ、おとーさんも笑い始めた。おかーさんも。

「……………ぐすん」

涙ぐんで出て行っちゃったよ貧乏神。

笑う門には福来るって本当だねー。いや、福の神は来てないけど。……………ちよつと可哀想だったかな〜？

「大丈夫よ〜、貧乏神は意外にタフなんだから〜。千年は生きるわよ〜」

わおっ。

「貧乏神って生きてるもんなんだな……」

「神ってつくけど、お化けみたいなモンだしな。……あ。夏ん家入った」

「えっ！？ はーちゃんがー！」

「秋ちゃんがー！」

とか慌てながら言いつつ、あんた等全然動かん。光とおかーさん。

「あ、あっさり出てきたぜ」

「……ん、あっここにや笑い上戸が居たな」

なっくんか……。

なっくんだけじゃなくても、はーちゃんも冬くんもよく笑っしね。

「あー、冷めてもおいし」

七草粥。

「ん。同意」

「オレもつかいおかわりしてこよ」

「私もおかわりー！」

なんでだろう、もちが食べたくなくなった。

338 高山四兄妹、仲は良くても

「ねー純兄」

「ん？」

「昨日あたし達、貧乏神払ったよね」
「いっばい笑って、七草粥も食べて。」

「ん。なのになんて風邪ひいてんだお前」

「あたしは今それを聞こうとしてたんだよっ！
忍です。」

「頭は痛いし、フワフワするし、喉が痛くないのはまだ良かったけどなんかダルい。」

「もー、貧乏神払ったら普通風邪ひかないでしょ」

「誰だってひく時にはひくだろ」
「そう？」

「じゃ、あれだよな。『風邪ひくなよ』って別れの挨拶、無理だよな。誰だってひく時はひくんだもんね」

「ん。言ってやるな」

「誰に？」

「別れの挨拶に『風邪ひくなよ』って言う奴に」

「あーい。」

「ねーお兄ちゃん。びんぼーがみって神様なの？」

「光も一緒にダウンしてまーす。頭合わせて並べたベットの反対側にいまーす。」

「曲がりなりにも神科、だったかな」

「かみかって何々？ 神様になる事々？」
「神化？」

「字が違う。キツネザル科とか、マングース科、とかの科」
「そんなのあるんだー……。」

「神科って倒せる？」

「生物だからな」

「うふふ」

光、怖いから。凄く怖いからその笑い。

絶対『貧乏神倒してやる』的なことを考えてるよこの子。

「昨日の貧乏神さんは何処に居るかな」

「呼んだ？」

来たよ。

自分を倒そうとしてる奴が居る所にわざっわざ姿現したよ、この貧乏神。

言っていい？ アホだろお前。

「おやおやおや、すっかり弱っちゃって」

いや、貴方を倒そうという殺気はすっかり高まっちゃいましたよ。

「これならとりつきやすい」

とりついた途端フルボツにされますよきつと。

「お兄ちゃん、神様殴っても罰当たらないよね」

「ん、これは神様とは違うから」

そういえば昨日、弱点の中に神拳げてたね。

「えい」

「ぐぼっ」

光の口調がほのぼのしてるからって、油断してはいけません。

貧乏神みたいになるよ。動きは速いから。意外と。特にむかつく奴殴ったり蹴ったりする時の手足の動きは特に。

「姉ちゃん、光。母さんがポ○リ買ってきたらしいけど飲むかい？」

階段上るの億劫で、階段の上に居る人に階段の下から話しかけることってあるよね。

「ちよーだーい」

「岳お兄ちゃん！ 貧乏神がまた来たよ！」

光、そういう必要あったの？

「貧乏神い！？ またか！」

あ、岳が階段登ってきた……音がする。

「あつ！ 居た！」

居るって言ったじゃん。

「この野郎！ 光のはテメーが原因かあつ！」

「ぐぎやっ」

あ、貧乏神の鳩尾に岳の蹴りが。さらに顔面に拳がめり込んだ。

「ねー岳、あたしは？」

「姉ちゃんのは多分勉強のしすぎ」

「そんなにやってないよ」

「オレからしたらやってんの！」

いや、岳勉強しないじゃん。宿題もよく学校でやるし。

「……ん？ あ。オレと、白金高校に行きたくなる前の姉ちゃんからしたらやってんの！」

何で言い直した！？

「おーい、貧乏神、大丈夫か」

「……イタイ」

「だろうな。貧乏神の分際で俺等の妹に手え出すからだ馬鹿」

ねえ、『等』って入ってるってことはあたしカウントされてないよね？ もしかして純兄も岳と同意権？

「たかが人間のパンチとキックなのにイタイ」

たかがって言ったな？

「たかが人間だと思って舐めてんじゃねーぞ。そっちはたかが貧乏神だろー」

岳、調子に乗ると手に負えません。今もなんか、貧乏神の鳩尾にかかとねじ込んでるし。笑ってるし。

端から見たらもう完全にいじめっ子だよ。

「高山兄妹舐めんじゃねえぞ。小物が」

純兄じゃないよ今の。あたしだよ。

ちよつとノって見たかったのー。やってみたかったのー。

「永遠にさよ〜なら〜、貧乏神ちゃん〜」

ちゃん呼ばわりだよ。貧乏神をちゃん呼ばわり。

……あたしら完全に悪者だよねー。悪役だよねー。やってる事が。

「逃げるなら今の内、さっさと逃げなきゃ……」

「ひいつ!?!」

凄いですピードで逃げて行った。

まあねー、今の純兄怖かったもんねー。肉食獣みたいな目で睨み付けられてたもんねー。

「どうする気もねえけどな」

逃げた方見て肩すくめたり。

「さー、厄除け厄除け、あははははっ」

逃げた時の貧乏神の顔思い出して笑ったり。

「あゝ、だいぶ楽になったよ」

貧乏神の事綺麗に忘れた振りして伸びしたり。

「家に入ったのが運の尽きってね」

酷い目にあつたことを相手のせいにしたり。

いやー、あたし達って酷い兄妹だね!

339 あれもこれも大好きなトリオです

「しーねえ、来たよ」

「岳にいーっ！ あれ？ 岳には？」

「ひいねえーっ！」

わーお、ひっさしぶりだなあ。死神トリオ天斬剣。
忍でーす。

まだちよつと熱はあるけど、他は大丈夫なんで一階に下りてます。
ストーブの上のさつま芋が焼きあがるのを待っています。

「……しーねえ、これ、やきいも？」

「そだよー。霊界にもあるの？」

「うん。美味しい」

だよねー。美味しいよねー。

「忍ねえ、光ねえ、岳には？」

「友達と遊んでくるって言ってたよ」

「天、斬、オレ岳にいんトコ行ってくるー！」

『バイバイ』

いや、バイバイはおかしくない？ 行ってらっしやいとが、そんな事いわない？ 少なくともバイバイは無いでしょ。

「天ちゃん、斬くん、こういうときはね、焼き芋食べといてあげるねって言うんだよ」

『焼き芋食べといてあげるね』

素直だなあ。

……素直だなあ。いや、二階言う必要は無いけど……素直だなあ。
「や、焼き芋っ！？ ……うぐあああつ、焼き芋か岳にか！ う

うづうづう」

「……剣が食べ物と人で迷ってる」

「珍し。私なら絶対バナナだ。んも」

天ちゃん、そのバナナどっから出てきたの？

「え、私とバナナだったら？」

「……ひ、ひいねえとバナナ……うぐあああっ！ うううううっ」
剣と全く同じ悩み方してるじゃないか。

うん、皇月姉が言ってたもんね。ゼツタイはゼツタイ無いって。

……あれ？ 矛盾してない？

「斬」

「クスリとしーねえだったら？」

「うん」

結構喋るようになったよねえ。斬。

「……………クスリ……………しー……………うー」

結局悩むのね。

「じゃ、クスリと純兄は？」

「クスリ」

早いな。

他に比べてすっごく早かったね。

「焼き芋と純に이었다ったら焼き芋取るんだけどなあああっ！」

「バナナとじゅうに이었다ったらバナナ取るのになあああっ！」

この二人もすっごく早いね。

「嫌われてるな、純お兄ちゃん」

うん、あたしも思ったよ。

「焼き芋時間掛かる？」

「もちよつとだよ。持ってくつもり？」

「うんっ！」

おお、首が取れたかと思った。それくらい思いつきり首縦に振ったんだよ、剣は。

「食いモンと岳にいかあ、今までで一番難しい問題だなー」

「うん、ペーパーテストだったら『分からない』って書いておけば
いいだけの話なのに……………」

ちよつと天さん、あんたそんなことしてたんですか。

「……………こうなったらしーねえをクスリに……………」

「しないでね！」

「すごく、すごく、すごくすごくすごくすごく怖い事言われたよ！」

「その頭の中で一体何を考えたんだ斬は！」

「……やっぱり岳にいだ！」

「じゃあ剣の焼き芋は……」

「無しにしないで！」

「大丈夫、大丈夫、冗談」

「心臓に悪いよ……」

「食べ物だけでなく大事なの。」

「うううううう、どつちかというとの極限でひいねえ！」

「バナナちよっぴりちようだ〜い〜」

「一本あげる。いっぱいあるから」

「何処にもそんなに沢山持つてるようには見えないんだけどなあ。」

「限りなくどつちでもない。考えるの止めた」

「斬だけあたしって言うてくれなかったよ。」

「焼き芋焼けたかな〜？」

「んー、焼けた焼けた。食べようか」

「わーい！」

「剣は分かってたけど……天や斬も焼き芋も好きなのね。」

「あたしも光も好きだけど！ いただきます。」

340 喧嘩するほど仲が良くなって嘘だよきつと

「純」

「……………」

「こら、無言のまま退出するな」

「お疲れ様でした」

「怒るぞ？」

「失礼します」

「こら、私がこれから話そうとしているというのに退出しようとするな」

「分かりました」

「よし」

「話さないでください。それでは」

「本っ当に怒るぞ？」

「大丈夫です。その言葉は『怒っている』の中に入りますから」

「ほう。それで何が『大丈夫』なのか三文字以内で完結に述べる」

「すみません、俺には出来ません。なので回答例を教えてくださいませんか？」

「……………とにかくだ。座れ」

「自分でも出来ない問題を出すものではありませんよ。部隊長」

「座れといっている」

「嫌です」

「……………純、剣を抜け。決闘だ」

「俺がここに居る理由を知ってますよね？ 漏れなく冥界行きですよ」

「ふん、私がわずか十五の子供に負けると言いたいのか」

「皆さんそう言って逝きました。もっとも、あの時俺は十四でしたけど。あんまり変わりませんが」

「上等だ。貴様を冥界送りしてくれる」

「残念ながら、俺は上から決闘を禁じられてますんで……
ずす

あーおいし。これなんてお茶だったかな？ 辛子茶？
リオンです。

何か妙羅部隊長と純が言い争ってますが、気にしないでください。
いつもの事なので。

ほら、ここに居る死神たちも気にしていません。たまに誰かが微笑ましいもの見るかのような視線を送るだけです。そしてよく皆が『部隊長大人げねえなあー』って冷たい視線を送るだけです。あは、尊敬も何も無いね、うちのトップ。

部隊長って、純の倍以上の年なんだけどなあ……。どうしてあかも弄ばれるのか。

「ああもう、さっさと純ちゃん開放してくれないかなあ、部隊長」

「ん？ なんですですか、エイラさん」

「純ちゃんの好きな子、確かに居るって言うってたじゃん！ その追求が全く出来てないんだもん！」

ああー……。あの、純が玲奈ちゃんとやらに告白されてた時、言うてたあれ。

完全に忘れてたよ……。本当に、冥界に逝ってしまったわかったのが不思議なくらいな常態にされてたからね。

記憶の一つや二つ飛ぶよ。いや、飛んじゃいけないものだろうけど。

「純の実家周辺には居ませんでしたからねえ。精々兄妹愛的な感じで忍ちゃん光ちゃん」

「妹は完全に対象外だよ。妹は妹って笑い飛ばすよ、純ちゃんだつて」

「いや、あいつが何か笑い飛ばしてるとこ見たことねえっすけど」
そんな事したら周囲が凍るから。

「いやー、でも、可愛えよなあ忍ちゃん。光ちゃんも大きくなったらああなるんじゃないかなあ」

「見た目で判断したら痛い目にあつよ」

俺経験者よ。金搾り取られました。当時十三だった純から冷笑をいただきました。今思い出しても目の前のもの投げ飛ばしたくなります。でも、今日の前にあるこの座卓は重すぎて投げ飛ばせない。湯飲みは投げたくない。気に入ってるから。

「いや、忍ちゃんは純よりずっとイイコじゃき大丈……純より、純より……？ ……ダメだ、自分の感覚に自信が持てなくなってきたもった」

忍ちゃんを見るときは殆ど純が居るからね。純を基準にしちゃってもしかないけど……。

「忍くん、エイラちゃん、元の話題に戻したいなあ？」

「すいませんでした！」

元の話題、なんだっけ？

「リオンちゃん、お茶のおかわりいかが？」

「あ、有難うございます。いただきます。マリーさん」

「はい、どうぞ」

「ずず。あーおいし。」

「マリーさん」

「はい？」

「どうして妙羅部隊長と純は言い合いするんですかねえ」

言い争いするのは、基本的に純が部隊長の命令を拒んだ時なんだけどね。

「仲がいいのでしょうか」

「……うーん。」

「パズル？ わざわざ負けた無いですように」

「私がパズルで負けると思ってるのか貴様」

「そうとしか思えません。え？ まさか俺に勝てるだけでも」

「私が負けるわけ無いだろう？」

「じゃあやりますか？ でもそのパズルは何処にあるんです」

とても仲がいいようには見えないなあ。

凄く険悪な雰囲気……。。

「マリーさん、『仲がいい』の基準が良く分かりません」

「あら、じゃあきつと、仲が悪いんでしょう」

簡単に自論を曲げないでください。

「的当てですか。わざわざ俺が苦手なの選ばなくても、勝たして欲しいと言えは勝たせてあげますよ」

「貴様、一体その性格の悪さは何処から貰ってきたのだ。親の顔が見たい」

「見に行きや良いじゃないですか。俺の両親生きてますから、夜うちに来れば見れますよ。顔くらい」

……うん、仲が悪いんだな、きつと、……やっぱり。

341 昼休みがもつと長かったら良いのにな

「あむあむ、んー、やっぱりさ、英語の授業ってつまんないよね」
「基本的に授業はつまるとまらないの問題ではないが、それにしてもつまらなさすぎるよな」

「オマケに解説分かりにくいしね。チョークの色も使い分けられてるようで分らない」

「だよーと、あたし、桜、しーちゃんの女子三人組はうなずき合います。」

「忍です。」

「昼休み、教卓の前にある……ってか、三学期最初の席替えでそうになった、あたしの席に集まって弁当をもぐもぐと食べています。」

「……あの、そういうこと、授業する本人の前で言う？」

「教卓の隣には空の席が用意されていて、先生はそこでお昼ご飯を食べるのです。つまりあたし等の言ってる事丸聞こえ。」

「いや、でもま、あれだよ？ きつと英語の発音良くなってるよ」

「忍、フォローのつもりなのかそれは」

「しーちゃん、あたしにフォローするつもりあると思う？ 無いよ。」

「先生くじけちゃダメだよ、人間他人の評価をどう受取るかが大事ってどこかに書いてあったって誰かが言ってたような気がするけど勘違いかもしれない」

「……桜、アバウトにも程があります。」

「いつの間にかお弁当箱の中身が空になっています。元から少なかつたけどさ、うん。」

「そこで、こんなの考えてみない？」

「何？」

「このクラスの人たちで学校を作ったら、誰がどんな立場に居るか」

「何が『そこで』だったのか教えて欲しいな」

まったく繋がりが無いと思うんだな！。

「先生の授業が面白くないから、誰だったら面白い英語の授業をしてくれるかな〜って考えるついでに他の部分も考えちゃおう！」
「誰だったら面白い英語の授業をしてくれるかな〜」ってところが「そこで」

桜、桜、先生が泣いてる。柿の種が泣いてる。違う。泣きそうなの必死にこらえてる。でも涙目。見えて凄く可哀想。助け舟だす気はさらさら無いけど。

「曲がりなりにも『誰だったら面白い英語の授業をしてくれるかな〜』なんだから、まずは英語教師だな」

「しーちゃん乗り気だ。教室をぐるっと見回して……。」

「シジミとかどうだ」

「紫波だよっ！」

律儀な子だよな。わざわざ教室の後ろから突っ込んでくれたよシジミくん。よく聞き取れたな。こんなにざわざわしてるのに。

「紫波くんの授業はちよつと馬鹿っぽい気がするな〜」

「言っている事がちゃんとしていればそれで良いんじゃない？ 楽しいかもよ」

少なくとも今よりは、とは言わないであげよう。

「じゃ、他の部分考えてみよう。……配役から考えるよりも人から考えた方が早いな。忍は何になるか」

あたしですか。と言うかしーちゃんノリッノリだね。

……焼き海苔が食べたくなってきた。あ、やっぱり味付け海苔。

「忍は〜……国語の先生！」
「なんで!?!」

あたし、国語はそんなに得意じゃないよ？ 常に4は取ってるけど。上がる事も下がる事も無く。国語の成績で5とつてみたいよーう。

「自由気ままに適当なモノ読んで読ませて書かせてそう」

「それさ、教師って言わないよ絶対」

「さあ次行こ〜」

聞けよ。

「桜は放送部の部長……いや、副部長くらいかな」

「篠〜、何でワンランク下げたの？」

似たようなモンじゃない？

放送部無いけどね、この学校。

「桜が実況すれば運動会盛り上がるだろうな〜」

過去形になるかな？ 盛り上がっただろうな〜。

「篠はきつと社会の先生だな〜」

「社会？」

「何となくそんなイメージなの〜。地球儀持ってそう」

「うん、家に五つくらいある」

……マジで？ 多すぎない？ 何のためにあるの？

「清はまさかの数学教師」

『まさかだあ』

わざわざ苦手教科を取らなくても。

「なつくくんは体育の先生とか？」

「何で〜？」

「何か体育の先生って豪快なイメージある。なつくくんはやたらと笑

う」

「関係ないだろ」

ぱつと浮かんだんだもん。あとついでに、なつくくんジャージ似合

うんだもん。

「あ！ 水谷くんが、美術の先生ってしっくり来ない？」

『あ〜』

無言のまま黙々と何か描いてそうかも。

これだつたら美術部員かな？

「玲奈はきつと……えと」

「ツンデレが活かせる教科なんて無いよ〜」

いや、そうだけど……。

「あ、理科は？」

「一番常識人だし。危険物の取扱いもちゃんと注意してあげられるだろうし。何気に親切。」

「中森は保健室にでも居そう」

「ああー、生徒と一番触れ合うのって、きっと保健室の先生だよ」

「でも中森さんだったら何でもやりそうだよ。何でも楽しむ人だもん」

「一番得な性格だよな。」

「ん？ 席替えしたのか」

「純兄だ！」

「今日は来たんだな、遅刻野郎」

「よお篠、今学期最初にかける言葉がそれか？」

「事実だと思いますが。昼休みだもん。」

「俺の席は……」

「教卓の右上には座席表が描かれています。純兄はそれを見ているのです。」

「それにしても、純兄ってば隣で泣きそうな顔隠すかのようにして黙々と弁当食べる振りする（さつきから全然なくなってる）先生が居るって言うのに、まるで興味示さないよ。」

「純くんの席あそこだよ。後ろの窓際……今なっくんや清くんや岬くんやその他諸々いっぱい居る所」

「お弁当食べるのに集まった人達。なんであそこに溜まるんだ。いや、あの人たちが溜まった所にたまたま純兄の席があるだけなんだけどな。」

「あれ？ 何気に机あさられてるよー。空っぽいけど。」

「テメエ等あ、誰から殴られるかジャンケンしろ」

『げ』

「高山兄！？ いつから……」

「ん？ いつから？ 今から殴る。他に質問は？ ねえな？ よし、さっさとジャンケンして殴られる順番決めな」

淡々とした口調。基本的に感情は汲み取れないけどね。怒っては無いなきつと。

「忍、純思いついた」

「あー、あたしも」

「わたしも」

「じゃあせーので言おう。あたし言うよ？　せーの」

「不良」

だよー。

「あ、あ、柿ピーが可哀想だからわたし考えたよ」

柿ピーって言った時点で救う気ゼロでしょ、桜。

「柿の種先生は、不良純くんに鉄拳制裁を加えようとする教育指導の先生！」

でもいっつも返り討ちにされて終わるといふ悲しい日々……」

余計可哀想にしてどうするよ。

342 問われても……

「しののーん」

「シナモンじゃありません、忍です」

「しののーん」

「シノンじゃありません。忍です」

「しののーん」

「死のう？ 勝手にしてください」

「イヤだよ！ ……しののんがおかしくなったあつ！」

「おーい、叫ぶな超音波」

ちよつと耳ふさいだけじゃどうにもなんねえな、こいつの声は純だ。

誰かしつかり音を防げる耳栓教えてくんねえかな。いや、無駄な抵抗をするよりも、音源から離れた方が早えか。

「どうしたんだ、しののんは。じゅんじゅん、何か知ってるだろう？」

「おい古賀。じゅんじゅんって呼ぶの止める。ああいう無邪気……なのならともかく、テメエみてえな一見冷静そうな奴に言われると気分悪い」

「……しののんは？」

「……そう呼びたいのか？」

「本人に聞け」

兄に聞くな。めんどくせえから。正直に言つと、分かんねえから。日によって返答違うから困る。

「……いや、あんまり困らないか。」

「じゅんじゅん、しののんがおーかーしいー」

「元からだ」

「そっじゃなくてえ！」

何で音源が近づいてきてるんだ。離れようと思ってたのに。思っ

ただけで行動はしてねえけど。めんどくせえから。

「しののんどうして上の空なの!？」

「寝不足なんだろ」

「どうしてしののん寝不足なの!？」

「テメエの声が五月蠅くて眠れなかったんだろ」

「どうしよう!」

俺の答えで『どうしよう!』なんて答えを返してきたテメエの頭のほうが『どうしよう!』だよ。

「テメエが黙れば全て解決だ」

周りの奴の耳が。

「なるほど!」

よし、静かになった。

「なるほどじゃないだろうっ! 単にお前を黙らせたかっただけなのが分からんか! まったく、黙って聞いていれば……」

なあ古賀。テメエはこつちのチームじゃなかったっけ。『部長の声は五月蠅いから黙れせたい』チーム。

「あっ! そ、そうだったの!？」

「なあ古賀。テメエちよつと部長の頭叩きすぎじゃねえか？」

突っ込む度にハリセンでパンパンパン。

「……薄々そんな気はしていたんだ」

んじゃ叩くの止めろや。

「そんな気はしていたのに、もう体が勝手に反応して……」

ん、わかった。もう深くは聞かない。興味が失せた。

「ねえじゅんじゅん、結局しののんどうしたの？」

「寝不足なんだろ」

「どうしてしののん寝不足なの!？」

「テメエの声が五月蠅くて眠れなかったんだろ」

「どうしよう!」

さっきと全く同じ答えを繰り返すテメエが『どうしよう!』だった。

「部長！ 今日も言うぞ、もう何十何百言ったか分からんが言うぞ！ 馬鹿かお前は！」

……なんだろうな。ちょっとスッキリした。

「で？ 純、結局しののんはどうしたんだ？」

「寝不足なんだろ」

「何でだ？」

「テメエ等オカルト部が五月蠅くて眠れなかったんだろ」

「まさか！」

部長が二度かかって、それに突っ込んだ癖して自分もその畏にかかるテメエに『まさか！』だわ。

「……………純、怒るぞ」

「そう言う奴は大抵既に怒ってたんだよ」

あと、お前誤魔化そうとしただろ。

「ちゃんと答えろ、しののんはどうしたんだ？」

「寝不足なんだろ」

「何でだ」

「寝付けなかったんだろ」

「そらそうだ。何で寝付けなかったんだ」

「俺が知るかよ」

「そらそうだ。あれ？ 同じ家に住んでるんじゃないのか」

一回『そらそうだ』つつつたよな。

「同じ家に住んでも寝る部屋は別に決まってるんだろ」

……あ、皐月姉が『決まってる』は絶対に無いって決まってる』

って言ってたな。

は。……………皐月姉。いちいち矛盾しなきゃ気がすまねえのかアンタ

「純兄ー」

「ん？」

「寝不足ー」

「ん、寝ろ」

「何処で？」

「机に突っ伏して」

「誰の？」

「お前の」

「どうして？」

「寝不足なんだろ？」

「うん、どうしてあたし寝不足なの
」
「知るかっつに。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5939q/>

ただいま暴走中！

2012年1月12日23時56分発行